

図22 10号住居址 (1)

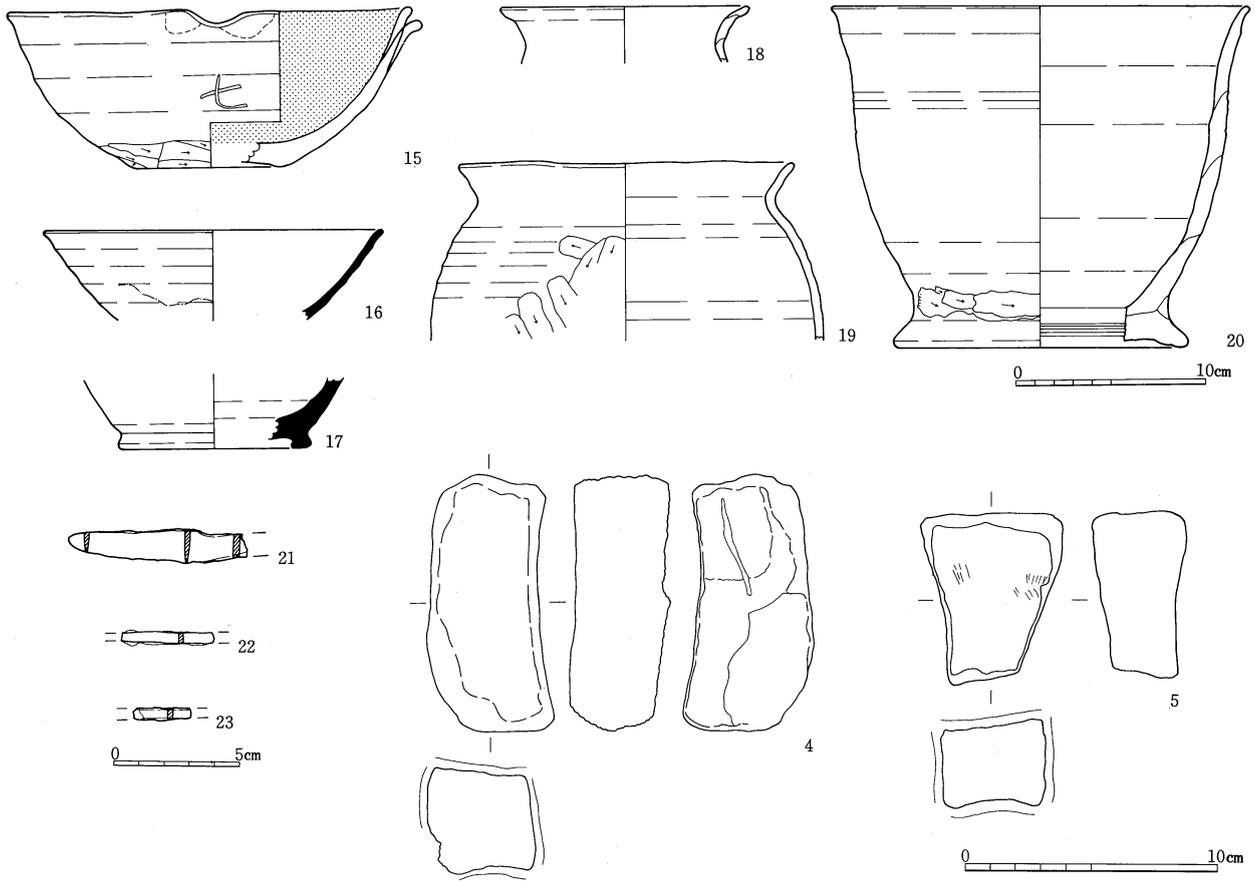


図23 10号住居址(2)

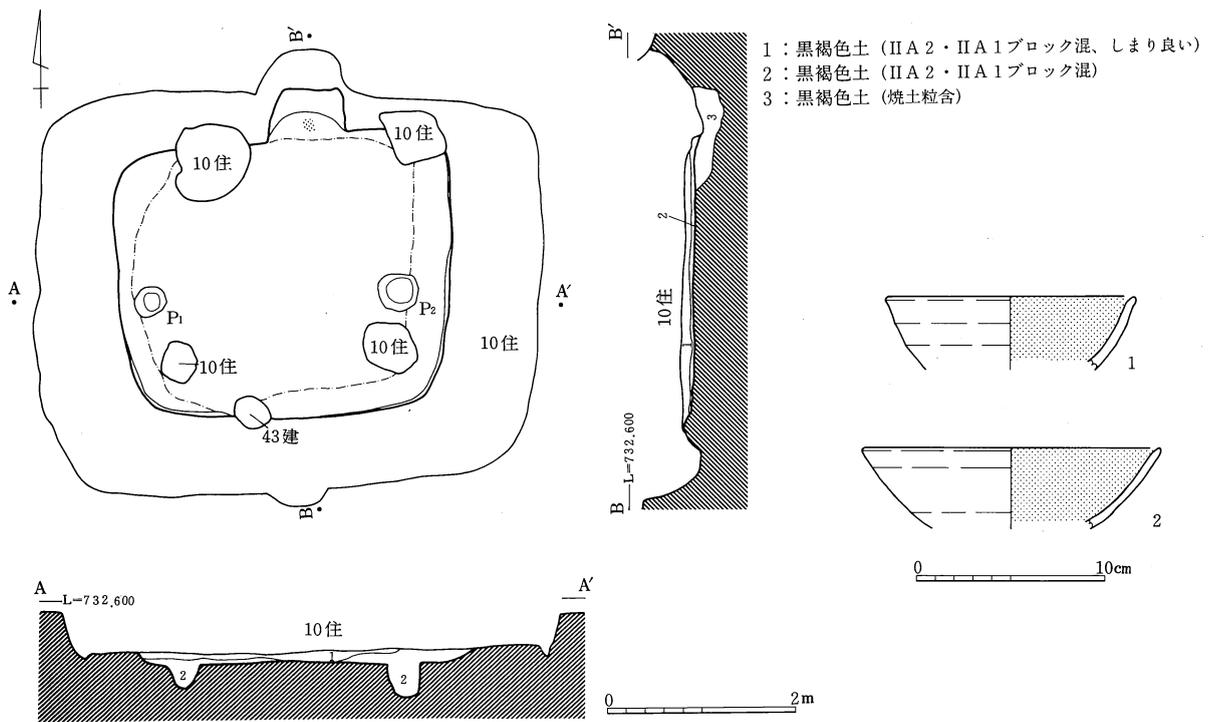


図24 43号住居址

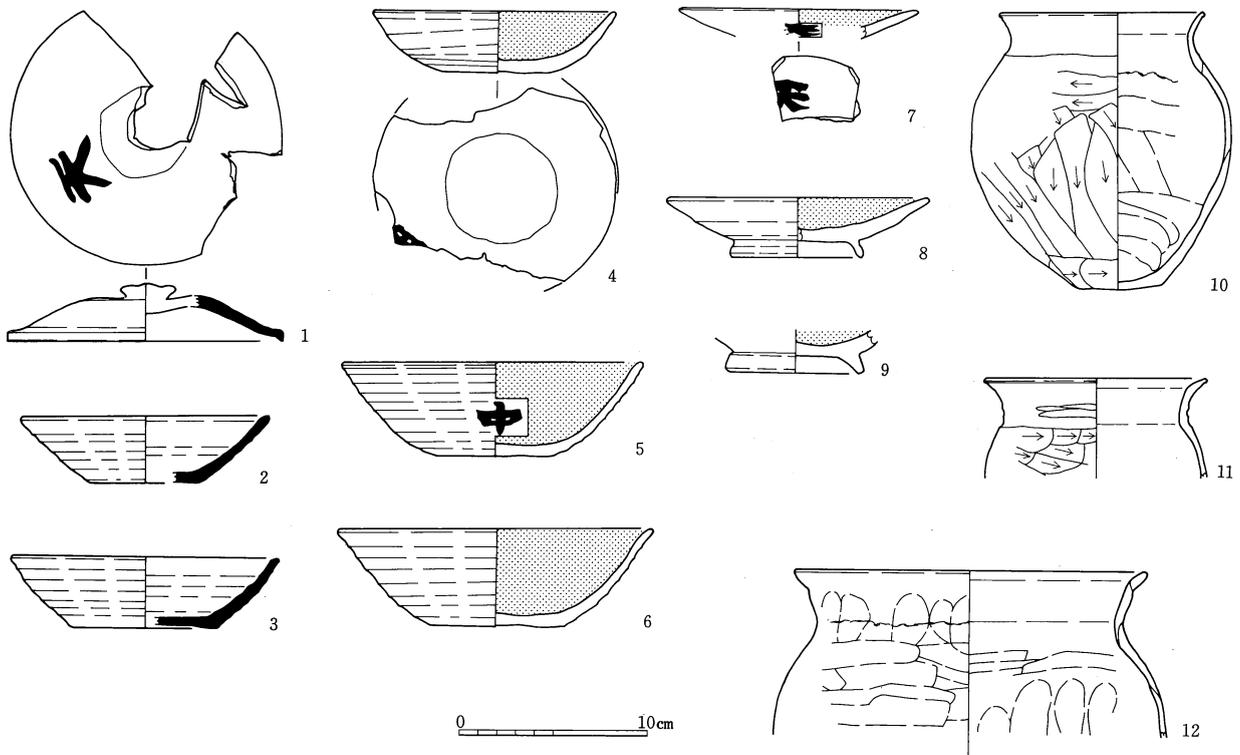
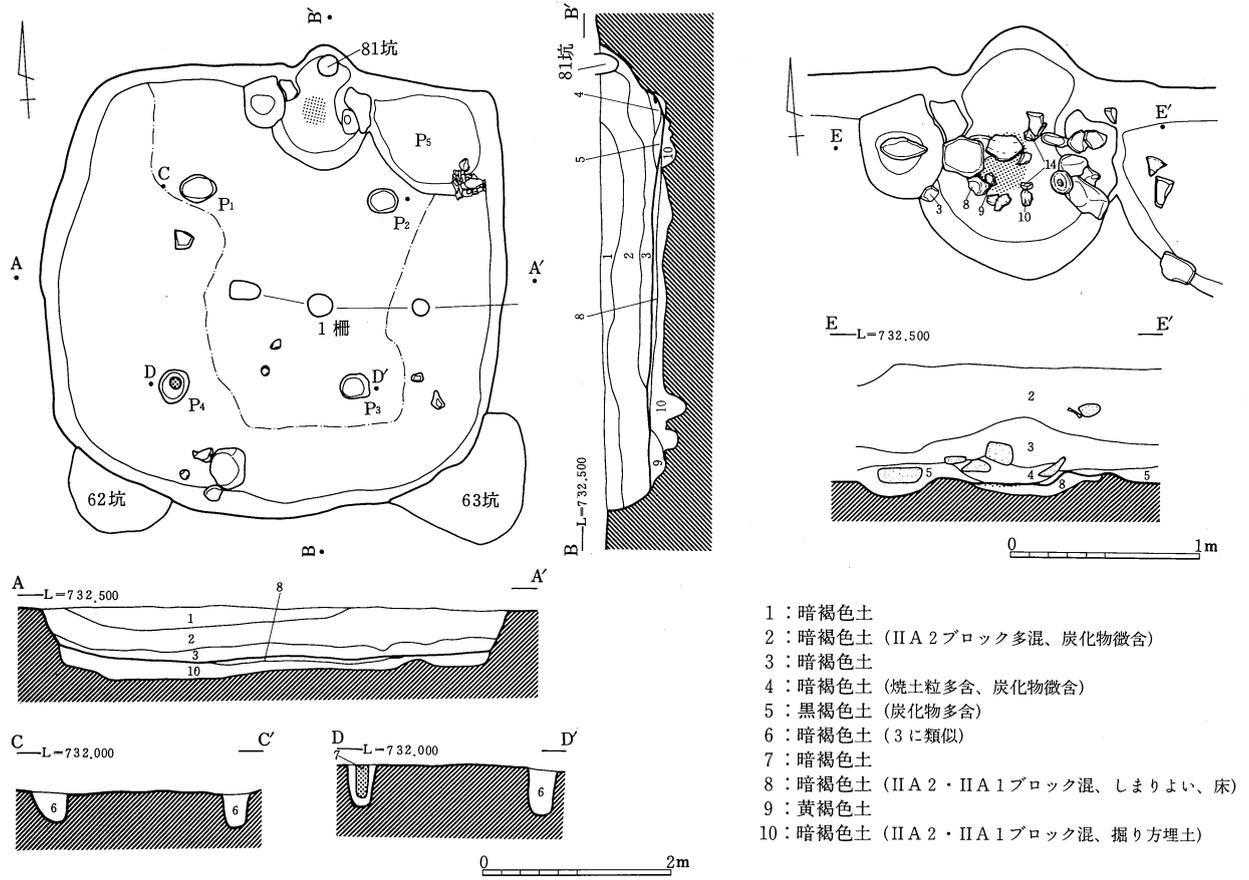


図25 11号住居址(1)

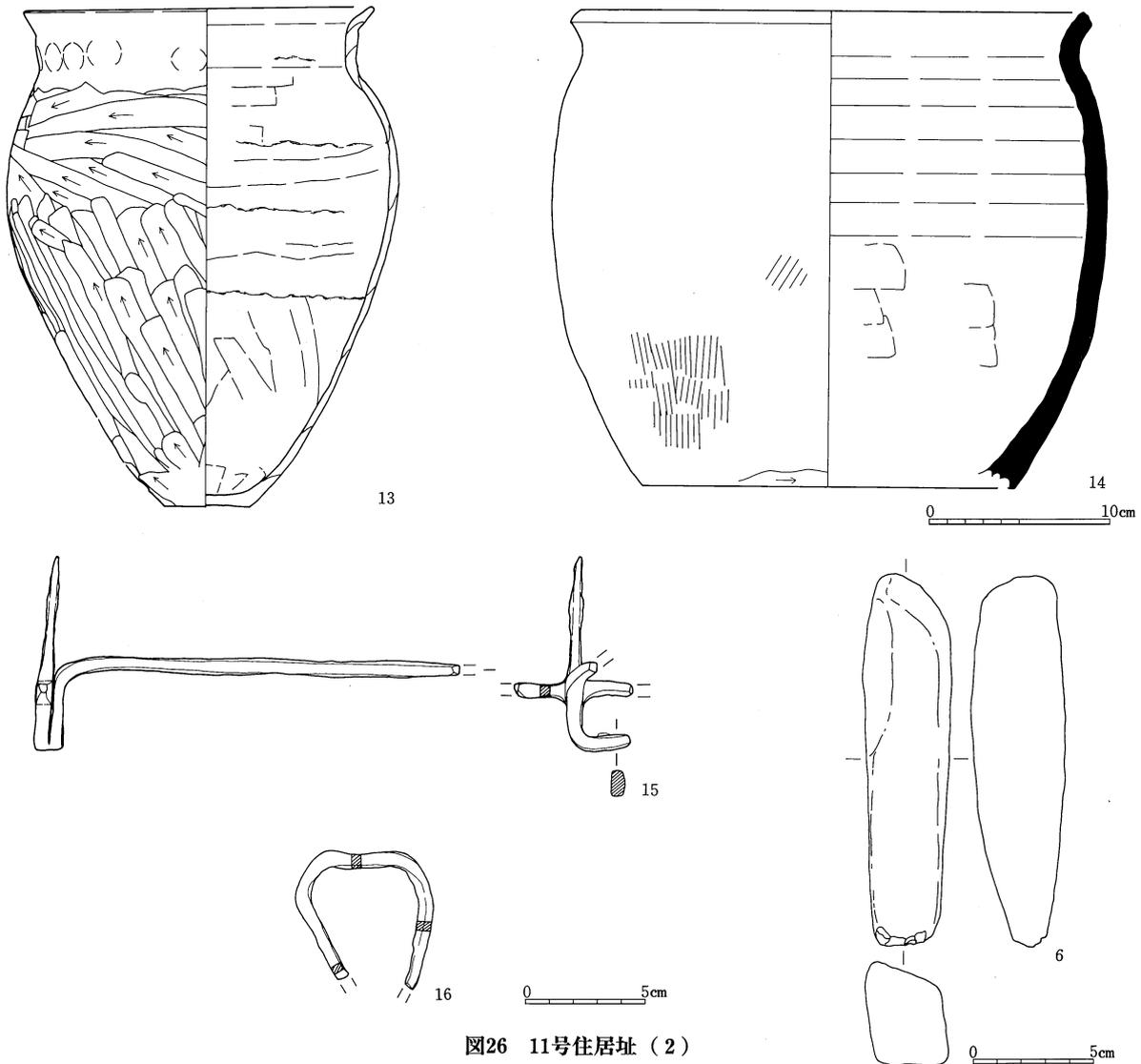


図26 11号住居址(2)

11号住居址 (図25・26、PL159・164・205・206・226・256・261)

II A 1層上面で検出された。1号柵列、62・63号土坑に切られる。本址床下には42号住居址が存在し、本址はその拡張住居址と判断される。覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。床は荒ぼり後II A 2ブロックの混入する黒褐色土を埋め戻し、上面を固くたたきしめ床面を形成している。床面は西壁で上がり気味で、カマドから中央部にかけて堅緻であった。ピットは5基確認されP1～4が柱穴と判断される。P3は断面で柱痕が確認された。P5は浅い落ち込みで貯蔵穴に類するものとも思われるが特に遺物の集中など見られない。南壁中央付近壁際に平石が床面で検出され出入口にかかわる遺物の可能性がある。カマドは破壊され残存状況は悪い。左袖に浅い落ち込みと右袖に小ピットが確認され袖石の抜き取り痕と考えられる。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏6以上(2・3)・蓋1(1)・広口甕1(14)・甕1・中形甕1、土師器甕2以上(12・13)・小形甕2(10・11)・内面黒色坏7以上(4～6)・碗1(9)・皿2(7・8)個体分が出土した。金属器は「焼き印」状?の鉄製品1(15)・鏃状鉄製品1(16)、石器は叩き石1(6)個が出土した。覆土内遺物が多くカマド付近を主に出土している。5・6はP5からつぶれた状態で検出された。1・4・5・7には墨書が書され、1・7には「天」、5には「中」、4は不明(「奥?」)である。

時期 7段階の所産と思われる。

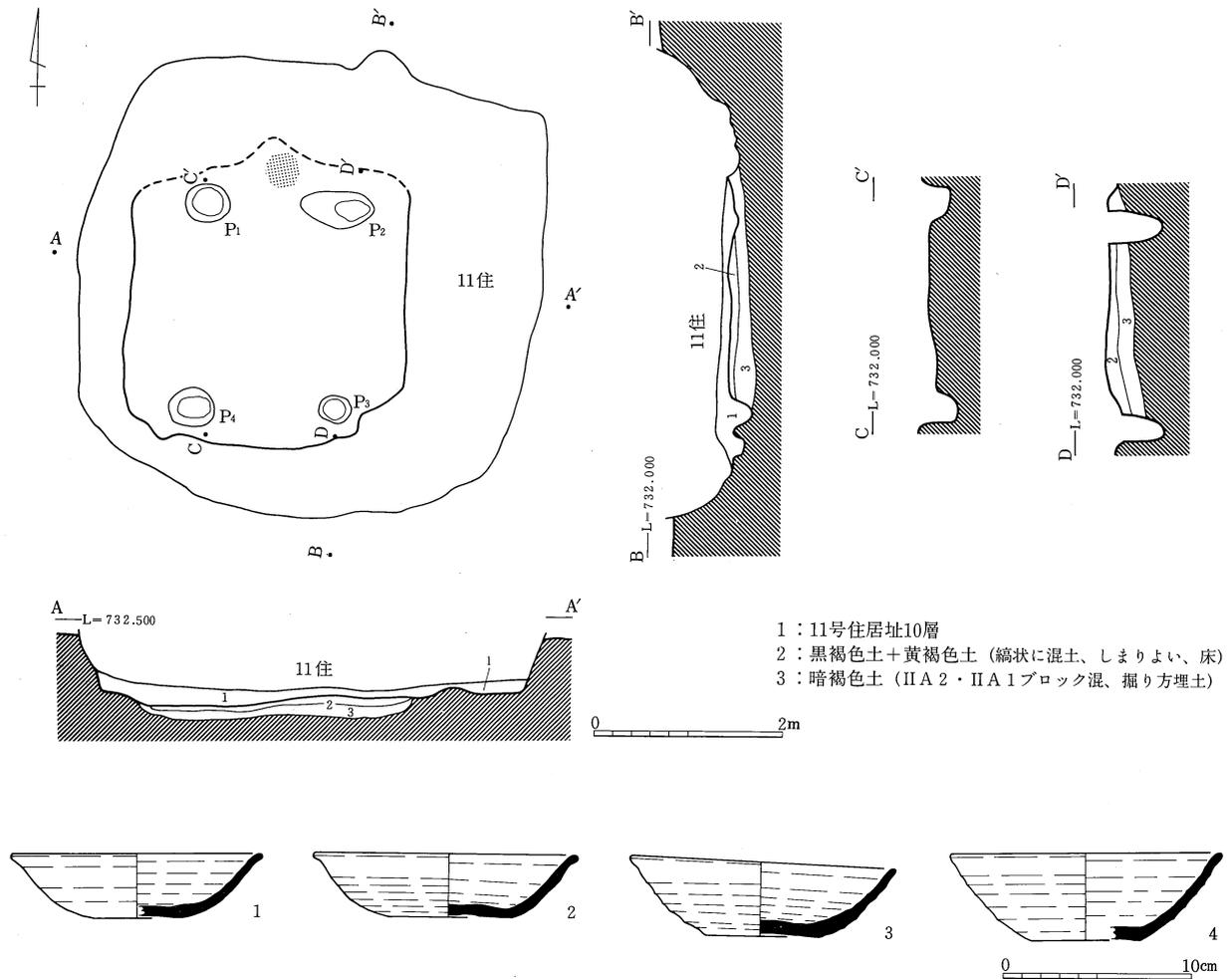


図27 42号住居址

42号住居址 (図27、PL164)

11号住居址床下で検出された。覆土は11号住居址構築時の埋土があたる。床は荒ぼり後、IIA2ブロックの混入した黒褐色土で埋め戻し、その上面にIIA2ブロックを薄く敷いてわずかにたたいて床としていた。全体に凹凸が認められる。ピットは4基確認され、柱穴と判断される。いずれも覆土に11号住居址の掘り方埋土が認められ、柱は抜き取られた後、埋め戻されたと推察される。カマドは薄い火床が認められたにすぎず、破壊されたと考えられる。

遺物 出土土器はあまり多くない。全体量は須恵器高台坏1・坏8以上(1~4)・中形甕1・長頸瓶1、土師器甕2・内面黒色坏碗不明2個体分が出土している。11号住居址と切り合いのためか須恵器・中形甕は相互で接合する。

時期 6~7段階と思われる。

12号住居址 (図28~31、PL159・206・207・216・225・226・256)

IIA1層で検出された。中央部分は南北に暗渠による攪乱を受けていた。本址床下に45号住居址がほぼ同規模で存在し、床面の造り替えが推察される。覆土は暗褐色土を主体とし、カマド破壊後自然堆積したものと思われる。遺物は覆土中より大量に出土し「土器捨て場」の様相を呈す。床は45号住居址を薄く埋め戻した上面をたたきしめ床面とし、全体に堅緻であるが凹凸がかなりある。カマドは残存状況が悪く燃

焼部内に多数の礫が散在していた。両袖部には袖石の抜き取り痕と判断される帯状の落ち込みが認められ、袖の基盤になったと思われる地山の掘り残しの高まりが認められている。

遺物 遺物の出土は多量で、特に土器は膨大である。その大半は小片ばかりで原形を残すものはわずかである。

須恵器高台坏2(1・2)・坏30以上(3～9)・皿1(10)・広口甕3(90・91)・甕把手3(87～89)・長頸瓶1(85)・四耳壺1(86)、土師器甕15以上(73)・小形甕(台坏を含む)3以上(72)・ロクロ甕4以上(78～80)・ロクロ中形甕3以上(76・77)・ロクロ小形甕3以上(74・75)・内面黒色ロクロ甕1(81)・内面黒色坏80以上(11～29・33～36・43～45)・碗45以上(30・31・55～59)・碗坏不明14以上(37～42・46～53)・皿4以上(32・54)・鉢7以上(60・82)、灰釉陶器碗12以上(61～65・71)・皿9以上(66～68・70)・狭縁段皿1(69)・耳皿1・長頸瓶1(84)・広口瓶1(83)・把手付き瓶1個体分が出土している。

その他小片の総重量は、須恵器の甕壺瓶類17.69 kg、四耳壺(小・中形の甕を含む)2 kg、壺・瓶類650 g、坏類3.63 kg、皿162 g、土師器甕10.28 kg、内面黒色坏碗14.78 kg、皿360 g、鉢220 g、灰釉陶器碗皿680 g、長頸瓶250 g、総重量50.702 kgをはかる。

金属器は刀子7(92～97・99)・棒状鉄製品3(98・101・102)・鎌(100)・紡錘車と思われる鉄製品1(103)・鉄鏃2(104・105)・鉄斧1(106)、鉄滓70 gが出土した。石製品は紡錘車1(7)が出土した。須恵器坏は低温還元のため生焼けがほとんどである。文字資料は24点検出された。墨書土器は「𠩺」の文字が多く(11・15・21・29・35・38～41・44・45・48)、同一文字と思われるものは(19・36・37・43・47・50)、文字不明は(42・46・49・51・52・59)、53は刻書で文字は不明である。灰釉陶器は釉薬の施釉がハケ塗りと漬け掛けのものがある。

時期 出土土器から8～9段階と思われる。

45号住居址(図32、PL159・255)

12号住居址床下で検出された。形状規模の点で12号住居址と大差なく、床の差異により住居址としたもので、床の再構築によるものと推察される。覆土は12号住居址構築時の埋土にあたる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混入する黒褐色土で埋め戻し、その上面をたたいて床としていた。周溝は西壁際に幅約20 cm、深さ8 cm前後で検出された。ピットは10基確認され、P6～9が柱穴と判断される。P6・8は底に礫が認められ、礎石と判断される。また住居址規模が大きいためこれら以外の各ピットも支柱穴として利用された可能性もあろう。カマドは12号住居址に破壊されているため、火床と高さ5 cmほどの地山掘り残しの袖がわずかに確認されたにすぎなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器坏13以上(1～5)・蓋小片1・中形甕1・壺瓶類1(19)・皿1、土師器甕2・中形甕1(18)・小形ロクロ甕1、内面黒色坏碗12以上(6～14・17)・皿3(15・16)、灰釉陶器碗1片・皿1片、個体分が出土した。石器はコモ石(8)が出土している。4・10は「𠩺」、11・12は同じ字体と思われる。8は「金または全」、9は「八」と思われる。5・6・7は文字不明である。床下・ピットからおもに出土した。

時期 8段階と思われる。

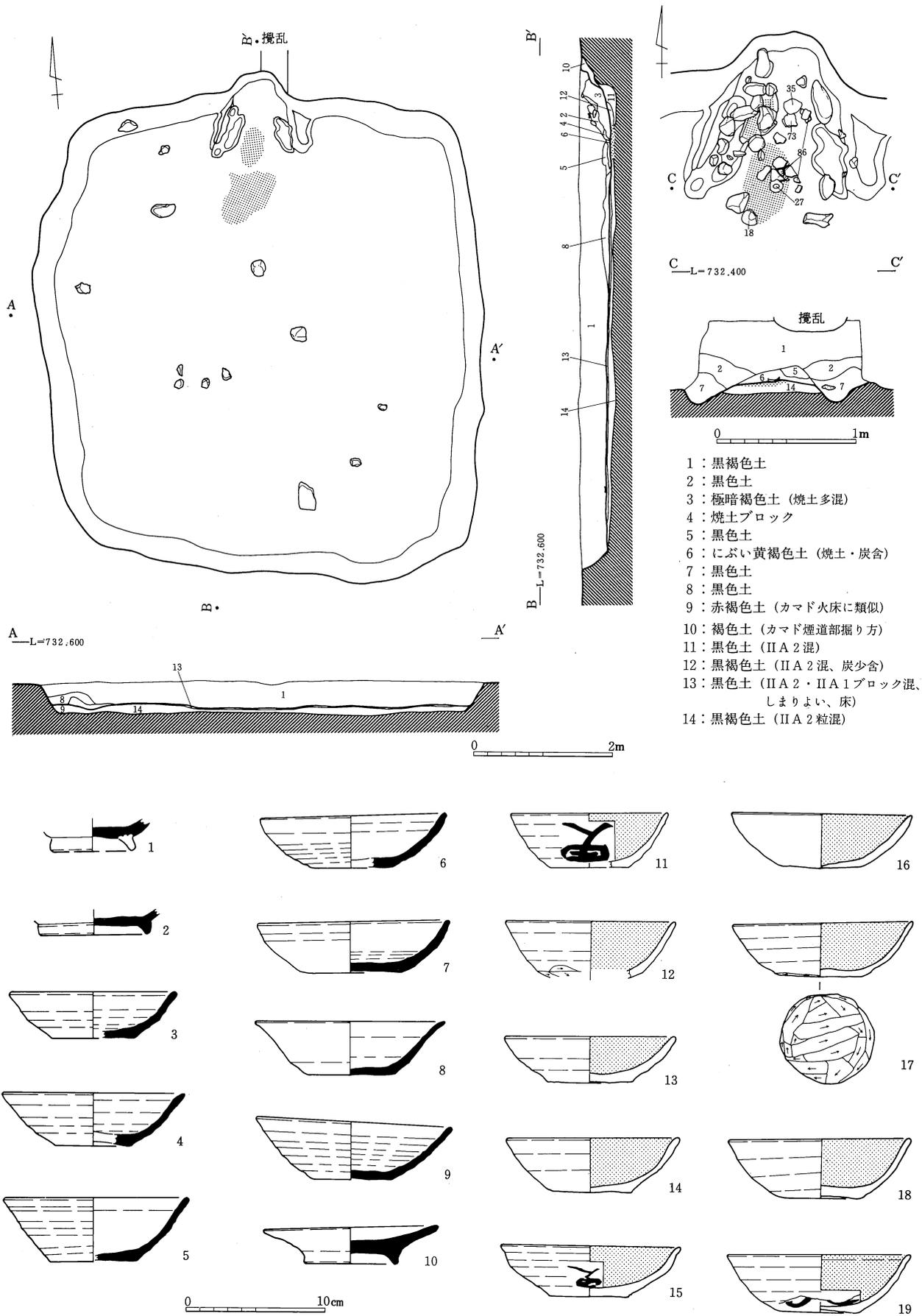


図28 12号住居址 (1)

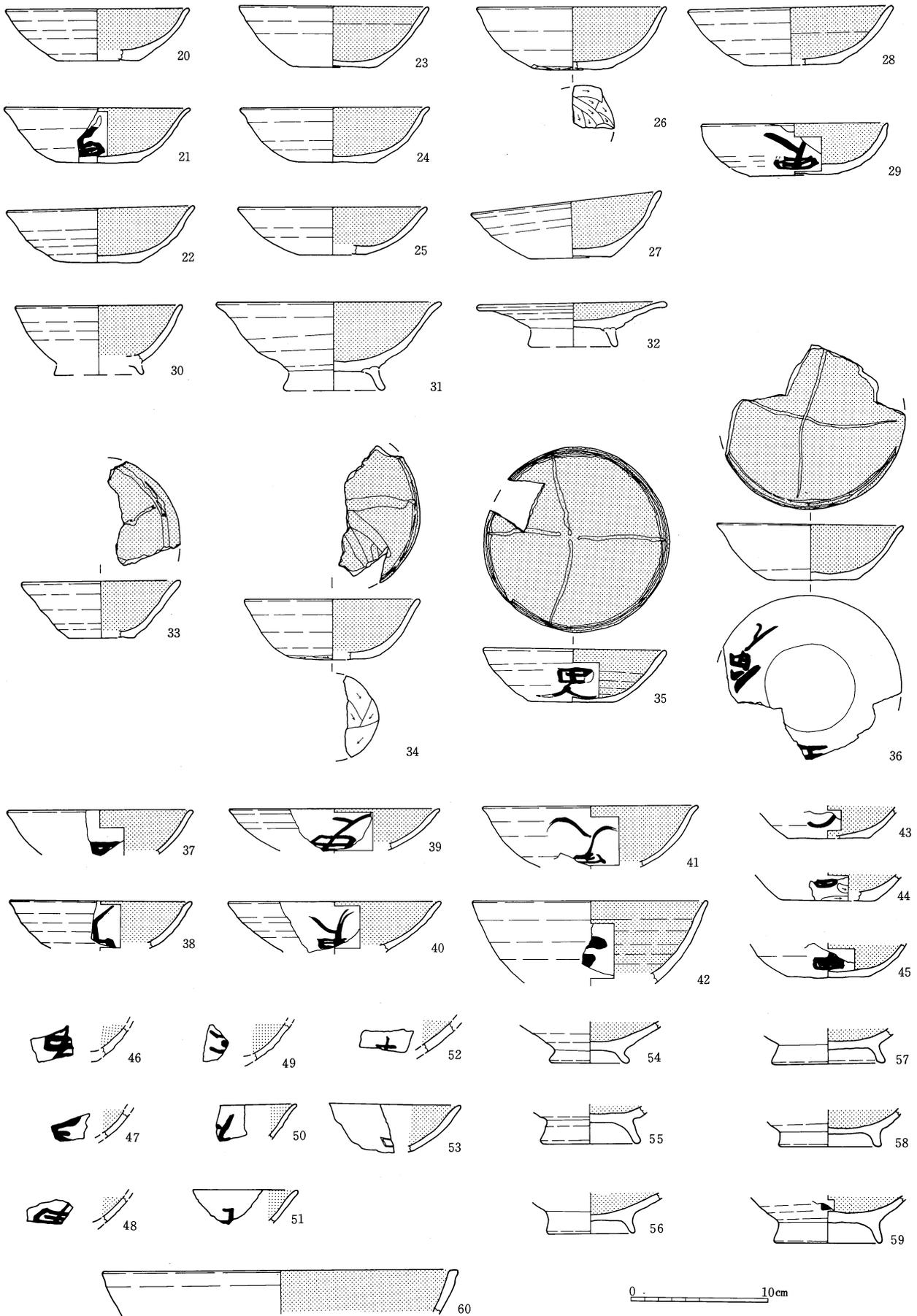


图29 12号住居址(2)

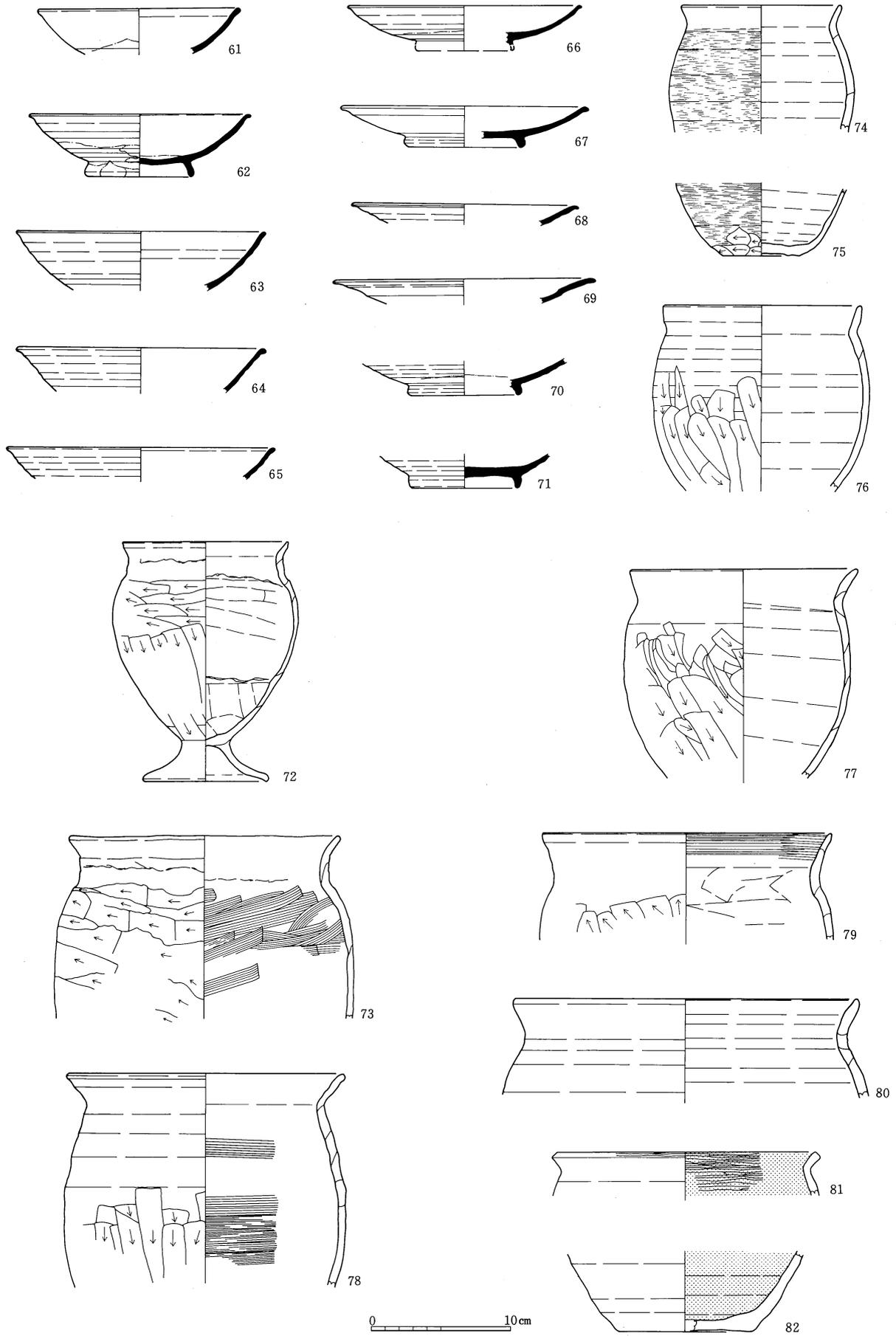


图30 12号住居址 (3)

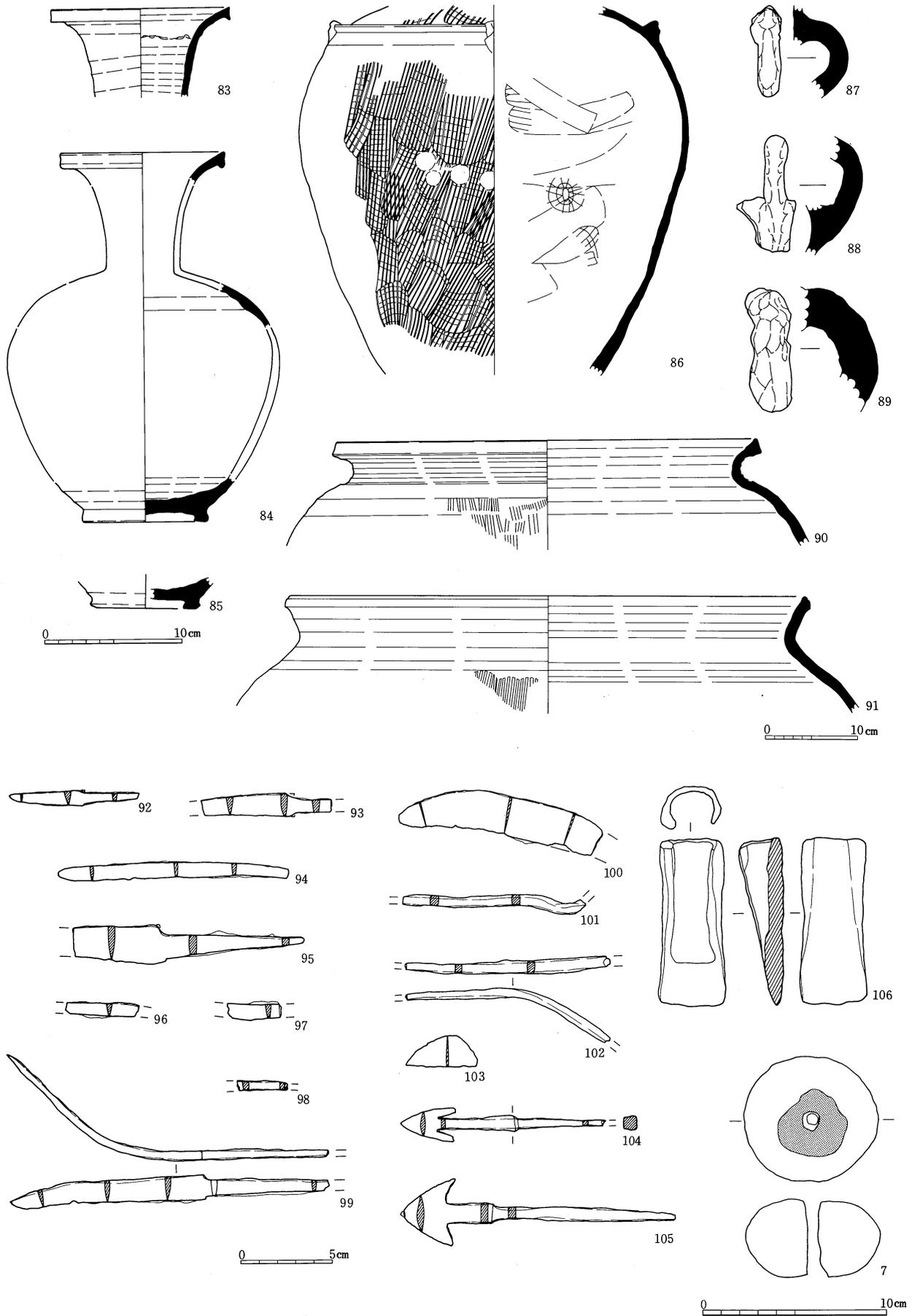


图31 12号住居址(4)

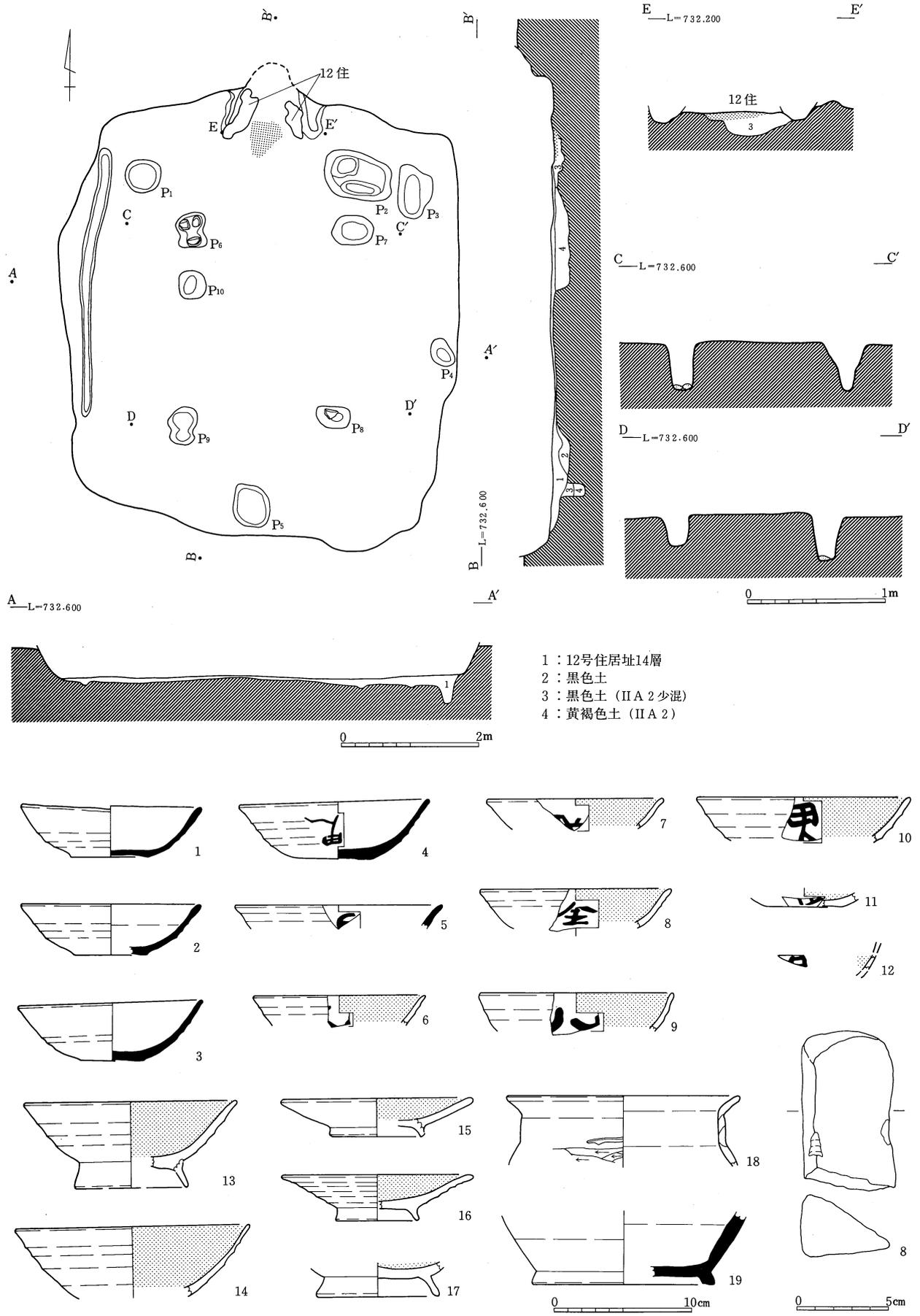


图32 45号住居址

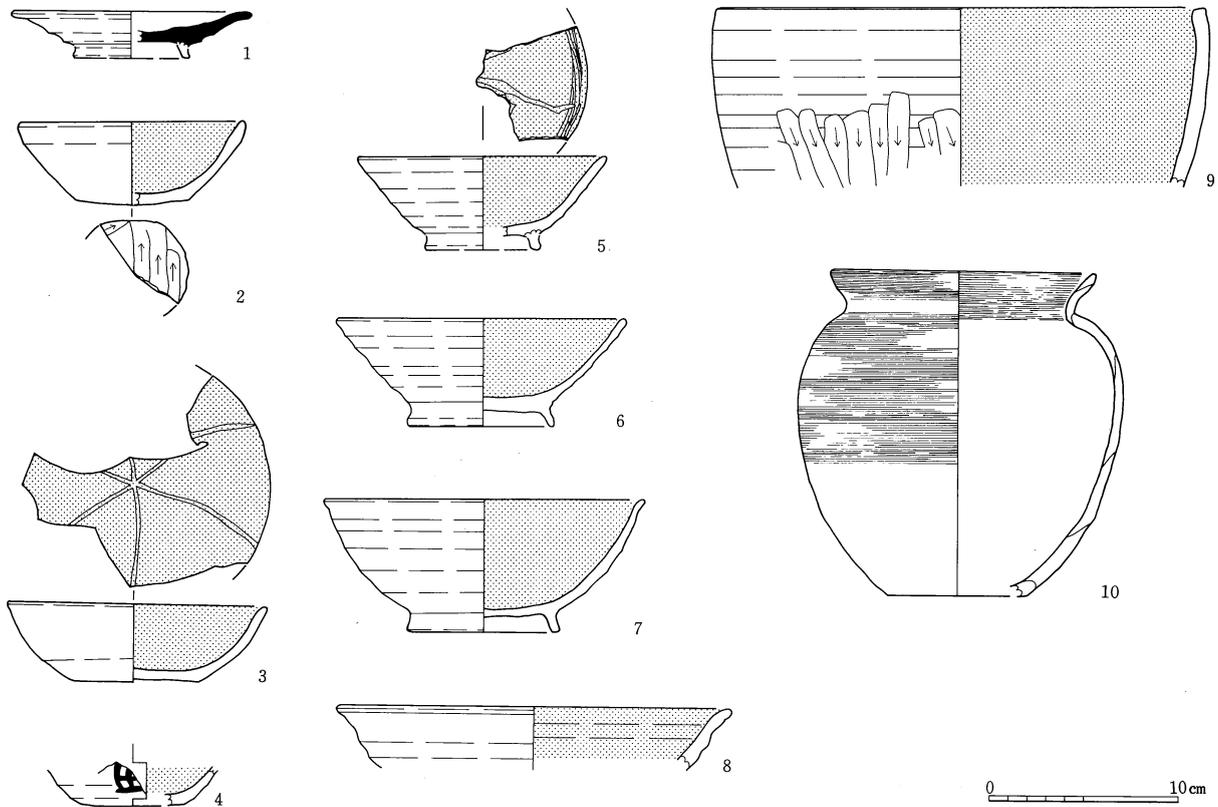
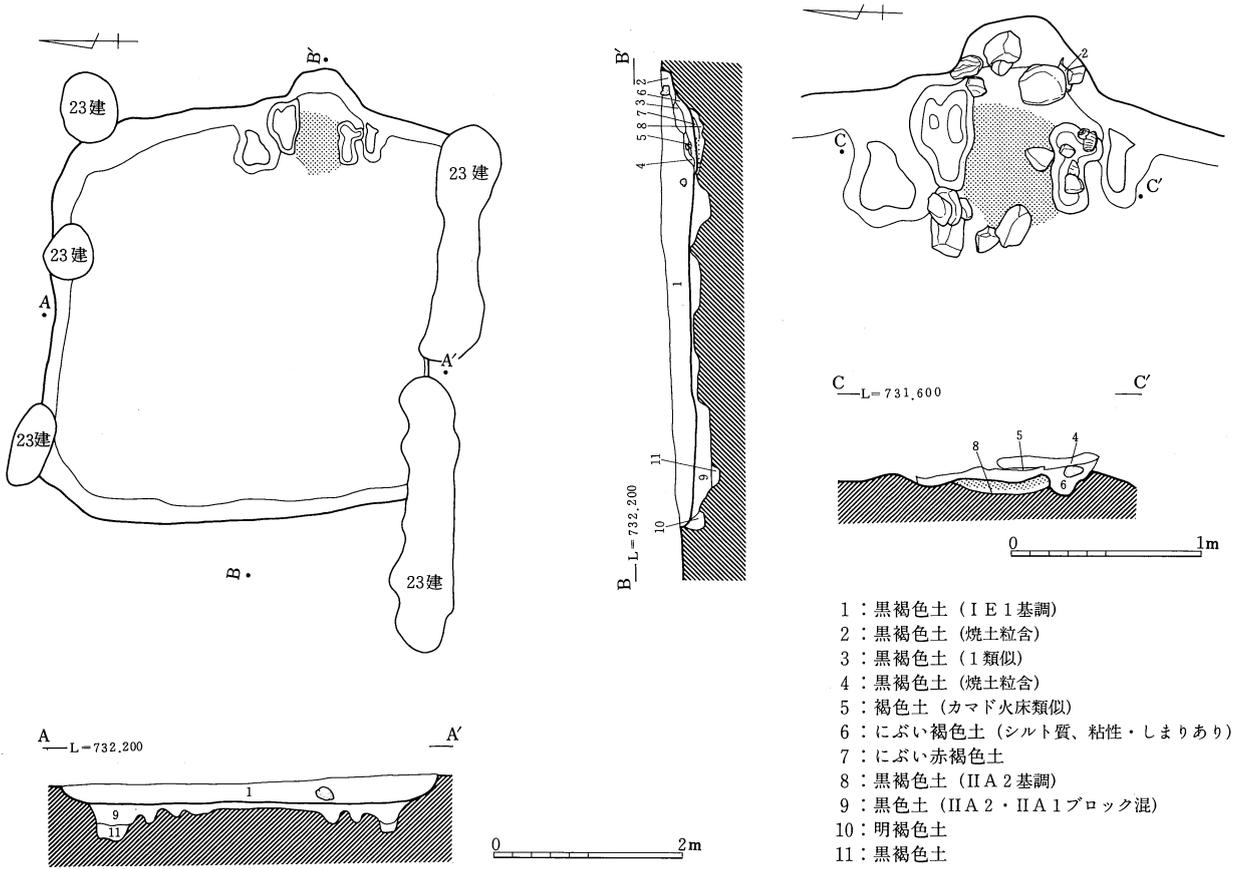


図33 13号住居址 (1)

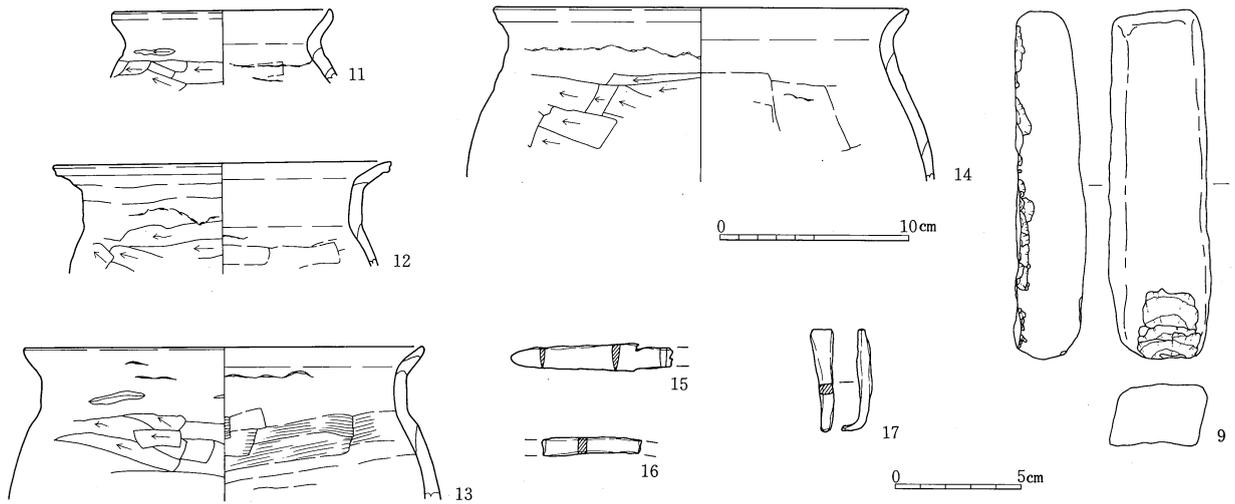


図34 13号住居址（2）

13号住居址 (図33・34、PL159・207・208・261)

II A 1層上面で検出された。23号掘立柱建物址に切られる。覆土は黒褐色土主体とした自然堆積と思われる。遺物は床面より若干浮いた状態での出土が大半を占める。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒色土を埋め戻し、上面を平坦に床面として形成している。全体に特に堅緻なところは認められない。カマドの遺存状況は悪く、両袖石の抜き取り痕、火床が確認されたにすぎなかった。袖石として利用されたと思われる礫がカマド周辺部で検出されたことから石組カマドの可能性はある。また袖の基盤としての地山の掘り残した高まりが若干みとめられた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏17以上・皿1（1）・甕5・長頸瓶4、土師器甕5以上（13・14）・中形甕（12）・小形甕1（11）・ロクロ中形甕1（10）・内面黒色坏26以上（2～4）・碗14以上（5～7）・鉢1（9）・坏碗不明1（8）、灰釉陶器2・皿2・長頸瓶1個体分が出土した。鉄器は刀子2（15）・釘1（17）・棒状鉄製品1（16）、石器は叩き石1（9）が出土した。坏類が多く特に須恵器は破片が多い。図化できたものはカマドおよびその付近出土のものが多く、4に書かれる墨書は「奥」と思われる。

時期 9号段階に相当するものと思われる。

14号住居址 (図35・36、PL160・208)

II A 2層で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻し、黄褐色土の貼床を施す。全体に堅緻であった。周溝は東壁に部分的に認められ、貼床を切るように幅約20 cm、深さ8 cm前後で検出された。ピットは7基確認され、P1～4は柱穴と判断される。おのおのの柱穴は貼床を剥いだ段階で掘り方が広がっていたことから、床構築前に柱が立てられたことが看取される。P5からは多くの焼土・遺物が認められ、P6はカマド対面壁中央に位置し、出入り口施設にかかわるものと判断される。カマドは袖部・煙道部に礫を配した石組カマドで、礫の隙間に拳大の礫を充填していた。構築材としての明瞭な土は全く認められなかった。火床中央に火熱を受けた支脚石が残存し、袖先には袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出された。構築に際しては、貼床構築後カマド掘り方を掘り、礫を配したことが観察される。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏1（1）・坏25以上（2～15）・甕2（37）・四耳壺1（36）、土師器甕4以上（32～35）・小形甕1（31）・台付甕1（30）・内面黒色坏12以上（16～21）・碗4以上（22・23）・皿1（24）・坏碗

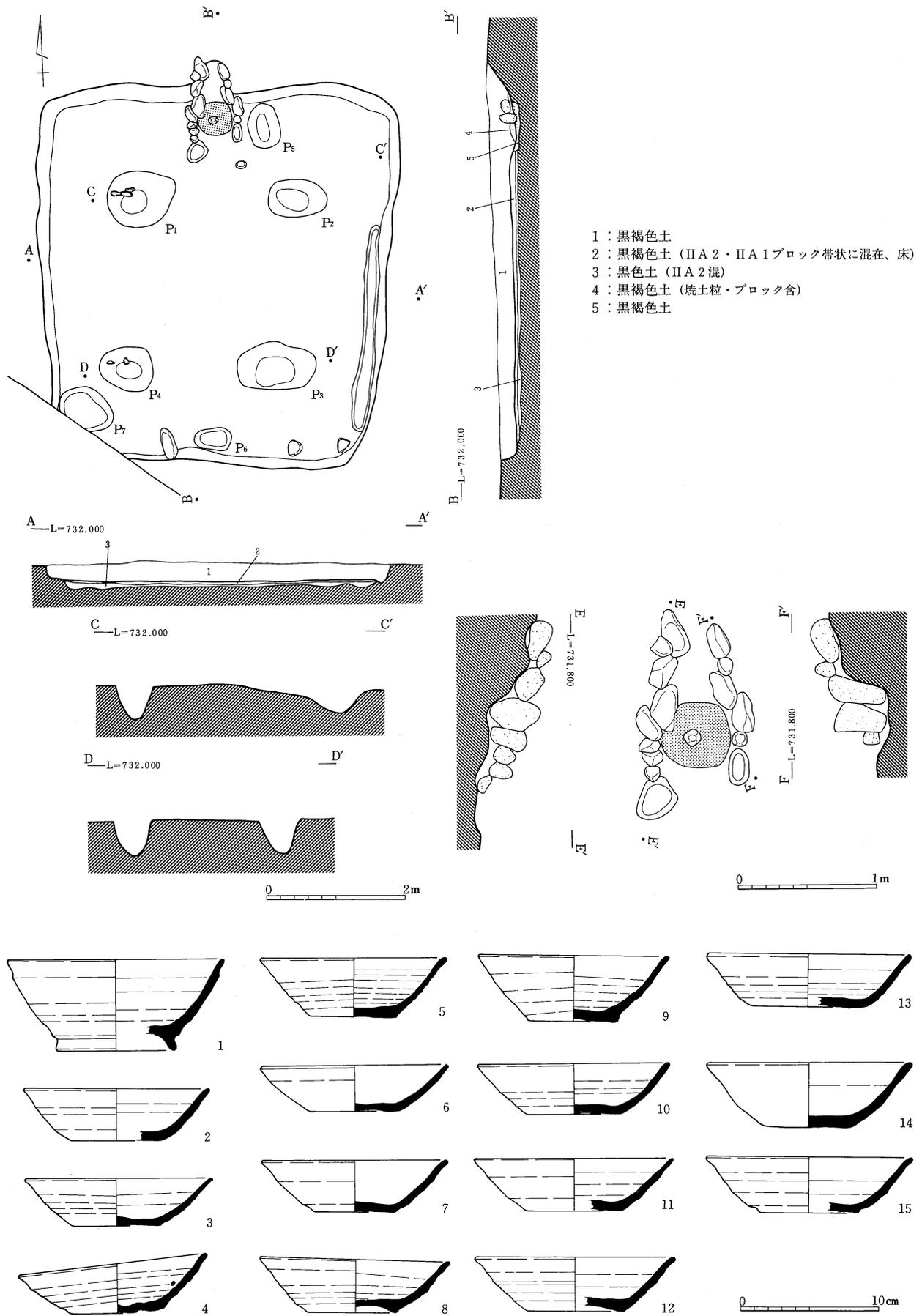


図35 14号住居址 (1)

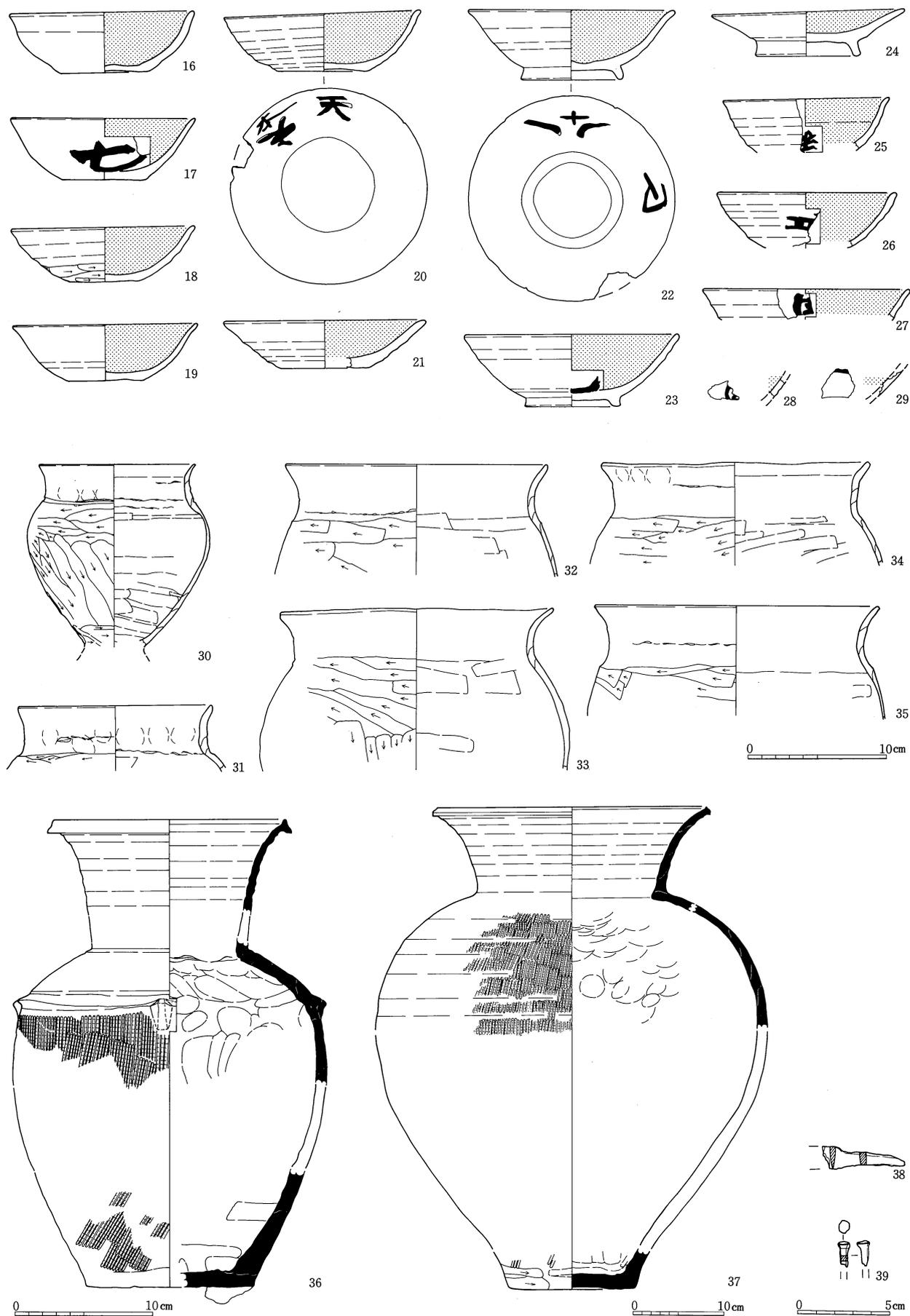


图36 14号住居址(2)

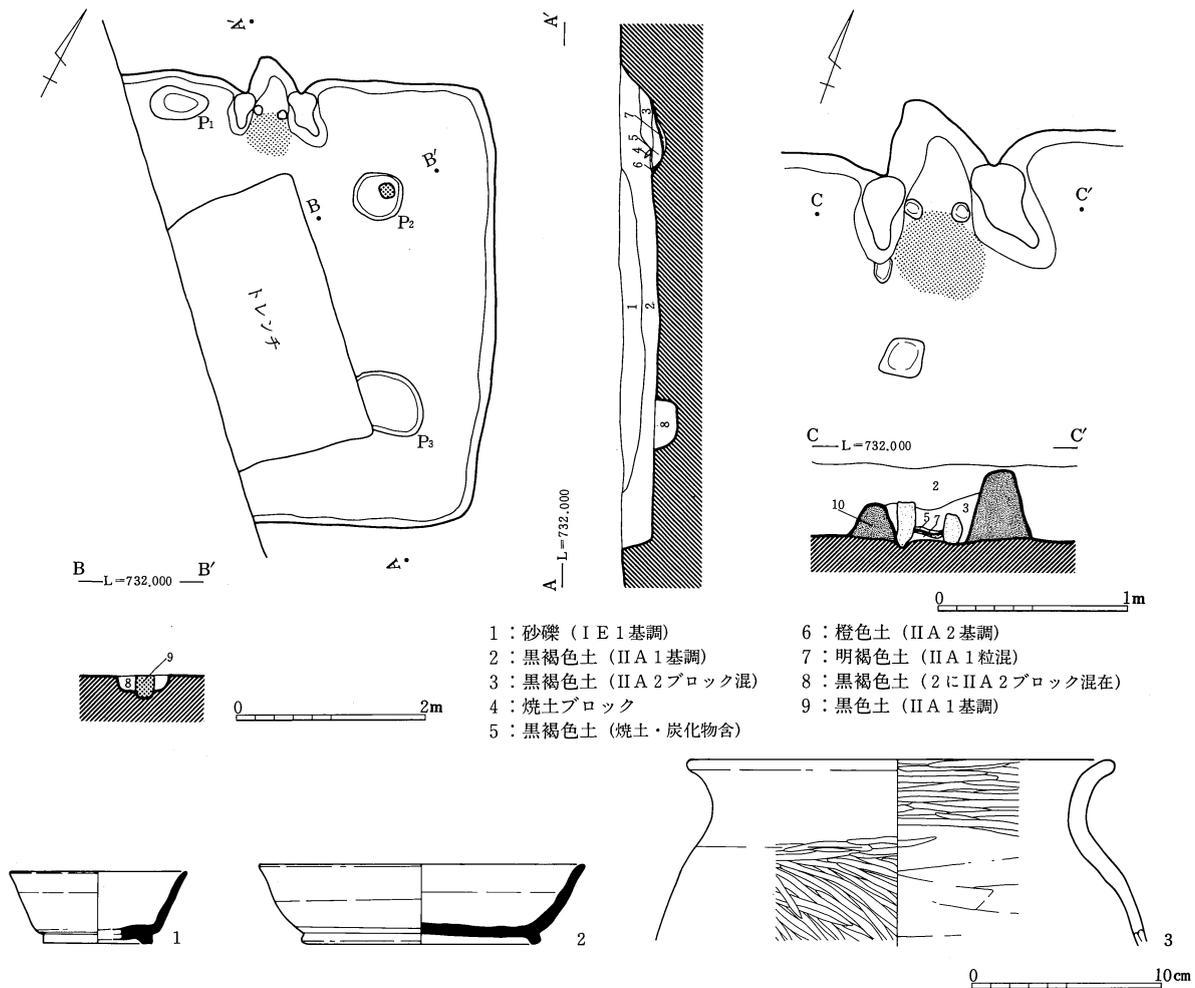


図37 15号住居址

不明 5 (25~29) 個体分が出土した。金属器は刀子 1 (38)・釘 1 (39)・鉄滓 140 g が出土している。床面とカマドから出土したのことが多い。17・20・22・23・25~29には墨書が書され、17は「七」、20には「天・本・？」の 3 文字が書かれるが 1 字は判読できない。22には「万・八十」、23・25~29は文字不明。

時期 6 段階の所産と思われる。

15号住居址 (図37、PL160)

II A 2 層で検出された。本址中央部はトレンチ調査時の掘り下げにより消失し、西側が用地外にかかるため調査に至らなかった。なお、用地外土層断面から本址の掘り込み面は II A 1 層であることが確認できた。覆土は、自然堆積と思われる。上層には砂礫が広がり、本址埋没後の窪地に氾濫による砂礫堆積があったことをうかがわせる。床は掘り下げた地山面をそのまま床とし叩き締めていた。カマドは袖の構築材である黄褐色土を掘り方面に貼り、燃焼部を構成していることが観察される。

遺物 1~3は床面より出土し、ほかはわずかな小片が出土したにすぎない。

時期 1 段階の所産と考えられる。

16号住居址 (図38、PL160・208・225)

トレンチ調査時に II A 2 層で確認され、全体は II A 1 層上面で検出された。トレンチ断面観察からは II

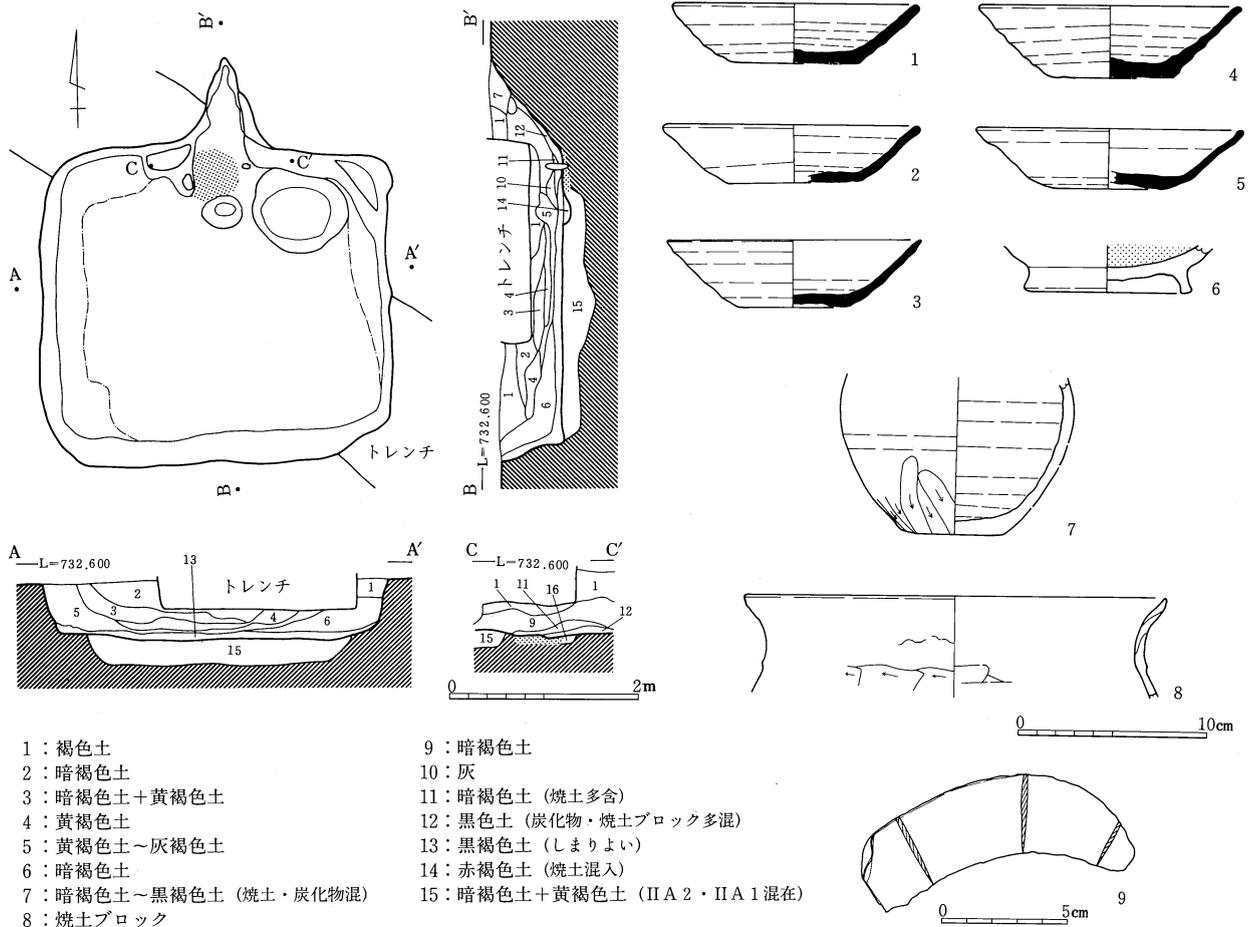


図38 16号住居址

A 2層が掘り込み面となっていた。覆土はII A 2ブロックの混入した暗褐色土を主体としていることから人為埋没と思われる。遺物はカマド前から鉄鎌(9)が出土している。床はほぼ方形に掘られた掘り方をII A 2ブロックと黒褐色土によって埋め戻し、その上面を床面として形成する。全体に平坦で堅緻であった。この方形状の掘り方を当初床下遺構(住居址)と推測したが、床面・火床などの施設の痕跡は認められず掘り方として扱うのが妥当であろう。北東隅にテラス状の段が認められたが、軟弱な面を成していた。カマドは遺存状況が悪く、左袖に床面の若干の高まりが確認されたほか、床面とほぼ同レベルで火床が検出された。また、火床手前には焼土の掻き出しピットが認められ、北東隅に灰溜めピットが検出されている。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏7(1~5)、土師器甕2(8)・小形甕1(7)・内面黒色碗1(6)個体分が出土し、金属器は鎌1(9)・鉄滓100gが出土した。1~5は床面近くから出土している。

時期 5段階頃の所産と思われる。

17号住居址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述

18号住居址 (図39、PL160・209)

IE層上面で検出された。付近一帯のIE層は砂層となっている。58号掘立柱建物址、16号溝址に切られる。覆土はIE層基調の黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面を利用し、平坦で壁際を除いてやや堅緻であった。壁は上半部が砂層であるため崩落も認められたが、特に壁を補強

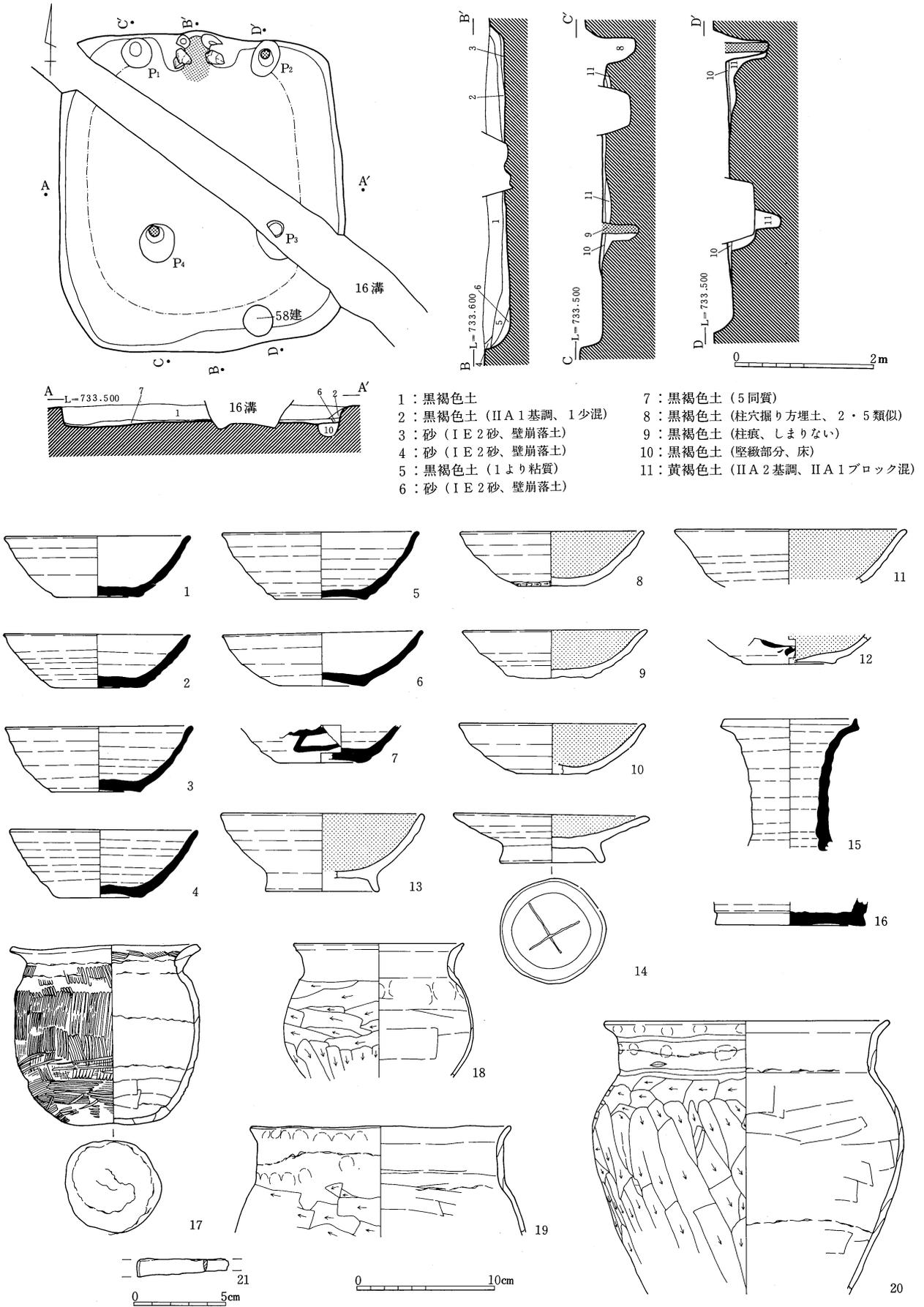


図39 18号住居址

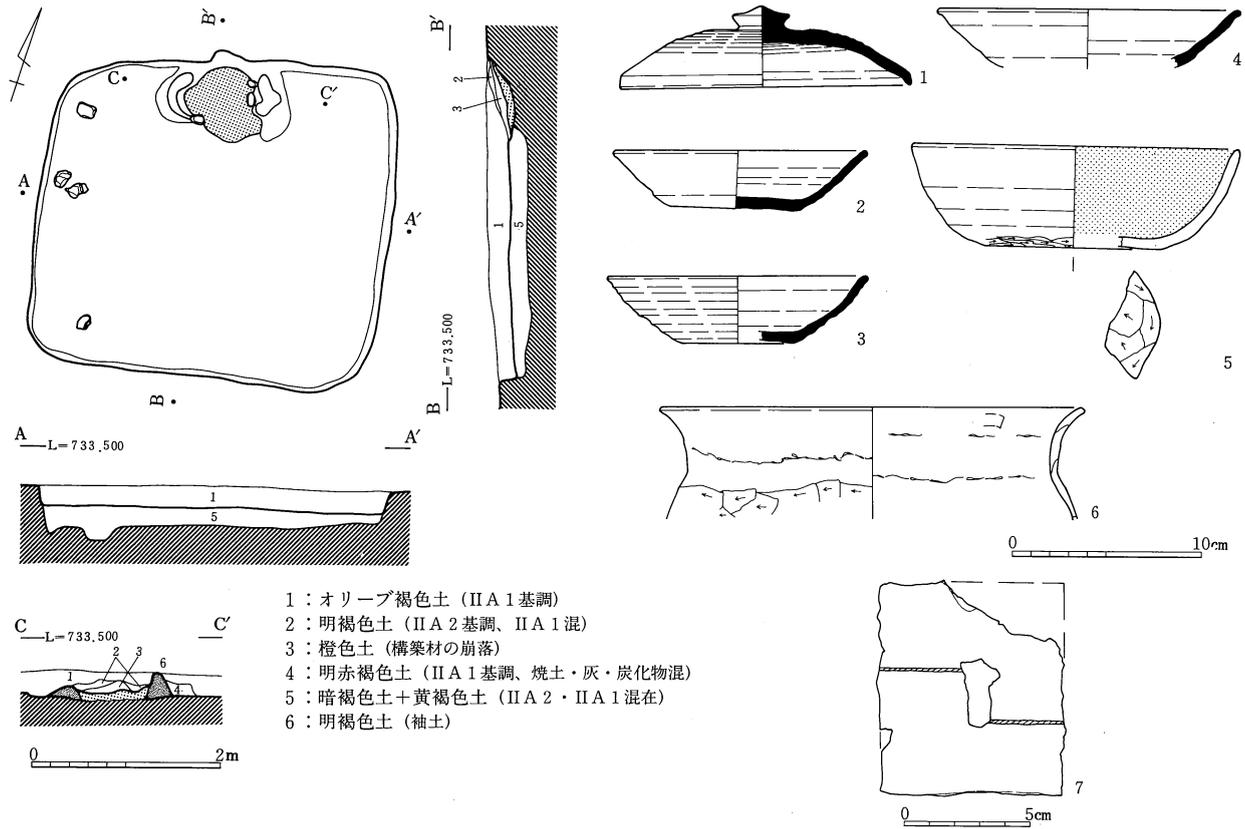


図40 19号住居址

するなどの状況は認められなかった。ピットは4基確認され、柱穴と判断される。カマドは両袖先の袖石がカマド内に傾いた状態で出土し、袖奥には対になって袖石の抜き取り痕が認められた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏14 (1~7)・長頸瓶2 (15)・甕1・中形甕1・瓶類1 (16)、土師器甕4 (19・20)・小形甕1 (18)、ハケ目の小形甕1 (17)・内面黒色坏10以上 (8~10・12)・碗4以上 (13)・皿2 (14)、坏碗不明 (11)・両面黒色の坏碗不明1、灰釉陶器碗1個体分が出土した。鉄器は刀子1 (21)が出土した。図化されたほとんどの遺物はカマド内に投げ込まれた状態で出土した。7・12は墨書が書されるが、文字は判読できない。14の外底部には「×」のヘラ書きが施される。

時期 7段階頃に廃棄されたものと思われる。

19号住居址 (図40、PL160・209・226)

IIA 1層で検出された。覆土はカマド付近を覆う黄褐色土を除けば、単層で均質な層であることから自然堆積と思われる。床面は荒ぼり後、IIA 2ブロックの混入した黒褐色土を埋め戻し、その上面を床面として平坦にする。余り堅緻ではなかった。カマドは明褐色土を構築材とした両袖と、数個の礫、焼土ブロックの散見する火床が検出されている。

遺物 遺物の出土量は少なく、須恵器坏6以上 (2・3)・蓋1 (1)、土師器甕3 (6)・小形甕1・内面黒色坏3 (5)個体分が出土している。他に板状の鉄製品1 (7)が出土した。

時期 5段階頃の所産と思われる。

20号住居址 本址は特殊遺構4に変更

21号住居址 (図41、PL161・209・226)

II A 1層で検出された。132土坑に切られ、133土坑を切る。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混入の黒褐色土を埋め戻し、上面をたたきしめた状況である。ピットは9基確認された。P1～4はその位置から柱穴と判断される。P5・6は東西壁中央を穿つようになつて認められ、柱穴となろうか。P7～9は南壁際中央で検出され出入口施設にかかわるものと推察される。カマドは焼土をともなった火床は認められず、北壁中央の張り出し部に袖石の抜き取り痕と判断される小ピットが検出されたにすぎず、また土器片が多数入った不整形の落ち込みが存在した。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(1)・坏11以上(2～6)・甕1・長頸瓶1、土師器甕5(11～15)・小形甕1(10)・内面黒色坏1以上・碗2(7)・大形盤2(8・9)・灰釉陶器長頸瓶1個体分が出土している。金属器は、紡錘車の軸と思われる鉄製品1(16)、青銅製品1片(17)が出土している。覆土中からはほとんど出土せず床面・カマド内からそのほとんどが出土していた。

時期 6号段階の所産と思われる。

22号住居址 (図42、PL161・210)

II A 1層～II A 2層で検出された。覆土はII A 2ブロック混じりの黒褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻し、上面をたたきしめ床面とし、中央部が堅緻でその周辺は軟弱であった。床面は南壁付近で数センチ落ち込む。ピットは北東隅に一基確認され、完形の内面黒色坏(8)が出土している。貯蔵穴に類する施設と思われる。カマドは黒褐色土を構築材として利用した両袖が残存し、周辺には多数の礫が出土していた。また火床は薄く、明度も低いものであった。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器坏5以上(1～3)・甕1・壺瓶類小片1、土師器ロクロ甕1(13)・内面黒色坏碗13(4～9)・皿3(10～12)・鉢1(14)・両面黒色碗1個体分が出土している。残存率の良いものはほとんど床面から出土し、焼き物の種類からすると内面黒色坏碗類が多い。6には焼成前にヘラ書きが施されている。

時期 9段階頃に相当するものと思われる。

23号住居址 (図43、PL161)

II A 1層中で検出された。覆土はII A 2ブロックの混じる黒褐色土を主体とすることから人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混じる黒褐色土を埋め戻し、床面を形成する。床面は全体に凹凸が認められ、中央部に堅緻な部分が観察された。ピットは5基確認され、P1～3は掘り方は浅いとはいえず南東部、床面上で検出された礫と組んで、柱穴を成したと判断される。P5は出入口施設にかかわるピットと思われる。カマドは床面とほぼ同レベルで焼土が認められた。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器坏9以上(1～3)・甕1・中形甕1・長頸瓶1(8)、土師器甕小片1・小形甕2(6・7)・内面黒色碗3(4・5)個体分が出土している。床面およびカマドから出土している。

時期 7段階頃の所産と思われる。

24号住居址 (図44、PL161・210・211・225・255・256)

II A 1層で検出された。44号掘立柱建物址を切る。覆土はII A 2ブロックを混入した黒褐色土を主体とし、人為埋没と思われる。遺物はカマド周辺とくにP1に集中して検出された。床面は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻し、床面を形成していた。掘り方は南側で深い。周溝は南東隅に一部認められた。ピットは3基確認され、P1・2は柱穴と判断され、断面のあり方から柱が本址中央に向つてい

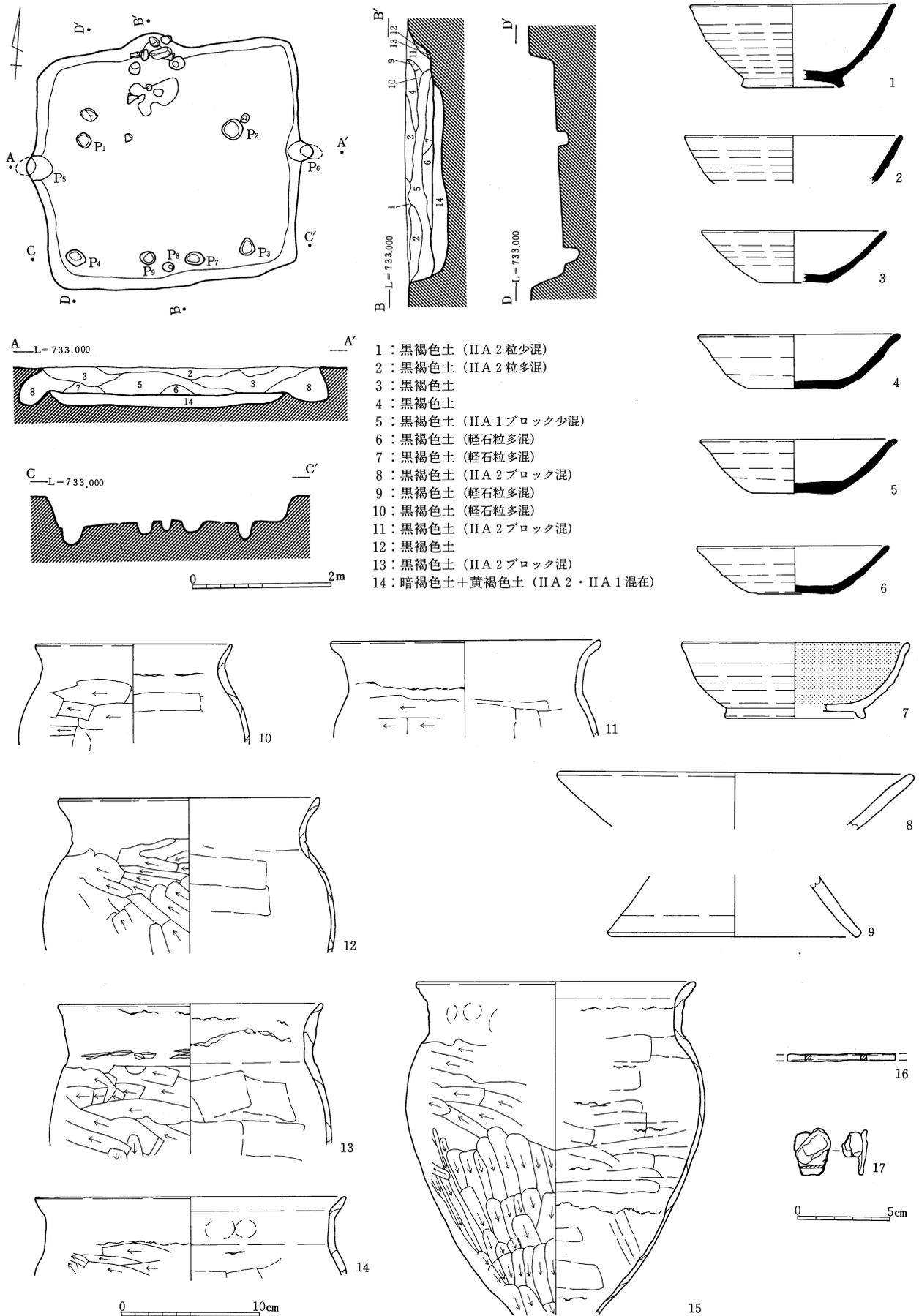


图41 21号住居址

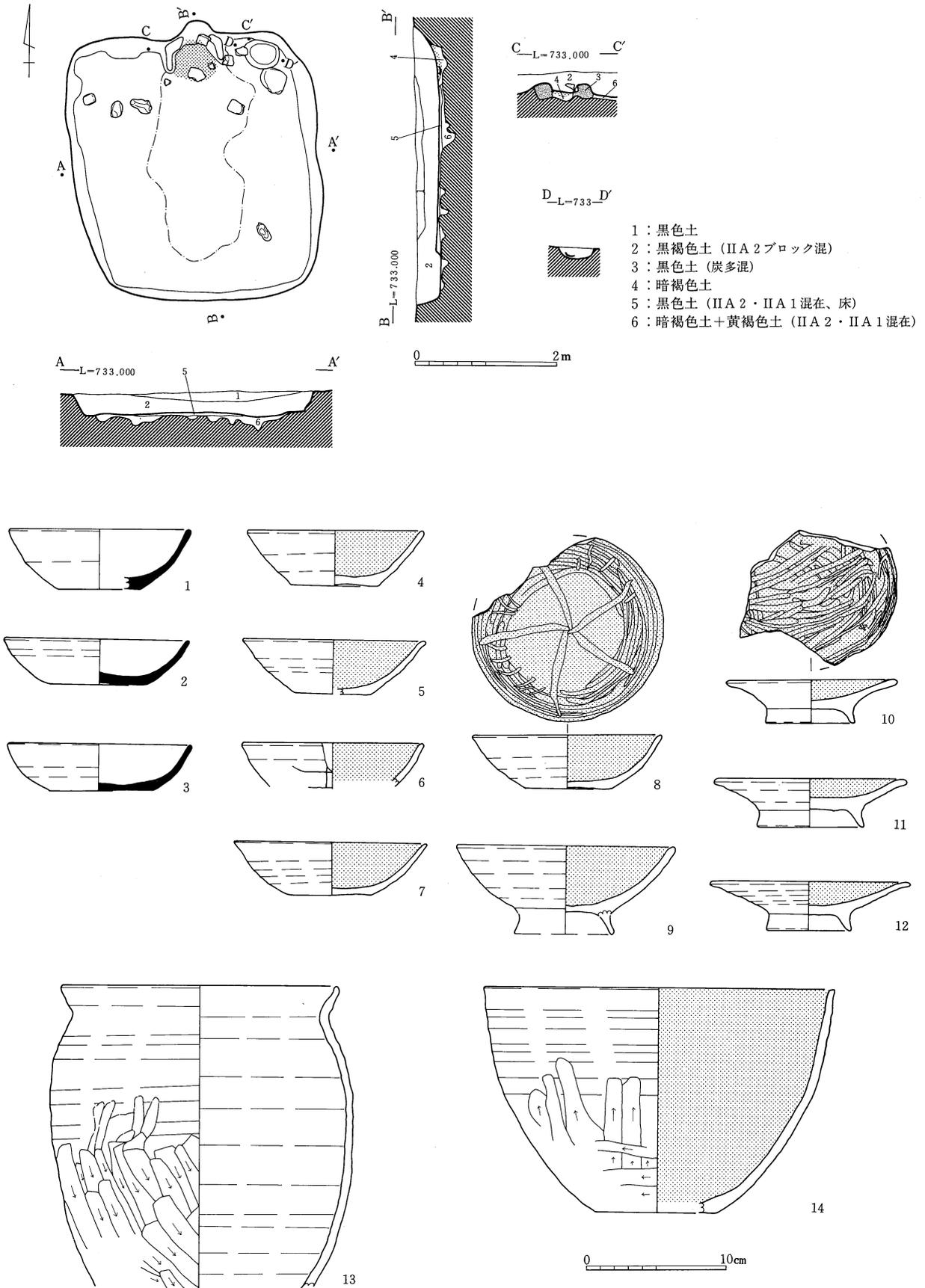


図42 22号住居址

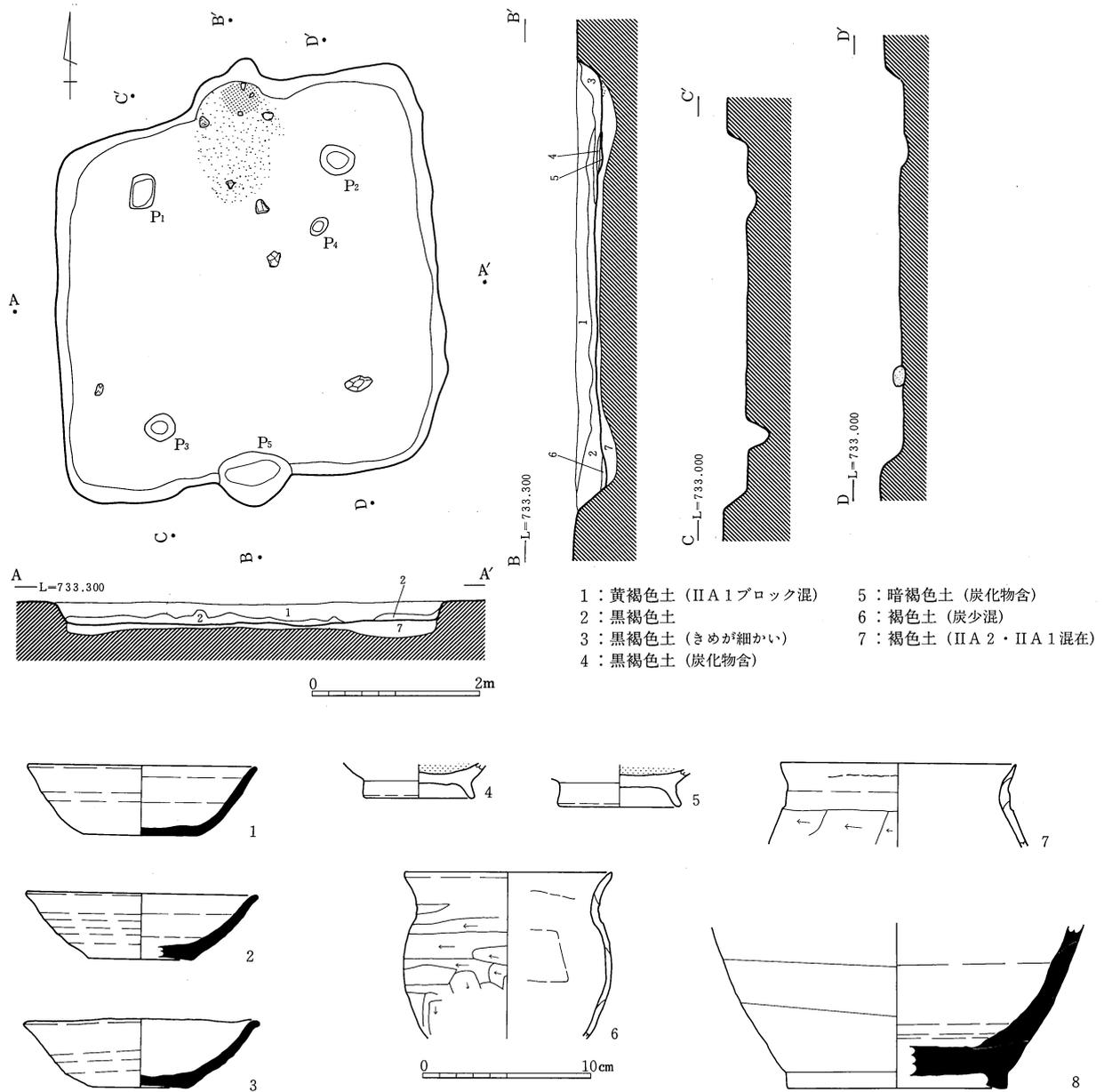


図43 23号住居址

たのが観察される。カマドは遺存状況が悪く、明褐色土の構築材による両袖の残りが検出された。火床北端に小ピット2つが認められ支脚石の抜き取り痕を想定させる

遺物 遺物の全体量は、須恵器坏9以上(1~4)・甕1・広口甕1(14)・長頸瓶1(13)、土師器甕1(11)・内面黒色坏7(5・6)・碗2(7・8)・皿2(9・10)・坏碗不明5以上・大形盤1(12) 個体分が出土した。金属器は刀子1(15)が出土している。3は文字不明の墨書が、8には「忠」、9には「天」が書されている。12は21号住居址の8・9と同一個体と思われ、13は45号住居址と接合している。

時期 8段階頃と思われる。

25号住居址 本址は土坑789に変更後、更に特殊遺構5に変更

26号住居址 本址は特殊遺構6に変更

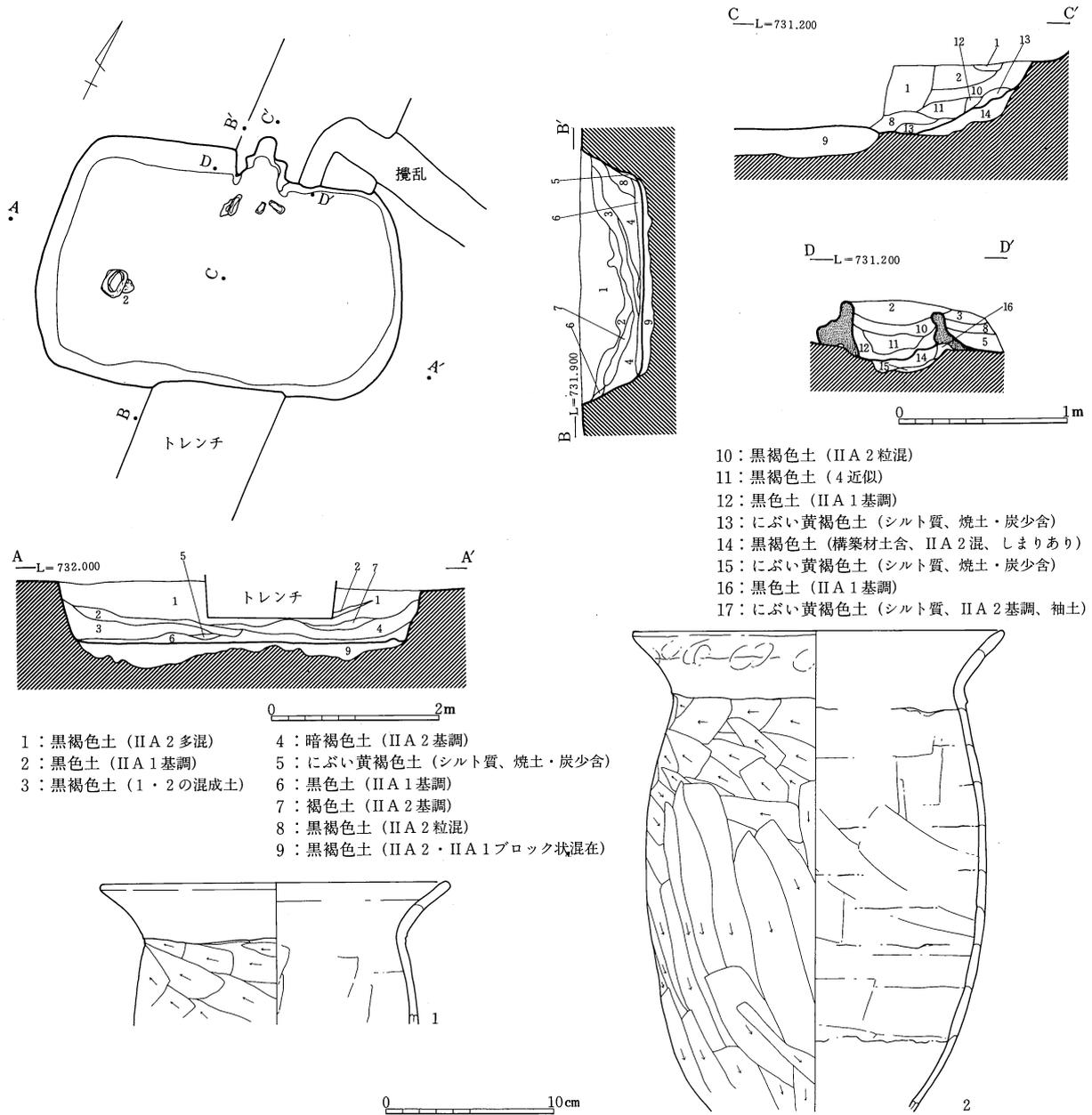


図45 27号住居址

27号住居址 (図45、PL162・200)

IIA 1層で検出された。トレンチ、暗渠により部分的に破壊されていた。覆土はIIA 2ブロック混じりの黒褐色土が主体で人為埋没と思われる。遺物は床面にほぼ完形の土師器甕(2)が出土し、口縁部を巻くようにカマド構築材が付着していた。カマド煙道部に利用されたものと判断されよう。床は荒ぼり後、IIA 2ブロックの混入した黒褐色土を埋め戻し、平坦にし、床面を形成する。全体にさほど堅緻ではなかった。カマドは箱形に張り出し、明褐色土の構築材によって燃焼部内側と袖部を構成している。

遺物 土器は1・2の土器のみである。

時期 1段階頃と思われる。

28号住居址 6号住居址に後述

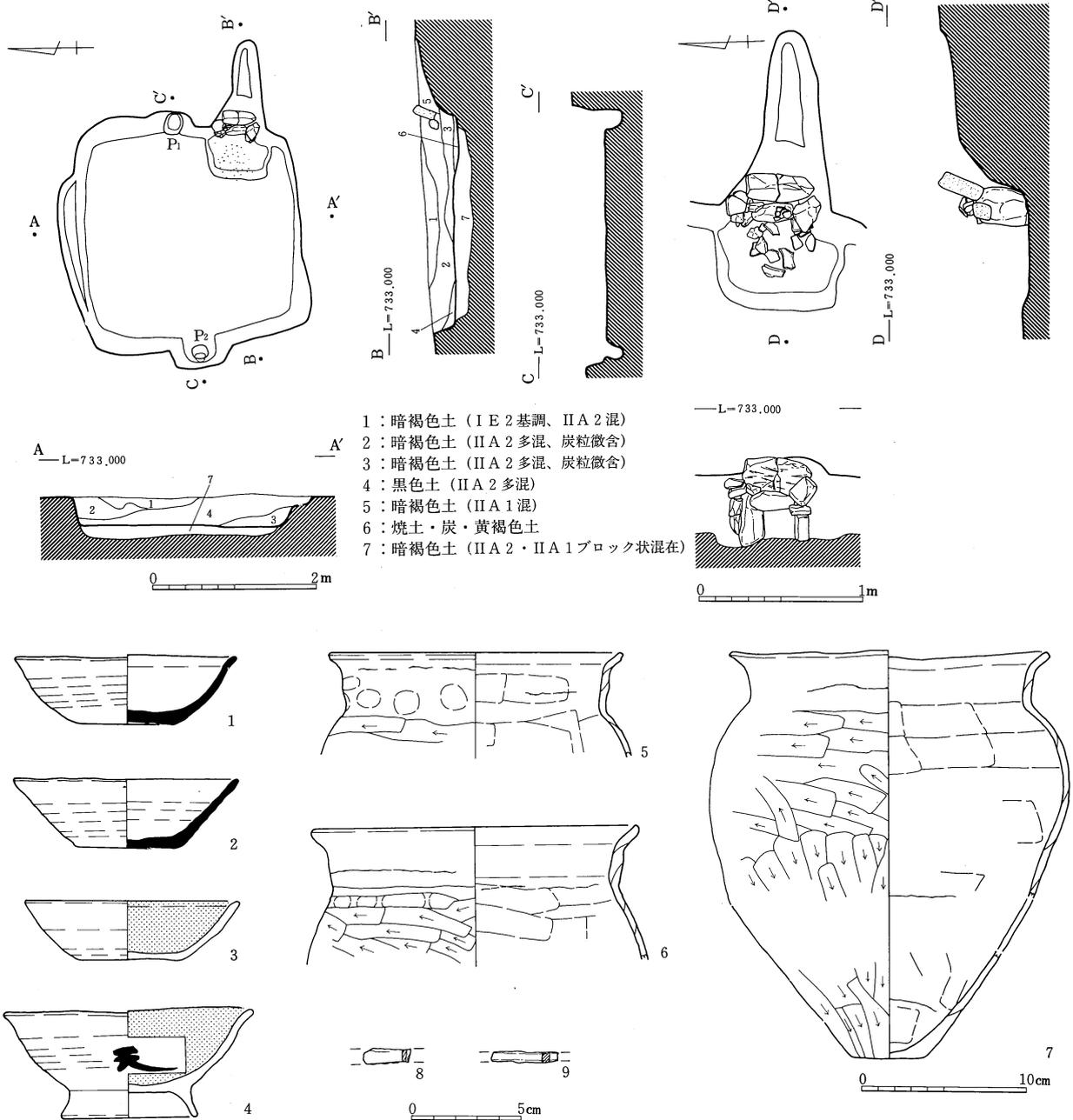


図46 29号住居址

29号住居址 (図46, PL162・211)

IIA 1層中で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、IIA 2ブロックを混入した黒褐色土を埋め戻し、その上面をたたきしめ、全体に平坦で堅緻であった。ピットは2基確認され、東壁・西壁中央に壁を穿つか、張り出させていることが観察された。両ピットとも柱穴と判断され断面観察から柱の向きは本址中央に傾くことが看取される。カマドは両袖部が破壊され、奥の壁際のみ石組が残存していた。燃烧部は床より一段下がるが明瞭な火床は認められなかった。なお、礫の隙間に構築材(粘土)などは認められなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器坏4 (1・2)・甕1、土師器甕3 (5~7)・内面黒色环3 (3)・碗1 (4) 個体分が出土している。金属器は棒状鉄製品2 (8・9)が出土している。5~6はカマド内から出土し、1~4は南東・北東隅から若干浮いて出土した。4には墨書「天」と書されている。

時期 8~9段階と思われる。

30号住居址 (図47、PL162・211)

II A 1層中で検出された。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面をそのまま利用し、小さな凹凸があるものの平坦で堅緻であった。ピットは5基確認され、P1が柱穴状を呈し、P2は浅く広いもので、P1・3・4は小ピット状である。柱穴ははっきりしないが、東壁西壁中央にある。P1・3が対応する支柱穴の可能性もある。カマドは構築材の明褐色土、礫が散見されたにすぎず火床部も明瞭でなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器坏11以上(1~4)・中形甕1、土師器甕4(15・16)・小形ロクロ甕1(17)、台付小形甕1・内面黒色坏13(5~11)・碗11(12~14)・碗坏不明7・皿1個体分、灰釉陶器碗1片が出土した。金属器は刀子1(18)が出土している。出土状況はそのほとんどが覆土中から出土し、坏類は内面黒色坏碗類の割合が多い。2は「天」と思われる刻書で、4は「酉」、7・10は判読できないが相互に類似の字体、12は「兎」の墨書が書されている。

時期 9段階頃と思われる。

31号住居址 (図48・49、PL162・212・255)

II A 1層で検出された。西側上部をトレンチにより消失した。本址床下には41号住居址が存在することから41号住居址の拡張住居址と判断される。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。床は41号住居址をII A 2ブロック混じりの黒褐色土で埋め、その上面をたたきしめ、全体に平坦で堅緻ある。カマドは袖石の抜き取り痕と思われるピットが両袖部に対を成して4穴認められた。火床部は床面よりやや窪んでいた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏10以上(2~4)・蓋2(1)・甕2(13)、土師器甕5以上(8~12)・内面黒色坏4以上(5・6)・皿1(7)・高坏1個体分が出土し、金属器は刀子1(14)・棒状の鉄製品1(15)、石製品は砥石1(10)個が出土した。覆土中遺物は3層以下に多く出土し、大形破片はおもに床面近くやカマド内から出土した。7には「肖・光」の墨書が書されている。3は内底部が摩耗していることから転用硯の可能性もある。

時期 6~7段階頃と思われる。(7段階が中心)

32号住居址 6・28号住居址に後述

41号住居址 (図50、PL164・212)

31号住居址床下で検出された。31号住居址内に全体が納まる。覆土は31号住居址構築に際した埋土がある。床は荒ぼり後、II A 2ブロックが混入した黒褐色土を埋め戻し、その上面を床面として利用したもので、やや軟弱で凹凸がある。カマドは焼土の分布が認められたにすぎず、31号住居址に破壊されたと思われる。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器坏10(3~6)・蓋2(1・2)、土師器甕2(9)・内面黒色坏6(7・8)が出土している。その他器種不明の土製品1点がカマドを中心にその付近から出土した。

時期 5段階頃と思われる。

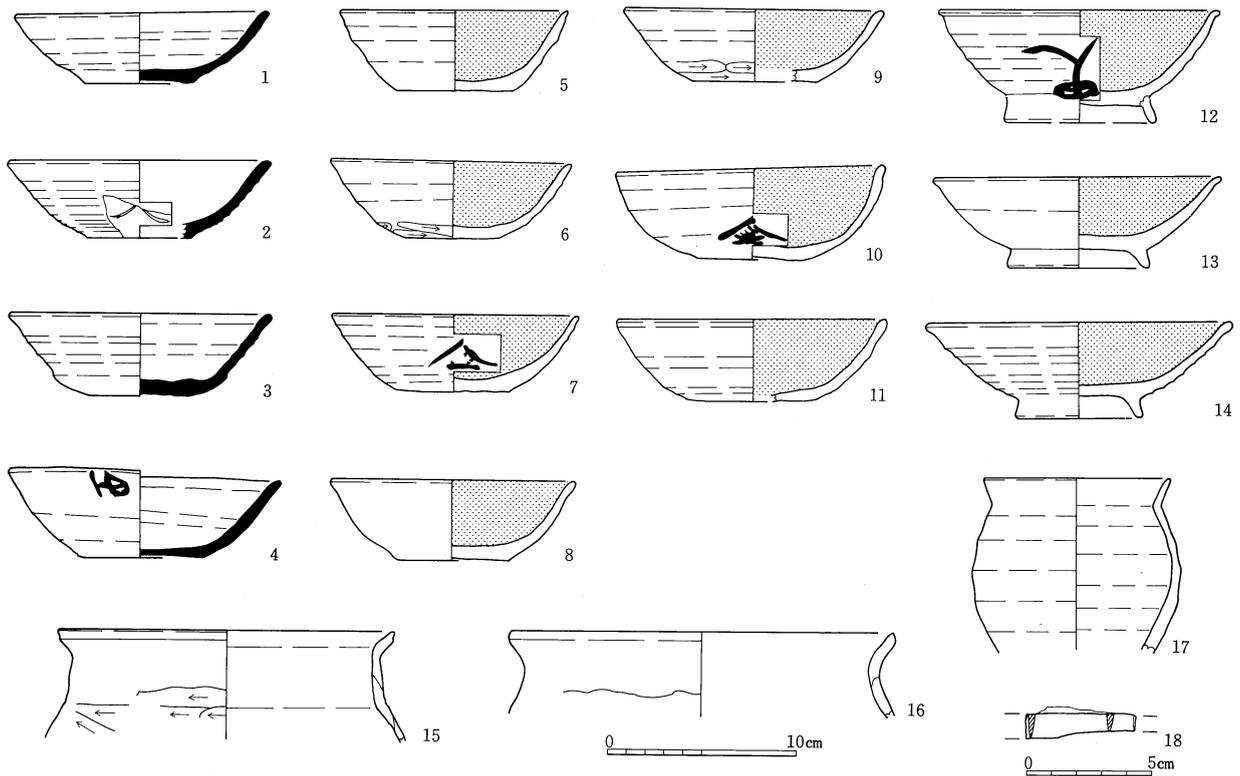
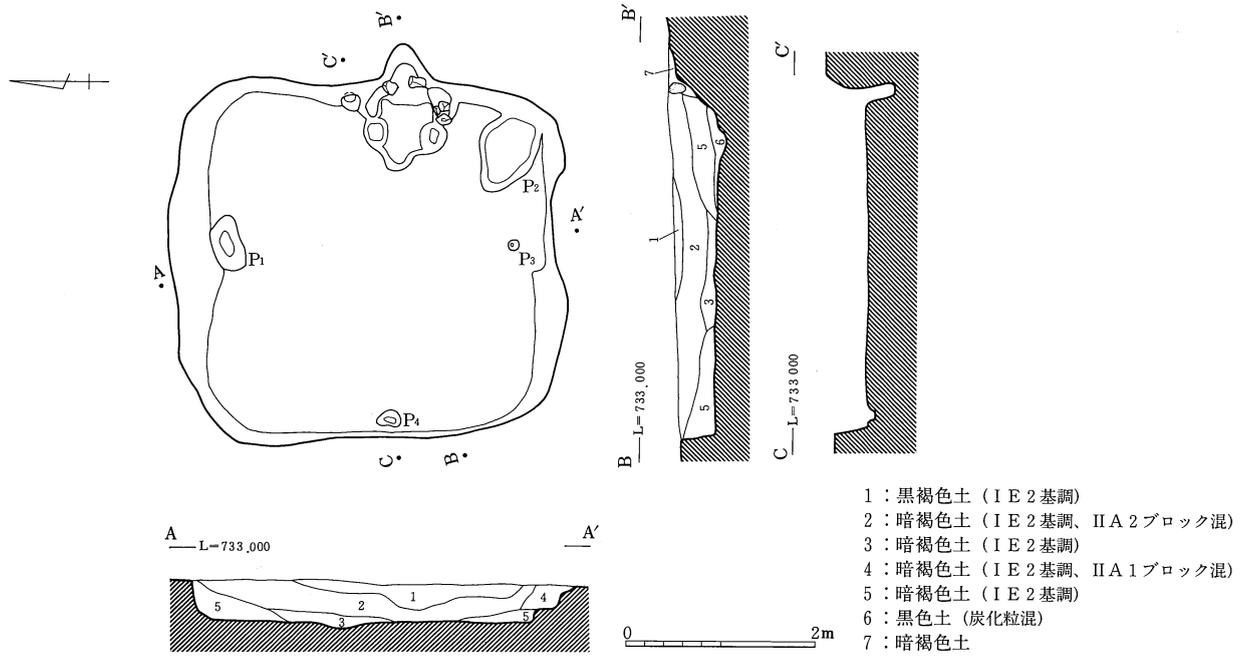


図47 30号住居址

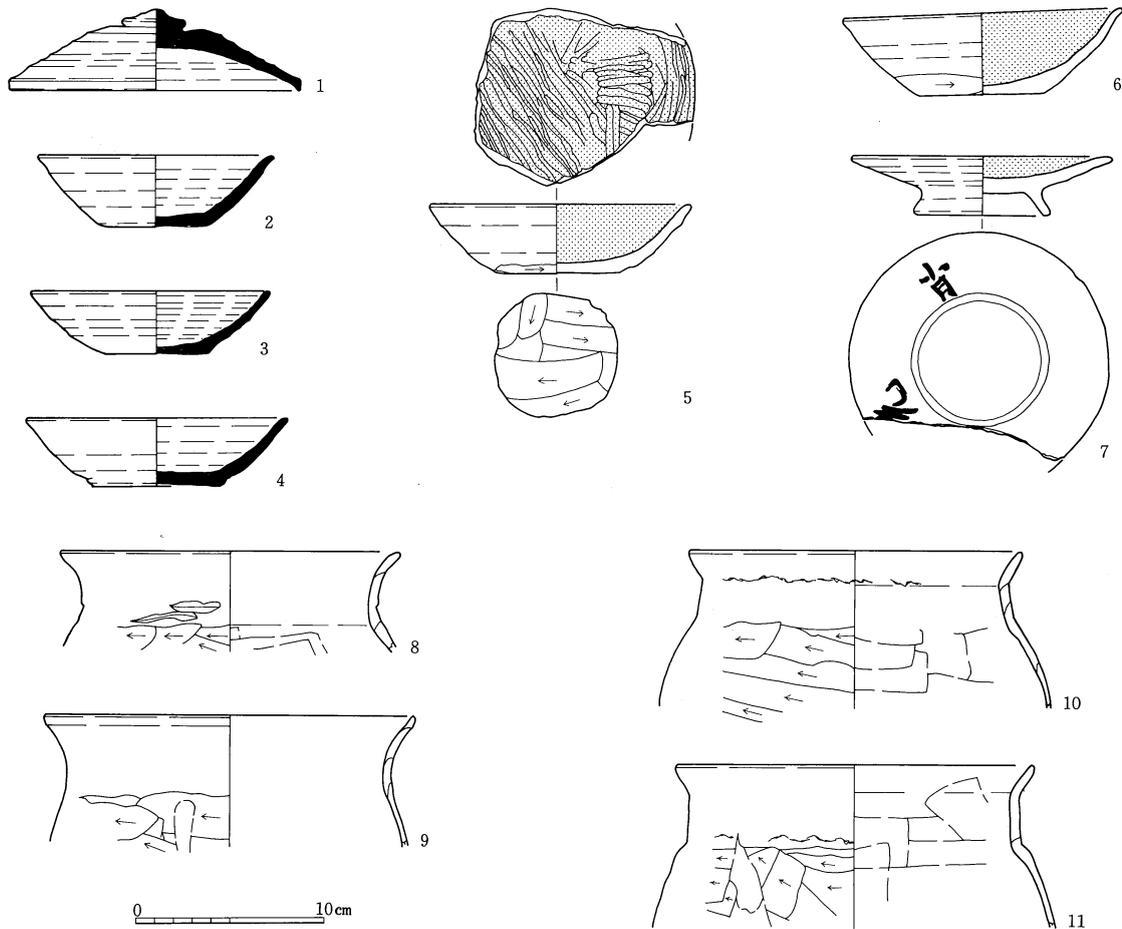
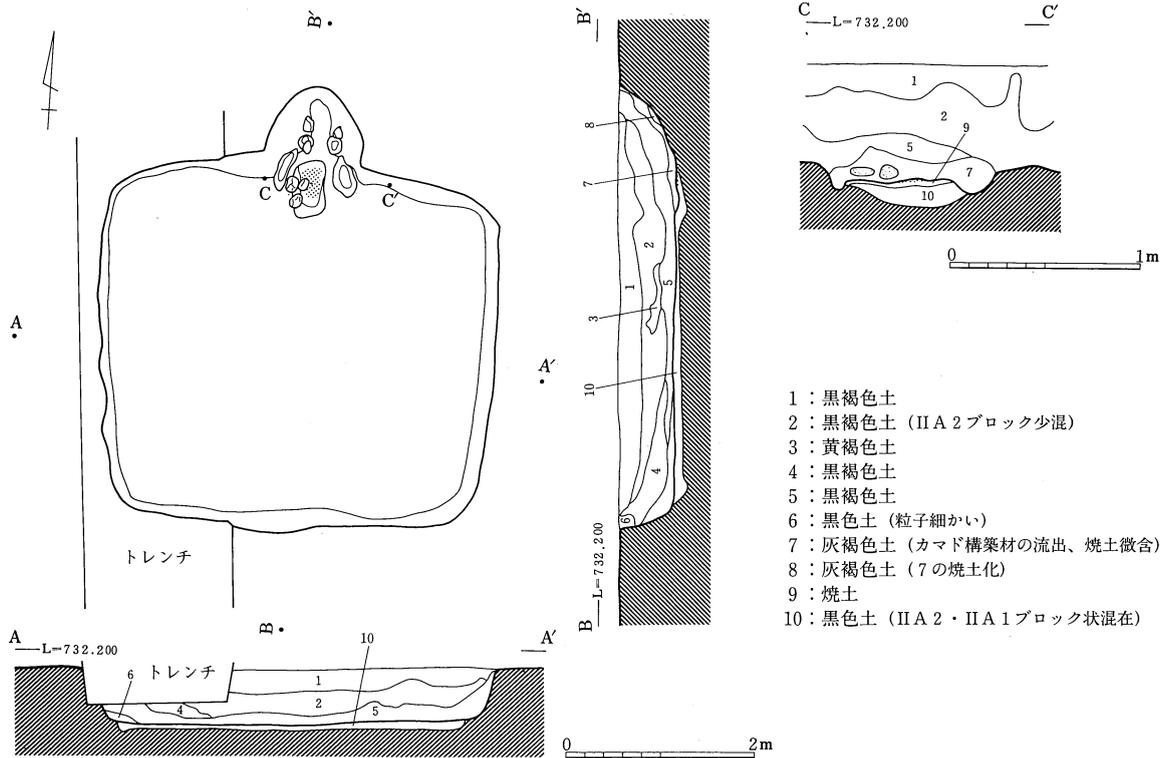


図48 31号住居址 (1)

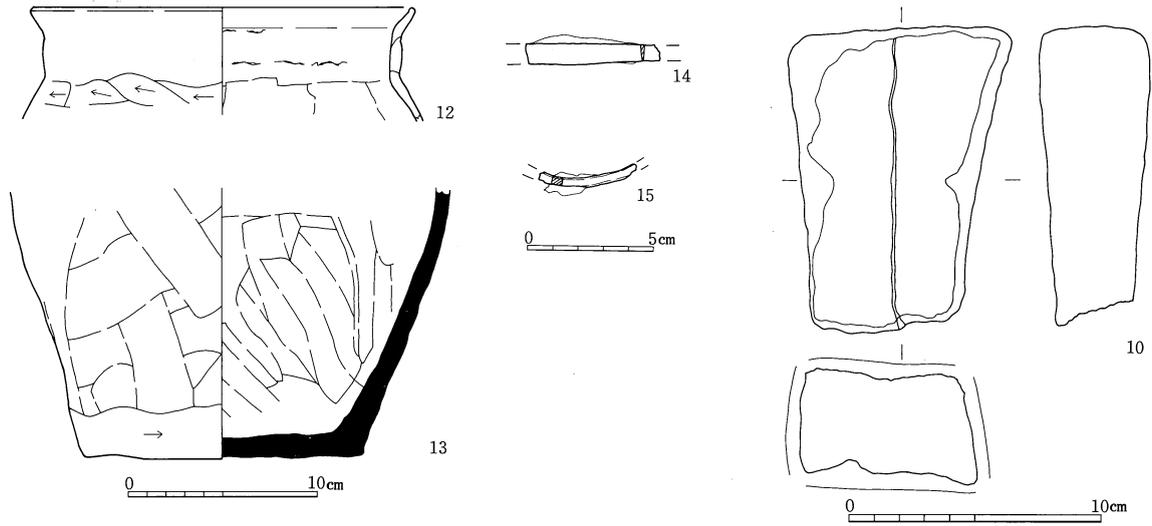
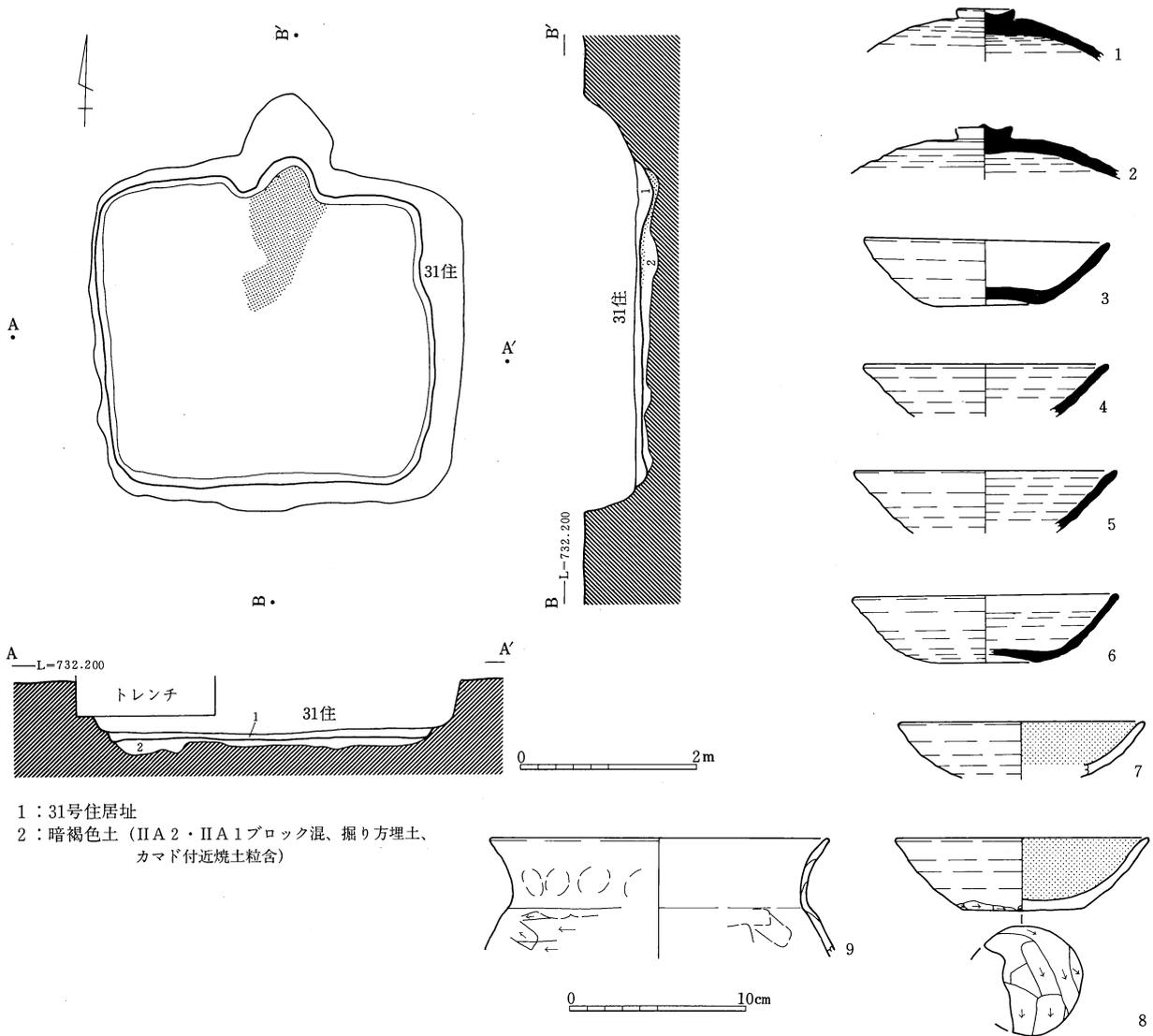


図49 31号住居址 (2)



- 1 : 31号住居址
- 2 : 暗褐色土 (IIA 2・IIA 1ブロック混、掘り方埋土、カマド付近焼土粒含)

図50 41号住居址

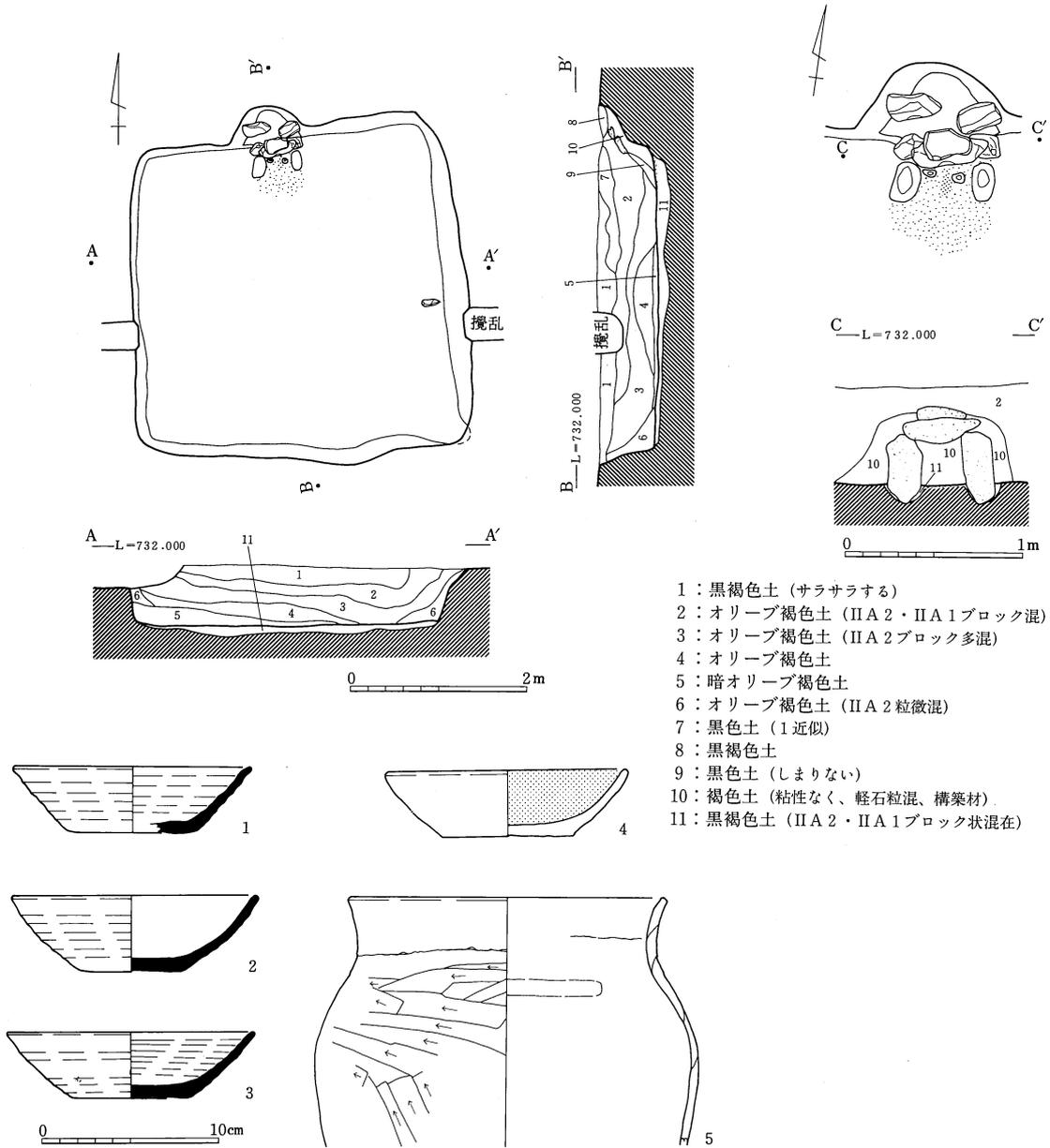


図51 33号住居址

33号住居址 (図51、PL162・163・212)

IIA 1層で検出された。覆土はIIA 2ブロックの混入したオリーブ褐色土を主体とするところから、人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、IIA 2ブロックを混入した黒褐色土を埋め戻し、上面をたたきしめ床面を形成する。カマドは壁面に天井石をともなった石組が原位置を留めていた。両袖部には袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出され、その間に支脚石の抜き取り痕と思われる2つの小ピットが認められた。礎の隙間には明褐色の粘質土が若干みられた。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。須恵器坏3以上(1~3)・甕1片、土師器甕2(5)・内面黒色坏2(4)個体分が出土している。1~3は床面から、4・5はカマド内から出土した。

時期 5段階頃と思われる。

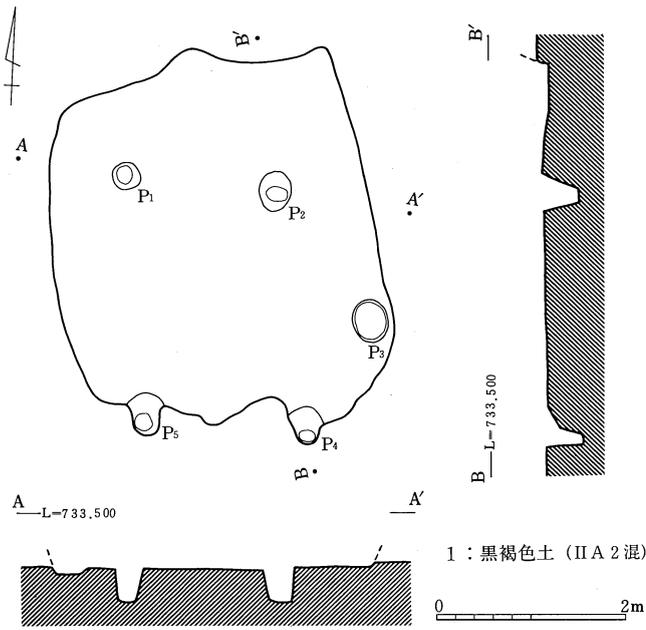


図52 34号住居址

34号住居址 (図52、PL163)

II A 1層で検出された。1号畑址を切る。覆土は浅く、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を主体とし、底の凹凸が激しいことから、掘り方埋土と判断される。南東隅に床面らしき高まりが確認されているが、定かではない。ピットは5基確認され、P1・2・4・5は柱穴と判断される。
遺物 検出が悪く遺物の出土量はわずかである。須恵器坏1片、土師器甕1・ロクロ小形甕1・内面黒色坏2個体分が出土した。

時期 9世紀中に比定される。

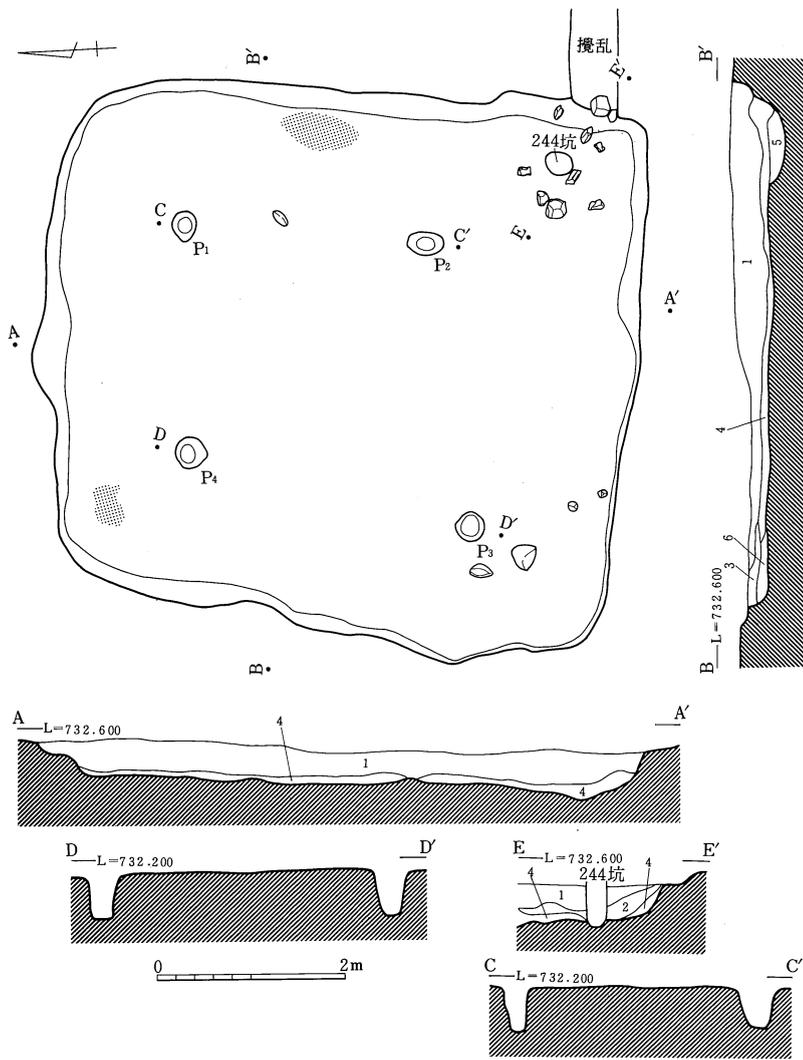
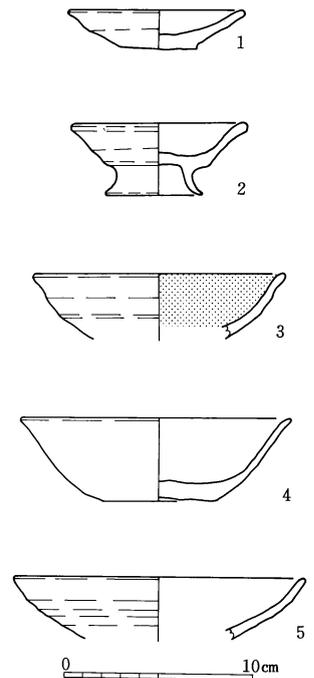


図53 35号住居址



35号住居址 (図53、PL163・212・261)

II A 1層で検出された。36号住居址を切り、244号土坑に切られる。36号住居址との前後関係は覆土の相違では困難であったため、床面のあり方で判断した。このため、西壁部の立ち上がりは確実ではない。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床面は掘り下げた地山面を利用したもので凹凸が激しく、全体に軟弱であった。カマドはそれと確実視できるものではなく、南東隅に面取りされた支脚石と小礫が散見されたのみであった。火床は認められなかった。炭化したイネが床面で出土した。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器甕1・長頸瓶2・壺瓶類1、土師器甕1・内面黒色坏1(3)・碗2、土師質坏1(4)・小碗1(2)・坏碗不明2(5)・小皿2(1)、灰釉陶器小片1個体分が出土した。土師質坏碗不明の中に、内外全面自然釉・銅粒が付着した器が1点あり、鍛冶炉などの中でかなりの高熱を受けたものと思われる。石製品として径2 cm大の基石状円礫が出土しているが、用途は不明である。

時期 15段階頃と思われる。

36号住居址 (図54、PL163・212・261)

II A 1層で検出された。35号住居址、244号土坑に切られる。覆土は黒色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土が埋め戻され、上面をたたきしめた床面である。ピットは3基確認され、P3はカマド前にあり柱穴とは考え難い。カマドは箱形に張り出し、張り出し部の壁面に軽石礫を配し、燃烧部を構成している。明瞭な火床は認められなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器高台坏1(2)・坏4・蓋1(1)・長頸瓶1、土師器甕8(6・7・8)・鉄鉢形鉢1(9)・内面黒色坏碗4以上(3~5)個体分が出土している。石製品は砥石1(11)が出土している。出土状況はカマドおよびP1周辺の礫とともに出土した。

時期 6段階頃と思われる。

37号住居址 (図55、PL163・212・213)

II A 1層で検出された。覆土はII A 2ブロックの混じった暗褐色土を主体とするところから人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻したたたきしめていた。ピットは7基確認され、P2がやや浅いものの、P2~4・6は柱穴と判断される。P5は南壁中央に位置し、浅いピット状の落ち込みをもっていた。カマドは右袖に石組が検出され、左袖は袖石の抜き取り痕が認められた。火床は床面よりやや下がって検出された。

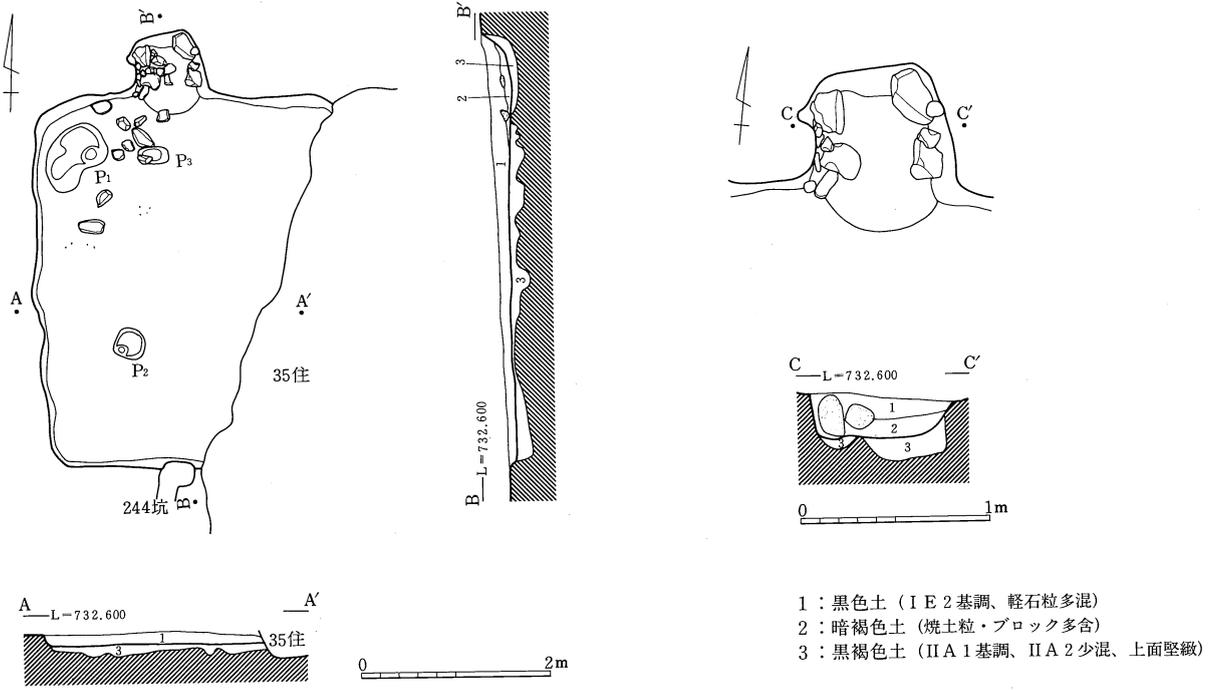
遺物 出土土器の全体量はわずかで、須恵器坏5以上(1~4)・甕1、土師器甕2・小形甕2・内面黒色坏碗2・皿2個体分が出土した。2・5はカマド内の礫とともに出土した。

時期 5段階頃と思われる。

38号住居址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述

39号住居址 (図56、PL163・200・201・225)

II A 1~II A 2層で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は北東隔壁際と北西壁際に床面上で集中して認められた。床面は掘り方底の上面に、ロームブロック混じりの黒褐色土を敷きつめ、堅緻にたたきしめたもので全体に平坦であった。周溝はカマド部をのぞいて幅5~10 cm、深さ10 cm前後で検出された。ピットは6基確認され、P2~4・6が柱穴と判断される。カマドは黄褐色土を構築材とした粘土カマドであった。支脚石は痕跡もなかった。出土遺物の大半は4方の壁際から出土し



- 1：黒色土（IE 2 基調、軽石粒多混）
- 2：暗褐色土（焼土粒・ブロック多含）
- 3：黒褐色土（IIA 1 基調、IIA 2 少混、上面堅緻）

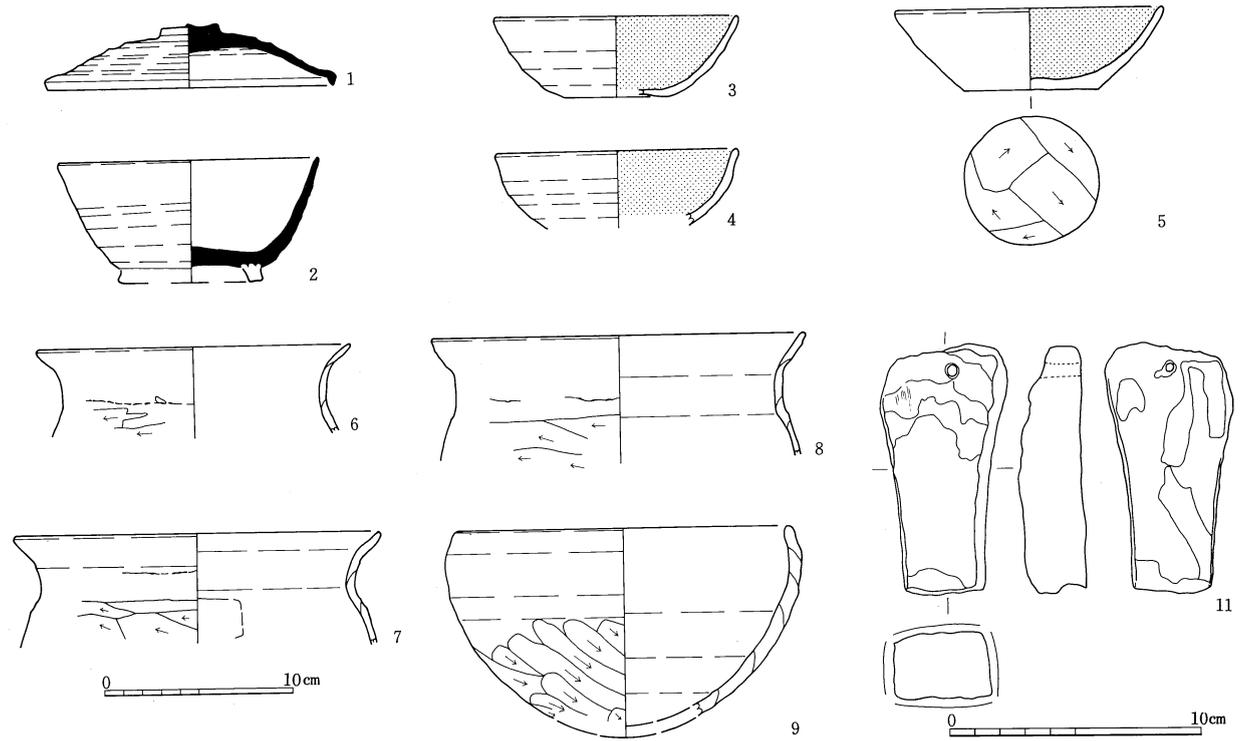


図54 36号住居址

た。

遺物 1・2は須恵器蓋、3・4は同坏、5は土師器坏、6は同高坏、7は同胴張り甕、8は刀子、9・10は釘。

時期 須恵器蓋、坏の形態から1段階に相当する。

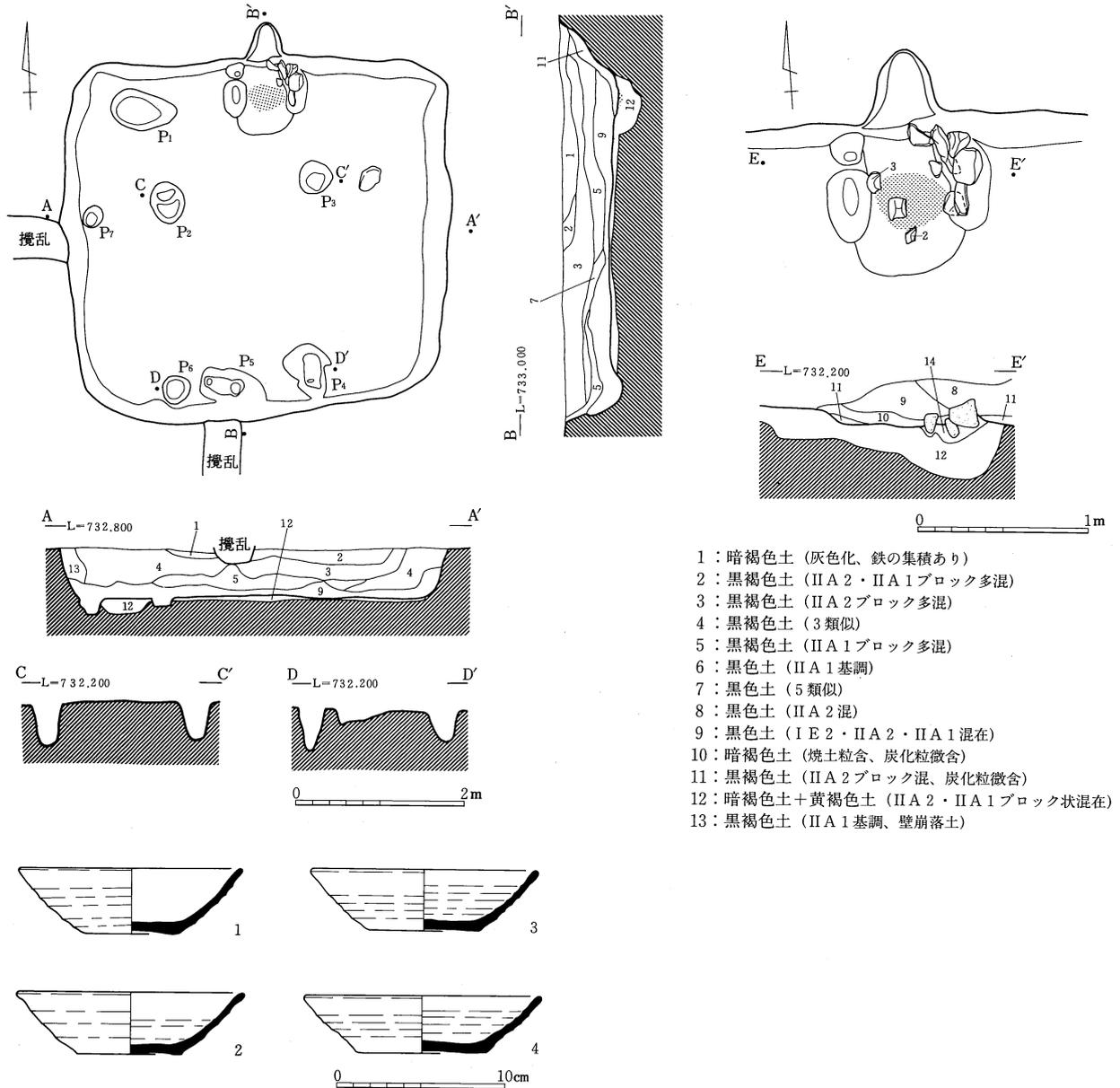


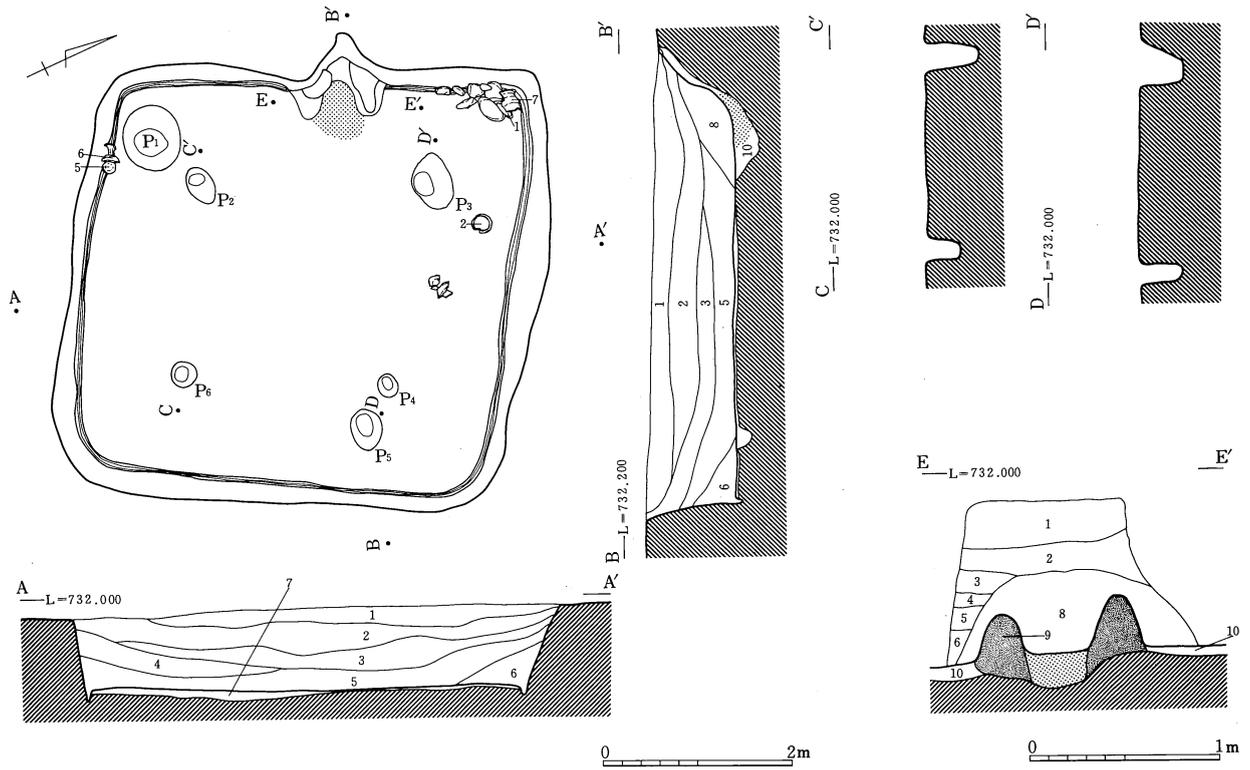
図55 37号住居址

40号住居址 (図57、PL163・213・225)

IIA 1層で検出された。南西隅はトレンチにより消失した。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面をそのまま利用し、あまり堅緻ではない。ピットは3基確認されたが、その利用については不明である。西壁中央寄りに焼土の分布が認められたが、本地区内で西カマドを持つ住居址が検出されていないことから、カマドとの判断は難しい。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器坏18 (1~3)・甕1・小形甕1・ミニチュア長頸瓶1 (20)・短頸壺1 (21)、土師器甕1 (16)・小形甕1 (15)・ロクロ甕3 (18・19)・小形ロクロ甕1 (17)・内面黒色坏碗16以上 (4~7)・土師質坏1 (8)、灰釉陶器碗5 (9~13)・皿1 (14) 個体分が、金属器は刀子1 (22) が出土している。3・5は「奥」と思われる墨書が書されている。覆土内遺物が多く、1・3・6・7・16・21・22は床面・カマド・ピットから出土している。

時期 9段階と思われる。



- | | |
|----------------------------------|------------------------------------|
| 1：黒褐色土 (IIA 1 基調) | 6：暗褐色土 (IIA 1 基調) |
| 2：にぶい黄褐色土 (IIA 1 基調、IIA 2 ブロック混) | 7：黒褐色土 (IIA 2 ブロック混) |
| 3：黄褐色土 (IIA 1・IIA 2 混在) | 8：にぶい褐色土 (IIA 1・IIA 2 混在、下部に焼土・炭含) |
| 4：暗褐色土 (IIA 1 多・IIA 2 少混在) | 9：灰黄褐色土 (IIA 2 基調、袖土) |
| 5：暗褐色土 (IIA 1 基調、IIA 2 ブロック混) | 10：暗褐色土 (IIA 1・焼土・炭・灰の混成土) |

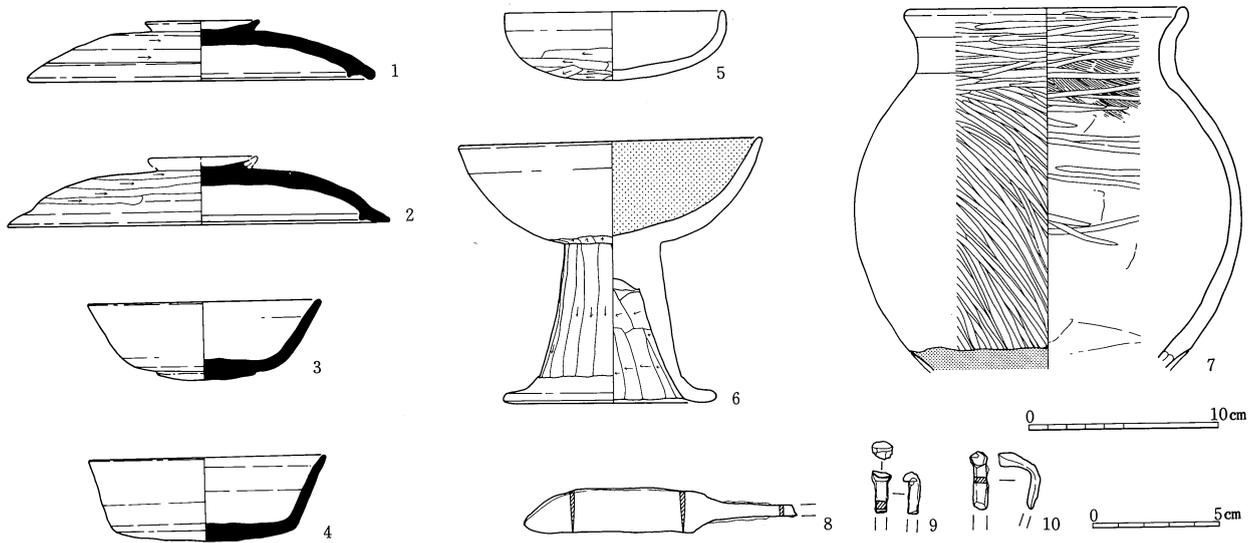


図56 39号住居址

41号住居址 31号住居址に後述

42号住居址 11号住居址に後述

43号住居址 10号住居址に後述

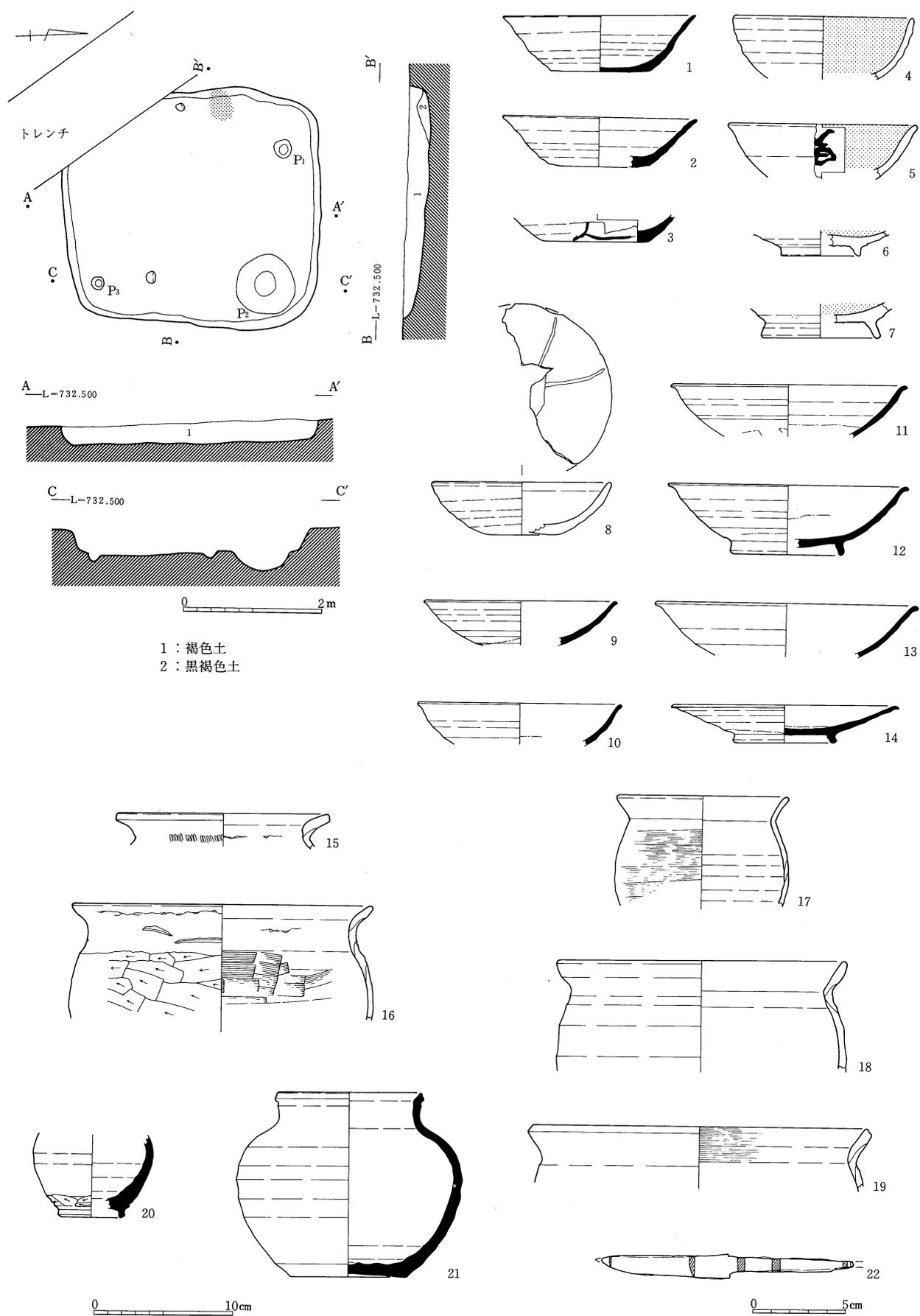


图57 40号住居址

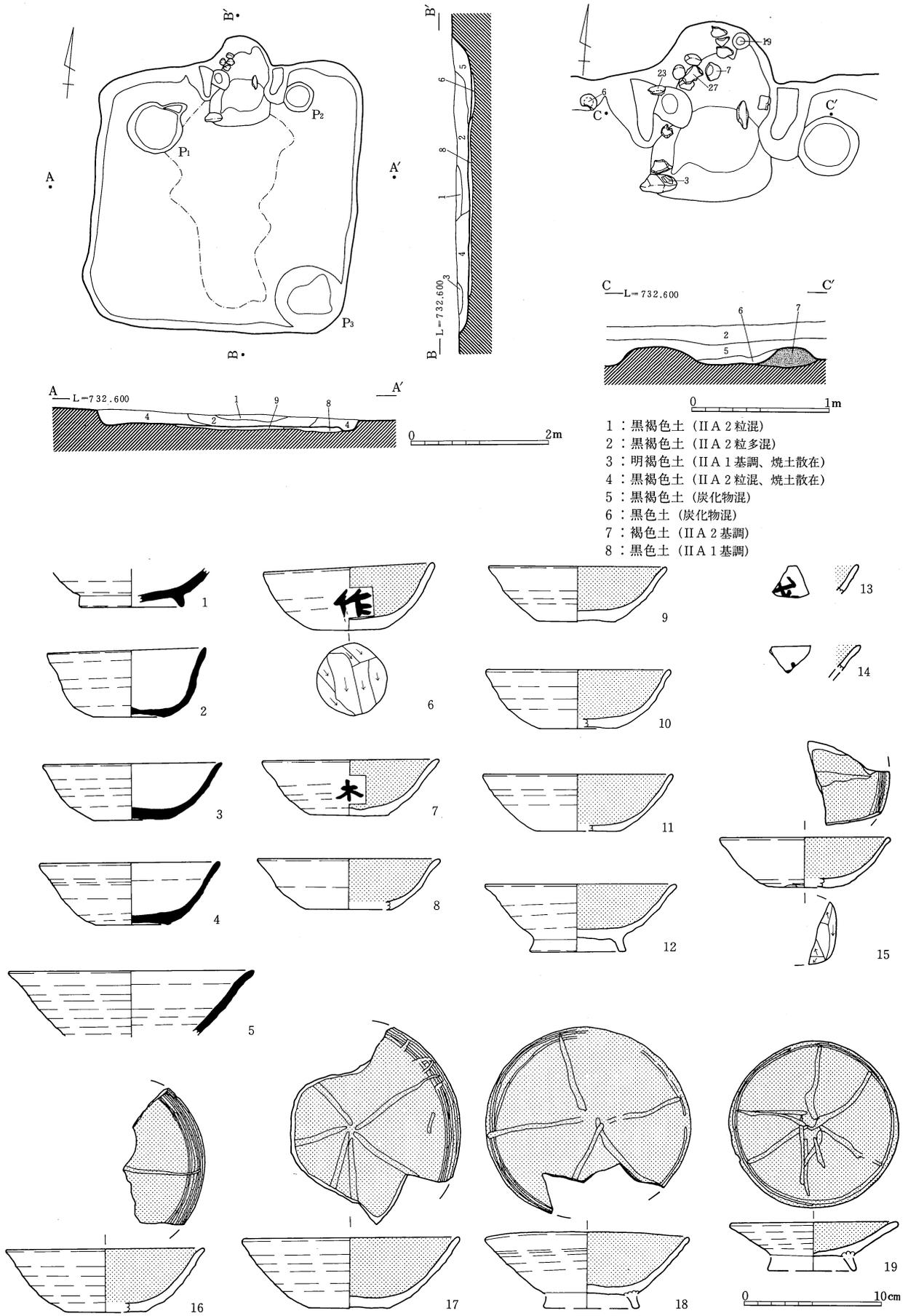


図58 44号住居址 (1)

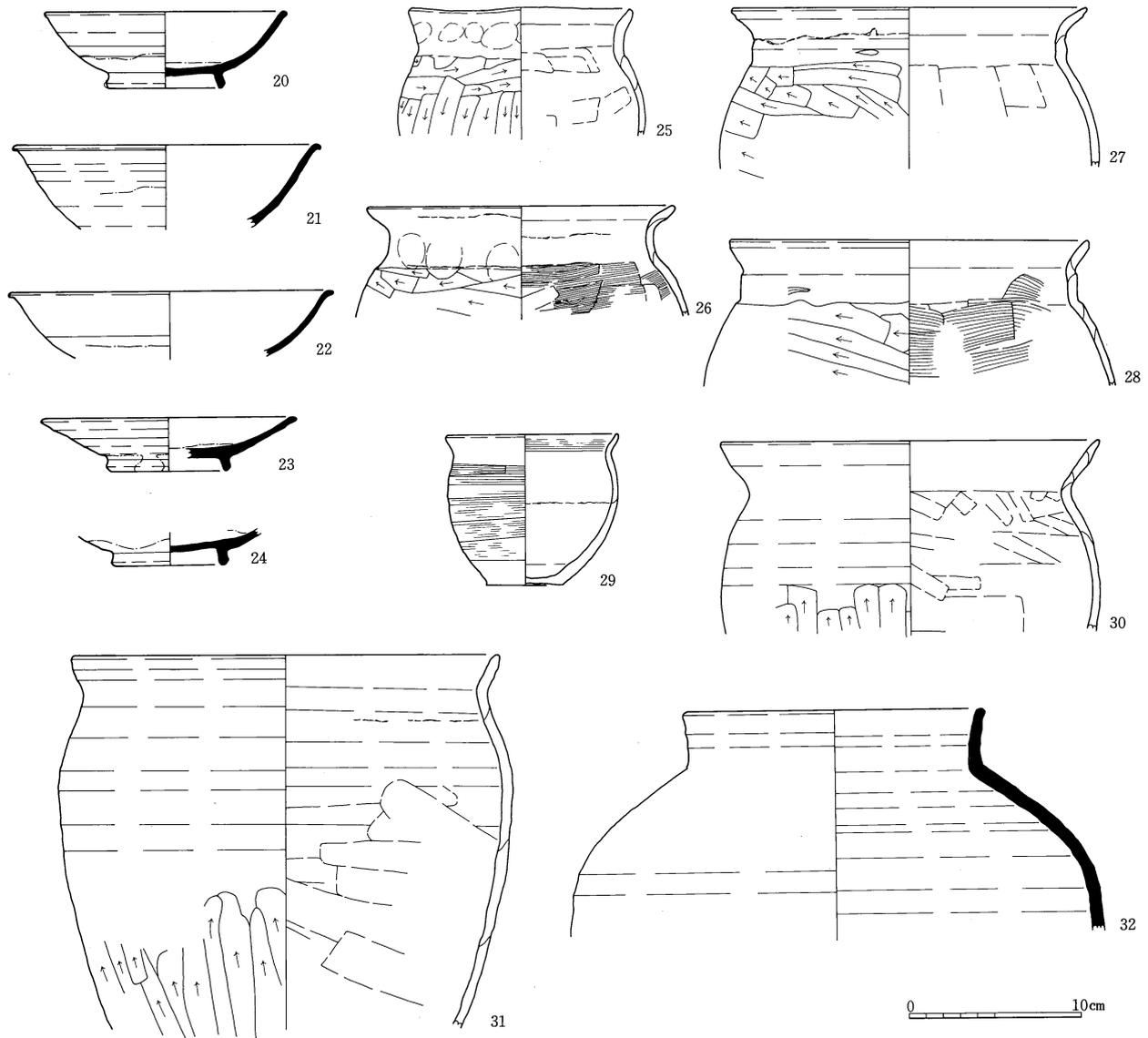


図59 44号住居址（2）

44号住居址 (図58・59、PL164・213)

II A 2層上面で検出された。当初、II A 1層上面での検出ではプラン確定に至らず、検出面での遺物が散見された状況であった。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、一部に薄くII A 2ブロックの混入する黒褐色土を埋め戻し平坦に床面をととのえたものである。このため部分的に地山が床面となる。カマドから中央部にかけてが特に堅緻であった。ピットは3基確認され、P1は炭化物を含んだ覆土であった。カマドは両袖と一部礫が残存し、燃烧部内から北西方向にかけて焼土の分布が認められた。左袖は地山の掘りのこし、右袖はII A 2ブロック混じりの黒褐色土を構築材として利用していた。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器高台坏1(1)・坏11以上(2~5)・甕1・短頸壺1(32)、土師器甕3(26~28)・小形甕1(25)・ロクロ甕2(30・31)・ロクロ小形甕1(29)・内面黒色坏18(6~11・15~17)・碗4(12・18)・坏碗不明2(13・14)・皿1(19)、灰釉陶器碗3(20~22)・皿1(23)・碗皿不明1(24) 個体分が出土した。その多くはカマドおよびその周辺からである。カマド部分で浮いたものはカマド石とともに出土している。6は「作」・7は「木」、13・14は文字不明の墨書が書されている。

時期 本址は9段階に相当する。

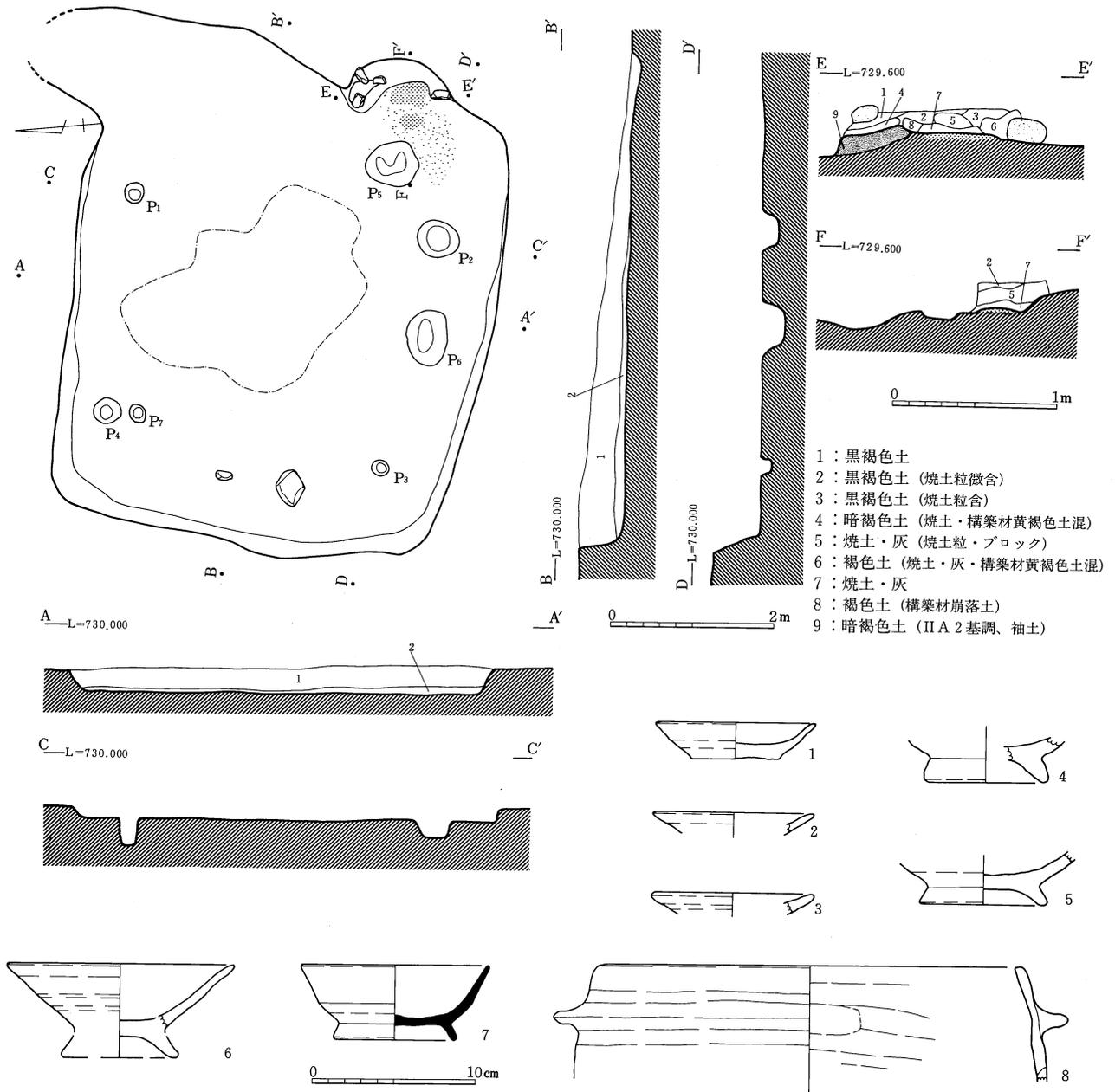


図60 101号住居址

45号住居址 12号住居址に後述

101号住居址 (図60、PL164・214)

IV層中で検出された。検出面でカマド袖石が露出していた。覆土は床面上に焼土・炭を多混入する黒褐色土が認められるが、おおむね暗褐色土を主体とする自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面を床面とし、中央部が堅緻で平坦であった。斜面に構築されているため壁は東壁で浅い。ピットは6基確認された。P1～4が支柱穴、P7が柱穴と判断される。カマドは火床の両脇に礫が6個確認され、部分的にそれらを覆うように灰色粘質土がみとめられ、袖を形成している。火床は2か所認められ、西側の火床は炭層に覆われていることから旧火床と推察される。

遺物 出土土器の全体量は、土師器小形甕1・内面黒色坏小片1・皿小片1、土師質小皿6 (1～3)・坏3・碗8以上 (4～6)・羽釜2 (8)、灰釉陶器小碗1 (7) 個体分が出土した。

時期 14段階と思われる。

102号住居址 (図61、PL164・214・261)

III層中で検出された。カマドの袖石・焼土が露出していた。113号住居址、105・106号掘立柱建物址、521号土坑を切る。遺物はカマドを中心とした一帯に集中して見られた。掘り方は中央から東側にかけて浅くあり、床は黒褐色土の掘り方埋土と、地山をたたきしめたものとで構成され、全体に固く、中央部でやや盛り上がる。袖部に礫を配した石組カマドである。構築材として灰褐色土を利用し、袖部を形成する。礫を配したことが左袖のみに観察される。カマド前の床面上にカマドに利用されたと思われる礫が散在していた。カマド破壊後本址は廃絶したと思われる。カマド構築に際しては床面がそのまま利用され、掘り方は認められない。

遺物 出土遺物の全体量は、土師器甕3・ロクロ甕1(4)・内面黒色坏碗6以上(1~3)個体分が出土した。金属器は紡錘車の軸と思われる棒状鉄製品1(6)、石製品は砥石1(12)が出土している。これらの遺物のほとんどはカマド内およびその周囲から出土した。

時期 10段階頃の所産と思われる。

103号住居址 (図62、PL164・165・214)

III層中で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。掘り方は全体に浅く、床はおもに黒褐色土による貼床が施され、余り堅緻ではなく平坦である。カマドは袖・煙道部に礫を並べた石組カマドである。礫の隙間には黒褐色土が認められるが覆土との判別が難しく、構築材として捉え難かった。支脚石2本が検出された。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器高台坏1(1)・坏11以上(2~4)・甕2、土師器甕3(10)・小形甕1(9)、内面黒色坏5以上(5~7)・碗1(8)・坏碗不明3個体分が出土した。5には「天」とと思われる墨書が書かれる。2・8は覆土中、ほかはカマドおよび床面出土である。

時期 6段階頃と思われる。

104号住居址 (図63、PL165・214・225・226・261)

III層中で検出された。検出面で遺物が三転していた。覆土は淘汰のよい黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。掘り方は中央部で落ち込み、周辺は浅い。床はおもに黒褐色土の掘り方埋土をたたきしめた状態で若干凹凸が見られる。壁は南壁の一部で、掘り方の上に黒褐色土を貼った状況が認められる。柱穴は4基確認された。P1・2の周囲床面上に礫が集中して検出され、柱穴の補助材と推察される。P5・6は出入り口部にかかわるものと推察される。カマドは袖部・煙道部に礫を並べた石組カマドである。礫の配置は散在的で、カマド前に袖石に利用されたと思われる数個の礫が存在する。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(2)・坏6以上(3・4)・蓋2(1)・中形甕1・短頸壺1(9)・長頸瓶1、土師器甕5(6~8)・台付小形甕1・小形甕1(5)・内面黒色坏碗不明22個体分が出土した。金属器は鉄鏃1(10)・紡錘車1(11)、石製品は砥石1(13)が出土した。3は白色の緻密な胎土であることから搬入品と考えられる。

時期 6段階頃と思われる。

105号住居址 (図64・65、PL165・214・215・226・261)

IIA1~IIA2層上面で検出された。532号土坑を切る。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は住居内北側に偏って認められ、その半数は床面で得られている。床は荒ぼり後、黒褐色土を埋め戻しているが、あまり堅緻ではなかった。ピットは5基確認され、P1・3~5が柱穴と判断される。カ

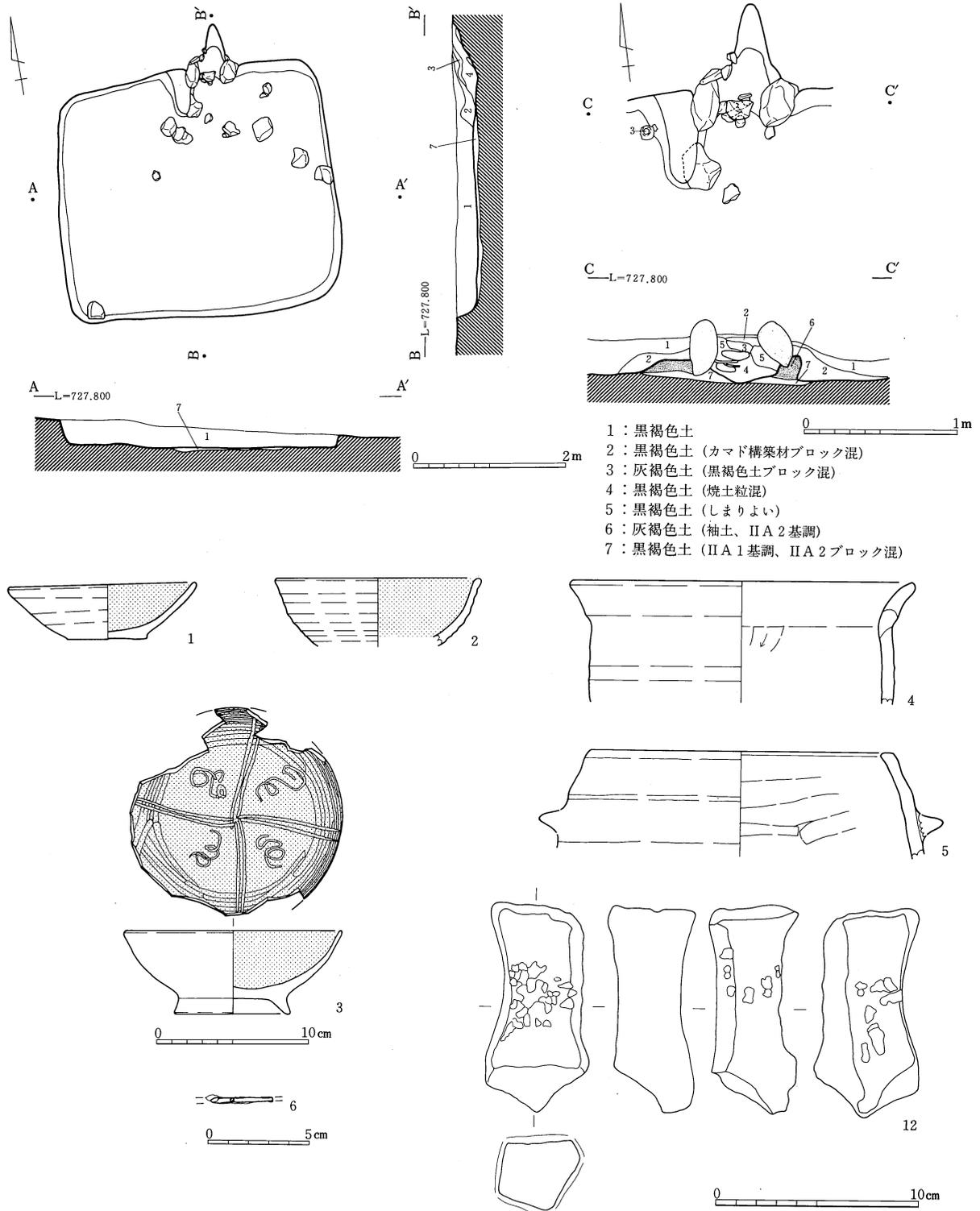


図61 102号住居址

マドは、袖部・煙道部に礫を並べた石組カマドで、礫の隙間には黒褐色土が認められたが、覆土との判別は出来ず構築材との判断は困難であった。支脚石痕は認められなかった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台杯 4 (2・3)・杯 29 (4~13)・蓋 2 (1)・四耳壺 1・長頸瓶 3 (25)、土師器甕 26 (19~24)・台付小形甕 2 (18)・内面黒色坏碗 (14~17)・皿 2、灰釉陶器広口瓶 1 (26) 個体分が出土した。金属器は刀子 4 (27・28・29・30)・鉄斧 1 (31)、石製品は石臼 1 (14)・砥石 1 (15) が出土している。出土遺物は器種・量ともに豊富であり P1・P2 からカマド側を中心に出土した。図化したものは床面およびカマ

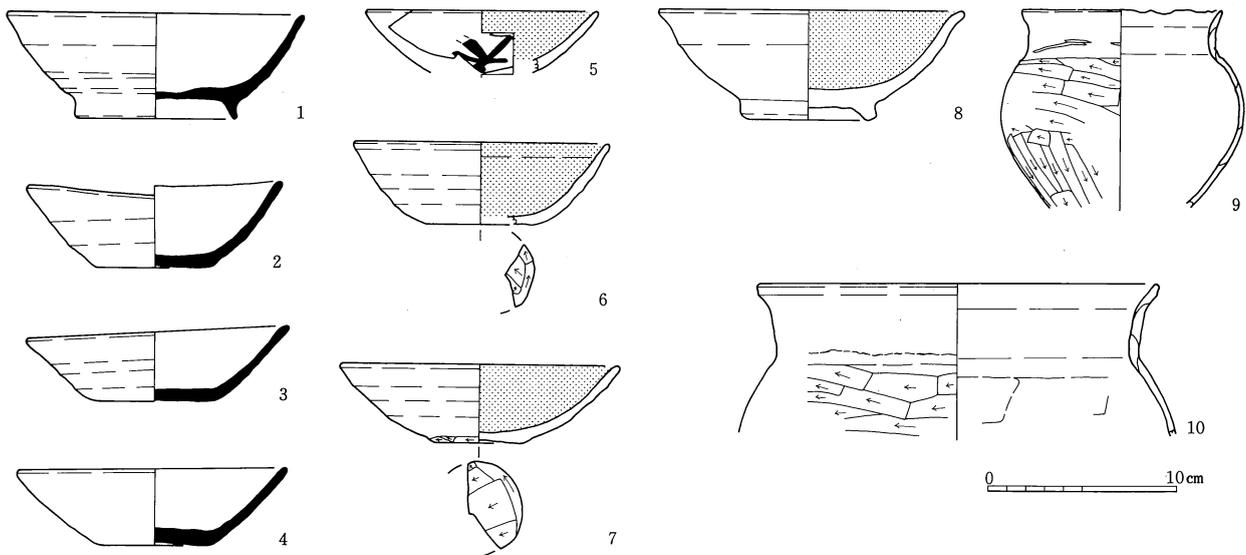
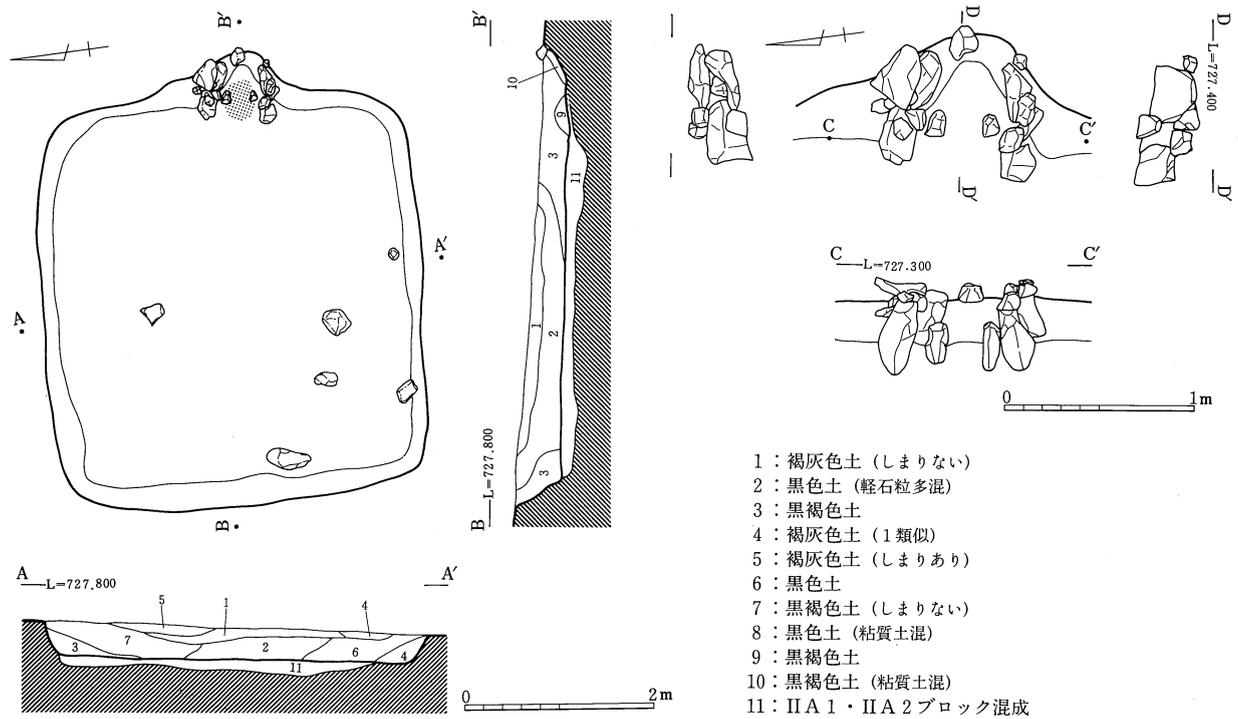


図62 103号住居址

ド内出土遺物が中心であるが、25の長頸瓶は完形で西壁際から若干浮いて出土した。27～31の鉄器類はP1・3内から出土した。13には「林」、16に「成」、17に「上林」の墨書が書され、3は「天」と思われる。28は片切刃造りの刀子である。

時期 7～8段階の所産と思われる。

106号住居址 (図66、PL165)

IIA 1～IIA 2層上面で検出された。109号掘立柱建物址を切る。覆土は暗褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、黒褐色土を浅く埋め戻したものであった。全体に平坦で、柱穴に囲まれた中

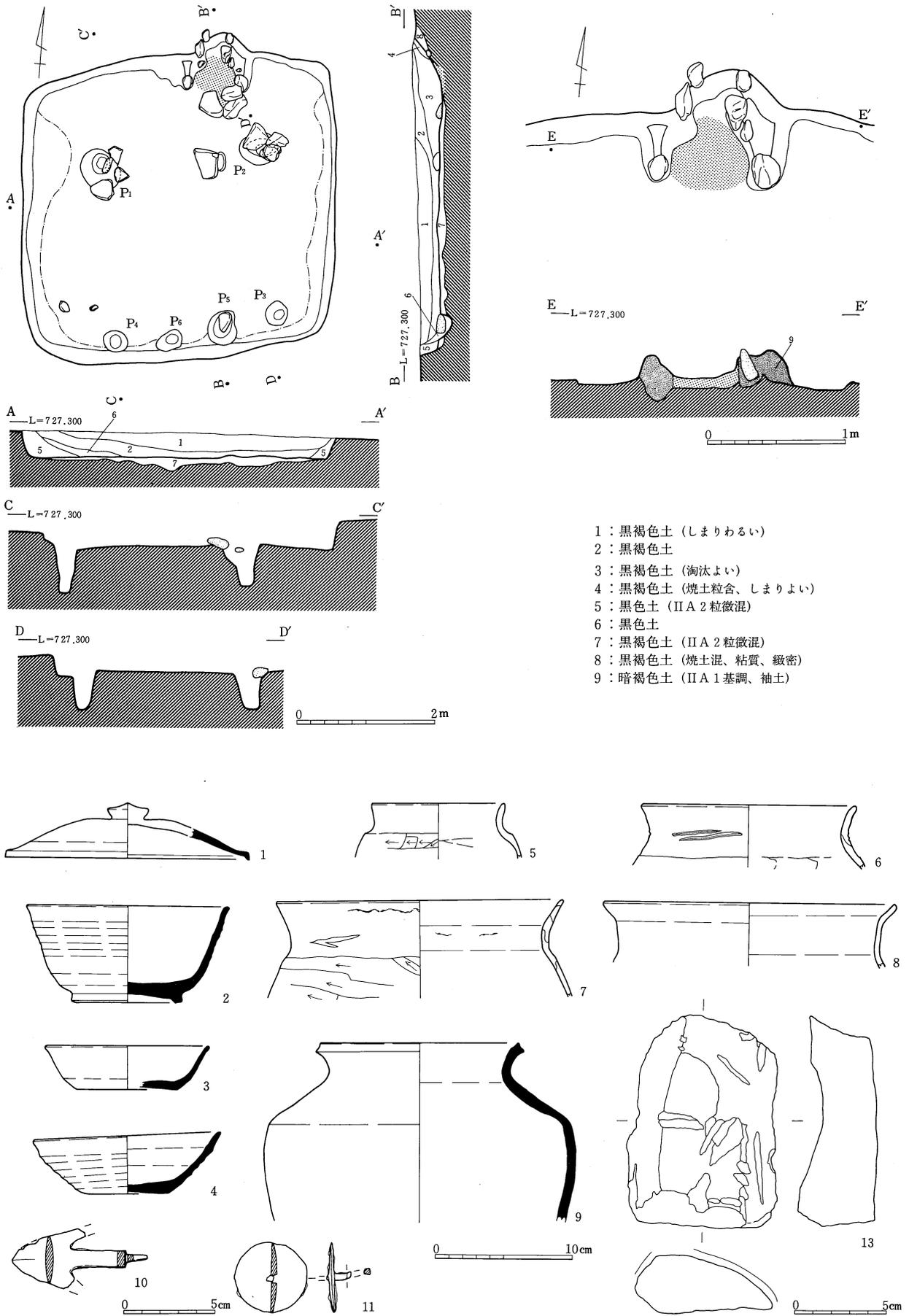


図63 104号住居址

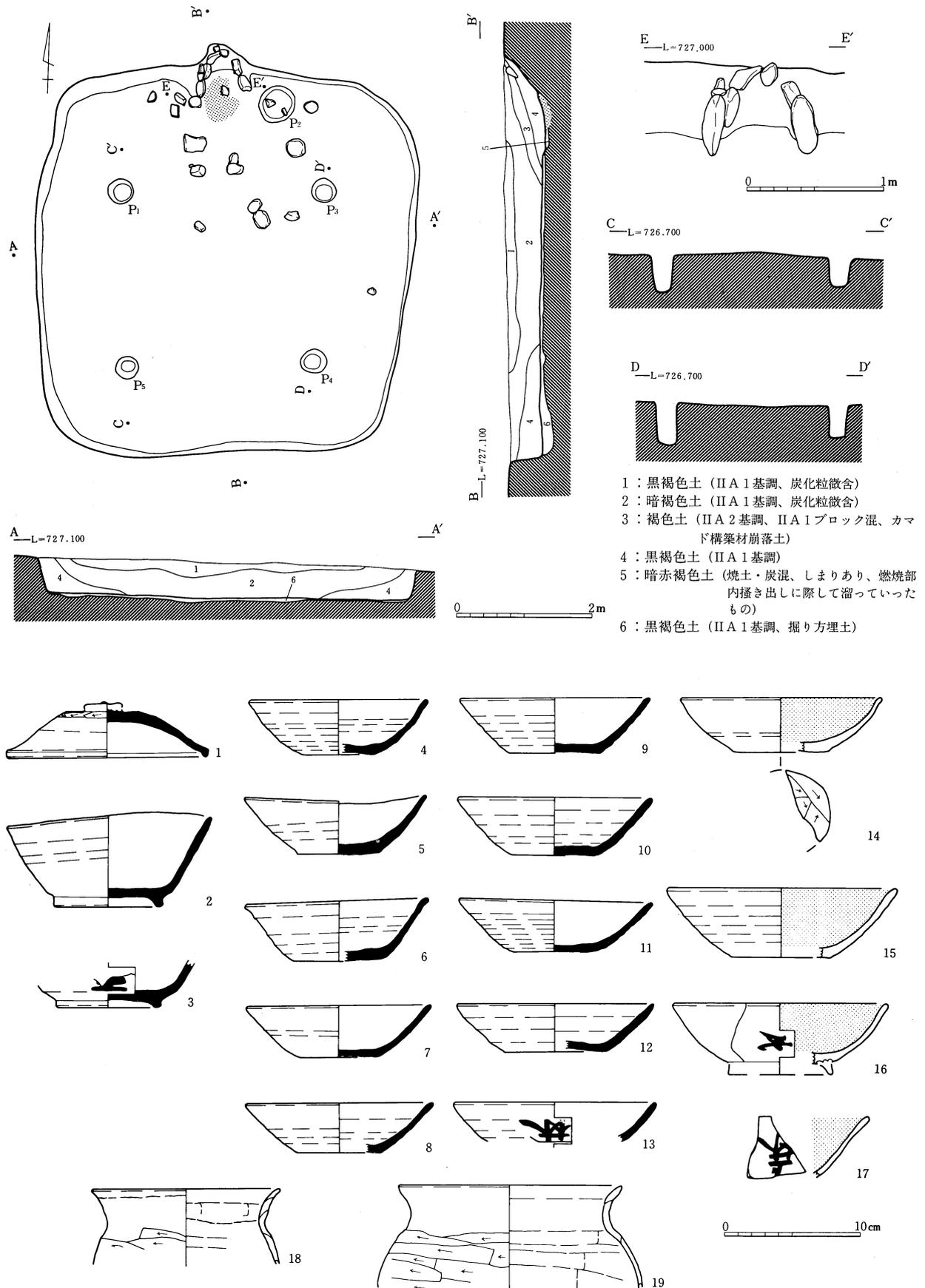


图64 105号住居址 (1)

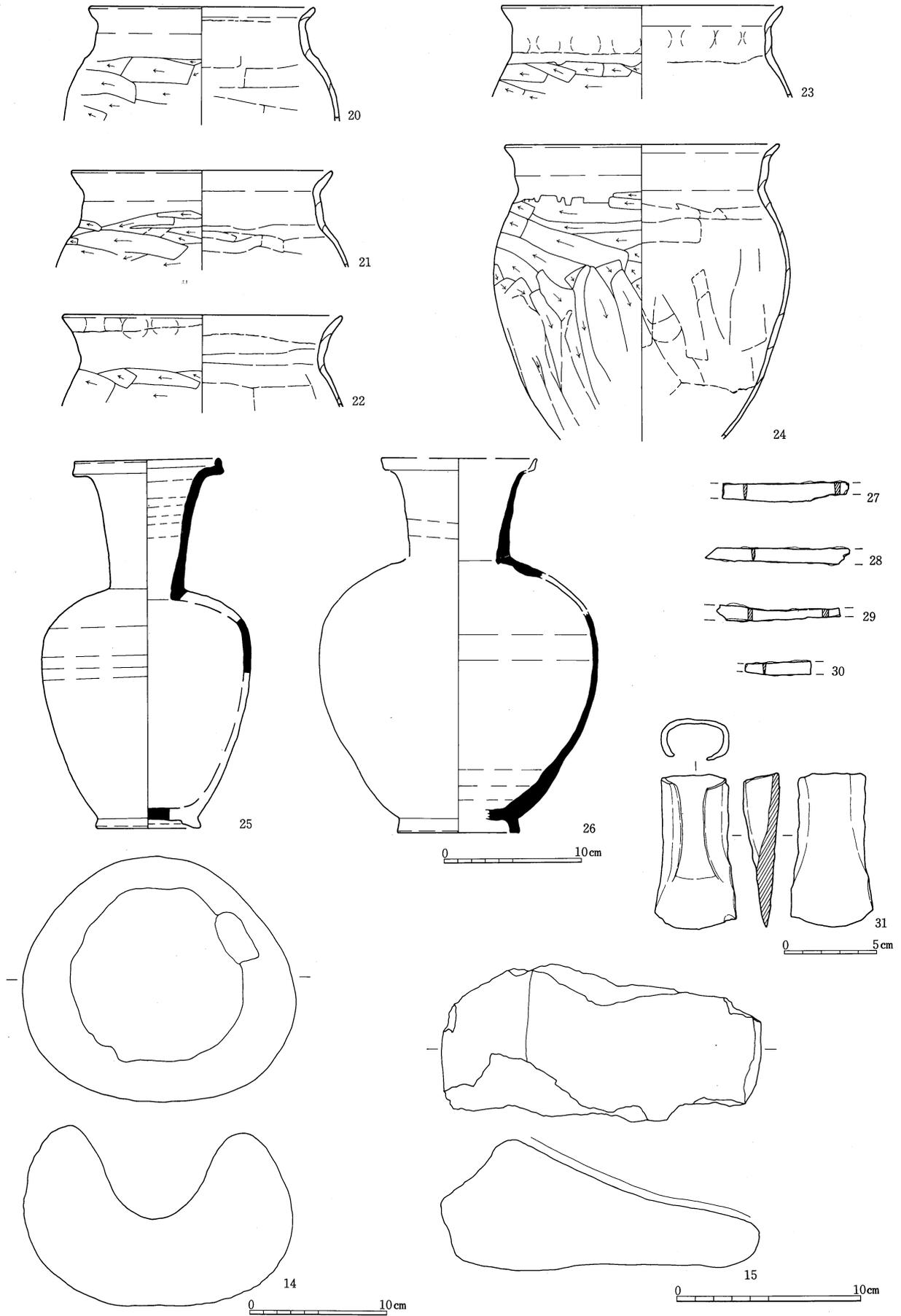


图65 105号住居址(2)

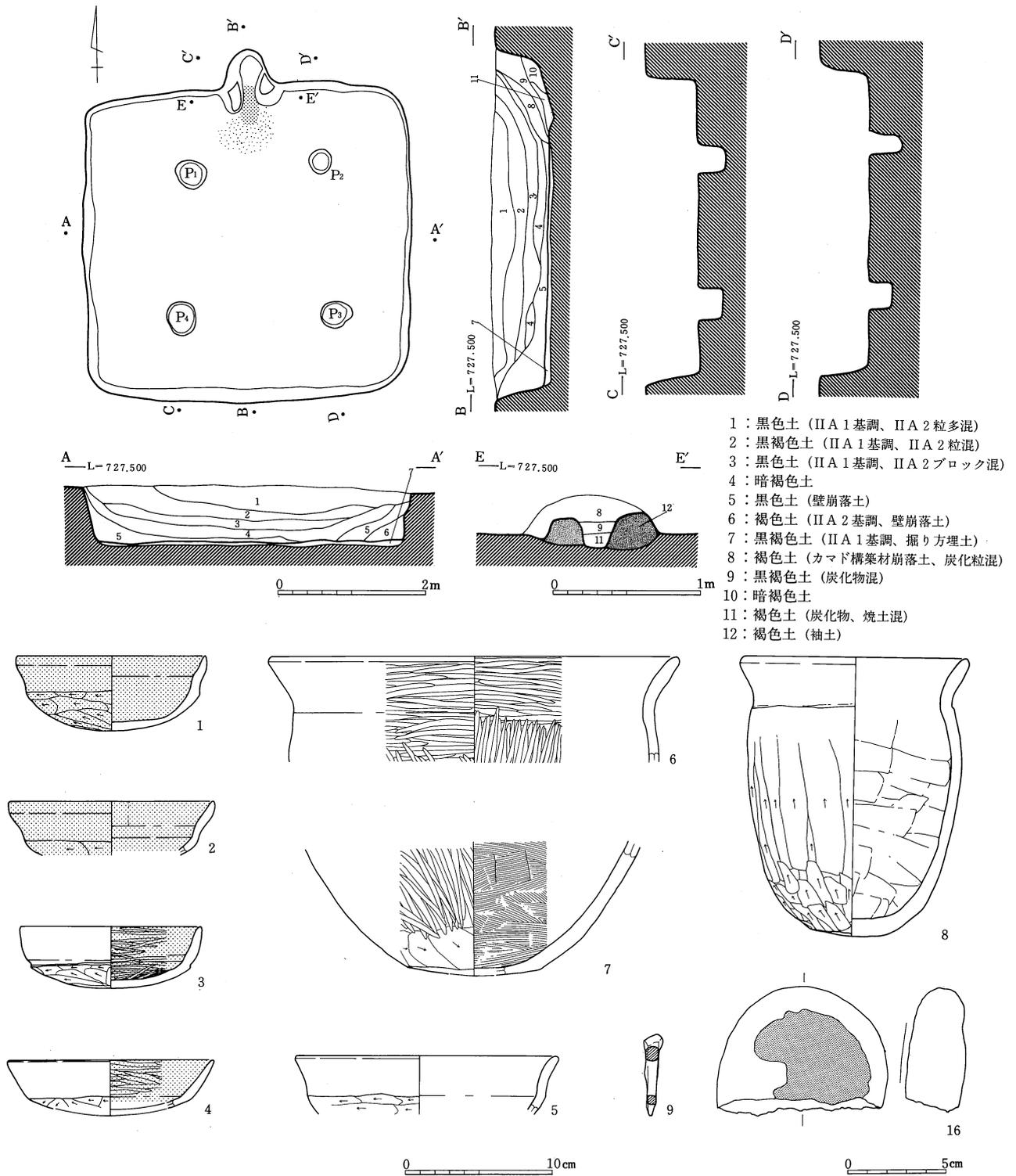


図66 106号住居址

央部が特に堅緻であった。カマドは明褐色土を構築材とした粘土カマドであった。支脚石痕は認められなかった。

遺物 1～4が土師器坏、5が同鉢、6・7が同球胴甕、8が同長胴甕。1・2は、内外面にミガキを伴わない煤けたような黒色処理が施されている。群馬県平野部から搬入されたものか。9は棒状の鉄製品、10は磨石である。

時期 古墳時代後期後半。

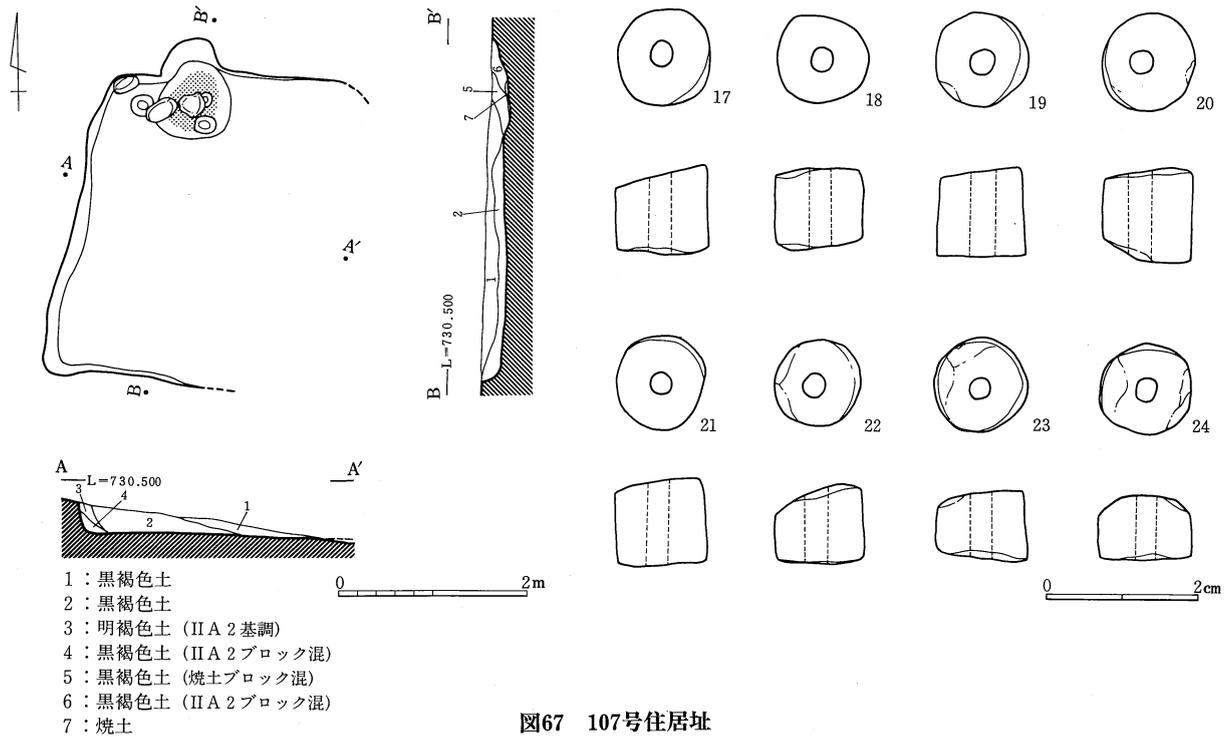


図67 107号住居址

107号住居址 (図67、PL165・261)

IIA 2層で検出された。斜面に構築されているため東壁部は消失した。覆土は地形なりの堆積を見せることから、自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面を利用したもので、軟弱であった。カマドは袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが火床左側に1基と、火床部に支脚石と思われる小ピットが2基検出された。またカマド周辺床上に被熱した礫が散在していた。

遺物 遺物は少なく小片が数片出土したのみである。唯一滑石製の白玉8点が西壁際よりまとまって出土した。大形の粗製品。同一の素材と考えられるが接合するものはなかった。

時期 古墳時代後期後半

108号住居址 (図68、PL165)

IIA 2層上面で検出された。覆土はカマド部で構築材の広がり認められたものの黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は北東隅の構築材崩落土上部でほぼ完形の土器が集中して検出された。床は灰褐色粘質土による貼床が住居中央～南壁部にかけて部分的に認められたが、基本的には荒ぼり後、黒褐色土の埋土上面を叩き締めたもので構成される。全体に平坦で堅緻であった。壁は、西壁、北壁に崩落が認められ、立ち上がりは段差を持つ。ピットは8基確認され、P1～4が柱穴と判断される。P5・6はその位置から支柱穴的なものであろうか。P7・8は張り出し部と対応し、出入口施設に係わるものと推察される。カマドは構築材の崩落・流出が激しく、遺存状況は悪い。崩落した構築材の下には黒褐色土が認められることから、カマド破壊と住居址の廃絶に時間差があったことがうかがわれる。

遺物 覆土中からの出土は少なかった。南東隅からは完～ほぼ完形の遺物がカマドの構築材とともに集中して出土した。1～3が土師器坏、5が同多孔式の甗、6・7が同長胴甗、4・8が胴球胴甗、9・10が同胴張り甗。2は、内外面にミガキを伴わない煤けたような黒色処理が施されたもので、群馬県平野部から搬入されたものか。7・8はいわゆる「武蔵型」甗の特徴を具備している。

時期 7・8が伴えば7世紀末～8世紀第1四半期。

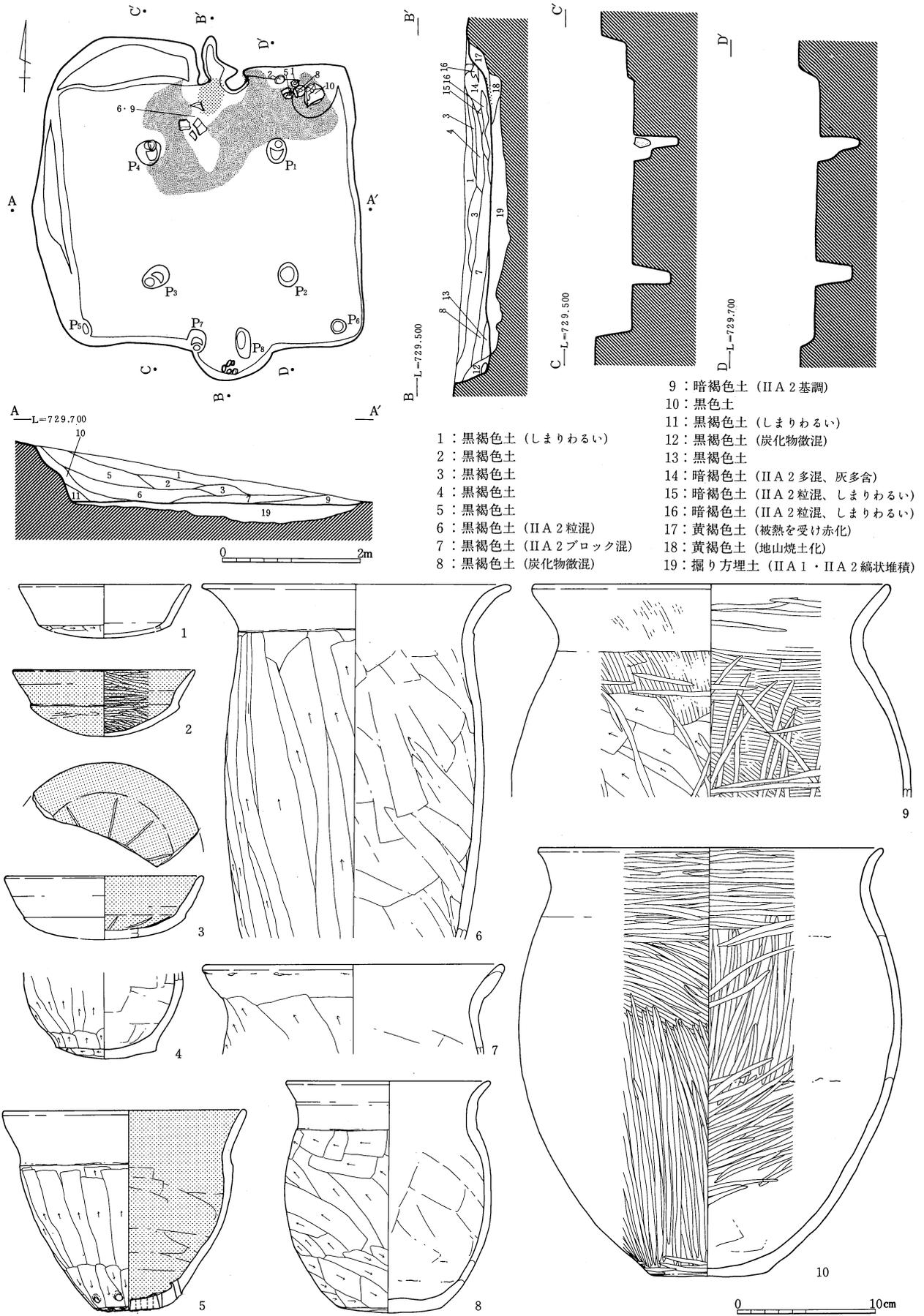


図68 108号住居址

109号住居址 (図69, PL165・215・255)

IV層中で検出された。112号住居址を切る。トレンチにより部分的に消失した。覆土は、黒色土の単層で自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混じる黒褐色土を部分的に埋め戻したものであった。床面は北側でやや下がるものの、全体に平坦で、あまり堅緻ではなかった。

遺物 出土土器の全体量は、土師器甕1・小形甕2・ロクロ小形甕1 (11) 内面黒色碗3 (1~3)・碗皿不明11、土師質坏14以上 (4・5・7・8)・碗10 (9)・皿2・碗坏不明5 (6)、灰釉陶器碗2 (10) 個体分が出土した。7には「令」の墨書が書されている。東壁西よりの焼土部分から多くの土器が出土している。

時期 11段階の所産と思われる。

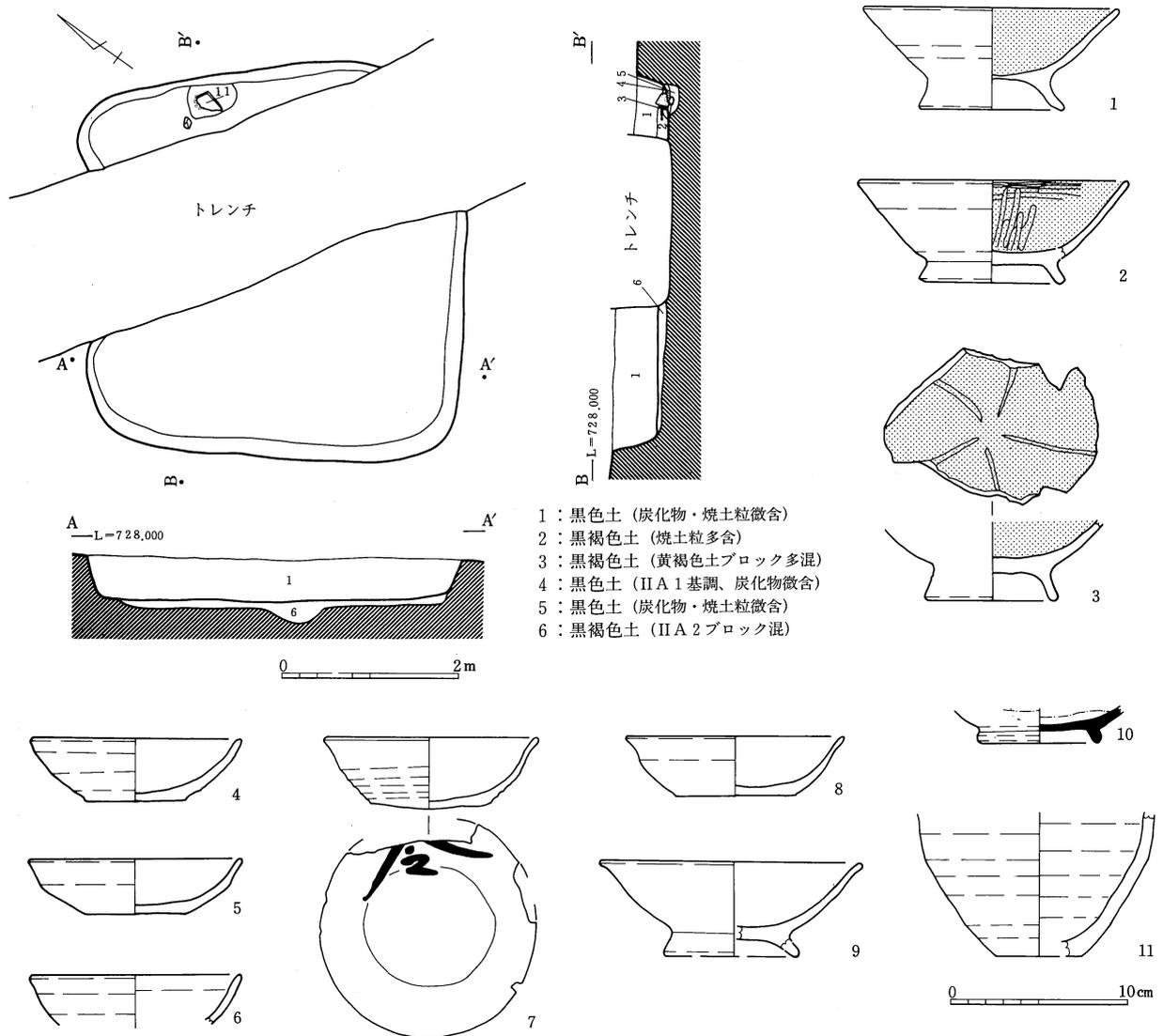


図69 109号住居址

110号住居址 (図70・71、PL166・215・216)

II A 1層で検出された。112号住居址、515・516号土坑を切る。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物の出土はカマドを中心に北側に偏る。床は荒ぼり後、112号住居址を含め黒褐色土で埋め戻し、その上面をたたきしめたもので、全体に堅緻であった。ピットは1基確認され、覆土中に焼土粒・炭化粒が認められた。カマドは袖部・煙道部に礫を並べた石組カマドで、天井石が原位置を留めていた。礫の間隙には褐色土を充填してあった。支脚の痕跡はなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、土師器甕2 (11)・ロクロ甕4 (12・14・15)・ロクロ小形甕1 (13)・内面黒色坏7 (1~3)・碗3 (4)、土師質坏3 (5~7)・碗1、灰釉陶器碗2 (8・9)・輪花皿1 (10)・長頸瓶1個体分が出土している。出土状況はカマド内およびその前方部からおもに出土している。8~10は体部に回転ヘラ削りが施され、10はハケ塗りされ、8・9は漬け掛けされている。

時期 10段階の所産と思われる。

111号住居址 (図72、PL166・216)

IV層中で検出された。112号住居址を切る。覆土はII A 2ブロック混じりの黒褐色土を主体とすることから人為埋没と思われる。床は平坦に荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻し、床を構成する。全体に平坦で堅緻であった。カマドは床面とほぼ同レベルで火床が確認されたに留まった。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。須恵器坏6 (1~4)・中形甕1・長頸瓶1・鉢1、土師器甕数片・土師器坏1・内面黒色土器4以上 (5~7) 個体分が出土している。これらのほとんどはカマド内からの出土である。3・4・6・7には墨書が書かれ、3は「七」又は「二」、4は「七」と思われるが6・7は文字不明である。

時期 5段階と思われる。

112号住居址 (図73・74、PL166・261)

II A 1~II A 2層上面で検出された。109・110・111号住居址に切られる。覆土は基本的には黒褐色土を主体とした自然堆積と思われるが、カマド周辺の広い範囲にわたって明褐色土のカマド構築材の流出が認められた。遺物は土器の破片がほとんどで、大半が床面より浮いて出土した。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混入する黒色土で埋め戻し、その上面を平坦に叩き締めたものである。全体に平坦で堅緻であった。ピットは6基確認された。P2~4・6は柱穴と判断され、P6は断面から柱痕が確認された。P5は出入り口施設にかかわるものと推察されるが、長さ30 cm 大の礫が壁を穿つようにして認められている。また、柱穴は掘り方段階でその位置が考慮されていたらしく、柱穴のひとまわり大きな掘り方が4穴ともに認められた。周溝は、床面調査時には捉えきれず、掘り方調査時に確認されたもので、幅約30 cm、深さ10 cm 前後で検出された。カマドは粘土カマドで、その構築材は細かく見ると黄褐色土と灰白色土とに分化でき、前者を芯として、後者を補強材としていることが観察される。構築に際しては、床面形成後にカマド掘り方が掘られていることが認められた。

遺物 出土遺物はそのほとんどが破片ばかりで散在して出土した。1~5が土師器坏、6~8が同高坏、9が多孔式の同甕、10・11が大形の同甕、12・13が同胴張り甕、14が球胴甕、15~17が同長胴甕、25が粘板岩製の剣形模造品。4・5は、内外面にミガキを伴わない煤けたような黒色処理が施されたもので、群馬県平野部から搬入されたものか。6はP5内より出土した。

時期 古墳時代後期後半

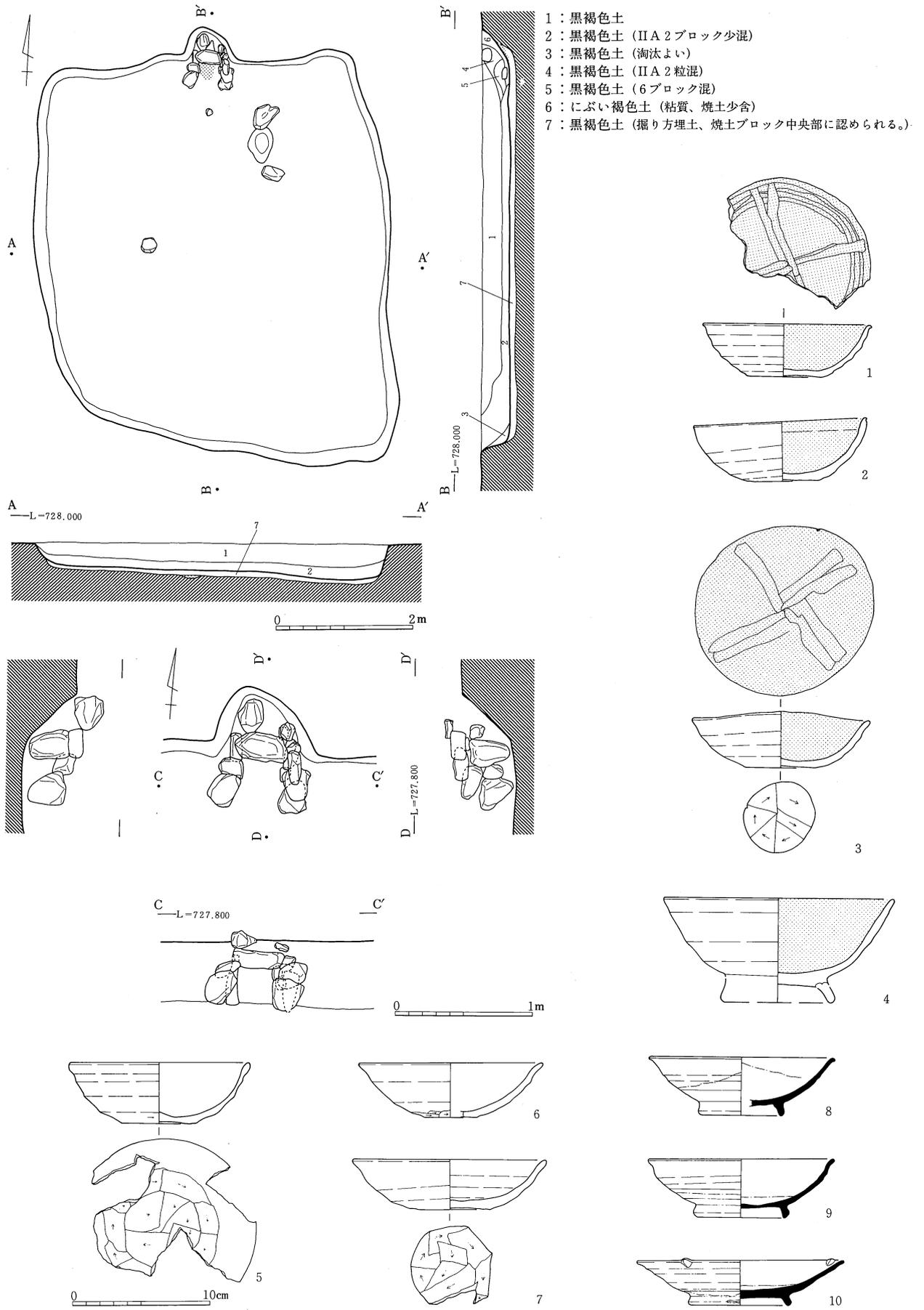


図70 110号住居址 (1)

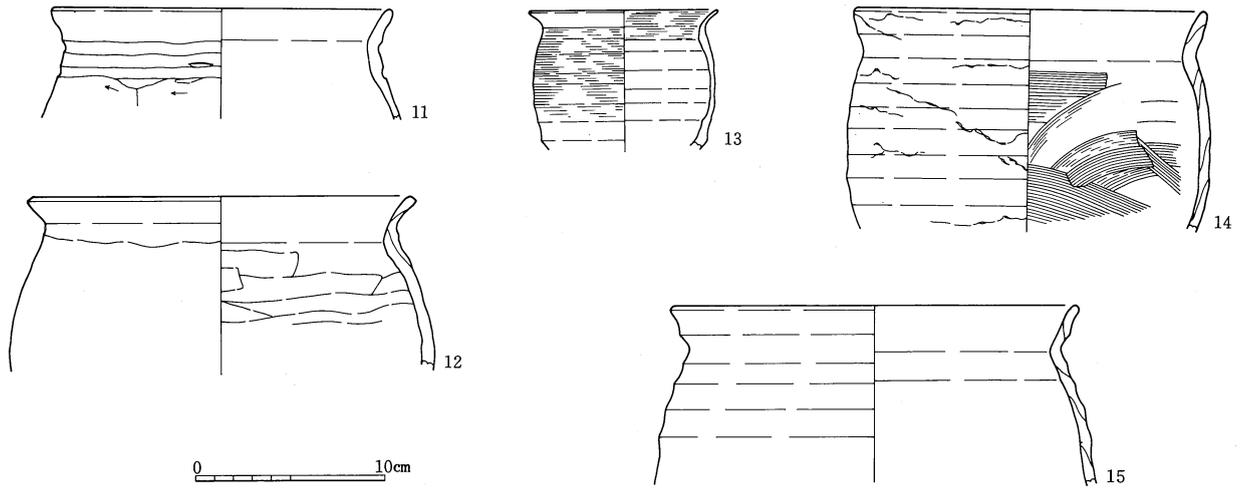


図71 110号住居址(2)

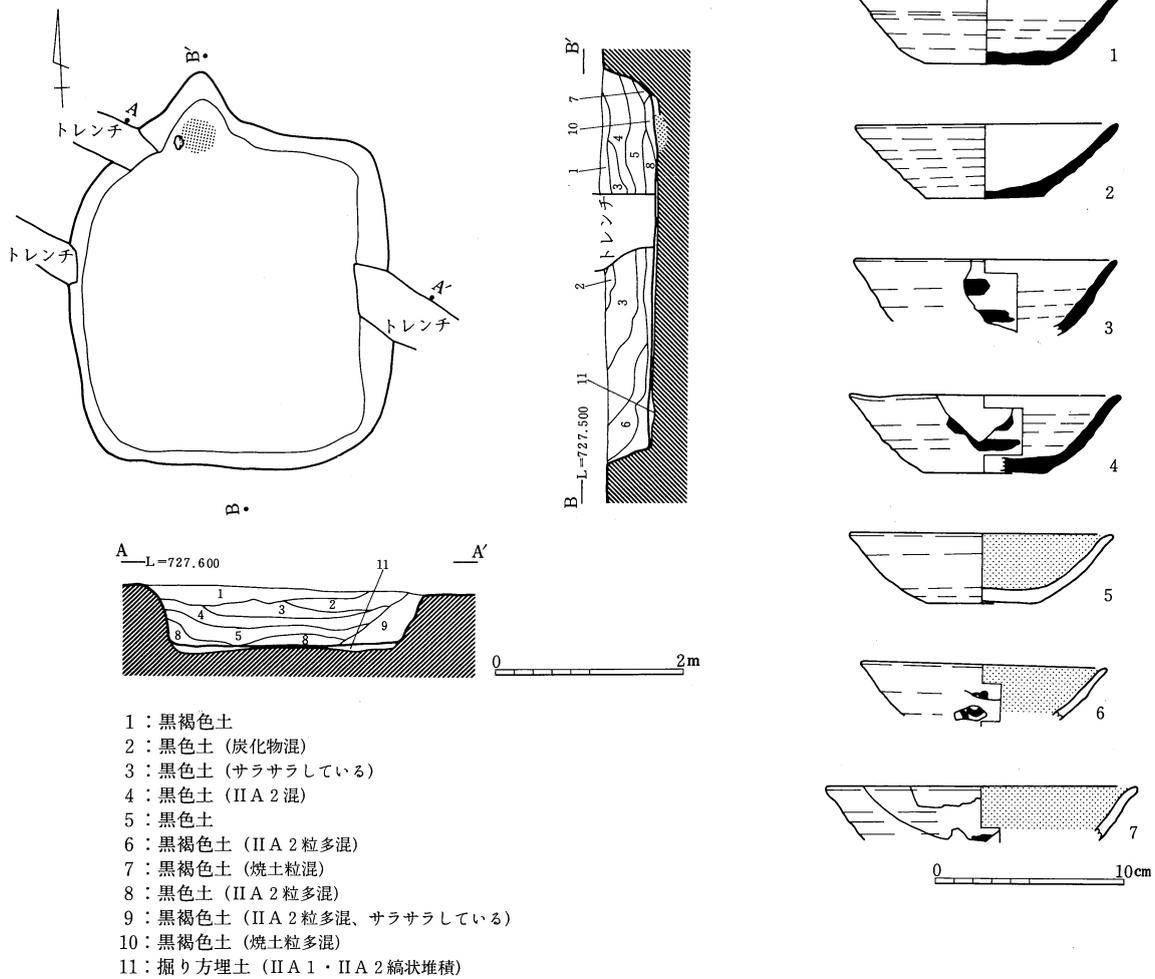


図72 111号住居址

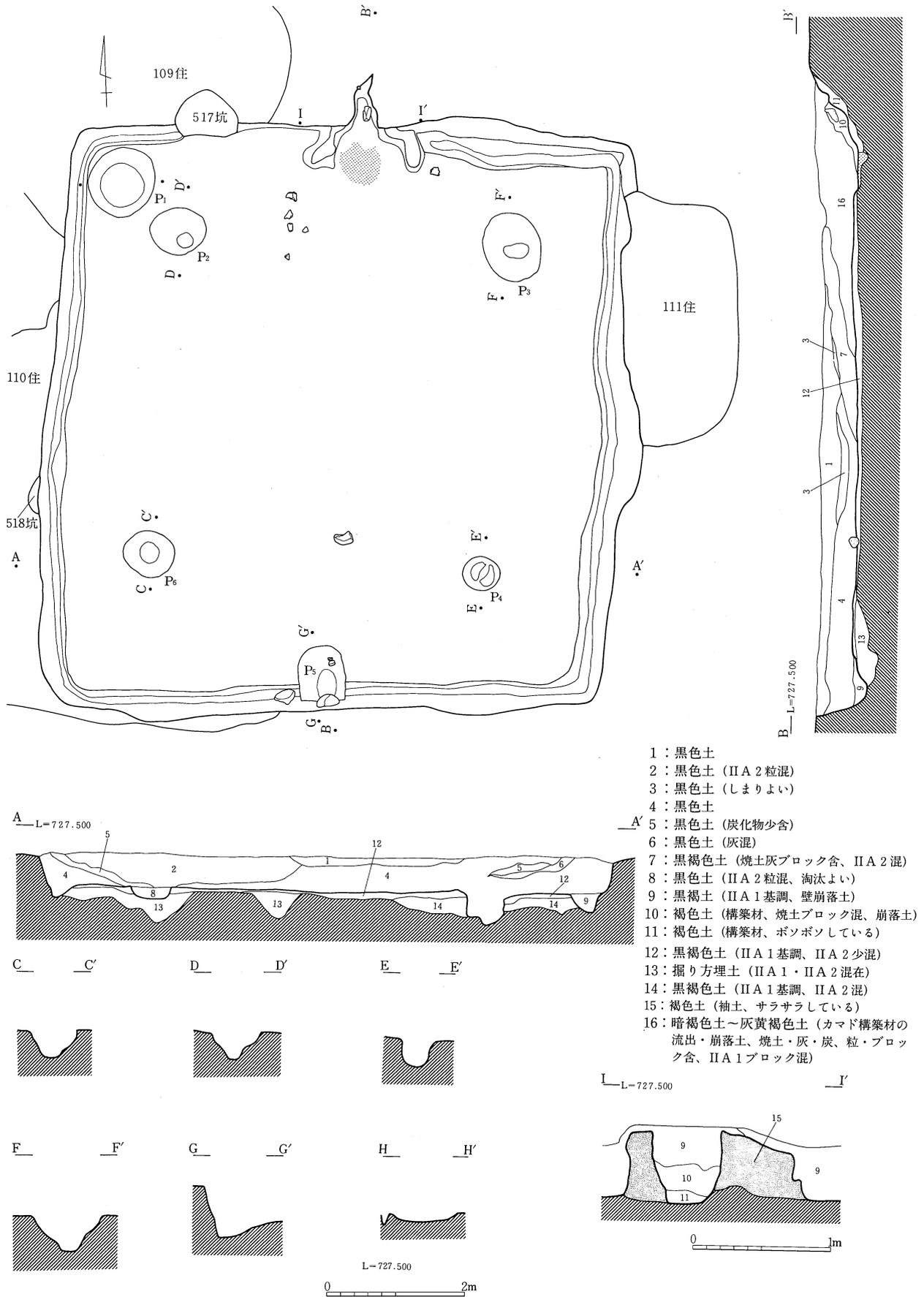


図73 112号住居址 (1)

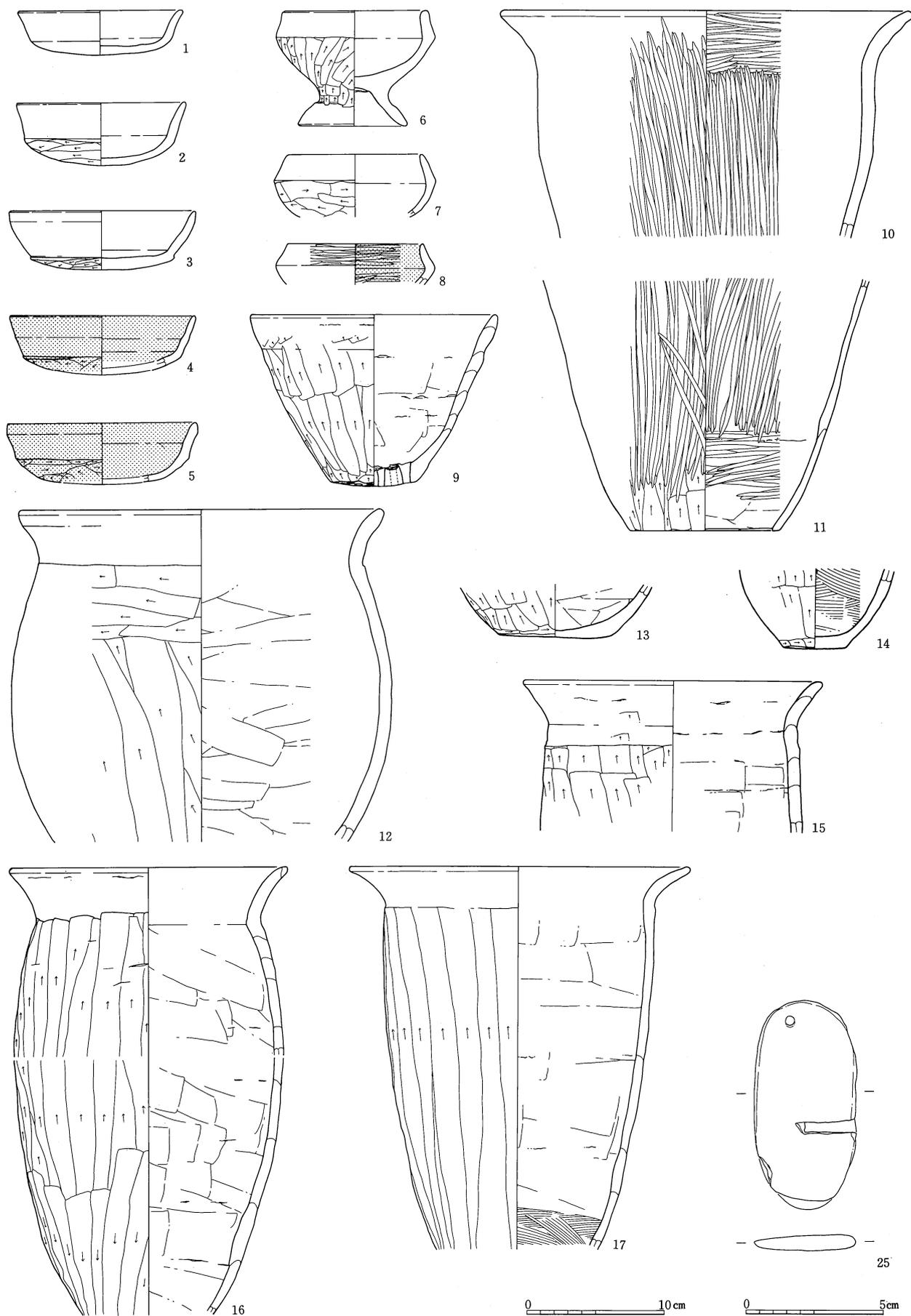


图74 112号住居址(2)

113号住居址 時期が先行するため、始めに記述

114号住居址 (図75・PL166・225)

II A 2層上面で検出された。115号住居址を切る。覆土はII A 2ブロックの混入する暗褐色土を主体とし、淘汰が悪いことから人為埋没と思われる。床は切りあい部分も含めて、浅い掘り方のうえに、厚さ1～2cmの暗褐色土を埋め戻し、平坦にしていた。全体に堅緻で、中央から南側部分で顕著であった。ピットは2基確認され、両者とも形状、深さに均一性が認められ柱穴と判断される。カマドは石組カマドで、右袖の礫間には黄褐色土が充填されていた。左袖は袖石と抜き取り痕が認められた。支脚石、その抜き取り痕は確認されなかった。

遺物 遺物の出土量は少なく覆土中の遺物が主である。土師器甕4片・内面黒色環4・碗2・盤1(2)・土師質環2(1)、灰釉陶器小瓶1個体分が出土した。金属器は刀子1(3)・鉄滓32gが出土している。2は古墳時代の盤と思われることから115号住居址の遺物である可能性がある。

時期 カマドの設置位置から13段階頃と思われる。

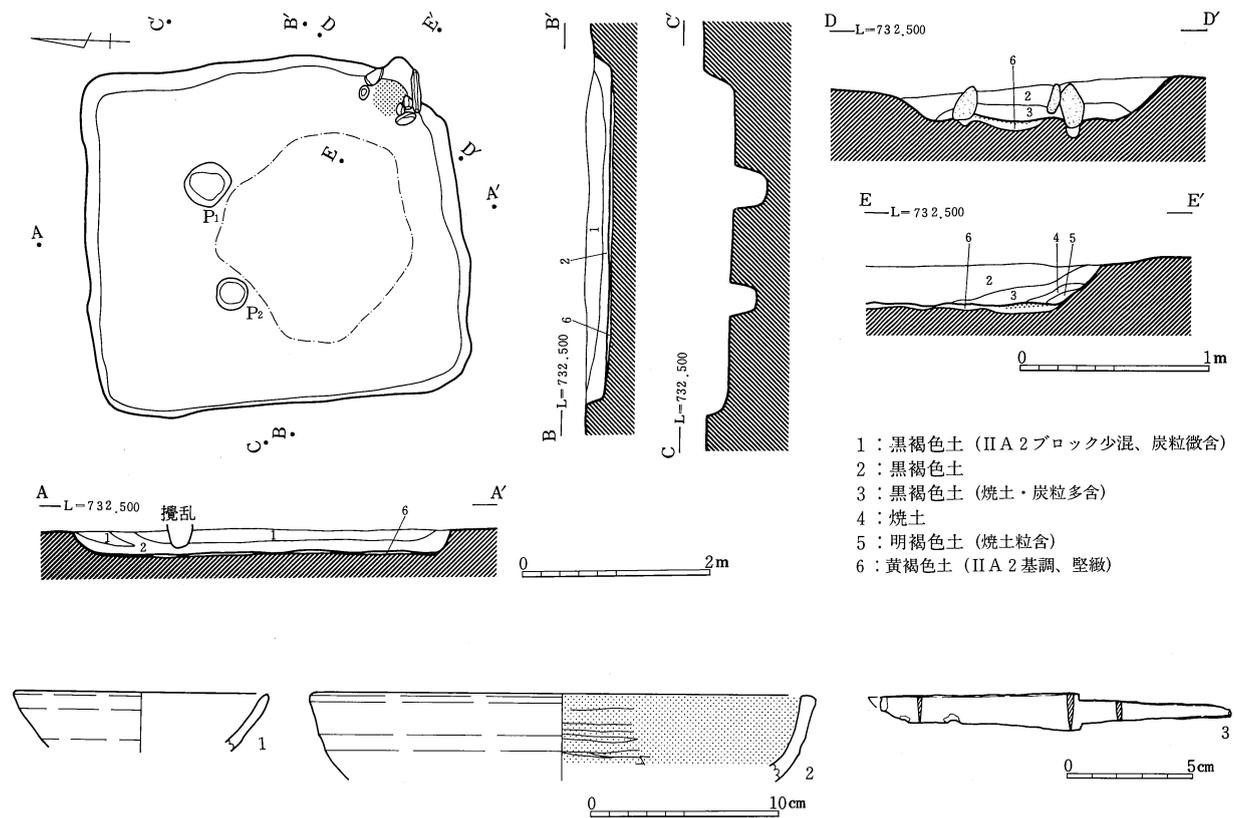


図75 114号住居址

116号住居址 (図77、PL167)

II A 1層で検出された。東南壁は検出面をII A 2層に下げたため削平する結果となった。3号畑址を切る。覆土は浅いが、塊の混入がないところから自然堆積と思われる。床面は掘り下げた地山面を利用し、カマド周辺部に堅緻面が認められた。ピットは2基確認された。カマドは床面とほぼ同レベルで若干焼土が認められたほか、両袖石が残存し、面取りされた天井石がカマド前で検出されている。

遺物 遺物の出土量はわずかで、内面黒色坏碗類が主体をしめる。須恵器坏3(1)、土師器小形甕1片のみ・内面黒色坏6(2~4)・碗1・両面黒色皿1(5)・土師質坏2個体分が出土した。

時期 9段階頃と思われる。

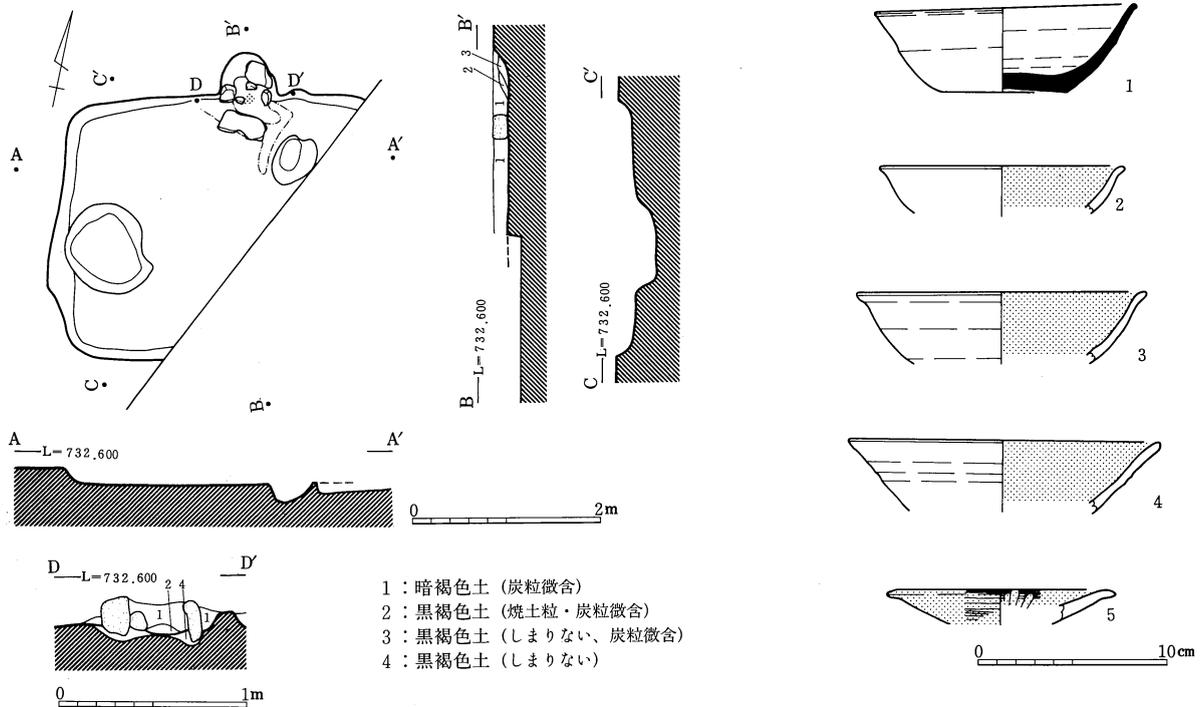


図77 116号住居址

117号住居址 (図78・79、PL167・201・202)

IIA 2層上面で検出された。カマド付近に遺物が散在していた。62号溝址に切られる。覆土はIE層を基調とする4層とIIA 1層を基調とする5層を主体として全体として自然堆積と思われる。遺物は5～6層にかけて出土が集中する。掘り方は全体に浅く、床はおもに掘り方埋土のIIA 2層を基調とする灰褐色土で床面を形成するが、特に堅緻ではなく南に向かって緩やかに傾斜する。壁は全体に崩落による立ち上がりを見せ、外に開く。周溝は東壁、西壁に幅約15 cm、深さ3～15 cm前後で検出された。ピットは4基確認され、P1～4が柱穴と判断される。そのほか南東隅に壁を穿った箇所が認められた。カマドは明褐色土を構築材とした粘土カマドである。支脚痕が火床上端に検出されている。

遺物 出土遺物の大半はカマドの両側の壁沿いから出土し原位置をとどめるものが多かった。南東隅に21、21の南に17・4が西に16が正位のまま出土し、カマド左袖西側に11の上に18が乗ったまま出土した。1～5・7・8は土師器坏、6は同碗、9は須恵器短頸壺、13～16は土師器鉢、18は多孔式同甗、19は同球胴甗、20・21は同長胴甗、10～12・17は該当する器種名がない。4は精選された胎土で、橙色を帯びる。群馬県平野部から搬入されたものか。6・7は、体部と底部の境が明瞭で平底を意識している。また、7の体部上位にはへら削り調整が及んでいない。

時期 須恵器短頸壺は7世紀に遡らせるのが難しい。6・7も新しそう。8の器形は7世紀第3四半期を遡ることはない。出土状態をみないと時期は云々はできない。

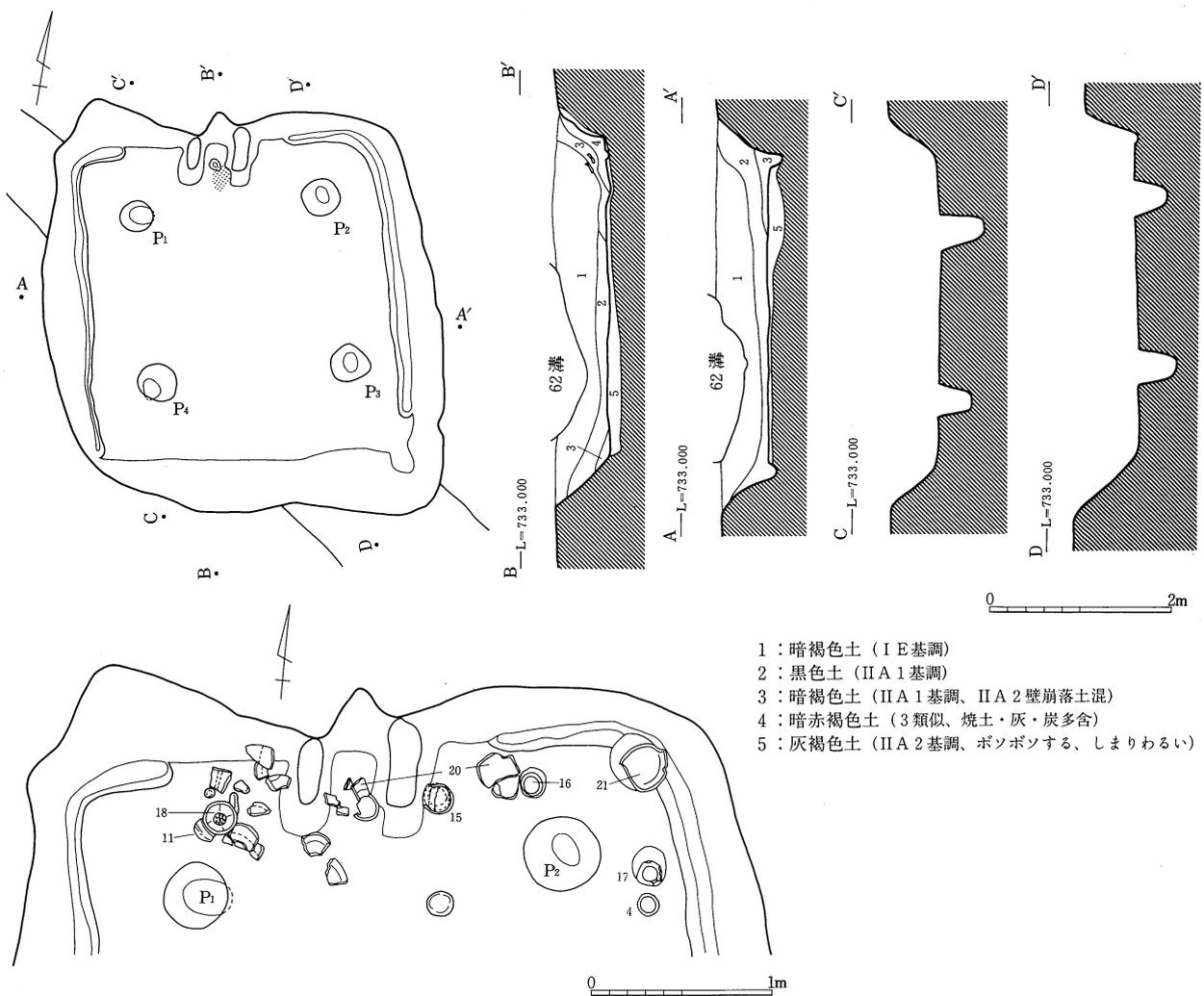


図78 117号住居址 (1)

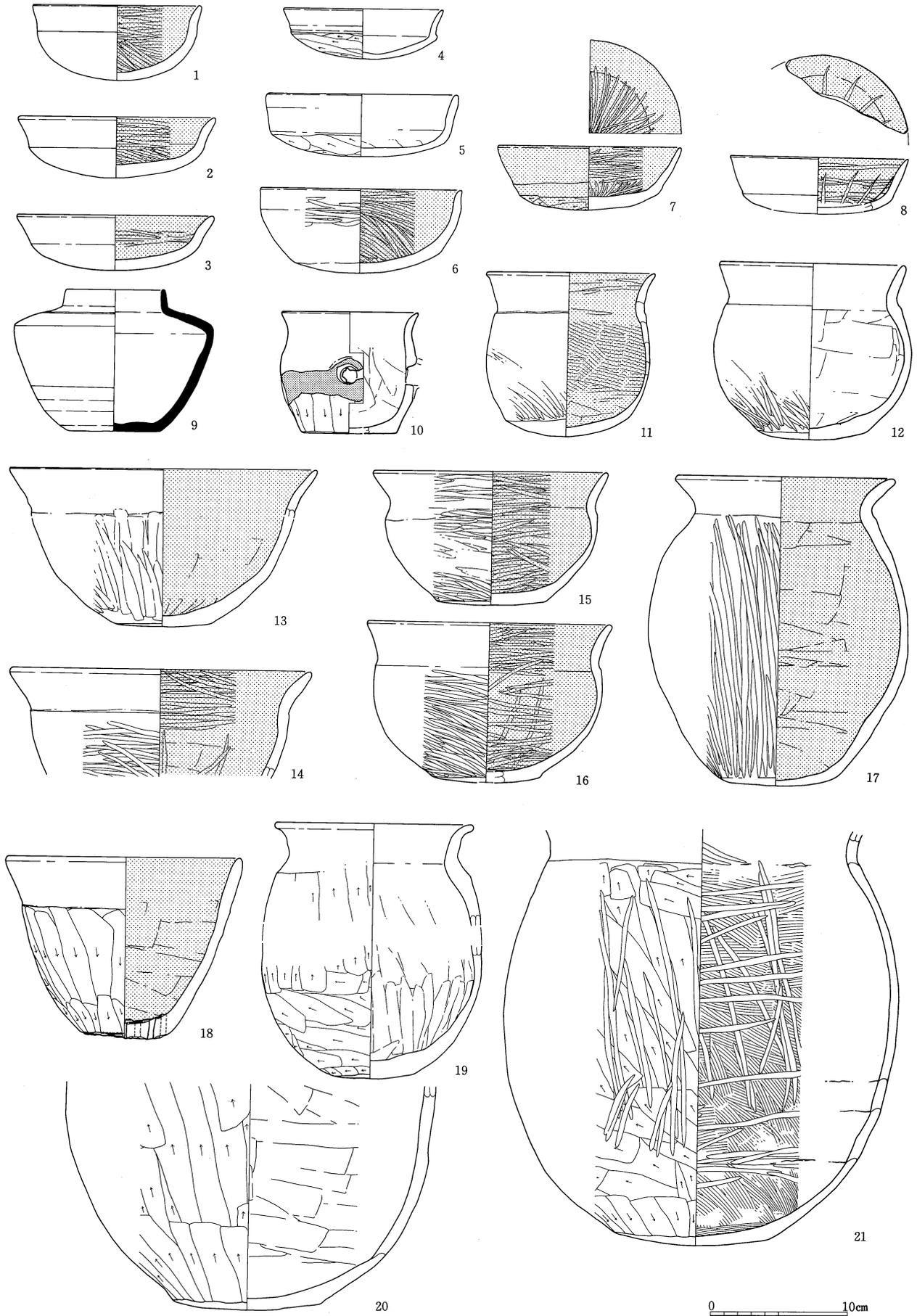


图79 117号住居址(2)

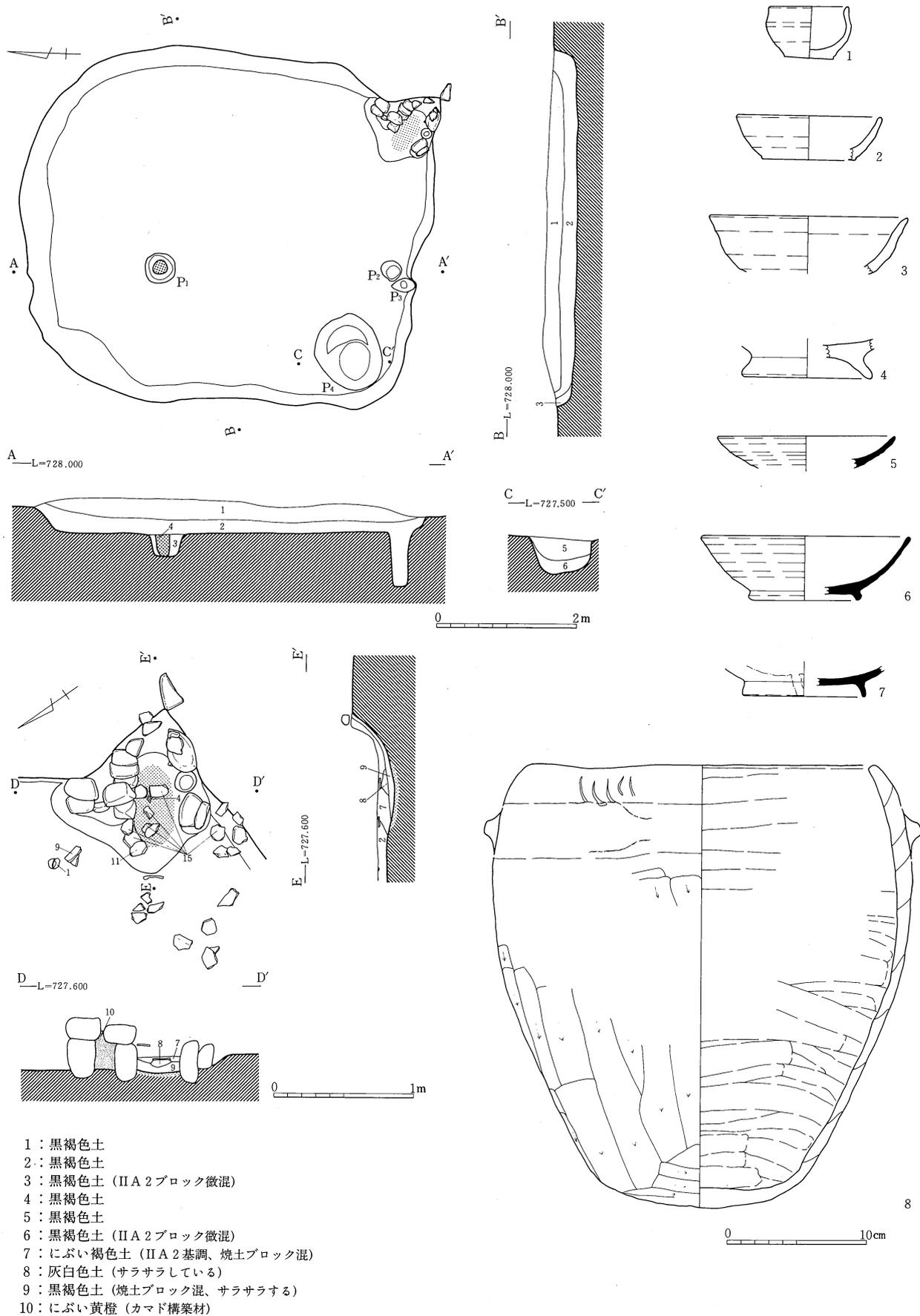


図80 118号住居址(1)

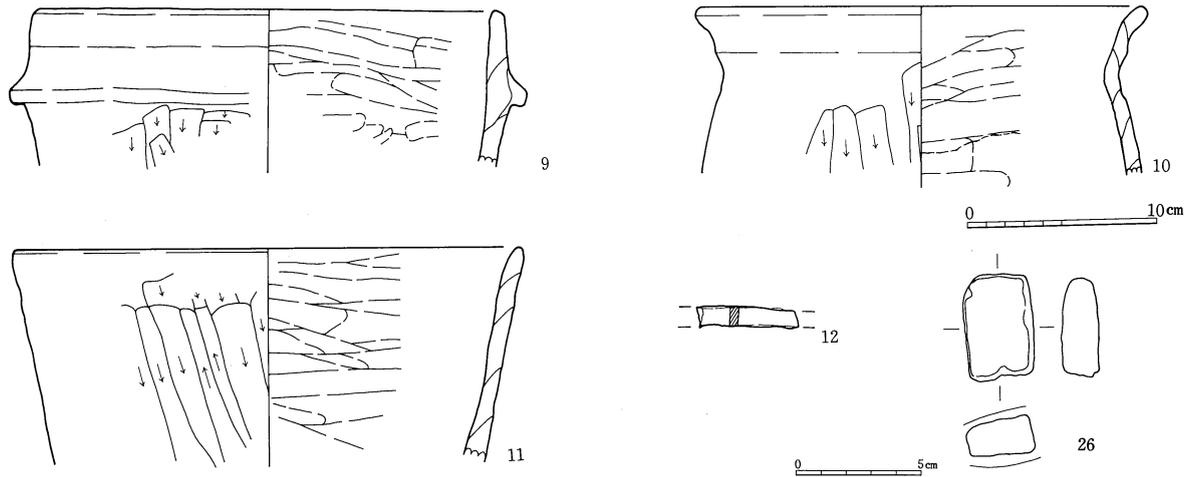


図81 118号住居址(2)

118号住居址 (図80・81、PL167・216)

II A 1層上面で検出された。119・126号住居址、777号土坑を切る。検出は切りあう住居址覆土に極端な差異は認められず困難であった。カマドの位置・床面を手掛かりとして、II A 2粒の混入差を判断基準として切り合いを確認した。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は切り合う部分、地山荒ぼり部分を含め、黒褐色土を埋め戻し、平坦な床面を構築していた。ピットは4基確認された。P1には断面から柱痕が認められ、P2は小規模であるものの掘り方が深いことから、P1と組んで柱穴となる可能性がある。カマドは両袖に礫を配した石組カマドである。礫の隙間には覆土の黒褐色土が認められ構築材であるのかの判断は難しかった。

遺物 遺物の出土量は、土師器甕6・内面黒色坏10以上・碗3・両面黒色皿1・土師質甕6・坏9(2・3)・碗1(4)・羽釜2(8・9)・ロクロ甕3(10)・甑1(11)・ミニチュア坏1(1)・灰釉陶器碗4(5~7)・皿2個体分が出土した。金属器は刀子1(12)、石製品は砥石1(26)が出土した。土器の出土はおもにカマドを中心に出土した。

時期 12段階頃と思われる。

119号、126号住居址 (図82、PL167・216)

II A 1層上面で検出された。床下調査段階で2つの火床が確認され、床面の堅緻範囲が長方形を呈すことから住居址の拡張により119号住居址が構築されたと判断した。この結果拡張前の住居址を126号住居址とし、本址と区分した。

119号住居址は、II A 1層上面と118号住居址床下で検出された。126号住居址を切り118号住居址、766号土坑に切られる。覆土は118号住居址に切られるため残りが少ないものの、ブロックの混入もないため自然堆積と思われる。掘り方は126号住居址と重なるが、東西に拡張された部分は中央部より浅い。床は126号住居址の床面をそのまま利用する一方で、拡張部は掘り方埋土の黒褐色土をたたきしめている。とくに126号住居址推定範囲はより堅緻であった。ピットは8基確認された。P3からは炭化種子(オニグルミ)に土器の破片が数点出土し貯蔵穴に類する施設と判断される。カマドは118号住居址に大部分破壊されていて、煙道部両脇に若干の礫が遺存していた。また、火床も766号土坑に切られるため一部が確認されたにすぎなかった。

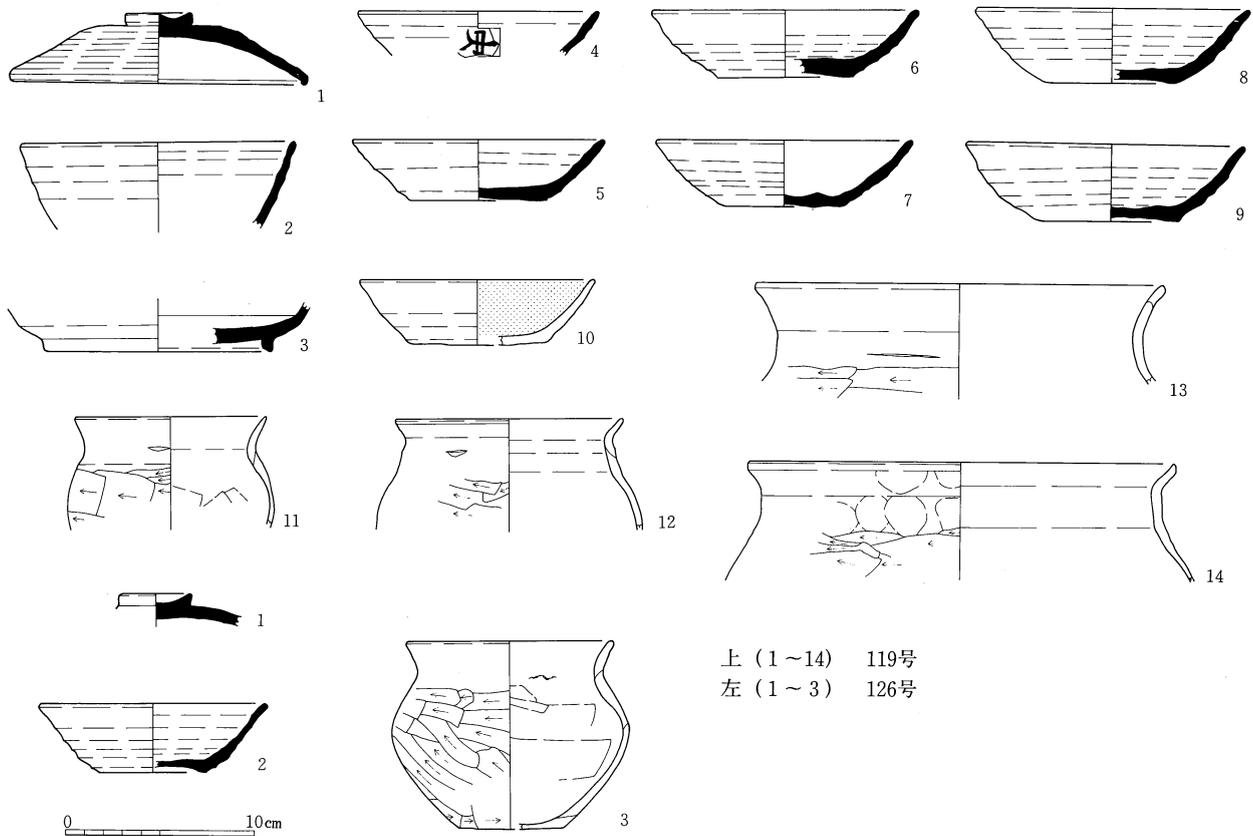
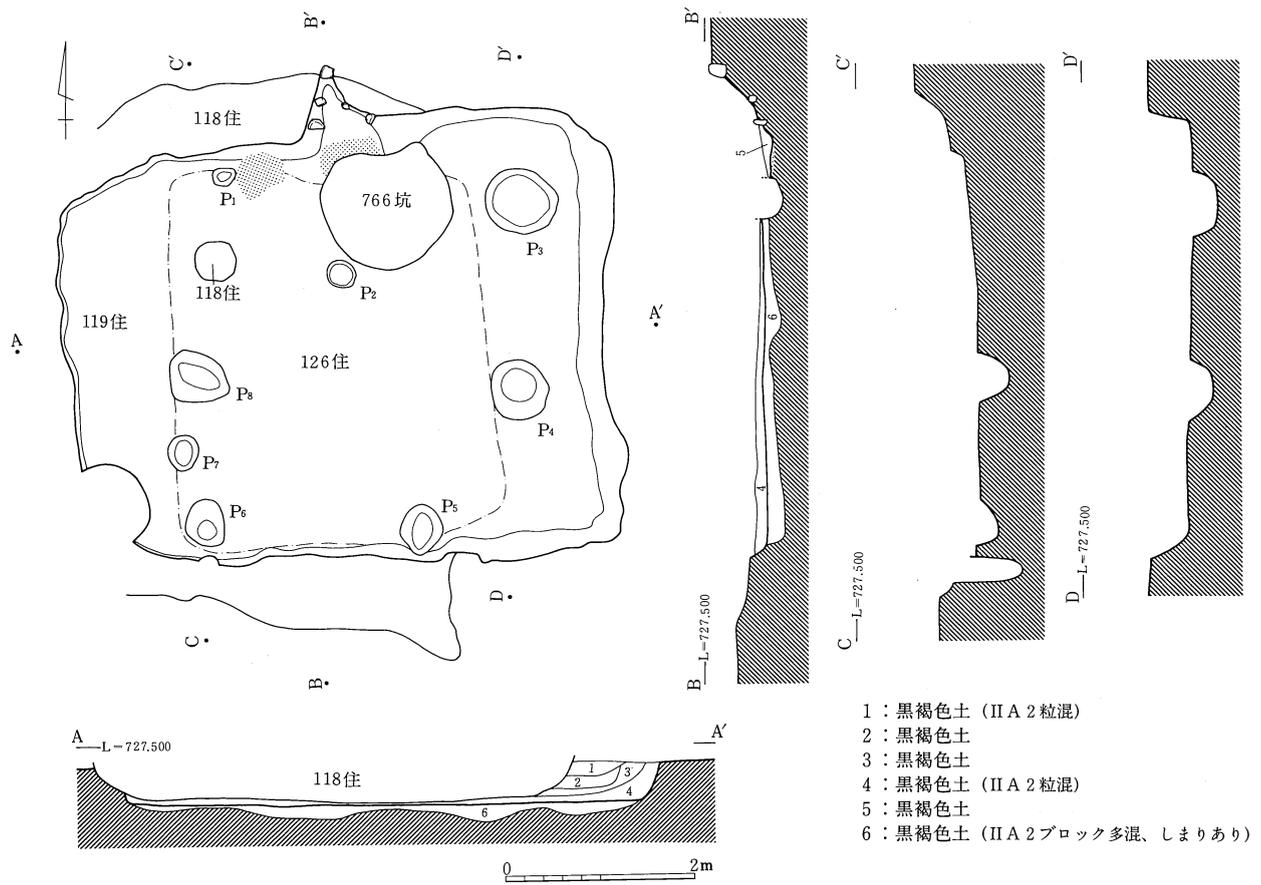


图82 119・126号住居址

126号住居址は119号住居址床面下で検出された。東壁、西壁が先行する住居址に破壊されるなど、全体に床面のみが残存しているに過ぎなかった。両者の床間は数 cm の間隔しかない。P1からは炭化種子(オニグルミ)が出土している。そのほか柱痕などは見られていないため柱穴の可能性は指摘できない。カマドは北壁部に火床が残存し、火床左側に3cmの浅い窪みが確認されている。

遺物 (119号住居址) 遺物の出土量は、須恵器高台環 2 (2・3)・環11以上 (4~9)・蓋 3 (1)・甕 1・中形壺 2・土師器甕 3 (13・14)・小形甕 2 (11・12)・内面黒色環 4 (10)・皿 1、灰釉陶器小片 1 個体分が出土した。

時期 6段階頃と思われる。

遺物 (126号住居址) 出土土器全体量はあまり多くない。須恵器環 7 以上 (2)・蓋 1 (1)、土師器甕 1・小形甕 2 (3)、土師質碗 3 個体分が出土している。

時期 本址は119号の拡張前の住居であることから6段階以前。

120号住居址 (図83~86、PL167・217・225・226・256・261)

II A 2層上面で検出された。検出面で多数の土器片が出土していた。62号溝址、554号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とするが、北側半分では焼土・炭粒の分布が覆土中に認められ、遺物は1・4層を中心に土器片が多量に出土し「土器捨て場」の様相を呈す。床は掘った地山面のうえに、黄褐色土を部分的に数 cm 埋め、堅緻にたたき構築していた。周溝は幅15~20 cm、深さ 7 cm 前後で検出された。ピットは8基確認された。P1~4はその位置から柱穴と判断される。P1~2には柱穴掘り方にかかって、礫が出土し、P6は周溝と結合する。P8は出入り口施設にかかわるものと推察される。カマドは袖・煙道部に礫を配した石組カマドである。礫の隙間には灰褐色土が充填補強され、強固に構築されていた。火床両側に袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが認められ、火床北側に支脚石抜き取り痕と思われる小ピット 2 基が検出されている。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台環 1 (1~3)・環64以上 (4~8)・甕 6・四耳壺 2 (70)・中形甕 1・長頸瓶 7 以上・小形長頸瓶 1・盤 1、土師器甕30以上 (59~62)・小形甕 5 (57・58)・台付小形甕 2 (63)・中形ロクロ甕 (64・65)・小形ロクロ甕 3 (66)、大形盤 1 (69)、内面黒色環130以上 (9~20・37)・碗30以上 (25~28・38・50)・皿35以上 (29~32・40)・盤 (21~23)・鉢 (51)・土師質環 (52)・甕 (67)・環碗不明 (24・33~36・39・41~49)・両面黒色環 2・皿 1、灰釉陶器碗 2・皿 9 (53~56)・長頸瓶 1・耳皿 1・小瓶 1 個体分が出土した。

その他小片の総重量は、須恵器甕類5.36 kg・壺瓶類3.76 kg・環類3.48 kg。土師器甕9.93 kg・小形甕220 g・ロクロ甕220 g・内面黒色環碗10.68 kg・皿420 g・両面黒環碗60 g・盤20 g。灰釉陶器碗皿115 g・壺瓶類100 g。総重量34.365 kgをはかる。67はロクロ甕の口縁部で、内面はミガキが施された後黒色処理される。

金属器は鉄斧 1 (71)・毛抜き状鉄製品 1 (73・74)・棒状鉄製品 1 (75)・その他不明鉄製品 (72)。石器は砥石 2 (27・28)・磨石 1 (29) が出土している。9・17・33~50は墨書が書されている。17・34・37・39・41・42・43は「天」、33・38・40・46・47は「天」に類似すると思われる。35・36・44・45・48~50は文字不明で判読できない。灰釉陶器 (53・55・56) は黒笹90号窯式に比定され、55・56は猿投産・53は猿投または尾北産・54東濃産、53・54はハケ塗りされている。

時期 9段階頃と思われる。

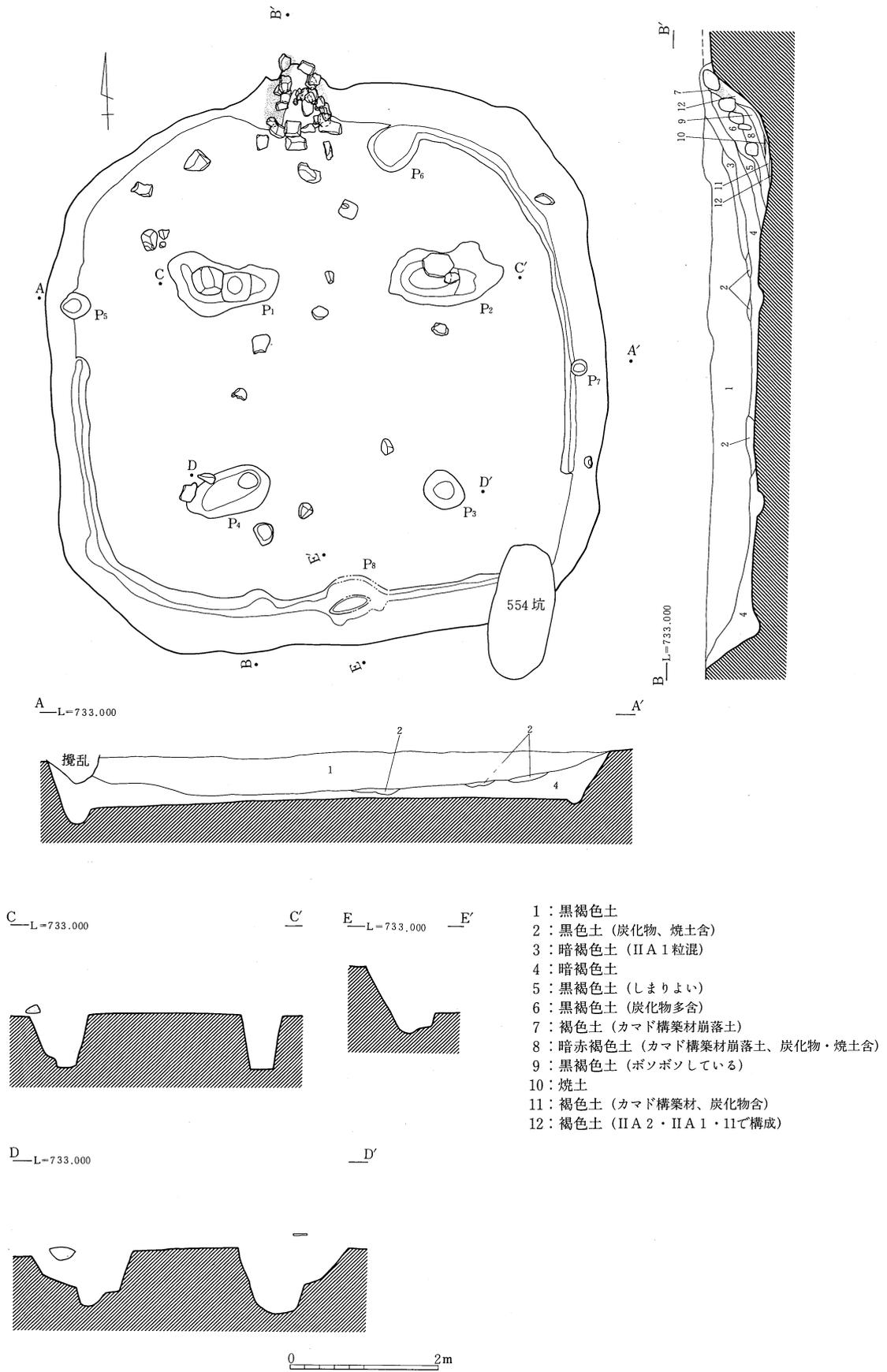


図83 120号住居址(1)

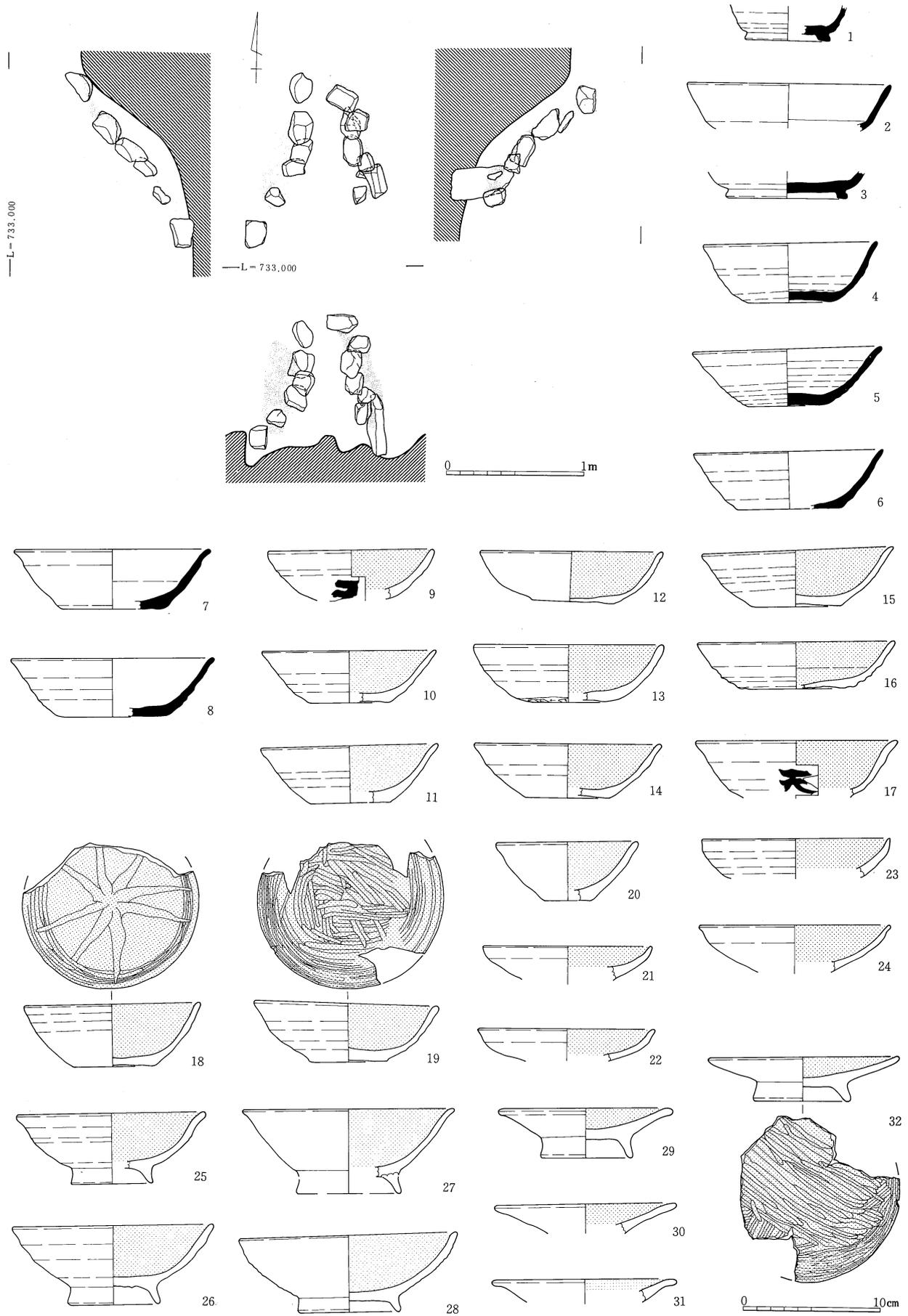


图84 120号住居址(2)

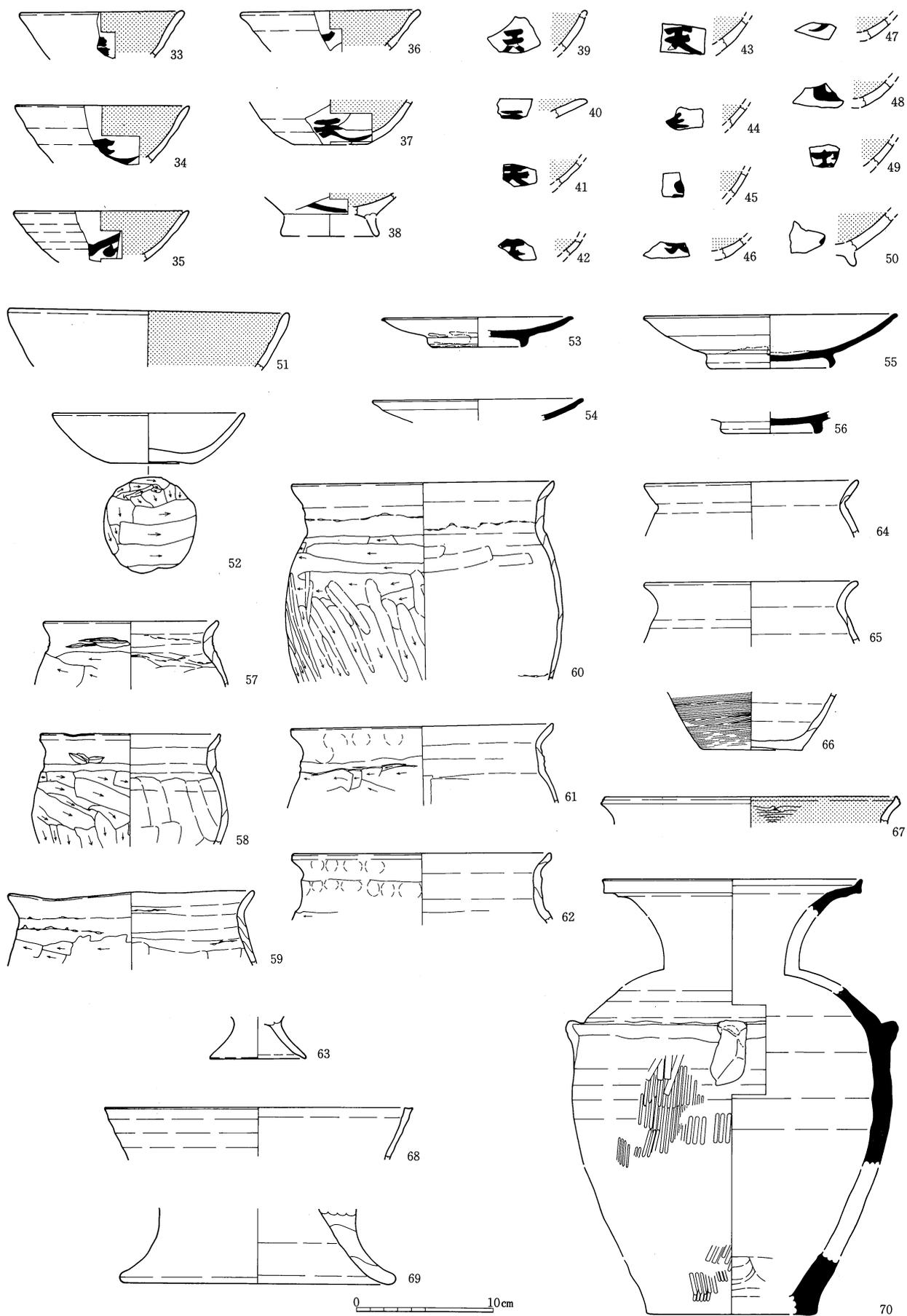


图85 120号住居址(3)

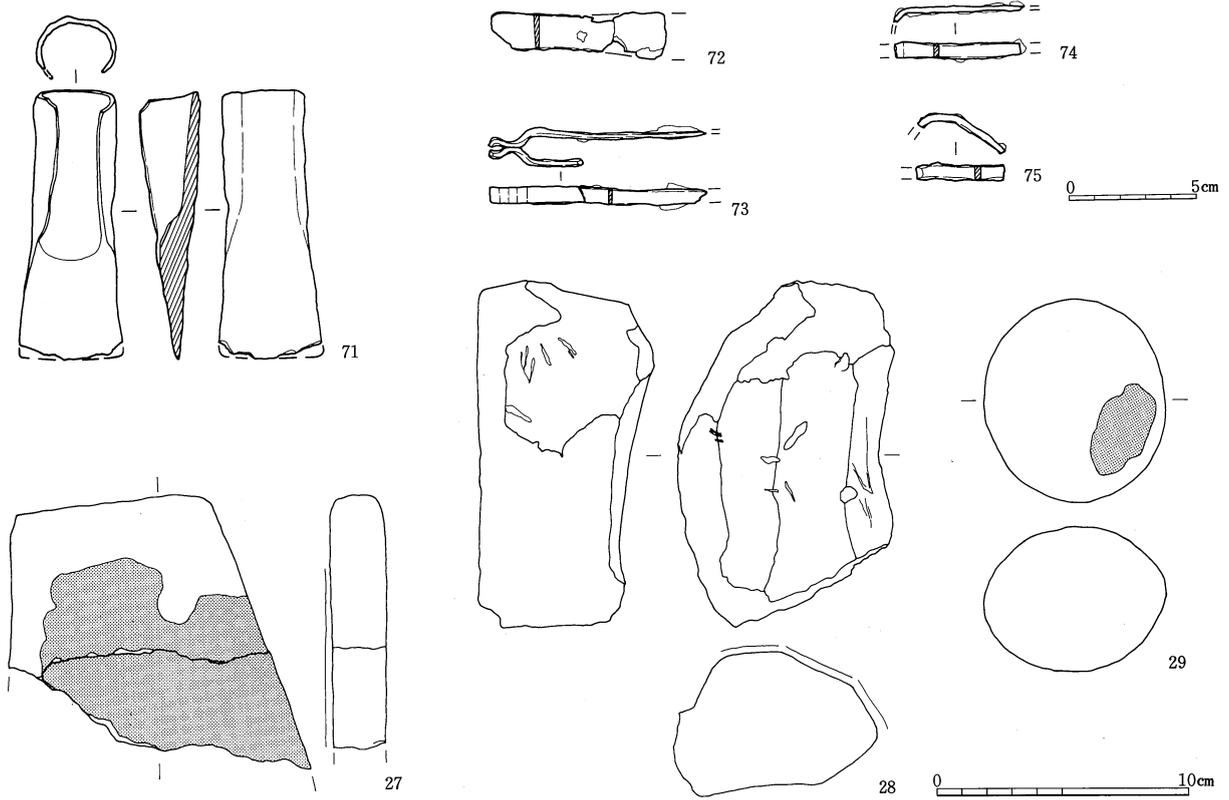


図86 120号住居址（4）

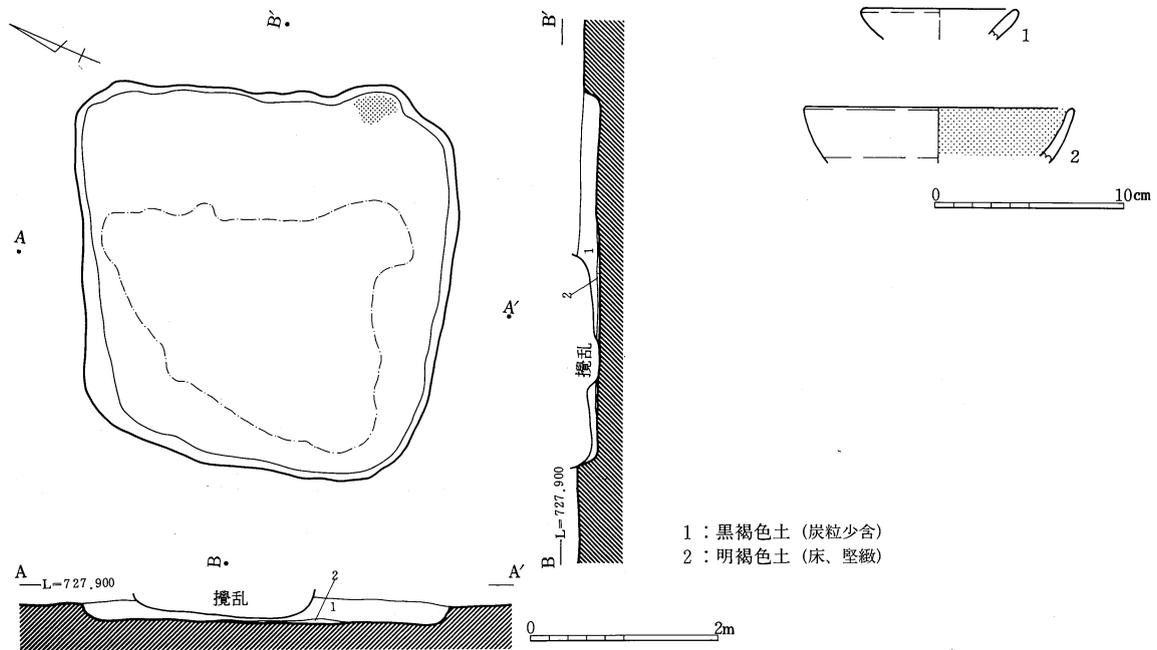


図87 121号住居址

121号住居址（図87、PL167）

II A 1層で検出された。明確な線引きは南側にて可能であったが、全体に不明瞭であった。158号住居址を切る。覆土は黒褐色土の単層で埋没状況を示唆する所見は得られなかった。床面は、床下に存在する158

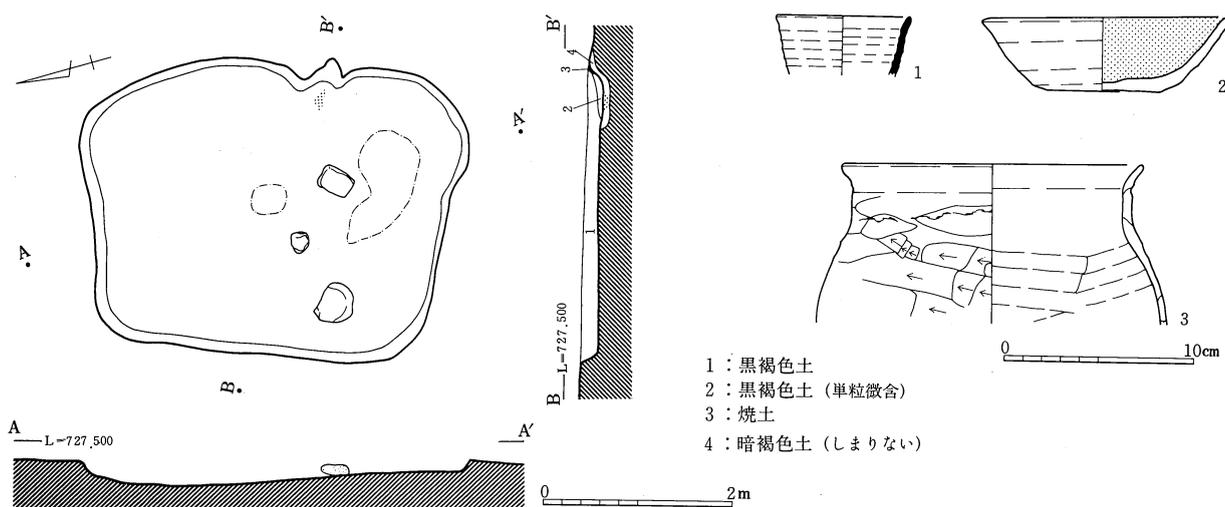


図88 122号住居址

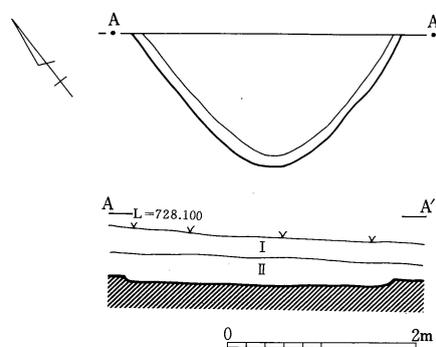


図89 123号住居址

号住居址の形状に合致して、厚さ1～3 cmの黄褐色粘質土により床面を強固にしていた。貼床面以外は地山を利用し、堅緻ではない。カマドは東壁隅より火床の残存が認められたにすぎなかった。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。須恵器甕1・長頸瓶1・広口甕1、土師器坏6・甕4・小形甕1・内面黒色坏碗不明1(2)・土師質坏5・小皿1(1)・羽釜小片1個体分が出土したが大半が破片である。

時期 13段階頃と思われる。

122号住居址 (図88、PL167)

II A 2層上面で検出された。検出面は砂礫層(湯川層)が南半部分で認められた。覆土は単層で浅いため埋没状況を確認するに至らなかった。床面は地山に黒褐色土の混じる堅緻面が部分的に確認され、そのほかは地山面が利用されていた。本址南半壁は崩れやすいにもかかわらず土を貼って補強した様子は認められなかった。カマドは火床と思われる焼土粒が東壁部に若干残存していた程度である。床上で被熱した礫が数点検出され、カマド袖石として利用された可能性がある。袖は地山の掘り残しが認められた。

遺物 遺物の出土量は少ない。須恵器小形坏1(1)・甕1・四耳壺1・長頸瓶1、土師器甕7(3)・内面黒色坏5(2)個体分がカマド周辺部にやや多くみられた。

時期 8～9段階頃と思われる。

123号住居址 (図89、PL168)

II A 2層上面で検出された。検出されたのは南西隅のみで大半は用地外に広がると判断される。覆土は

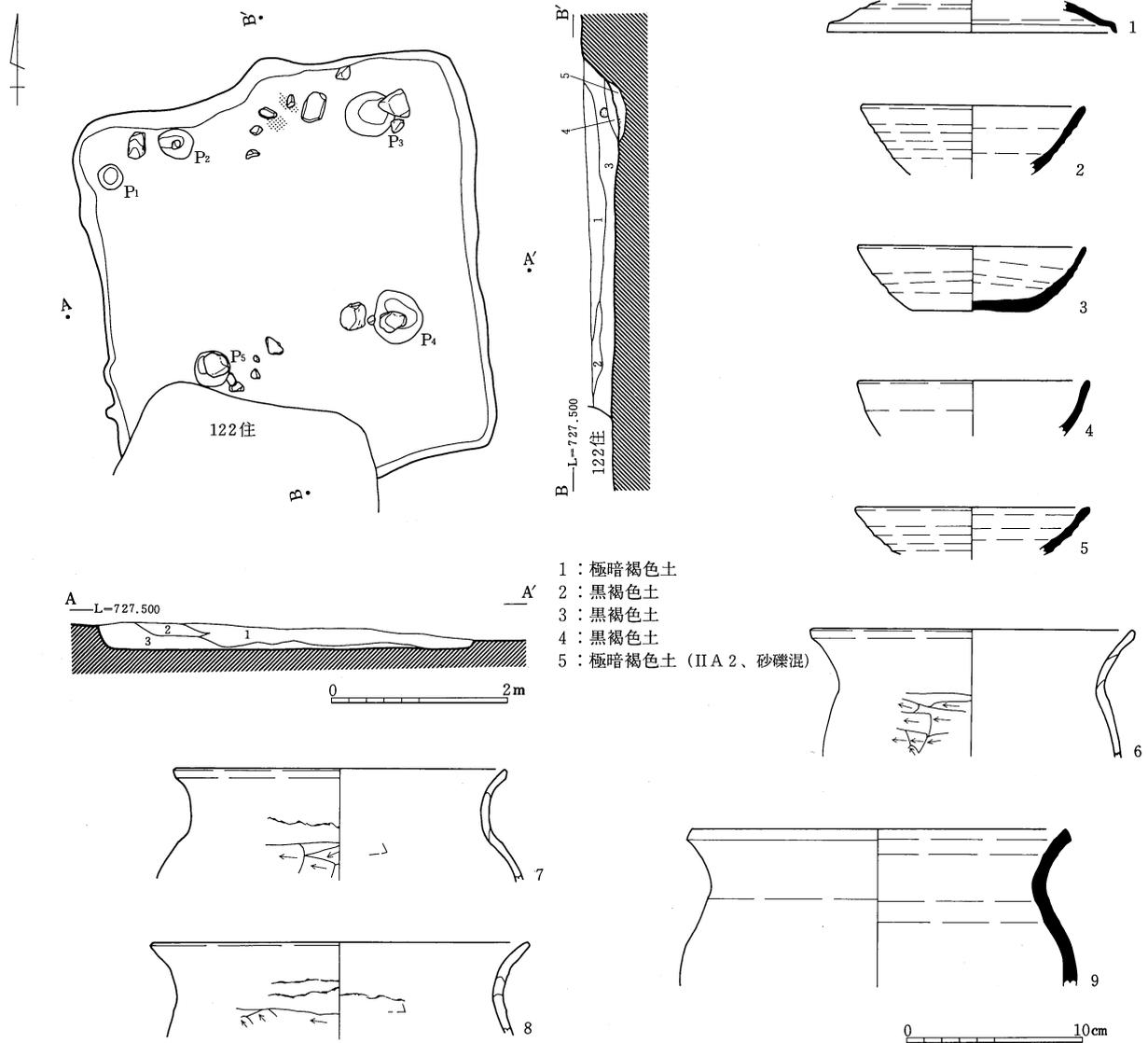


図90 124号住居址

黒褐色土の単層で明確な床面も認められない。遺物の出土は皆無であった。本址周辺には検出面からの掘り方が浅い住居址が散見され、調査時に住居址の可能性があると判断し、本報告でもこれに従った。遺物の出土は認められない。時期不明である。

124号住居址 (図90、PL168)

IIA 2層上面で検出された。検出面は黄褐色土の砂礫層(湯川層)が南半部分で認められた。122号住居址に切られる。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。122号住居址覆土よりやや明るい色調であった。床は掘り下げた地山(砂礫層)面の隙間に、若干黒褐色土を混ぜた程度で特に堅緻な部分は認められない。壁は崩れやすいにもかかわらず土を貼って補強した様子は認められなかった。ピットは5基確認され、P2～5が柱穴と判断される。いずれも周辺に礫が散見され、地盤の弱さを補強するためのものと思われる。カマドは袖石に利用されたと思われる礫と一部焼土が認められたにすぎなかった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏14(2～5)・蓋3(1)・甕1・短頸壺(9)・長頸瓶1、土師器甕9以上(6～8)・内面黒色坏5個体分が出土している。以上全体量は少なく、坏類には黒色処理されたものはほとんど認められない。

時期 5段階頃と思われる。

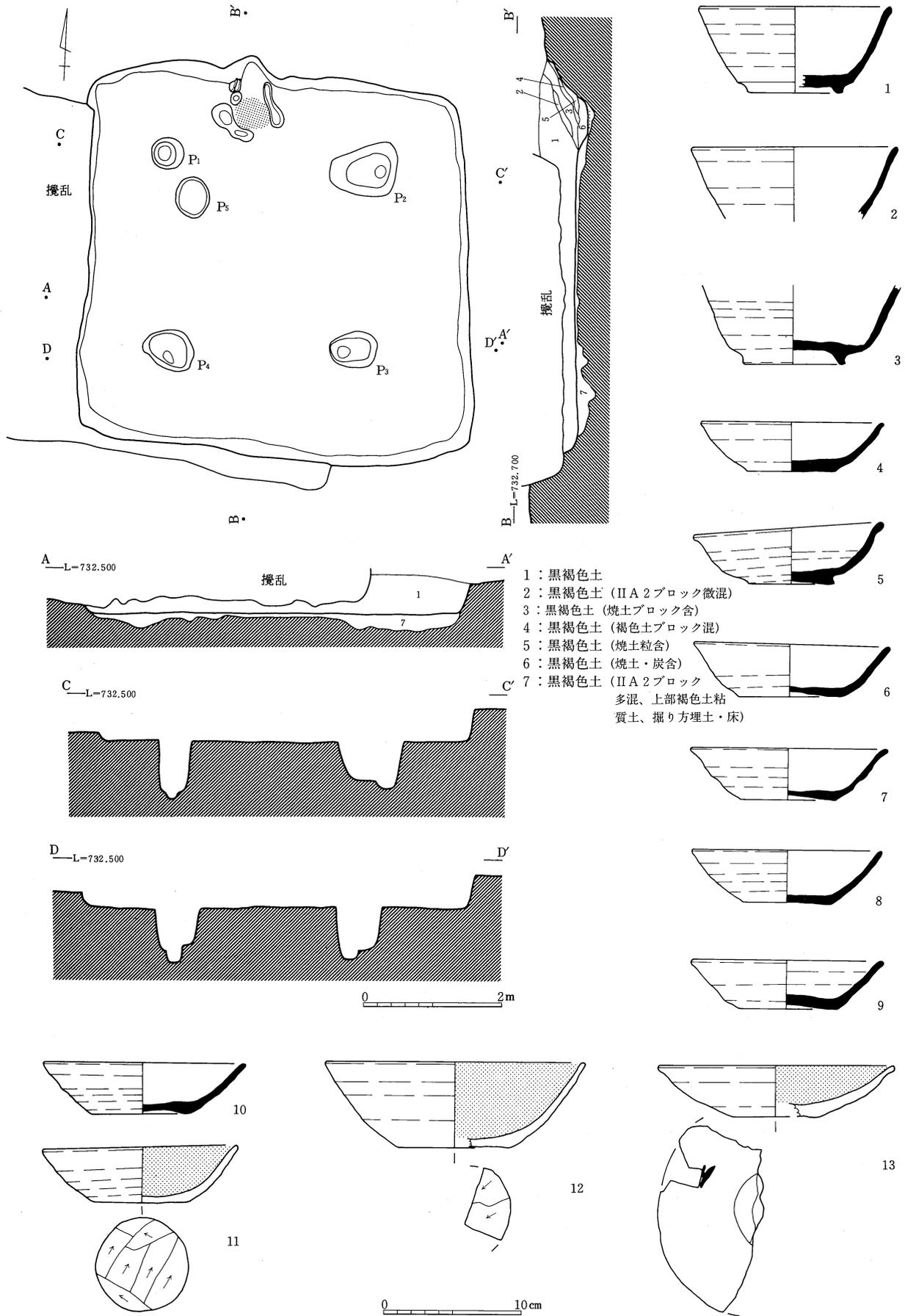


図91 125号住居址(1)

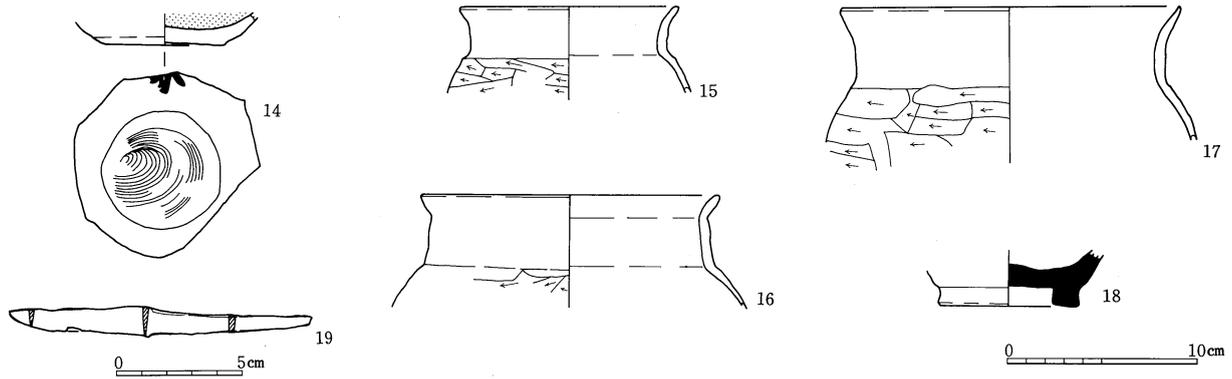


図92 125号住居址(2)

125号住居址 (図91・92、PL168・225)

II A 1層上面で検出された。本址西半分以上が上層において攪乱を受けていた。覆土はII A 2ブロックが混入する黒褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しの可能性がある。床面は、ほぼ全面約2 cmの厚さで褐色粘質土の貼床が施され硬く平坦である。南壁際の中央付近で掘り方内より完形の須恵器杯(8)が出土している。ピットは5基確認された。P1～4は柱穴と判断され、これらのピットはいずれも黒褐色土にII A 2ブロックが混入していた。カマドは左袖に2つの礫が残存し、火床左右には袖石の抜き取り痕と思われる落ち込みが確認された。カマド構築に際しては火床下に貼床の続きが認められたことから、床面構築後によるものと観察される。

遺物 遺物の出土量は、高台杯3(1～3)・須恵器杯18以上(4～10)・甕1・長頸瓶1(18)、土師器甕3(16・17)・小形甕1(15)・内面黒色杯12以上(11～14)個体分が出土した。金属器は、刀子1(19)・その他不明鉄製品1点が出土している。13・14には墨書が書かれ、13は「天」、14の文字は判読できない。図化できた遺物の大半は床面出土のものである。カマドからはほとんど出土していない。

時期 6段階頃と思われる。

126号住居址 119号住居址と切り合うため118号住居址に後述**127号住居址** (図93、PL168・217)

II A 2層上面で検出された。571号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とし、II A 2ブロックの混入が多く人為的な埋め戻しが考えられる。床面は掘り方埋土を踏み固めたもので固くほぼ平坦である。カマドは右袖に袖石が遺存し、面取りされた軽石礫がカマド内から出土している。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器杯21(1・2)・甕2・長頸瓶1、土師器甕12(6～11)・小形甕1・内面黒色杯25(3～5)・両面黒色杯碗不明5個体分が出土している。個体数は多いものの破片が主体である。

時期 8～9段階頃と思われる。

128号住居址 (図94・95、PL168・202)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックが混入する暗褐色土を埋め戻し平坦に床面を形成したものであった。床面は全体に堅緻で、中央部がやや高い。P1からは土師器甕がつぶれた状態で出土した。周溝はカマド部、北東隅を除いて幅約20 cm、深さ7 cm前後で検出された。カマドは暗褐色土を構築材とした両袖が検出され、火床が屋内に位置することから、実際の袖はさらに伸びるとと思われる。

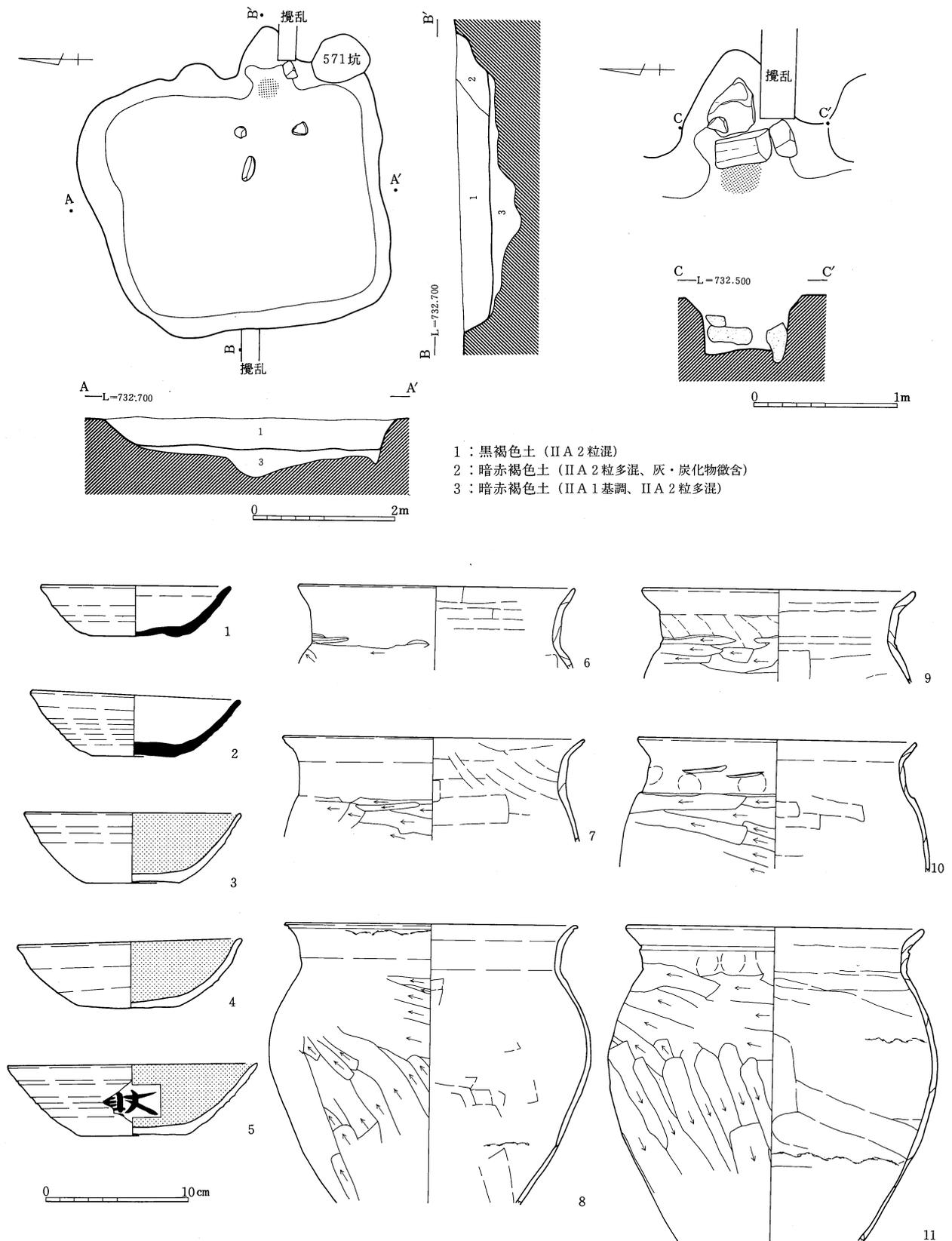


图93 127号住居址

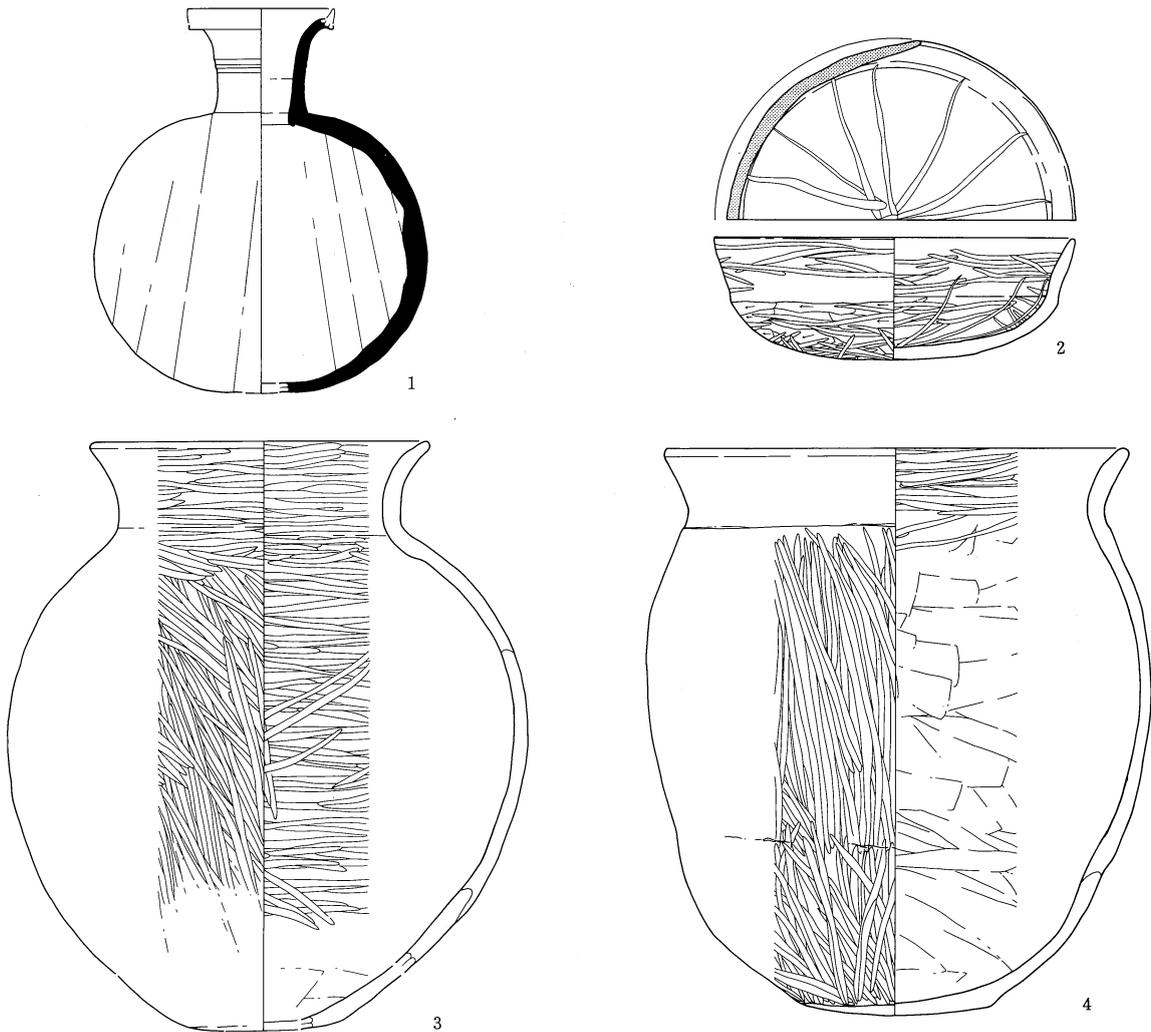
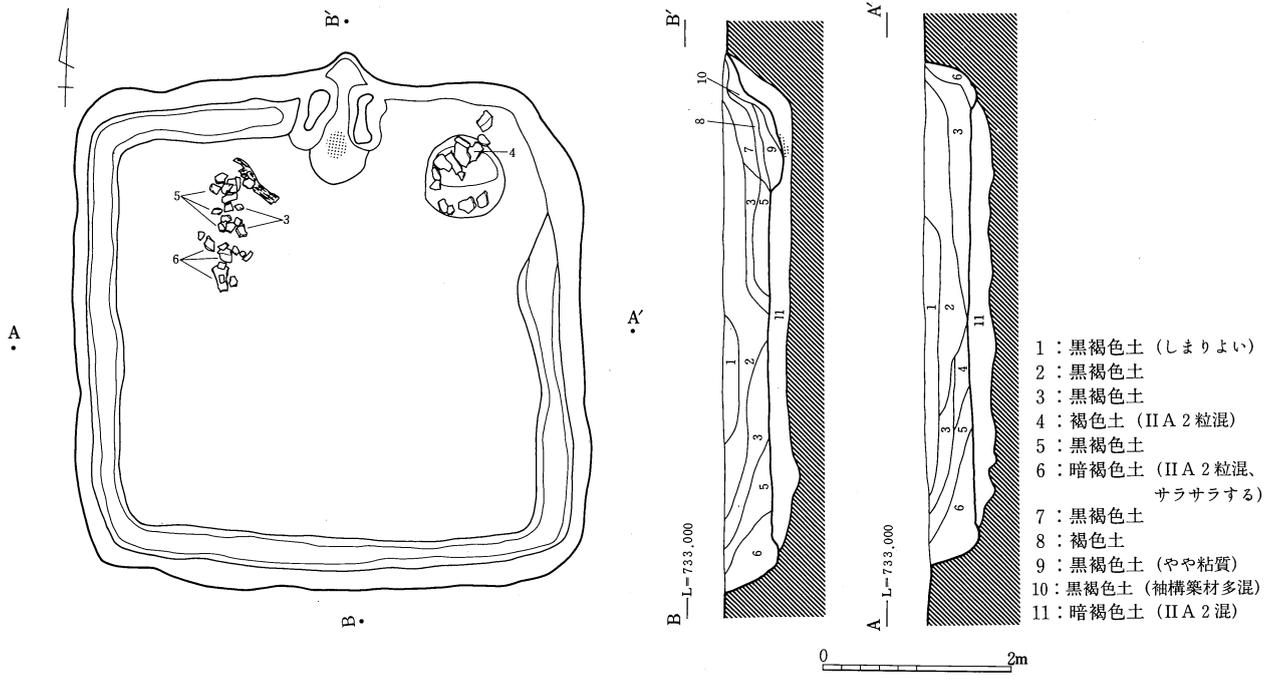


図94 128号住居址 (1)

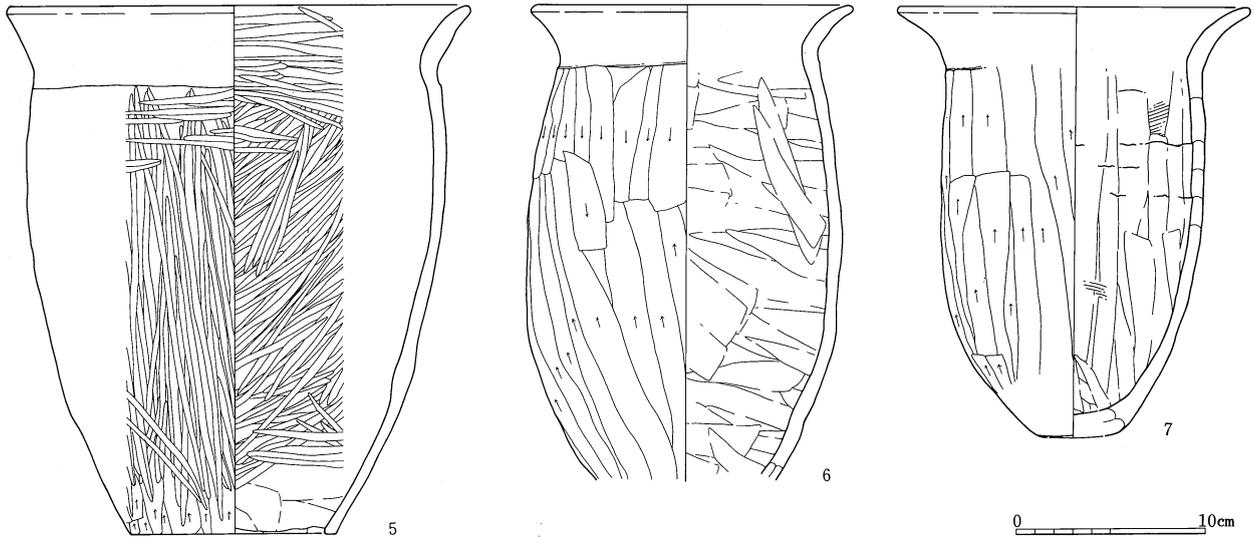


図95 128号住居址(2)

遺物 1は須恵器フラスコ形提瓶、2は土師器碗、3・4は同胴張り甕、5は同甗、6・7は同長胴甕。
3～6はカマド左手前と北東隅から細かく割れて出土し、ほかはカマドの周辺から出土した。

時期 古墳時代後期後半。

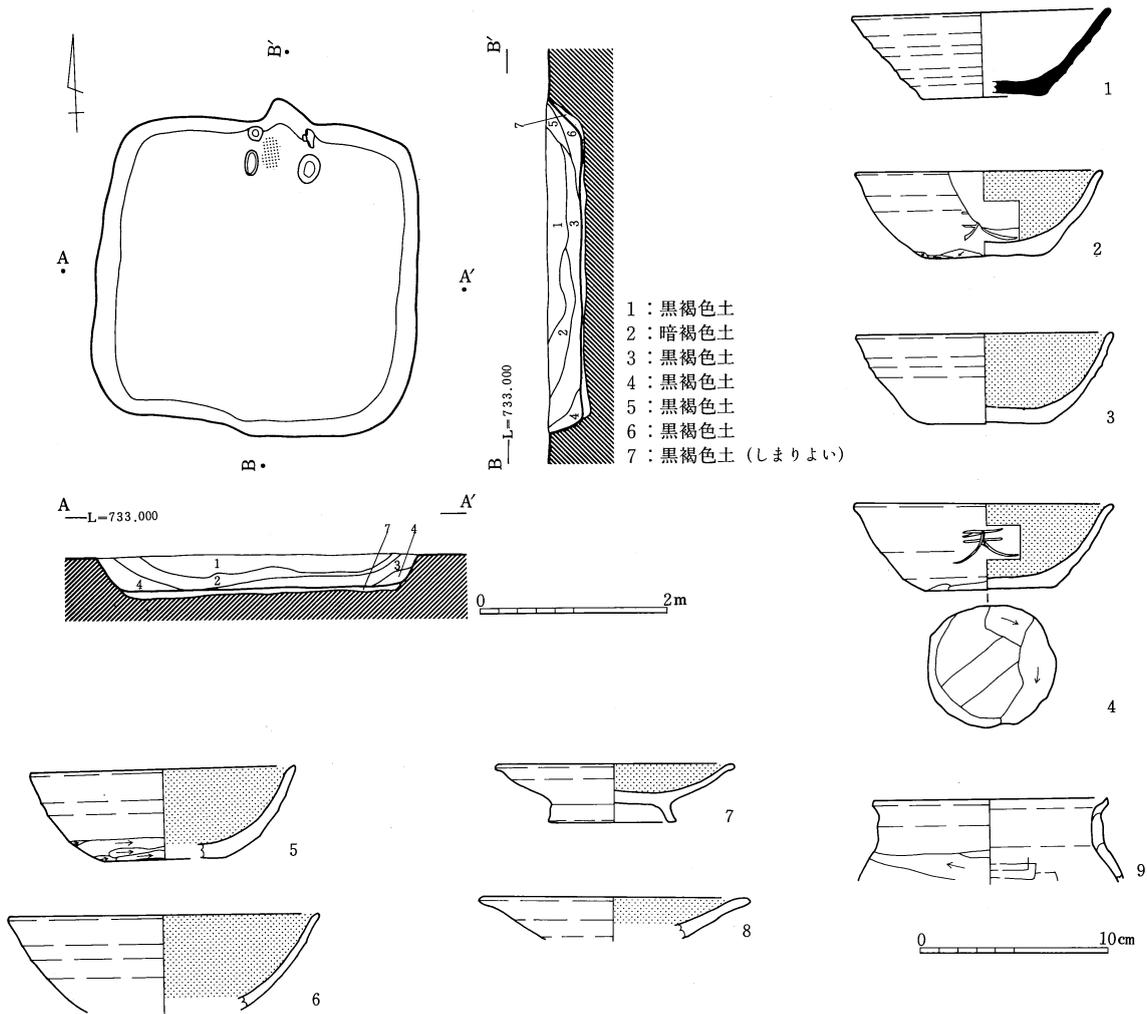


図96 129号住居址

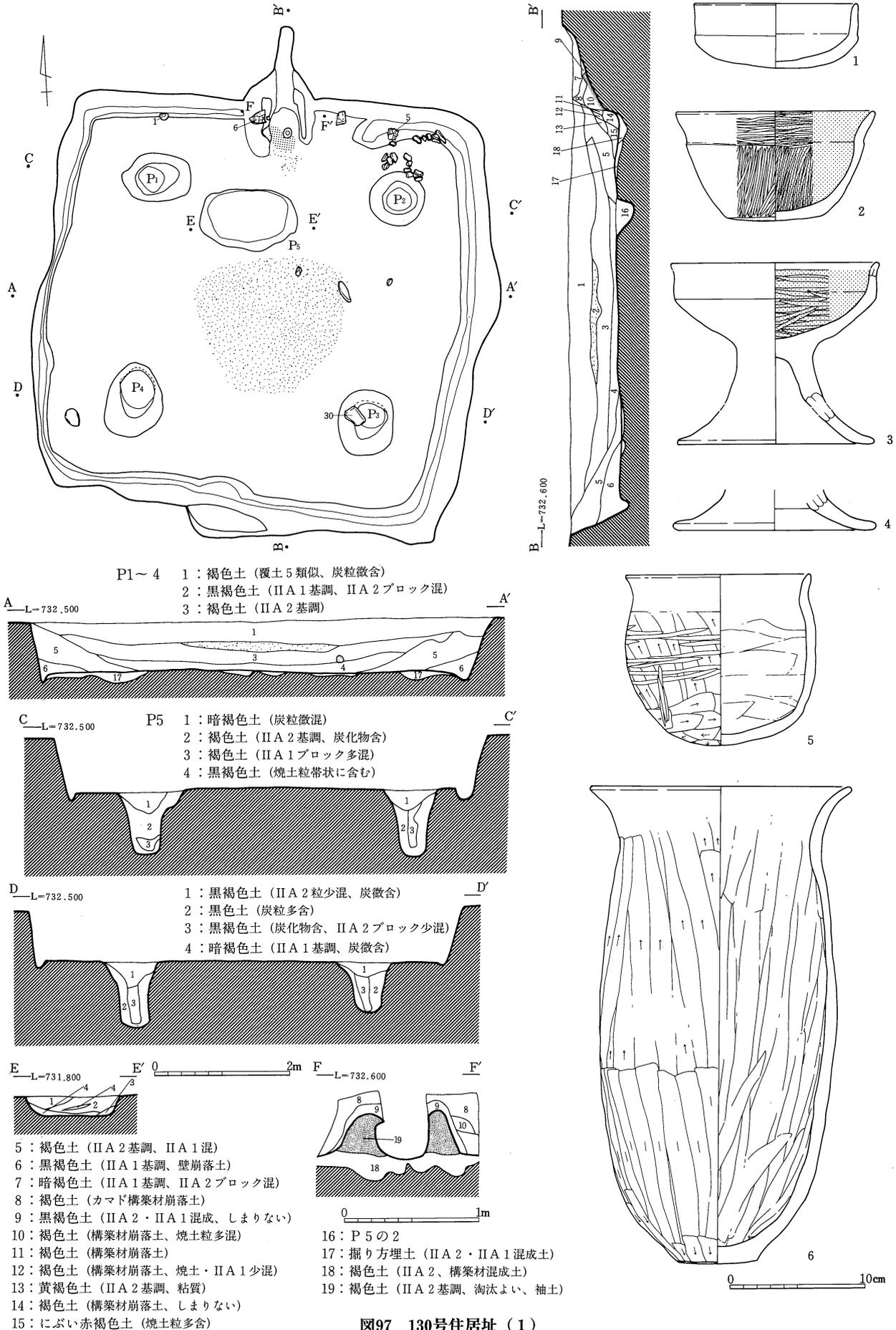


図97 130号住居址 (1)

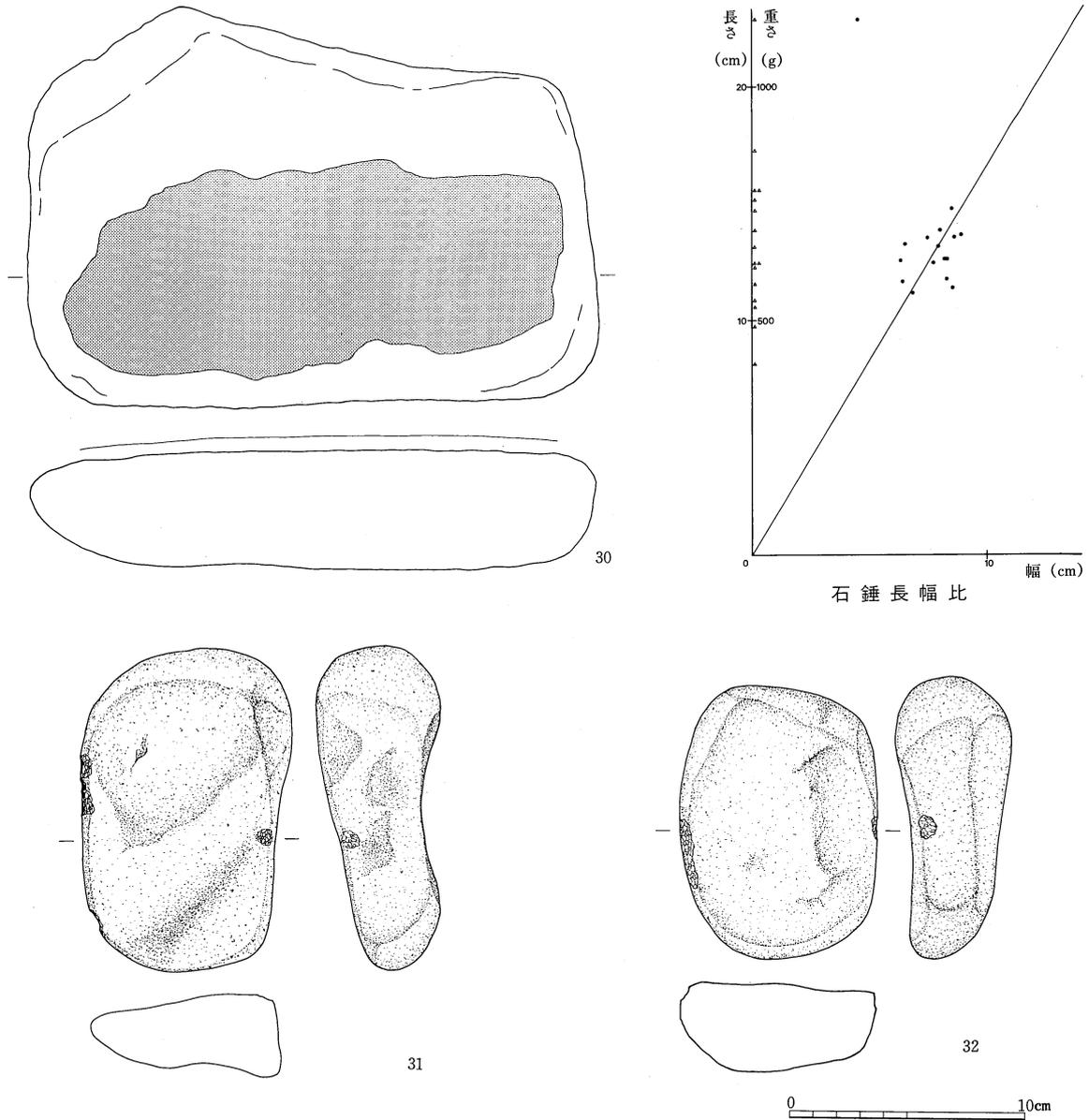


図98 130号住居址(2)

129号住居址 (図96、PL169・217)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、径0.5~1.0mmの礫を若干混入した貼床が施され、あまり堅緻でなく平坦であった。カマドは火床がやや左袖に寄り、両袖にあたる位置に袖石の抜き取り痕が確認された。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器坏3(1)・甕4・壺瓶類1、土師器甕5・小形甕1(9)・内面黒色13(2~5)・皿3(7・8)・坏碗不明1(6)個体分が出土した。2・4は刻書「天」が刻まれている。以上出土量は少なく内面黒色坏類が主体を占める。

時期 8段階頃と思われる。

130号住居址 (図97・98、PL169・258～260)

II A 2層上面で検出された。覆土は基本的には淘汰もよいことから自然堆積と思われる。このうち2層(炭層)は、埋没途中で何らかの人為的所作があったことを示唆するが、不明である。遺物は北東隅で土器片とともに石錘が床面上で出土したが、貯蔵穴は検出されなかった。掘り方はほとんど認められず、床は掘り下げた地山面の凹凸を黄褐色土で充填し、全体に堅緻で、平坦である。壁は南東で上端部に崩落が認められた。周溝はカマドを除き壁際に幅約20 cm、深さ10 cm 前後で検出され、カマド対面、南壁中央の張り出し部に対応するように屋内への膨らみが認められた。出入り口施設にかかわるものと思われる。ピットは5基確認され、P1～4は柱穴と判断される。土層断面から柱を抜き去ったあと、本址の埋没が開始された過程が観察される。P5は覆土中に焼土粒・炭化粒を含むが、灰は認められない。カマドは北壁中央に位置する粘土カマドである。左袖上に完形に近い甕(6)がつぶれた状態で出土した。火床は内壁より内側にあり、支脚石痕が右袖に寄って認められた。

遺物 1は土師器杯、2は同小形鉢、3・4は同高杯、5は同球胴甕、6は同長胴甕。北東隅からは10～15 cm・φ 7 cm 位の石錘が16点出土した。その内30・31には加工痕が認められた。

時期 古墳時代後期後半。

131号住居址 (図99、PL169)

II A 2層上面で検出された。北壁中央部に床が認められたことから住居址と判断し調査を進めた。覆土はII A 2ブロックが混入することから、人為埋没と思われる。掘り方は中央部で高く周辺部が低く、掘り方埋土上面を床としたもので、堅緻でなく平坦でもなかった。東壁・南壁で段を有する。カマドは痕跡すら認められず、存在しなかった。

遺物 出土土器の全体量は少ない。須恵器杯9(1・2)、土師器甕1・内面黒色杯9個体分が出土したが、小破片ばかりである。時期は不明である。

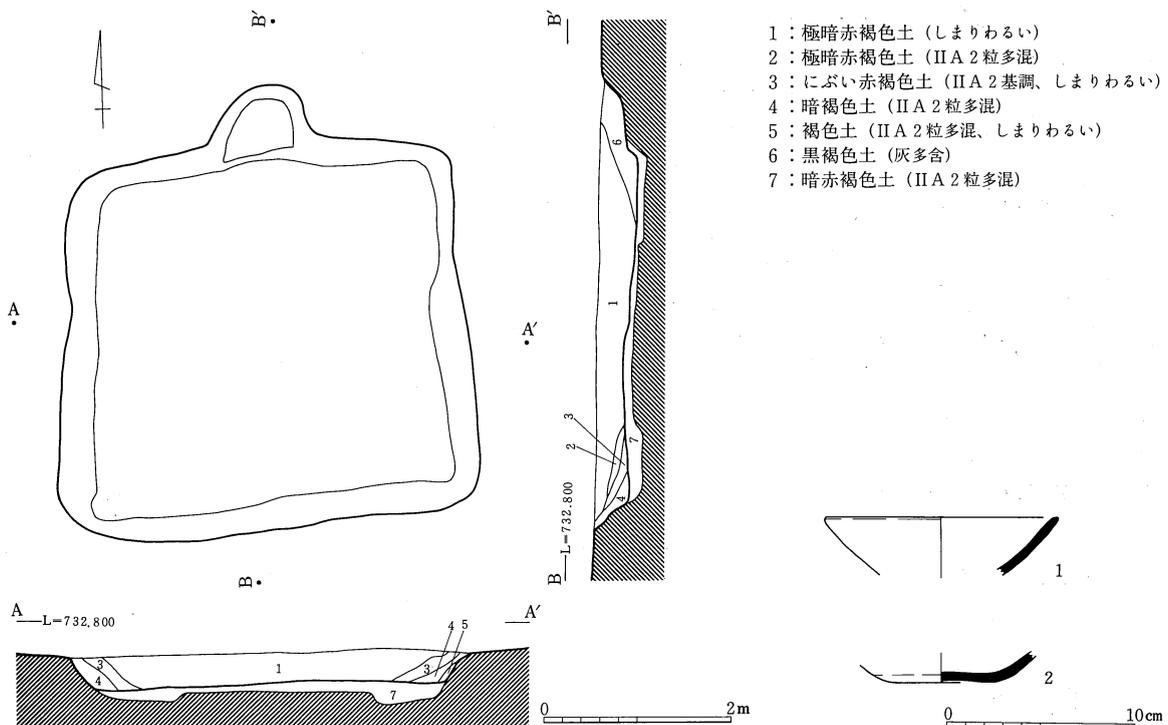


図99 131号住居址

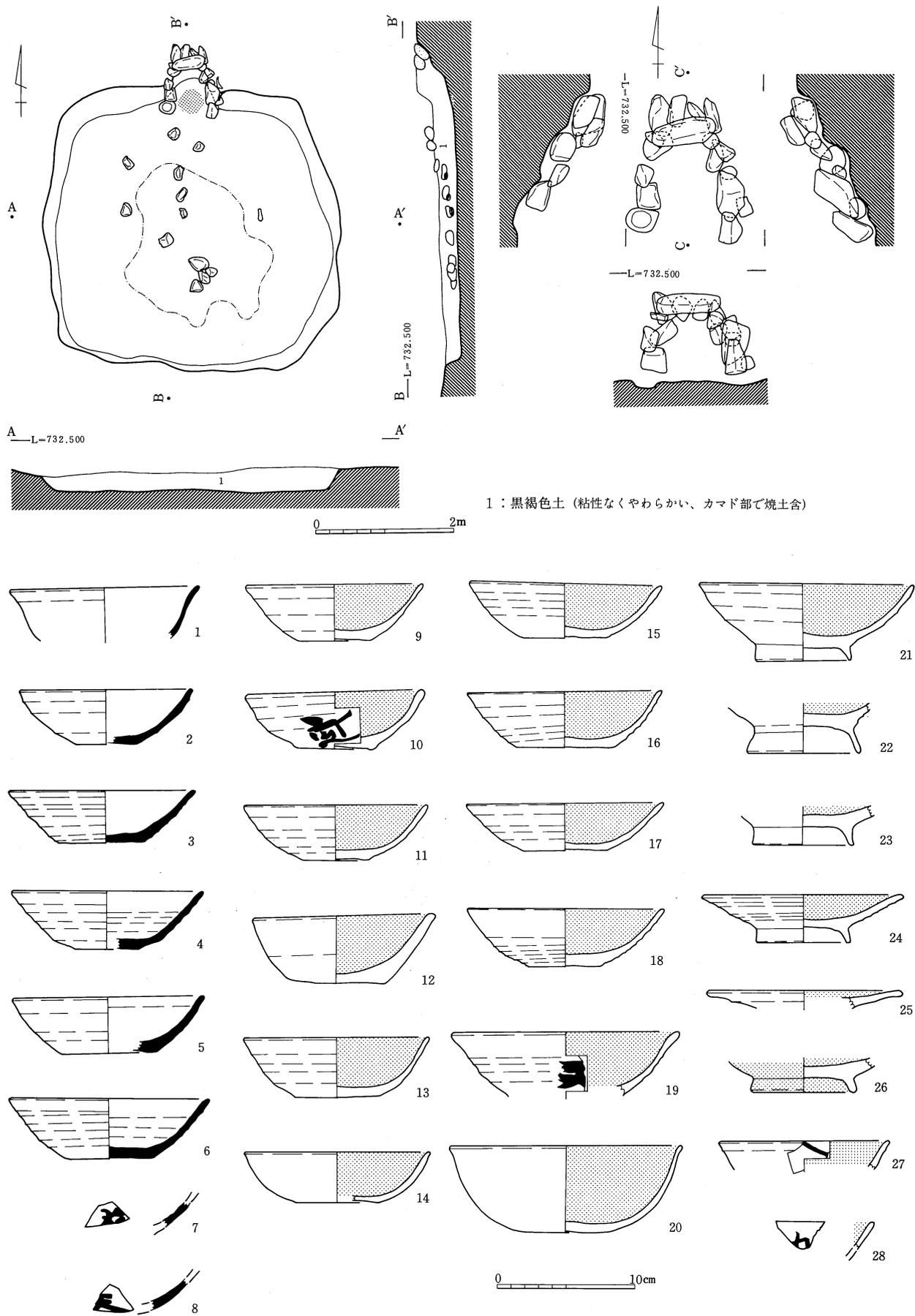


图100 132号住居址 (1)

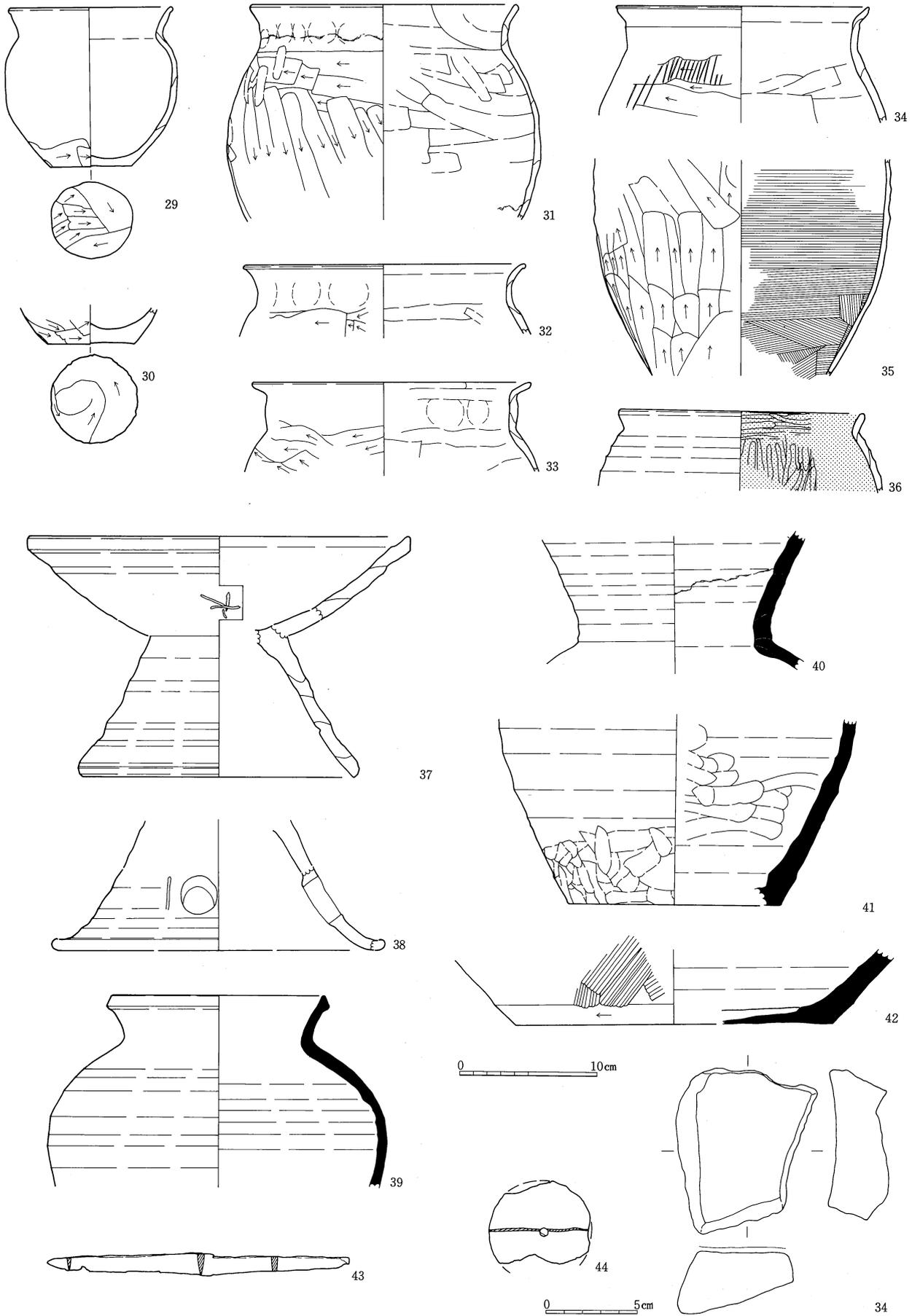


图101 132号住居址(2)

132号住居址 (図100・101、PL169・217・218・225・256)

II A 1層上面で検出された。焼土を伴う小礫が露呈し、その東側で土器片が多量に得られた。床下に144号住居址が存在する。覆土は単層としか捉えられなかったが、カマド部から南に広がって被熱した礫が認められ、各礫の出土は南へ下がっていくことが看取された。北壁側からの自然堆積を想起させる。床は床下にある144号住居址埋土上面に黄褐色土による薄い貼床が施され、中央部で固く、全体に平坦であった。カマドは袖部・煙道部に礫を並べた石組カマドで、遺存状況はよく天井石が原位置を留めていた。火床は左袖先端に袖石の抜き取り痕が検出されている。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏33以上 (1~8)・蓋1・甕3 (42)・四耳壺2 (40・41)・短頸壺1 (39)・長頸瓶2、土師器甕18 (31~34)・小形甕1・ロクロ甕1 (35)・ロクロ小形甕2 (29・30)・内面黒色ロクロ甕1 (36)・内面黒色坏24以上 (9~18・20)・碗20以上 (21~23)・皿3 (24・25)・両面黒色碗1 (26)・坏碗不明3 (19・27・28)・大形盤2 (37・38) 個体分が出土した。8・19には墨書「天」、10には「血または之」が書されるが、10は148住一8と同一文字と思われる。7・27・28は文字不明で、37は「六」又は「大」が刻書されている。

金属器は刀子1 (43)・紡錘車1 (44)、石製品は砥石1 (34) が出土した。

時期 9段階頃と思われる。

144号住居址 (図102、PL171)

132号住居址床下調査により検出された。覆土はII A 2ブロックの混入した黒褐色土で淘汰が悪いことから、人為埋没と思われる。132号住居址構築時に埋め戻されたのであろう。床は、全体に浅い荒ぼり後、II A 2を埋め戻し、平坦な床を形成していた、全体的に堅緻であった。カマドは132号住居址構築時に取り除かれたのか、床面と同レベルで火床が認められたにすぎなかった。

遺物 出土土器の全体量はあまり多くない。須恵器坏6 (1・2)・甕2・壺瓶類1、土師器甕小片・内面黒

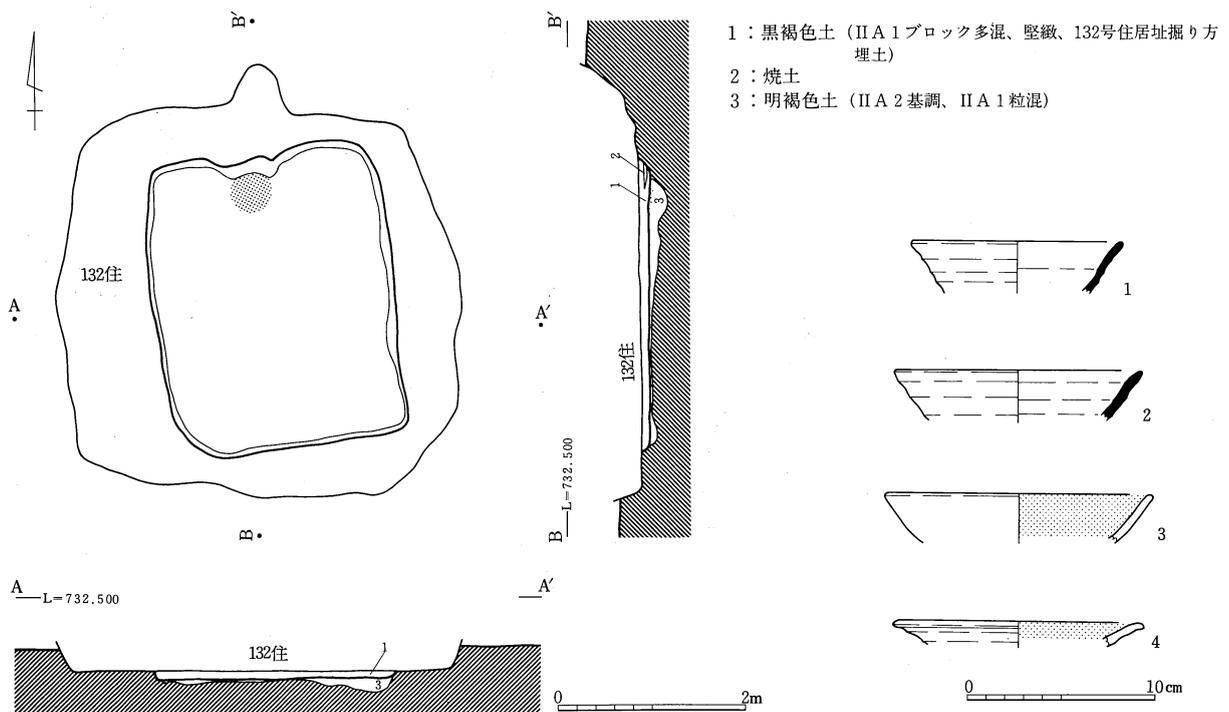


図102 144号住居址

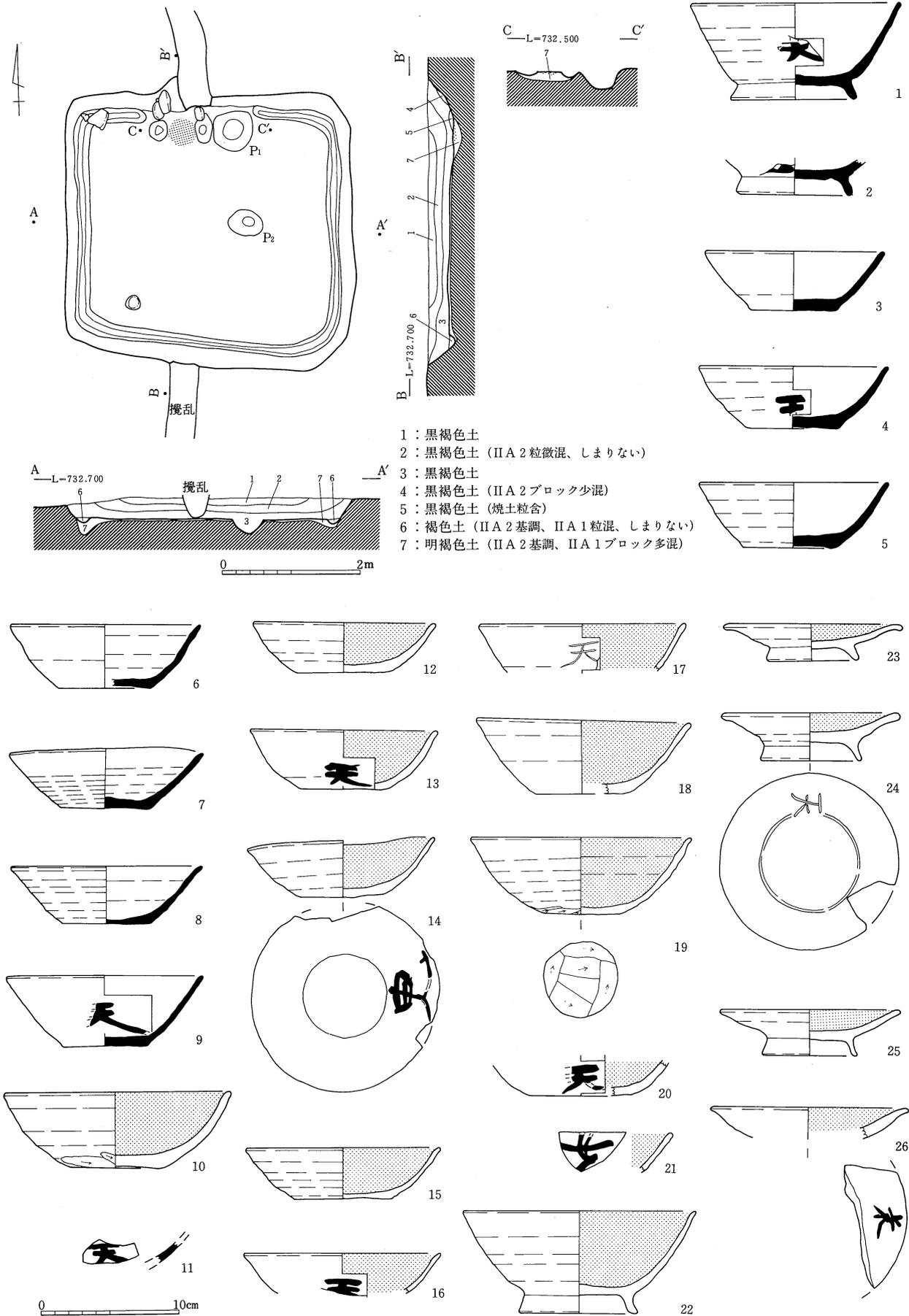


図103 133号住居址 (1)

色坏2(3)・皿1(4)・両面黒色碗皿不明1個体分が出土した。須恵器甕には把手付きが1個体ある。

時期 132号住居址拡張前の住居であることから7段階をくだらない。

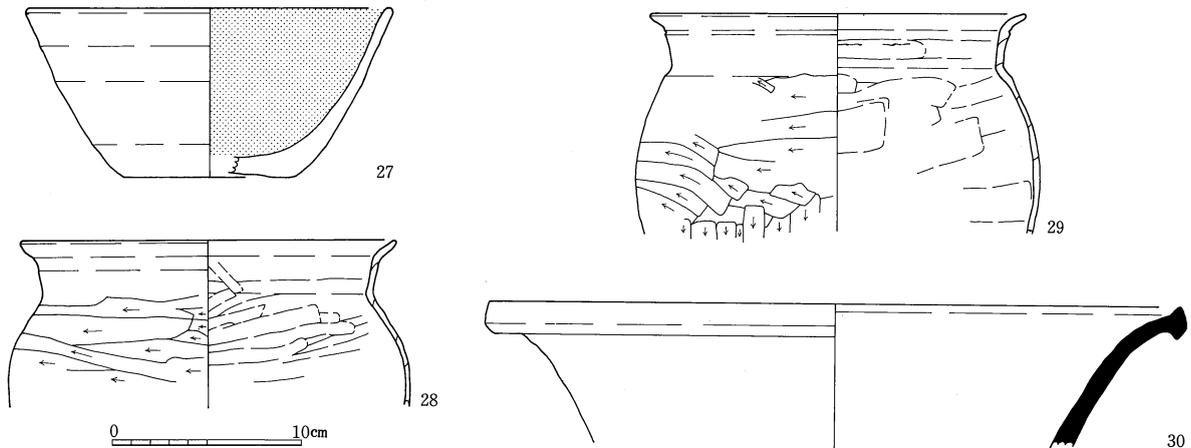


図104 133号住居址(2)

133号住居址 (図103・104、PL169・170・218・219・256)

II A 2層上面で検出された。暗渠によって一部破壊を受けている。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は3層に土器片が多く認められた。床はおもに黄褐色土による薄い貼床が施され、ほぼ全面が堅緻で平坦であった。周溝はカマド部分を除き、幅15~25 cm、深さ8 cm前後で検出された。ピットは2基確認され、P1は覆土に明度の低い焼土粒が混じる。カマドは東側半分が攪乱を受けるため、遺存状況はよくない。左右の袖に礫が認められたほか、袖石の抜き取り痕が検出されている。支脚石は検出されなかった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(1・2)・坏12以上(3~9・11)・蓋1・甕1(30)・広口甕1、土師器甕2(28・29)・小形甕1・ロクロ甕1・内面黒色坏19以上(10・12~15・18~20)・碗3(22)・坏碗不明4(16・17・21)・皿6(23~26)・鉢1(27)、土師質碗1個体分が出土した。石製品は砥石1・石臼1が出土した。7・12・13・23は北西隅からまとまって出土した。1・4・9・11・13・16・20には墨書「天」、14には墨書「兎」、17・24には刻書「天」、2・21・26は文字不明である。

時期 8段階と思われる。

134号住居址 本址は特殊遺構7に変更

135号住居址 (図105、PL170・219)

II A 2層上面で検出された。764号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とする自然堆積と思われる。床はおもにII A 2ブロックの混入した暗褐色土による貼床が数cmで施され、固く平坦である。周溝はカマド部分を除いて、幅約20 cm、深さ10 cm前後で検出された。南東隅・北東隅では壁より離れている。ピットは1基確認された。カマド袖石の抜き取り痕と思われる浅い落ち込みと火床が検出されるに留まった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏2(1・2)・甕5・広口甕1(12)、土師器甕6(11)・小形甕1(10)・ロクロ小形甕1・内面黒色坏30以上(3~8)・碗2・皿4(9)、灰釉陶器碗1個体分が出土した。坏碗類の大半は黒色坏碗皿などで、カマドからの出土が目立って多い。3~5・9は文字不明な墨書が書されている。8は「天」と思われる。

時期 8段階に相当すると思われる。

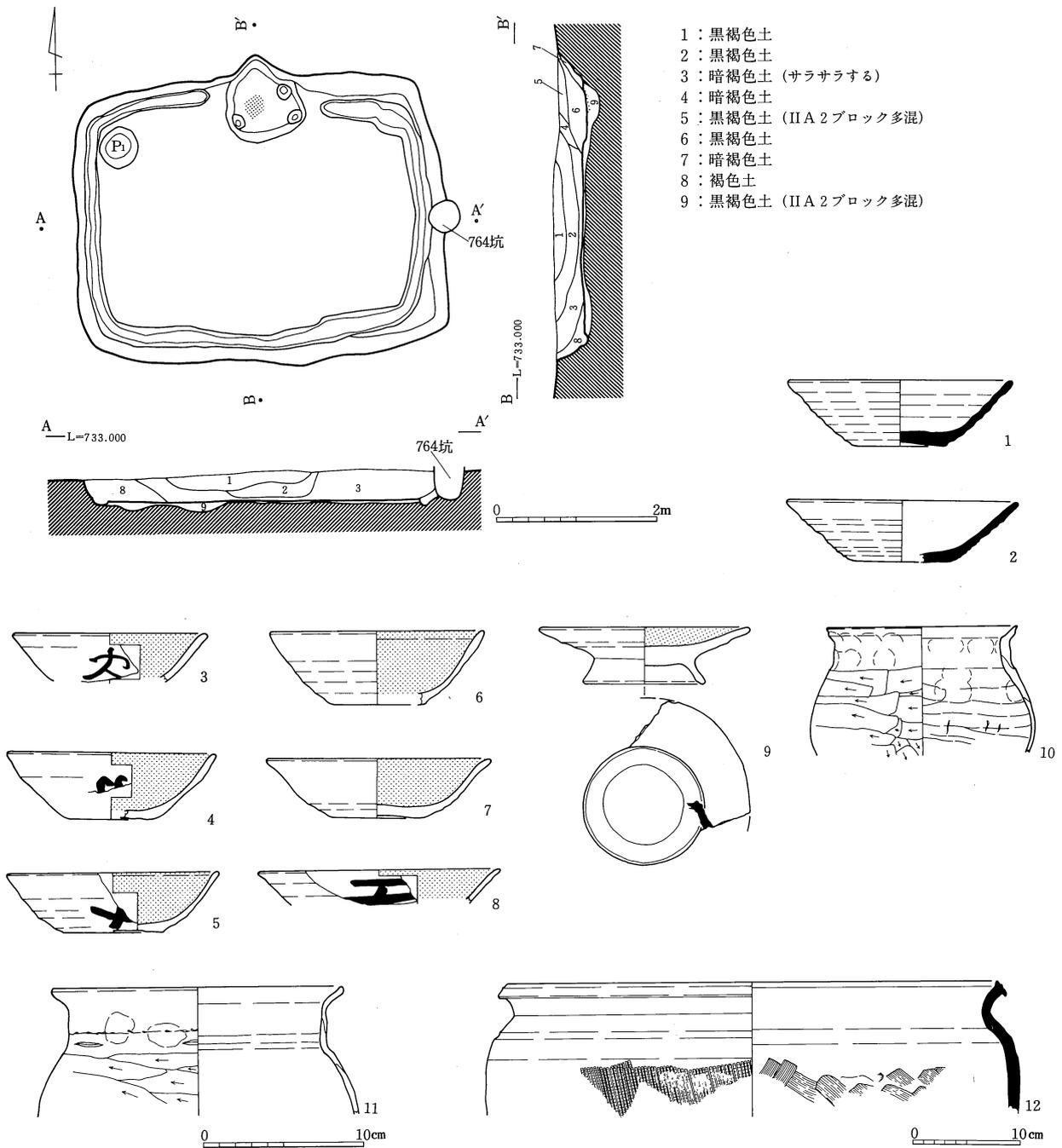
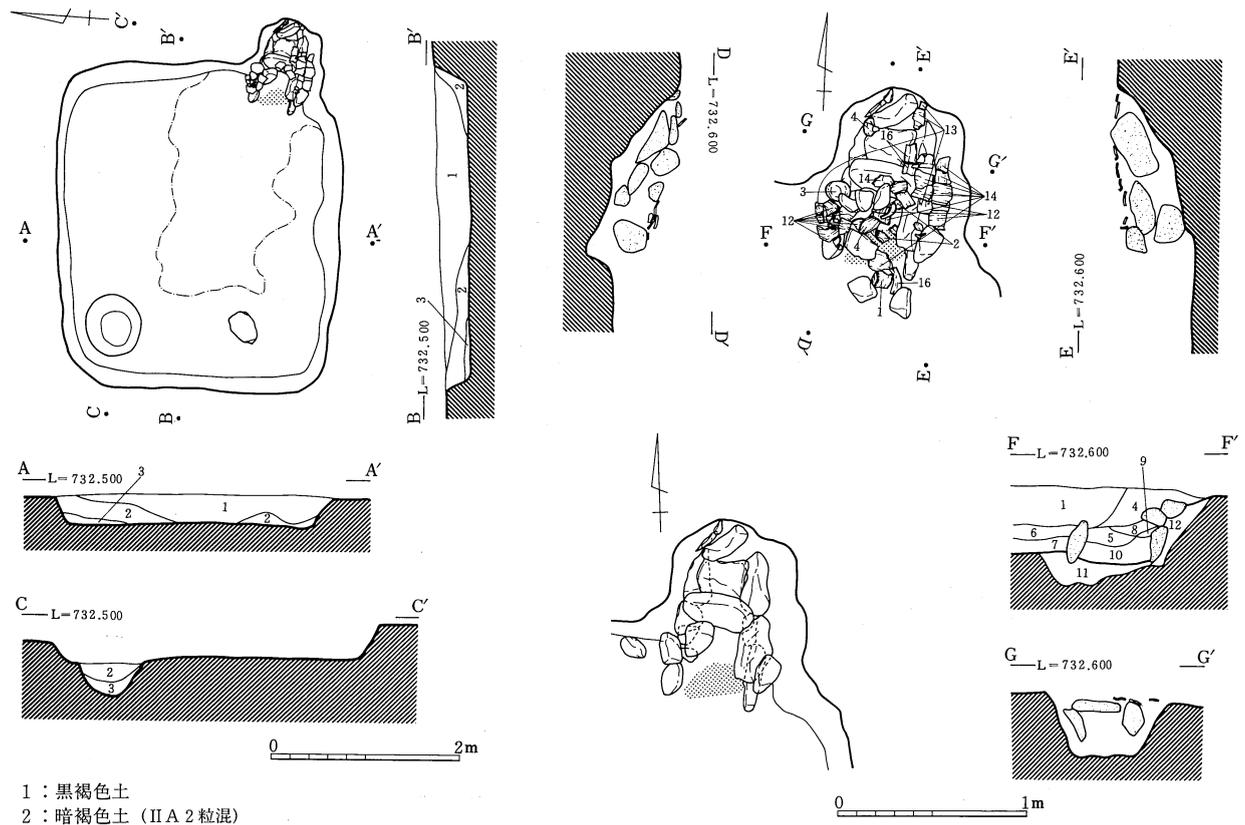


図105 135号住居址



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 暗褐色土 (IIA 2 粒混)
- 3 : 極暗褐色土 (IIA 1 基調、IIA 2 少混)
- 4 : 黒褐色土 (1 近似、焼土・炭粒微含)
- 5 : 黒褐色土 (1 近似、焼土・炭粒微含、しまりよわい)
- 6 : 極暗赤褐色土 (IIA 2 ブロック少混、焼土粒微含)
- 7 : 極暗褐色土 (焼土ブロック多含、炭粒微混)
- 8 : 暗褐色土 (焼土粒微含)
- 9 : 極暗褐色土 (炭粒微含、しまりよわい)
- 10 : 黒褐色土 (焼土ブロック多含)
- 11 : 黒色土 (IIA 1 基調、しまりよわい)
- 12 : 暗褐色土 (焼土粒多混)

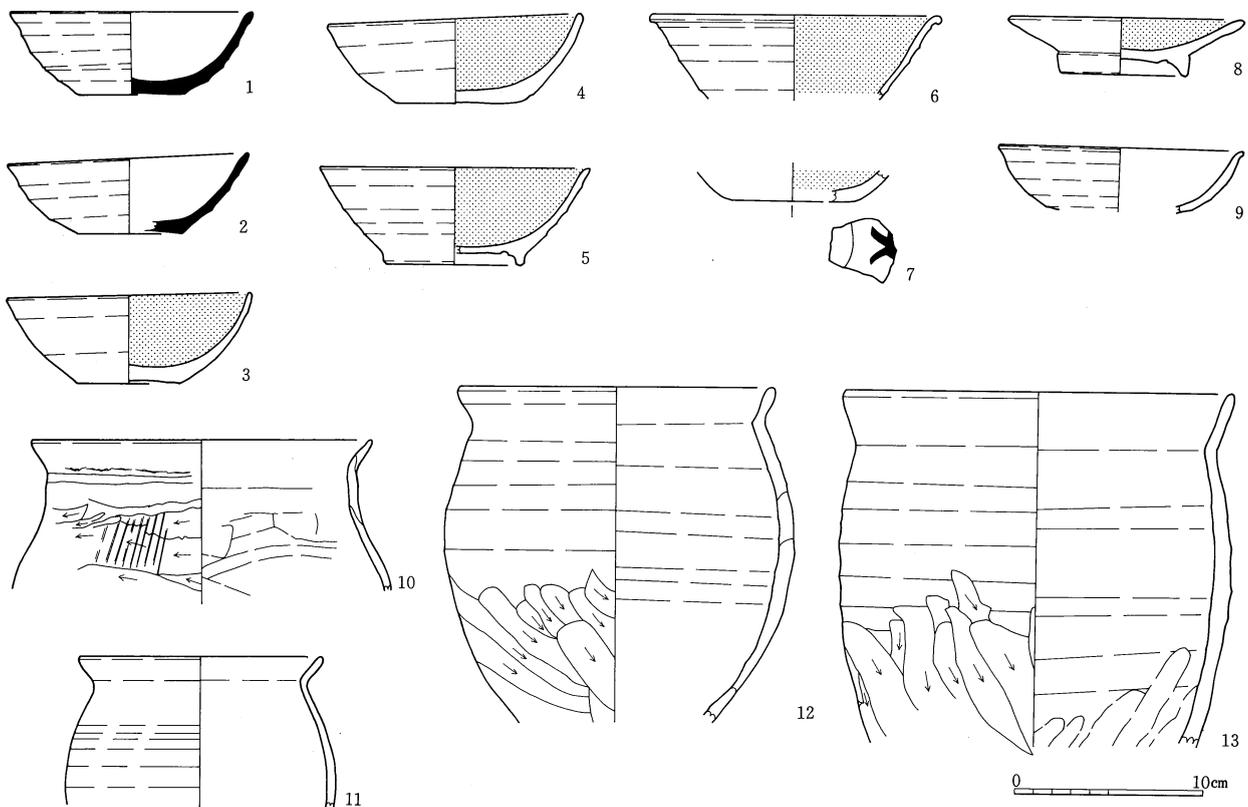


图106 136号住居址 (1)

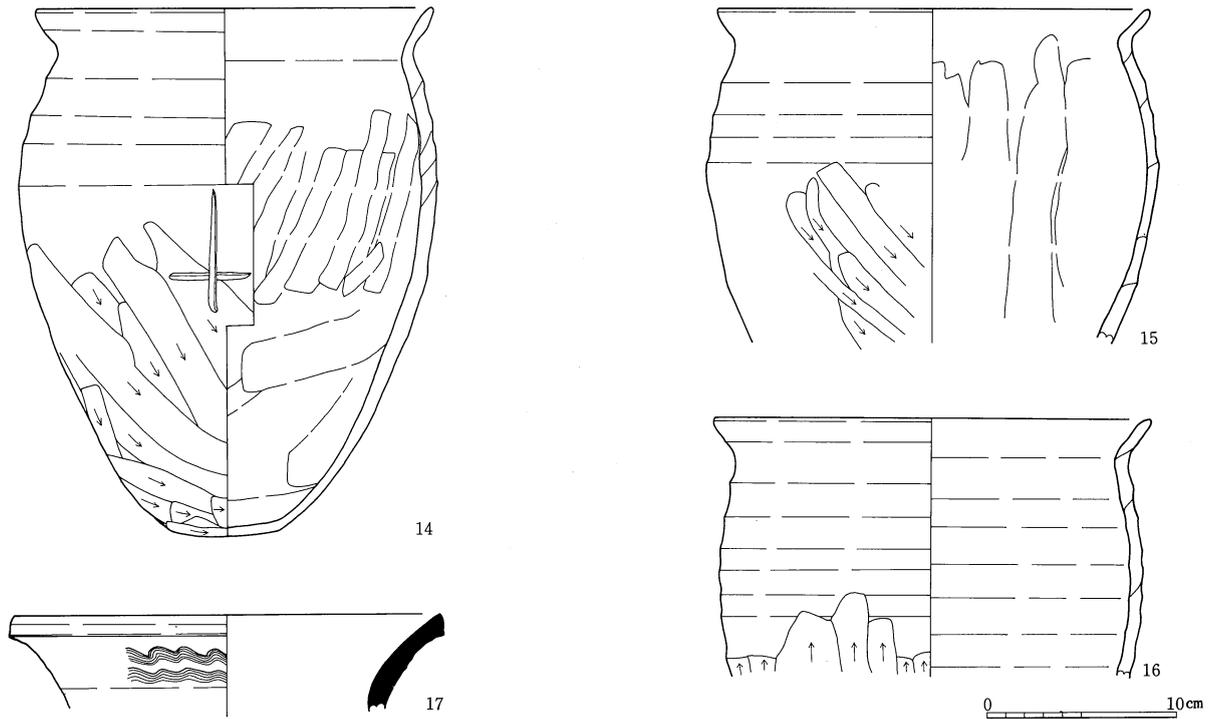


図107 136号住居址（2）

136号住居址 (図106・107、PL170・219)

II A 1層上面で検出された。カマド部に多量の土器片が見られた。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。遺物はカマドを除いて希薄であった。掘り方はほとんどなく若干の起伏が認められたにすぎない。床はカマドから中央部にかけて堅緻であり、全体に平坦であった。ピットは1基確認された。カマドは土器を補強材として貼りつけた石組カマドである。構築は地山を箱形に掘り、礫を配し、II A 1層を基調とした黒褐色土を礫と土器の隙間に埋めている。袖石と貼りつけてある土器との間には明瞭な粘土などは認められない。支脚石は検出されなかった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏7（1・2）・甕2（17）、土師器甕1（10）・ロクロ甕5（12～16）・小形ロクロ甕1（11）・内面黒色坏12以上（3・4・7）・碗1（5）・皿4（8）・両面黒色蓋1・坏碗不明（6）・土師質坏2（9）・碗1個体分が出土している。7には「天」と思われる墨書が書される。14の胴部には「十」が刻書される。

時期 8段階に想定される。

137号住居址 (図108・109、PL170・171・220)

II A 1層上面で検出された。床下には、143号住居址が存在する。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は143号住居址を拡張するように周辺を荒ぼり後、II A 2を埋め戻し、床面を形成している。床面は中央がやや高く、全体に堅緻であった。カマドは両袖に利用された暗褐色土の高まりが認められ、袖に存在する礫に対する小ピットが認められた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏15（1～3）・甕2、土師器甕8（14～18）・ロクロ甕1（19）・小形ロクロ甕1・内面黒色坏40以上（5～10）・碗6（12）・坏碗不明2（4・11）・皿2（13）・両面黒色碗3個体分が出土した。金属器は、鎌1（20）が出土した。床面出土遺物ははっきりしないものの3・4層から出土したのが多い。

時期 甕の形態から9段階の所産と思われる。

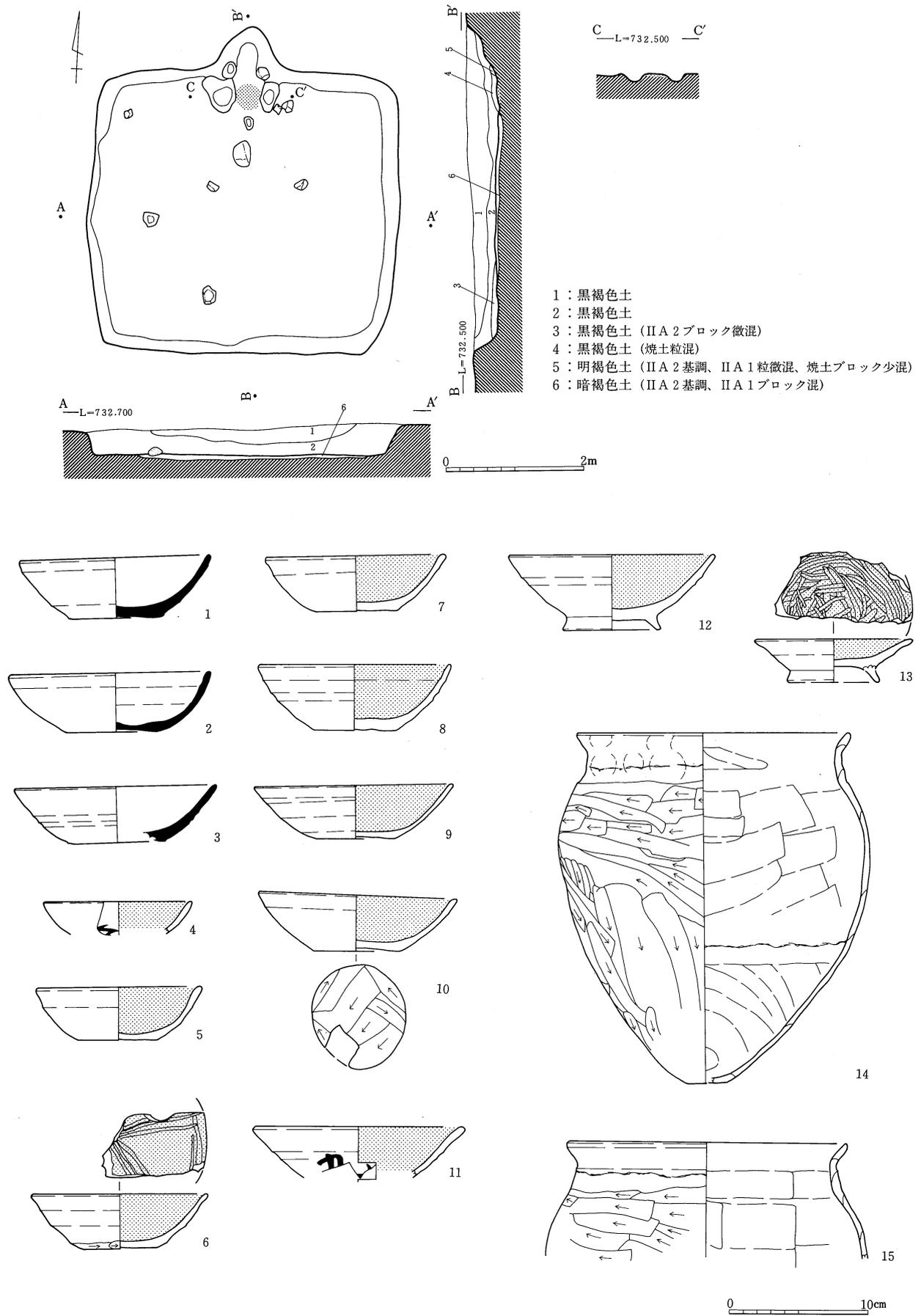


图108 137号住居址(1)

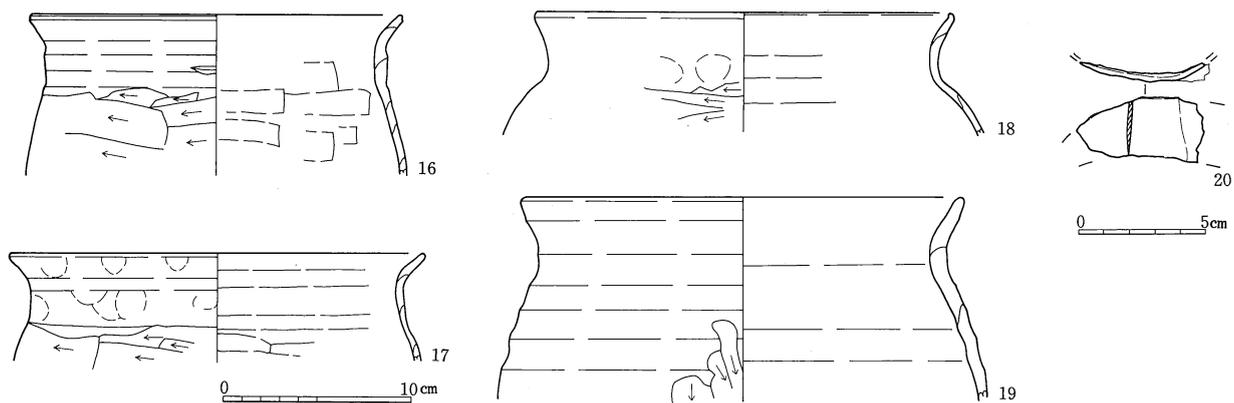


図109 137号住居址 (2)

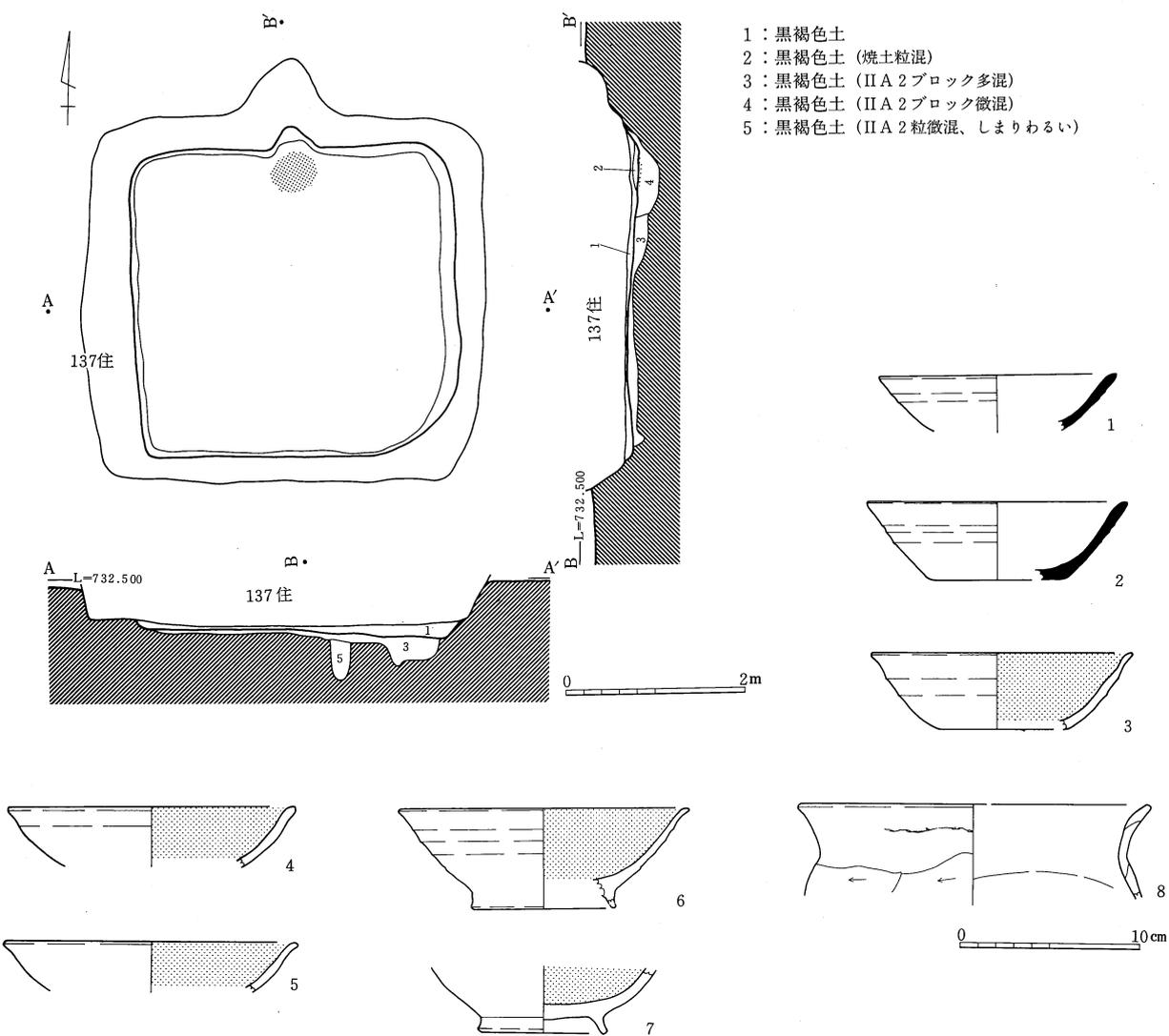


図110 143号住居址

143号住居址 (図110、PL171)

137号住居址床下調査により検出された。覆土は細礫が混入する黒褐色土で、137号住居址構築に際し埋め戻されたのであろう。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混じる黒褐色土によって埋め戻され、平坦にし、堅緻な床面を形成している。カマドは床面とほぼ同レベルで火床が確認されたにすぎなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器3 (1・2)、土師器甕1 (8)・内面黒色坏1 (3)・碗2 (6・7)・坏碗不明2 (4・5) 個体分が出土した。

時期 137号住居址拡張前の住居であることから8段階をくだらない。

138号住居址 (図111、PL170・220)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、暗褐色土主体の土を埋め戻して、床面を形成する。床面は若干の凹凸が認められ、全体に軟弱である。ピットは

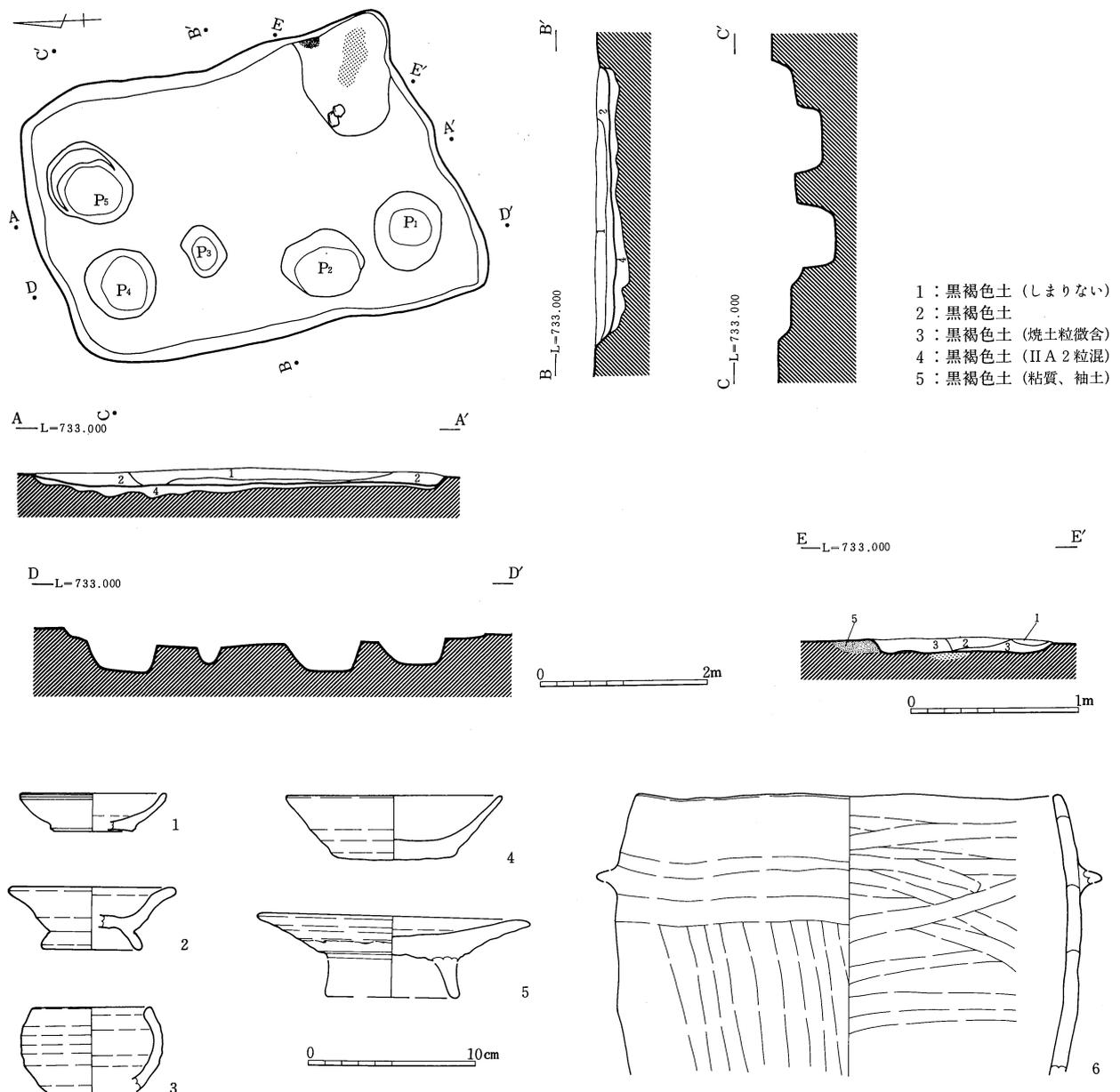


図111 138号住居址

5基確認されている。カマドは床面上に焼土の残った火床が確認された。左袖には構築材の暗褐色土がわずかに存在していた。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。土師器甕2・小形甕1、内面黒色坏4、土師質坏4(4)・小皿10(1)・小形碗1(2)・皿1(5)・ミニチュア無頸壺1(3)・羽釜3(6)個体分が出土している。羽釜はカマドやその周囲を中心に出土している。

時期 15段階と思われる。

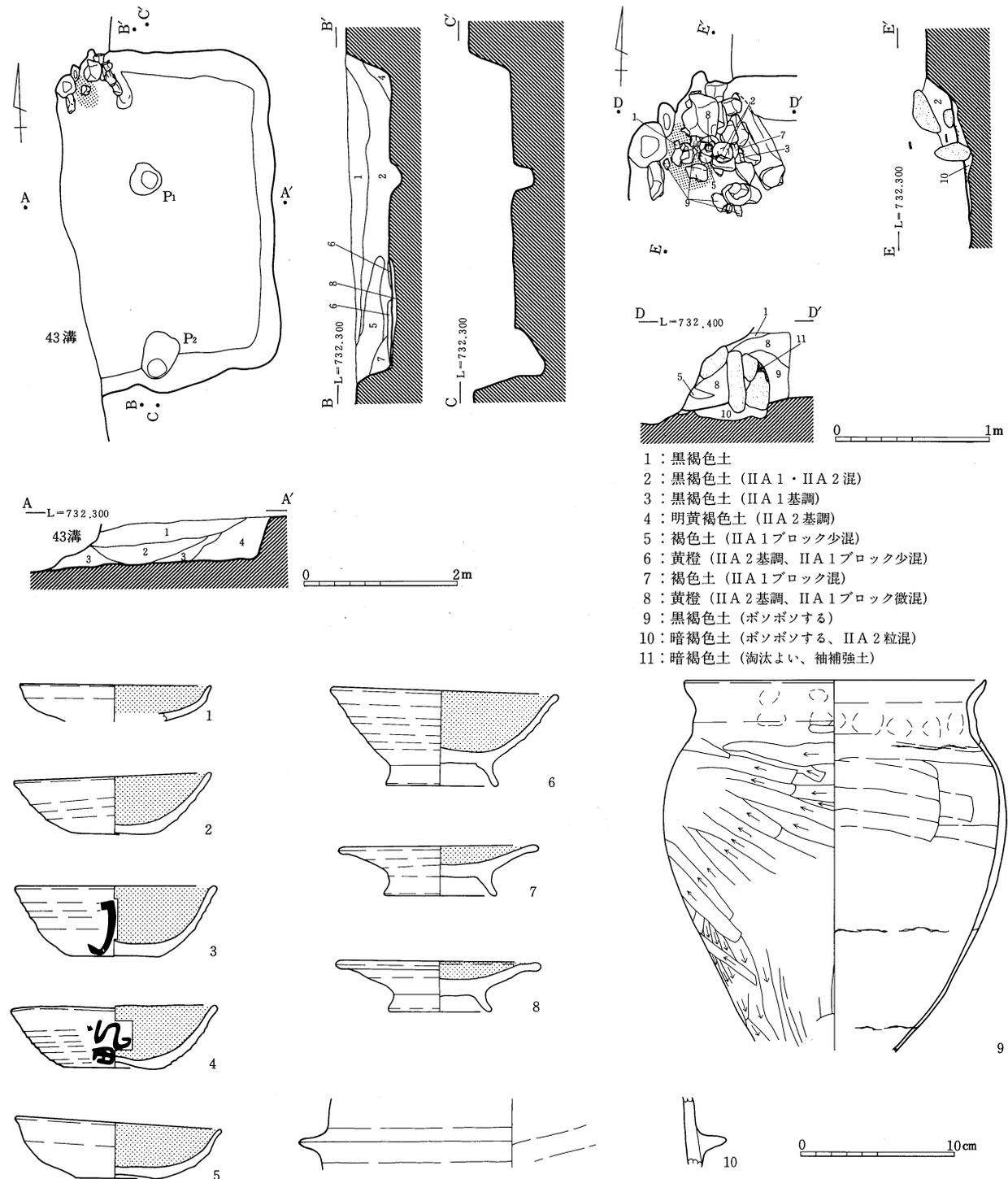


図112 139号住居址

139号住居址 (図112, PL170・220・255)

II A 1層で検出された。43号溝址に切られる。覆土は暗褐色土を主体とした人為埋没と思われる。遺物はカマドに集中して認められた。床は全体に平坦に掘り下げられた地山を床面として利用する。南側でやや低い。ピットは2基確認され、柱穴と判断される。カマドは左袖が43号溝址によって削り取られ、右袖は明褐色土の構築材により補強された石組が強固に遺存し、火床中央に支脚石が検出された。

遺物 遺物の出土量は、須恵器杯3・甕3、土師器甕10(9)・内面黒色杯19(2~5)・碗2(6)・皿3(7・8)・盤1(1)・両面黒色1個体分が出土した。3・4は墨書土器で文字は判読できない。

時期 8段階の所産と思われる。

140号住居址 (図113, PL171・225)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土の単層である。床は平坦に荒ぼり後、薄く黄褐色土の貼床を施し、平坦である。カマド前は特に堅緻であった。ピットは5基検出され、P1~4は規模、位置から柱穴であると判断される。カマドは両袖に数個の石組が残存し、住居址床上に礫が出土していることから石組カマドであったと推察される。

遺物 遺物の出土量は、土師器甕3片・内面黒色杯8片・両面黒色碗片2・土師質杯1(4)・碗3(1)・皿

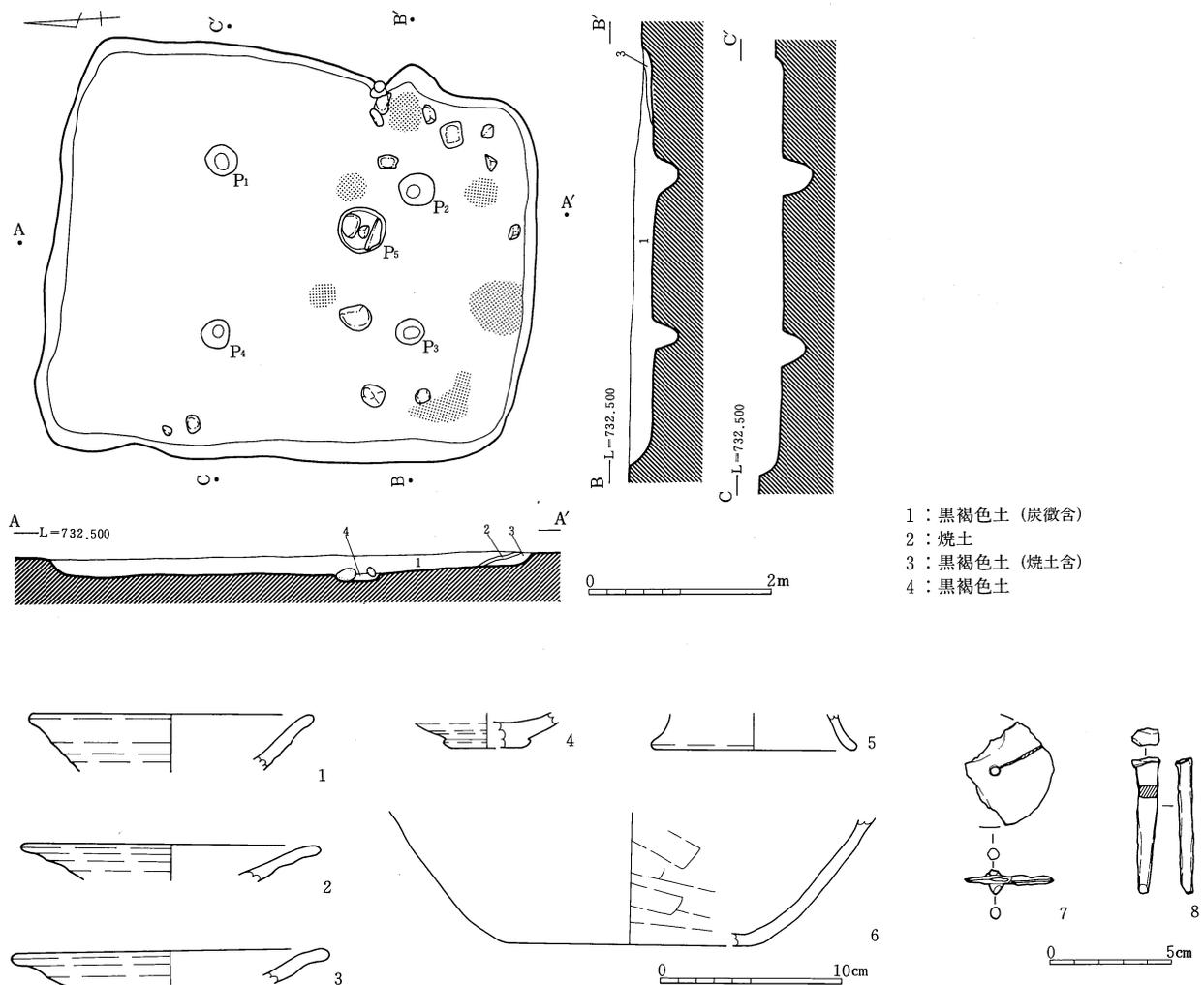


図113 140号住居址

2 (2・3)・碗皿不明1 (5)・甕1 (6)・灰釉陶器壺瓶類1 個体分が出土し、鉄製品は紡錘車1 (7)・釘1 (8)が出土した。全体量は少なく破片ばかりである。

時期 13～14段階頃と思われる。

141号住居址 (図114・PL171・221)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、黒褐色土主体の土を埋め戻して、平坦な床を形成する。床面はほぼ平坦で全体に堅緻であった。周溝はカマド部分を除いて、幅約20 cm、深さ2 cm 前後で検出され、北東隅で住居址内に広がる。ピットは5基確認され、位置的にP1～4が柱穴と判断される。P5は出入口施設にかかわるものと推察される。カマドは両袖に礫を配した石組カマドで、天井石が原位置で検出された。支脚石は火床の北端に直立していた。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器坏8以上(1)・長頸瓶1、土師器ロクロ小形甕1(7)・内面黒色坏7以上(2・6)・碗1(4)・坏碗不明2(3・5)・皿2個体分が出土した。4には「天」が刻書され、2・5・6は

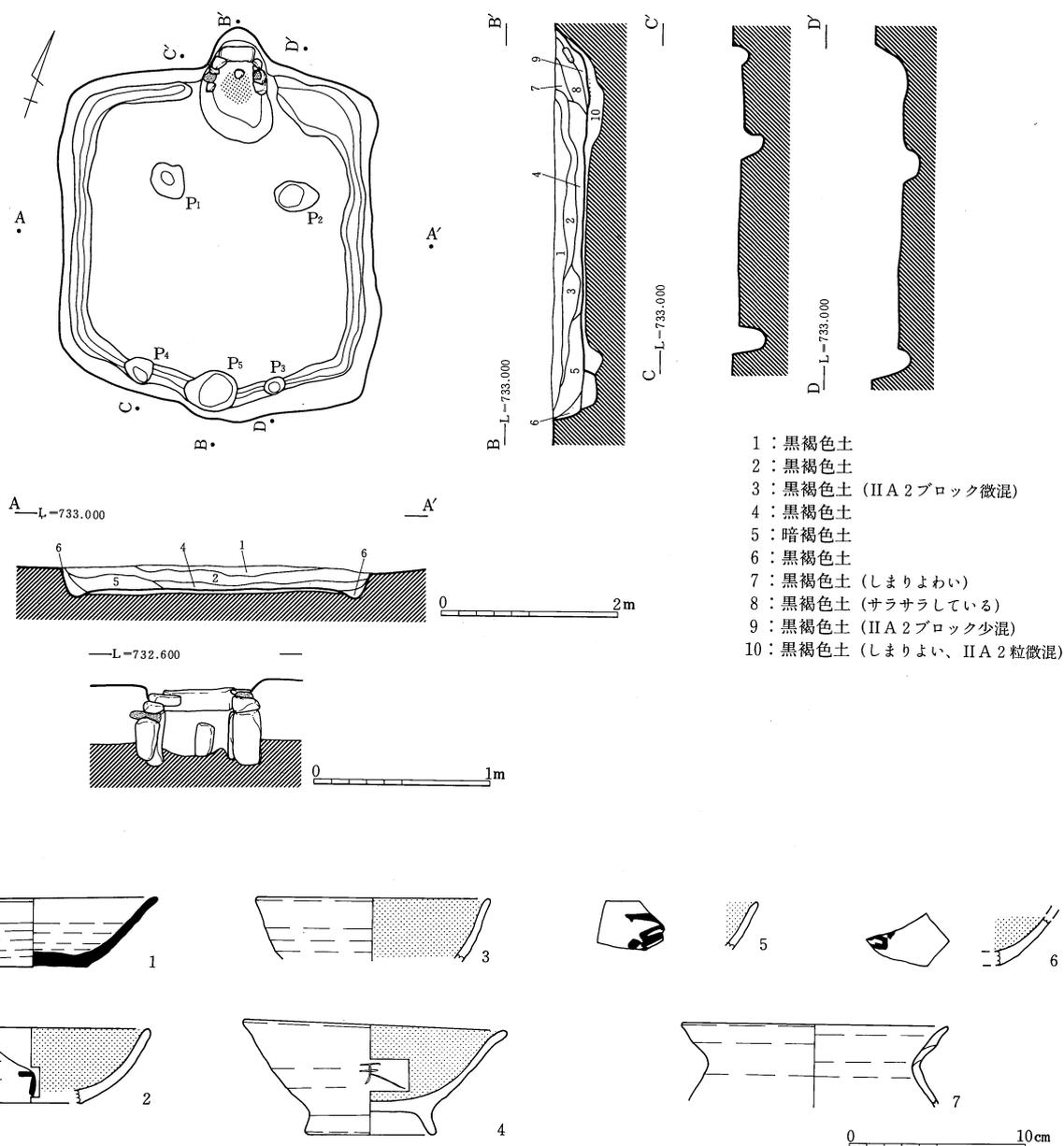


図114 141号住居址

墨書が書されるが文字は不明である。1は東壁際から、ほかはカマド内から出土した。

時期 8段階頃と思われる。

142号住居址 (図115、PL171・221)

II A 1上面で検出された。本址北半分は64号溝址によって破壊されている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックを主体とした土を埋め戻し平坦な床を形成している。全体に堅緻であるが、貼床の痕跡は認められない。ピットは2基確認され、両者ともに柱の据え方が認められることから柱穴と判断される。また柱穴埋土は住居址覆土より黒みが強い。

遺物 出土土器の全体量は須恵器高台坏2 (1)・坏18以上 (2)・蓋1・長頸瓶1・盤1 (4)、土師器甕4 (6・7)・小形甕1 (5)・内面黒色坏9以上 (3)・碗2以上個体分と少ない。3層と床面から出土している。4は胎土から東海産と思われる。

時期 7段階頃の所産と思われる。

143号住居址 137号住居址に後述

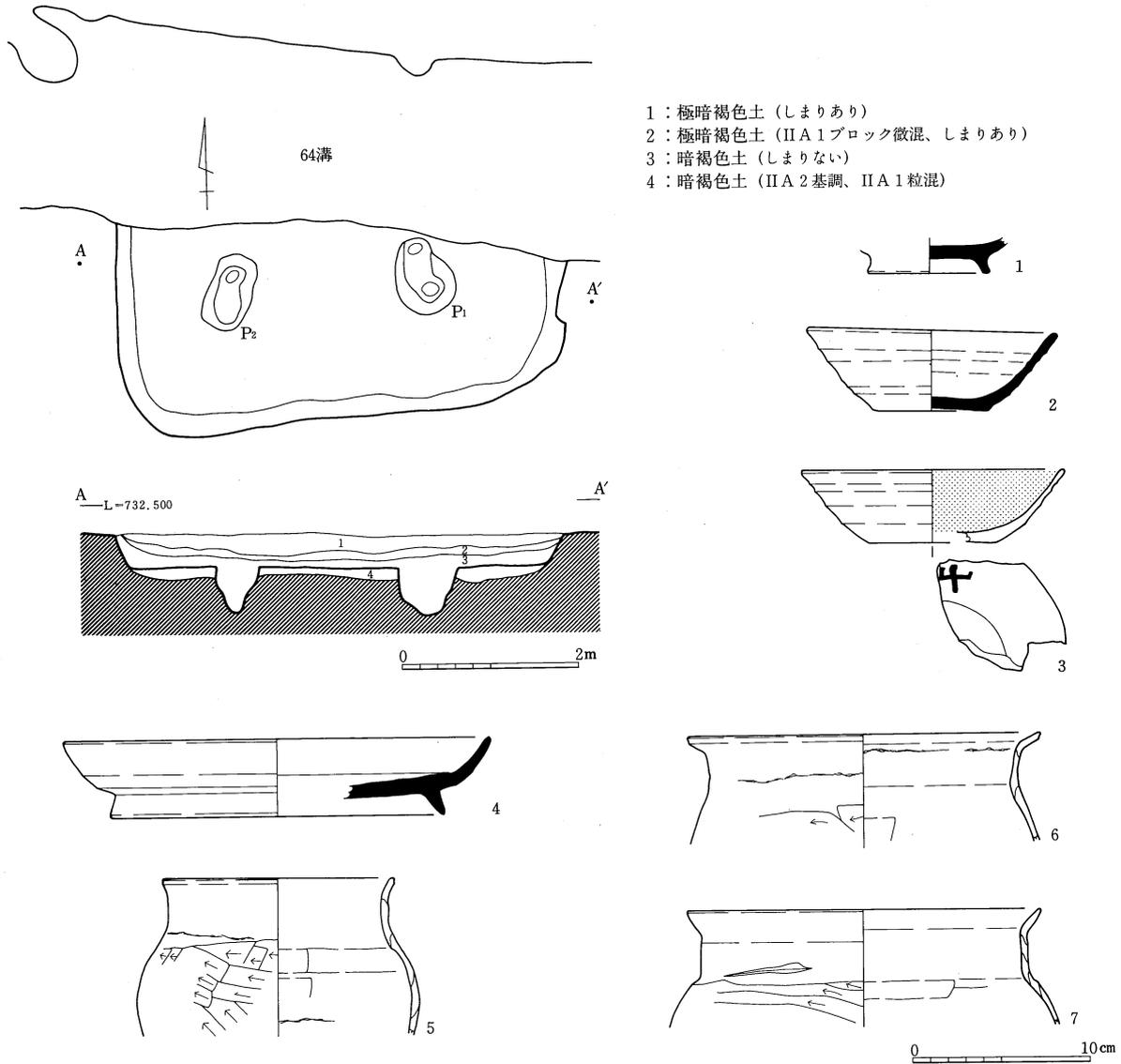


図115 142号住居址

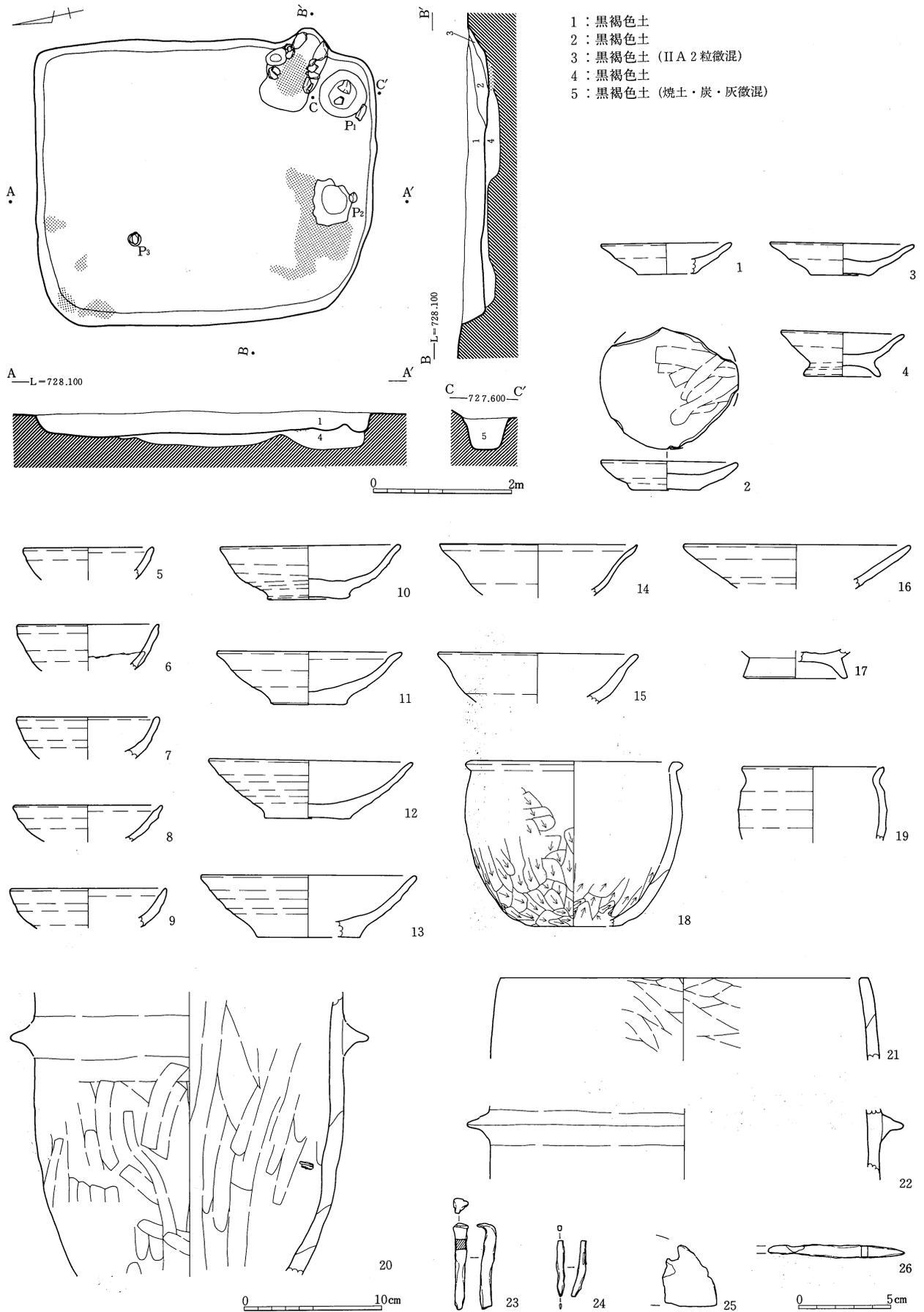


図116 145号住居址 (1)

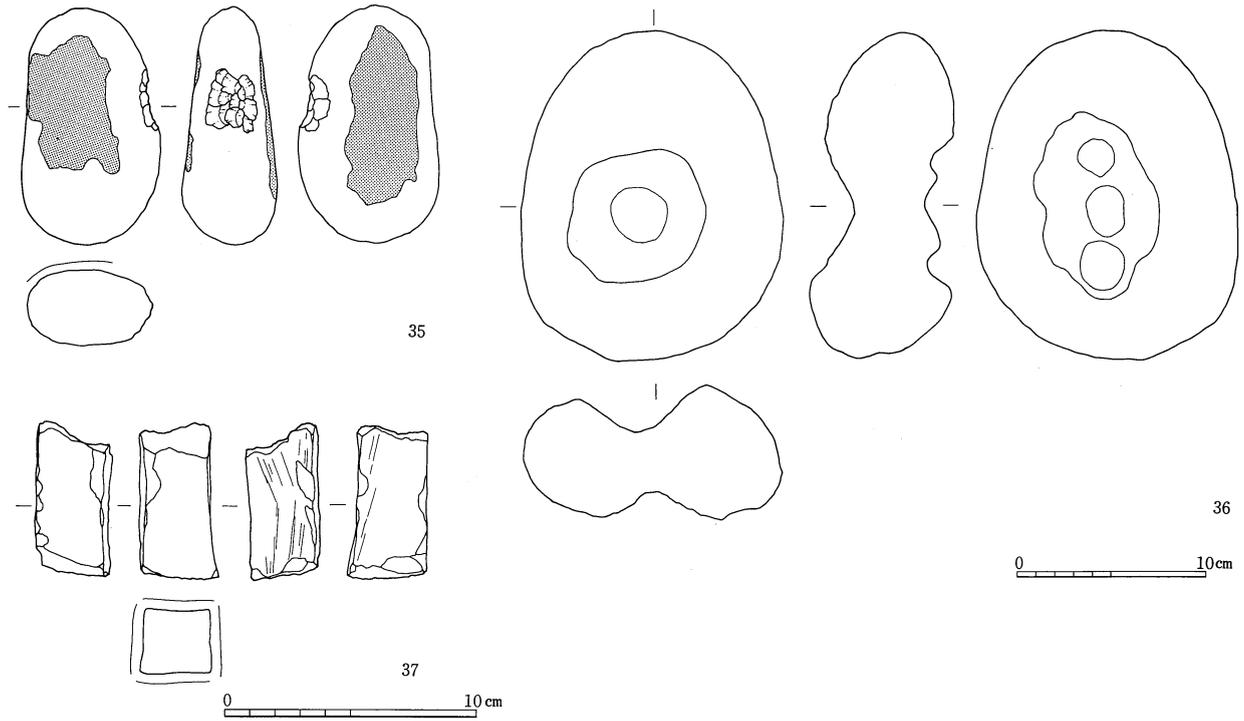
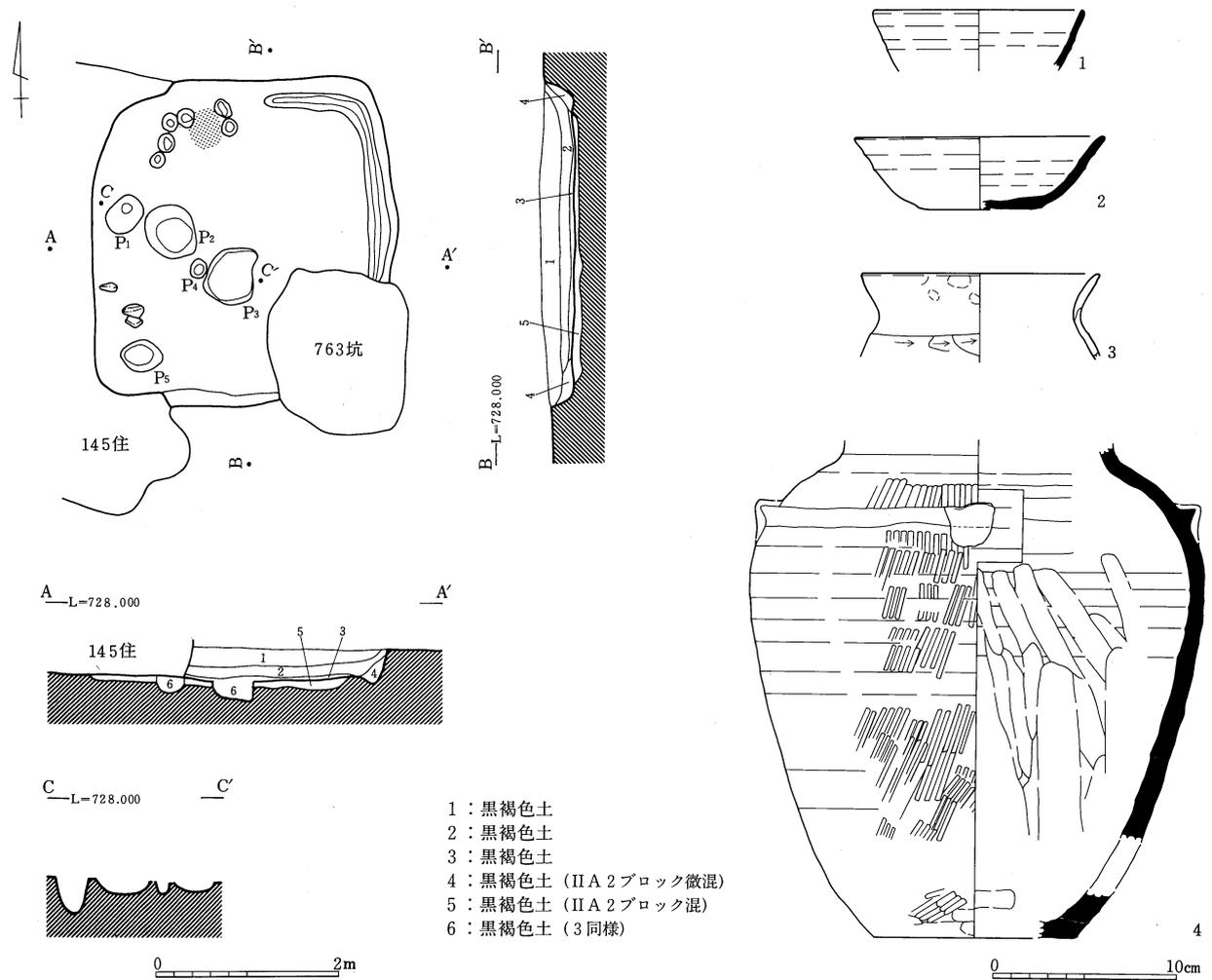


图117 145号住居址 (2)



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒褐色土
- 3 : 黒褐色土
- 4 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック微混)
- 5 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック混)
- 6 : 黒褐色土 (3同様)

图118 146号住居址

144号住居址 132号住居址に後述

145号住居址 (図116・117、PL172・221・225・261)

II A 1層上面で検出された。146号住居址、600号土坑を切り、覆土は黒褐色土を主体とした単層である。床は荒ぼり後、黒褐色土を主体に埋め戻され、平坦であった。住居址中央が堅緻でその周辺は軟弱となる。P3周辺、北西隅に焼土の分布が認められた。ピットは3基確認され、P1は焼土・炭・灰・を覆土中に含み土器片も検出された。P2は内側に褐色土を薄く貼ったもので、炭化種子(オニグルミ)が出土し、焼土の広がり認められた。カマドは石組カマドで軸が住居主軸からややずれている。

遺物 遺物の出土量は、土師器甕・ロクロ甕の小片・ロクロ小形甕 1 (19)・鉢 1 (18)・内面黒色坏8片、土師質坏11以上 (10~13)・小形坏8以上 (5~9)・碗 5 (17)・小形碗 1 (4)・坏碗不明 2 (14・15)・皿 3 (16)・小形皿11 (1~3)・羽釜 8 (20~22)、灰釉陶器 1 個体分が出土した。

金属器は釘 2 (23・24)・棒状鉄製品 1 (26)・鎌と思われる鉄製品 (25)・鉄滓 (679.3g) が出土し、石製品は磨石 4 (35)・石臼 1 (36)・砥石 1 (37) が出土している。

時期 14段階の所産と思われる。

146号住居址 (図118、PL172)

II A 1層上面で検出された。145号住居址、763号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混入の暗褐色土を埋め戻し、平坦な床を形成している。床面は軟弱であった。ピットは5基確認され、いずれも住居址覆土3層が入り込んでいた。周溝は北・東壁にかけて、幅約20 cm、深さ10 cm 前後で検出された。カマドは床面と同レベルで焼土の残った、火床と両袖に袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出されたにすぎなかった。

遺物 出土土器の全体量は少ない。須恵器坏 3 以上 (1・2)・甕 1・四耳壺 1 (4)、土師器甕 3・小形甕 2 (3)・ロクロ甕小片 1・内面黒色坏 2 片、個体分が出土した。4は145・118号住居址と接合する。

時期 7~8段階頃と思われる。

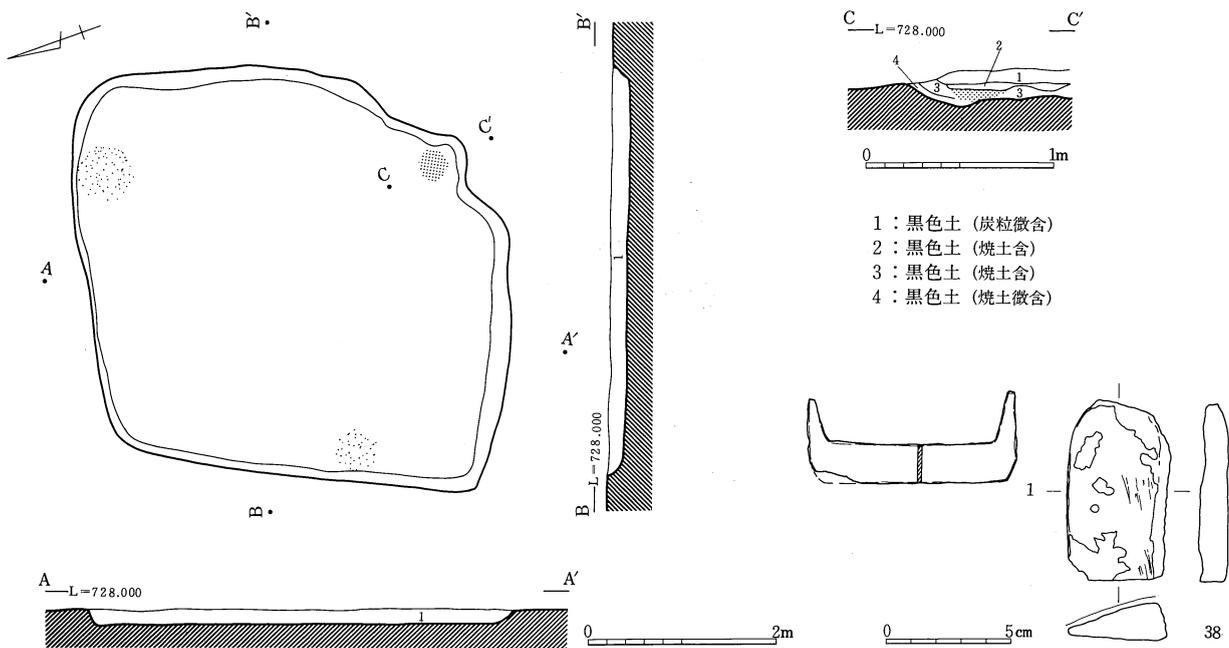
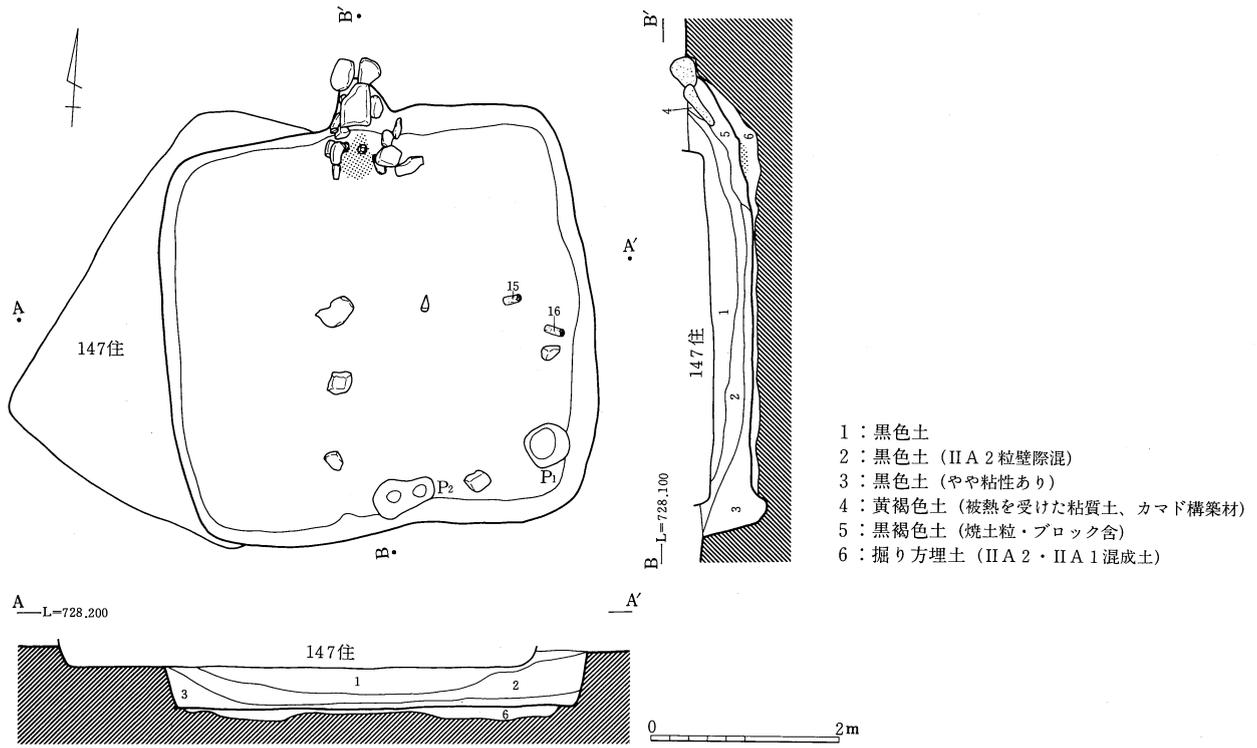


図119 147号住居址



- 1：黒色土
- 2：黒色土（II A 2 粒壁際混）
- 3：黒色土（やや粘性あり）
- 4：黄褐色土（被熱を受けた粘質土、カマド構築材）
- 5：黒褐色土（焼土粒・ブロック舎）
- 6：掘り方埋土（II A 2・II A 1 混成土）

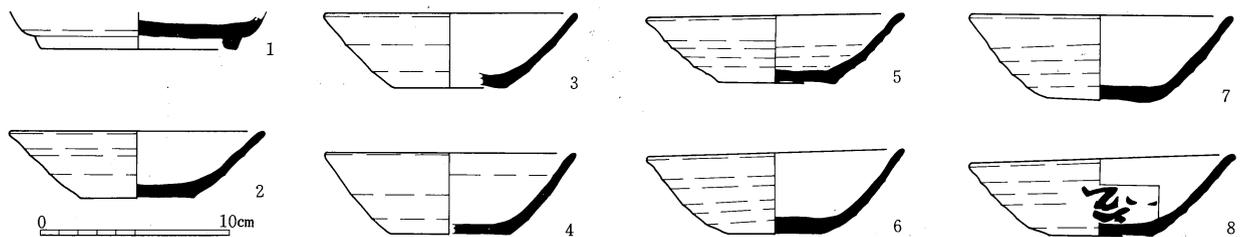
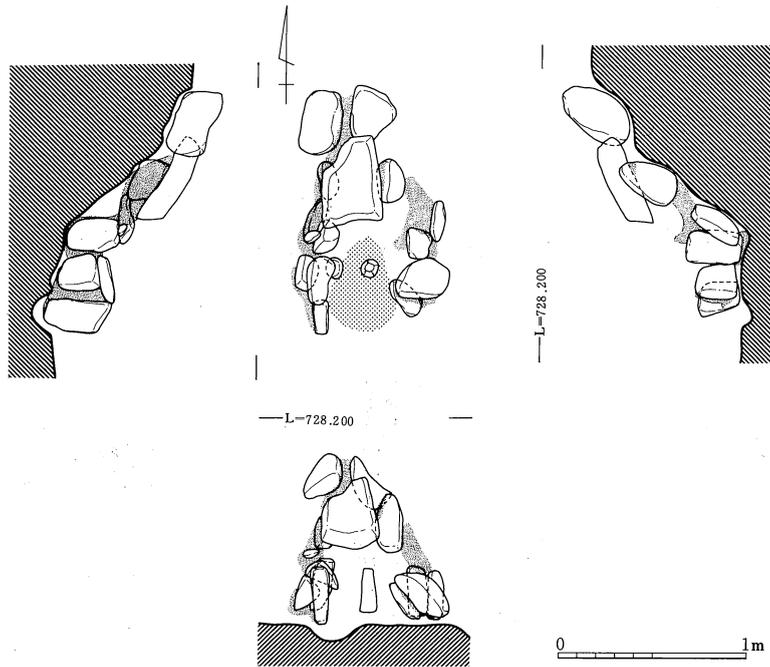


図120 148号住居址（1）

147号住居址 (図119、PL172・225)

II A 1層上面で検出された。148号住居址を切る。覆土は単層で、床は148号住居址覆土と地山II A 1層を床として利用して、やや堅緻であった。カマドは床面上に焼土が認められ、火床と判断される。床面に10 cmの厚さで炭化米が出土した。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。灰釉陶器瓶類1片・金属器は苧引金(1)、石製品は砥石1(38)のみである。

時期 土器が出土せず段階は不明であるが、カマド構築位置から13段階頃以降であろうと推察する。

148号住居址 (図120・121、PL172・173・221・224)

II A 1層で検出された。147号住居址に切られ、144号掘立柱建物址を切る。検出時にカマド構築礫が認められた。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、黒褐色土を埋め戻し、堅緻な床面を形成していた。ピットは2基確認され、P2は出入口施設にかかわるものと推察される。カマドは石組がかなり良好に遺存して検出された。石組は暗褐色の粘質土により補強され、支脚石は火床の北側に直立して存在した。天井石・支脚石ともに面取りされた軽石製であった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(1)・坏20(2~8)・甕1・四耳壺1・短頸壺1・長頸瓶2(14)、土師器甕3(11・12)・中形甕1(10)・小形甕1(9)・内面黒色坏2個体分が出土した。他に羽口2(15・16)が出土している。8には墨書が書されるが文字は判読できない。

時期 7~8段階の所産と思われる。

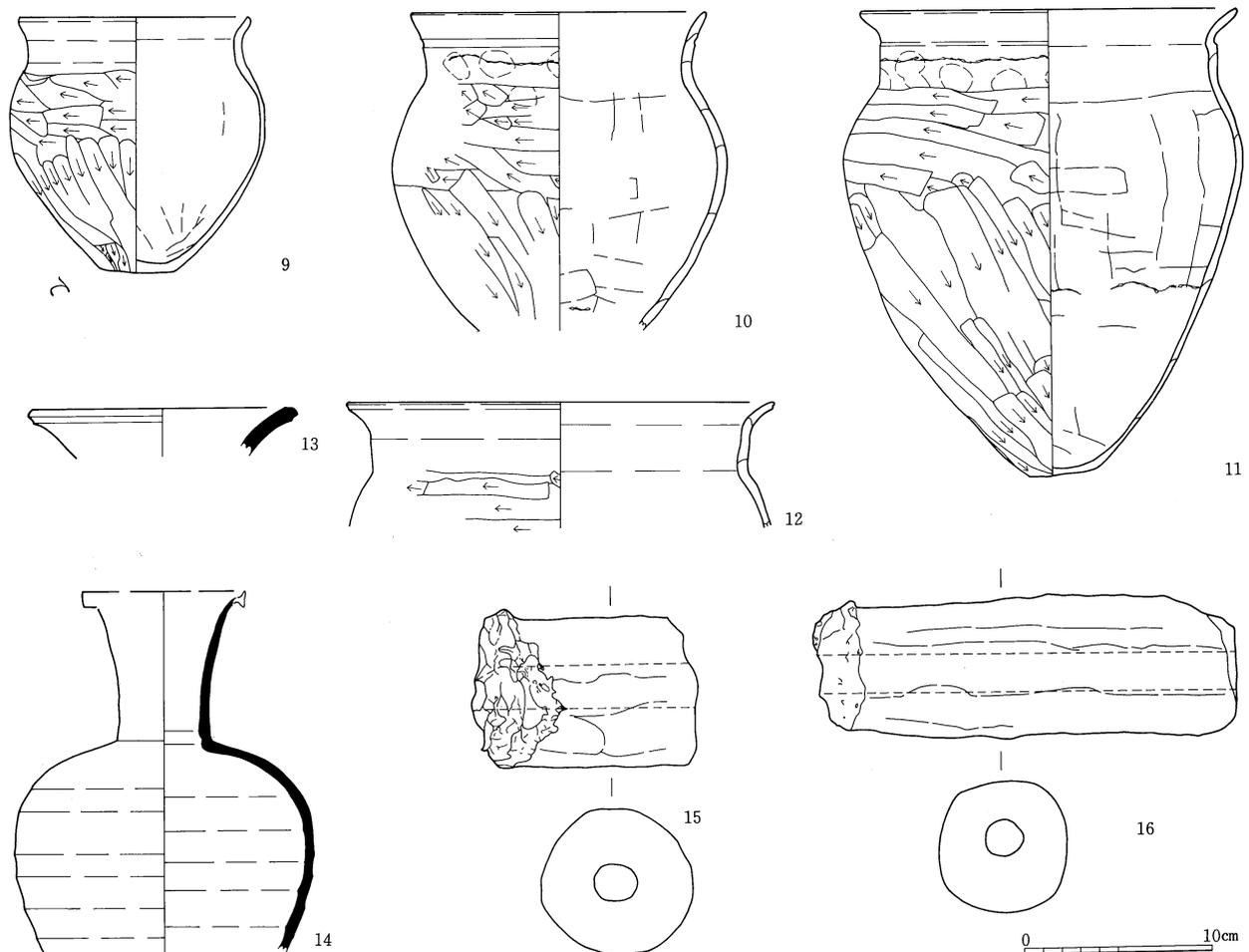


図121 148号住居址(2)

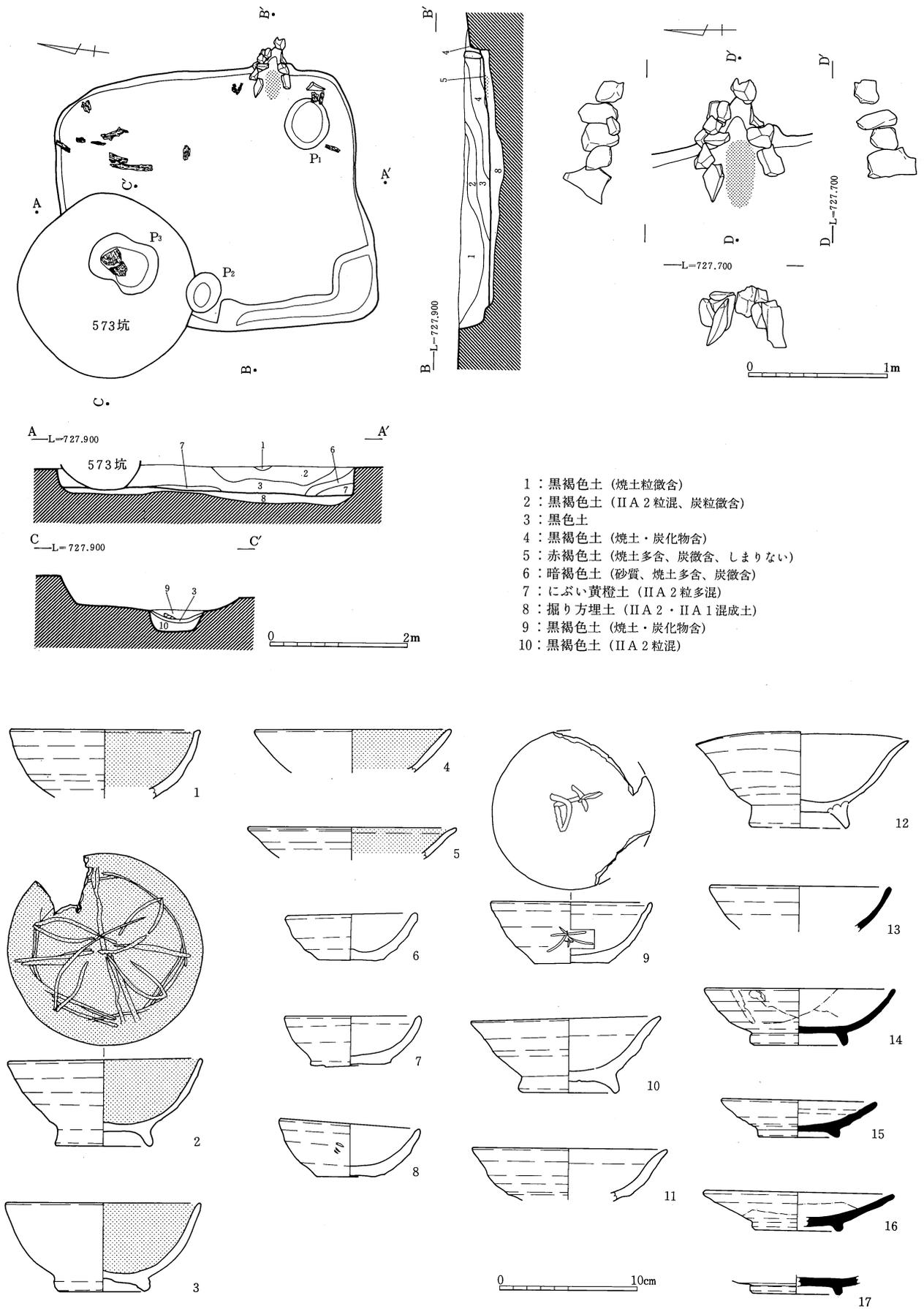


图122 149号住居址 (1)

149号住居址 (図122・123、PL173・222・225)

II A 1層上面で検出された。573号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床面上に炭化材が出土した。床は荒ぼり後、II A 2ブロックを含む黒褐色土で埋め戻され、全体に明瞭でなかったものの、その上面を床面としていたと思われる。南西隅に壁に沿ってテラスが認められているが、テラス面が特に堅緻というわけではない。ピットは3基確認され、P3からは炭化材が出土しているが、加工痕などは認められなかった。カマドは袖部・煙道部に礫を配した石組カマドで、4層上部に遺物が集中して出土した。礫の隙間には、焼土粒・炭粒の混入する黒褐色土が観察されたが、構築材であるのかの判断はし難かった。なお、覆土中より焼土・炭が多くみとめられ、本址は焼失住居と推察される。

遺物 遺物の出土量は、土師器甕1・内面黒色坏4・碗3(2・3)・坏碗不明(1・4・5)・片口鉢1(18)・土師質坏6(6~9)・碗4(10~12)・ロクロ甕4(19・20)・中形ロクロ甕1(22)・小形ロクロ甕1(21)・羽釜3(23~25)・甕1(26)・灰釉陶器碗2(13・14)・皿3(15~17) 個体分が出土した。

金属器は紡錘車軸1(27)が出土している。9・25は刻書土器で、9の内底に「古」外面には「本？」と25の口縁部に「上」が書されている。23はロクロ成形によるもので群馬県側からの移入品と思われる。26の甕は口縁単部に鐙が付くタイプで尾張地方の在地の甕である。灰釉陶器の碗・皿の釉薬は漬け掛けされ、

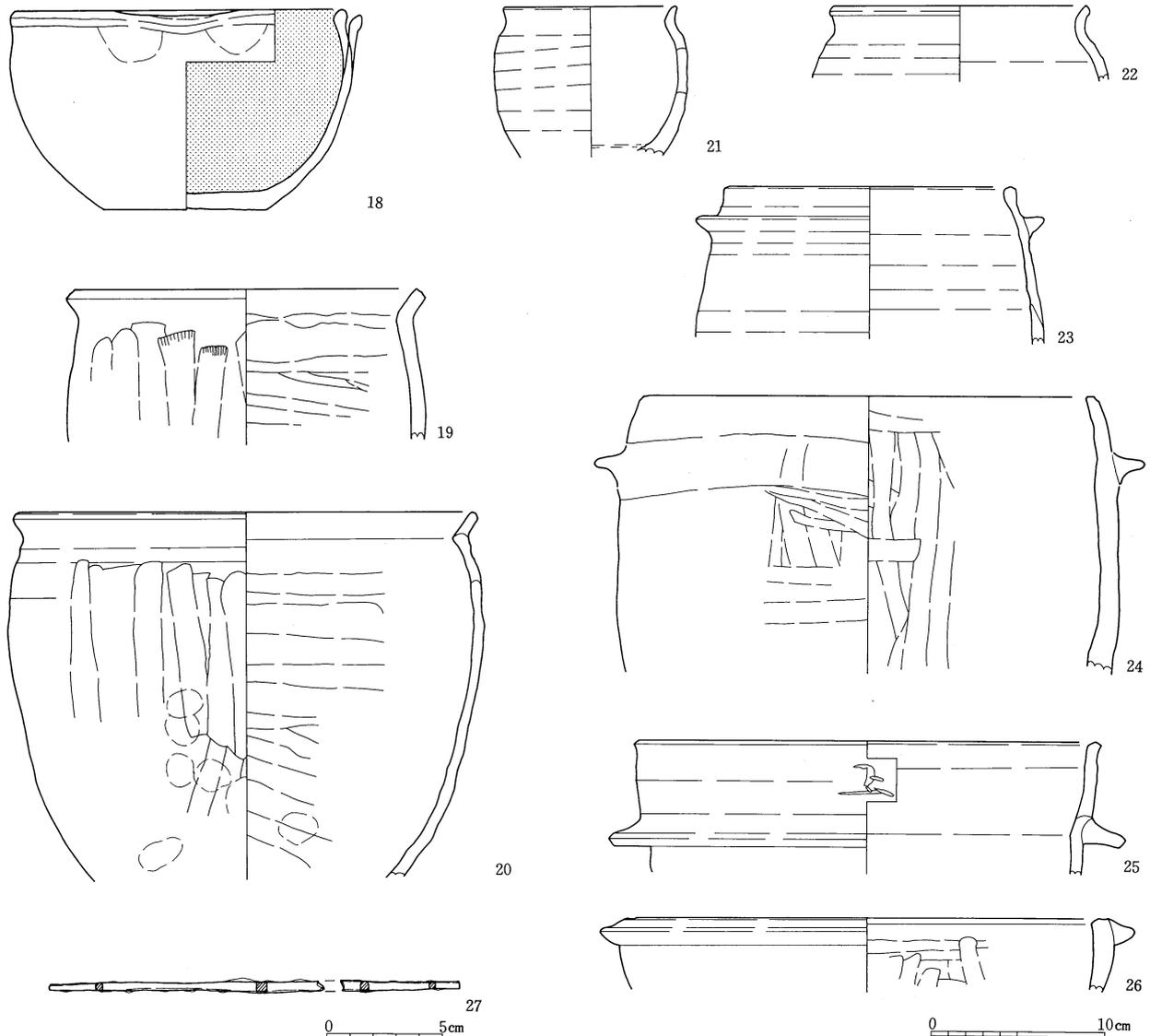
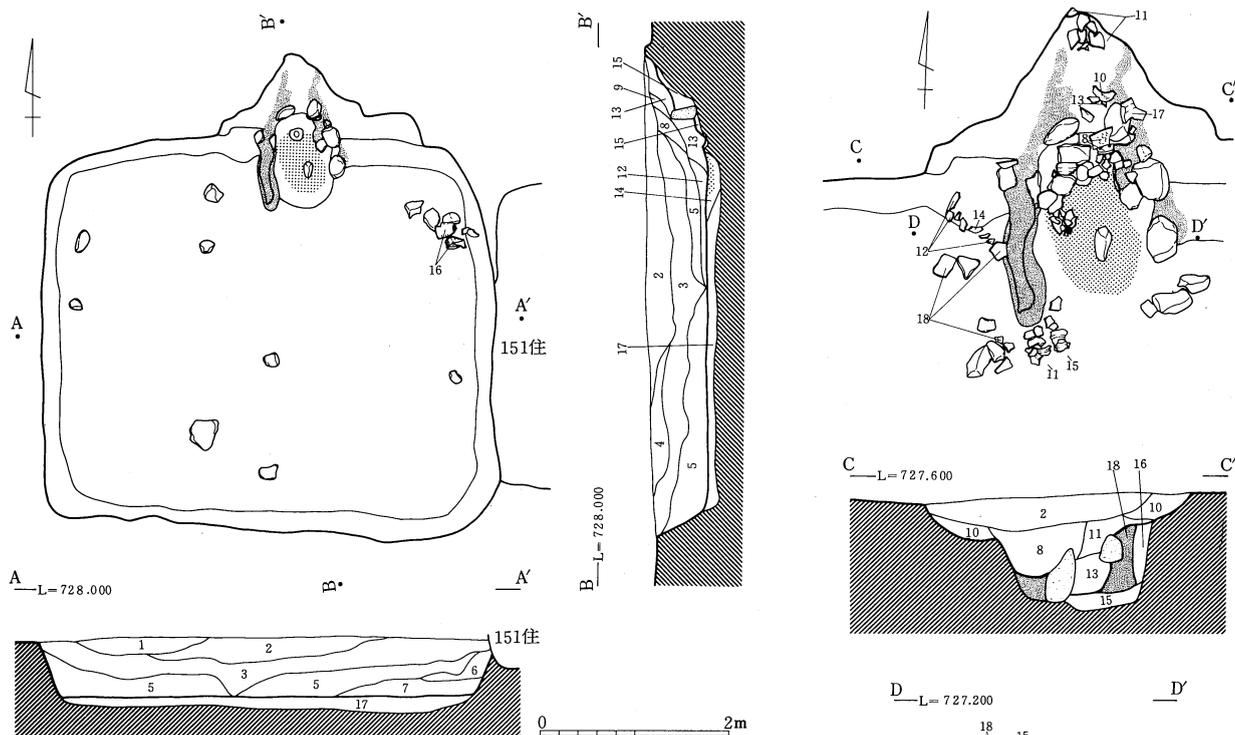


図123 149号住居址 (2)



- | | |
|--------------------------|---------------------------|
| 1：黒褐色土 | 10：明褐色土（IIA 2・IIA 1混成土） |
| 2：黒褐色土（しまり弱い） | 11：暗褐色土（18ブロック混、しまりない） |
| 3：黒褐色土 | 12：黒褐色土（18ブロック混、しまりあり） |
| 4：黒褐色土（IIA 2ブロック微混） | 13：褐色土（カマド構築材崩落土） |
| 5：黒褐色土（IIA 2ブロック混、しまりあり） | 14：暗褐色土（しまりない） |
| 6：黒色土（IIA 1基調、淘汰良い） | 15：黒褐色土（18ブロック混、焼土粒微含） |
| 7：極暗褐色土 | 16：暗褐色土（IIA 2基調、15混） |
| 8：極暗褐色土（18ブロック混） | 17：黒褐色土（IIA 2ブロック混、白粘質土混） |
| 9：黒褐色土（18ブロック混） | 18：褐色土（袖土、淘汰よい、IIA 2基調） |

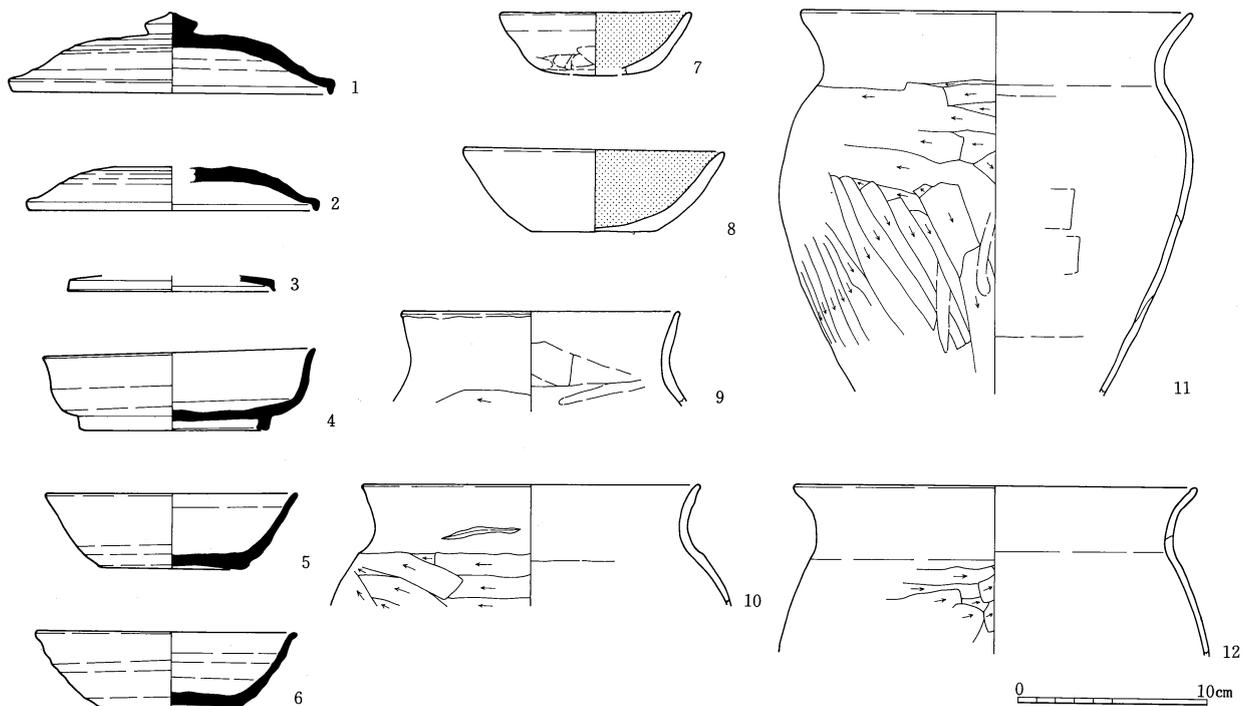


图124 150号住居址（1）

虎溪山1号窯式に比定される。坏碗類は床面や覆土から、甕・羽釜は床面またはカマドから出土している。
時期 13段階の所産と思われる。

150号住居址 (図124・125、PL173・222)

IIA 1層上面で検出された。IV層上面でカマド煙道部の礫が露出していたが、明瞭なプラン確定には至らず、検出面を下げることとなった。151号住居址に切られる。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。遺物はカマド周辺に集中して認められた。床面は荒ぼり後、IIA 2ブロック混じりの黒褐色土を埋め戻し、その上面に灰褐色粘質土を混入させ、たたきしめていた。なお、本址中央部においては床面から掘り方の間にカマド構築材に利用された明褐色土が厚く堆積していた。床面は中央部が特に堅緻で全体に平坦であった。柱穴は床面で検出されなかったが、掘り方中央部に柱穴の掘り方と思われる落ち込みが4つ認められている。カマドは右袖に石組が残り、左袖は明褐色土の構築材が残存していた。煙道部・袖部に認め

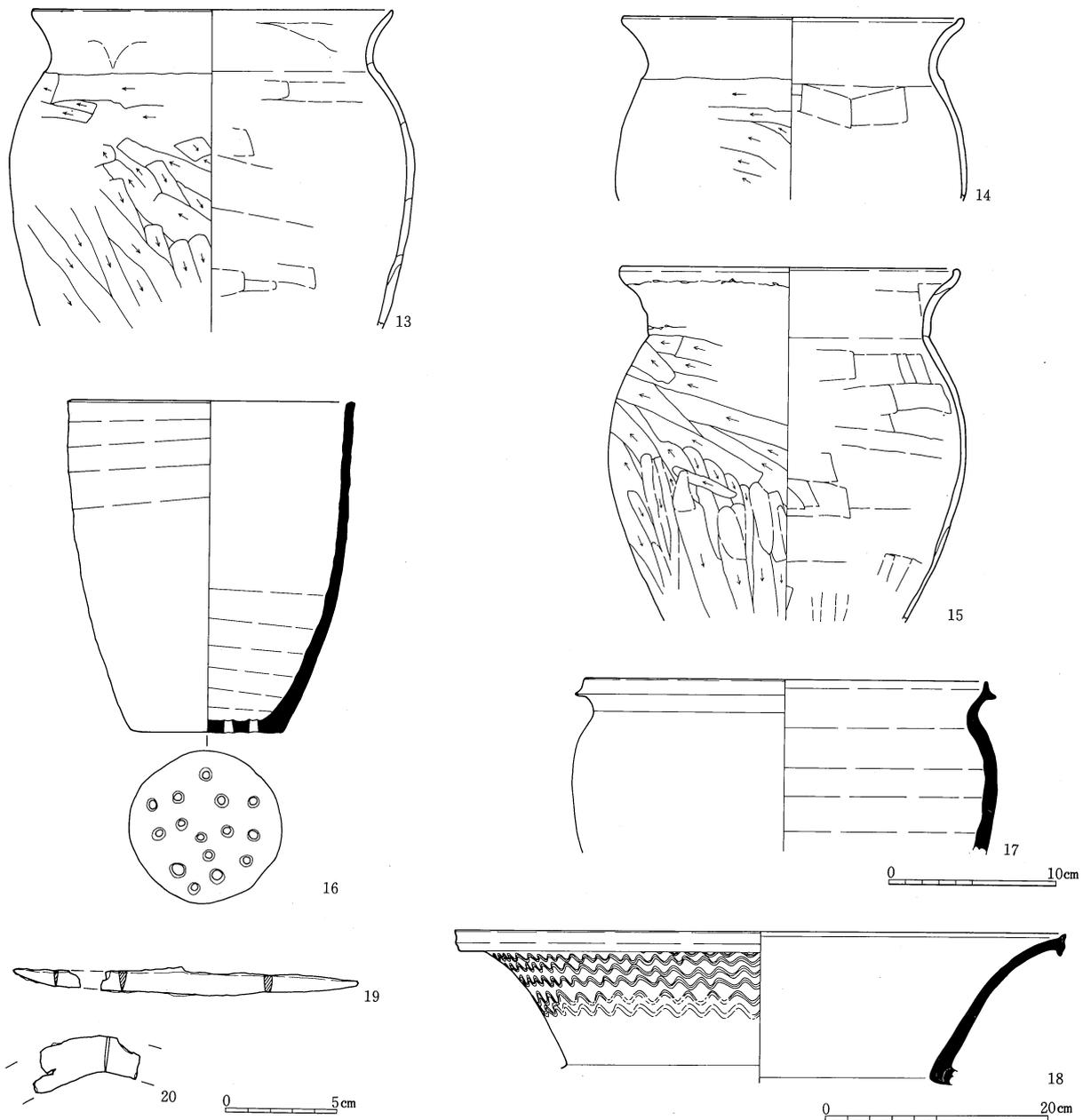


図125 150号住居址 (2)

られるこれら礫の隙間には構築材が充填されていた。火床北端に支脚石の抜き取り痕と思われる小ピットと中央に支脚石が検出されている。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(4)・坏14以上(5・6)・蓋6(1・2)・小形蓋1(3)・広口鉢1(17)・長頸瓶1・甗1(16)・甕1(18)、土師器坏2・甕10(10~15)・中形甕1(9)・内面黒色坏3(7・8) 個体分が出土した。

金属器は刀子1(19)・鎌1(20)が出土している。16は東壁北よりから出土し、甕類のほとんどはカマド内から出土している。

時期 5段階の所産と思われる。

151号住居址 (図126、PL173・223)

II A 1層~II A 2層上面で検出された。150号住居址を切る。覆土は黒褐色土主体で、浅いため埋没状況は捉え難いが、ブロックの混入などが認められないことから自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面に若干の黄褐色土を敷き、平坦にしたもので、全体に堅緻であった。ピットは8基確認され、P1からは鉄滓が、P3からは土器片が集中して認められた。カマドは床面レベルで焼土を伴った火床が確認されたにすぎない。

遺物 遺物の出土量は、土師器甕1・ロクロ甕1(14)・小形ロクロ甕1(13)・内面黒色坏2(1)・碗2(2・3)・皿1・坏碗不明5・土師質坏9(4~8)・碗3(9~11)・碗皿不明1(12) 個体分が出土した。不明鉄製品(16)・鉄滓560gが出土している。遺物の大半はP3内およびその周辺からまとも出土した。5・6は墨書が書されるが文字は判読できない。3の縦ミガキは暗文状を呈する。

時期 11段階の所産と思われる。

152号住居址 (図127、PL173)

II A 1層上面で検出された。156・153号住居址に切られ、159号住居址を切る。本址の大部分が用地外にかかるため調査に至っていない。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は、荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの暗褐色土を埋め戻し、上面を固くたたきしめていた。全体に平坦で堅緻であった。ピットは1基確認され、断面で柱痕が確認されている。床面は柱を建てた後、構築された様子が看取された。南壁部で床下にピット状の落ち込みが検出されている。

遺物 遺物に出土量は、須恵器高台坏1(1)・坏8(2・3)・甕2・長頸瓶1、土師器甕1(5)・小形甕1・内面黒色坏2(4) 個体分出土している。金属器は刀子1(6)が出土している。4は墨書が書されるが判読できない。

時期 7段階と思われる。

153号住居址 (図128、PL173)

II A 1層上面で検出された。152号住居址、692号土坑を切り、691号土坑に切られる。691号土坑との切り合いの判断は平面では困難で、断面にて確認された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床面は692号土坑周辺で、灰褐色粘質土を貼り、そのほかは地山を床として利用していた。全体に平坦でなく、中央部でやや高まる。ピットは1基確認され、礫が数点入っていた。カマドは用地外にかかっているため、全体像は不詳である。簡単な石組と焼土とが認められた。火床中央部に支脚石の抜き取り痕が検出されている。

遺物 遺物の出土量はわずかで、土師器甕数片・ロクロ甕1片・小形ロクロ甕1片・土師質小皿1(1)・坏

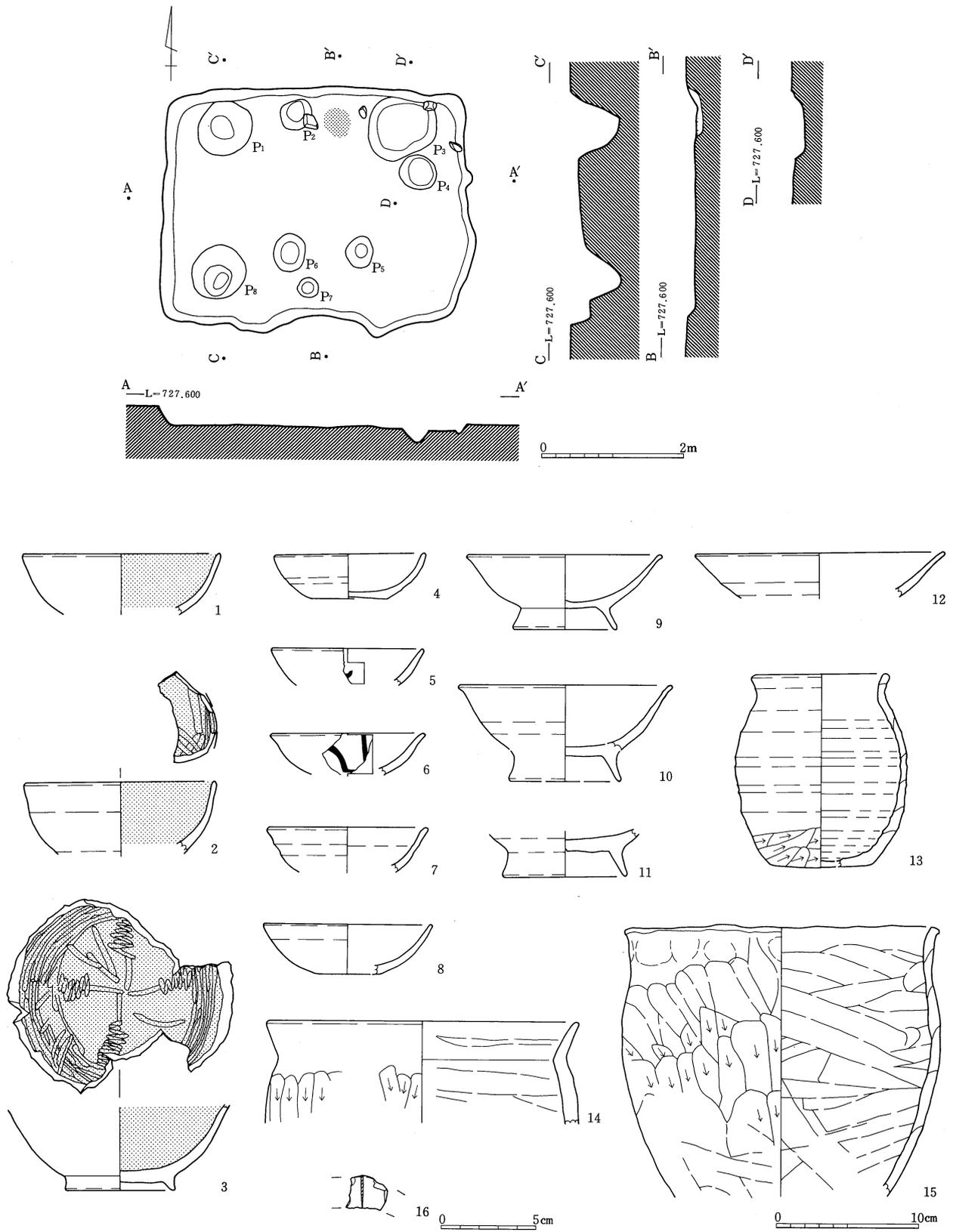


図126 151号住居址

3・碗1個体分出土し、石器は磨石1(39)が出土した。

時期 16段階と思われる。

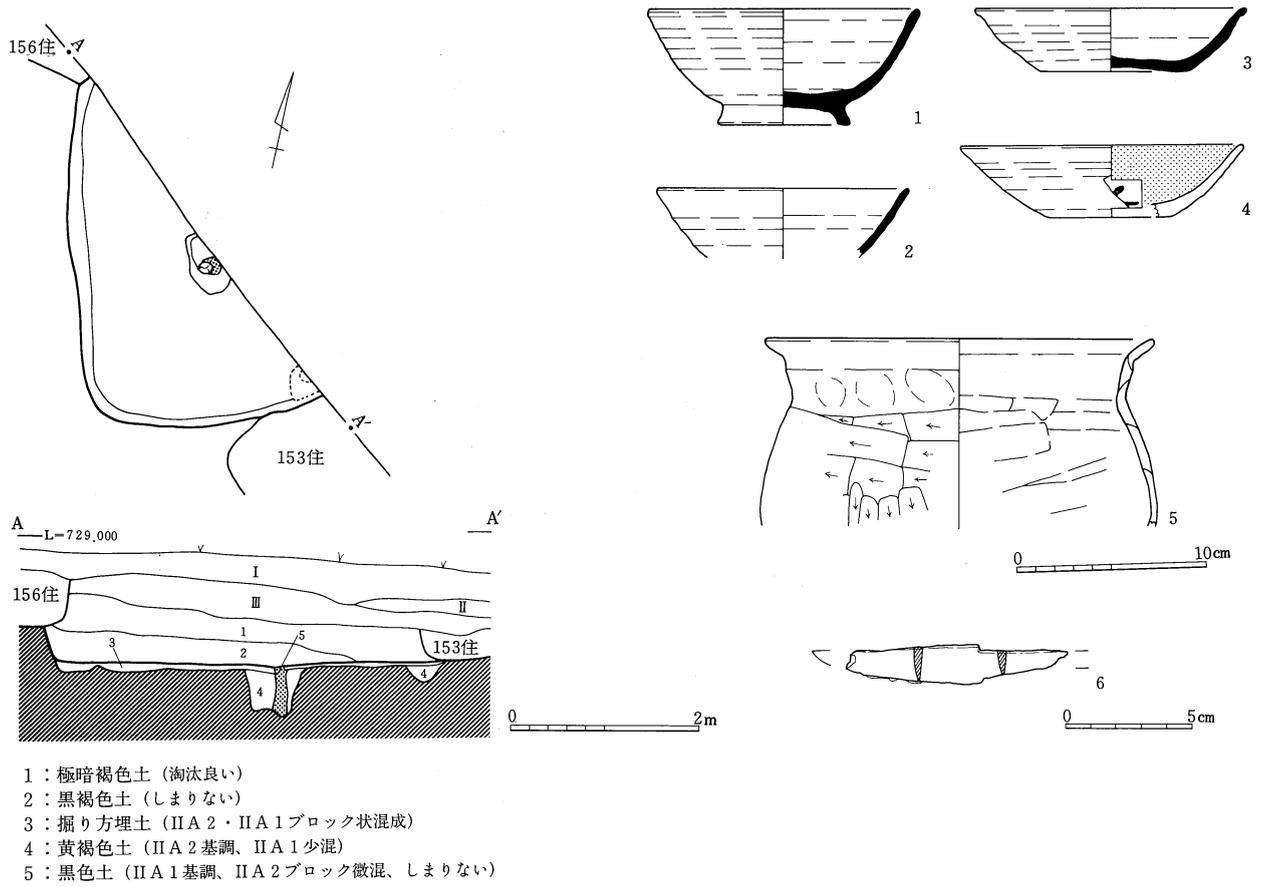


図127 152号住居址

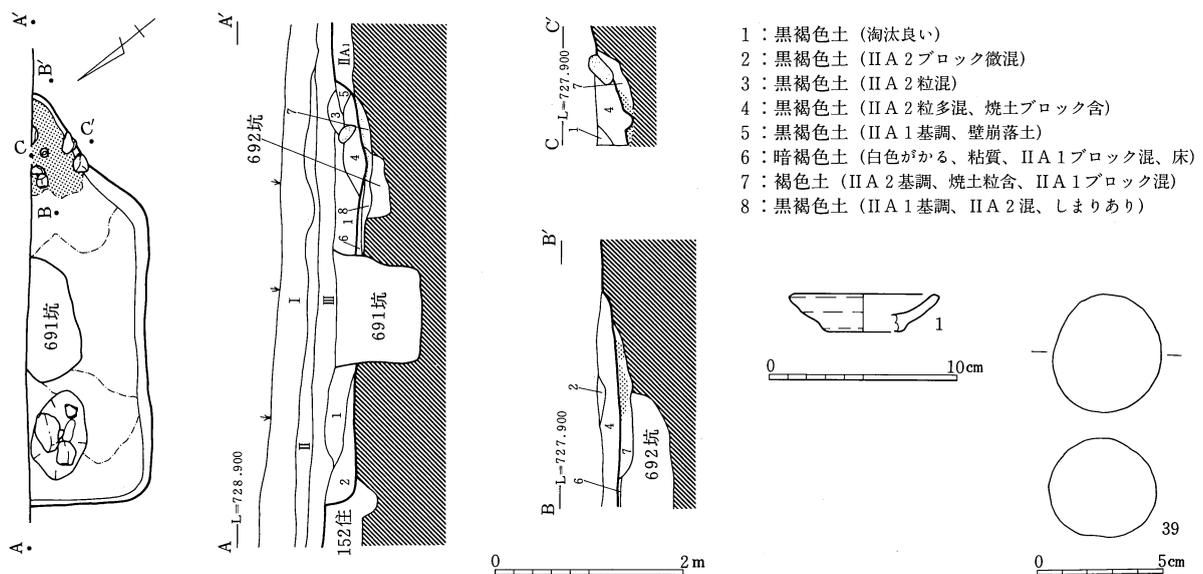
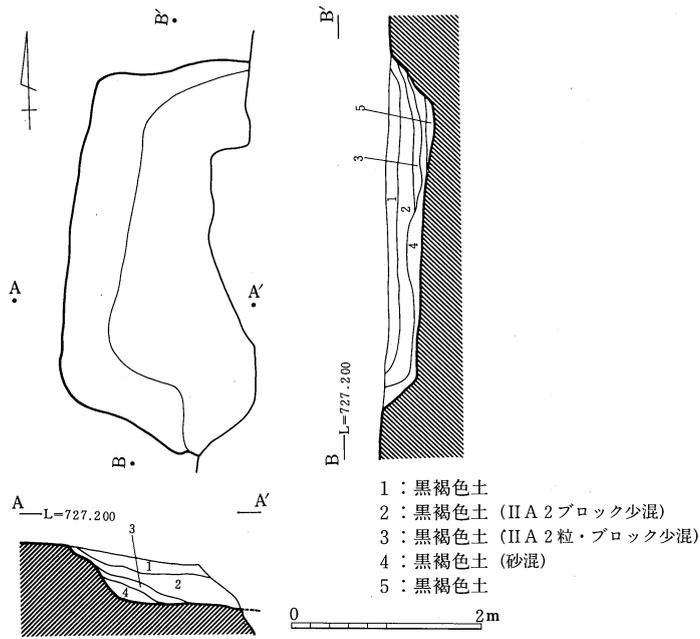


図128 153号住居址



154号住居址 (図129、PL173)

II A 2層上面で検出された。崖際で検出されたため、東側は崖の崩落により欠損したものと判断される。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床面ははっきりせず、掘り下げた地山面が底となった。諸施設は確認されなかった。遺物の出土は認められない。時期不明である。

155号住居址 欠番

図129 154号住居址

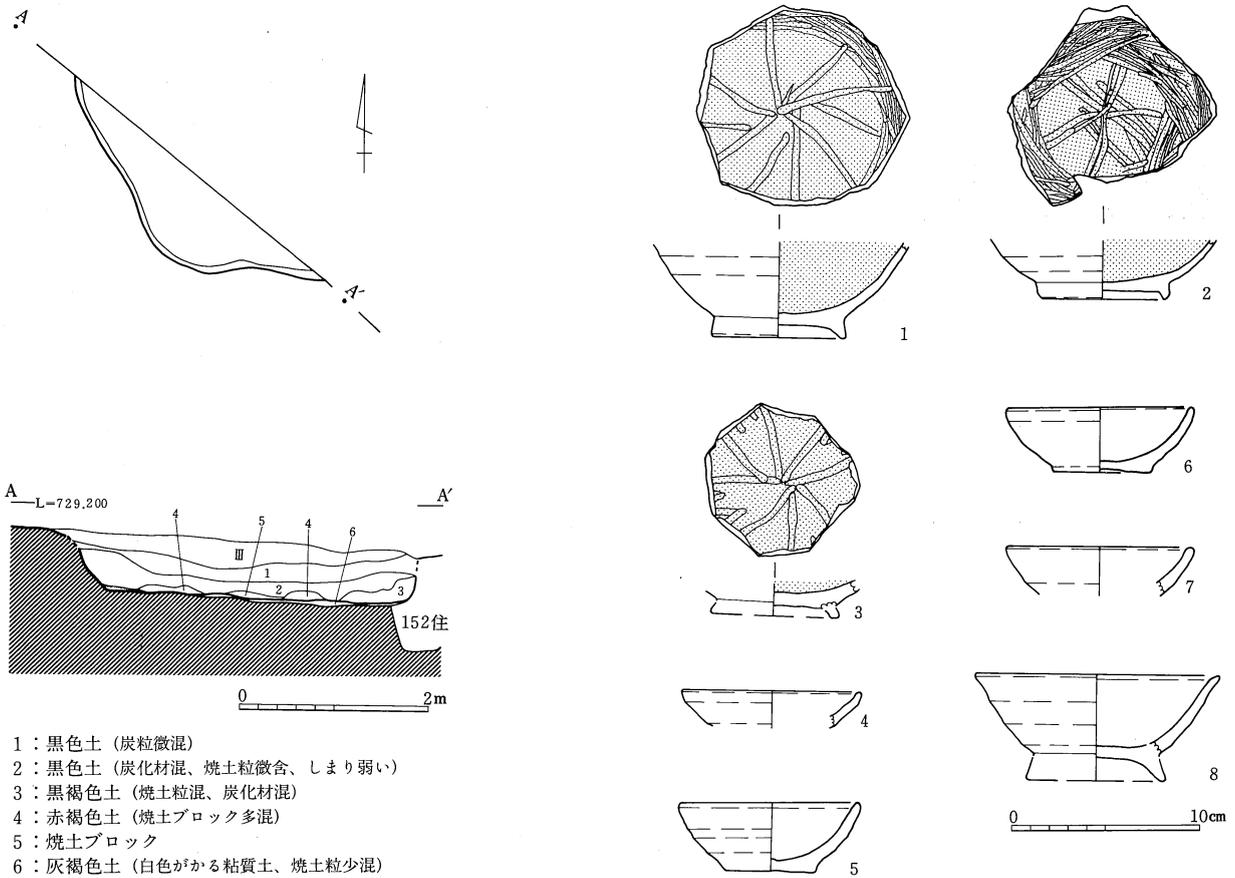


図130 156号住居址

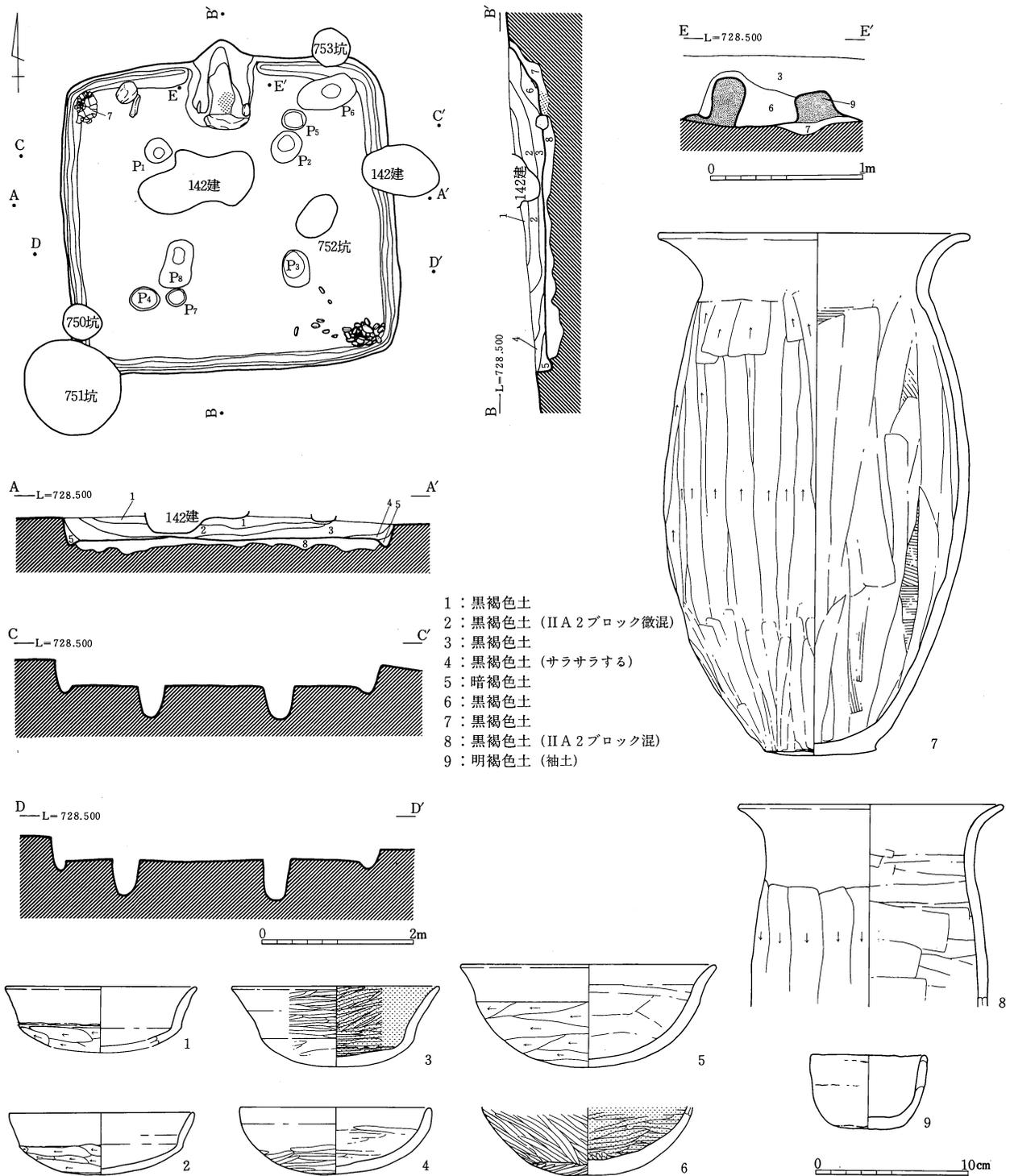


図131 157号住居址(1)

156号住居址 (図130、PL174・223)

IIA 1層上面で検出された。152号住居址を切る。本址のほとんどが用地外にかかるため調査に至らなかった。黒褐色土主体の自然堆積と思われる。覆土中には炭粒・焼土粒の混入が顕著で、特に西側に集中して認められた。床は掘り方を浅く埋め戻し平坦にしたものと思われる。部分的にたたきしめによる堅緻面が認められた。

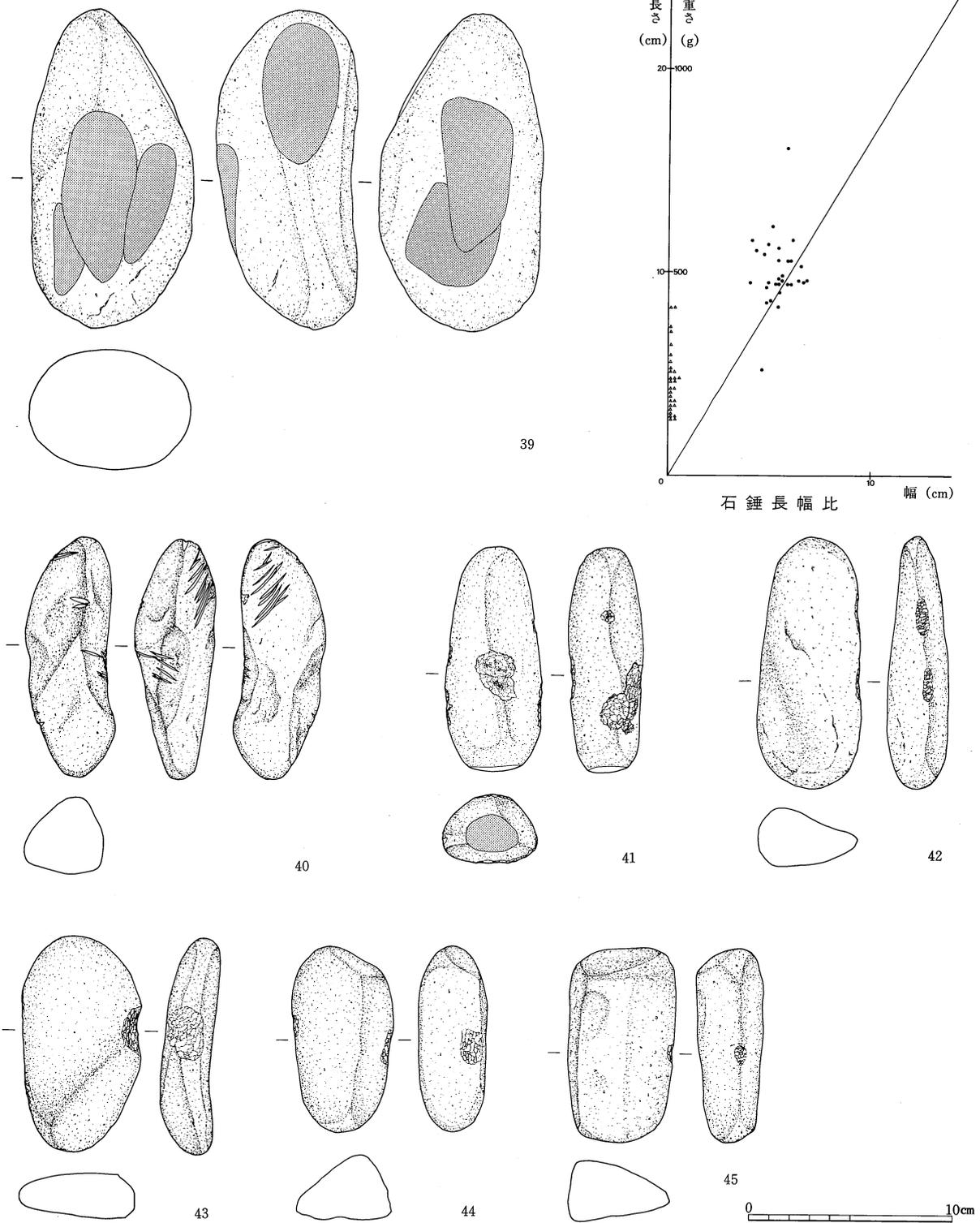


図132 157号住居址(2)

遺物 遺物の出土量はわずかである。土師器甕1片・ロクロ甕1片・内面黒色碗4(1~3)・土師質坏4(4~7)・碗1(8)個体分が出土している。

時期 13段階と思われる。

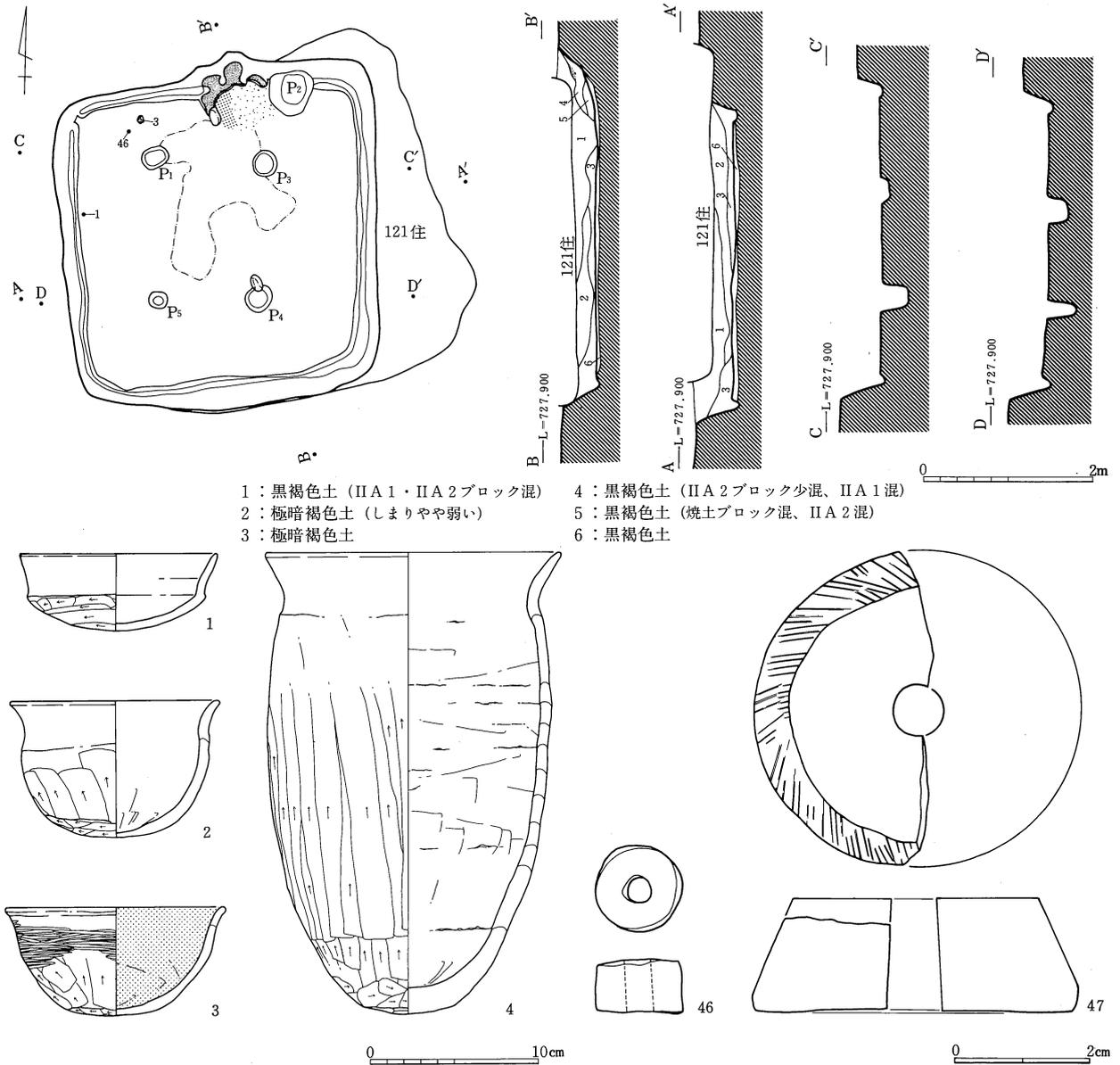


図133 158号住居址

157号住居址 (図131・132、PL174・259・260)

IIA 1層上面で検出された。142号掘立柱建物址、750・751・753号土坑に切られる。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は北西隅に甕(7)がつぶれた状態で出土し、南東隅に石錘が30個かたまって検出されている。周溝は幅約20 cm、深さ約10 cmで検出され、カマドを除き全周する。ピットは8基確認され、P1～3・8はその位置から柱穴と判断される。P4・5・7は支柱穴の可能性が有る。P5は焼土粒を混入する。カマドは明褐色土を構築材とし、先端に礫を芯として持つ粘土カマドで、カマド前に天井石と思われる面取りされた軽石が検出された。なお、燃焼部の効率を上げるための意図的な配置も考えられる。

遺物 1～4は土師器坏、5・6は同鉢、7・8は同長胴甕、9は小形の特殊な器種。39は砥石。40～45は、30点出土した石錘の内の加工痕を認めたもの。1・2は、精選された胎土で、橙色を帯びる。群馬県平野部から移入されたものか。3は、在来ないしは北信地方特有の黒色土器。

時期 古墳時代後期後半。

158号住居址 (図133、PL174・261)

II A 1層上面で検出された。11号住居址に切られる。覆土は上部で121号住居址構築時の埋め戻し土、下部が自然堆積と思われる。遺物はカマド周辺部 P1に集中して認められた。床は荒ぼり後、黒色土を埋め戻し、灰褐色粘質土混じりの暗褐色土による貼床が施され、平坦でとくに中央部が堅緻であった。ピットは5基確認され、P1～4が柱穴と判断される。P1は同一個体の甕(4)の破片が散見され、貯蔵穴に類する施設と思われる。周溝はカマドを除いて壁際に幅約20 cm、深さ10 cm 前後で検出された。P5は周溝構築後に穿たれていたことが覆土の状況で判断される。カマドは残存状況が悪く、明褐色土の構築材が崩れかかって遺存していた。火床は西側に寄って確認された。

遺物 1は土師器坏、2・3は同小形鉢、4は同長胴甕、46は滑石製の白玉、47は同紡錘車。1は、精選された胎土で、橙色を帯びる。群馬県平野部から移入されたものか。

時期 古墳時代後期後半。

159号住居址 (2)弥生時代の遺構と遺物で記述**160号住居址** (4)中世以降の遺構と遺物で記述**イ 掘立柱建物址**

B地区では93棟と住居址の数を上回るほどの掘立柱建物址が検出された。

帰属時期については層位・柱穴埋土の相関および検出面のあり方・切り合い関係・出土遺物・周囲の遺構の状況から、大枠では住居址の展開する時期と判断されるが、細かな動きについての時期決定は困難であるとしかたないのが現状である。検出面についてはII A 1層の堆積が認められるところでは同層で行ない、そのほかのものについてはII A 2層上面で検出した。台地部分に限って言えば、住居址同様 I D層以上では検出できない。また柱穴覆土中からの出土遺物については、遺構そのものの時期よりも古い時期の遺物が混入した可能性が充分に考えられるが、概ね遺構時期を示すものと理解しておく。

分布は、全体的に住居址と離れて存在するものではないといえるが、さらに細かにみればいくつかのまとまりとして捉えることも可能である。とくに目を引くのは、一辺が8 m以上もある大形の112号住居址の東側、湯川河岸段丘崖の際に近いところにある125・126号掘立柱建物址、さらに北側の143・144号掘立柱建物址などの大形の建物址で、112号住居址と組み合って存在していたと判断される。同様なことは、台地上の12・120号住居址周囲でも認められ、例えば120号住居址の西側には10棟の掘立柱建物址が部分的に切り合いながら群を成して存在することが看取される。

構造は、先の0段階から後は1間×2間・2間×2間・2間×3間のものとしめられ、0段階で見られるような大形のはみられなくなる。また、それぞれ各構造によって遺跡における分布のあり方には偏りがあることが指摘される。

柱穴掘り方は、関東地方的な溝持ちのものから坪掘りのものそして両者を併用したものまで多様である。このうち坪掘りの柱掘り方は円形を基本としたものが多い傾向にある。柱をつなぐ溝については、調査時にその埋没状況の観察をなるべく注意して行なった(44号掘立柱建物址など)が、指摘できるような結果は得られなかった。

建物址内部に施設を持つものとしては、数基の土坑をともなった49・50号掘立柱建物址と北面中央に焼土をとまう落ち込みを持つ52号掘立柱建物址が挙げられる。とくに後者は総柱式であることを考えると簡単に「倉庫」といえず、その機能の再考を迫るものともなろう。

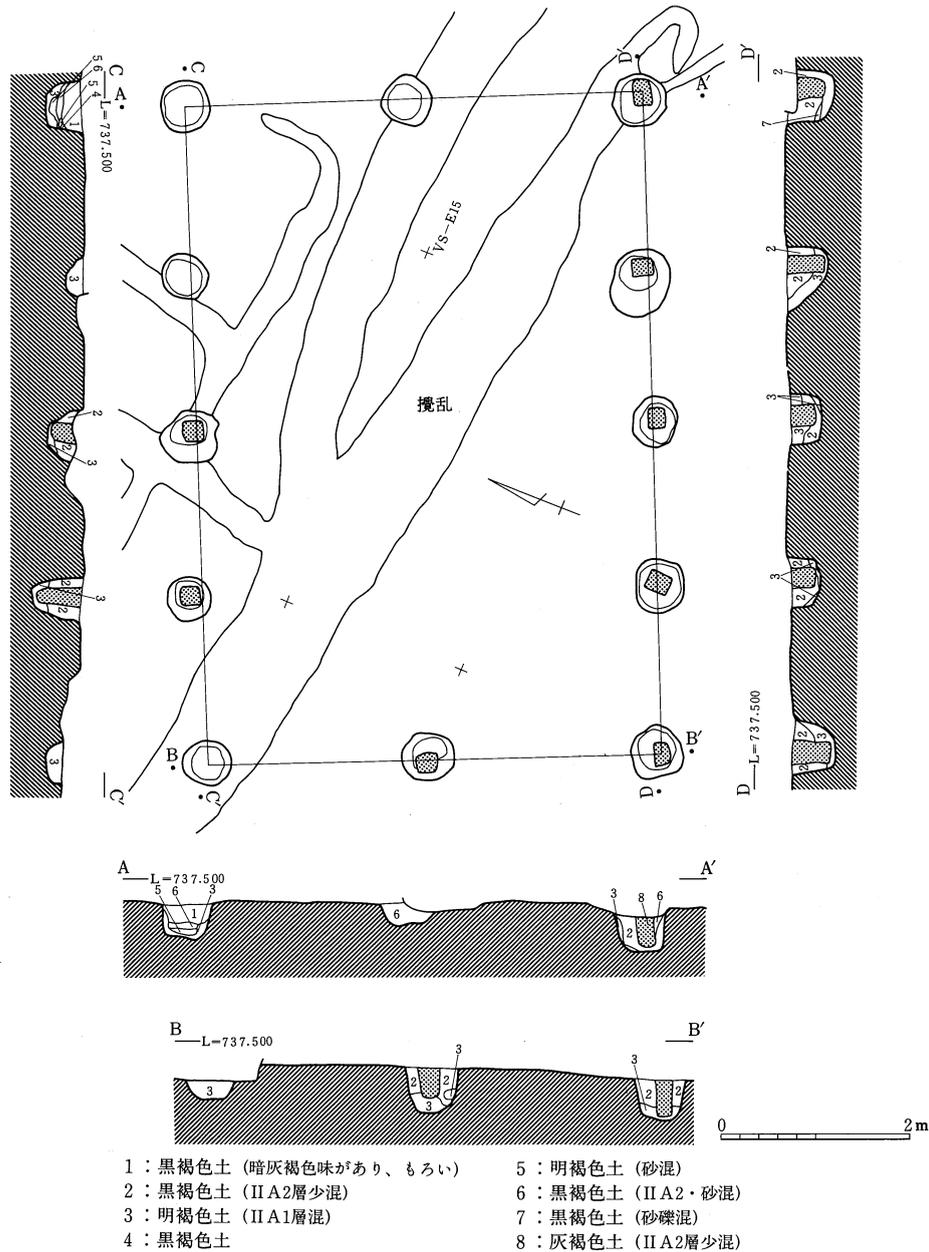


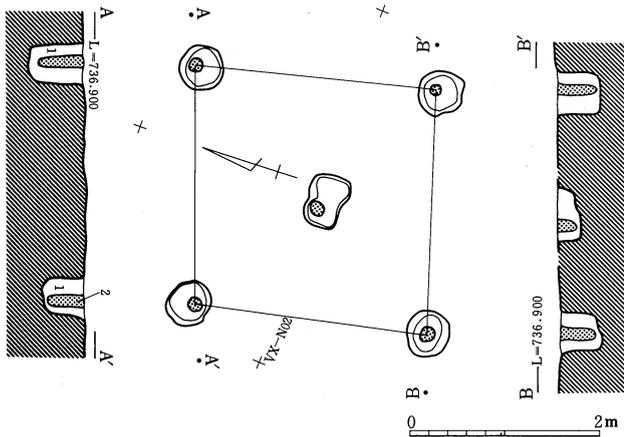
図134 8号掘立柱建物址

なお、「梁・桁」の表記については、本来ならば、「入り口部」や「棟木」などの想定に基いて使用するべきところであるが、本報告では建物址の短軸方向を梁行、長軸方向を桁行として用いた。本遺跡C地区も同様である。

1～7号掘立柱建物址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述

8号掘立柱建物址 (図134、PL175)

II A 2層で検出された。平面形は2間×4間の東西棟、側柱式である。規模は、桁行7.0m、梁行4.9mで、面積34.20m²をはかる。主軸はE-23°-Nを指す。柱間は東西列1.6~1.8m、南北列2.4~2.5mをはかる。柱穴は円形を基本としほぼ均一である。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24cmほどの方形を呈し、掘り方底面まで届くものはない。



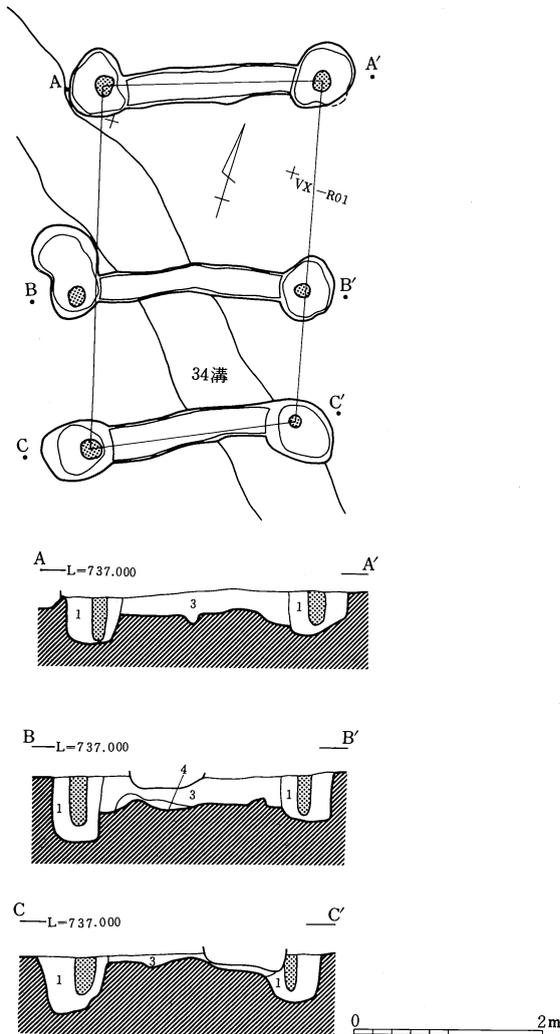
- 1：黒褐色土（IIA2少混、粘性弱く、しまりも良くない）
- 2：暗褐色土（IIA1基調、粘性弱く、しまりも良くない）

9号掘立柱建物址 (図135、PL176)

IIA 2層で検出された。平面形は1間×1間で、中央に長方形を呈す柱穴を持っている。規模は東西2.5m、南北2.6mで、面積6.46m²をはかる。主軸はN-12°-Wを指す。柱穴はほぼ円形を基本とし均一である。掘り方の深さは中央部の柱穴が浅いほかはほぼ一定である。確認された柱痕は径14cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届くものはない。

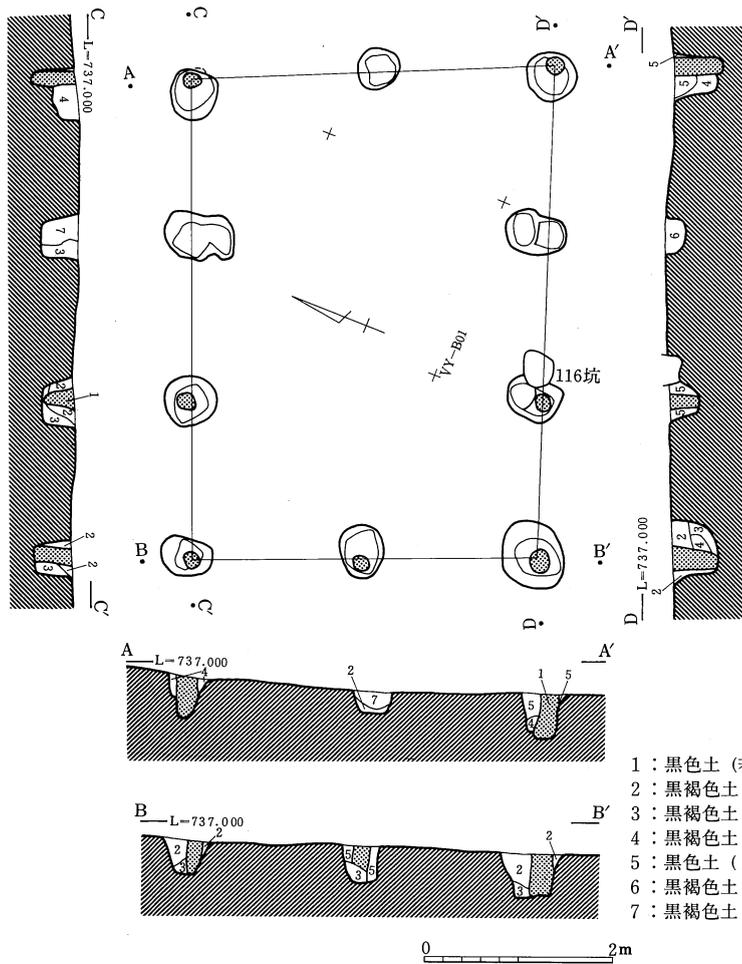
10号掘立柱建物址 (図135、PL176)

IIA 2層で検出された。34号溝址に切られる。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行2.2m、梁行3.8mで、面積8.52m²をはかる。主軸はN-15°-Wを指す。柱間は東西列1.4~2.3m、南北列2.1~2.3mをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものもある。南北列間には各柱穴に対応するような溝が施される。溝底は凹凸が認められ、土層観察から溝埋め戻し後に柱穴が掘られたことが観察される。柱穴の掘り方はほぼ一定である。確認された柱痕は径17cm前後で、掘り方底面まで届くものは少ない。



- 1：暗褐色土（IIA1基調、IIA2ブロック混）
- 2：黒褐色土（IIA1基調、しまり無い）
- 3：暗褐色土（IIA1基調）
- 4：明褐色土（IIA1基調、IIA2ブロック混）

図135 9・10号掘立柱建物址



12号掘立柱建物址 (図136, PL176)

II A層で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.8m、梁行2.9mで、面積10.10m²をはかる。主軸はE-15°-Nを指す。柱間は東西列1.9~2.0m、南北列1.8~2.0mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし均一でない。掘り方の深さは一定でない。確認された柱痕は径20cmほどの円形を呈し、隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されていることが観察される。

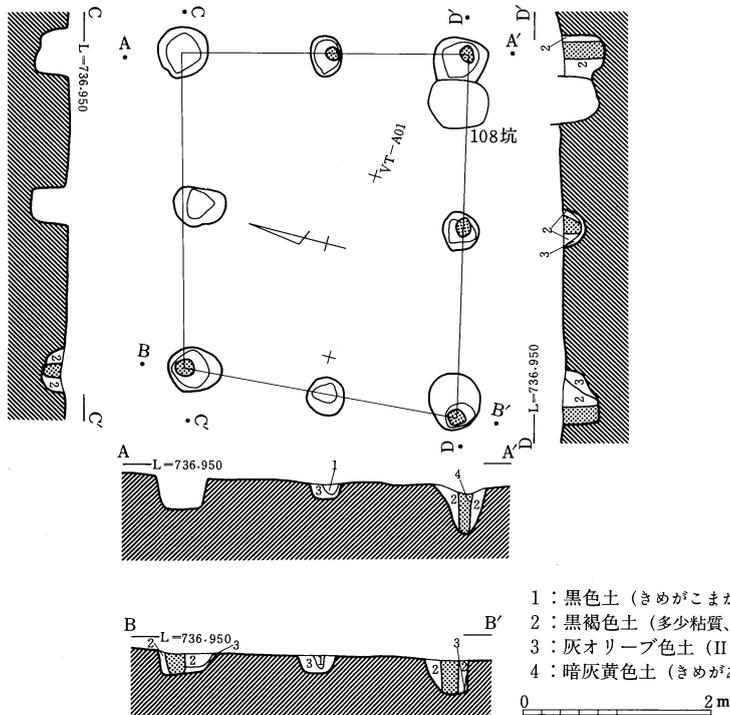
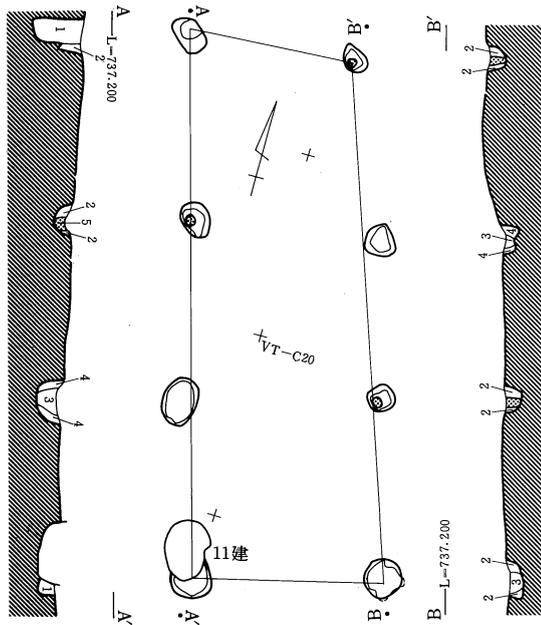
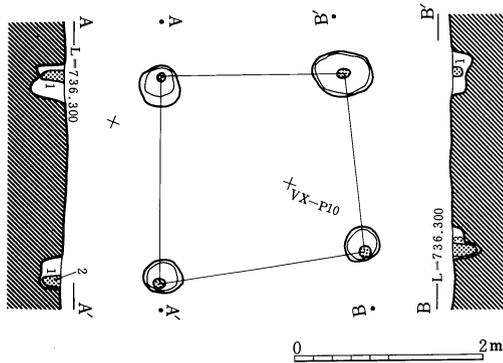


図136 11・12号掘立柱建物址



- 1: 灰オリーブ (IIA1ブロック混)
- 2: 灰オリーブ (IIA2ブロック多混)
- 3: 黒褐色土
- 4: 灰オリーブ (φ 1 mm 位の軽石多含)
- 5: 黒褐色土 (粘性がない)



- 1: 黒褐色土 (IIA1基調、粘性やや弱く、しまりよくない)
- 2: 黒褐色土 (IIA1基調、粘性中程度、しまりあまりよくない)

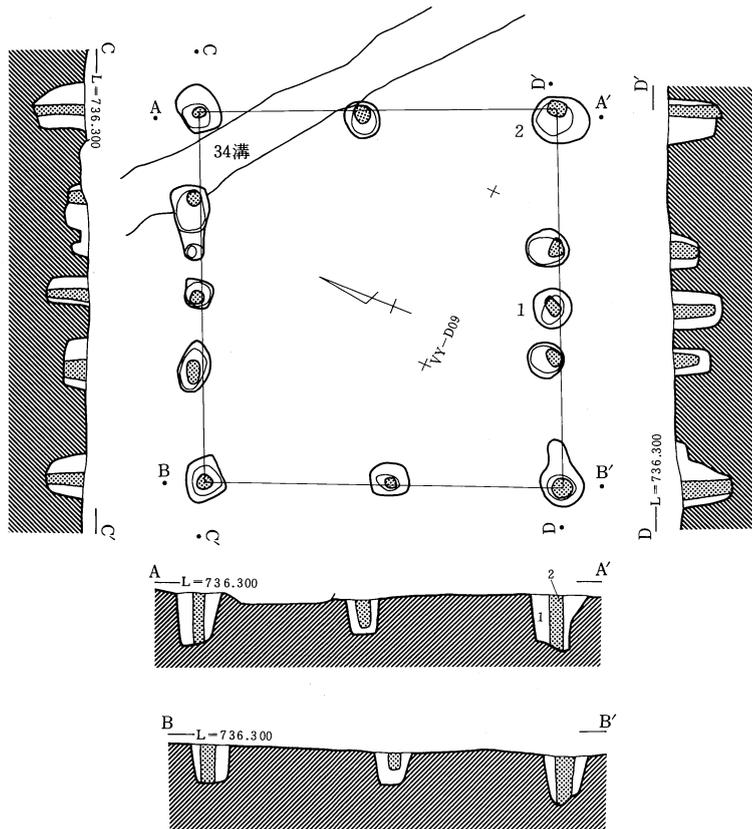
図137 13・14号掘立柱建物址

13号掘立柱建物址 (図137、PL176)

IIA 2層で検出された。平面形は1間×3間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行5.9m、梁行1.7mで、面積10.29m²をはかる。主軸はN-13°-Wを指す。柱間は東西列1.7~2.1m、南北列1.7~2.2mをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものが多い。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径11cmほどの円形を呈する。

14号掘立柱建物址 (図137、PL176)

IIA層で検出された。平面形は1間×1間で、規模は東西列1.8~1.9m、南北列1.9~2.2m、面積4.09m²をはかる。主軸はN-20°-Wを指す。柱穴は円形を基本としほぼ均一である。確認された柱痕は径13cmほどで、掘り方底面より沈んだものも認められる。



1：暗褐色土（IIA1基調、IIA2ブロック多混）
2：黒褐色土（炭化物微含・粘性なし）

0 2m



1：黒褐色土（粘性がない）
2：黒褐色土（IIA2ブロック混）
3：明褐色土（IIA1ブロック多混）

0 10cm

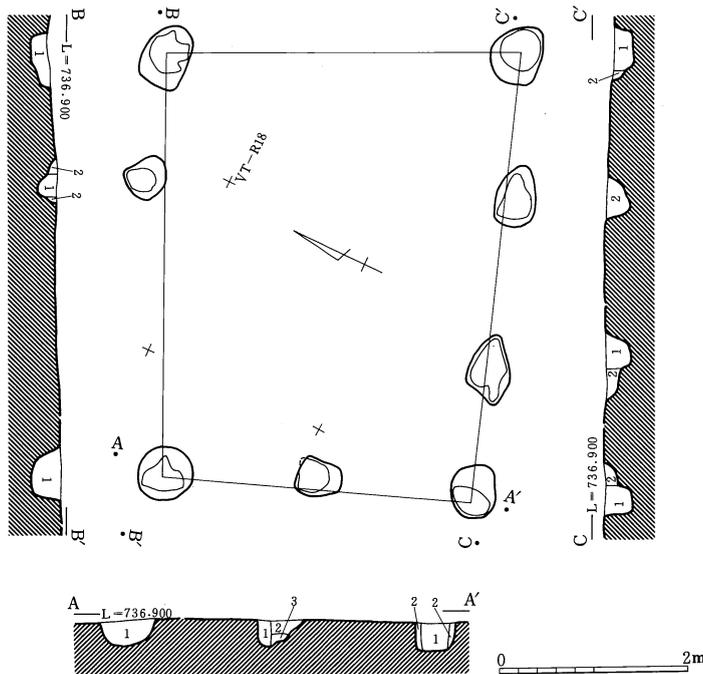


図138 15・16号掘立柱建物址

15号掘立柱建物址 (図138、PL176)

IIA 2層で検出された。平面形は2間×3間の、東西棟、側柱式である。東西列中央に対になる柱穴が認められた。規模は桁行4.0 m、梁行3.7 m、面積15.0 m²をはかる。主軸はE-22°-Nを指す。柱間は東西列0.5~1.5 m、南北列1.7~2.0 mをはかる。柱穴の形は円形・方形を呈し、歪んだものもある。掘り方の深さは一定でない。確認された柱痕は径20 cmほどで、円形を呈すものが多い。
遺物 須恵器坏2片(1・2)・土師器甕16片出土した。

16号掘立柱建物址 (図138、PL176)

IIA 2層で検出された。平面形は対になるピットがないものがあるが、1間×3間の、東西棟、側柱式と判断した。規模は桁行4.9 m、梁行3.4 mで、面積16.82 m²をはかる。主軸はE-15°-Nを指す。柱間は東西列1.7~4.0 m、南北列1.4~3.2 mをはかる。柱穴は全体に不整形である。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。明確な柱痕は確認されなかったが、立ち上がりに段を持つものが認められる。

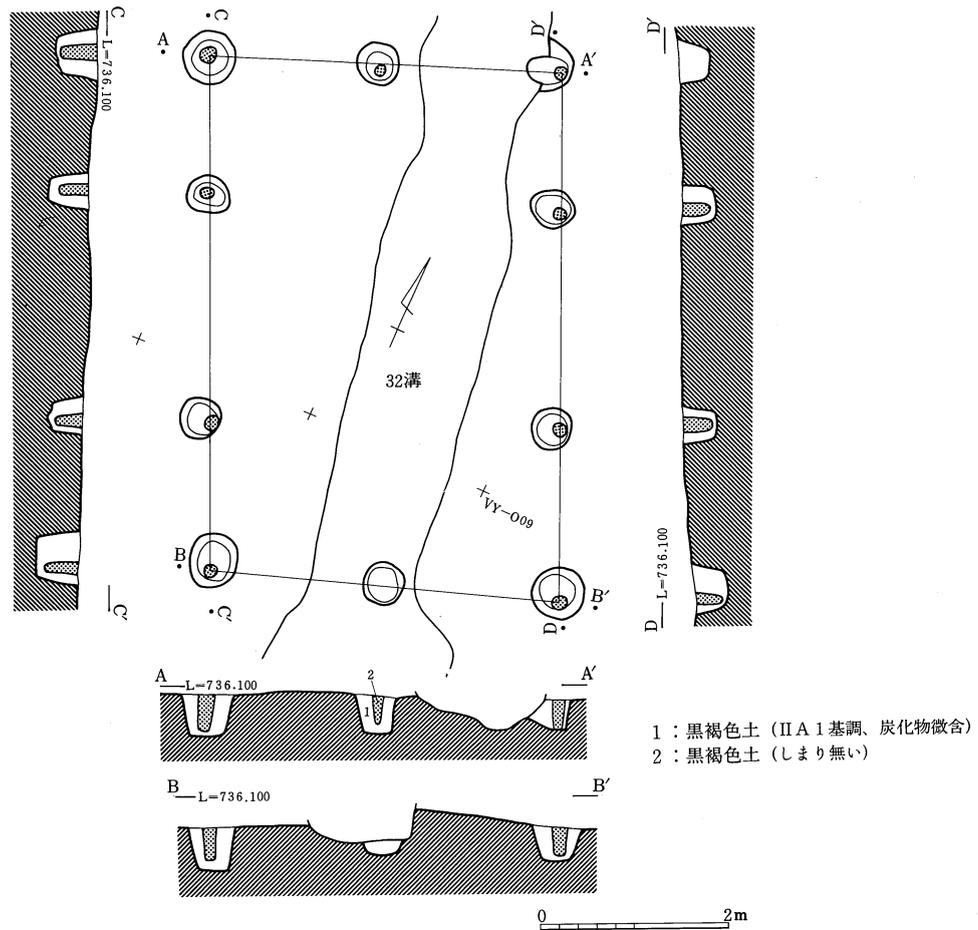


図139 17号掘立柱建物址

17号掘立柱建物址 (図139、PL177)

II A 2層で検出された。32号溝址に切られる。平面形は2間×3間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行5.6 m、梁行3.7 mで、面積20.68 m²をはかる。主軸はN-24°-Wを指す。柱間は東西列1.8~1.9 m、南北列1.5~2.3 mをはかる。柱穴の形は円形を基本としほぼ均一である。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届くものはない。

18・19号掘立柱建物址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述**20号掘立柱建物址** (図140、PL177)

II A 2層で検出された。平面形は1間×1間で、規模は東西2.1 m、南北2.2 m、面積4.28 m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱穴の形は円形を基本とし均一である。掘り方の深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径9 cmほどで、掘り方底面まで届くものはない。

21号掘立柱建物址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述**22号掘立柱建物址** 欠番

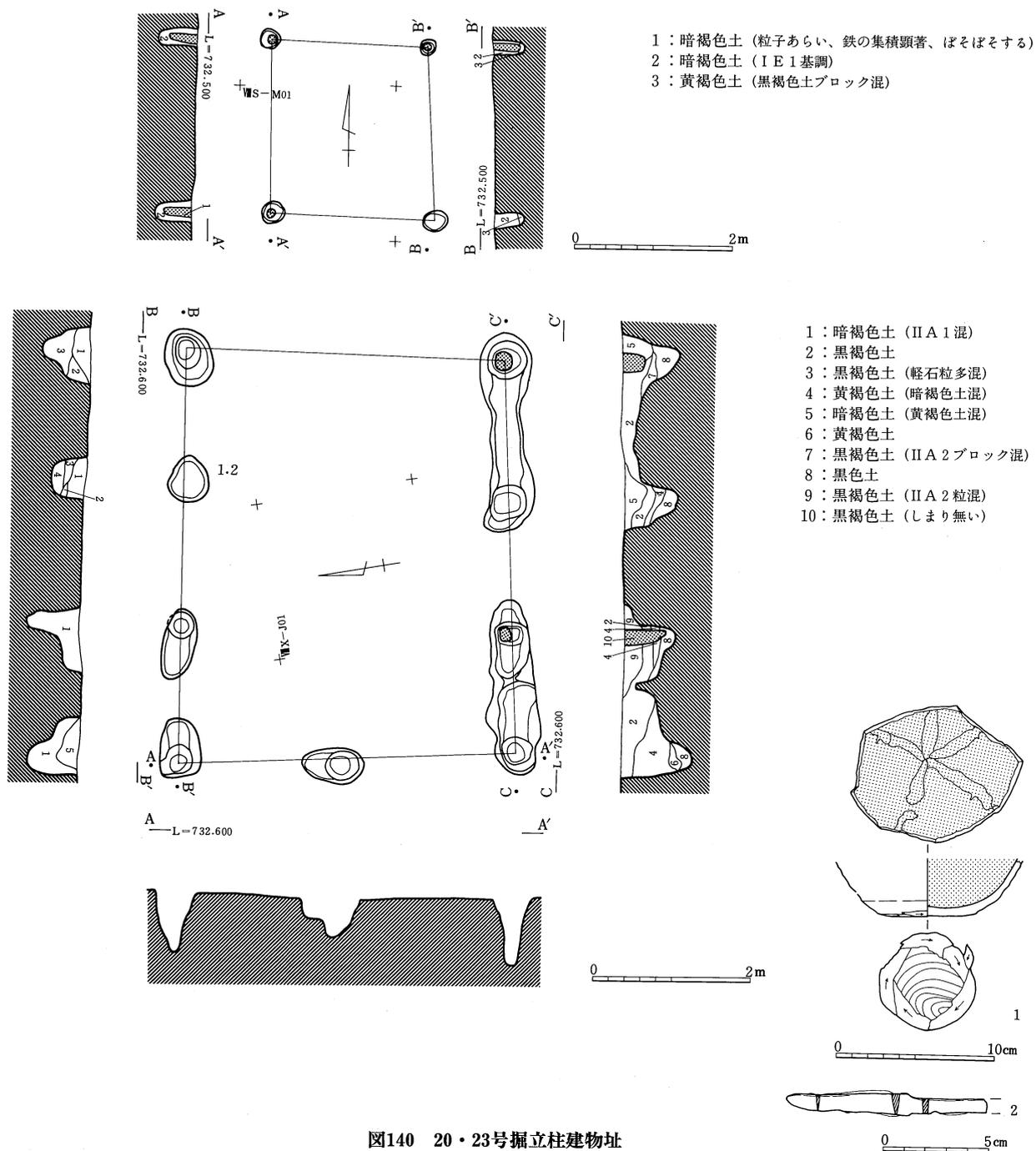


図140 20・23号掘立柱建物址

23号掘立柱建物址 (図140、PL177・225)

II A 1層で検出された。13号住居址、24号掘立柱建物址を切る。平面形は2間×3間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.3m、梁行4.0mで、面積20.97m²をはかる。主軸はE-10°-Sを指す。柱間は東西列2.0~4.0m、南北列1.5~1.8mをはかる。柱穴の形は円形・楕円形を呈する。溝は南側に2列あり、断面から柱穴掘り方の連続によって溝状になったことが観察される。確認された柱痕は径22cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届くものはない。また各柱穴は柱の据え方と思われる段をもったものが認められる。

遺物 須恵器坏4片・甕2片、土師器ロクロ甕1・内面黒色坏5 (1) 個体分が出土した。鉄器は刀子1 (2) が出土している。

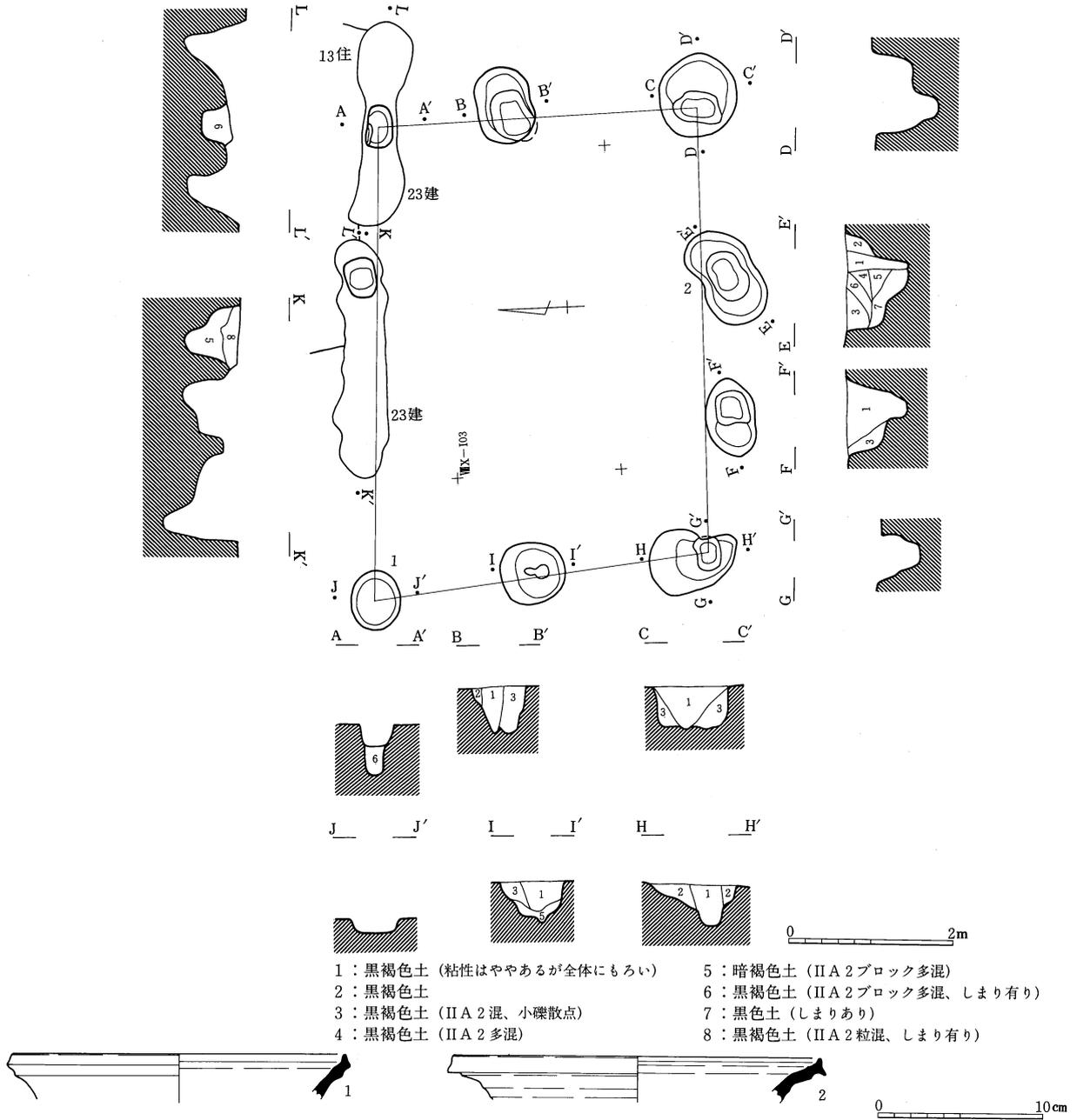


図141 24号掘立柱建物址

24号掘立柱建物址 (図141、PL177)

IIA 1層で検出された。23号掘立柱建物址に切られる。平面形は2間×3間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.9m、梁行3.8mで、面積24.30m²をはかる。主軸はE-3°-Sを指す。柱間は東西列1.5~2.3m、南北列1.8~2.0mをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものもある。柱痕は確認されなかったが、掘り方に段をもつものが多く認められる。

遺物 須恵器坏3片・甕1(2)・短頸壺1(1)、土師器甕2片・内面黒色坏碗不明3片・皿1片が出土した。

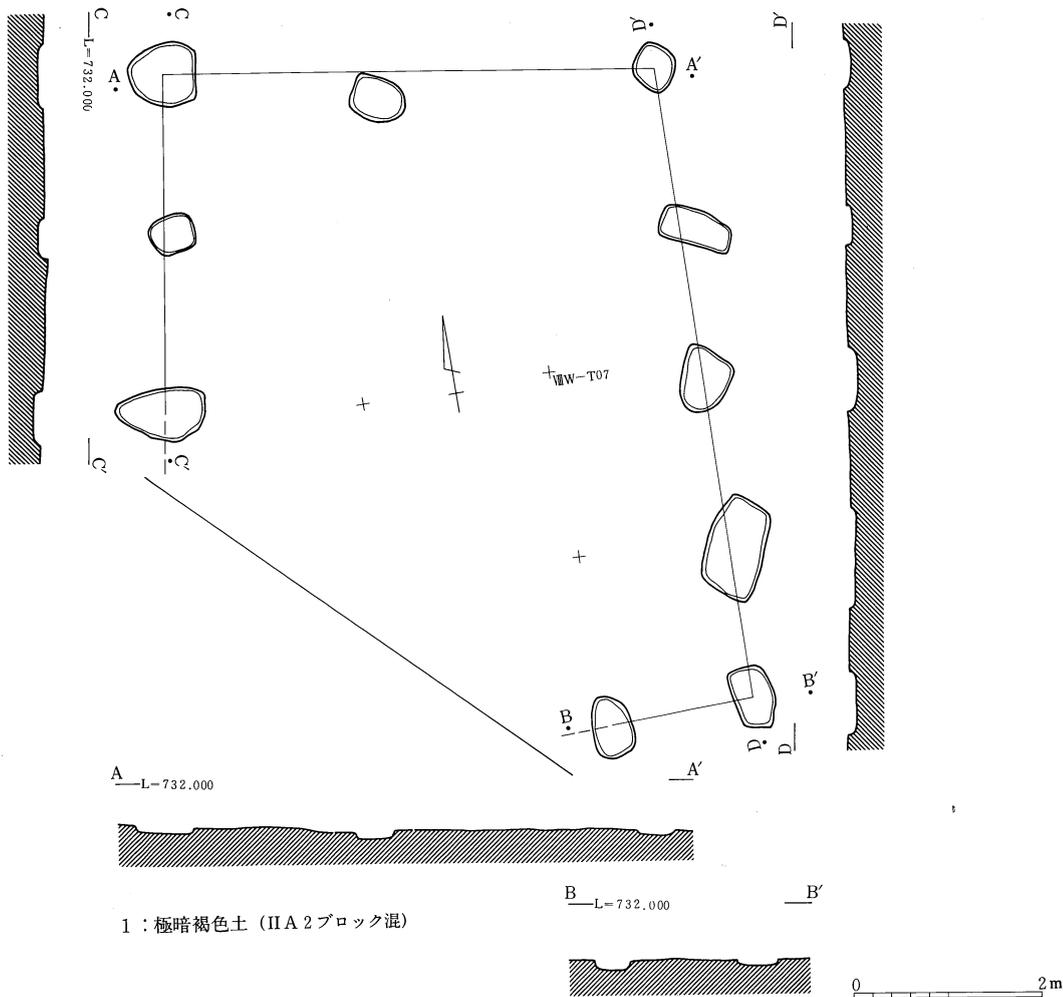
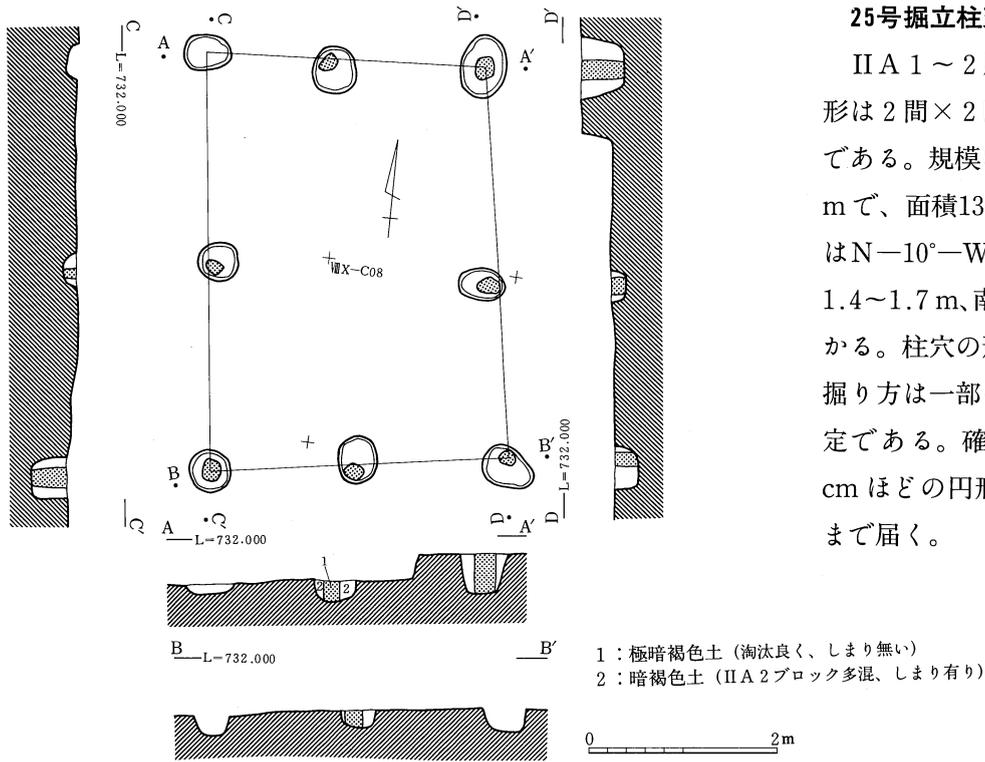


図142 25・26号掘立柱建物址

26号掘立柱建物址 (図142)

II A 2層で検出された。28号掘立柱建物址を切る。平面形は2間×4間の、南北棟、側柱式である。規模は南側で用地外にかかるため推定で桁行6.7m、梁行5.2mで、面積40.03m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.5~1.8m、南北列1.5~3.0mをはかる。柱穴は全体に不整形で均一でない。掘り方は全体に浅く、底は平である。

27号掘立柱建物址 (図143)

II A 2層で検出された。25号掘立柱建物址に切られる。全体は不明瞭で、柱痕が確認されたところから掘立柱建物址として扱った。南北棟、側柱式が想定される。現状で規模は桁行6.5m、梁行1.7mをはかる。主軸はN-7°-Wを指す。柱間は東西列1.7m、南北列1.6~2.6mをはかる。柱穴は不整形で均一でない。掘り方は全体に浅くほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどの方形に近いものである。

28号掘立柱建物址 (図143、PL177)

II A 2層で検出された。26号掘立柱建物址に切られる。平面形は2間×3間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.6m、梁行2.6mで、面積11.98m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.1~1.7m、南北列0.9~2.1mをはかる。柱穴は全体に不整形で均一でない。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

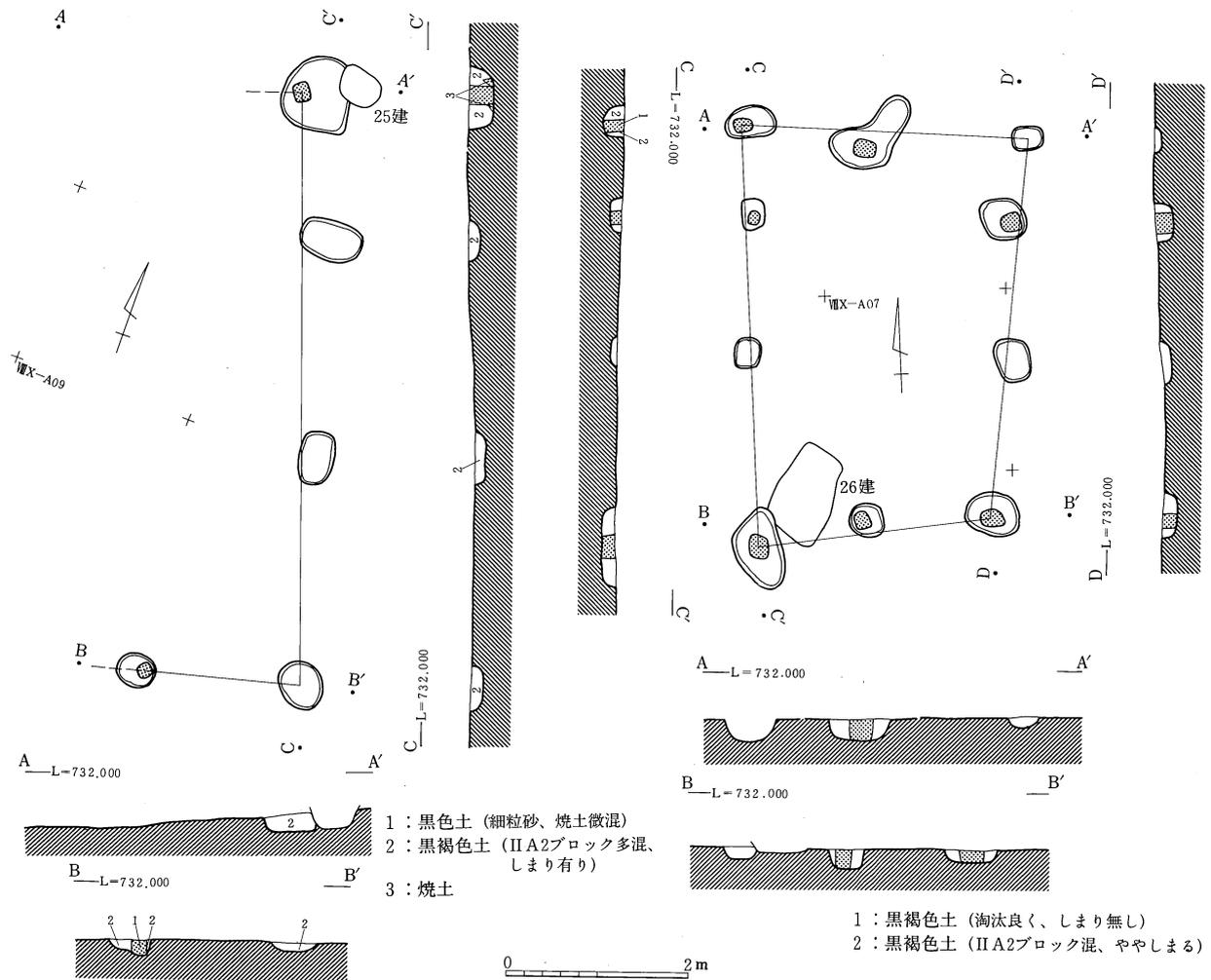
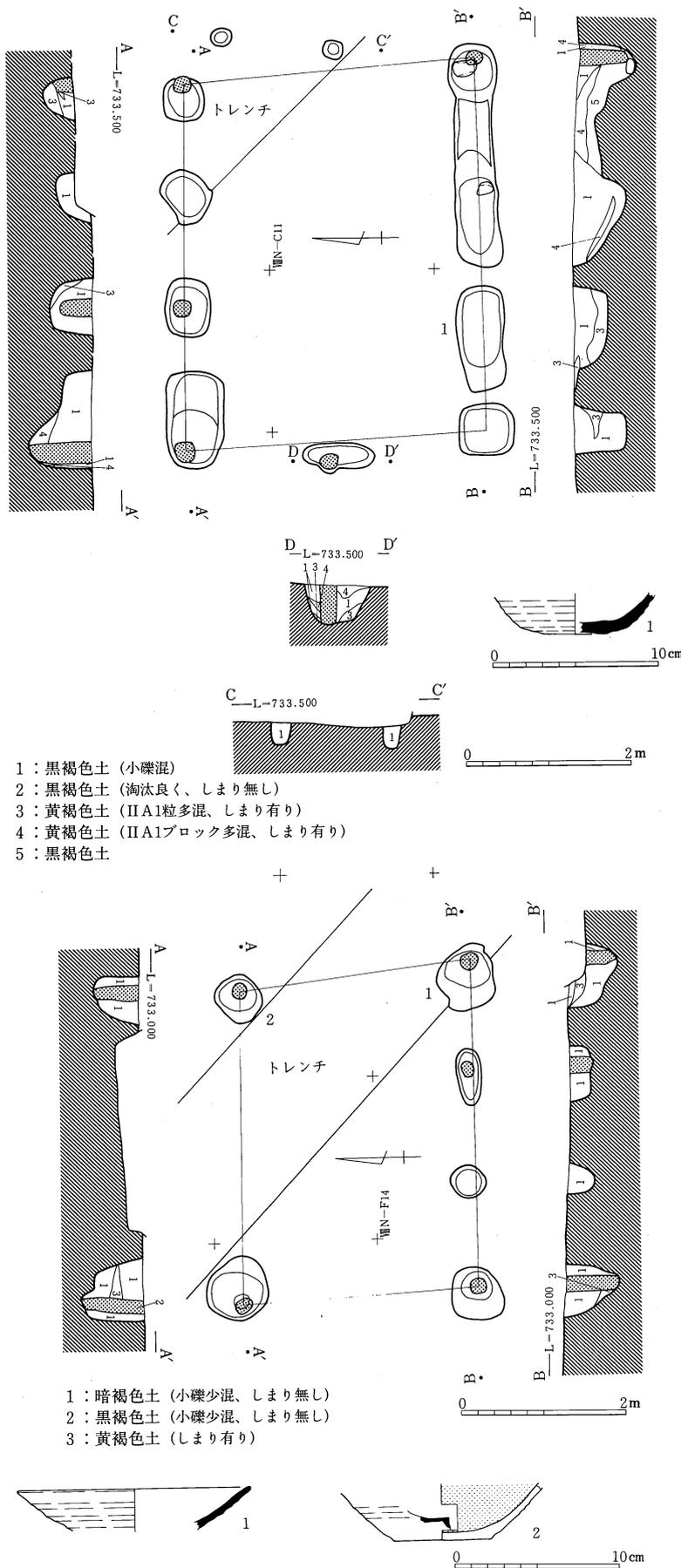


図143 27・28号掘立柱建物址



29号掘立柱建物址 (図144、PL178)

II A 1層で検出された。平面形は2間×3間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.9 m、梁行3.1 mで、面積16.97 m²をはかる。主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列1.4~1.9 m、南北列1.3~1.8 mをはかる。柱穴の形は方形・長方形を呈す。溝は1列あり、土層観察から柱穴掘り方の前後関係が観察される。また底に礎石と思われる礫が認められた。さらに東面北寄りに小ピットが2基確認され、本址に伴う付属施設と推察される。確認された柱痕は径24 cmほどの垂方形である。隅柱穴の柱痕は掘り方の隅に寄るように配されている。

遺物 須恵器環2片(1)・長頸瓶1片が出土しているだけである。

30号掘立柱建物址 (図144、PL178)

II A 1層で検出された。トレンチにより部分的に消失した。平面形は1間×3間の、東西棟、側柱式と思われる。規模は桁行4.0 m、梁行2.8 mで、面積11.00 m²をはかる。主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列1.3 m、南北列2.7~2.8 mをはかる。柱穴の形は隅柱穴が規模が大きく円形を基本とし均一である。確認された柱痕は径20 cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届く。

遺物 須恵器環2片(1)、土師器環1片(2)が出土した。2には墨書が書かれるが判読できない。

図144 29・30号掘立柱建物址

31号掘立柱建物址 (図145、PL178)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行3.7 m、梁行3.1 mで、面積11.30 m²をはかる。主軸はE-1°-Nを指す。柱間は東西列1.7~1.9 m、南北列1.4~1.7 mをはかる。柱穴の形は円形・楕円形を呈す。溝は東西列に2列あり、西側で底が深い。確認された柱痕は径24 cmほどで、掘り方底面まで届く。また南西隅の柱穴は溝の軸から張り出した位置にあり溝の性格を考えるうえで留意される。

遺物 須恵器坏5片。土師器甕4片、内面黒色坏4片、皿1(1)が出土している。

32号掘立柱建物址 (図145、PL178)

II A 1層で検出された。平面形は2間×3間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.7 m、梁行3.5 mで、面積16.57 m²をはかる。主軸はE-10°-Nを指す。柱間は東西列1.6~2.0 m、南北列1.4~1.7 mをはかる。すべての柱穴は2基単位で溝でつながり溝は5列と成る。その配置は対称にならない。掘り方の深さはほぼ一定で、布掘り状である。確認された柱痕は径16~24 cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届く。

遺物 須恵器坏3片、長頸瓶2片。土師器甕2片、内面黒色坏4片(1・2)が出土し、石製品は紡錘車1片が出土している。

33号掘立柱建物址 (図146、PL178)

II A 1層で検出された。平面形は2間×3間の溝持ち、東西棟、総柱式である。規模は桁行5.9 m、梁行3.6 mで、面積23.41 m²をはかる。主軸はE-5°-S指す。柱間は東西列2.0~2.8 m、南北列1.7~1.9 mをはかる。柱穴は全体に不整形である。溝は1列あり、底の凹凸が顕著である。掘り方は一部を除いて深さがほぼ一定である。確認された柱痕は径8 cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器高台坏1、坏1、甕1片、把手付長頸瓶1片。土師器甕10片、内面黒色坏3片(1)が出土している。

34号掘立柱建物址 (図146、PL178)

II A 2層で検出された。平面形は北・南側が不揃いであるが、2間×2間の、南北棟、側柱式と判断した。規模は桁行4.5 m、梁行3.8 mで、面積16.16 m²をはかる。主軸はN-40°-Wを指す。柱間は東西列2.0~2.2 m、南北列0.5~2.5 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものもある。掘り方は全体に浅くほぼ一定である。確認された柱痕は径26 cmほどの垂方形で、掘り方底面まで届く。

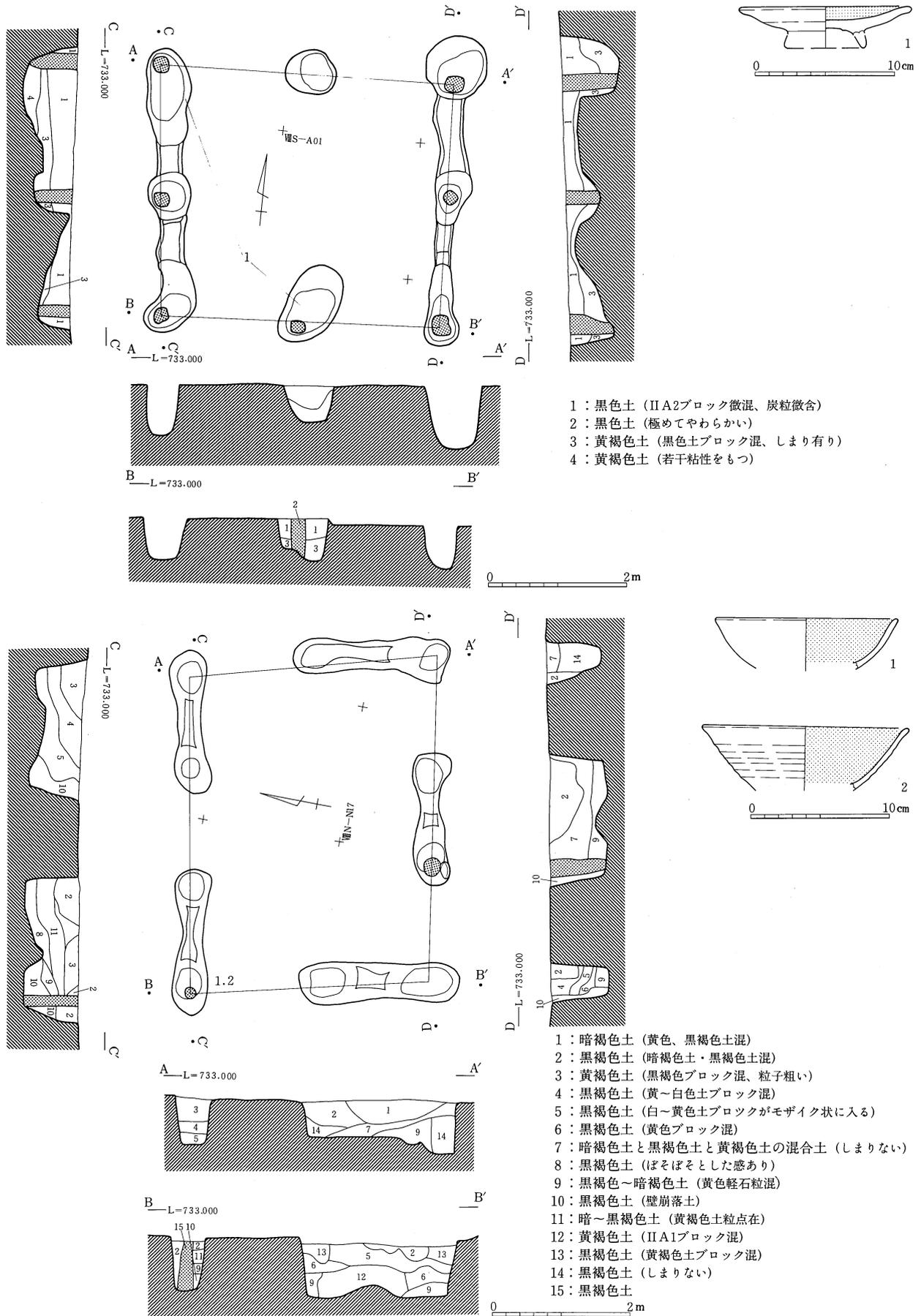


図145 31・32号掘立柱建物址

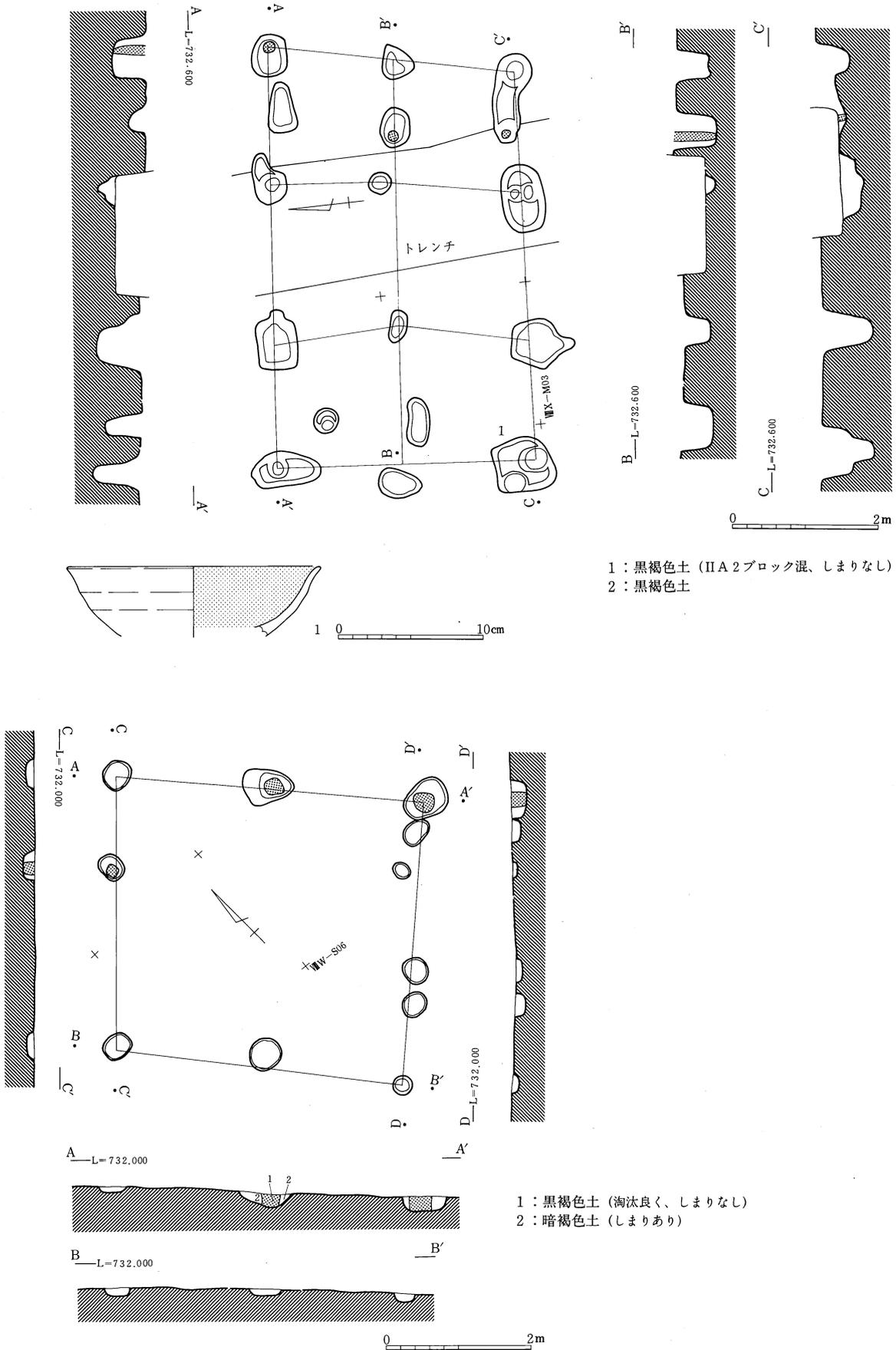
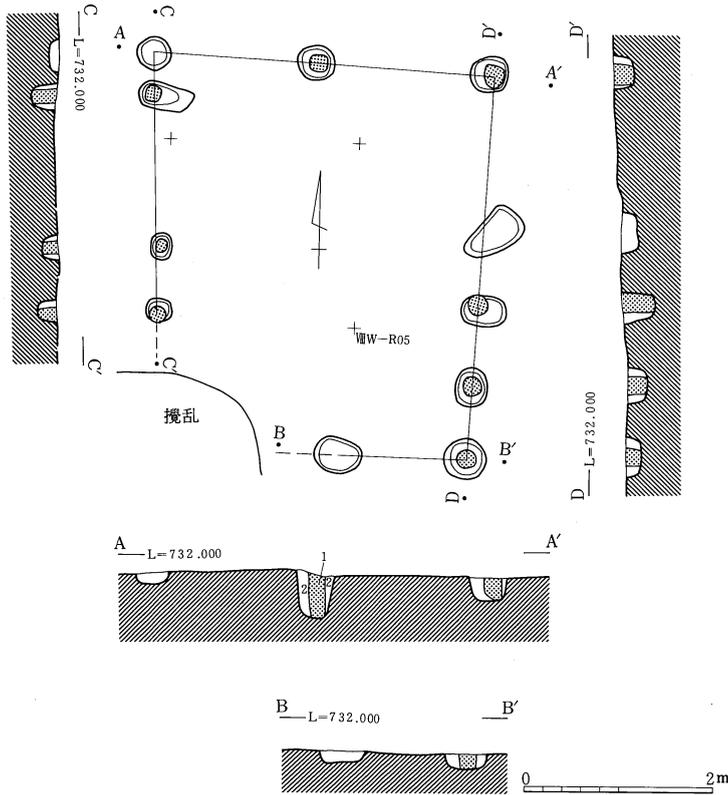
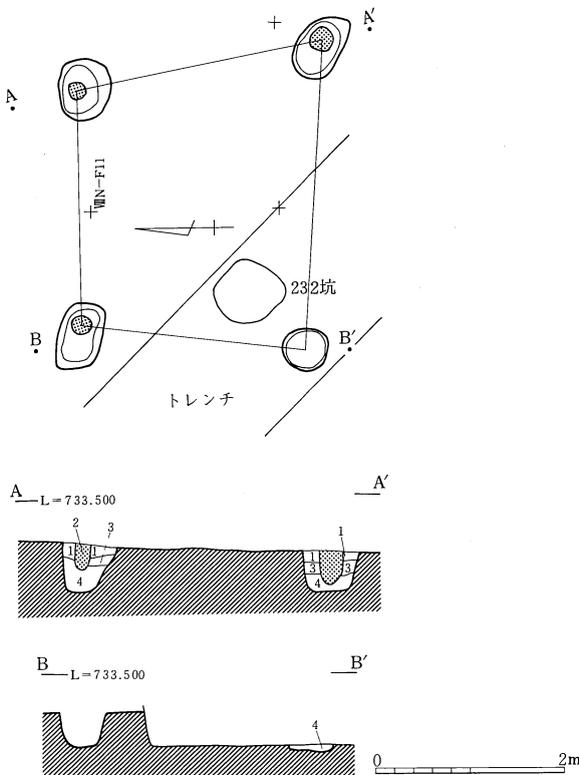


図146 33・34号掘立柱建物址



- 1: 黒褐色土 (淘汰良く、しまりなし)
- 2: 暗褐色土 (IIA 2ブロック混)



- 1: 暗褐色土 (中粒砂礫まじり)
- 2: 黒褐色土 (淘汰よく、極めてやわらかい)
- 3: 黒褐色土 (IIA 1基調)
- 4: 黄褐色土 (IIA 1粒混、かたくしまる)

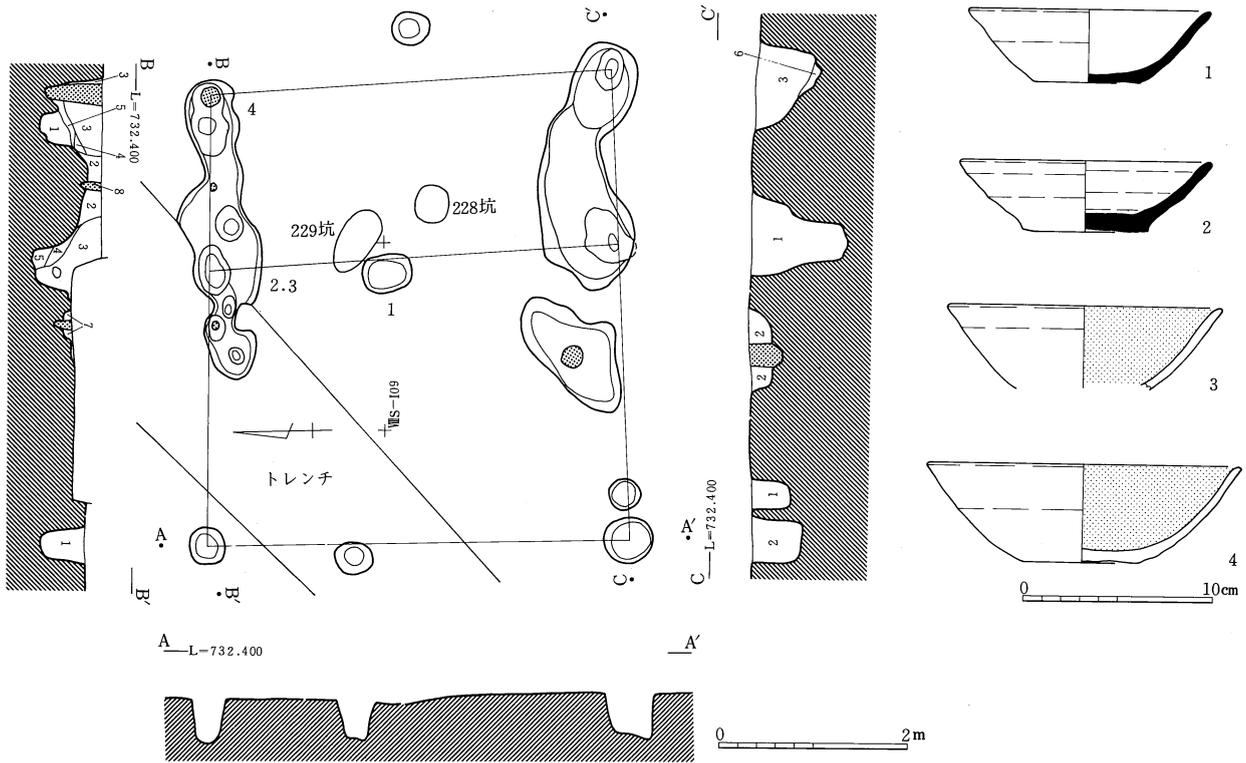
図147 35・36号掘立柱建物址

35号掘立柱建物址 (図147、PL179)

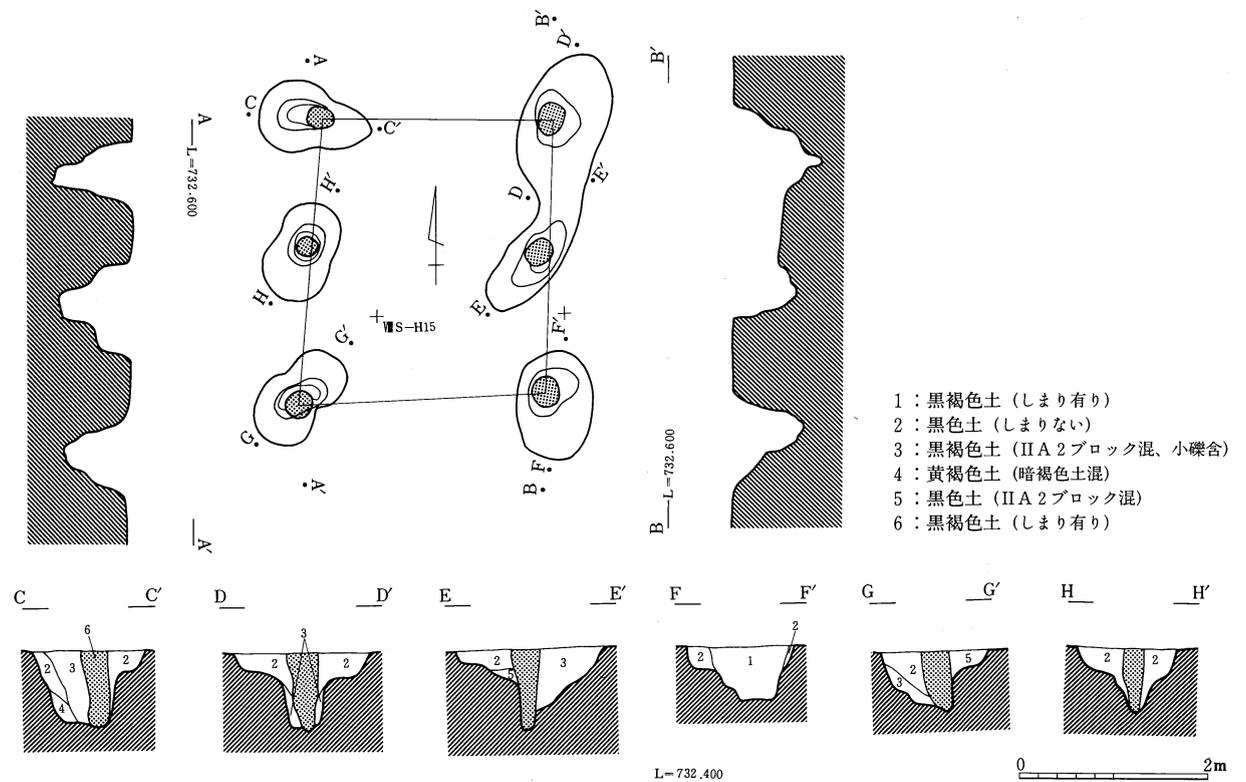
IIA 1層で検出された。平面形は東西列の柱間が不揃いであるが基本的に2間×2間の、南北棟、側柱式と判断した。規模は桁行4.4m、梁行3.2mで、面積14.60m²をはかる。主軸はN-2°-Eを指す。柱間は東西列0.4~1.8m、南北列1.4~1.9mをはかる。柱穴は円形を基本とするが均一でない。掘り方の深さは一定でない。確認された柱痕は径18cmほどの円形を呈し、掘り方底面まで届く。

36号掘立柱建物址 (図147、PL179)

IIA 1層で検出された。平面形は1間×1間で、東西列2.5~3.3m、南北列2.5~2.6m、面積7.41m²をはかる。主軸はE-3°-Nを指す。柱穴は楕円形を基本とし、円形のものもある。掘り方の深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届くものは少ない。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。



- 1 : 黒褐色土 (しまりがあるが全体的にもろい)
- 2 : 暗褐色土 (粘性なし若干砂質をおびる)
- 3 : 黒褐色土 (黄色土下部に粒状に入る)
- 4 : 黒褐色土 (黄色土混)
- 5 : 暗褐色土 (暗褐色土粒混、かたくしまりあり)
- 6 : 黒色土 (しまりがあるが全体的にもろい)
- 7 : 暗褐色土 (黄色土多混、粒子があら)
- 8 : 黒褐色土 (黄色土粒混)



- 1 : 黒褐色土 (しまり有り)
- 2 : 黒色土 (しまりない)
- 3 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック混、小礫含)
- 4 : 黄褐色土 (暗褐色土混)
- 5 : 黒色土 (IIA 2ブロック混)
- 6 : 黒褐色土 (しまり有り)

図148 37・38号掘立柱建物址

37号掘立柱建物址 (図148、PL179・223)

II A 1層で検出された。平面形は南北列の柱穴が不揃いであるが、2間×2間の溝持ち、東西棟、総柱式が想定される。規模は桁行4.9 m、梁行4.3 mで、面積22.1 m²をはかる。主軸はE-1°-Sを指す。柱間は東西列1.8~3.1 m、南北列1.5~2.8 mをはかる。柱穴は円形、2列の溝は掘り方平面形が歪んだ形状を呈す。確認された柱痕は径18 cmほどの円形で、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器高台杯1片、杯4 (1・2)。土師器甕4片、内面黒色杯9片 (3・4)、杯、碗不明両黒1、灰釉皿1片が出土している。

38号掘立柱建物址 (図148、PL179)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.0 m、梁行2.4 mで、面積7.38 m²をはかる。主軸はN-6°-Eを指す。柱間は東西列1.3~1.6 m、南北列2.4~2.6 mをはかる。柱穴は不整楕円形、溝の掘り方平面形は歪んだ形状を呈す。確認された柱痕は径32 cmほどの円形を呈す。掘り方底面まで届き、柱の据え方も明瞭である。

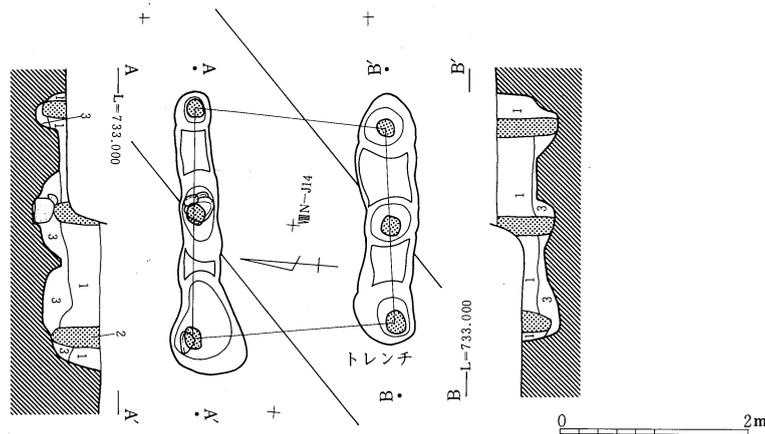
遺物 出土土器は須恵器長頸瓶1片。土師器甕1片、内面黒色杯2片、灰釉碗1片が出土している。

39号掘立柱建物址 欠番

40号掘立柱建物址 (図149、PL179)

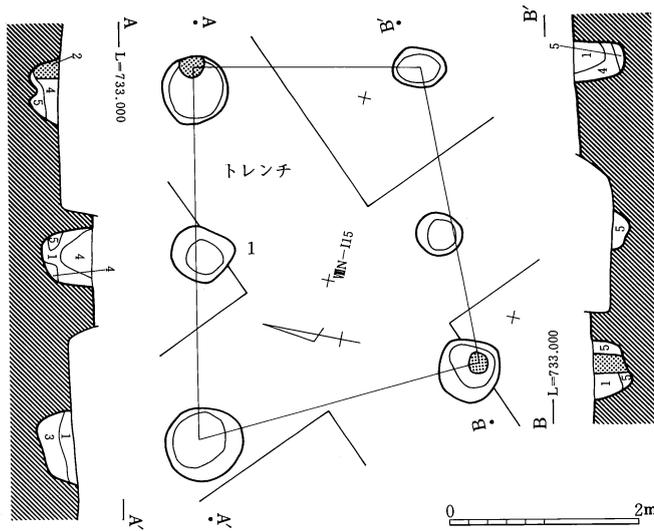
II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行2.4 m、梁行2.0 mで、面積4.69 m²をはかる。主軸はE-6°-Nを指す。柱間は東西列2.1~2.2 m、南北列1.0~1.4 mをはかる。2列の溝は底が波を打っている。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径23 cmほどの円形を呈す。一部に礎石が検出されている。

遺物 出土土器は須恵器杯3片。土師器甕1片が出土している。

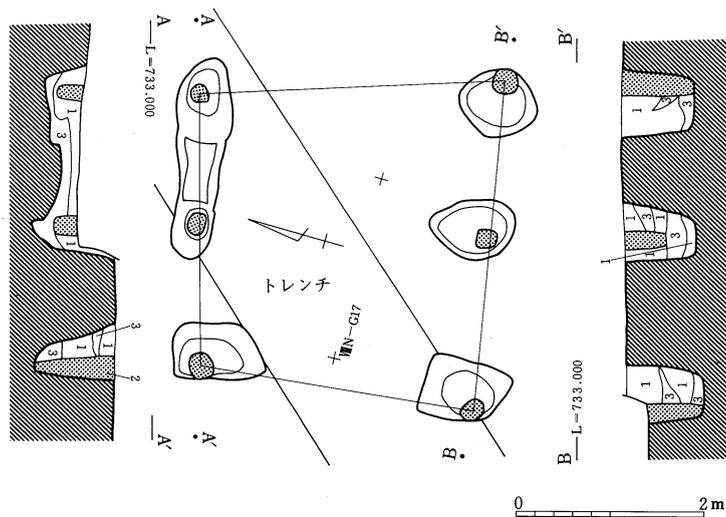
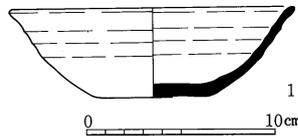


- 1 : 黒褐色土 (II A 1ブロック混、II A 2粒混、しまりない)
- 2 : 黒褐色土 (淘汰良好、しまりない)
- 3 : 黄褐色土 (II A 1ブロック混、小礫含、かたくしまる)

図149 40号掘立柱建物址



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒褐色土 (淘汰良い、やわらかい)
- 3 : 明褐色土 (IIA1ブロック混)
- 4 : 黒褐色土
- 5 : 明褐色土 (IIA1粒混、かたくしまる)



- 1 : 明褐色土 (粘性なく、やわらかい)
- 2 : 暗褐色土 (淘汰良好、やわらかい)
- 3 : 明褐色土 (IIA1ブロック混、しまり)

図150 41・42号掘立柱建物址

41号掘立柱建物址 (図150、PL179)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行3.6 m、梁行2.4 mで、面積9.35 m²をはかる。主軸はE-11°-Nを指す。柱間は東西列2.4~2.7 m、南北列1.4~1.8 mをはかる。柱穴の形は円形を基本としている。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径17 cmほどの円形を呈す。

遺物 出土土器は須恵器環1片(1)が出土している。

42号掘立柱建物址 (図150、PL179)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行3.5 m、梁行2.9 mで、面積9.73 m²をはかる。主軸はE-15°-Nを指す。柱間は東西列2.9~3.2 m、南北列1.4~1.8 mをはかる。柱穴は平面形が不整形で歪んだものもある。溝が1列ある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18~24 cmほどで、溝内のものは掘り方底面まで達しない。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。

遺物 出土土器は須恵器環1片が出土している。

43号掘立柱建物址 (図151、PL180)

II A 1層で検出された。10号住居址を切り、17号住居址、42号溝址に切られる。10号住居址検出段階で切り合いが確認できず、10号住居址床面調査時に床面を穿つピットが確認され、切り合いの判断をした。平面形は2間×3間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行6.8m、梁行4.1mで、面積27.54m²をはかる。主軸はE-3°-Sを指す。柱間は東西列1.8~2.9m、南北列1.8~2.2mをはかる。柱穴の形は円形・方形を呈し、不整形なものもある。掘り方の深さ、断面形は不揃いである。確認された柱痕は径25~30cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器坏3片。土師器甕3片、壺1片、内面黒色坏4片が出土している。

44号掘立柱建物址 (図152、PL180)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行2.9m、梁行2.8mで、面積7.75m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.3~1.5m、南北列2.8mをはかる。2列の溝は掘り方断面形が異なる。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。なお、東側の溝について横に10分割を行ない土層のあり方を観察したが、溝のもつ性格を規定するような所見は得られなかった。

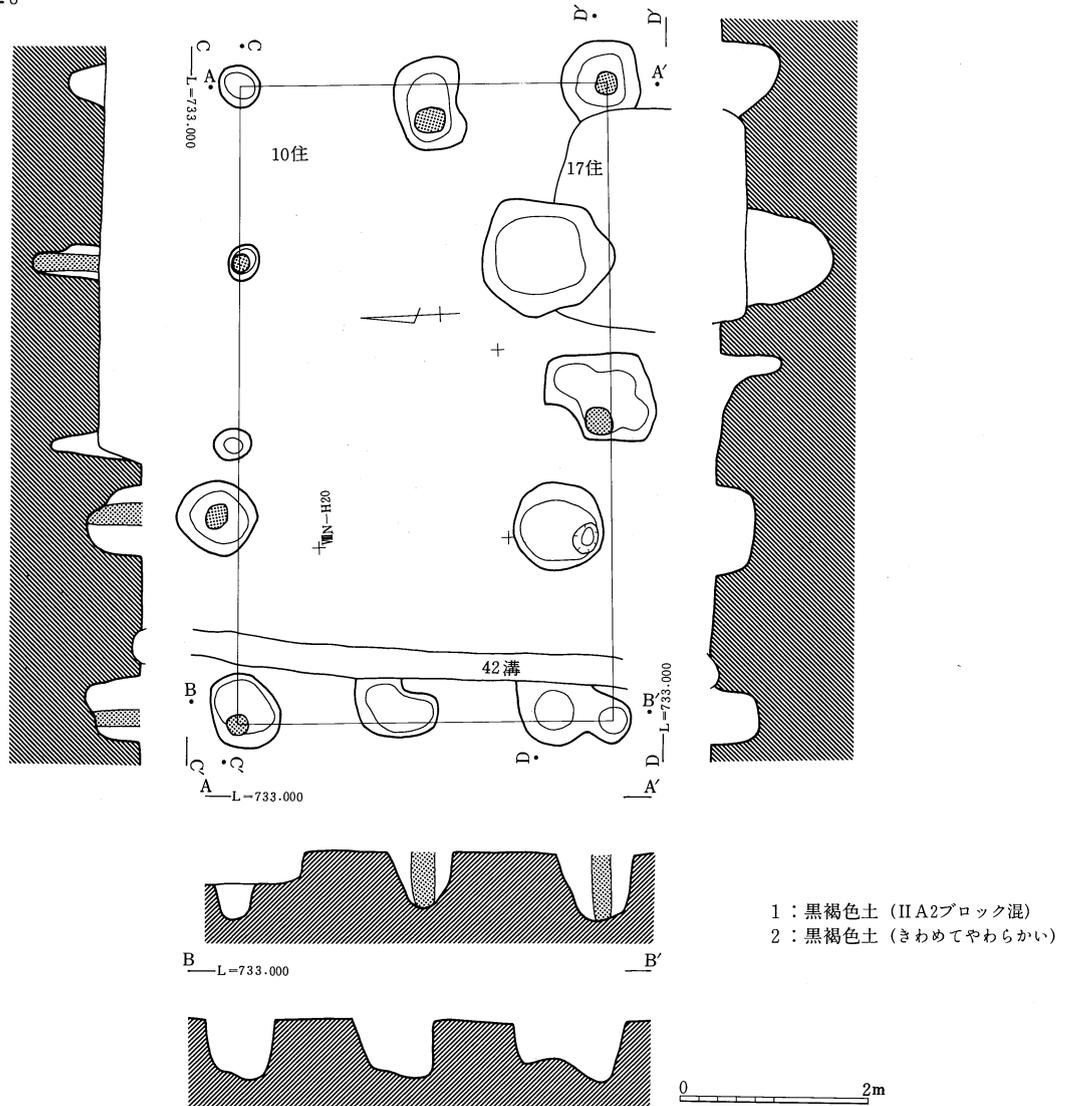
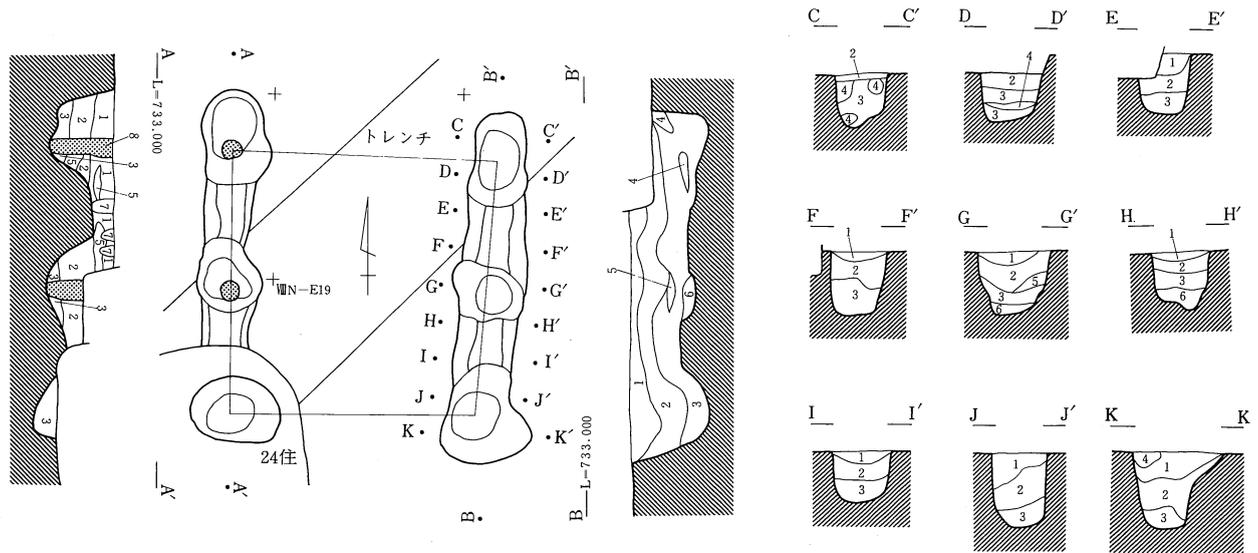


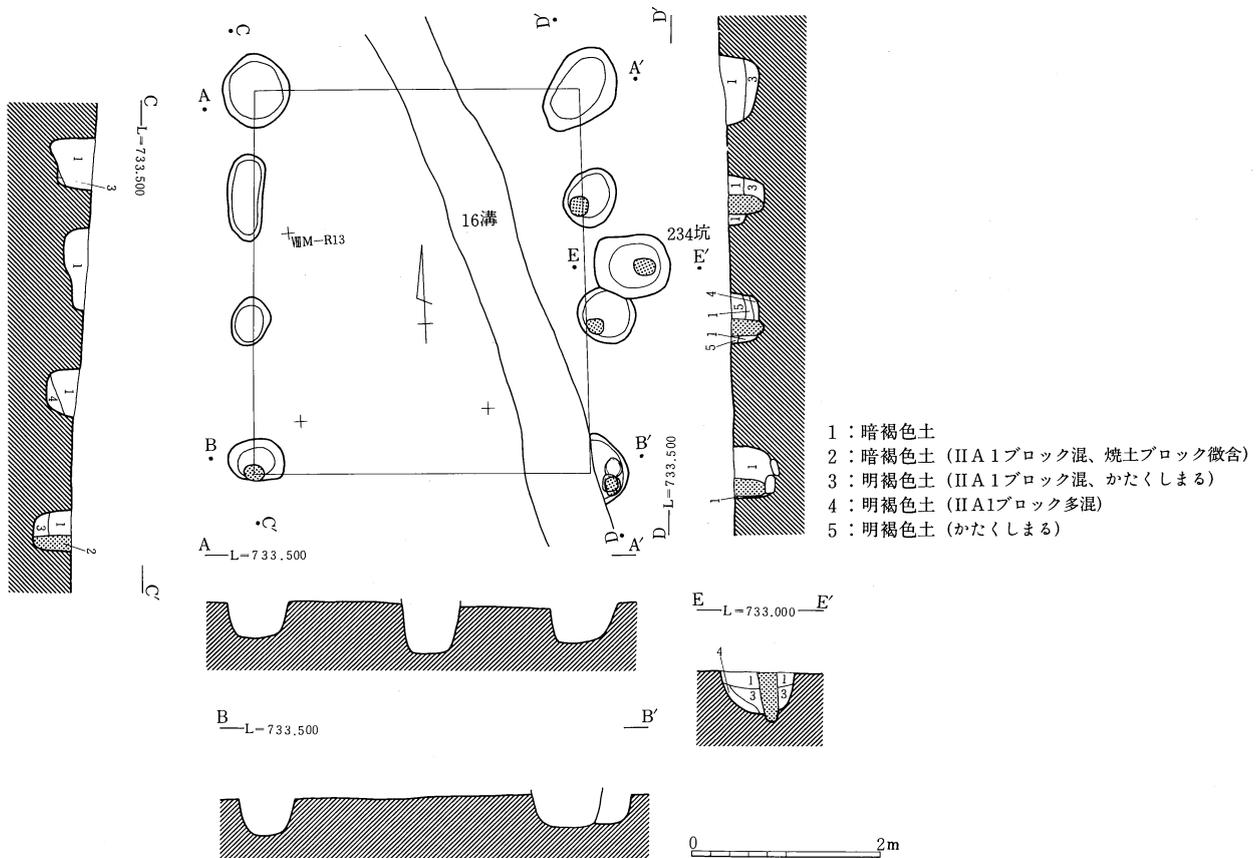
図151 43号掘立柱建物址



- 1 : 暗褐色土 (IIA 2ブロック少混)
- 2 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック微混、淘汰良い)
- 3 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック混、かたくしまる)
- 4 : 褐色土 (IIA 1ブロック微混、かたくしまる)
- 5 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック多混)
- 6 : 黒褐色土 (IIA 1ブロック多混、しまり良い)
- 7 : 暗褐色土
- 8 : 暗褐色土 (淘汰良く、きわめてやわらく指先でくずれおちる)

0 2m

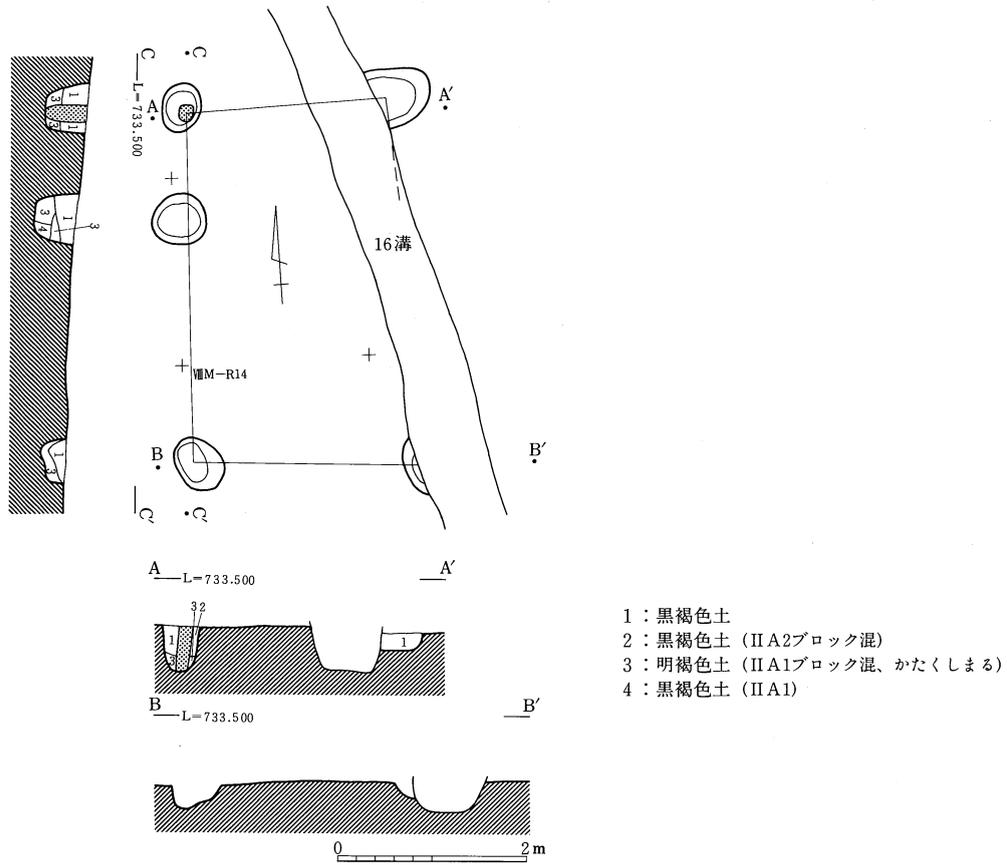
L=732.800



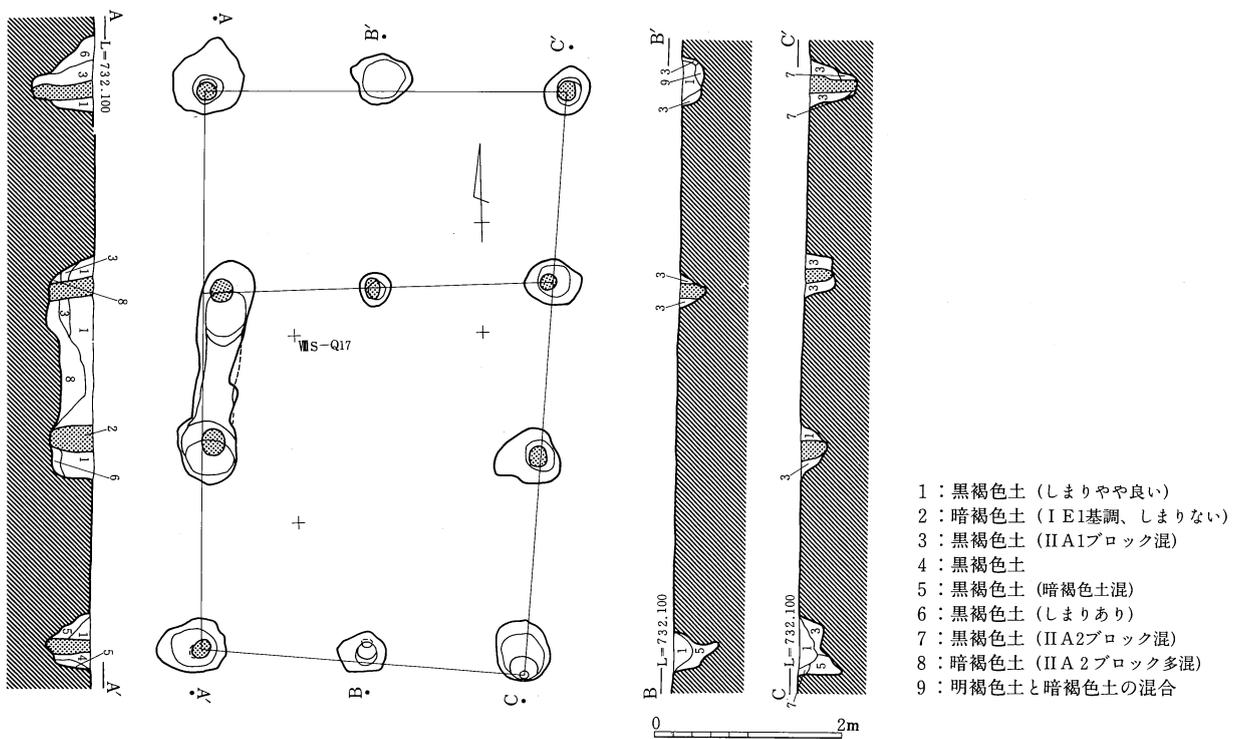
- 1 : 暗褐色土
- 2 : 暗褐色土 (IIA 1ブロック混、焼土ブロック微含)
- 3 : 明褐色土 (IIA 1ブロック混、かたくしまる)
- 4 : 明褐色土 (IIA 1ブロック多混)
- 5 : 明褐色土 (かたくしまる)

0 2m

図152 44・46号掘立柱建物址



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒褐色土 (IIA2ブロック混)
- 3 : 明褐色土 (IIA1ブロック混、かたくしまる)
- 4 : 黒褐色土 (IIA1)



- 1 : 黒褐色土 (しまりやや良い)
- 2 : 暗褐色土 (IE1基調、しまりない)
- 3 : 黒褐色土 (IIA1ブロック混)
- 4 : 黒褐色土
- 5 : 黒褐色土 (暗褐色土混)
- 6 : 黒褐色土 (しまりあり)
- 7 : 黒褐色土 (IIA2ブロック混)
- 8 : 暗褐色土 (IIA2ブロック多混)
- 9 : 明褐色土と暗褐色土の混合

図153 47・48号掘立柱建物址

45号掘立柱建物址 (4)中世以降の遺構と遺物で記述**46号掘立柱建物址** (図152)

II A 1層上面で検出された。平面形は1間×3間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.1 m、梁行3.8 mで、面積14.61 m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.2~1.6 m、南北列3.8~3.9 mをはかる。柱穴の形は方形・円形を呈す。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は南東側に偏って認められ、径24 cmほどで、掘り方底面まで届く。南東隅には礎石が検出されている。

遺物 出土土器は須恵器杯2片が出土している。

47号掘立柱建物址 (図153、PL180)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の、南北棟、側柱式と判断した。規模は桁行3.8 m、梁行2.1 mで、面積8.38 m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列2.1 m、南北列1.1~3.8 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径16 cmほどである。

遺物 出土土器は須恵器杯1片、中形甕1片。土師器甕1片が出土している。

48号掘立柱建物址 (図153、PL180)

II A 1層で検出された。平面形は2間×3間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行6.1 m、梁行3.4 mで、面積20.98 m²をはかる。主軸はN-3°-Eを指す。柱間は東西列1.6~1.9 m、南北列1.6~2.2 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。溝は全体に掘り下げられて柱穴間を結ぶ。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどであった。

遺物 出土土器は土師器甕2片、内面黒色杯1片、灰釉皿1片が出土している。

49号掘立柱建物址 (図154、PL180・224)

II A 1層で検出された。検出面で遺物が散見され多くの落ち込みが確認された。その結果、2棟の掘立柱建物址を確認するに至った。平面形は2間×2間の併用、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.3 m、梁行3.5 mで、面積12.02 m²をはかる。主軸はE-1°-Sを指す。柱間は東西列0.7~2.2 m、南北列0.8~2.2 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、溝は2列ある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径11 cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器杯1(1)。土師器杯3(2~4)、灰釉蓋1(5)、碗1(6)、皿1(7)が出土している。

50号掘立柱建物址 (図154、PL180)

II A層で検出された。平面形は2間×2間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.6 m、梁行3.2 mで、面積18.20 m²をはかる。主軸はE-1°-Sを指す。柱間は東西列1.6~5.6 m、南北列1.3~2.0 mをはかる。柱穴の形は円形・不整形なものであった。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届く。先に記した49号掘立柱建物址もそうであるが柱穴の形状が不整形で、くわえて本址の場合は柱穴の他に多数の落ち込みが確認されている。その機能は不明であった。

遺物 出土土器は土師器内面黒色杯2(11、12)が出土している。49・50号掘立柱建物址は切り合っている為どちらの遺物か確認できない遺物がある。須恵器杯2(8・9)、灰釉碗1(10)が出土している。

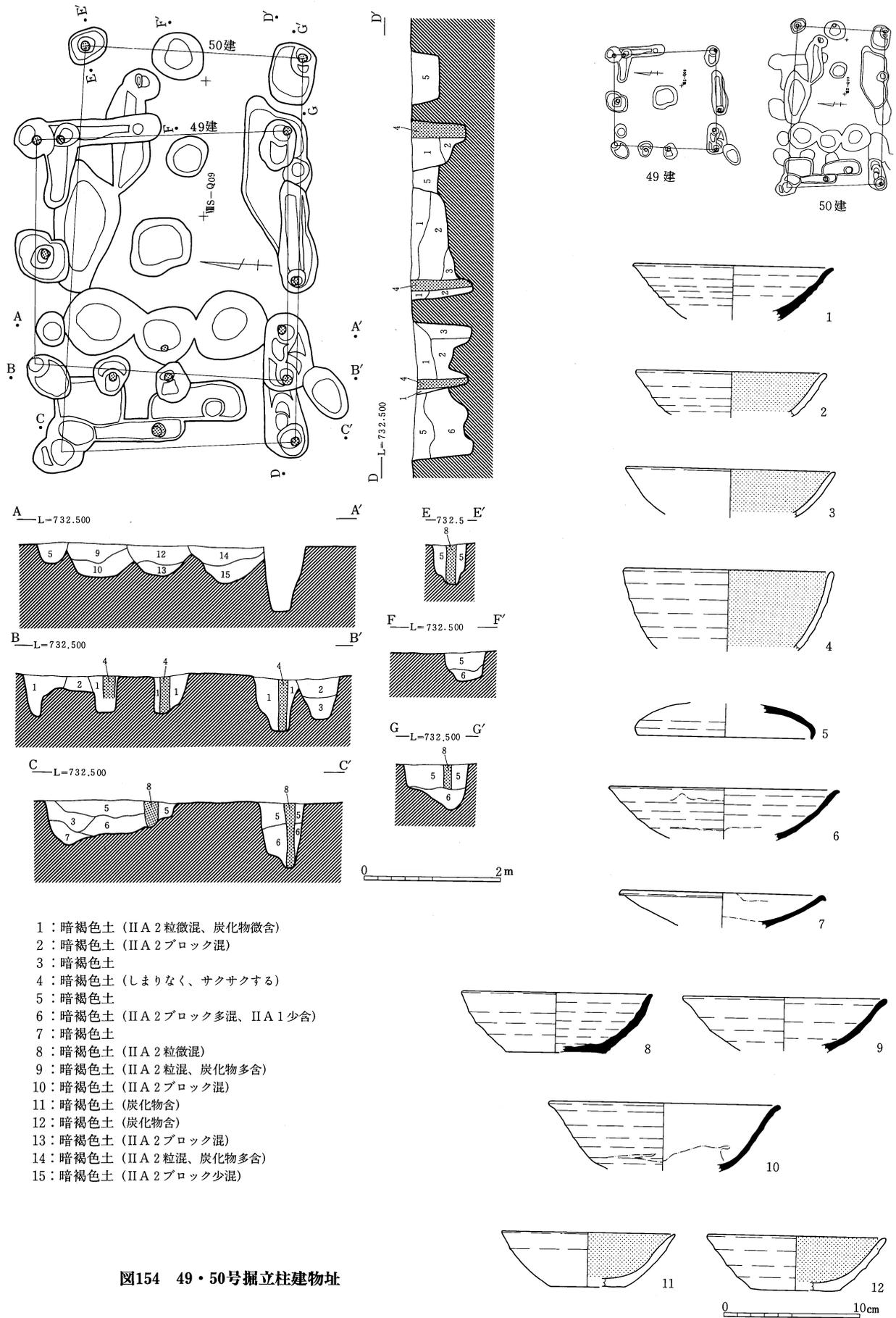


図154 49・50号掘立柱建物址

51号掘立柱建物址 欠番

52号掘立柱建物址 (図155、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、総柱式である。規模は桁行4.4 m、梁行3.9 mで、面積17.61 m²をはかる。主軸はN-3°-Eを指す。柱間は東西列2.0~2.3 m、南北列1.3~2.8 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届かない。本址には北面中央で焼土を伴ったピットが認められ、これに関連してか柱穴の配置が大きくなるのが観察された。本址の形状が総柱式であることを考えると注目すべき資料である。

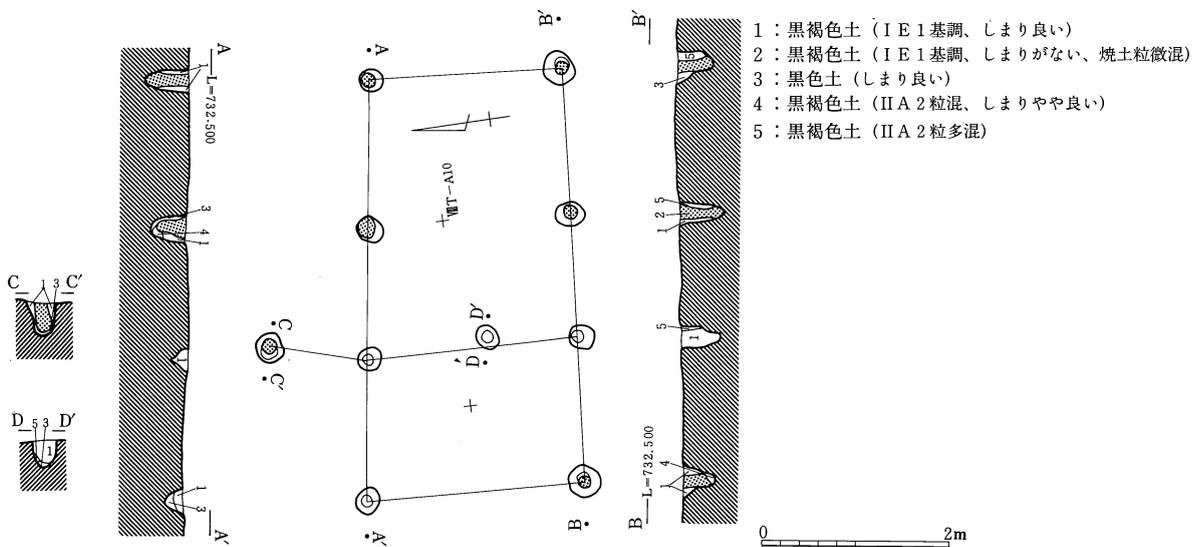
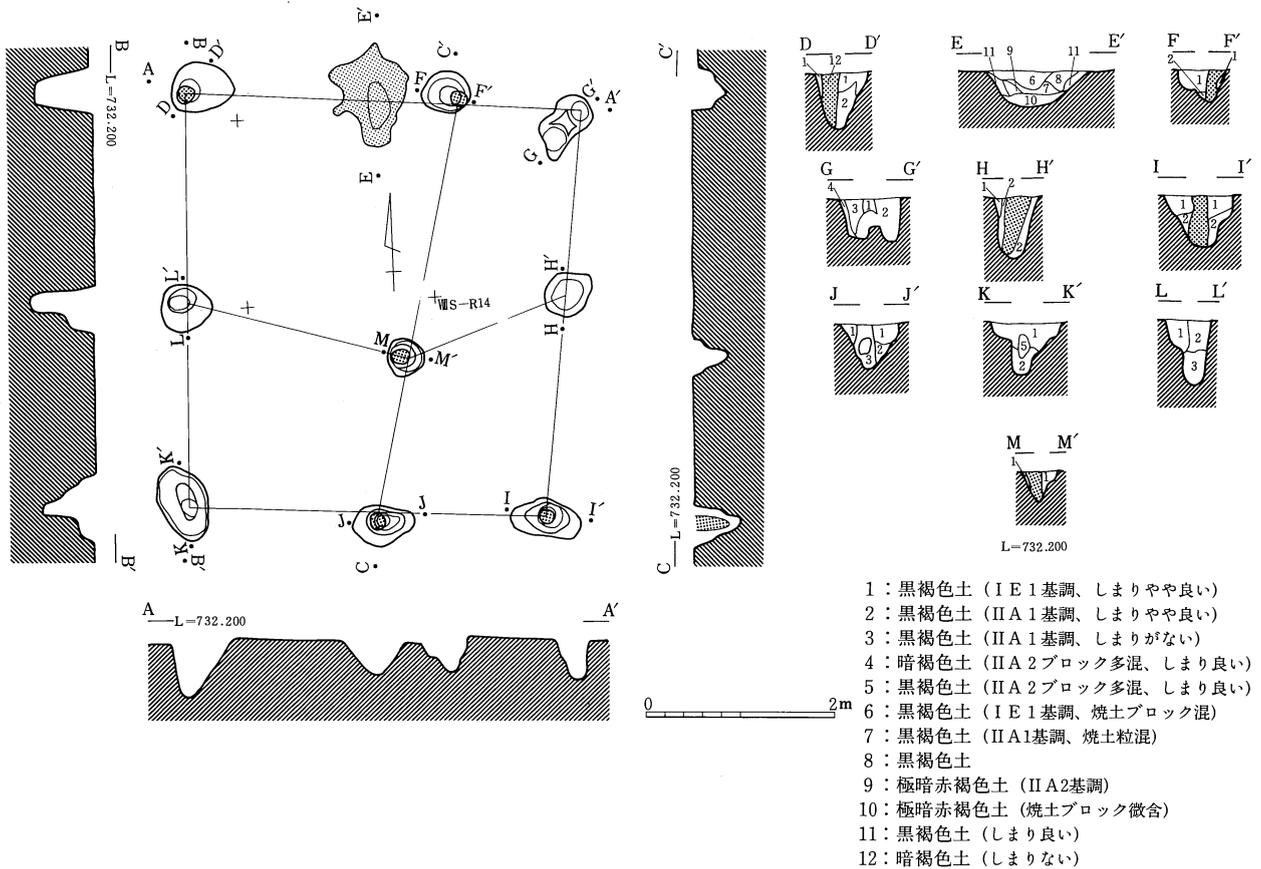
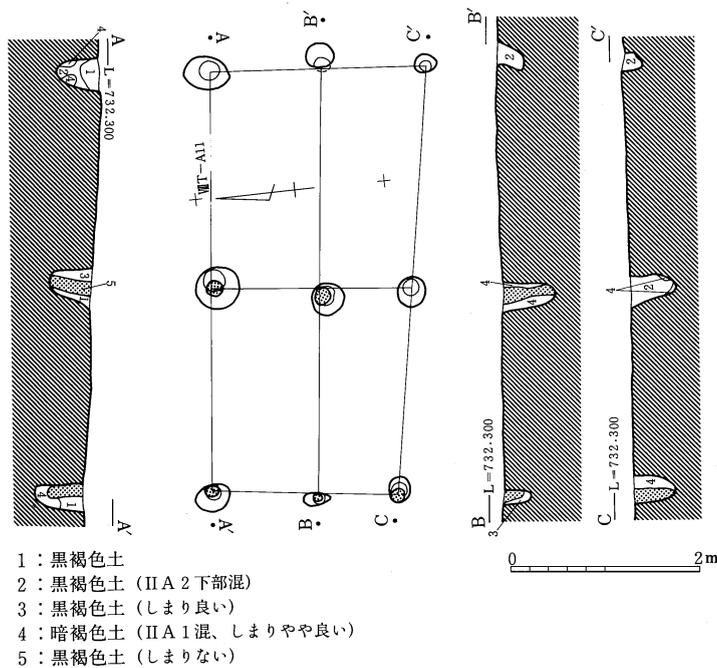
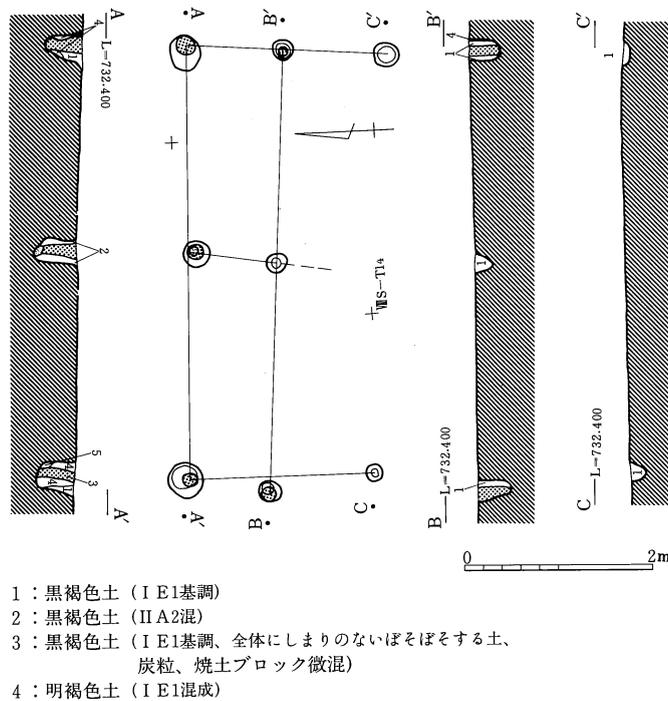


図155 52・53号掘立柱建物址



53号掘立柱建物址 (図155、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は1間×3間の、東西棟、総柱式である。北面に柱穴が1基認められ本址に関係するものとして判断した。規模は桁行4.5 m、梁行2.0 mで、面積9.59 m²をはかる。主軸はE-9°-Sを指す。柱間は東西列2.0~2.3 m、南北列1.3~1.6 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届く。



54号掘立柱建物址 (図156、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、東西棟、総柱式である。規模は桁行4.6 m、梁行2.0 mで、面積9.62 m²をはかる。主軸はE-7°-Sを指す。柱間は東西列2.2~2.4 m、南北列0.8~1.1 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は東面を除いて径12 cmほどで、掘り方底面まで届くものがほとんどであった。

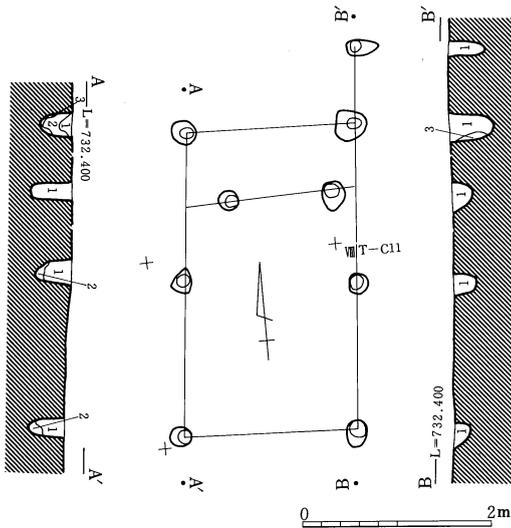
図156 54・55号掘立柱建物址

55号掘立柱建物址 (図156、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、東西棟、総柱式である。規模は桁行4.8 m、梁行2.0 mで、面積9.33 m²をはかる。主軸はE-5°-Sを指す。柱間は東西列2.2~4.8 m、南北列0.8~1.1 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方はその深度に差が認められる。確認された柱痕は径11 cmほどで、掘り方底面まで届くものは少ない。

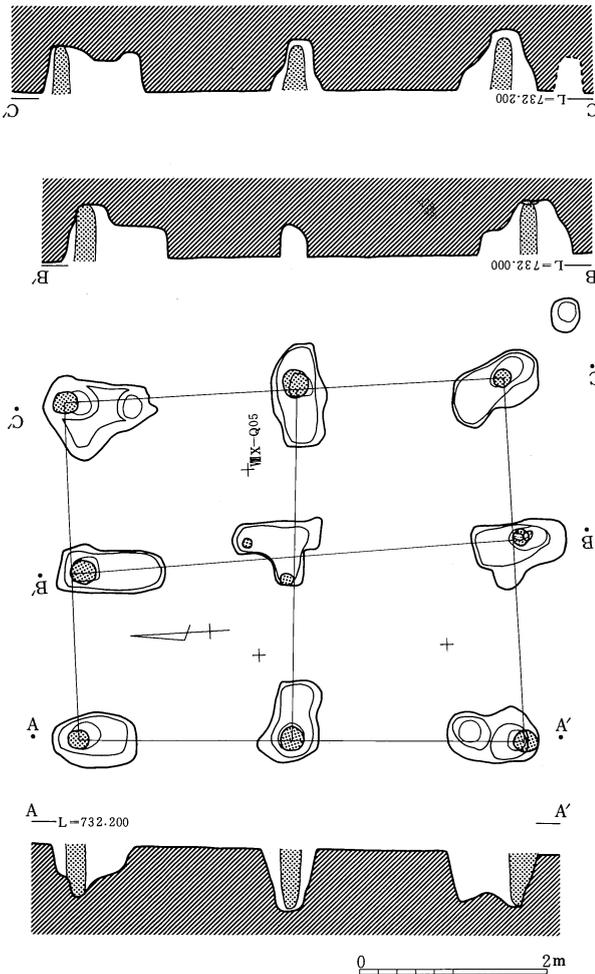
56号掘立柱建物址 (図157、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.1 m、梁行1.8 mで、面積7.53 m²をはかる。主軸はN-6°-Eを指す。柱間は東西列1.8 m、南北列0.9~1.8 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方の深さは不揃いである。



- 1: 黒褐色土 (しまりなくとくに下部ではサクサクする)
- 2: 黒褐色土 (II A2ブロック混)
- 3: 明褐色土 (II A1ブロック混)

- 1: 黒褐色土 (II A1・II A2混、しまり良い)
- 2: 黒褐色土 (炭粒微混、しまり弱い)

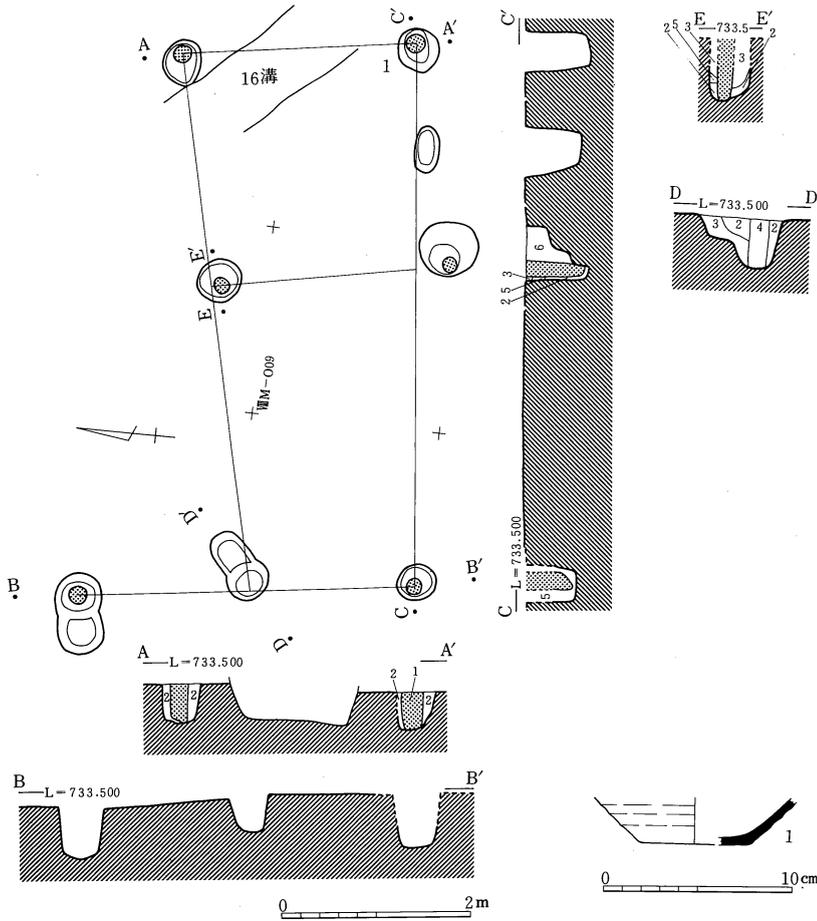


57号掘立柱建物址 (図157、PL181)

II A層で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、総柱式である。規模は桁行4.7 m、梁行3.6 mで、面積17.32 m²をはかる。主軸はN-4°-Eを指す。柱間は東西列1.6~2.2 m、南北列2.2~2.4 mをはかる。柱穴の形は不整長方形を呈す。本址の西側には深さ10 cmに満たない53号溝址が同時に検出され本址に伴う可能性がある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24 cmほどである。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。

遺物 出土土器は須恵器坏1。土師器10片、内面黒色坏1片、灰釉1片が出土している。

図157 56・57号掘立柱建物址

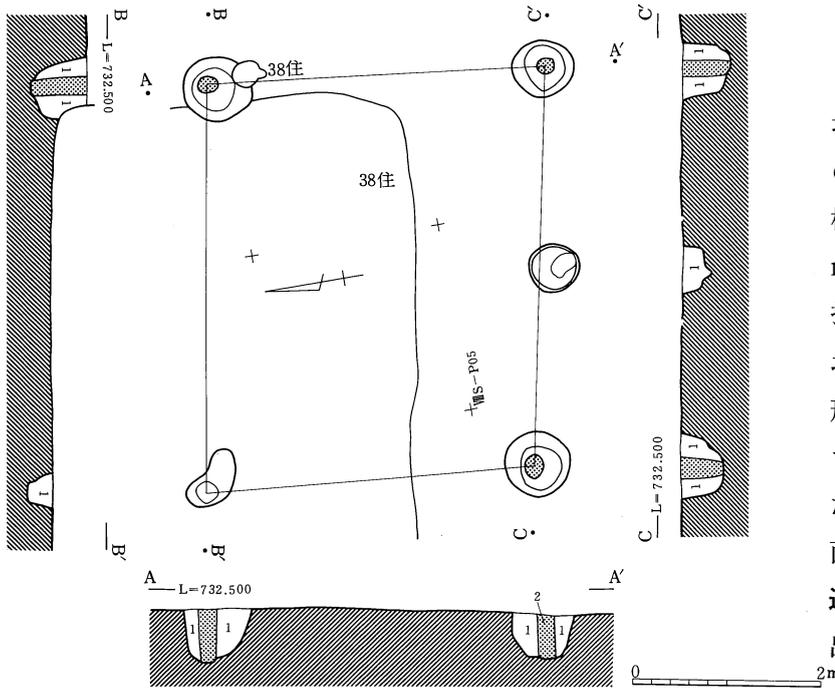


- 1 : 黒褐色土 (1 cm 以下の礫含)
- 2 : 黒褐色土 (1cm 以下の礫含、II A2ブロック微混)
- 3 : 暗褐色土
- 4 : 3 に 2 の土が若干混じった土。
- 5 : 黒褐色土 (II A1基調)
- 6 : 暗褐色土 (1 cm 以下の礫含)

58号掘立柱建物址 (図158、PL181)

II A 1層で検出された。北側に16号住居址が存在し、検出時にはその前後関係ははっきりしなかった。現状で平面形は2間×2間の、東西棟、総柱式であったと判断される。規模は桁行5.7m、梁行3.6mで、面積21.16m²をはかる。主軸はE-8°-Nを指す。柱間は東西列2.4~3.4m、南北列1.7~2.4mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、楕円のものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどである。

遺物 出土土器は須恵器杯1(1)個体出土している。



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒褐色土 (II A2粒混、しまり悪い)

図158 58・59号掘立柱建物址

59号掘立柱建物址 (図158、PL181)

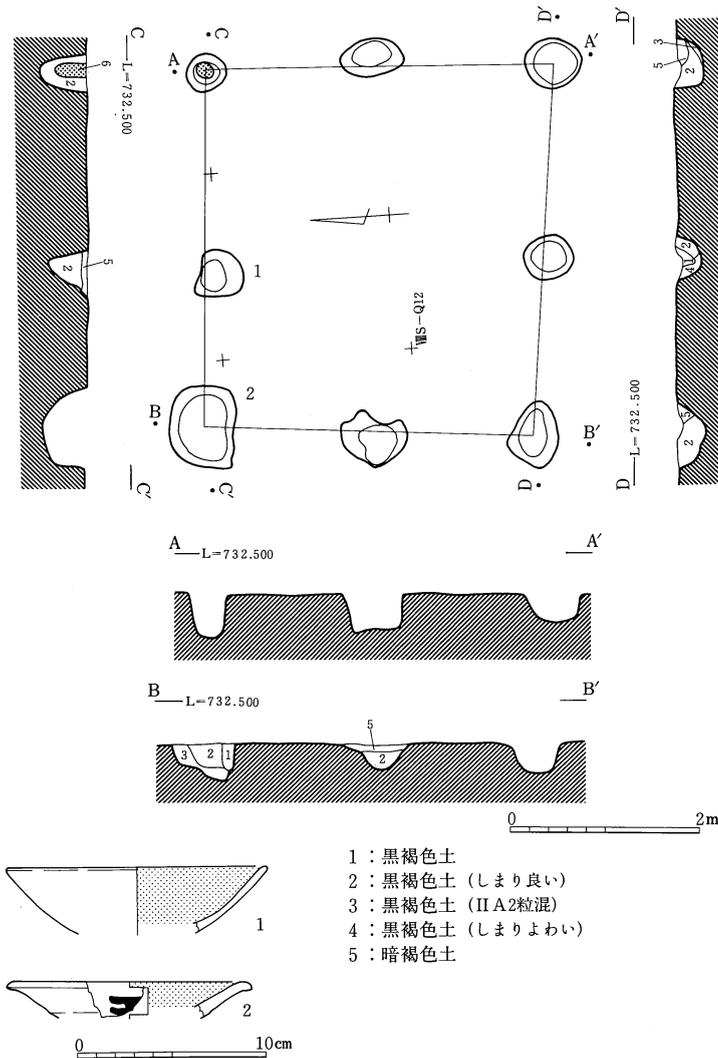
II A 1層で検出された。38号住居址に切られる。平面形は1間×2間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.3m、梁行3.5mで、面積14.15m²をはかる。主軸はE-12°-Sを指す。柱間は東西列2.1~4.3m、南北列3.5mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器杯1個体が出土している。

60号掘立柱建物址 (図159、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.1 m、梁行3.5 mで、面積13.15 m²をはかる。主軸はE-4°-Sを指す。柱間は東西列1.6~2.2 m、南北列1.7~2.0 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方の深さは不揃いである。

遺物 出土土器は須恵器坏1片、中形甕1片。土師器内面黒色坏6片(1)、皿2(2)が出土している。2には墨書が書されている。



61号掘立柱建物址 (図159、PL181)

II A 1層で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.4 m、梁行3.0 mで、面積10.44 m²をはかる。主軸はN-15°-Wを指す。柱間は東西列1.5~1.7 m、南北列1.3~3.1 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

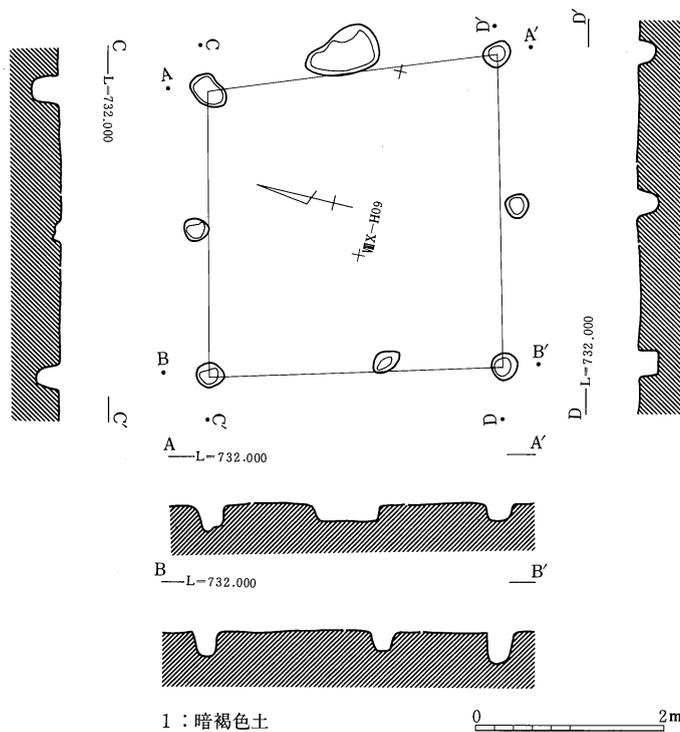
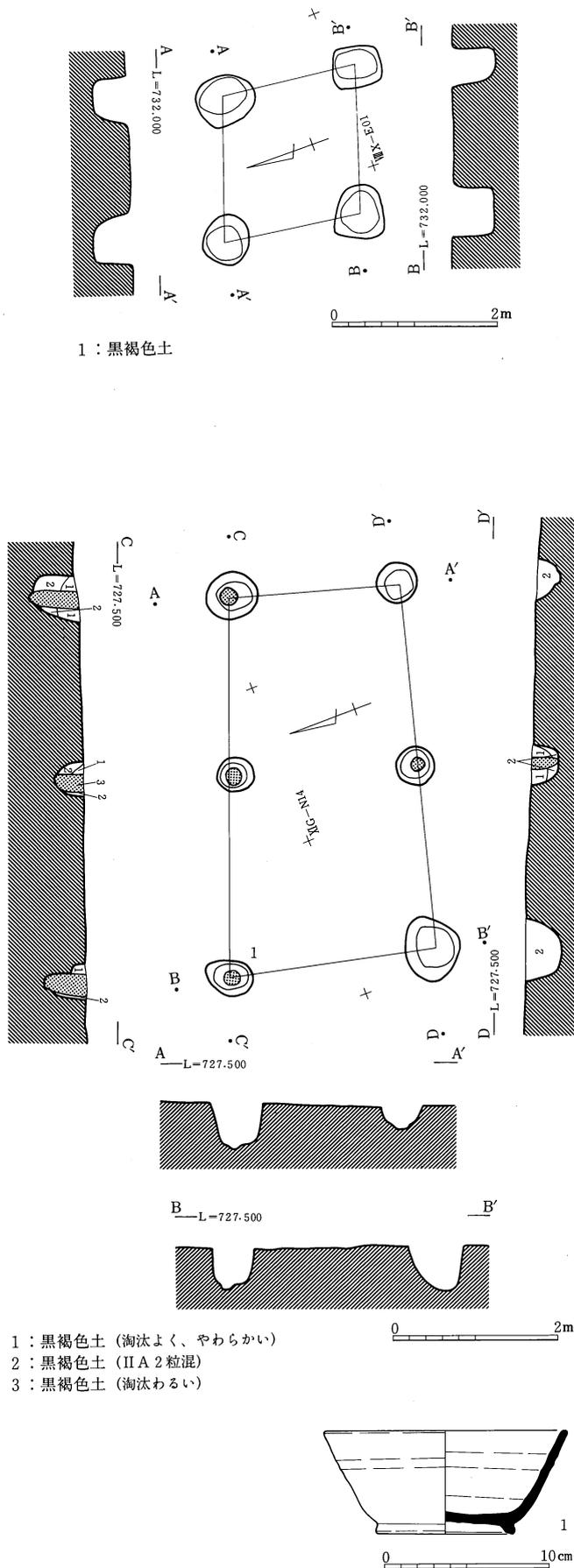


図159 60・61号掘立柱建物址



62号掘立柱建物址 (図160、PL182)

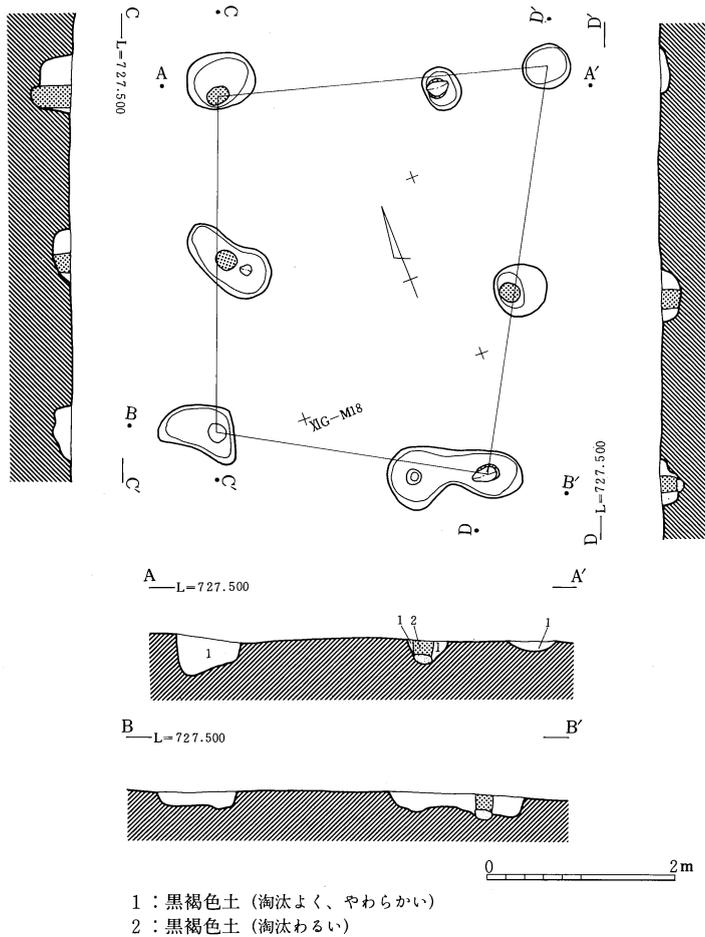
IIA 2層で検出された。平面形は1間×1間で、規模は東西1.8 m、南北1.7 mで、面積3.06 m²をはかる。主軸はN-15°-Eを指す。柱穴の形は不整形を呈し、歪んだものもある。掘り方の深さはほぼ一定である。

101号掘立柱建物址 (図160、PL182・224)

IIA 2層で検出された。平面形は1間×2間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.7 m、梁行2.2 mで、面積10.07 m²をはかる。主軸はE-19°-Sを指す。柱間は東西列2.2~3.4 m、南北列2.2~2.5 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さは北側で深い。確認された柱痕は径18 cmほどで、沈み込みが認められた。

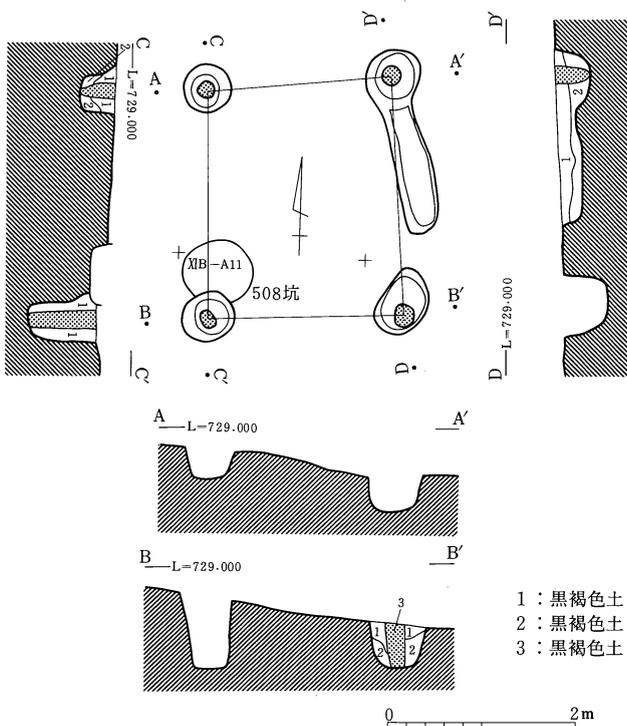
遺物 出土土器は須恵器高台坏 1 (1)。土師器甕 2片が出土している。1は完形

図160 62・101号掘立柱建物址



102号掘立柱建物址 (図161、PL182)

IIA 2層で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.7 m、梁行2.9 mで、面積12.30 m²をはかる。主軸はN-22°-Eを指す。柱間は東西列1.0~2.9 m、南北列4.5~4.7 mをはかる。柱穴の形は不整形で、溝状に連結したのも認められる。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届く。柱痕下に礎石が認められたものもある。



103号掘立柱建物址 (図161、PL182)

IV層で検出された。平面形は1間×1間で、規模は東西2.5 m、南北2.3 mで、面積5.70 m²をはかる。主軸はN-2°-Wを指す。柱穴の形は円形を基本とし、一部溝状に伸びるものも認められた。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径19 cmほどで、掘り方底面まで届く。

図161 102・103号掘立柱建物址

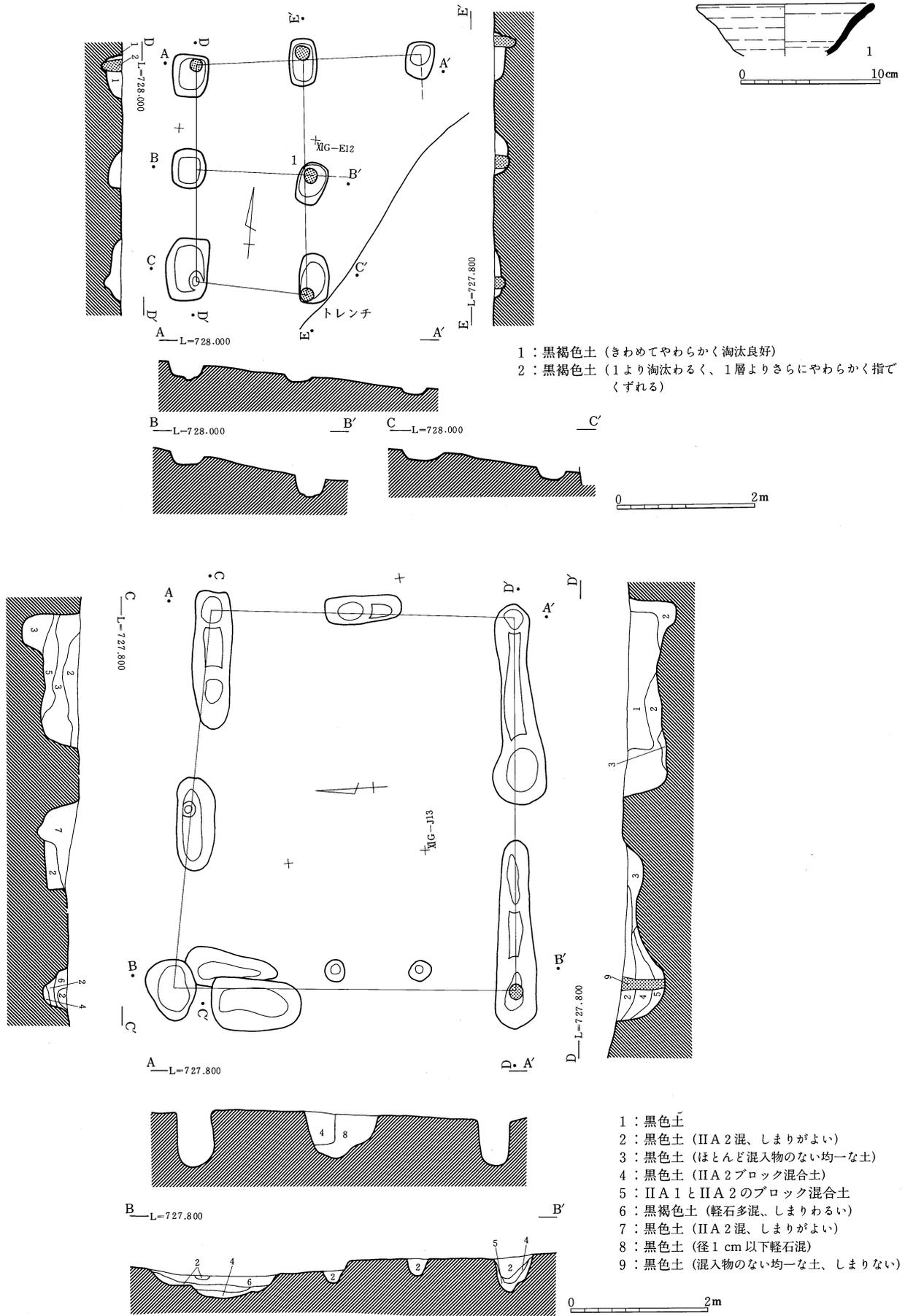


図162 104・105号掘立柱建物址

104号掘立柱建物址 (図162)

IV層で検出された。III層における検出で南北に走る3本の溝が不明瞭ながら確認され、本址は本来溝持ちの掘立柱建物址であったことが後に解った。平面形は2間×2間の、南北棟、総柱式である。規模は桁行3.3m、梁行3.2mで、面積10.82m²をはかる。主軸はN-5°-Wを指す。柱間は東西列1.6~1.7m、南北列1.6~1.8mをはかる。柱穴の形は方形を基本とし、掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器杯1(1)、土師器甕4片が出土している。

105号掘立柱建物址 (図162、PL182)

III層中位で検出された。102号住居址に切られ、113号住居址を切る。さらに106号掘立柱建物址と空間的に重なるが、柱穴同士の切り合いはなくその新旧関係は不明である。しかしながら、ほぼ同じ位置にあることから、建て替えが行なわれた可能性が高い。平面形は2間×3間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行5.5m、梁行4.7mで、面積25.85m²をはかる。主軸はE-6°-Sを指す。柱間は東西列5.5~4.7m、南北列1.2~2.4mをはかる。柱穴の形は楕円形を呈す。溝の掘り方断面形は一定しない。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器杯2片。土師器甕3片、小形甕1片が出土している。

106号掘立柱建物址 (図163、PL182・183・223)

III層中位で検出された。平面形は2間×3間の併用、東西棟、側柱式である。規模は桁行6.2m、梁行4.6mで、面積28.58m²をはかる。主軸はE-3°-Sを指す。柱間は東西列2.2~2.4m、南北列0.5~2.3mをはかる。柱穴の形は不整形で、溝の掘り方は北と南で異なった断面形状を示す。一部を除いて深さはほぼ一定である。

遺物 出土土器は須恵器杯7(1)、蓋1片、大形甕1(4)。土師器甕2(3)、内面黒色杯4(2)が出土している。4は102号住居址と113号住居址と接合している。

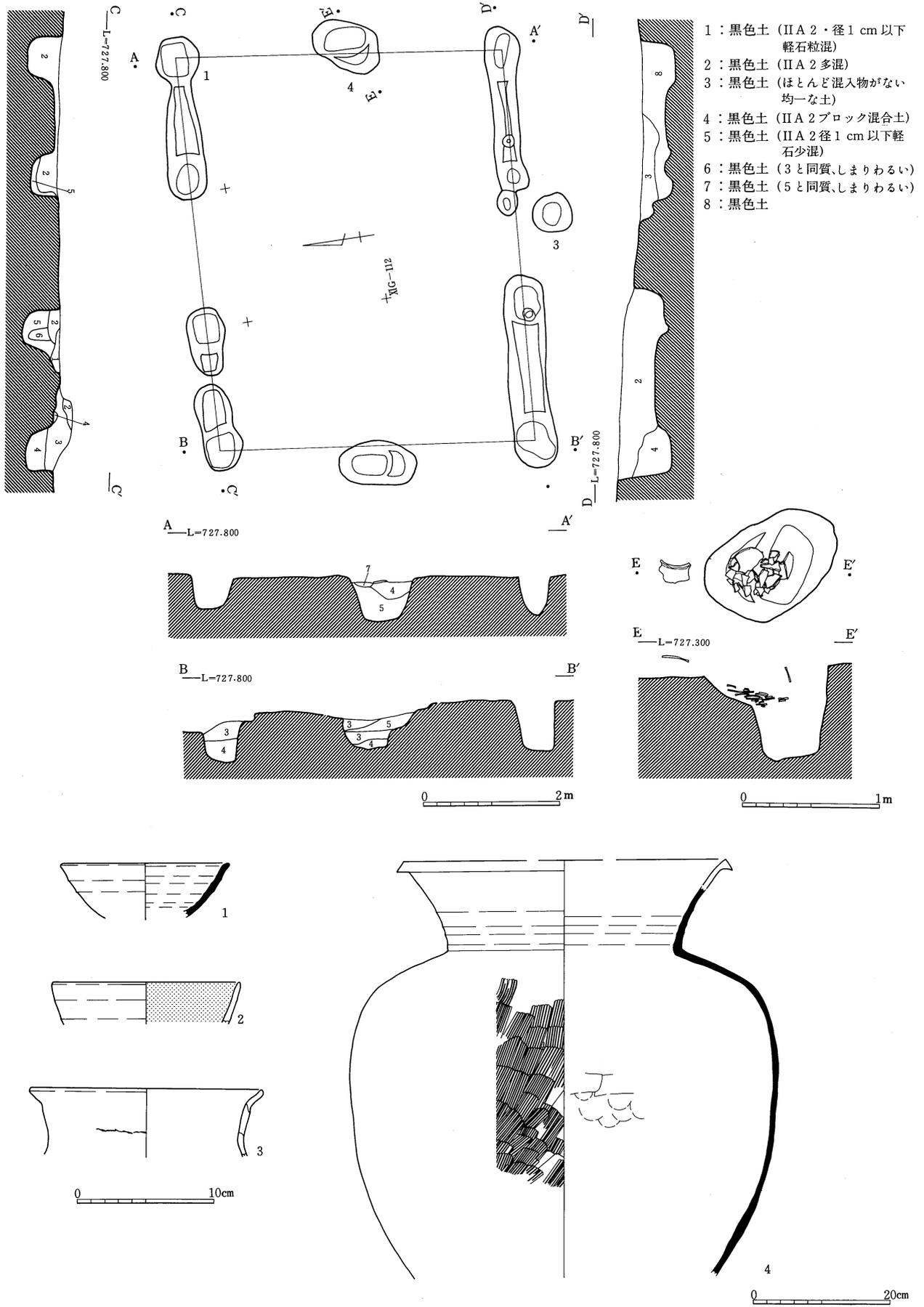


図163 106号掘立柱建物址

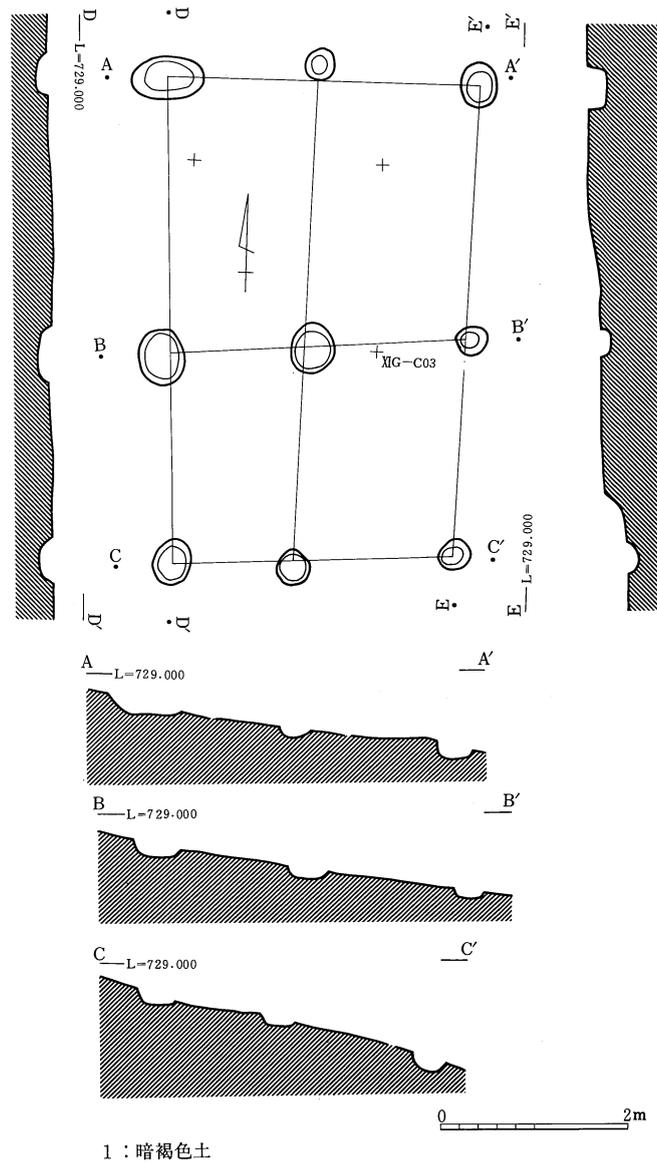


図164 107号掘立柱建物址

107号掘立柱建物址 (図164、PL183)

III層中位で検出された。平面形は2間×2間の、南北棟、総柱式である。規模は桁行5.1m、梁行3.1mで、面積16.33m²をはかる。主軸はN-2°-Wを指す。柱間は東西列1.3~1.7m、南北列2.3~2.8mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、規模は不揃いである。検出面からの深さが一定していることから本址が傾斜に伴って構築されたことが観察される。

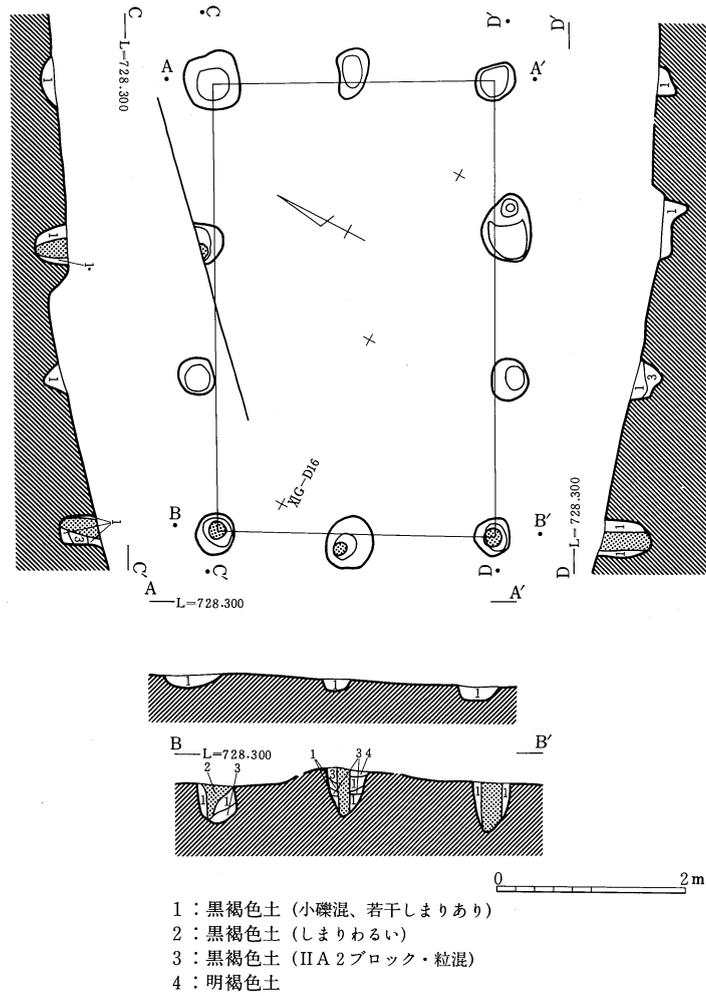


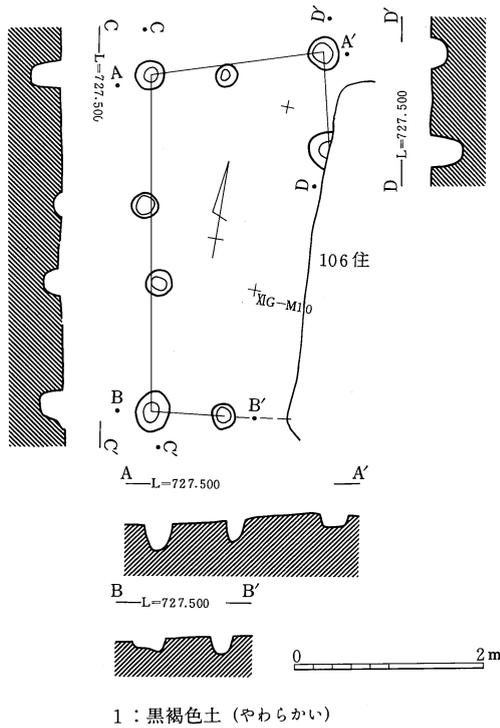
図165 108号掘立柱建物址

108号掘立柱建物址 (図165、PL183)

II A 2層上面で検出された。平面形は2間×3間の、東西棟、側柱式である。規模は桁行4.8 m、梁行3.1 mで、面積15.26 m²をはかる。主軸はE-29°-Nを指す。柱間は東西列1.3~1.9 m、南北列1.4~1.7 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面まで届く。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。

109号掘立柱建物址 (図166、PL183)

II A 2層で検出された。106号住居址に切られる。平面形は3間×2間の、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.8m、梁行1.9mで、面積6.96m²をはかる。主軸はN-12°-Wを指す。柱間は東西列0.7~1.2m、南北列0.8~1.4mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、掘り方の深さは一定しない。



110号掘立柱建物址 (図166、PL183)

II A 2層で検出された。平面形は2間×3間の南北棟、側柱式である。規模は桁行4.3m、梁行3.4mで、面積14.03m²をはかる。主軸はN-6°-Eを指す。柱間は東西列1.4~2.0m、南北列1.1~2.0mをはかる。柱穴の形は楕円形・円形を基本とし、掘り方の深さは不揃いである。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

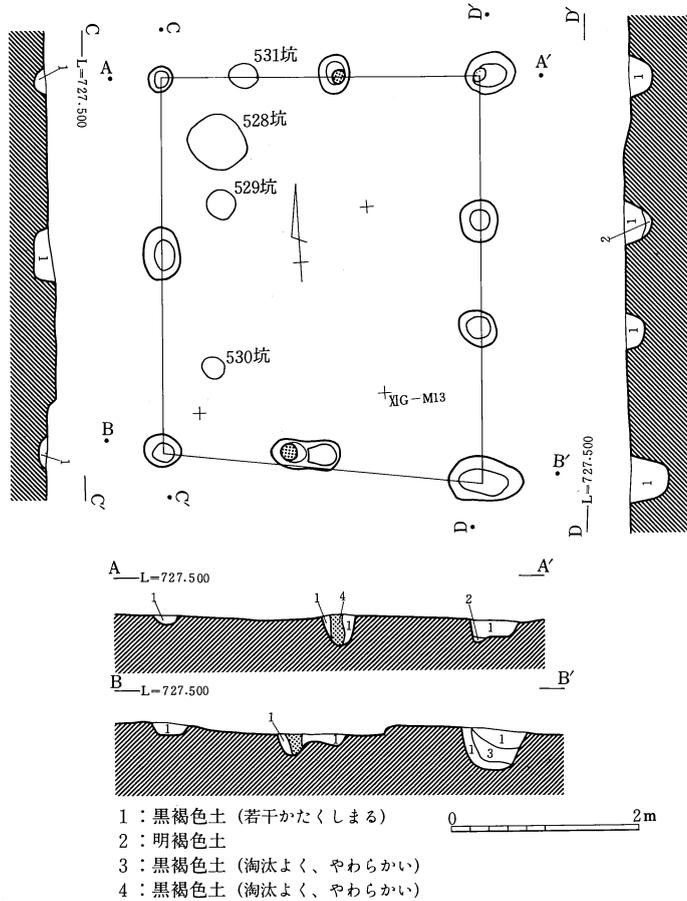
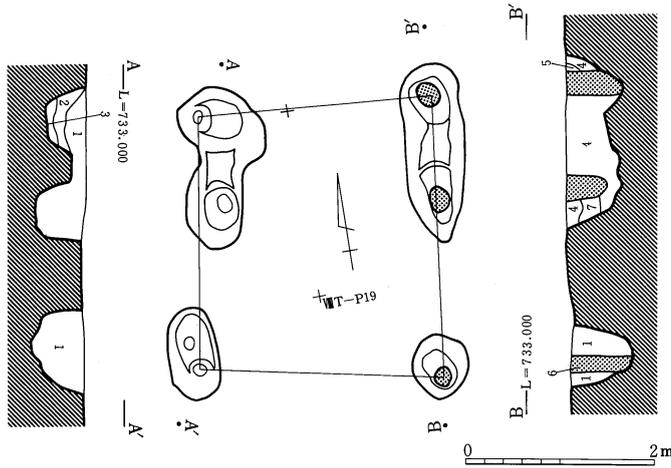


図166 109・110号掘立柱建物址

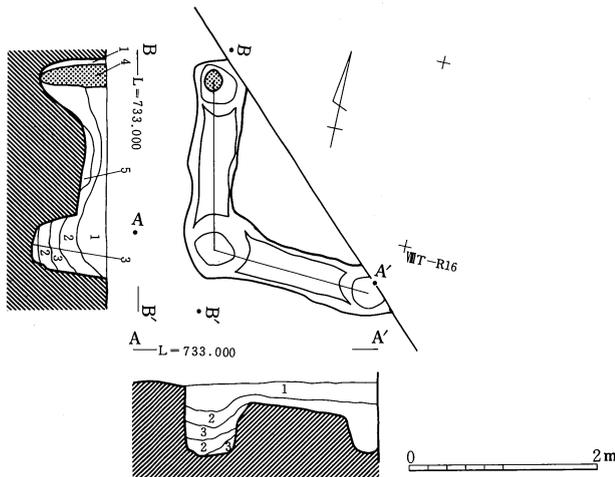


- 1 : 暗褐色土 (耕土~IIA 1間にある土に類似してくる)
- 2 : 暗褐色土 (IIA 1ブロック多混)
- 3 : 黒褐色土 (極めてやわらかい)
- 4 : 明褐色土 (黒褐色土帯状混、しまりあり)
- 5 : 明褐色土 (柱底部をとりまくようにあり)
- 6 : 暗褐色土 (サクサクしてやわらかい)
- 7 : 暗褐色土

111号掘立柱建物址 (図167)

IIA 2層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.0m、梁行2.5mで、面積7.14m²をはかる。主軸はN-10°-Eを指す。柱間は東西列0.9~1.9m、南北列2.7~3.0mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、溝は2列あり、両者の掘り方が若干異なる。深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどである。

遺物 出土土器は須恵器甕1片。土師器甕1片が出土している。

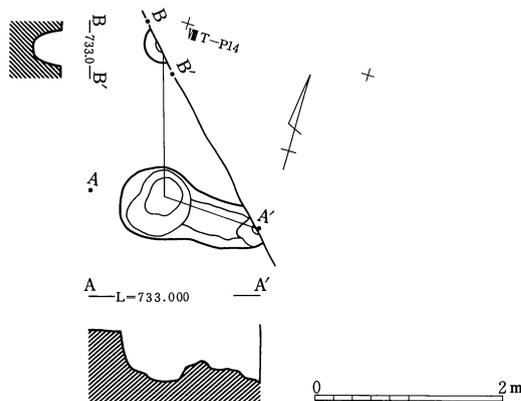


- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒褐色土 (わずかにしまりあり)
- 3 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック少混)
- 4 : 黒褐色土 (淘汰よく、やわらかい)
- 5 : 明褐色土 (黒褐色土粒少混)

112号掘立柱建物址 (図167、PL183)

IIA 2層で検出された。北側で用地外にかかるため全容はつかめなかった。検出された3基の柱穴はL字状に溝でつながれる点で本遺跡内でも特異な形状である。柱間はほぼ16.5cmをはかる。

遺物 出土土器は土師器内面黒色環1が出土している。



- 1 : 黒褐色土 (IIA 2ブロック混、若干しまりあり)

113号掘立柱建物址 (図167)

IIA 2層で検出された。北側で用地外にかかるため全容はつかめなかった。

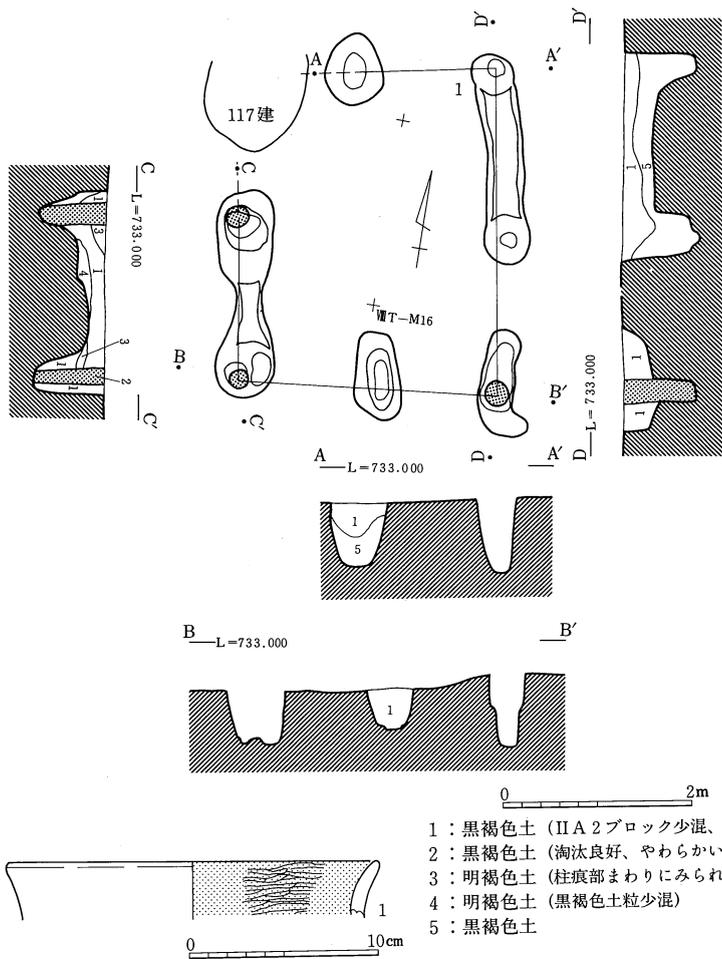
114号掘立柱建物址 欠番

図167 111・112・113号掘立柱建物址

115号掘立柱建物址 (図168)

II A 2層で検出された。117号掘立柱建物址に切られる。平面形は2間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.3m、梁行2.8mで、面積9.52m²をはかる。主軸はN-7°-Wを指す。柱間は東西列1.2~1.6m、南北列1.6~1.9mをはかる。柱穴の形は不整形・隋円形、溝は対角し2列あり、段を持っている。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24cmほどで、掘り方底面から深く沈むものも認められる。

遺物 出土土器は鬼高期の土師器甕1(1)が出土している。



116号掘立柱建物址 (図168, PL183)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.8m、梁行3.1mで、面積12.60m²をはかる。主軸はN-15°-Eを指す。柱間は東西列1.7~3.1m、南北列1.6~2.2mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

遺物 出土遺物は土師器甕1片、坏1片。土師質坏1片が出土している。石製品は砥石1(49)が出土している。

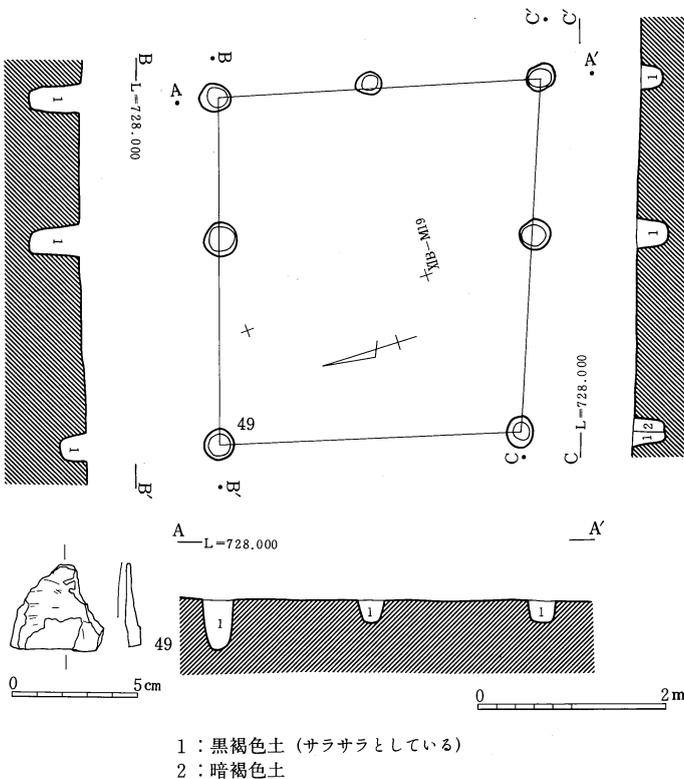
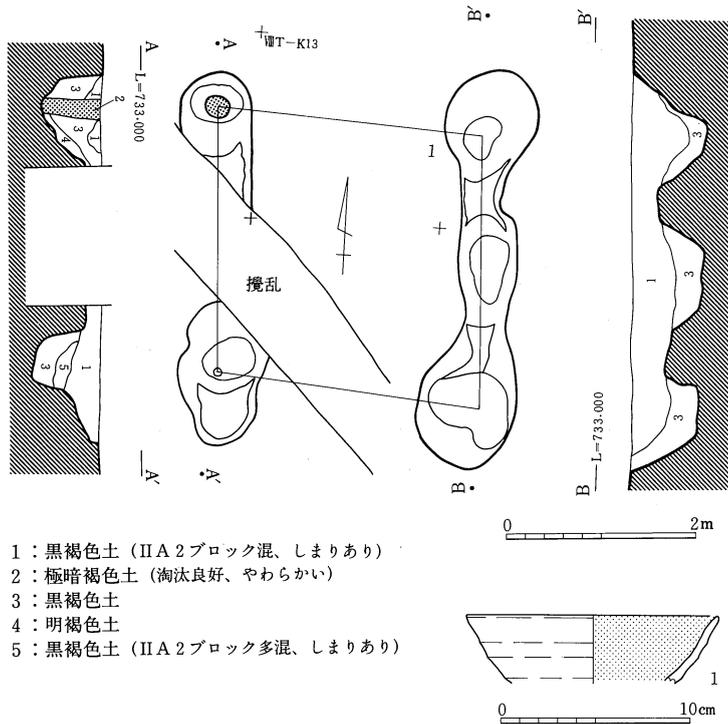


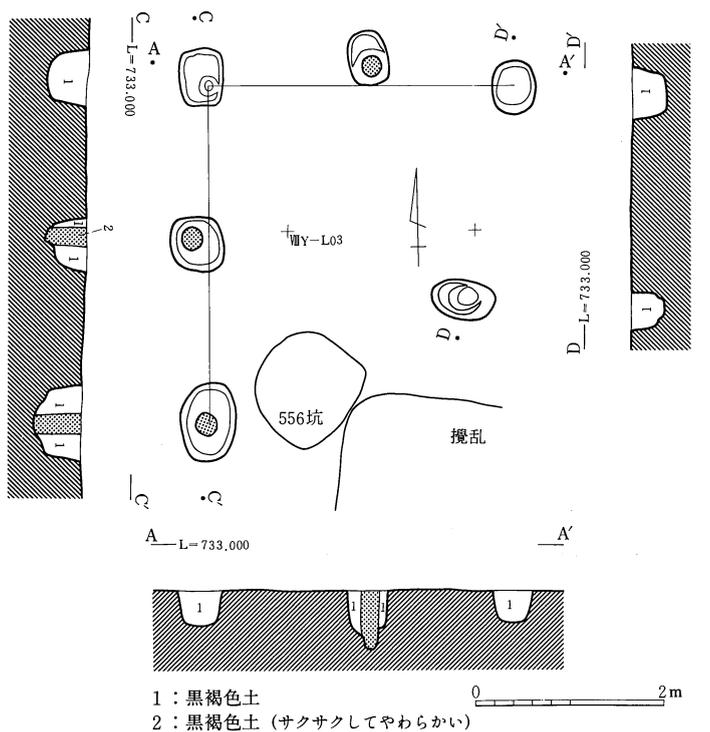
図168 115・116号掘立柱建物址



117号掘立柱建物址 (図169)

II A 2層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行2.9 m、梁行2.8 mで、面積8.00 m²をはかる。主軸はN-3°-Wを指す。柱間は東西列2.8 m、南北列1.4~2.9 mをはかる。掘り方の深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24 cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器坏1片、甕1片。土師器内面黒色坏2(1)が出土している。



118号掘立柱建物址 (図169, PL183)

II A 2層で検出された。平面形は3間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.8 m、梁行1.9 mで、面積6.96 m²をはかる。主軸はN-2°-Eを指す。柱間は東西列0.7~1.2 m、南北列0.8~1.4 mをはかる。柱穴の形は方形・楕円形を呈す。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18 cmほどで、掘り方底面より沈む。隅柱穴の柱は掘り方の隅に寄るように配されている。

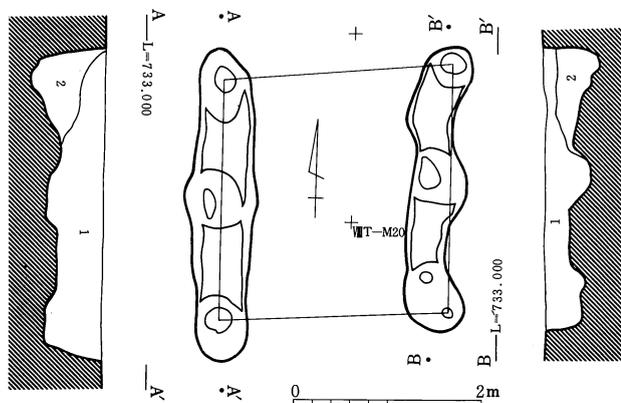
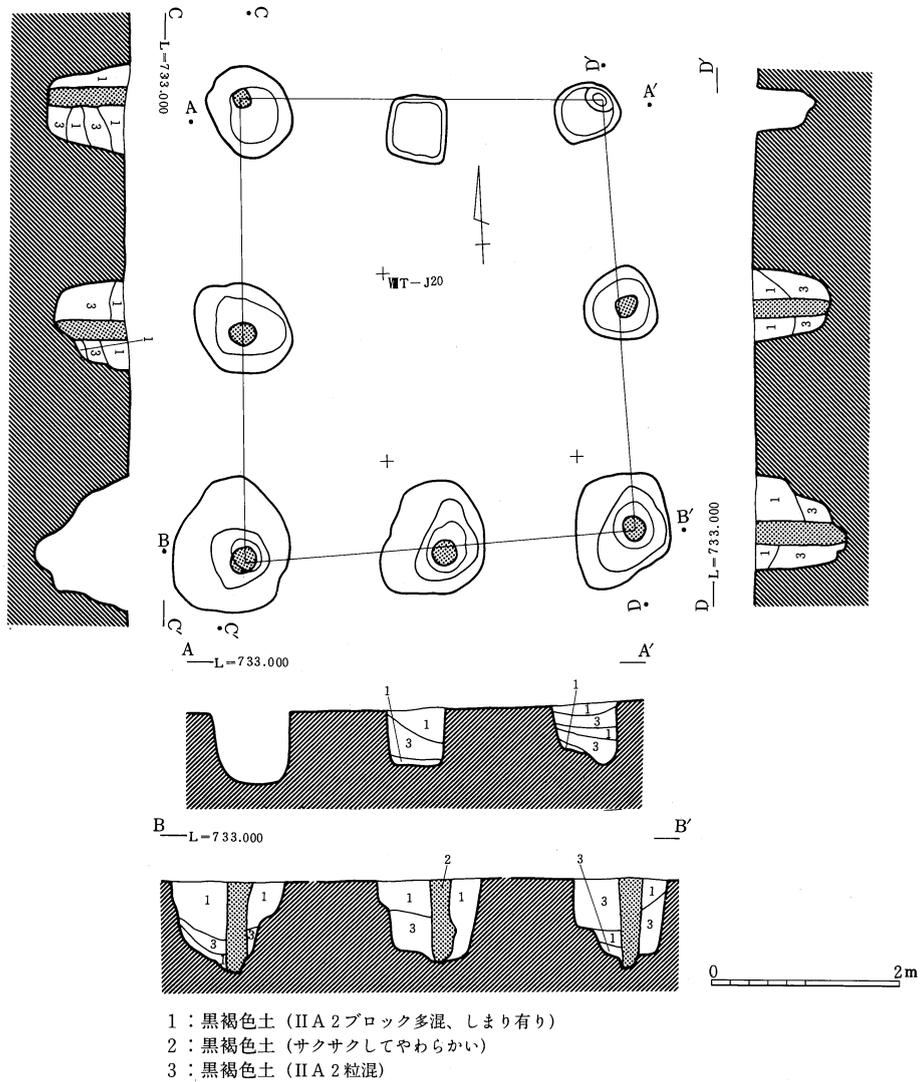
遺物 出土土器は土師器内面黒色碗1片が出土している。

図169 117・118掘立柱建物址

119号掘立柱建物址 (図170, PL184)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行4.3 m、梁行3.3 mで、面積14.27 m²をはかる。主軸はN-2°-Eを指す。柱間は東西列1.6~1.8 m、南北列1.9~2.2 mをはかる。柱穴の形は不整形・方形を基本とし、規模は不揃いである。掘り方の深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24 cmほどで、掘り方底面まで届く。

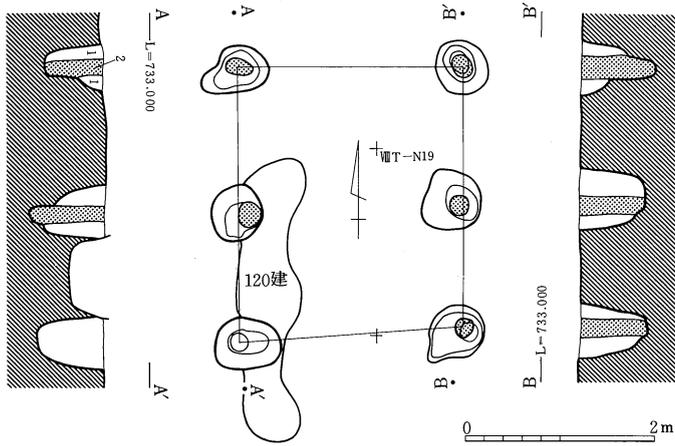
遺物 出土遺物は須恵器杯3片、蓋1片、甕1片、四耳壺3片。土師器甕9片・内面黒色環6片・碗1片、土師質杯1片、灰釉碗1片が出土している。石器は打製石斧1が出土している。



120号掘立柱建物址 (図170、PL184)

IIA 2層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行2.1m、梁行1.2mで、面積4.66m²をはかる。主軸はN-1°-Wを指す。柱間は東西列1.0~1.2m、南北列2.1mをはかる。溝の深さはほぼ一定である。

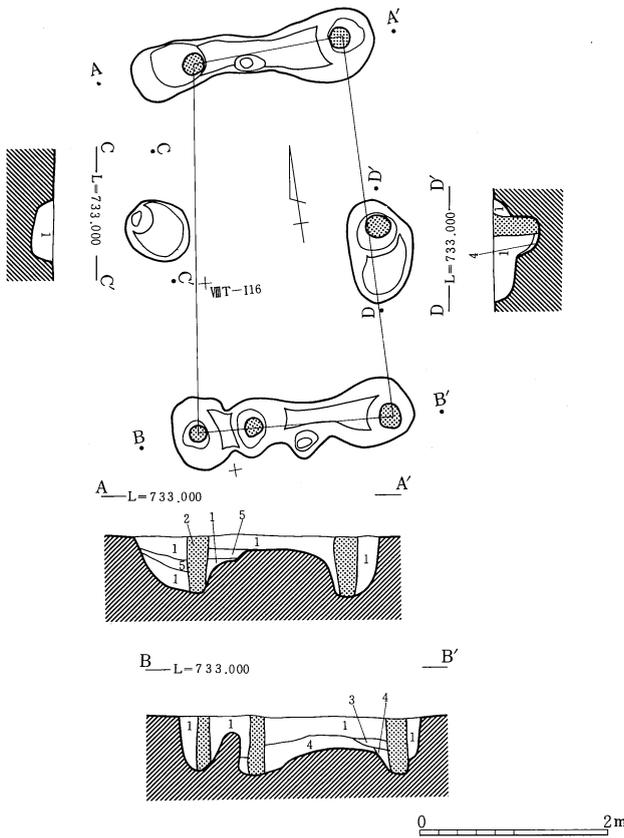
図170 119・120号掘立柱建物址



- 1: 黒褐色土 (しまりはない)
- 2: 黒褐色土 (淘汰良好、やわらかい)

121号掘立柱建物址 (図171、PL184)

II A 2層で検出された。120号掘立柱建物址に切られる。平面形は1間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行2.9m、梁行2.4mで、面積6.74m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.3~1.6m、南北列2.3~2.4mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。



- 1: 黒褐色土 (II A 2ブロック混、しまり有り)
- 2: 黒褐色土 (淘汰良好、極めてやわらかい)
- 3: 黒褐色土
- 4: 明褐色土 (黒褐色土ブロック少混、しまりあり)
- 5: 明褐色土 (黒褐色土半混、しまりあり)

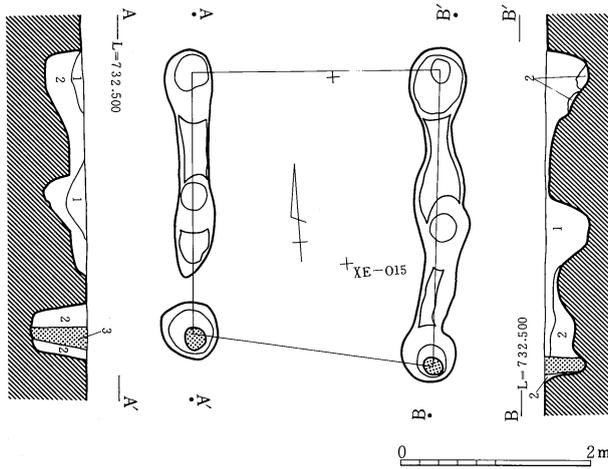
122号掘立柱建物址 (図171、PL184)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.1m、梁行2.0mで、面積8.08m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.3~1.7m、南北列2.5~2.6mをはかる。柱穴の形は円形・楕円形を基本とし、歪んだものもある。溝は2列あり、南面で1基柱穴が多い。掘り方は一部を除いて深さがほぼ一定である。確認された柱痕は径18~24cmほどで、掘り方底面まで届く。

123号掘立柱建物址 (図172、PL184)

II A 2層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行3.1m、梁行2.5mで、面積8.36m²をはかる。主軸はN-6°-Eを指す。柱間は東西列1.3~1.7m、南北列2.5~2.6mをはかる。2列の溝の、深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

図171 121・122号掘立柱建物址



- 1: 黒褐色土 (粘性強い)
- 2: 明褐色土 (黒褐色土小ブロック混、しまりあり)
- 3: 極暗褐色土 (極めてやわらかい)

124号掘立柱建物址 (図172)

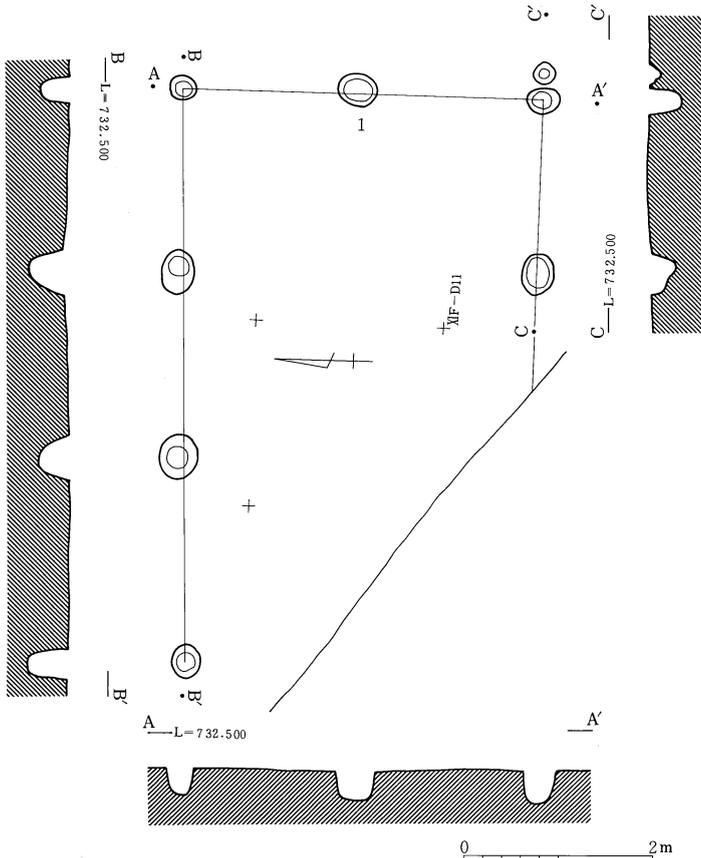
II A 2層で検出された。平面形は2間×3間の東西棟、側柱式である。規模は桁行6.1 m、梁行3.9 mで、面積23.14 m²をはかる。主軸はE—2°—Nを指す。柱間は東西列1.3~2.2 m、南北列1.8~1.9 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とする。掘り方の深さはほぼ一定である。

遺物 出土土器は須恵器中形甕1(1)。土師器内面黒色環1片が出土している。

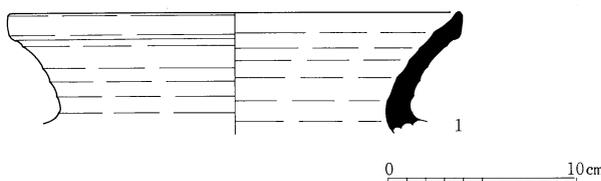
125号掘立柱建物址 (図173、PL184)

II A 2層で検出された。平面形は2間×3間の南北棟、総柱式で、北面に庇を持つ。規模は桁行5.1 m、梁行5.2 mで、面積31.30 m²をはかる。主軸はN—2°—Eを指す。柱間は東西列2.2~2.6 m、南北列2.1~2.4 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とする。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径25 cmほどである。126号掘立柱建物址と近接し、規模形状から建て替えられた可能性がある。

遺物 出土土器は土師器甕10片が出土している。



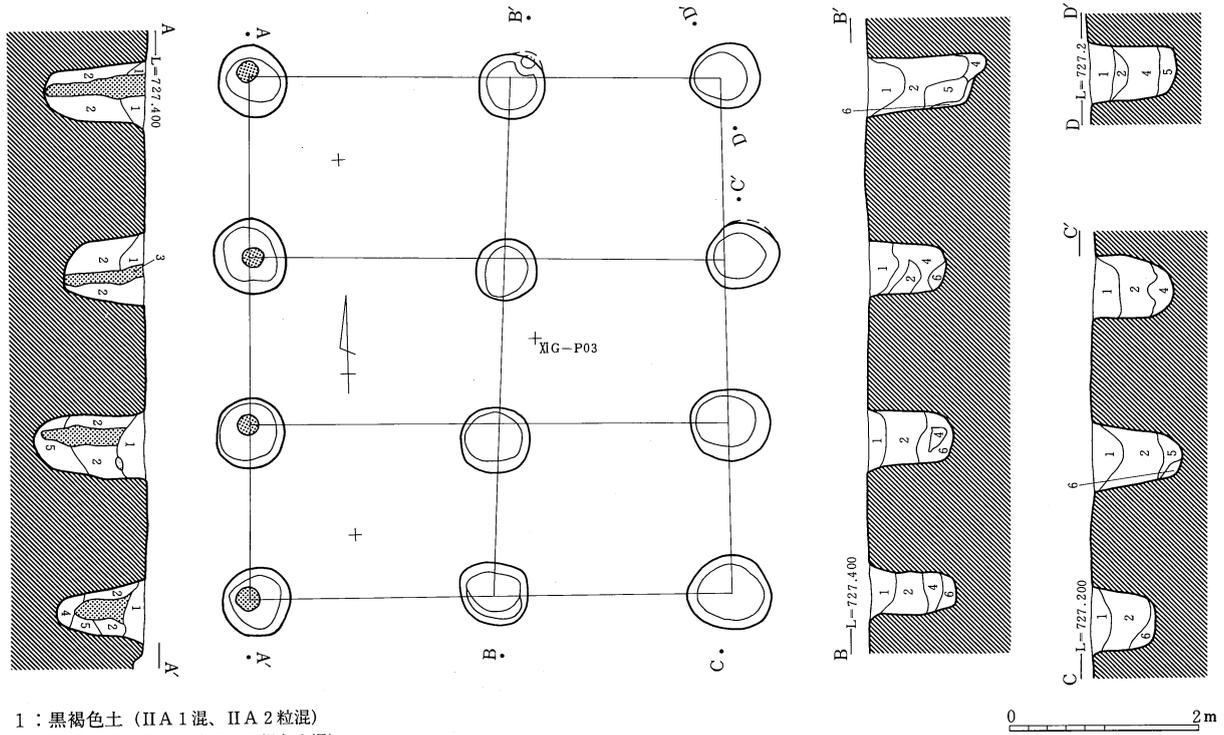
- 1: 黒褐色土 (底部II A 2粒微混、やわらかい)



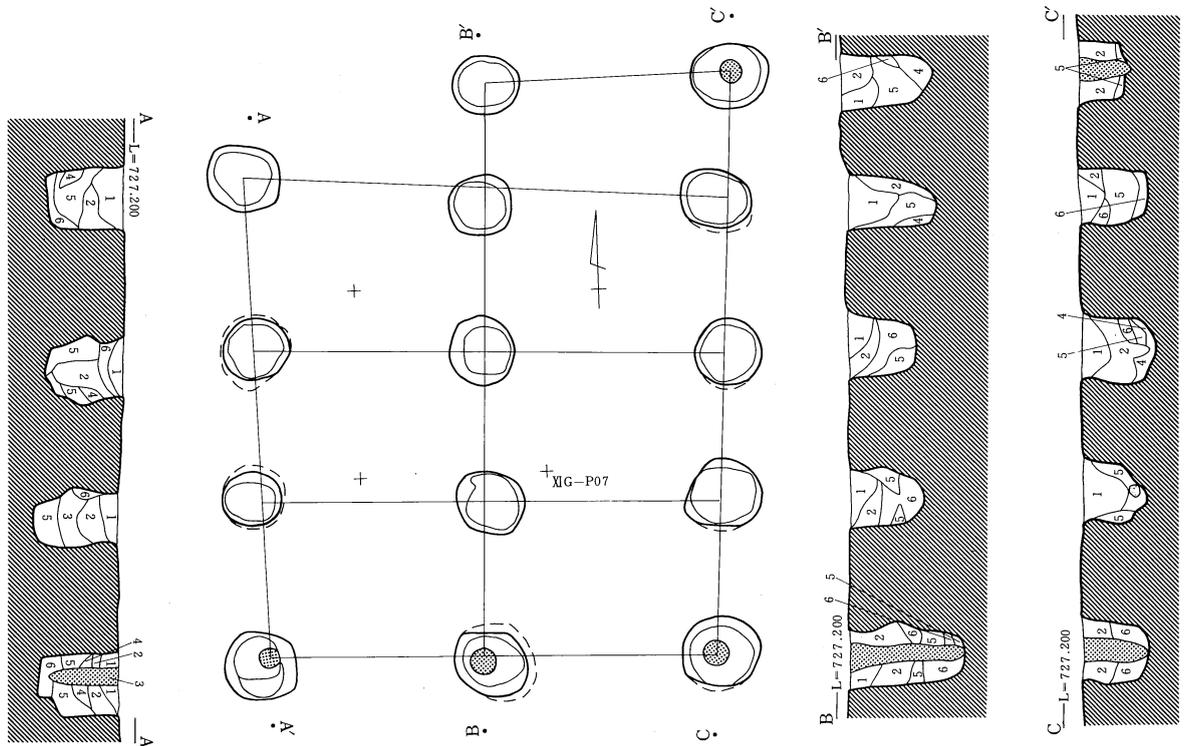
126号掘立柱建物址 (図173、PL184)

II A 2層で検出された。平面形は2間×3間の南北棟、総柱式である。規模は桁行7.0 m、梁行5.2 mで、面積37.08 m²をはかる。主軸はN—1°—Eを指す。柱間は東西列2.2~2.8 m、南北列1.8~2.0 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とする。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径24 cmほどで、土層断面中位に認められるもの

図172 123・124号掘立柱建物址



- 1 : 黒褐色土 (IIA 1混、IIA 2粒混)
- 2 : 明褐色土 (IIA 2基調、黒褐色土混)
- 3 : 黒褐色土 (しまりない)
- 4 : 砂礫 (湯川層基調、IIA 1多混)
- 5 : 黒褐色土 (IIA 1基調)
- 6 : 砂礫 (湯川層基調、IIA 1微混)



- 1 : 黒褐色土 (IIA 1混、IIA 2粒混)
- 2 : 黒褐色土 (IIA 2基調、黒褐色土混)
- 3 : 黒褐色土 (しまりない、砂礫少混)
- 4 : 砂礫 (湯川層基調、IIA 1多混)
- 5 : 黒褐色土 (IIA 1基調)
- 6 : 砂礫 (湯川層基調、IIA 1微混)

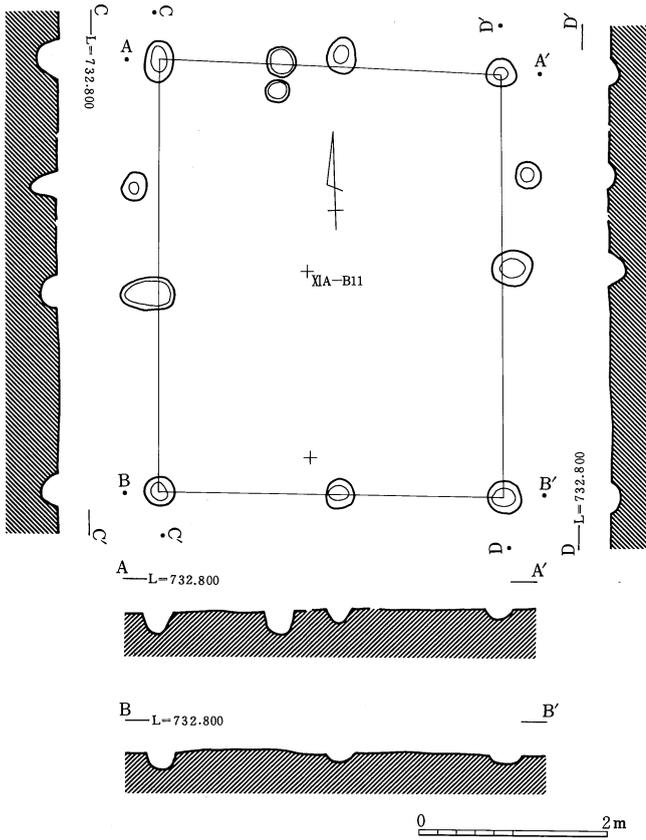
図173 125・126号掘立柱建物址

もある。

遺物 出土土器は土師器甕4片、小形甕1、鉢2片、壺類1片が出土している。

127号掘立柱建物址 (図174)

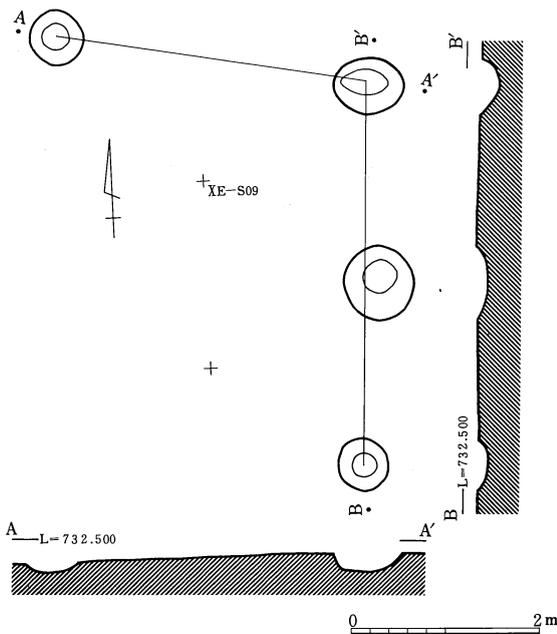
II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行4.5m、梁行3.7mで、面積18.08m²をはかる。主軸はN-1°-Wを指す。柱間は東西列1.7~1.9m、南北列2.1~2.4mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さがほぼ一定である。



1: 黒褐色土 (II A 2層底部若干湿、やわらかい)

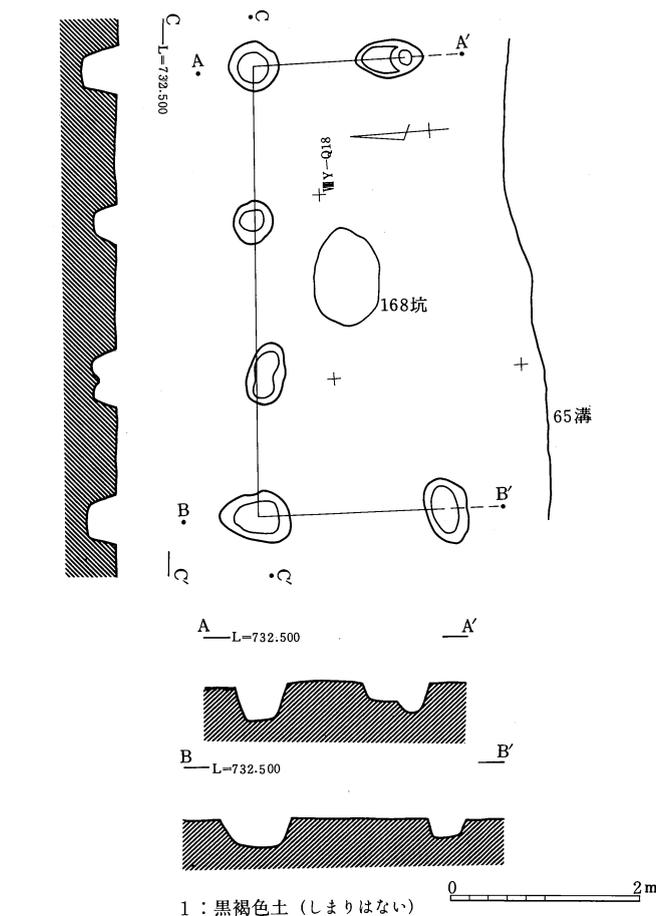
128号掘立柱建物址 (図174)

II A 2層で検出された。浅い円形の落ち込みが並ぶため、掘立柱建物址の一部と判断した。平面形は1間×2間の南北棟、側柱式と思われる。推定規模は桁行4.16m、梁行4.1mで、面積17.1m²をはかる。主軸はN-3°-Eを指す。柱間は南北列2.0mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。



1: 黒褐色土 (サクサクしてやわらかい)

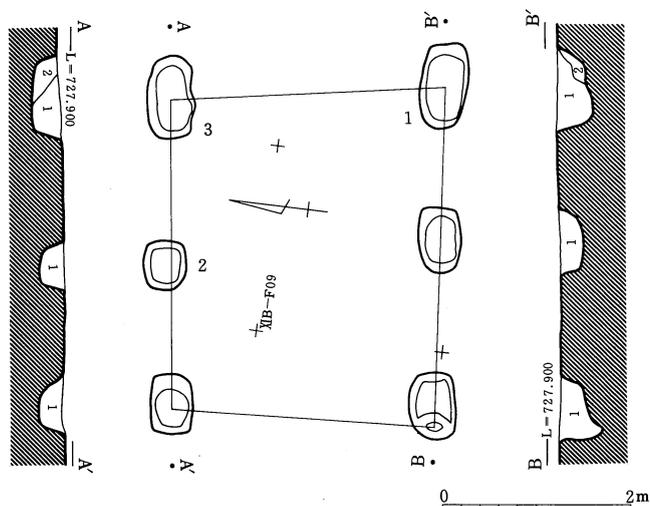
図174 127・128号掘立柱建物址



129号掘立柱建物址 (図175、PL185)

II A層で検出された。65号溝址に切られるため全容は不明である。推定で、平面形は2間×3間の東西棟、側柱式であったと思われる。規模は桁行4.9 m、主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列1.4~1.8 m、南北列1.6~2.0 mをはかる。柱穴の形は不整形で、深さはほぼ一定である。

130~134号掘立柱建物址 欠番



135号掘立柱建物址 (図175、PL185)

II A 1層で検出された。平面プランは1間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.5 m、梁行2.9 mで、面積10.20 m²をはかる。主軸はE-5°-Nを指す。柱間は東西列1.6~1.9 m、南北列2.8 mをはかる。柱穴の形は長方形を基本とし、深さはほぼ一定である。

遺物 出土土器は須恵器坏1片、中形甕1(3)、長頸瓶1(2)。土師器甕1、内面黒色坏2(1)が出土している。1は墨書が書かれているが文字は判読できない。

1: 黒色土 (IIA 2ブロック少混、淘汰良い、しまり有り)
2: 極暗褐色土 (IIA 1ブロック少混、しまり良い)

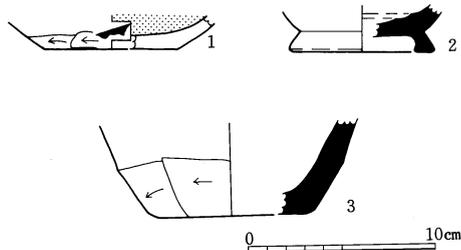
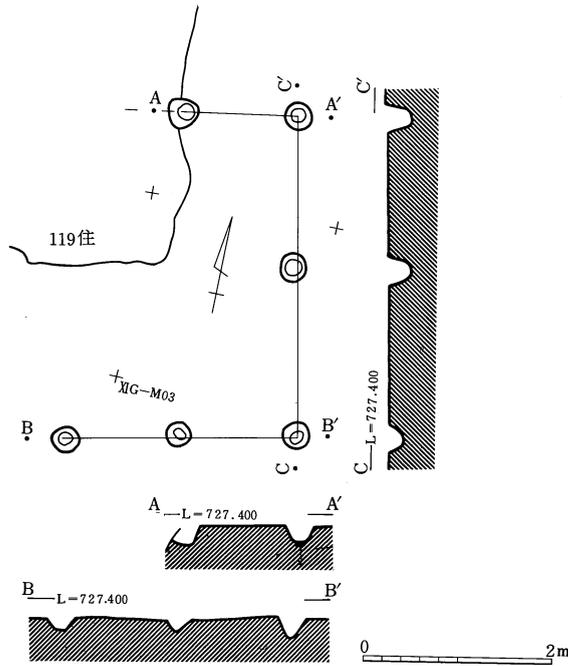


図175 129・135号掘立柱建物址

136号掘立柱建物址 (図176、PL185)

II A 1層で検出された。119号住居址に切られるため北西部が不明である。推定で、平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.5m、梁行2.4mで、面積8.37m²をはかる。主軸はN-10°-Wを指す。柱間は東西列1.2~1.3m、南北列1.6~1.8mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。

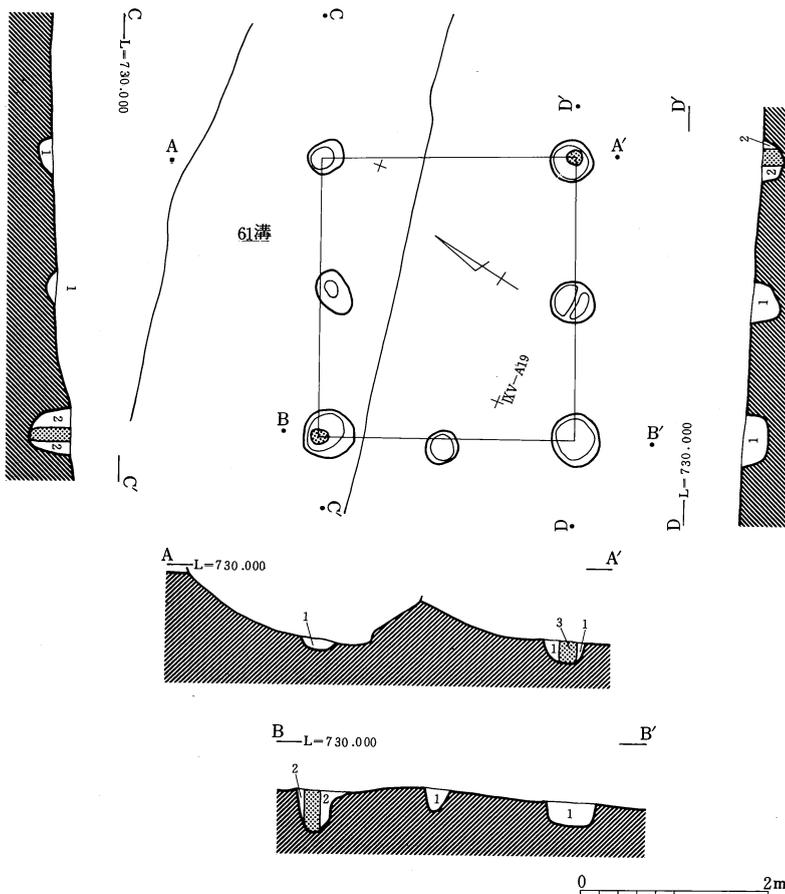


1: 黒褐色土 (II A 2粒混、しまりない)

137号掘立柱建物址 欠番

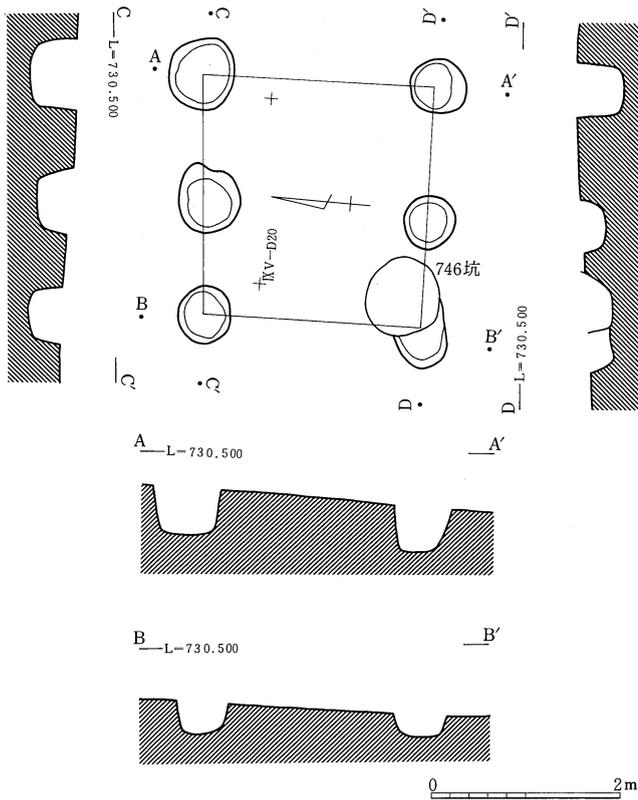
138号掘立柱建物址 (図176、PL185)

II A 1層で検出された。61号溝址に切られる。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.1m、梁行2.6mで、面積8.03m²をはかる。主軸はE-17°-Nを指す。柱間は東西列2.4m、南北列1.1~1.5mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径18cmほどで、掘り方底面まで届く。

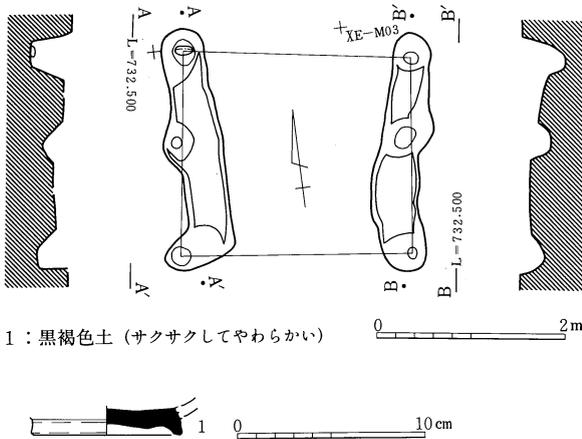


1: 黒褐色土 (II A 2ブロック混)
2: 黒褐色土 (しまりない)

図176 136・138号掘立柱建物址



1：黒褐色土（IIA 2ブロック混）



1：黒褐色土（サクサクしてやわらかい）



図177 139・141号掘立柱建物址

139号掘立柱建物址 (図177、PL185)

II A 1層で検出された。平面プランは1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行2.6 m、梁行2.4 mで、面積6.04 m²をはかる。主軸はE-1°-Nを指す。柱間は東西列2.4 m、南北列1.1~1.5 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、掘り方は一部を除いて深さがほぼ一定である。

140号掘立柱建物址 欠番

141号掘立柱建物址 (図177、PL185)

II A 2層で検出された。平面形は1間×2間の溝持ち、東西棟、側柱式である。規模は桁行2.4 m、梁行2.2 mで、面積5.26 m²をはかる。主軸はE-9°-Sを指す。柱間は東西列2.2 m、南北列0.9~1.2 mをはかる。2列の溝は深さがほぼ一定である。北東隅に礎石が認められた。

遺物 出土土器は須恵器高台坏1(1)。土師器内面黒色の坏類3片が出土している。

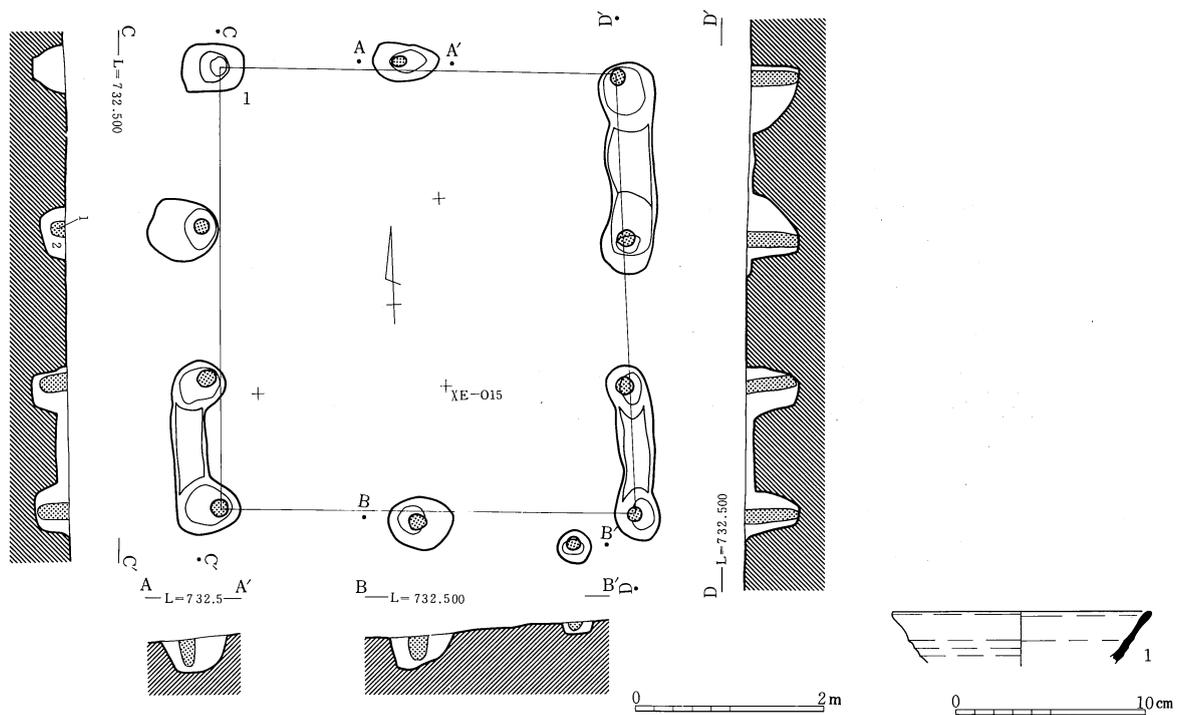
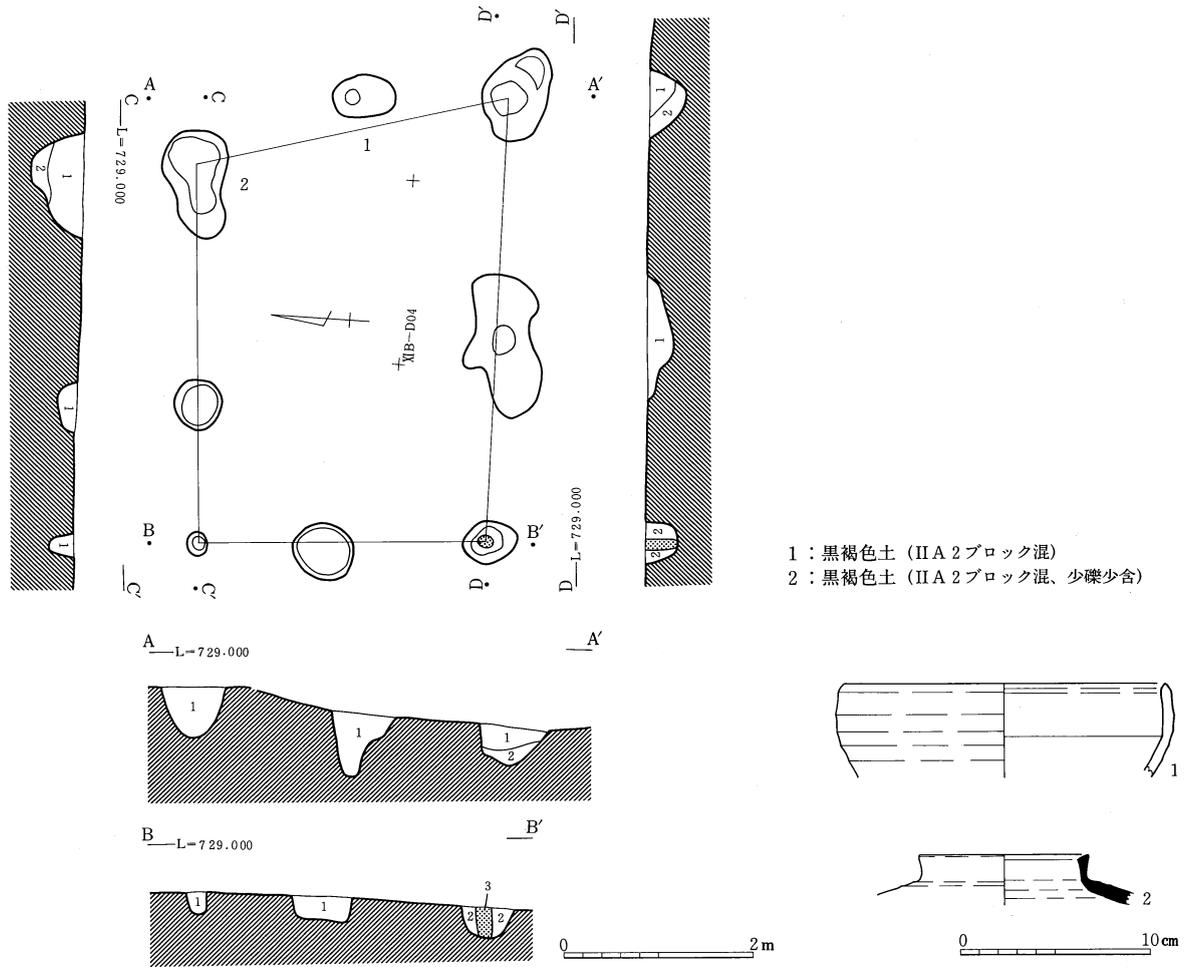


図178 142・145号掘立柱建物址

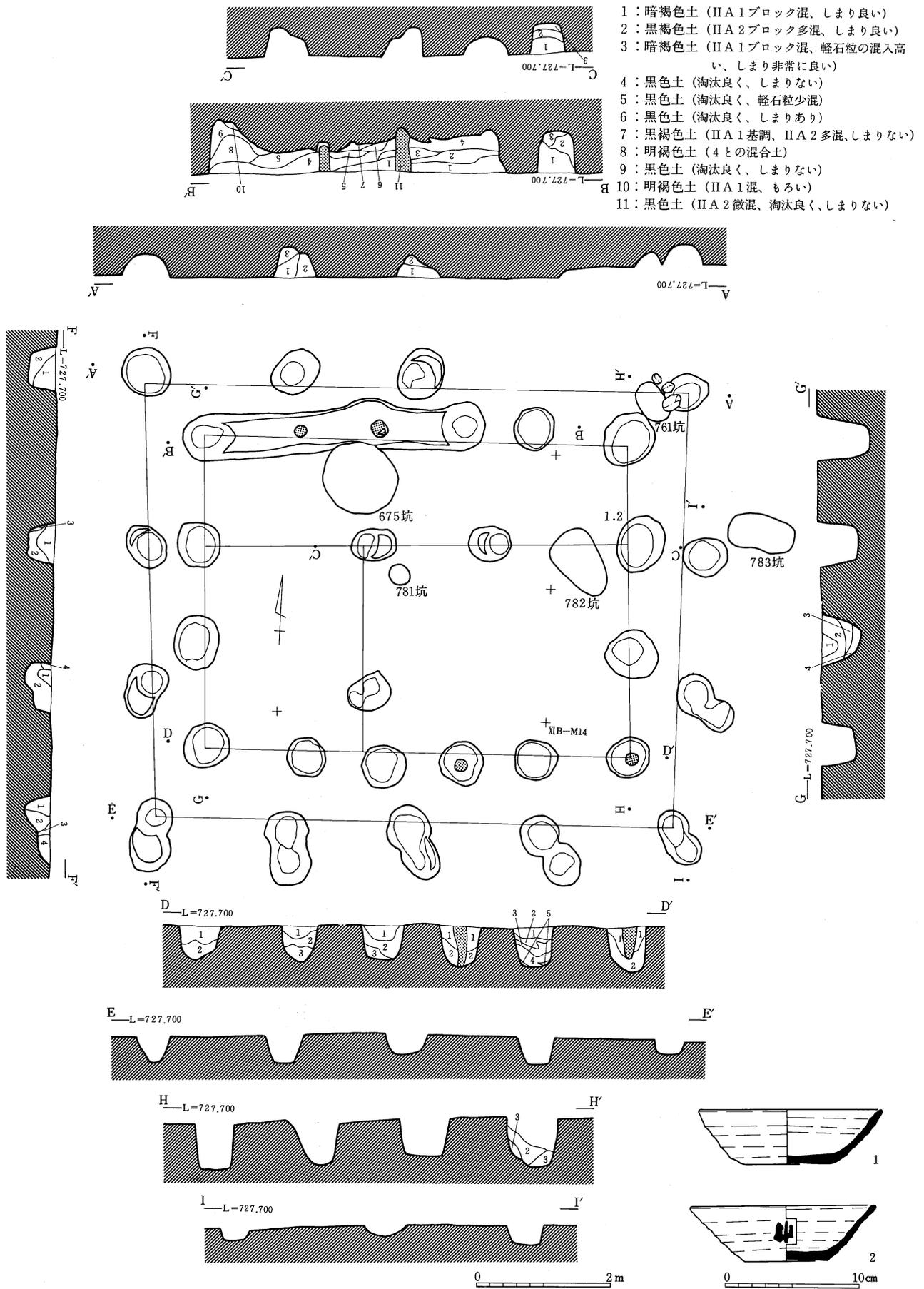
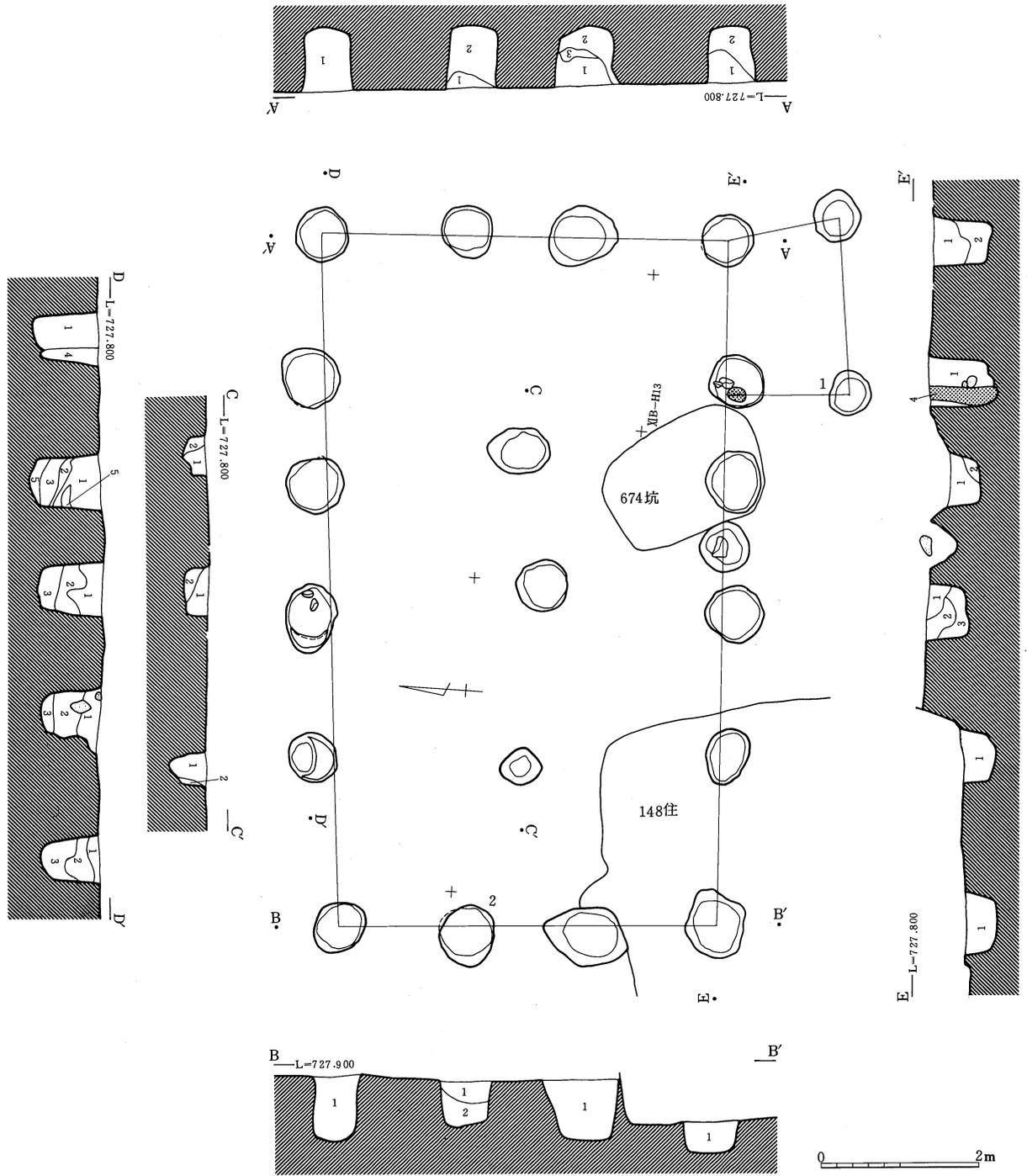


图179 143号掘立柱建物址



- 1 : 黒褐色土 (IIA 1基調、IIA 2混、しまり良い)
- 2 : 明褐色土 (IIA 2基調、IIA 1ブロック混、しまり良い)
- 3 : 黒褐色土 (IIA 1基調)
- 4 : 黒色土 (IIA 2微混、淘汰良く、しまりない)
- 5 : 明褐色土 (IIA 2基調、IIA 1ブロック混)



図180 144号掘立柱建物址

142号掘立柱建物址 (図178、PL185)

II A 2層上面で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行4.7m、梁行3.1mで、面積14.79m²をはかる。主軸はE-5°-Nを指す。柱間は東西列1.5~2.6m、南北列1.5~1.7mをはかる。柱穴の形は不整形・円形を呈し、深さは不揃いである。確認された柱痕は径11cmほどで、掘り方底面まで届く。

遺物 出土土器は須恵器杯3片、短頸壺1(2)、長頸瓶1片、壺類1片。土師器甕3片、内面黒色杯3片、鉢1(1)が出土している。

145号掘立柱建物址 (図178、PL186)

II A 2層で検出された。平面形は2間×3間の溝持ち、南北棟、側柱式である。規模は桁行4.7m、梁行4.4mで、面積20.65m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.4~1.7m、南北列2.1~2.3mをはかる。柱穴の形は円形・方形と不揃いである。溝は3列あり、深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径16cmほどで、掘り方底面まで届くものは半数である。

遺物 出土土器は須恵器杯1(1)。土師器甕4片が出土している。

143号掘立柱建物址 (図179、PL185)

II A 1層で検出された。平面形は全面庇を持つ、3間×5間の東西棟、側柱式である。規模は桁行6.4m、梁行5.9mで、面積30.21m²をはかる。主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列1.0~1.4m、南北列1.4~2.2mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、北面で溝を持つ。底部南面側の柱穴はヒョウタン形の掘り方を持つ。また、北面の庇は東側で柱穴の欠如が認められた。内側にある柱穴は間仕切り状に並ぶが、

152号掘立柱建物址の確認されなかった南面部にあたる可能性もある。掘り方は一部を除いて深さがほぼ一定である。確認された柱痕は径17cmほどである。

遺物 出土土器は須恵器杯2(1・2)が出土している。

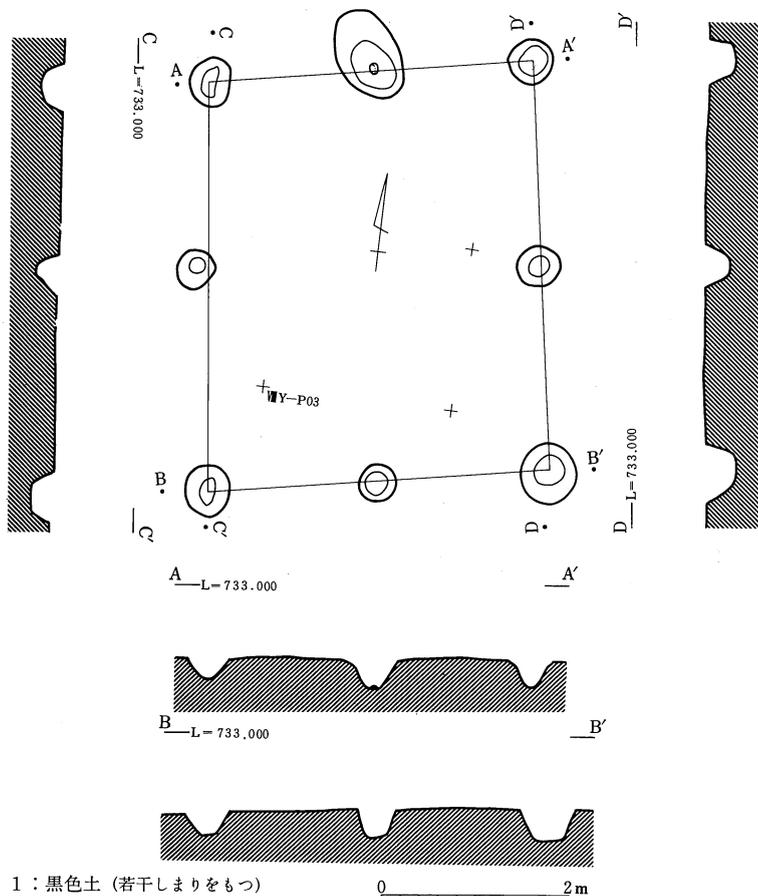


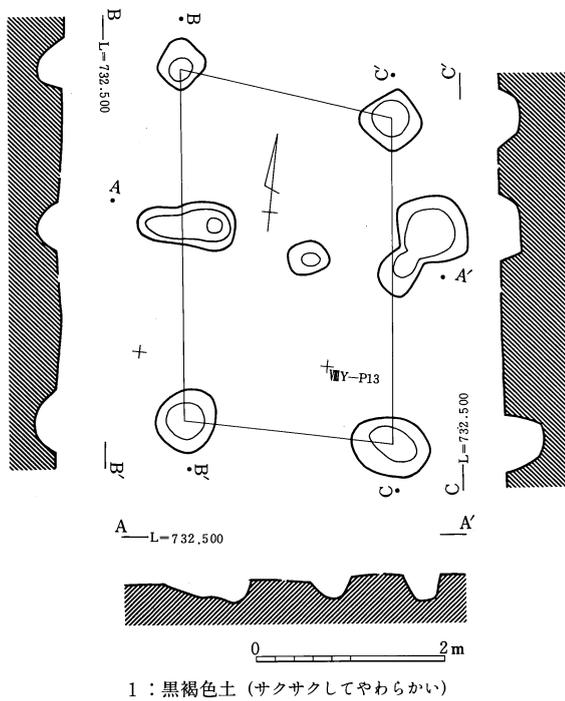
図181 146号掘立柱建物址

144号掘立柱建物址 (図180、PL186)

II A 1層で検出された。148号住居址に切られる。平面プランは2間×5間の東西棟、側柱式である。内にある3基の柱穴は東西列よりその配置がずれ、総柱式とはできないと判断した。また、南面東寄りに張り出し状に2基の柱穴が認められる。規模は桁行9.0m、梁行5.1mで、面積36.72 m²をはかる。主軸はE-4°-Nを指す。柱間は東西列1.4~2.2m、南北列1.4~1.8mをはかる。柱穴の形は円形・不整形を呈し、深さは内にある3基が浅いほかほぼ一定である。確認された柱痕は径20cmほどである。

遺物 出土土器は須恵器高台坏1。土師器甕3片、壺2片、坏2(1、2)が出土している。

145号掘立柱建物址 142号掘立柱建物址に後述



146号掘立柱建物址 (図181、PL186)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行4.9m、梁行3.4mで、面積16.12 m²をはかる。主軸はN-10°-Wを指す。柱間は東西列1.7~1.9m、南北列2.2~2.3mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、歪んだものもある。深さはほぼ一定である。

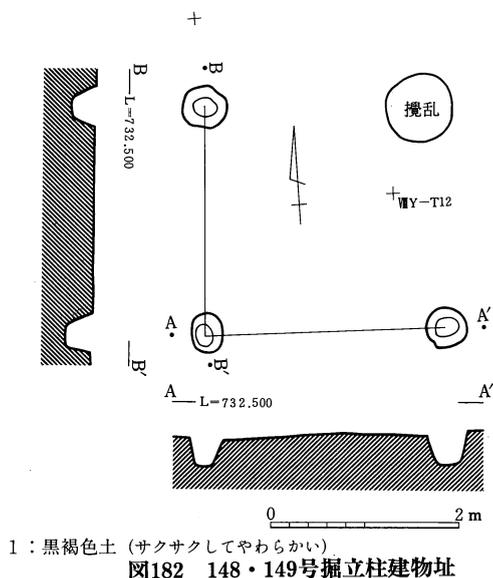
147号掘立柱建物址 欠番

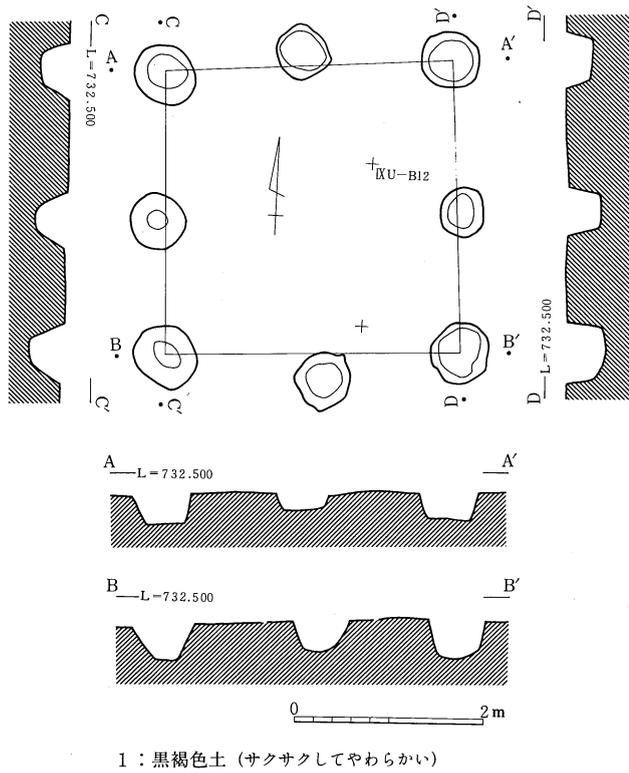
148号掘立柱建物址 (図182、PL186)

II A 2層で検出された。平面形は1間×2間の南北棟、側柱式である。内側に1基認められた。規模は桁行3.7m、梁行2.2mで、面積7.15 m²をはかる。主軸はN-5°-Wを指す。柱間は東西列1.5~2.1m、南北列2.2~2.3mをはかる。柱穴の形は円形・不整形を呈し、掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

149号掘立柱建物址 (図182、PL186)

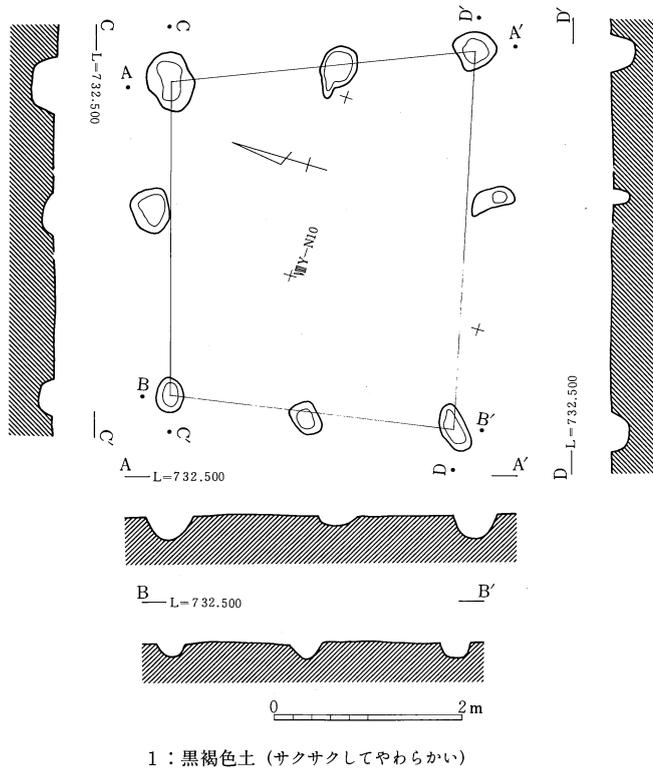
II A 2層で検出された。北東柱穴が攪乱されたと推測される。平面形は1間×1間で、規模は東西2.5m、南北2.4mで、面積6.20 m²をはかる。主軸はN-4°-Eを指す。柱穴は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。





150号掘立柱建物址 (図183、PL186)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の南北棟、側柱式である。規模は桁行3.2m、梁行3.1mで、面積9.79m²をはかる。主軸はN-4°-Wを指す。柱間は東西列1.5~1.6m、南北列1.4~1.6mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし、深さはほぼ一定である。



151号掘立柱建物址 (図183)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.5m、梁行3.0mで、面積12.84m²をはかる。主軸はE-17°-Nを指す。柱間は東西列1.5~2.3m、南北列1.3~1.5mをはかる。柱穴の形は円形・不整形を呈し、深さはほぼ一定である。

152号掘立柱建物址 (図184)

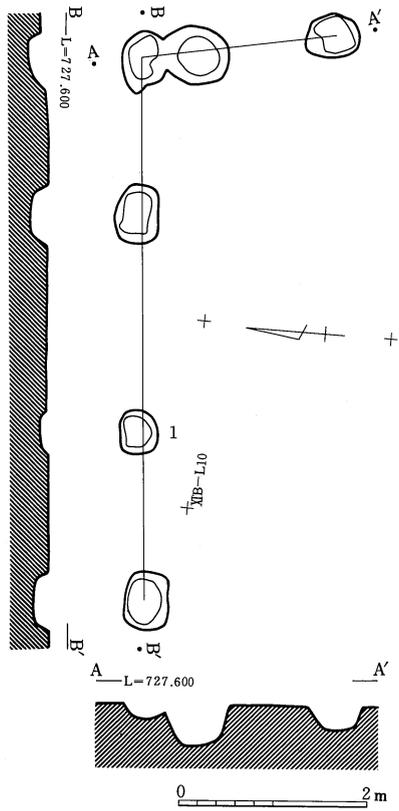
II A 2層で検出された。II A 1層検出時には確認できず、北面側が検出される形となった。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式が想定される。規模は東西5.8mをはかる。柱間は東西列1.6~2.1m、南北列2.6mをはかる。柱穴の形は円形・方形を呈し、深さは不揃いである。

遺物 出土土器は須恵器坏1(1)が出土している。

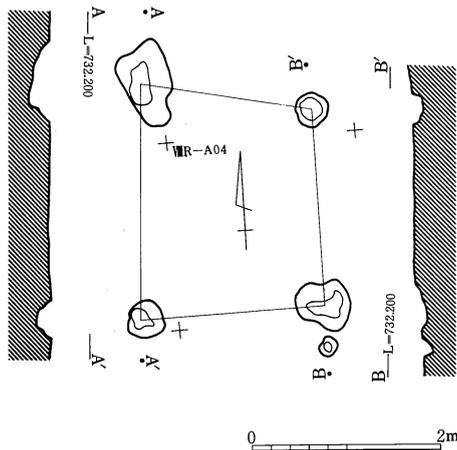
図183 150・151号掘立柱建物址

153号掘立柱建物址 (図184、PL187)

II A 2層で検出された。平面形は2間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.5m、梁行3.0mで、面積12.84m²をはかる。主軸はE-17°-Nを指す。柱間は東西列1.5~2.3m、南北列1.3~1.5mをはかる。柱穴の形は円形・不整形を呈し、深さはほぼ一定である。



1: 黒褐色土 (炭粒微混、しまりない)

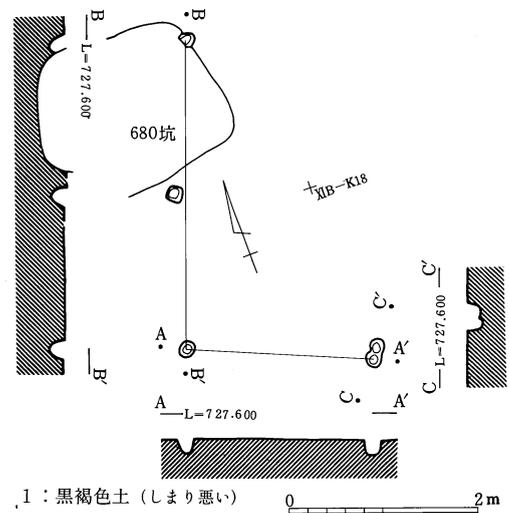


1: 黒褐色土 (小礫2~3mm微混、しまり悪い)

図184 152・153号掘立柱建物址

154号掘立柱建物址 (図185)

II A 2層で検出された。平面形は1間×2間の東西棟、側柱式が想定される。規模は南北3.3m、東西2.0mで、主軸はE-17°-Nを指すと推測される。柱間は東西列2.0m、南北列1.8mをはかる。柱穴の形は方形で、深さはほぼ一定である。周辺の掘立柱建物址の柱穴に比べ極端に小振りである。



1: 黒褐色土 (しまり悪い)

図185 154号掘立柱建物址

ウ 溝址

古墳～平安時代のものと確定できた溝址は、63号溝址の一本に過ぎなかった。判断の根拠は、3号畑址を覆うものと同様の土が覆土中に認められたことによる。

63号溝址 (図196, PL197)

II A 1層上面で検出された。121号掘立柱建物址に切られる。3号畑址とも切り合うが、両者ともに I E 2層土を覆土に持ち、検出面から浅いため、その前後関係はつかめなかった。全長約72 m、幅約30 cm、深さ10 cm 前後をはかる。断面は弓状を呈す。底は平坦で、比高差40 cmをはかり、南に傾斜する。3号畑址に関連した溝の可能性が考えられるとともに、区画的な溝とも考えられる。

時期 遺物は認められなかったが、重複関係や覆土のあり方から4期以前に所属すると思われる。

エ 柵址

柵址としたものは3列認められた。このほかピットの集中が認められる一帯などに、柵列状のものが図上で認められなくもないが、ここでは扱わなかった。所属時期の判断は、検出面・覆土から判断した。

8号柵址 (図186)

VIII R-I 19に位置する。II A 1層上面で検出された。周辺は平安期の遺構の希薄な場所である。4基のピットからなり、形状・深さともにほぼ均等である。間隔は西で狭まり、80～100 cmをはかる。

9・10号柵址 (図186)

VIII X-Q 01に位置する。両者は、ピットの位置にずれが認められるものの、50 cm ほどの間隔を置いて近接する。西に隣接して33号掘立柱建物址が存在することから、同址の付属施設の可能性がある。ともにピット3基からなり、その規模もほぼ等しい。形状は一部を除いて円形である。深さは10号柵址で均一である。

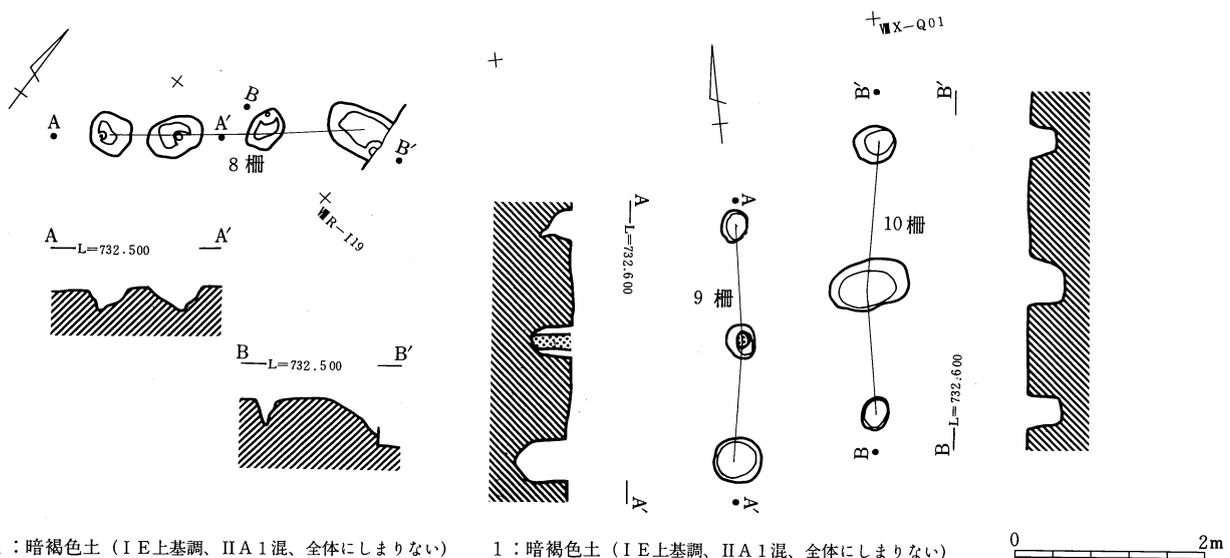


図186 柵列

オ 土坑

本地区で検出された土坑は総数570基である。このうち検出層位・覆土の相違・住居址など遺構との切り合いから、中世以降のものと判断されるもの84基を除いた486基をここで扱った。この486基の土坑は、II A 1層上面で検出されたものが7割、そのほかはII A 2層上面で検出されたものである。

検出された土坑の多くはピット状のもので、これらを特に断面形から3類に別けてみた。

a、段を持つもの。b、房垂形のもの。c、丸底。である。

さらに平面形状で細分した。

1、方形。2、長方形。3、円形。4、楕円形。5、不整形。である。

以上、2種類の細分を組み合わせると、円形で丸底を呈するピット状のものが6割近くをしめることが窺えた。また、これらピット状のもの分布は地区内に平均して認められるものではなく、掘立柱建物址・住居址の存在しない空白域に集まっているように見え、とくに12号住居址を円環状に取り囲むように分布することなどが指摘される。

ここでは土坑のうち、規模・形状・出土遺物などから特異なものだけ個別に記す。

とくに先にあげる167～579号土坑は、規模の大きい長方形を呈するもので、おもに高位段丘の状縁辺部に検出され南北方向並ぶようにして認められている。1段階の住居址に切られる167号土坑などからそれ以前のもの判断され、572号土坑の存在などから、本遺跡の主体となる集落にともなうと判断が難しい一群である。いずれも遺物は出土していない。

167号土坑 (図188)

本址はVII X—17グリッドに位置する。15号住居址に切られているが形状は保っていた。360×140 cmの長方形を呈し、深さ50 cmほどである。覆土は埋め戻し状を示し、塊の混入が認められる。

604号土坑 (図188)

本址はX E—15グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。60×83 cmの楕円形を呈し、深さ29 cmをはかる。覆土は黒褐色土で、締まりがない。

580号土坑 (図188、PL191)

本址はXI F—08グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。72×106 cmの円形を呈し、深さ48 cmをはかる。覆土はパミス、II A 2粒子を少量含む黒褐色土である。

582号土坑 (図188)

本址はXI F—02グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。126×70 cmの長円形を呈し、深さ30 cmをはかる。覆土が人為的な埋没を示すため、周囲の遺構も含めその性格を知るためにリン酸、カルシウム分析を試みた(パリノ・サーベイ社依頼)。しかしながら明瞭な結果はせず、遺構の性格を示す資料とはなり得ていない。

625号土坑 (図188)

本址はXI A—07グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。165×80 cmの屈曲した不整形を呈し、深さ46 cmをはかる。底部はでこぼこしている。

578号土坑 (図189、PL191)

本址はXI F—08グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。210×112 cmの円形を呈し、深さ66 cmをはかる。

579号土坑 (図189、PL191)

本址はXI F—08グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。340×130 cmの円形を呈し、深さ91 cmをはかる。覆土はパミス、II A 2粒子を少量含む黒褐色土である。

603号土坑 (図189)

本址はX E—15グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。223×168 cmの円形を呈し、深さ67 cmをはかる。底は凹凸が激しく中央部で高まりが認められた。

551号土坑 (図189)

本址はXI B—23グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。256×246 cmの円形を呈し、深さ20 cmをはかる。覆土はパミス、II A 2粒子を少量含む黒褐色土である。

133号土坑 (図190)

本址はVIII M—25グリッドに位置する。II A 1層上面で検出された。21号住居址に切られるため全容は不明である。現状で、128×104 cmの楕円形を呈すると思われる。深さは39 cmほどである。

521号土坑 (図190、PL190)

本址はXI G—18グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。202 cm×140 cmの円形を呈し、西側の壁際で礫が2つ並ぶように検出され、対辺に坏が2点認められた。

250・251号土坑 (図190)

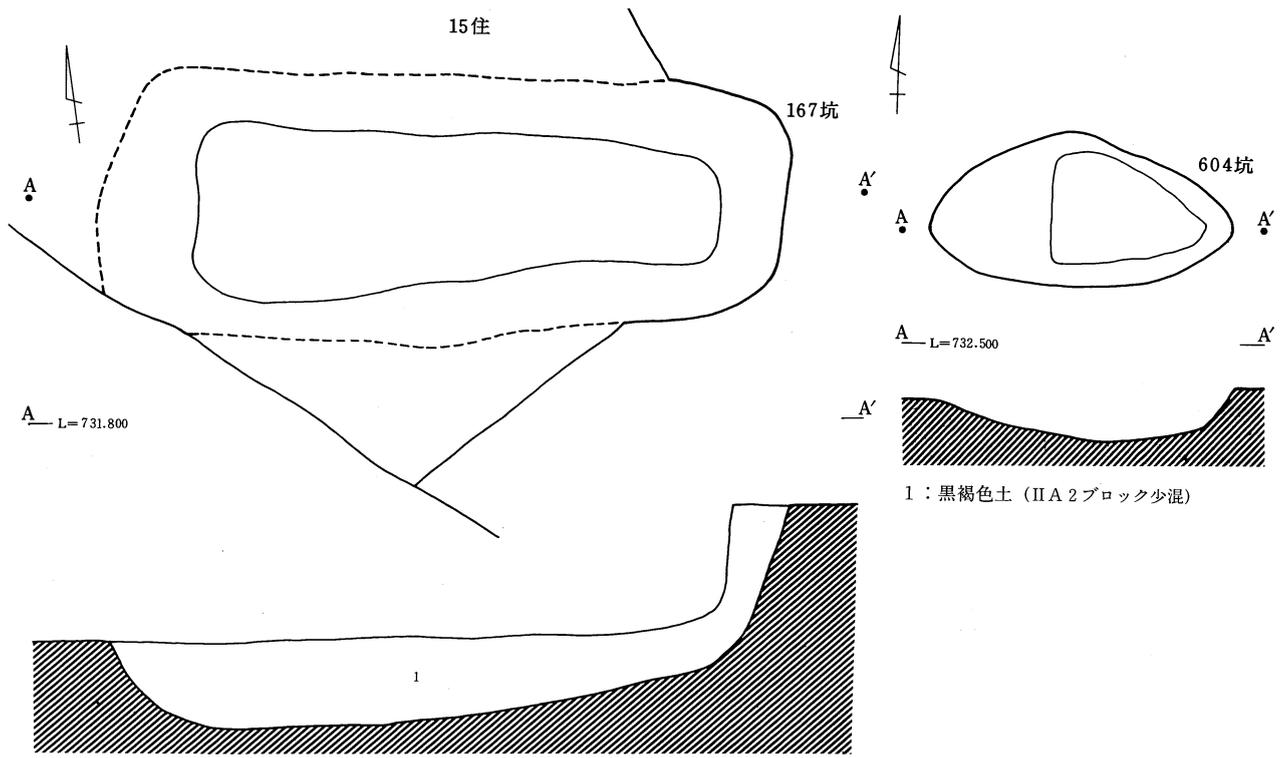
本址はVIII S—7・8グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。250号は32×110 cmの楕円形を呈し、深さ29 cmをはかる。検出段階でかなりの土器の散布が一带で認められたが、本址にともなうものと判断しがたかった。251号も同様の検出状態であった。100×170 cmの長方形を呈し、深さ55 cmをはかる。

238・240号土坑 (図190、PL189)

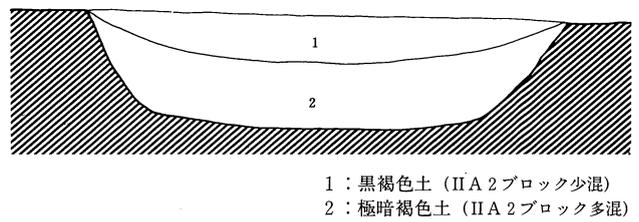
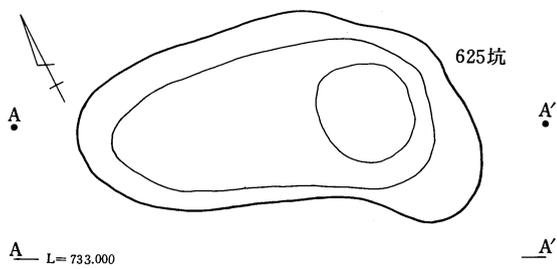
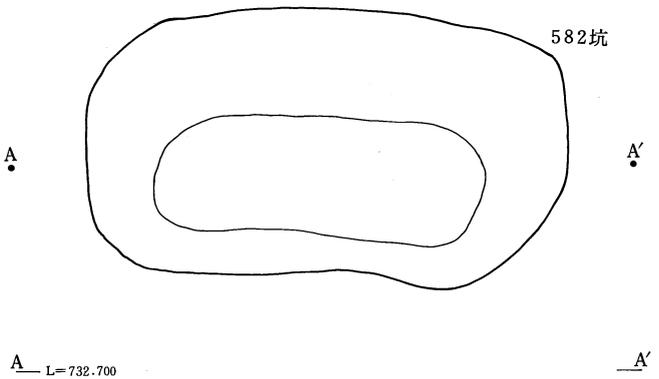
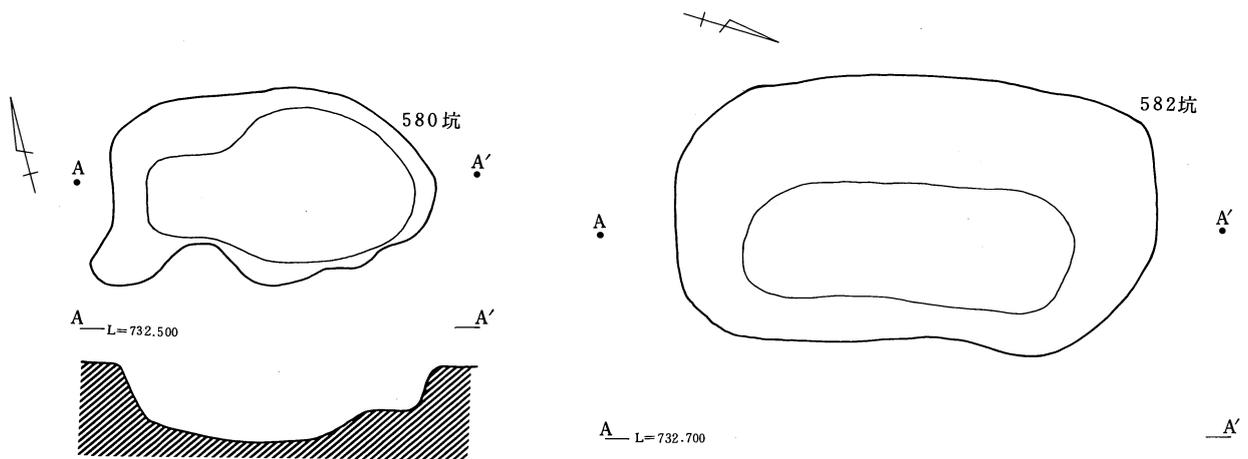
本址はVIII S—09グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。両者は切り合うが、若干規模が異なる程度で類似した土坑である。238号は246×170 cmの長方形を呈し、深さ30 cmを測り、240号はこれより2回りほど小振りである。

252号土坑 (図191)

本址はVIII Y—04グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。単独で検出時に須恵器鉢片が顔を出していた。



1: 黒色土 (IIA 2ブロック少混、東側上部に炭粒微含)



0 1m

図188 土坑 (1)

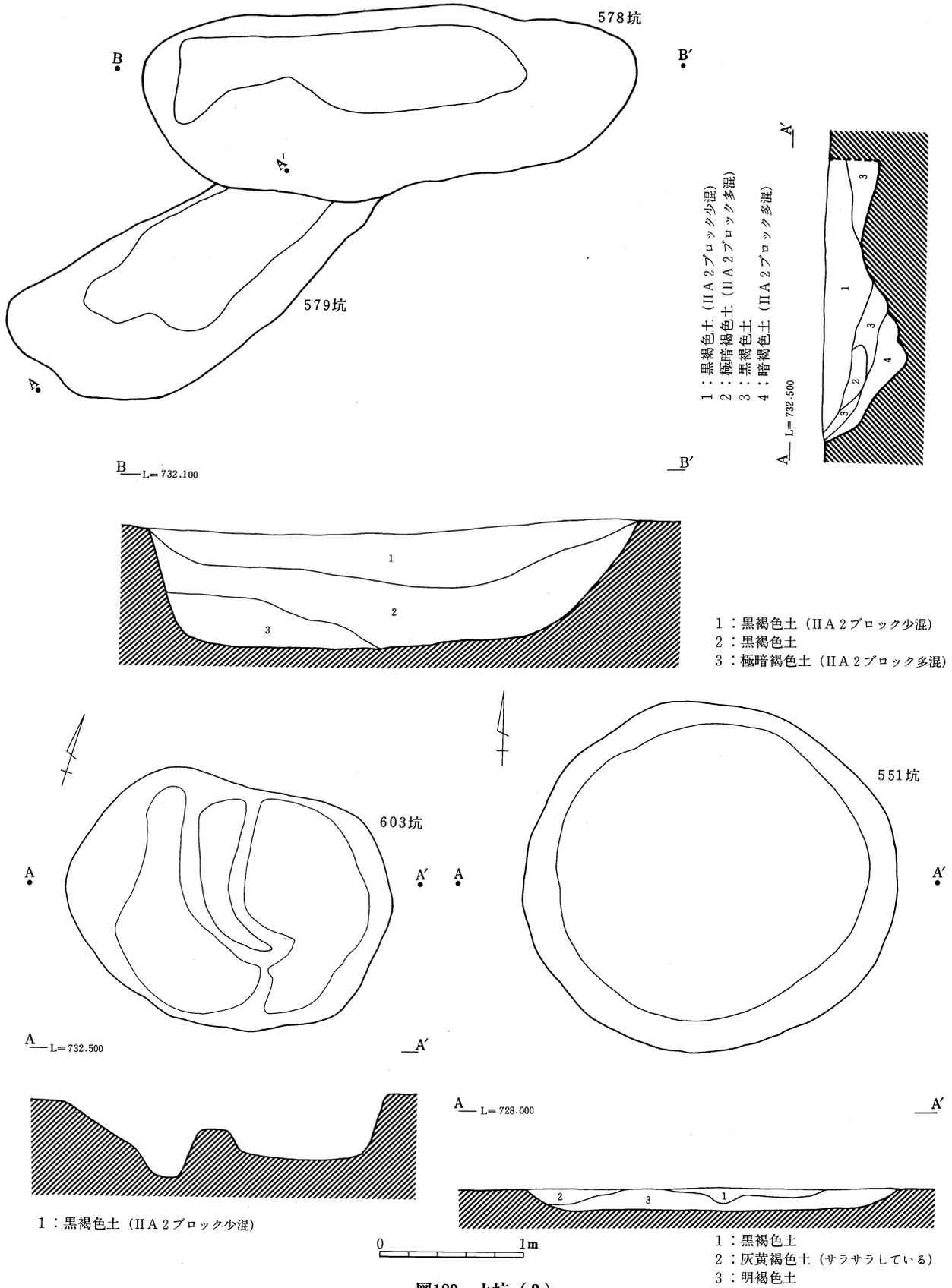


図189 土坑 (2)

558号土坑 (図191、PL190)

本址はVIIIY-04グリッドに位置する。IIA 2層上面で検出された。84×62 cmの円形を呈し、深さ67 cmをはかる。単独で柱痕をもつピットである。

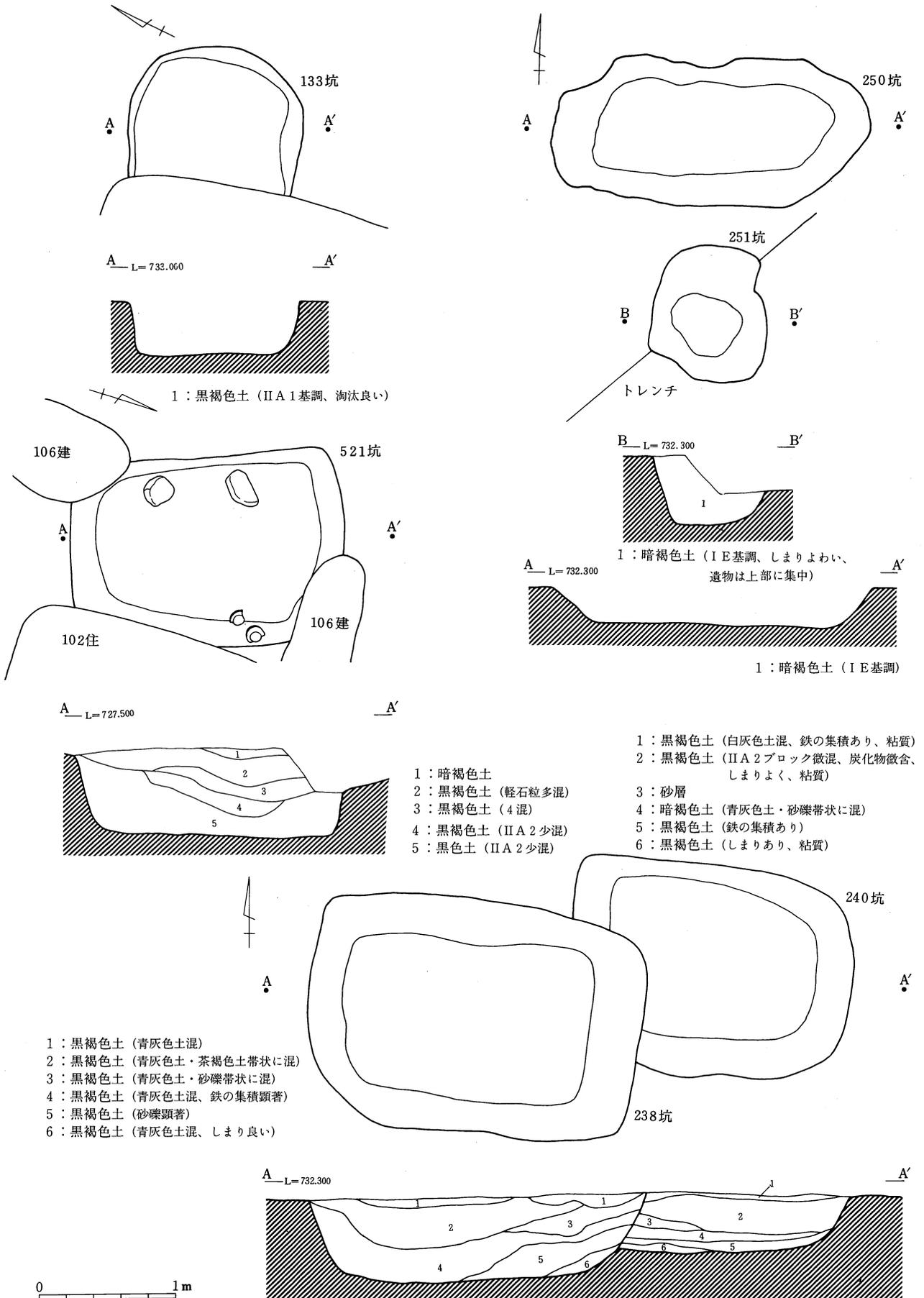


図190 土坑 (3)

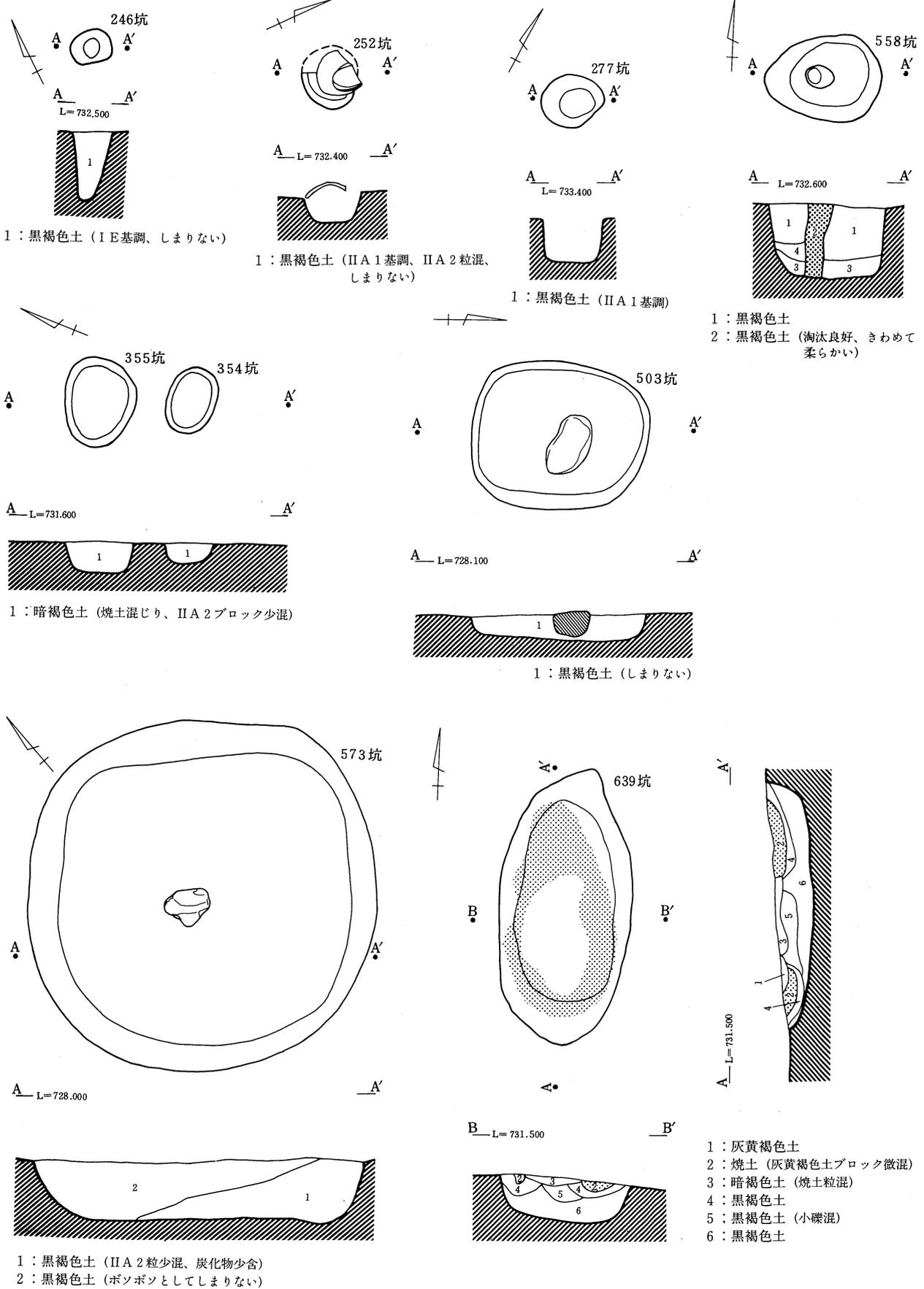


図191 土坑 (4)

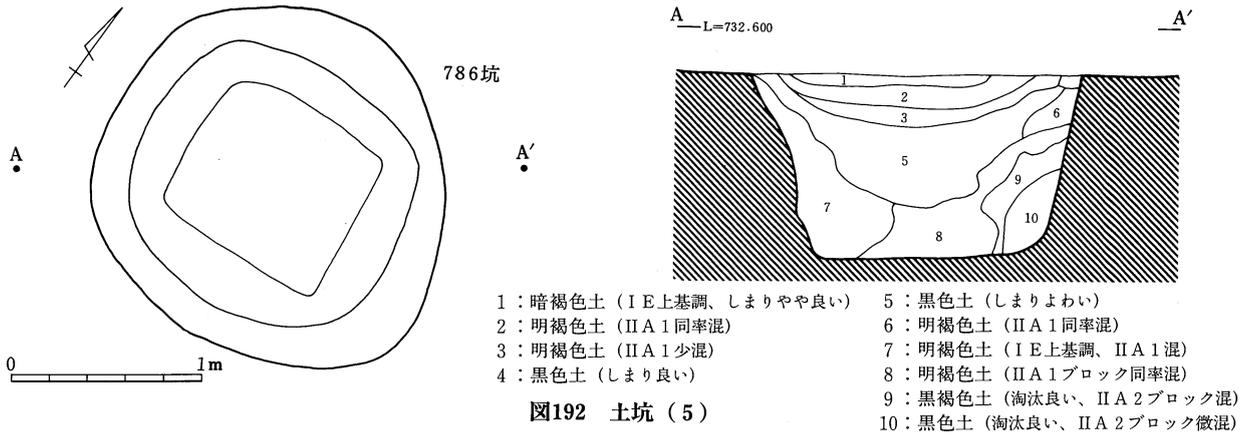


図192 土坑(5)

354・355号土坑 (図191)

本址はVIIIW-10グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。354号は48×32 cmの楕円形を呈し、深さ14 cmをはかる。355号はこれより3回りほど大振りなもので、両者ともに覆土中に焼土をともなっており、とくに前者の底部にその集中が認められた。

503・573号土坑 (図191、PL191)

礫が遺構底部より出土したもの。503号はXI B-16グリッドに位置し、128×108 cmの円形を呈し、深さ27 cmをはかる。573号はXI B-17グリッドに位置する。254×254 cmの楕円形を呈し、深さ51 cmをはかる。

639号土坑 (図191、PL192)

本址はXI U-20グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。検出時に焼土が露出していた。200 cm×96 cmの楕円形を呈し、深さ38 cmをはかる。焼土はドーナツ状になって認められ、遺構上面に検出されている。当初、住居址のカマド部とも推察したが、これ以上の遺構の広がりには確認できなかった。遺物の包含量は少ないがほとんどが破片であった。

786号土坑 (図192、PL192)

本址はVIII M-21グリッドに位置する。II A 2層上面で検出された。192×187 cmの楕円形を呈し、深さ124 cmをはかる。覆土は埋め戻し状である。遺物の出土はなかった。

カ 畑址

3面の畑址が確認された。このうち2面はVIII M 9周辺に、もう1面はVIII Y 24周辺で検出された。いずれもII A 1層を検出面として、I E 2層が畝間に残る状態で溝状の列として確認された。また、それぞれが7・8期の住居址に切られていることから、それ以前の時期に属すると判断される。さらに、土層との関係からみると、平安時代の遺構がI E 2層を掘り込み面としていることから明らかなように、それ以前に畑址が存在したことを示唆している。

畑址の検出された周辺は、平安期以前のものとして1段階の遺構が認められ、1段階の住居址などともなう可能性が極めて高いといえる。

畝間の深さが10 cm前後とかなり浅いため、検出条件が良かった部分のみ確認されたとしてもよからう。実際には広範囲にわたって畑址が存在していた可能性もある。

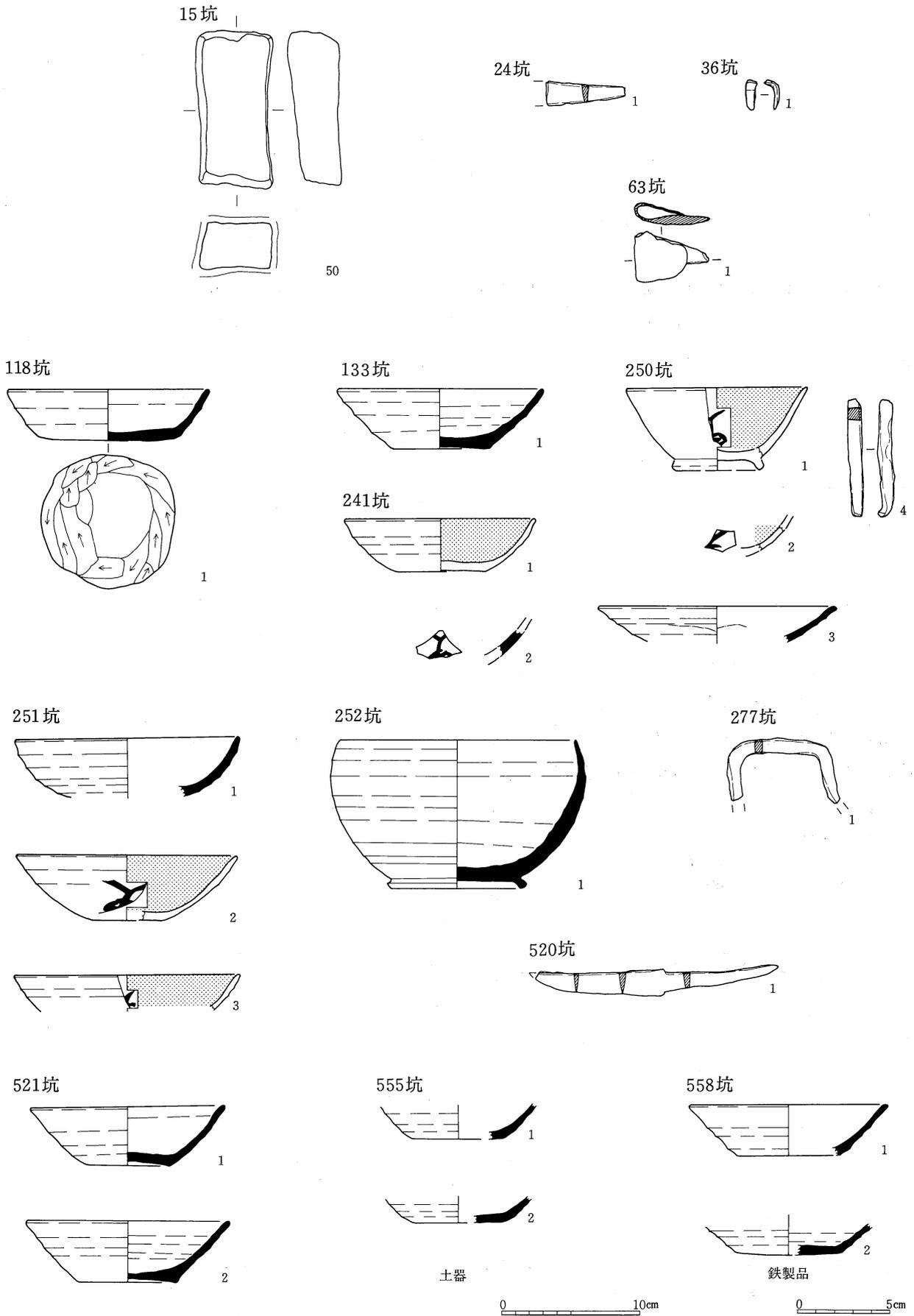


図193 土坑 (6)

1・2号畑址 (図195、PL198)

VIII M-9 周辺に位置する。II A 1層で検出された。一帯は部分的に I E 層の砂層部分が本址の中央を覆い、これを剥ぐことによって検出された部分もある。黒褐色土の地山に、I E 層土(橙色土)が、幅50~80 cm を持って、東北東から西南西に伸びて一定の範囲で認められ、さらにこれに直行する同様な広がり方が北接して確認された。その状況から畝状の遺構と判断し、後者を1号、前者を2号畑址とした。

18・19・34号住居址、58号掘立柱建物址、2・16号溝址に切られる。検出された範囲は1号畑址で、約東~西28 m、南北10 m、面積約300 m²をはかる。畝は図示しえなかったが、南東側で部分的に薄い同様の覆土の広がり方が認められている。さらに西側は検出面を下げすぎたために消失してしまった。畝間は1.2~1.5 m、高さは10 cm 前後である。本址の特長は長い畝にある。一方2号畑址は約東~西10 m、南北3 m、面積約30 m²をはかる。畝はさらに北西に広がる可能性が認められる。畝間は1.2~1.5 m、高さは5 cm 前後である。

1・2号畑址が同時に存在したかどうかは調査段階で明確にできなかった。検出状態に恵まれたこともあり、実際の広がりはずかめないものの、それでもかなり広範囲にわたって畑が広がっていた可能性はある。出土遺物は検出されなかった。

時期 I E 1層のあり方、遺構の重複関係から少なくとも4期以前の所産と思われる。さらに、それに見合った周辺の遺構の時期を考慮すれば1段階あたりが妥当といえる。

3号畑址 (図196、PL199)

VIII Y-24 周辺に位置する。II A 1層で検出された。東側は検出面がII A 2層であるため消失した。I E 2層の明褐色土が一定の間隔を置いて溝状に認められた点で1・2号畑址と検出状況は変わらない。

116号住居址、64・65号溝址に切られる。63号溝址と重複するが、その前後関係は明らかにできなかった。検出された範囲は、約東~西6 m、南北24 m、面積約144 m²をはかる。畝間は60~80 cm、高さは5 cm 前後で、1・2号と比較して形状・規模の点で異なる。

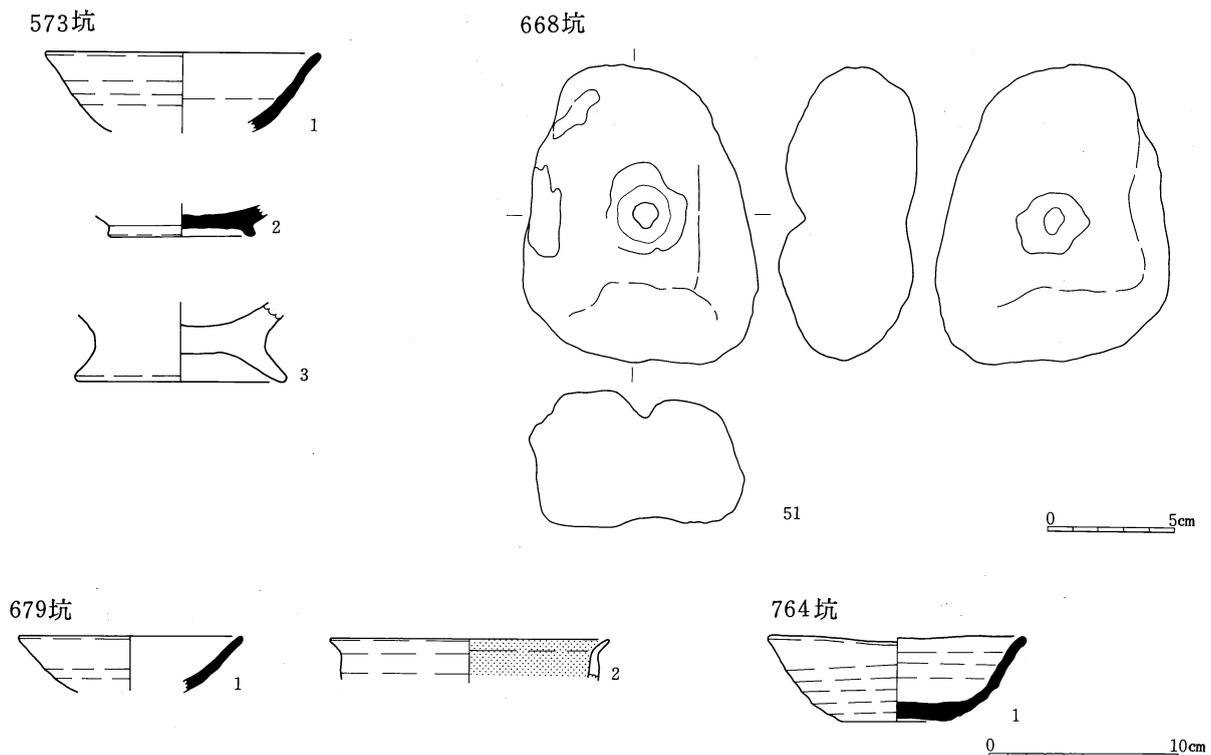
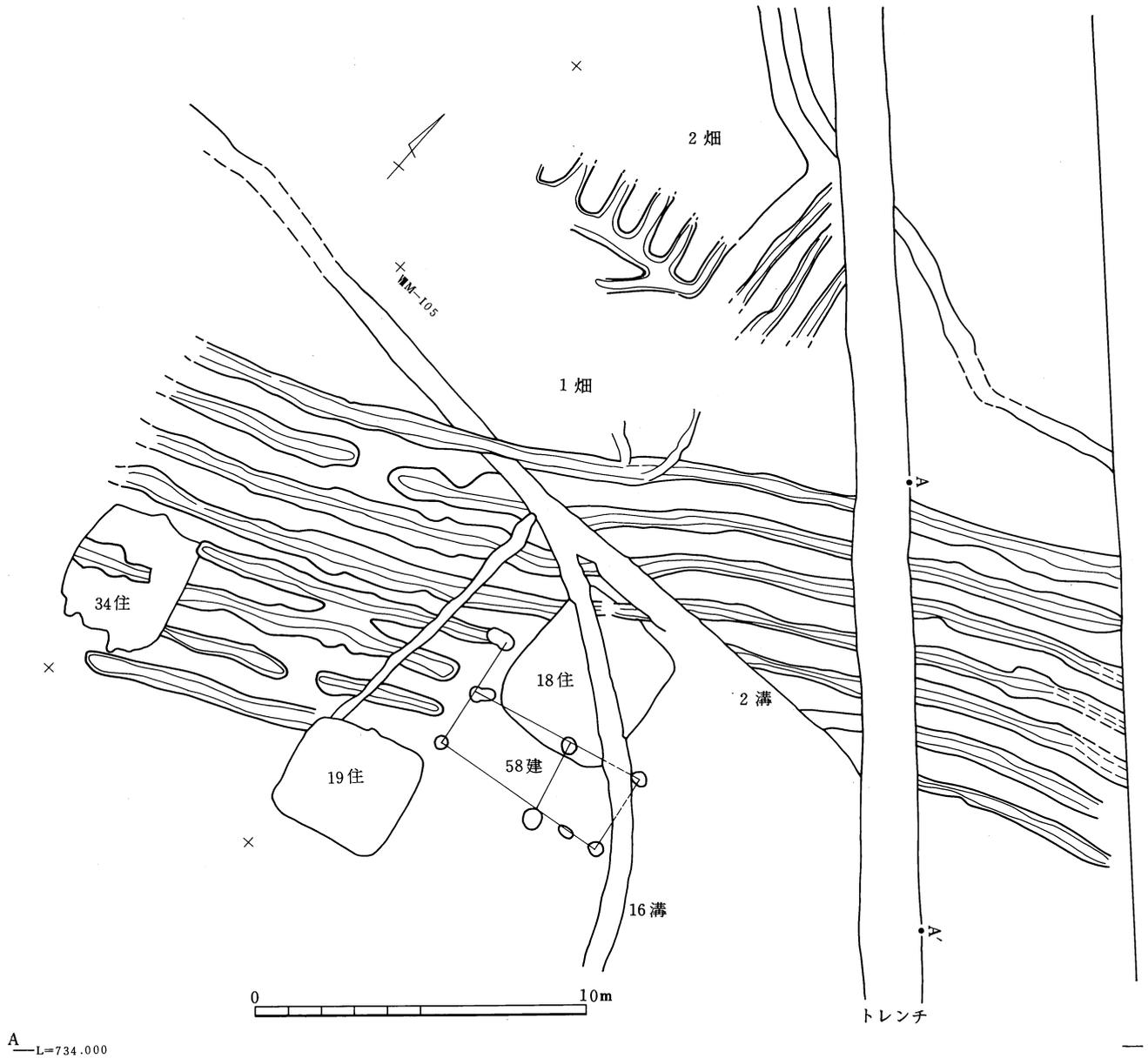
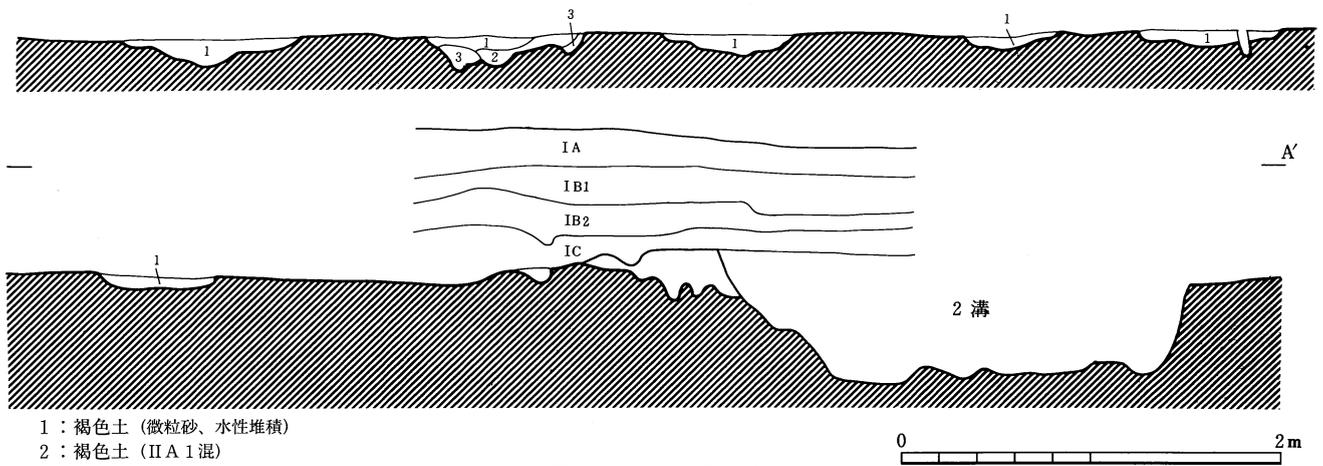


図194 土坑(7)



A L=734.000



- 1: 褐色土 (微粒砂、水性堆積)
- 2: 褐色土 (IIA 1混)
- 3: 黒褐色土 (IIA 1基調)

図195 1・2号畑址

時期 出土遺物など時代を特定できるものは出土しなかったが、検出状況から、1・2号畑址と同様に1期に属すると思われる。

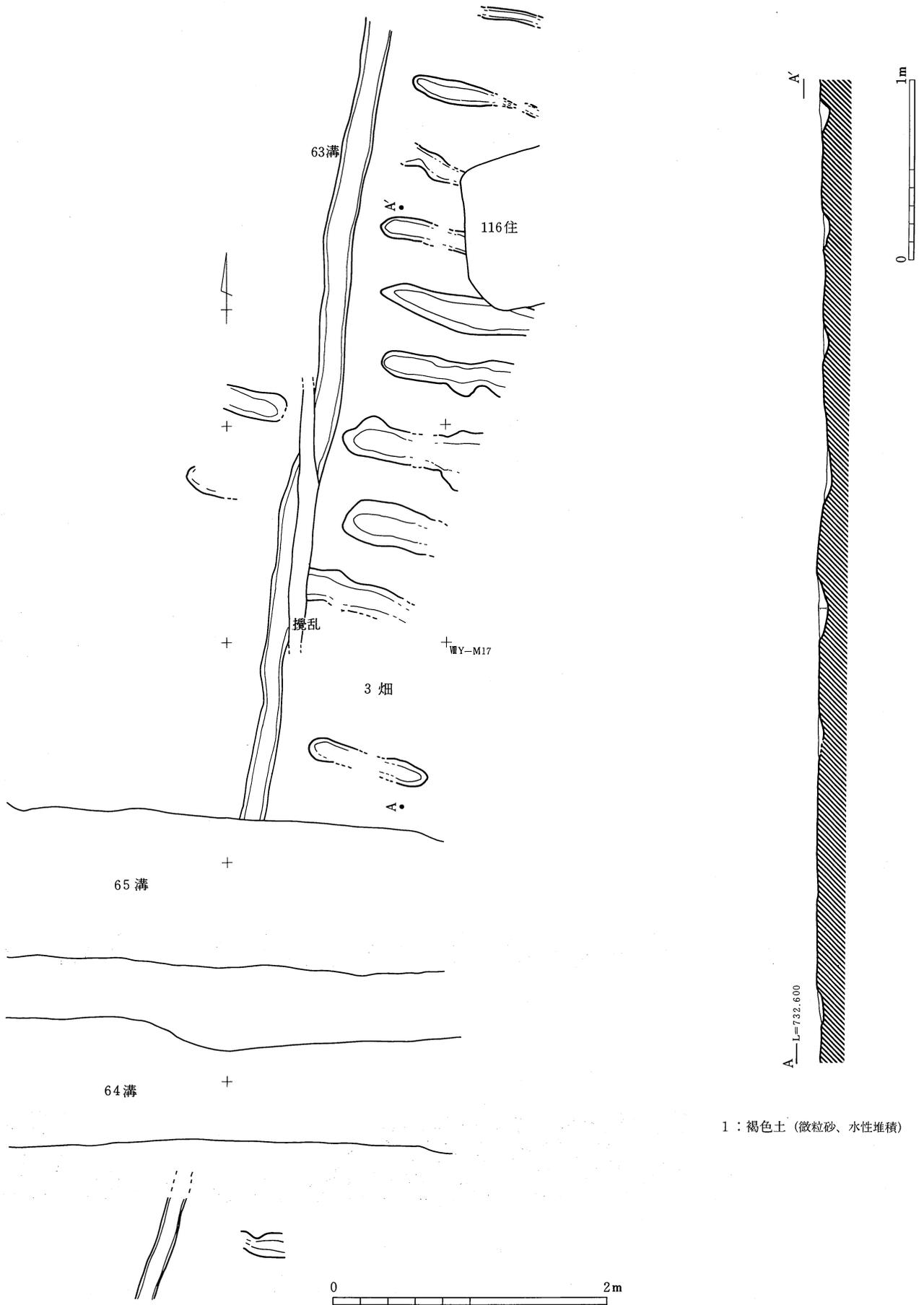


图196 3号畑址・63号溝址

キ 特殊遺構

居住空間として捉え難い竪穴状の遺構と大形の土坑を一括してここで報告する。なお、遺構番号は調査時のままとするが、この場のみ便宜的に1から付けてある。また調査時に、「不明・その他の遺構＝SX」として括られたものも含まれる。

1 (245号土坑) (図197、PL190)

VIII M-17に位置する。II A 1層上面で検出された。上端が不整形、下端で隅丸長方形を呈す。規模は上端で、3.05×3.10 mをはかる。深さは最大92 cm。底は平で、断面形は鍋底状を呈し、上端付近で対になって小規模のテラスが認められた。覆土は全体に砂質で、水流による堆積が考えられる。底部は部分的に「ヨシ」のような炭化した茎が若干認められ、焼土も部分的に認められた。性格は当初井戸状のものと考え調査したが、井戸としては浅いほりこみで、不明といわざるをえない。

2 (SX 0 1) (図197)

V Y-04に位置する。II A 2層上面で検出された。住居址とするのには小形で、覆土が周辺の住居址とことなり砂層が認められたため「不明・その他の遺構」として扱った。形状は隅丸方形を呈し、規模は上端3.0×3.2 mをはかる。覆土は、平均的にみて、黒褐色土・砂・礫と同心円状の堆積を示していた。底はやや南西に向かって傾斜し、中央に小さな凹凸があるものの、おおむね平坦であったが、床面といえるような堅緻な部分や整形は認められなかった。下部で鉄分の沈着が認められた。性格は井戸、水利施設などの可能性がある。遺物は認められなかったが、覆土の状態から奈良～平安時代に帰属すると考えられる。

3 (118号土坑) (図197、PL189、全体図表記118)

V T-23に位置する。II A 2層上面で検出された。南西側で5号住居址と隣接する。形状はほぼ円形で、規模は上端220×220 cm、深さ約1 mをはかる。断面形は播り鉢状を呈す。井戸状の遺構とも考えられるが確証はない。

4 (20号住居址) (図197、PL161)

II A 1層中で検出された、平面形状は東壁に張り出しを持つ不整形な長方形を呈す。覆土はII A 2ブロック混じりの黒褐色土が主体で人為埋没と思われる。明瞭な床面といえるものは認められなかったものの、掘り方は認められた。規模形状から、居住空間としての可能性は薄いと推察される。遺物は出土しなかったが、覆土から平安期に伴うものと考えられる。

5 (789号土坑) (図198、PL192・256、全体図表記は789)

II A 1層で検出された。形状は方形を呈し、規模は上端で3.4×3.3 m、底で長方形を呈す。深さ155 cmで中段に一部壁を削り取った部分が対になって認められた。覆土は1～3層がI E層を基調とし、ほとんどの遺物はこの層から出土した。4層は焼土ブロックを多く混入し、焼土の廃棄も考えられる。5層以下はII A 2と黒褐色土の互層状態で、人為的な埋没が示唆される。

遺物 土器の全体量は、須恵器6以上(1)・甕1・中形甕1・甕の把手1(9)、土師器内面黒色坏碗9以上(2・3・4)・蓋1(5)・鉢1(8)、灰釉陶器皿2(6・7)個体分が出土している。金属器は不明な鉄製品(10)が出土している。1・2は「𠄎」、4も同一文字と思われる墨書が書されている。

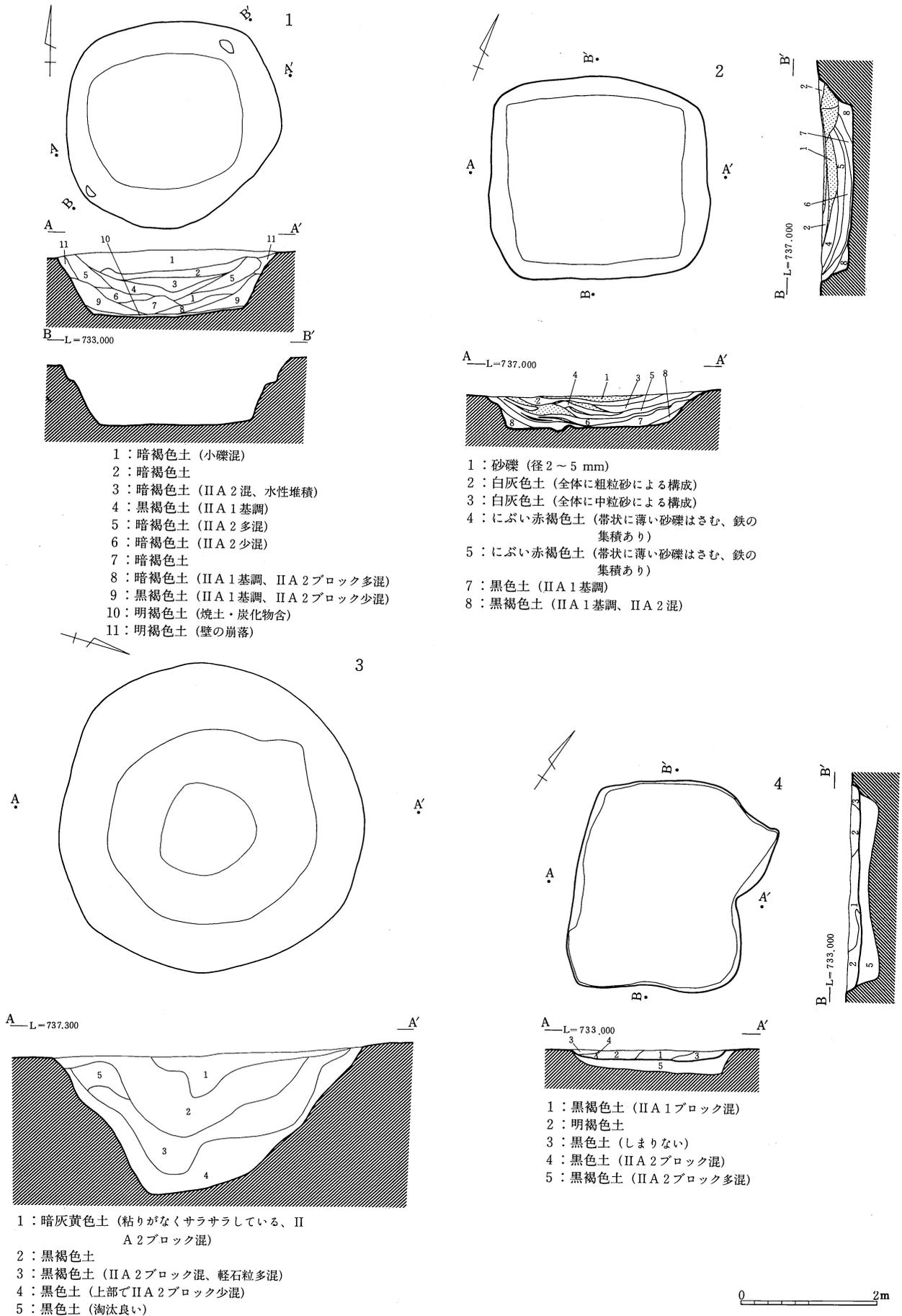


図197 特殊遺構 1 ~ 4

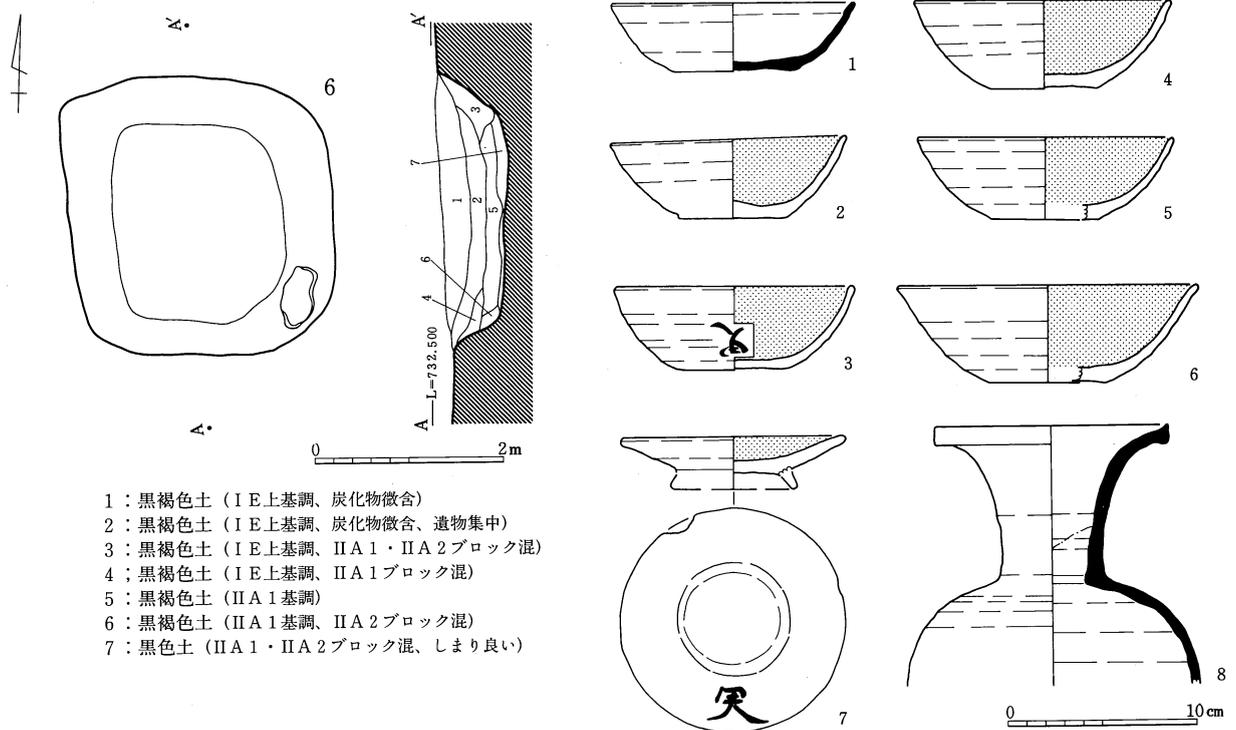
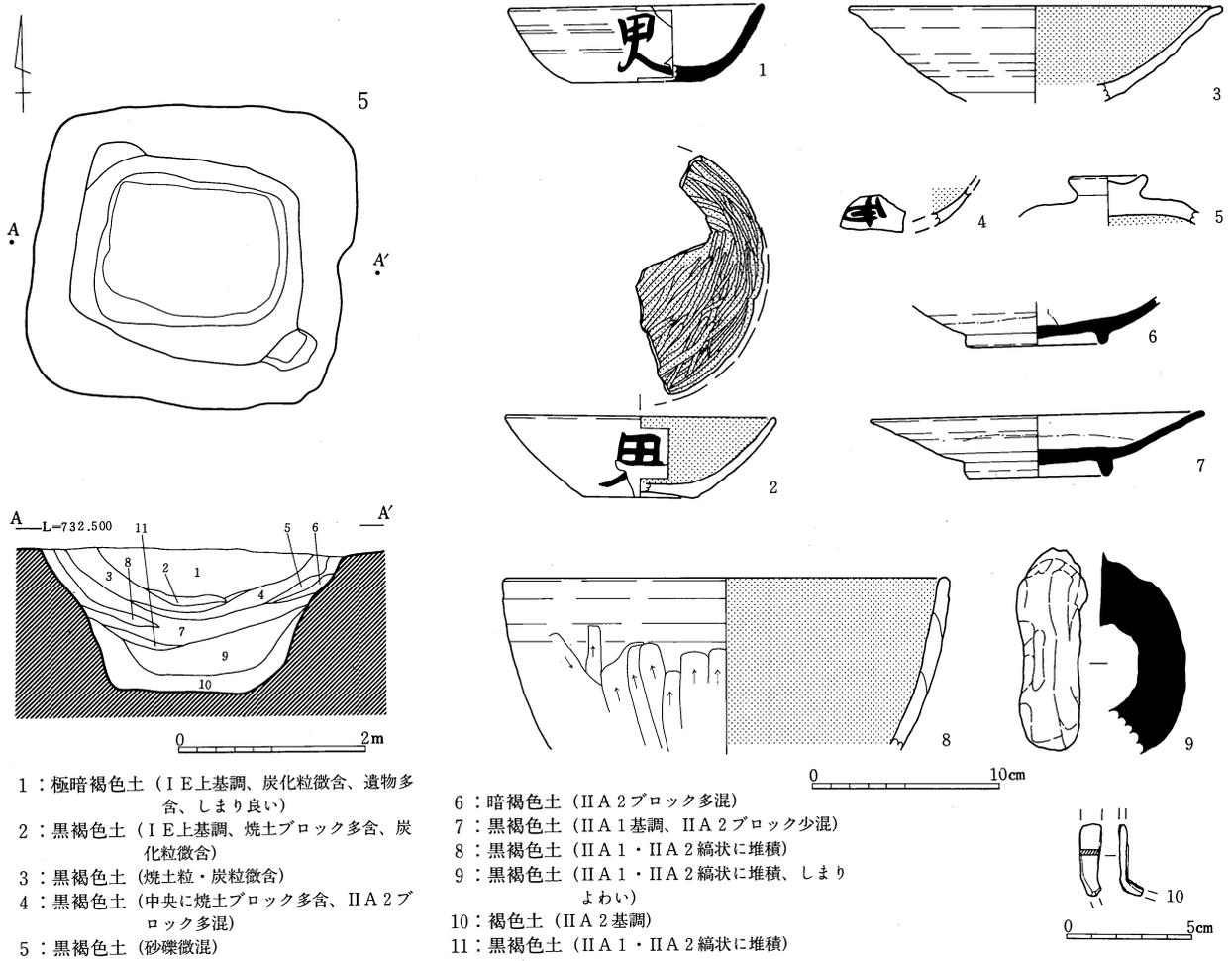


図198 特殊遺構5・6

時期 7～8段階と思われる。

6 (26号住居址) (図198、PL161・256、全体図表記は26住)

II A 1層で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。遺物は2層に多く認められた。床面はなく、掘り下げた地山面が底となった。諸施設はない。壁の南東隅に段状に削り取った部分が認められた。居住空間というよりは、作業場的な遺構であろうか。

遺物 土器の全体量は、須恵器坏2 (1)・甕1、土師器甕1・内面黒色坏8 (2～6)・皿1 (7)、灰釉陶器長頸瓶1 (8) 個体分が出土している。3・7は墨書「天」が書されている。8は東濃産で、12号住居址・特殊遺構5間で接合している。

時期 8段階と思われる。

7 (134号住居址) (図199、PL170、全体図表記は134住)

II A 2層上面で検出された。形状は方形を呈し、覆土は暗褐色土にII A 2ブロックの混入が認められるため人為埋没と思われる。遺物は完形に近い内面黒色碗3点 (2～4)・甕 (5・6) が、1層と2層の境で出土している。底は凹凸が認められカマドなどの諸施設もない。規模も2.4×2.4mと小さく本来なら住居址の範疇に入らないものである。

遺物 出土土器の全体量は、須恵器高台坏1・坏 (1)、土師器甕1 (6)・ロクロ小形甕1 (5)・内面黒色坏7・碗4 (2～4) 個体分が出土した。3・4は墨書「天」が書されている。

時期 遺物からは9段階頃と考えられる。

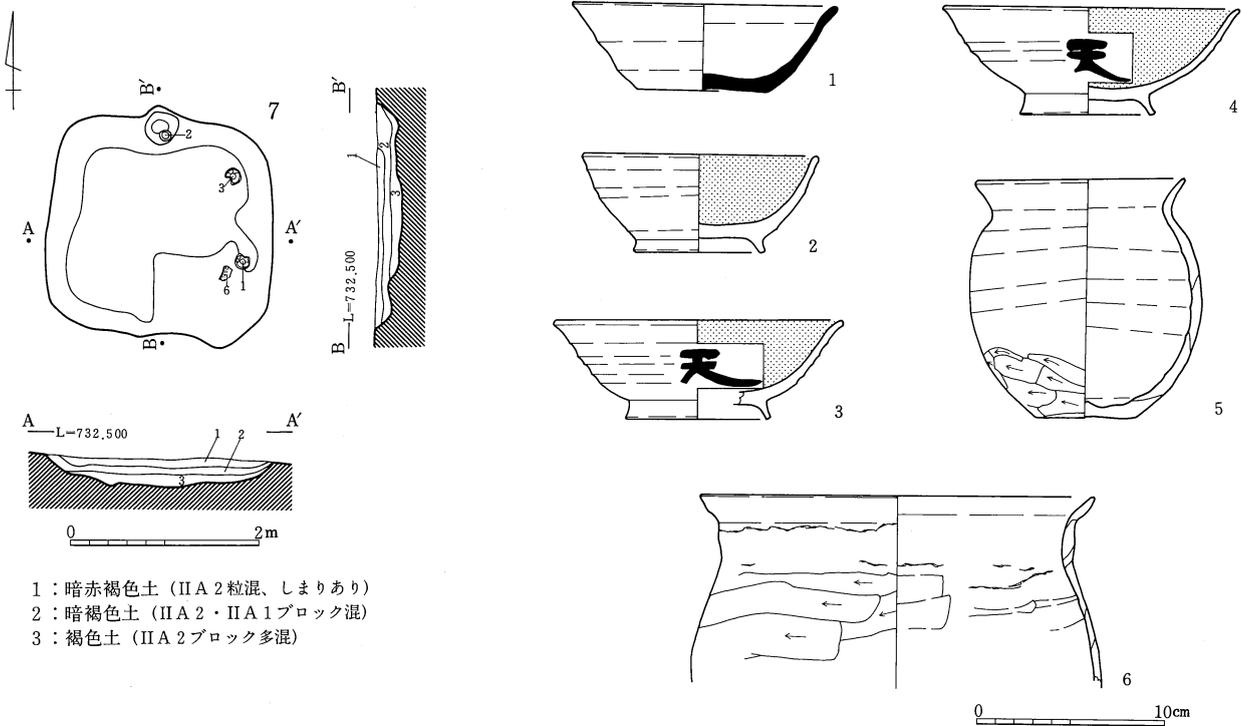


図199 特殊遺構7

8 (SX-04) (図200、PL199)

VIII Y-12に位置する。II A 2層上面で検出された。楕円形の落ち込みの周囲に、それを取り囲むように数基のピットが確認された。検出時には全体に地山と異なった土が楕円形状に認められ周溝状の落ち込みは確認されず、トレンチ調査の段階で溝がめぐる特異な遺構と認められたものである。3.8×2.6 mの楕円形の中央部が高く掘り残され周囲は溝状を呈す。中央部の台上には1.8×0.5 mの長方形の落ち込みが認められた。軸方向は北から若干ずれるが、意図的に配置されたことが周囲のピットからも伺える。ピットは溝部の覆土1層と同様の土が入っていた。ピット4については覆土から切り合い関係は認められず張り出し部と考えたい。一見して小形の「円形周溝墓」的であることから墓址的機能が考えられたため、覆土をサンプリングして、リン酸・カルシウム分析を、パリノ・サーヴェイ社に依頼した。

分析方法はSK572 (本文P、532参)と同様である。資料採取は3か所で行った。資料1は遺構内4層、資料2は中央部の台上直下、資料3は溝部の側面遺構外である。結果、リン酸については順に1.66 mg/g、0.54 mg/g、0.73 mg/g。カルシウムについては順に1.08 mg/g、0.15 mg/g、0.67 mg/gであった。したがって、遺構内では遺構外よりもリン酸・カルシウム含量の高い内容物の影響が考えられるとの回答ができたが、遺構内の資料点数が1点と少なく判断し難いとの解答であった。遺物は検出面において黒色処理の坏の小片がわずかに出土したのみである。また、遺構の重複も認められないことから遺構の時期は不明であるが、覆土から平安時代以前と思われる。

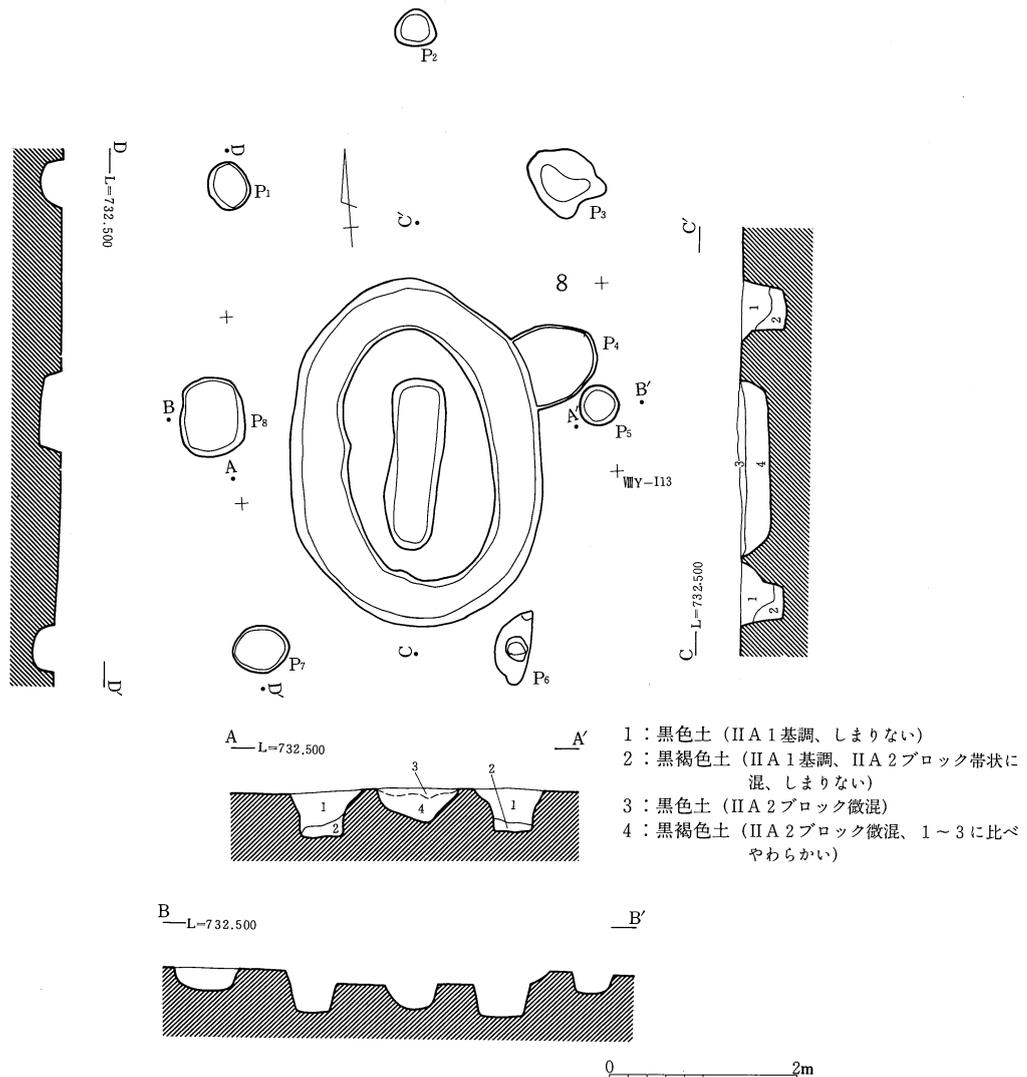


図200 特殊遺構 8

ク 遺構外出土遺物 (図201~203、PL256)

古墳時代出土遺物 (図201) は土師器坏2 (2・3)、S字甕1 (1)、甗3 (4~6)、甕1 (7)、盤1 (8) が出土している。(甗は117号住居址・盤は112号住居址付近から出土している。)

奈良~平安時代 (図202-1~14は南端部の段丘部。15~32はV・VII・VIIIグリッド) 出土遺物は須恵器高台坏2 (15・16)、坏3 (1・2・17)、短頸壺1 (6)、長頸壺1 (5)。内黒坏2 (3・18)、碗5 (4・19~22)、皿2 (23・24)、両黒1 (25)、坏・碗不明1 (26)、甕1 (27)、土師質小皿1 (7)、坏2 (8・9)、碗1 (10)、羽釜1 (11)、灰釉碗1 (28)、皿1 (29) が出土している。鉄製品は鎌1 (12)、鉄鍬1 (30)、刀子1 (32)、不明鉄製品1 (31)、鉄滓2,579g、銭 (13・14) は2枚出土している。13は神功開宝 (765年、PL226)、14は開元通宝 (唐・621年)、である。11は「大」が刻書されている。18・26は墨書が書かれている。18は「中」と思われるが、26は判読できない。28は東濃産 (大原2) で漬け掛けされ、29は黒笹90窯式でハケ塗りされている。

表採遺物 (図203) は須恵器坏4 (1~4)、広口甕1 (11)。土師器内黒坏3 (5~7)、皿1 (8)、灰釉碗1 (9)、皿1 (10) が出土している。金属器は刀子1 (12)、紡錘車軸1 (13)、ほかに鉄滓206gが出土している。3・4・7・8は墨書が書かれている。3・4・8は「呔」に類似すると思われるが7は判読できない。

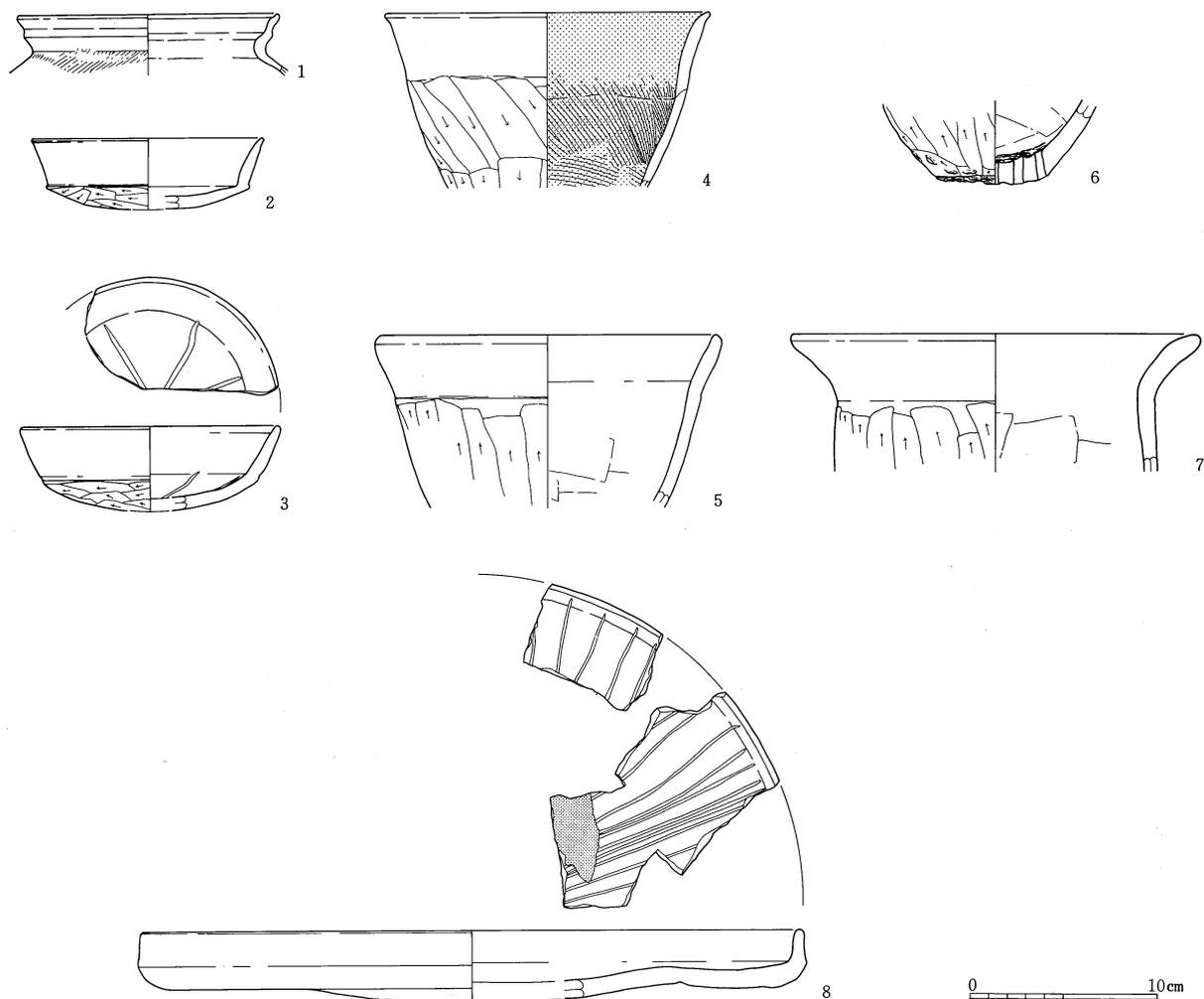


図201 遺構外出土遺物 (1)

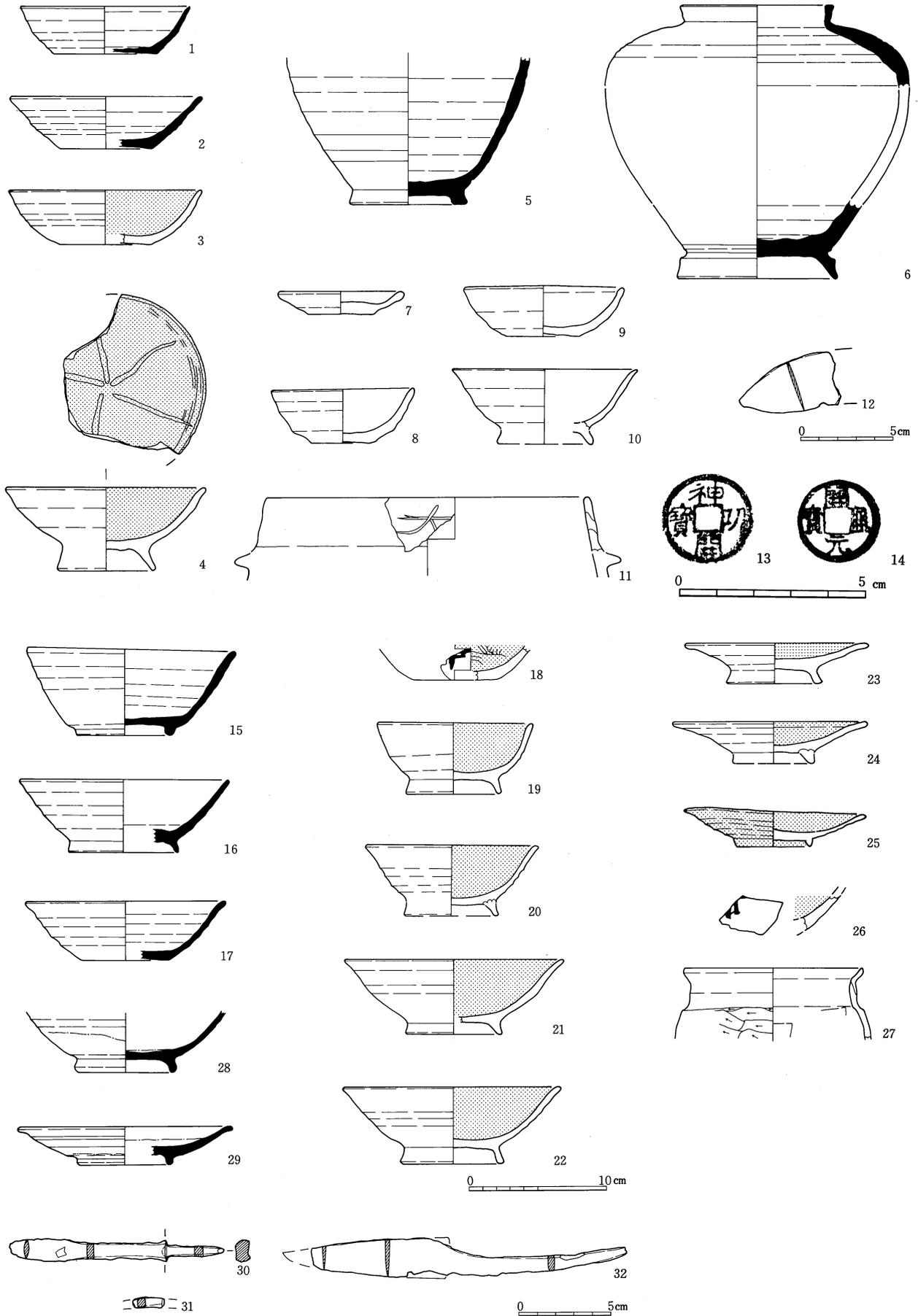


図202 遺構外出土遺物 (2)

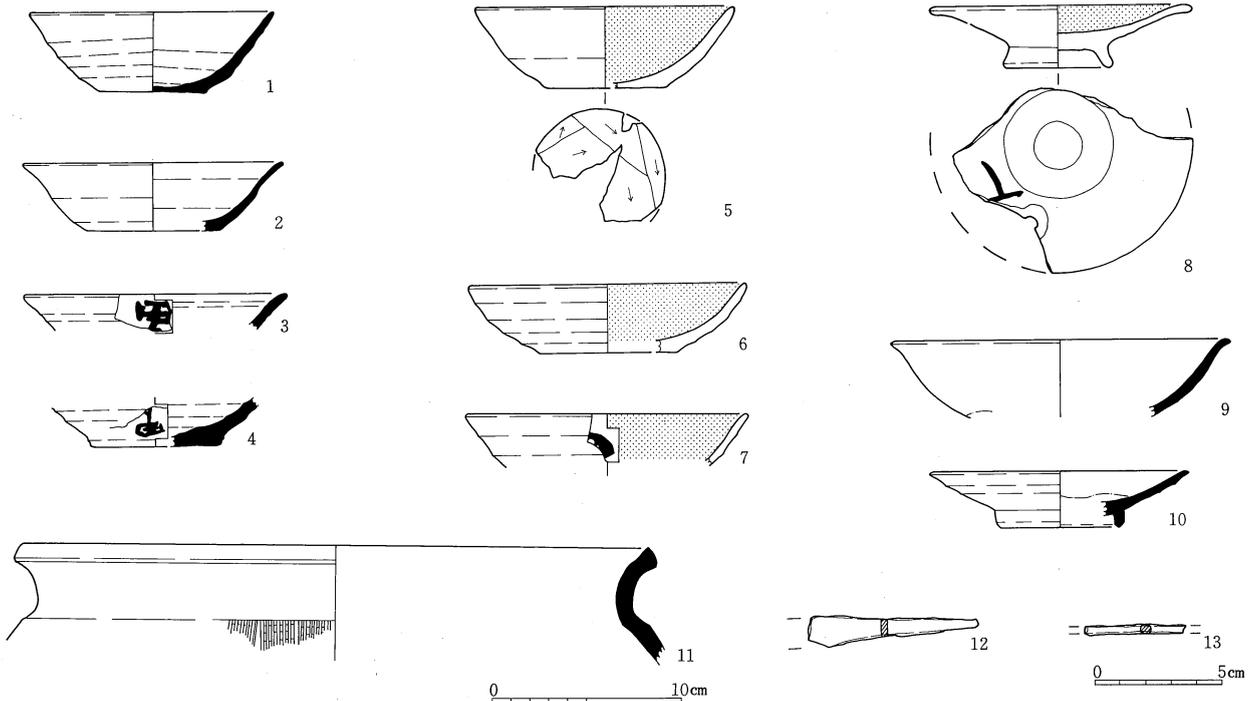


図203 遺構外出土遺物(3)

(5) 中世以降の遺構と遺物

本地区ではある一定のまとまりを持った中世の集落址が検出された。その分布は約100 mの間隔をおき明確に3地点(3群)に区分される。

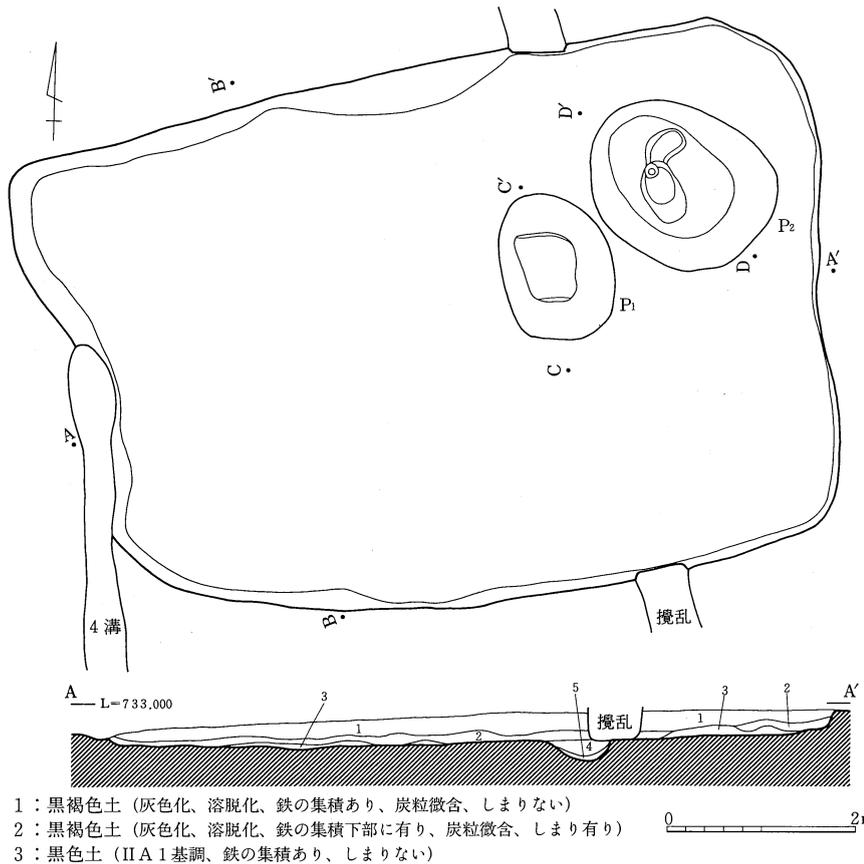
1群—38・17号住居址、1号柵列、61号土坑(井戸)、42号溝址、そのほか小ピットで構成される。とくに42号溝址は区画溝で、38号住居址の南面で一旦溝が切れていることが確認された。いずれも覆土中にID層の堆積が認められる点で、周辺の平安期の遺構とは時期が異なる(検出段階でも両者を分けることは可能であった)。帰属時期は38号住居址出土遺物から13~14世紀前半頃が与えられている。

2群—1・2・8号住居址、1・2掘立柱建物址、2~7号柵列、3号土坑(井戸)、24・49号土坑、溝址・小土坑などで構成される。このうち2号掘立柱建物址は小竪穴を持つ建物址である。いずれもID層で検出され、IC層を基調とする土が覆土中に認められる。1群より新しい段階の遺構であることに間違いはない。遺物の出土をみないため時期決定は難しいが、長野県中信地方にみられる小竪穴をともなう建物址の変遷を参考とするなら、その帰属時期は13~14世紀ごろになるものと思われる。

3群—3~7・18・19・21・45号掘立柱建物址、160号住居址、1(井戸?)・2・214号土坑などで構成される。このうち掘立柱建物址は2間×3間総柱式を基本とし、庇が廻るものは建て替えが行なわれている。かなり規模の大きいものである。柱穴の覆土の基本土層は調査時に捉えられなかったので土層からの时期的な判断のための資料は提示できない。遺構からみれば、18号掘立柱建物址のような長方形を呈す大形の建物址は14~15世紀頃の特長を有していることが指摘でき、一方160号住居址は38号住居址と構造的にみれば、柱穴の配置に差異が指摘できる。

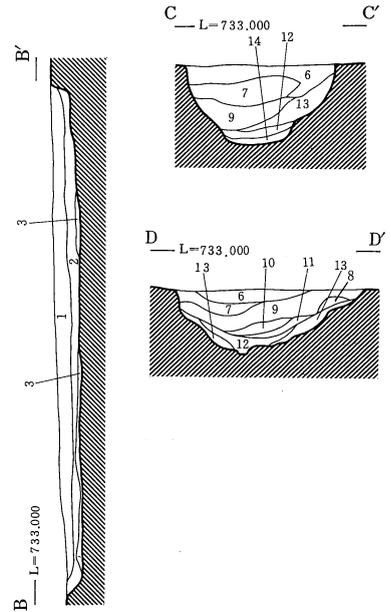
各群の遺跡における位置は、1群が平安期の住居址の占地する場所に認められ、2・3群が平安期の遺構が作られなかった低地部に占地している。

さらに、この段階になり遺跡内を溝が走るようになり、とくに43・64・65号溝址は意図的で東西南北を意識して作られたようである。同様な溝は2号溝址にも認められ、65号溝址と平行関係にあり、そのあいだの距離は110~120mをはかる。これらの溝を区画溝と捉えるなら、かなり規模の大きな事業であったことが暗示されよう。

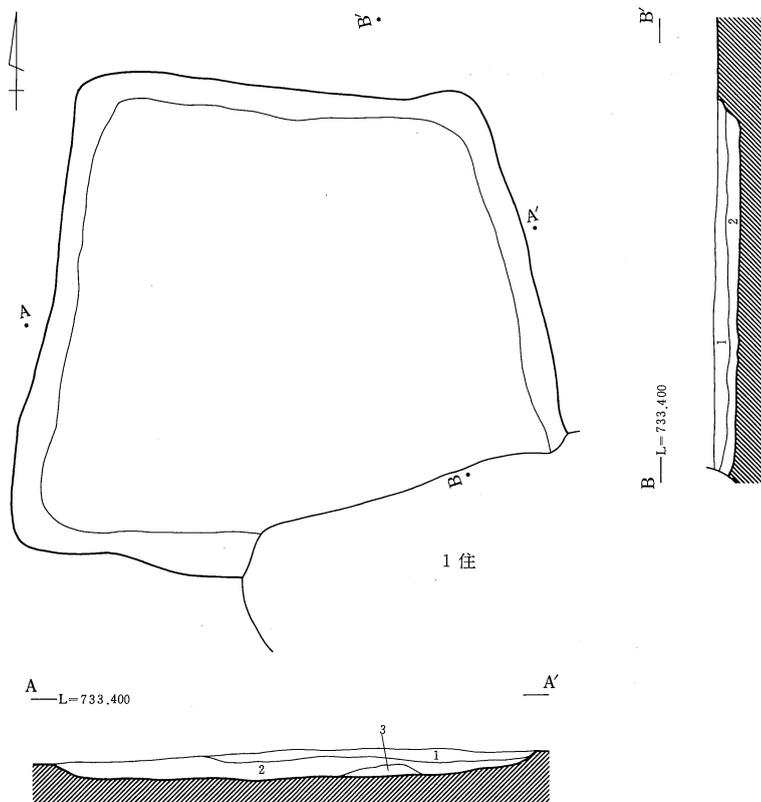


- 1: 黒褐色土 (灰色化、溶脱化、鉄の集積あり、炭粒微含、しまりない)
- 2: 黒褐色土 (灰色化、溶脱化、鉄の集積下部に有り、炭粒微含、しまり有り)
- 3: 黒色土 (IIA 1基調、鉄の集積あり、しまりない)

図204 1号住居址



- 4: 6と同様
- 5: 7と同様
- 6: オリーブ褐色土 (溶脱化、鉄の集積あり)
- 7: 黒褐色土 (灰色化、料の集積あり)
- 8: 黒褐色土 (鉄の集積あり)
- 9: 黒褐色土 (灰色化、鉄の集積あり)
- 10: 褐色土 (砂に近い)
- 11: 砂
- 12: 黒色土 (上部砂混)
- 13: 黒褐色土 (鉄の集積あり)
- 14: 暗褐色土 (IIA 2・IIA 1の混土)



- 1: 黒褐色土 (灰色化)
- 2: 黒褐色土
- 3: 黒色土 (IIA 1基調、鉄の集積あり、しまりない)

図205 2号住居址

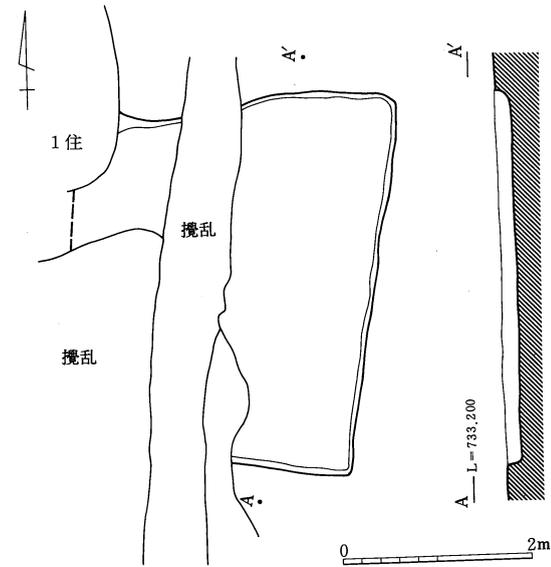
ア 住居址

1号住居址 (図204、PL174)

I D層で検出された。2号住居址を切り、4号溝址に切られる。覆土は灰白色土を主体とし全体に浅く、床面にIIA 2層を基調とした黒褐色土が薄く認められる。床は掘り下げた地山をそのまま利用し、小さな凹凸があり、堅緻でない。壁は明瞭でなく緩やかに立ちあがる。ピットは2基確認され、両者ともIIA 2層を基調とした黒褐色土の覆土に砂層を伴う点が特徴である。遺物は鉄滓が出土している。火床、柱穴などは確認されていない。

遺物 遺物は鉄滓(107g)が出土している。

時期 中世と思われるが時期は特定できない。



1：極暗赤褐色土（I C基調、鉄の集積あり）

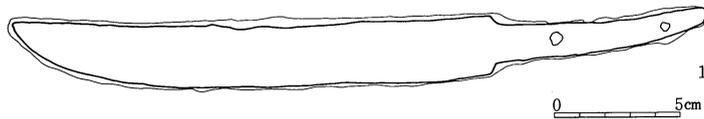
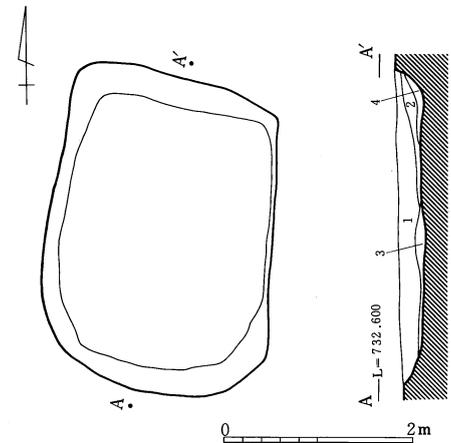


図206 8号住居址



- 1：暗褐色土（II A 1ブロック混）
- 2：暗褐色土（軽石粒混）
- 3：黒褐色土（灰色化、鉄の集積あり）
- 4：黒色土（3類似、ボソボソしている）



図207 17号住居址

2号住居址 (図205、PL175)

I D層で検出された。1号住居址に切られる。覆土は1号住居址と同色調を呈すが、砂の混入が本址の方が少ない。構造的に1号住居址と類似している。壁は小さな凹凸を持ち堅緻な部分は認められない。掘り抜いた地山をそのまま利用し、遺物は土器小片が出土したのみである。

8号住居址 (図206、PL175・226)

I C～I D層で検出された。西側は水田造成時の攪乱を受けていた。床面は、I C層を基調としたオリーブ褐色土の覆土を取り除いた面があり、堅緻面などは認められなかった。諸施設は検出されていない。

遺物 短刀1点(1)が出土したのみである。短刀は平造りでわずかに反る。茎には目釘穴が2穴認められた。

時期 中世と思われるが時期は限定できない。

17号住居址 (図207、PL175)

II A 1層上面で検出された。43号掘立柱建物址を切る。覆土はI C層に近似した暗褐色土を基調とする。床面は明瞭でなく、壁の立ち上がりも緩やかであった。居住空間とは判断し難い。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏3片(1)・甕1片・長頸瓶1片・土師器ロクロ甕1片・内面黒色碗1片・皿1片・坏碗不明15片、灰釉陶器2片とすべて小片のみであった。その他鉄滓33gが出土した。

時期 覆土の特徴から中世と思われるが、時期は特定できない。

38号住居址 (図208、PL175・226)

II A 1層で検出された。273号土坑に切られる。覆土はI D層を基調とする黒褐色土主体の自然堆積と思われる。3層中には炭・灰・焼土が集中する部分があり、2層中からは炭化種子(オニグルミ)が出土してい

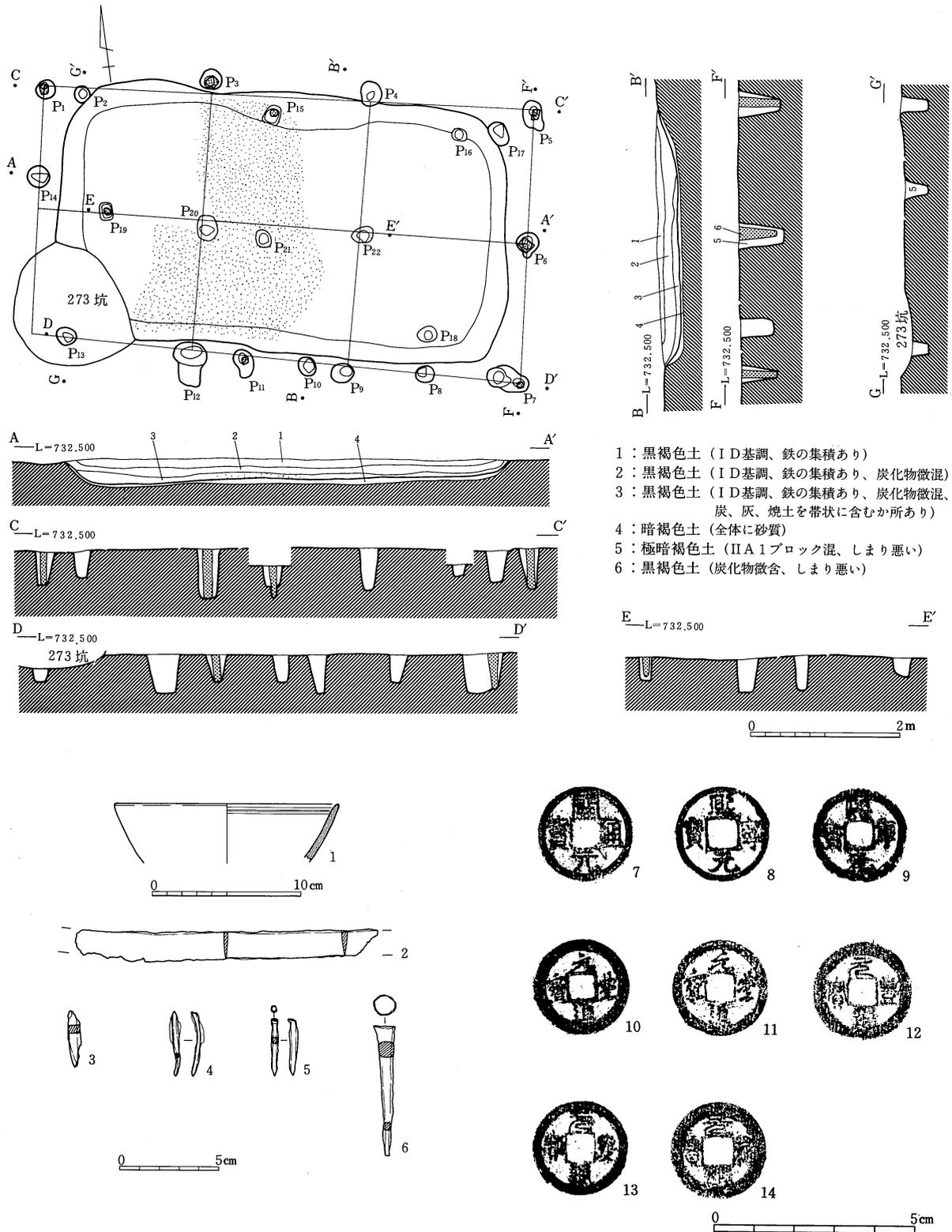


図208 38号住居址

る。また、覆土中から多くの鉄滓が出土した。床は平坦な掘り方の上に薄く暗褐色土を埋め戻し、上面をたたきしめ床面を形成していた。ピットは22基確認された。平面形はほぼ均一で確認された柱痕の平面形はおおむね方形を呈す。このうち P4・P5は全体に比べやや浅く、対面に対になるものがないことから、出入口施設にかかわるピットであった可能性が考えられる。

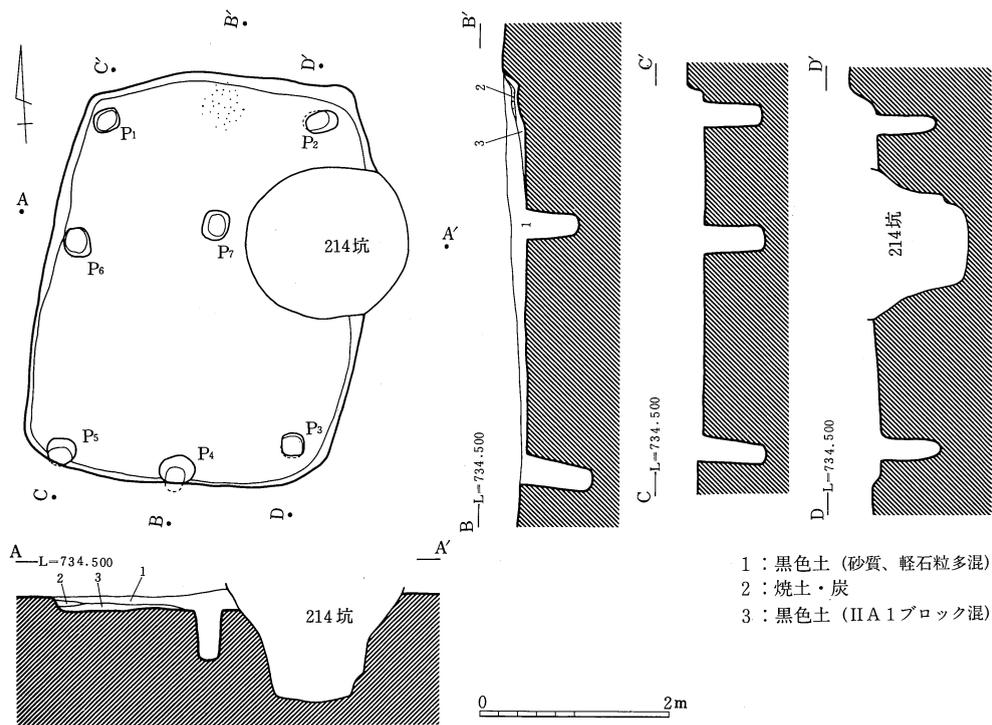


図209 160号住居址

遺物 出土遺物は龍泉窯系の青磁で飛雲文碗1 (1)、同系の青磁で蓮弁文碗2、産地・器種不明の白磁1片が出土した。金属器は刀子1 (2)・釘 (4・5)・筒状の鉄製品1 (6)・器種不明の鉄製品1 (3)、鉄滓315g、古銭8枚 (7~14) が出土し、7は開元通宝 (唐・621年)、8・9は熙寧元宝 (北宋・1068年)、10~13は元豊通宝 (北宋・1078年・12・13は篆書)、14は元祐通宝 (篆書・北宋・1086年) である。ほとんどの遺物は灰・焼土・炭の集中部分から床にかけ、また、西壁付近にかけて出土した。

時期 青磁は13~14世紀前半に比定され、銭は11世紀へはくだらないことから青磁の時期を本址の所産期としたい。

160号住居址 (図209、PL174)

II A 1層上面で検出された。I D層での検出段階で認められなかった。214号土坑に切られる。覆土は黒色土主体で北壁中央付近に、覆土中から焼土・炭の分布が認められた。床は掘り下げた地山面を利用し堅緻面などは認められなかった。ピットは7基確認され、北壁中央部を除いて壁際に3基ずつ存在する。214号土坑に破壊された壁際にも実際には存在していたと思われる。中央のP7がやや浅い他は全体に均一で深い。構造的に38号住居址に近い。遺物は須恵器の甕4片のみである。

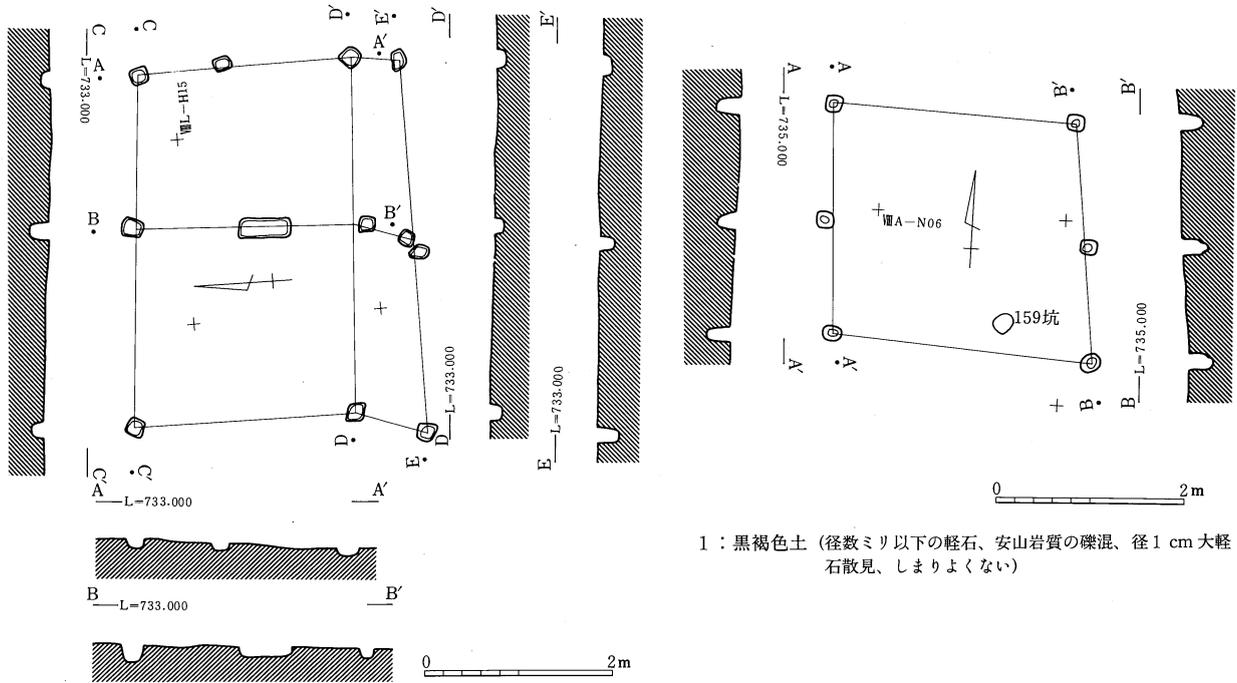
イ 掘立柱建物址

1号掘立柱建物址 (図210)

I D層で検出された。平面形は南面に庇を持つ、1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行3.7m、梁行2.3mで、面積11.14m²をはかる。主軸はE-6°-Sを指す。柱間は東西列1.7~2.1m、南北列0.9~2.3mをはかる。柱穴は方形を基本とし、長方形のものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。柱痕は確認されなかった。

2号掘立柱建物址 (図212)

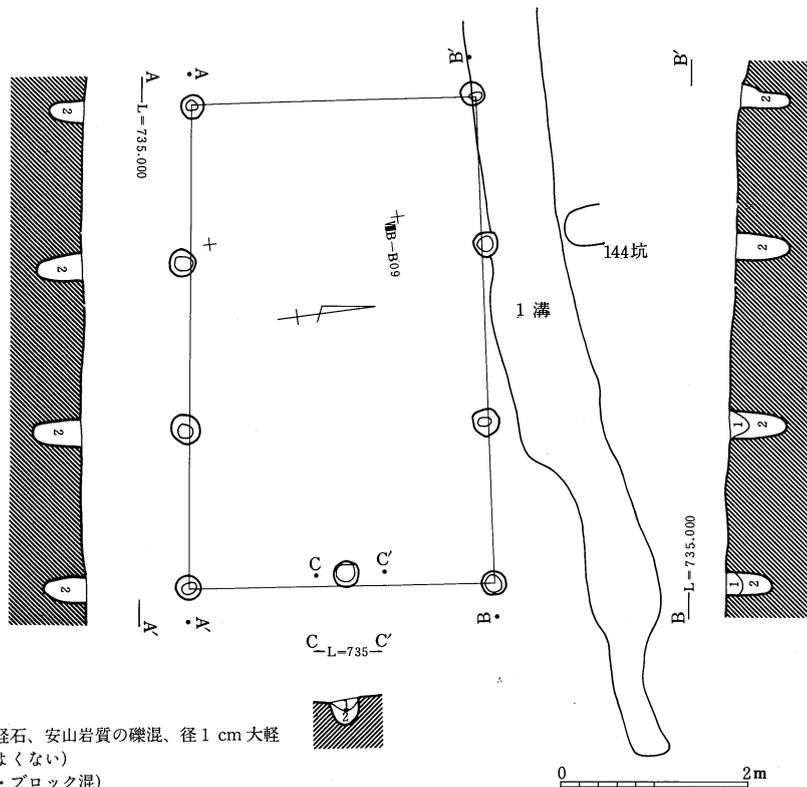
I D層で検出された。中央部をトレンチにて消失される。東西棟で、規模は東西列9.1 m、南北列5.6 m、面積50.96 m²をはかる。主軸はE-3°-Sを指す。柱として通るもの以外にも多くの小ピットが認められ、建て替えが行なわれた可能性も示唆される。南面部には深さ20 cm 強の溝(5号溝址)が同時に検出され本址



1：黒褐色土 (径数ミリ以下の軽石、安山岩質の礫混、径1 cm 大軽石散見、しまりよくない)

1：黒褐色土 (淘汰良く、極めてやわらかい、炭粒少混)

図210 1・4号掘立柱建物址



1：黒褐色土 (径数ミリ以下の軽石、安山岩質の礫混、径1 cm 大軽石散見、しまりよくない)
 2：黒褐色土 (1にI D層粒子・ブロック混)

図211 3号掘立柱建物址

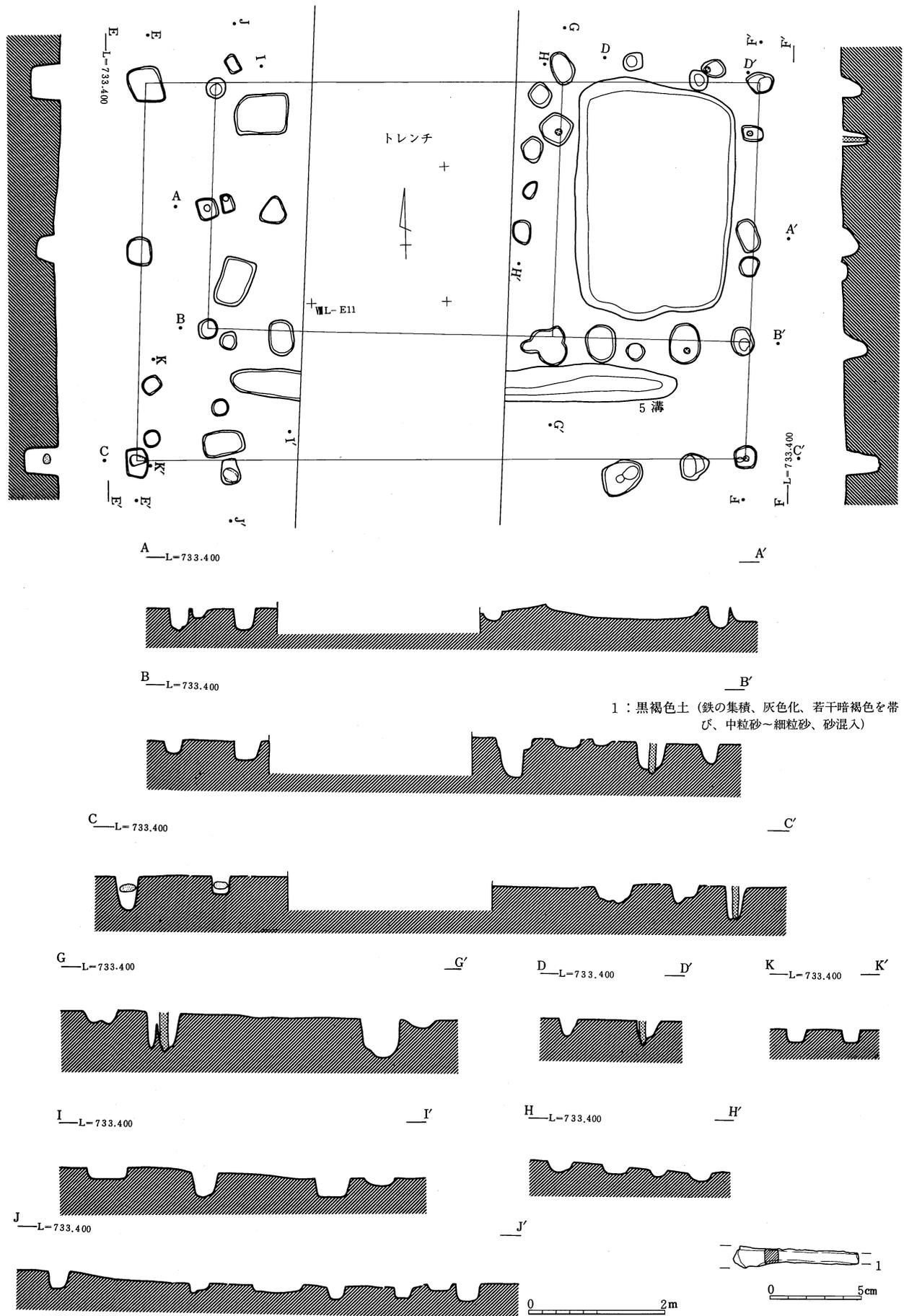


図212 2号掘立柱建物址

に関係したものと判断され、東面部には深さ約25 cmの緩やかな立ち上がりを見せる小竪穴をともなう。柱穴は方形を基本とし、規模はやや不揃いで、歪んだものもある。掘り方の深さは一定でないものの、柱痕が確認できたものは深い傾向が認められる。確認された柱痕は径11 cmほどの円形で、底面から突出したものが多。

3号掘立柱建物址 (図211、PL175)

II A 1層で検出された。1号溝址に切られる。平面形は2間×3間の東西棟、側柱式である。規模は桁行5.2 m、梁行3.2 mで、面積16.31 m²をはかる。主軸はE-5°-Sを指す。柱間は東西列1.6~1.9 m、南北列1.5~3.1 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし均一である。掘り方の深さはほぼ一定である。柱痕は確認されなかった。

4号掘立柱建物址 (図210、PL175)

II A 1層で検出された。平面形は1間×2間の東西棟、側柱式である。規模は桁行2.6 m、梁行2.5 mで、面積6.67 m²をはかる。主軸はN-1°-Wを指す。柱間は東西列1.2~1.3 m、南北列2.6~2.8 mをはかる。柱穴の形は方形を基本としほぼ均一である。掘り方は南に行くにつれ深さが増す。

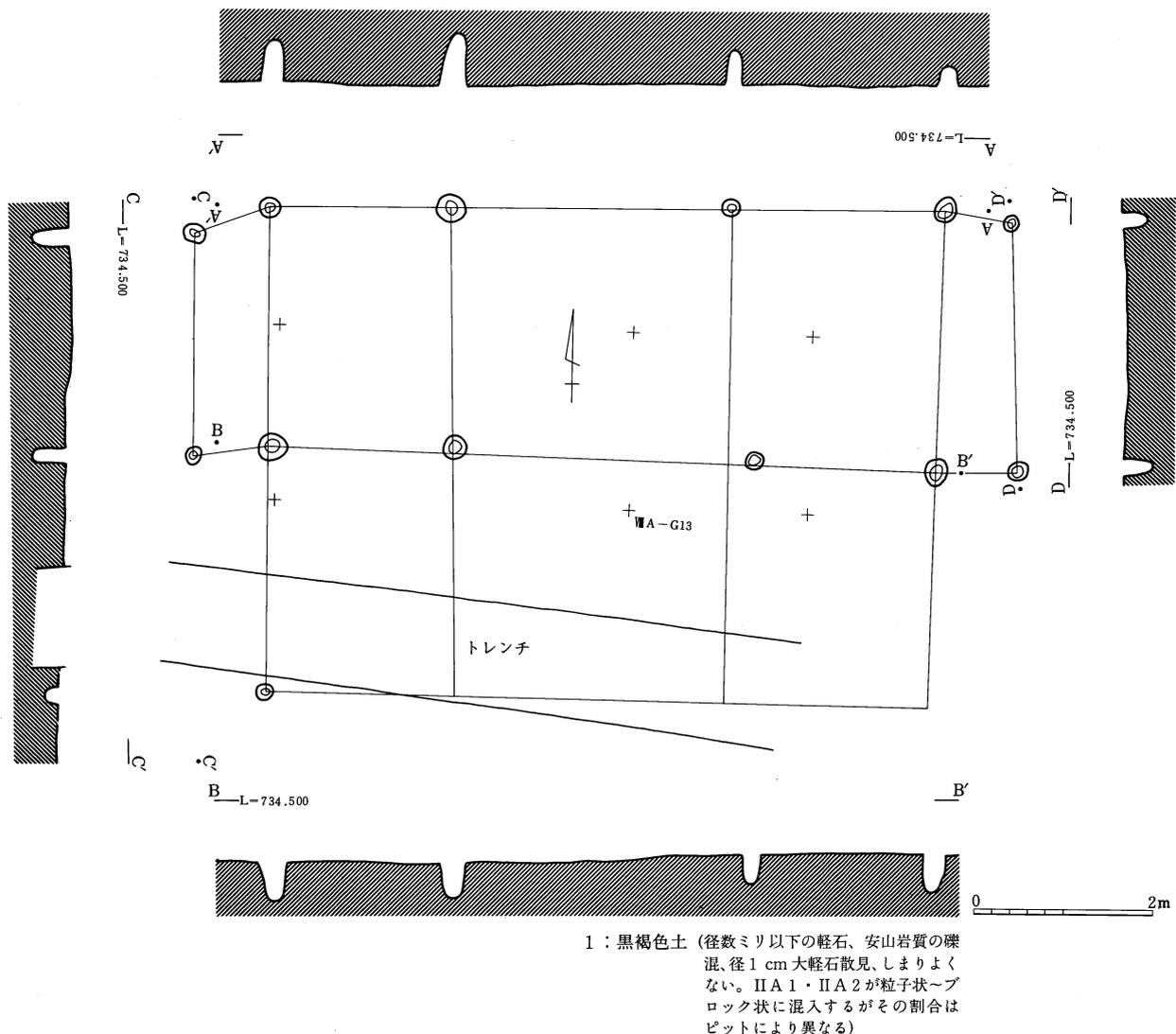
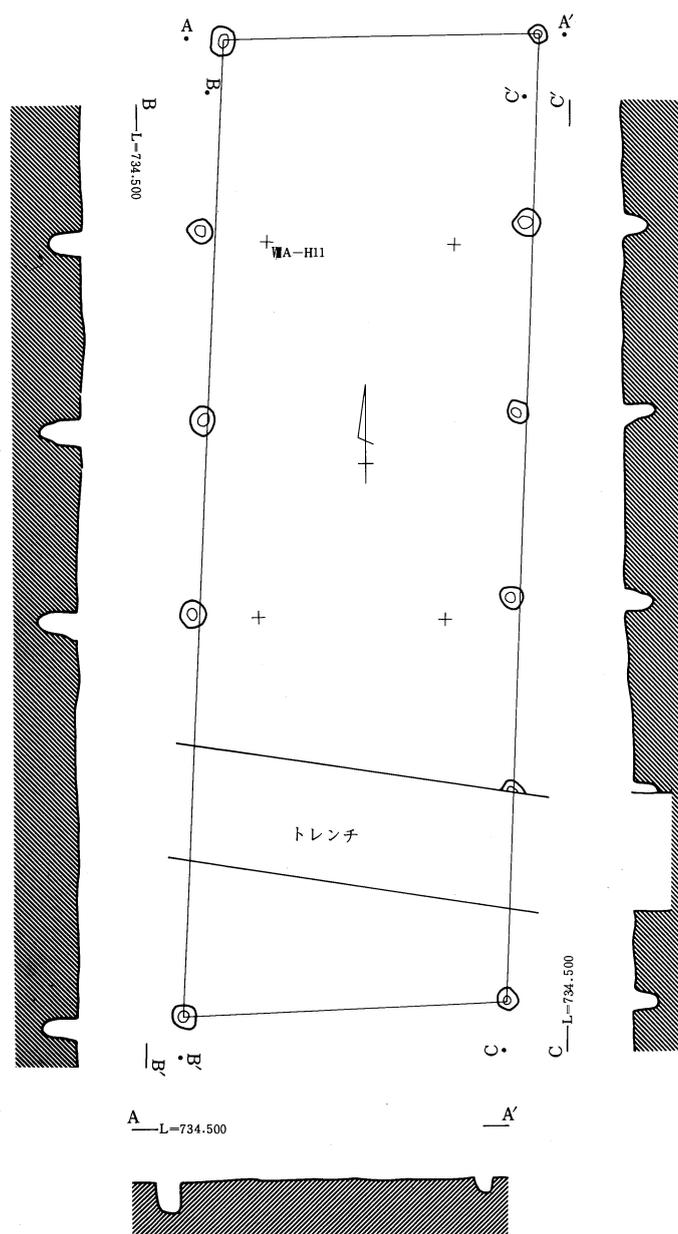


図213 5号掘立柱建物址



1: 黒褐色土 (径数ミリ以下の軽石、安山岩質の礫混、径1 cm大軽石散見、しまりよくない。II A1・II A2が粒子状~ブロック状に混入するがその割合はピットにより異なる)

図214 6号掘立柱建物址

7号掘立柱建物址 (図215)

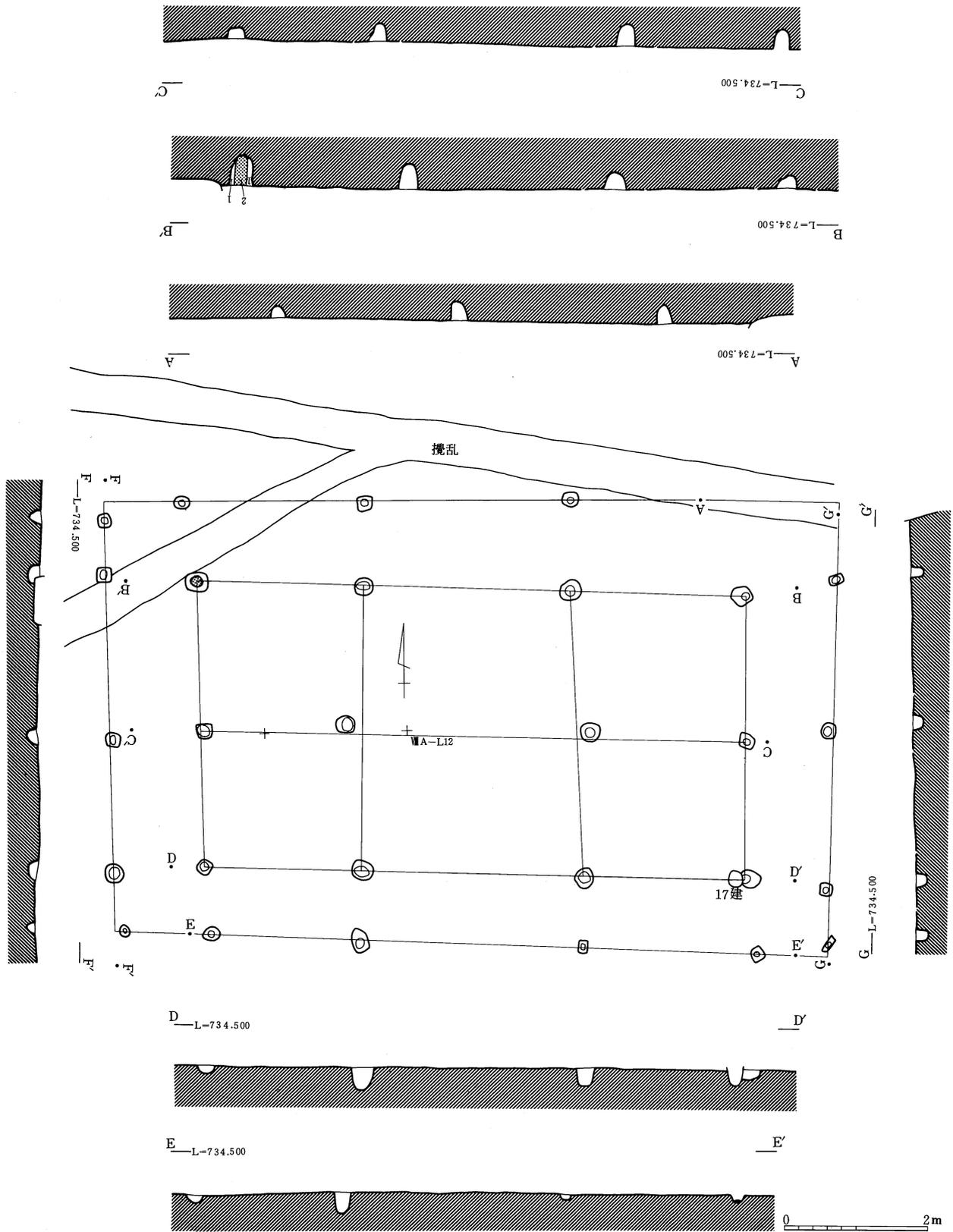
II A 1層で検出された。18号掘立柱建物址に切られ、19号掘立柱建物址を切る。また、19号掘立柱建物址のピットとの併用が認められることから、本址が建て替えられたものと推察される。平面形は全面に底を持つ2間×3間の東西棟、総柱式である。身舎規模は桁行7.6 m、梁行3.8 mで、面積31.12 m²をはかる。主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列0.9~2.5 m、南北列0.6~1.7 mをはかる。柱穴は円形・方形を呈し、その規模は不揃いである。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。確認された柱痕は径16 cmほど、円形である。底部隅柱穴はいずれも同方向にずれていた。

5号掘立柱建物址 (図213、PL187)

II A 1層で検出された。平面形は東面・西面に底を持つ2間×3間の東西棟、総柱式である。規模は桁行7.5 m、梁行5.5 mで、面積41.15 m²をはかる。主軸はE-1°-N指す。柱間は東西列2.0 m、南北列2.5~2.9 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とするが歪んだものもある。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

6号掘立柱建物址 (図214、PL175)

II A 1層で検出された。平面形は1間×5間の南北棟、側柱式である。規模は桁行10.3 m、梁行3.3 mで、面積34.30 m²をはかる。主軸はN-1°-Eを指す。柱間は東西列1.8~2.2 m、南北列3.3~3.5 mをはかる。柱穴の形は円形を基本とし均一である。掘り方は一部に段が認められる。深さはほぼ一定である。



1 : 黒褐色土 (径数ミリ以下の軽石、安山岩質の礫混、径1 cm 大軽石散見、しまりよくない。II A1・II A2が粒子状~ブロック状に混入するがその割合はピットにより異なる)

図215 7号掘立柱建物址

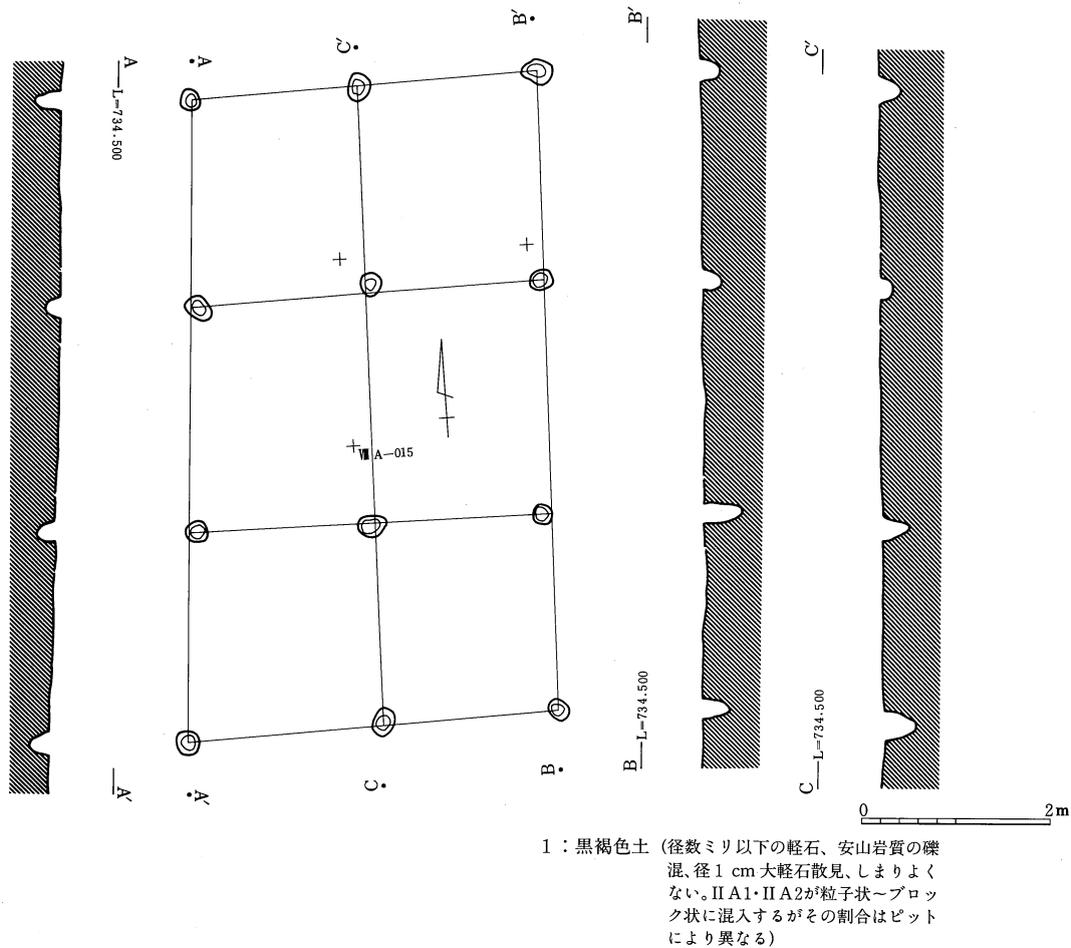


図216 18号掘立柱建物址

18号掘立柱建物址 (図216)

II A 1層で検出された。平面形は3間×2間の、南北棟、総柱式である。規模は桁行6.8 m、梁行3.6 mで、面積25.23 m²をはかる。主軸はN-4°-Eを指す。柱間は東西列1.8~1.9 m、南北列2.0~2.5 mをはかる。柱穴の形は方形・円形を呈す。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

19号掘立柱建物址 (図217、PL187)

II A 1層で検出された。7号掘立柱建物址に切られる。平面形は全面に底を持つ2間×3間の、東西棟、総柱式である。身舎規模は桁行8.4 m、梁行3.2 mで、面積26.88 m²をはかる。主軸はE-2°-Sを指す。柱間は東西列2.4~3.4 m、南北列1.6~1.68 mをはかる。柱穴の形は方形を基本とすると思われる。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。

21号掘立柱建物址 (図218、PL187)

II A 1層で検出された。平面形は西面を除いてやや不整形な底を持つ、2間×3間の、東西棟、側柱式である。身舎は桁行7.9 m、梁行4.1 mで、面積32.24 m²をはかる。主軸はE-5°-Sを指す。柱間は東西列2.3~2.9 m、南北列3.9~4.1 mをはかる。柱穴の形は方形を基本とすると思われる。掘り方は深度に差が認められる。

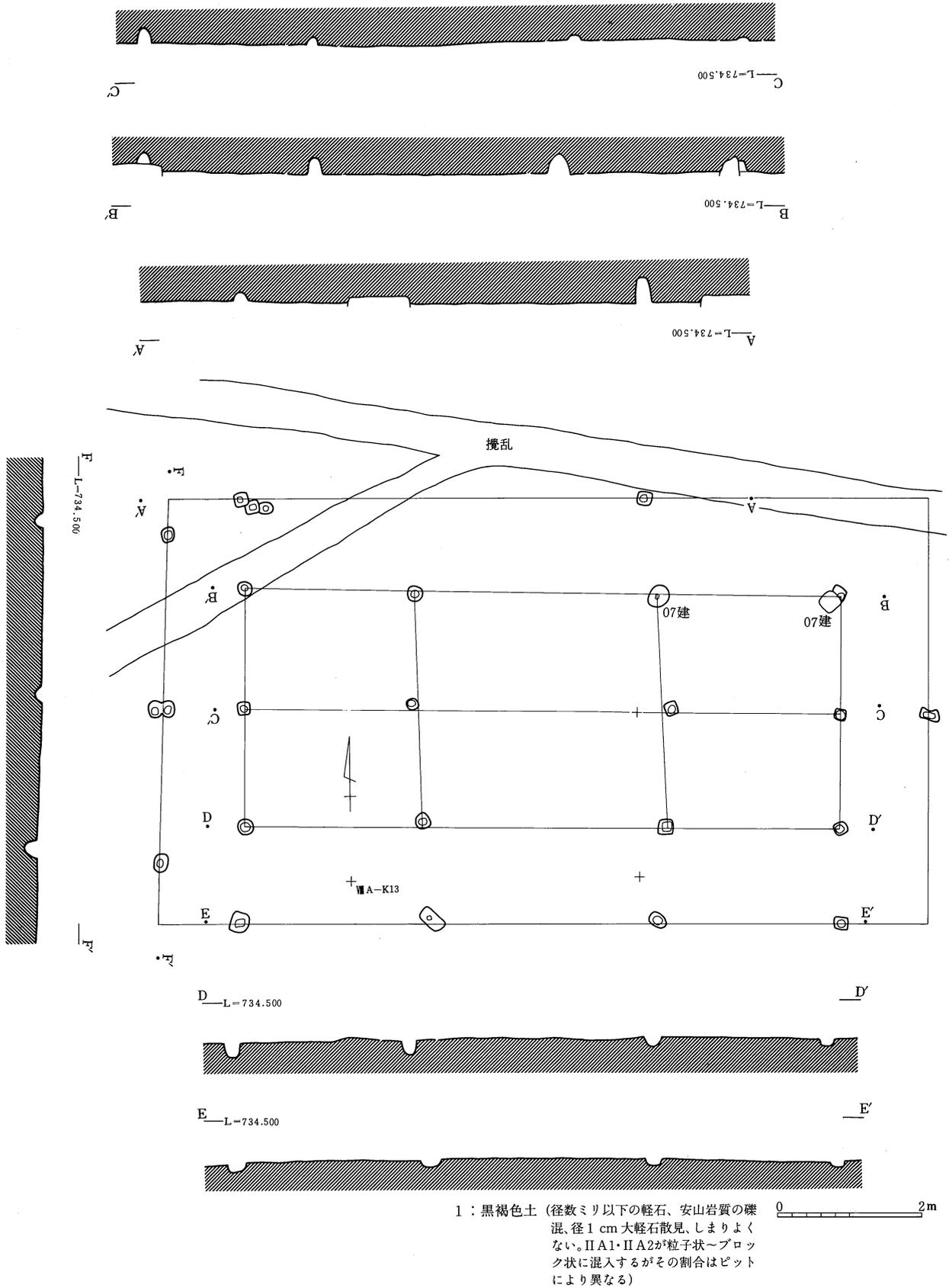


図217 19号掘立柱建物址

45号掘立柱建物址 (図219)

II A 1層で検出された。平面形は全面に庇を持つ2間×3間の、東西棟、総柱式である。身舎規模は桁行7.5 m、梁行3.8 mで、面積28.5 m²をはかる。主軸はE-9°-Sを指す。柱間は東西列2.0~3.4 m、南北列

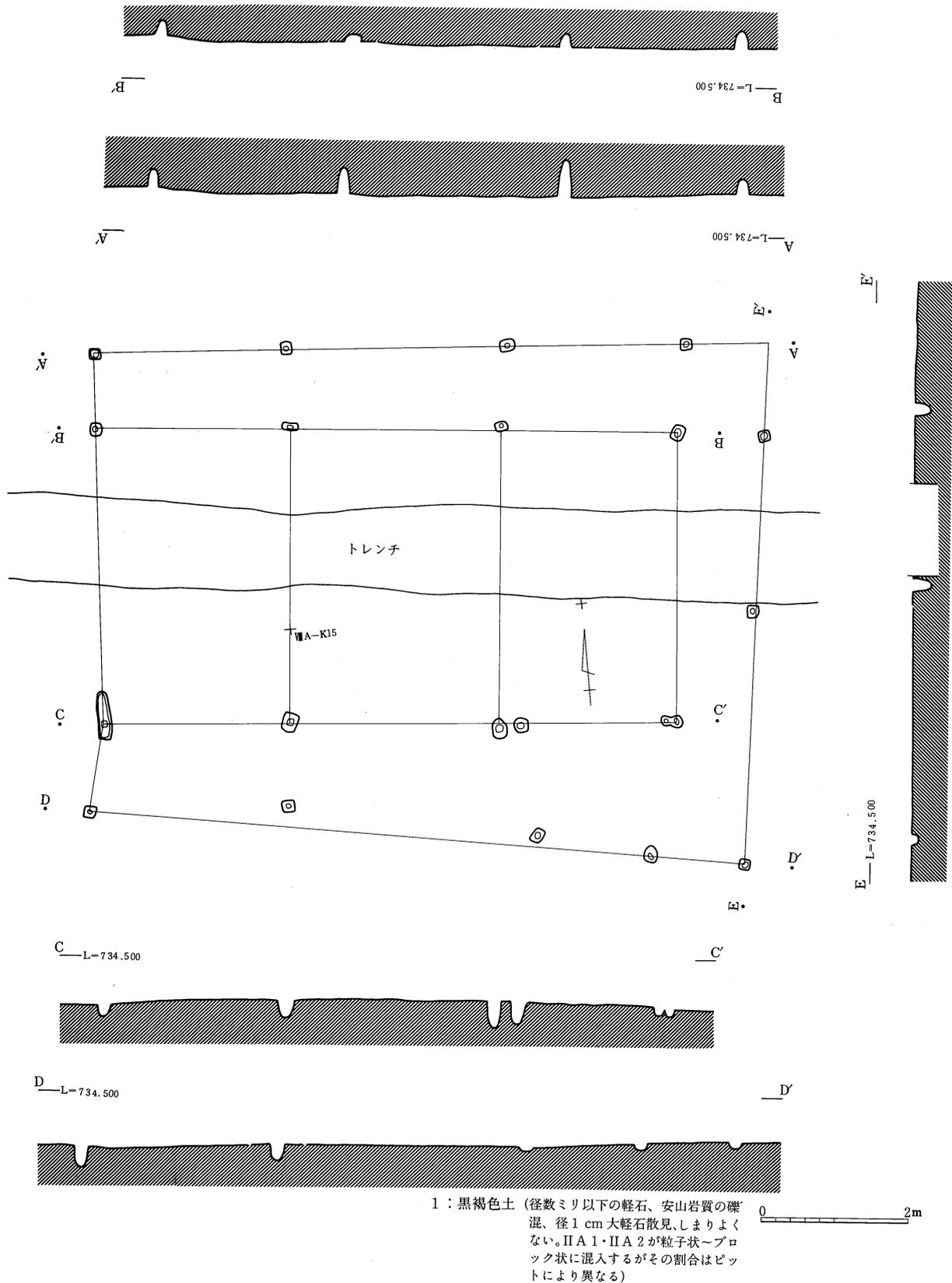
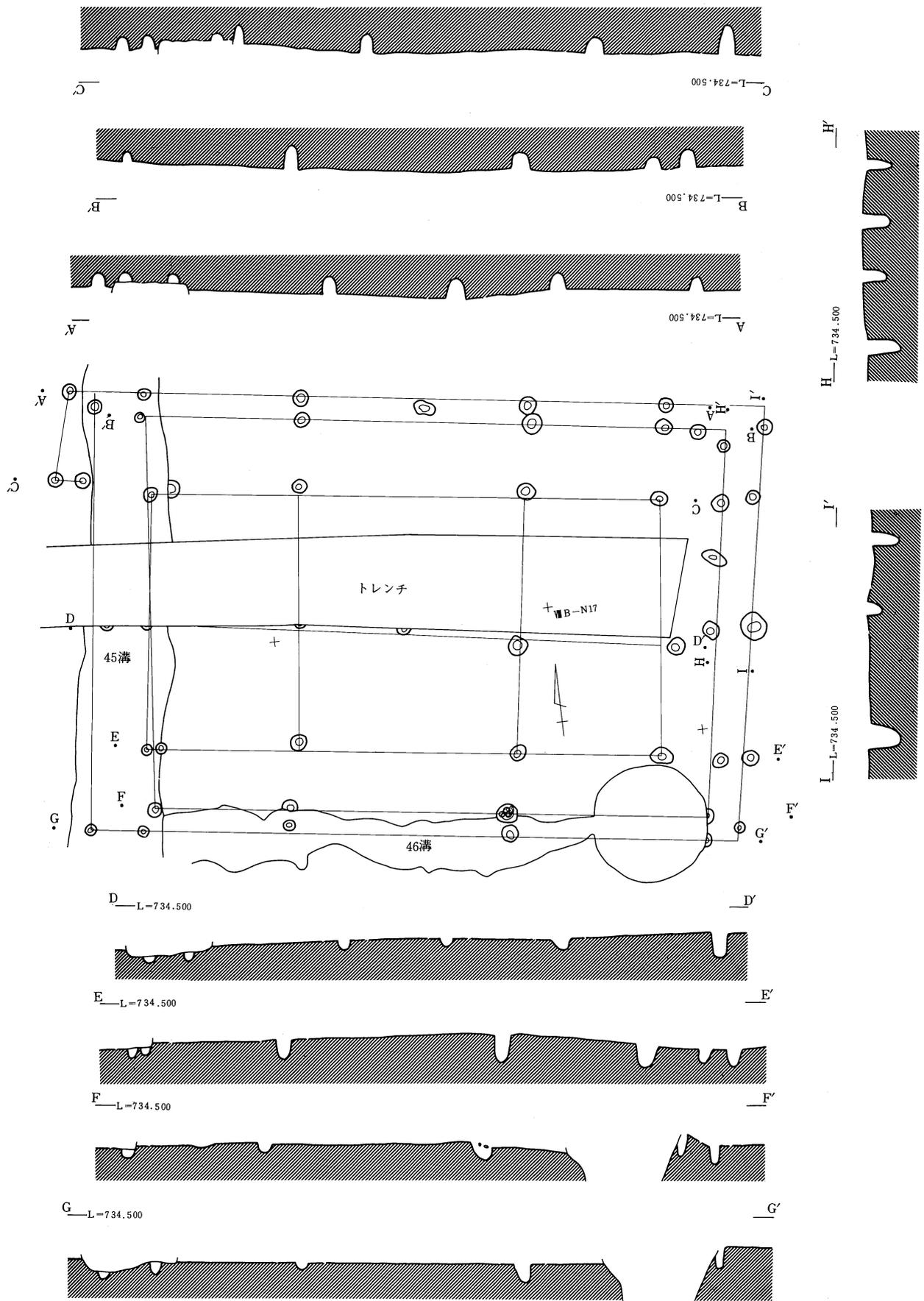


図218 21号掘立柱建物址

1.6~2.1 mをはかる。柱穴は方形・円形を呈す。掘り方は一部を除いて深さはほぼ一定である。底は西面部のないものと、それより一回り規模の大きい全面に及ぶものに分けられ、建て直しがあつたと推察される。



1 : 黒褐色土 (径数ミリ以下の軽石、安山岩質の礫混、径1 cm 大軽石散見、しまりよくない。IIA 1・IIA 2が粒子状
~ブロック状に混入するがその割合はピットにより異なる)

図219 45号掘立柱建物址

ウ 溝址

検出された溝址は56本で、このうち25本が暗渠配水である。すべての溝址は確認された範囲で平安期の遺構を切るとはあっても、切られることはないことから、それ以降のものと判断される。よってここで扱うのが妥当とした。実際には、所属時期の不明なものがほとんどであった。出土遺物の大半は平安時代のものばかりであるが2号溝からは自磁の玉縁碗片が出土した。17・23・29号溝址は暗渠配水である。

1号溝址 (図220、PL193)

II A 2層上面で検出された。3号掘立柱建物址溝址を切り、全長約23 m、幅約60～76 cm、深さ18 cm 前後をはかる。断面播り鉢状を呈し、底は平坦でなく、比高差23 cm をはかり東に傾斜する。

2号溝址 (図220、PL193)

II A 1層で検出された。全長約63 m、幅約120～220 cm、深さ70 cm 前後をはかる。覆土は砂礫である。

3号溝址 (図221)

I D層で検出された。全長約10 m、幅約50～90 cm、深さ80 cm 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底の東西比高差3 cm をはかり東に傾斜する。

4号溝址 (図221)

I D層で検出された。全長約10 m、幅約30～50 cm、深さ6 cm 前後をはかる。

5号溝址

I D層で、2号掘立柱建物址の南に並行して検出された。全長約6.5 m、幅約60 cm、深さ30 cm 前後をはかる。鍋底状を呈し、底の比高差はほとんどない。

6号溝址 (図222)

I D層で検出された。全長約6.4 m、幅約30 cm、深さ14 cm 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底は平坦でない。比高差はほとんどない。

7号溝址 (図222)

I D層で検出され、東端は8号溝址に切られる。長約2.8 m、幅約10～30 cm 前後をはかる。断面はU字状を呈し、底は比高差なし。

8号溝址 (図222)

I D層で検出された。全長約3 m、幅約30 cm、深さ5 cm 前後をはかる。断面播り鉢状を呈し、底は平坦でなく、比高差23 cm をはかり南に傾斜する。

9号溝址 (図222)

I D層で検出された。全長約7.2 m、幅約15～30 cm、深さ20 cm 前後をはかる。

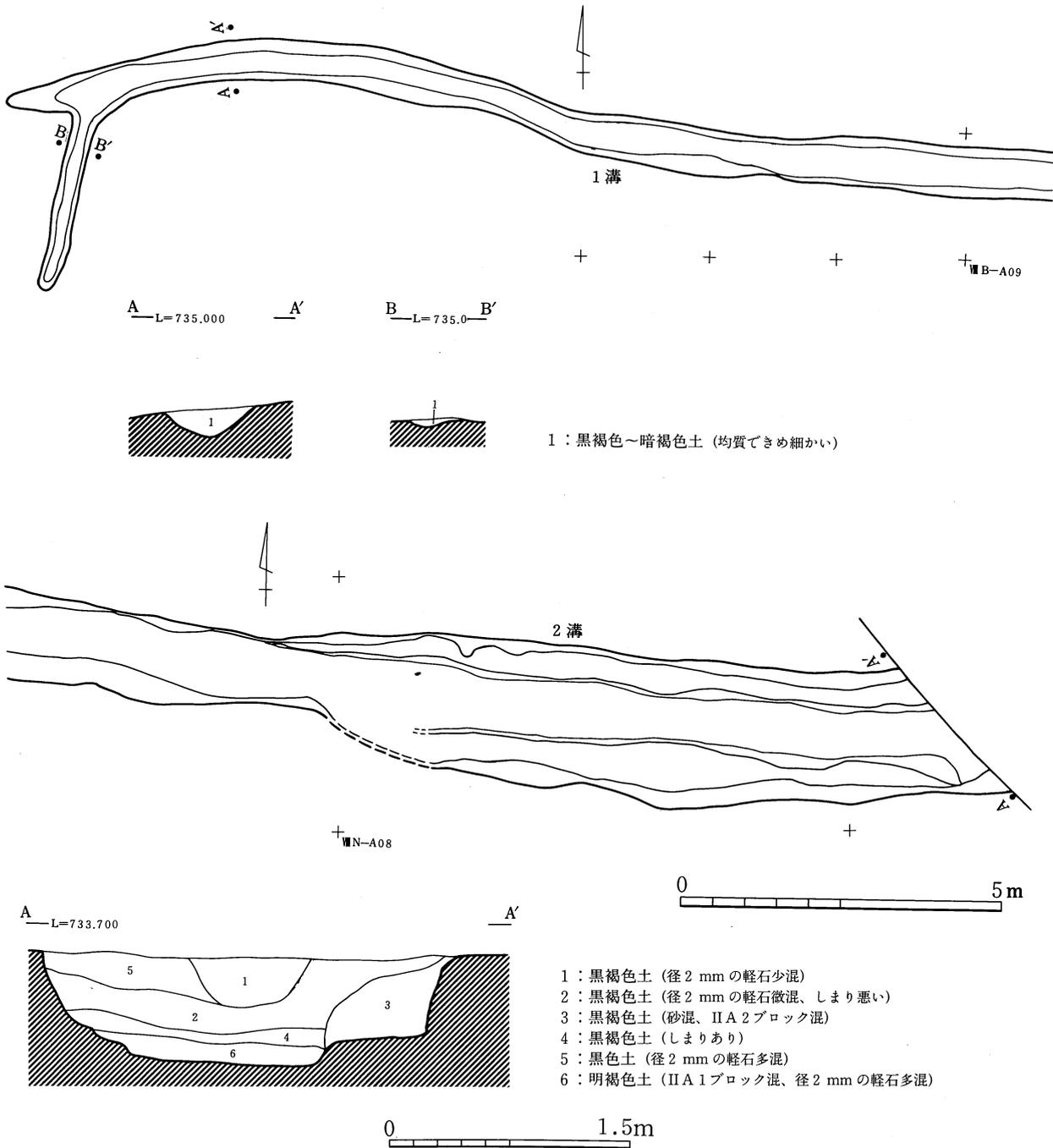


図220 溝址 (1)

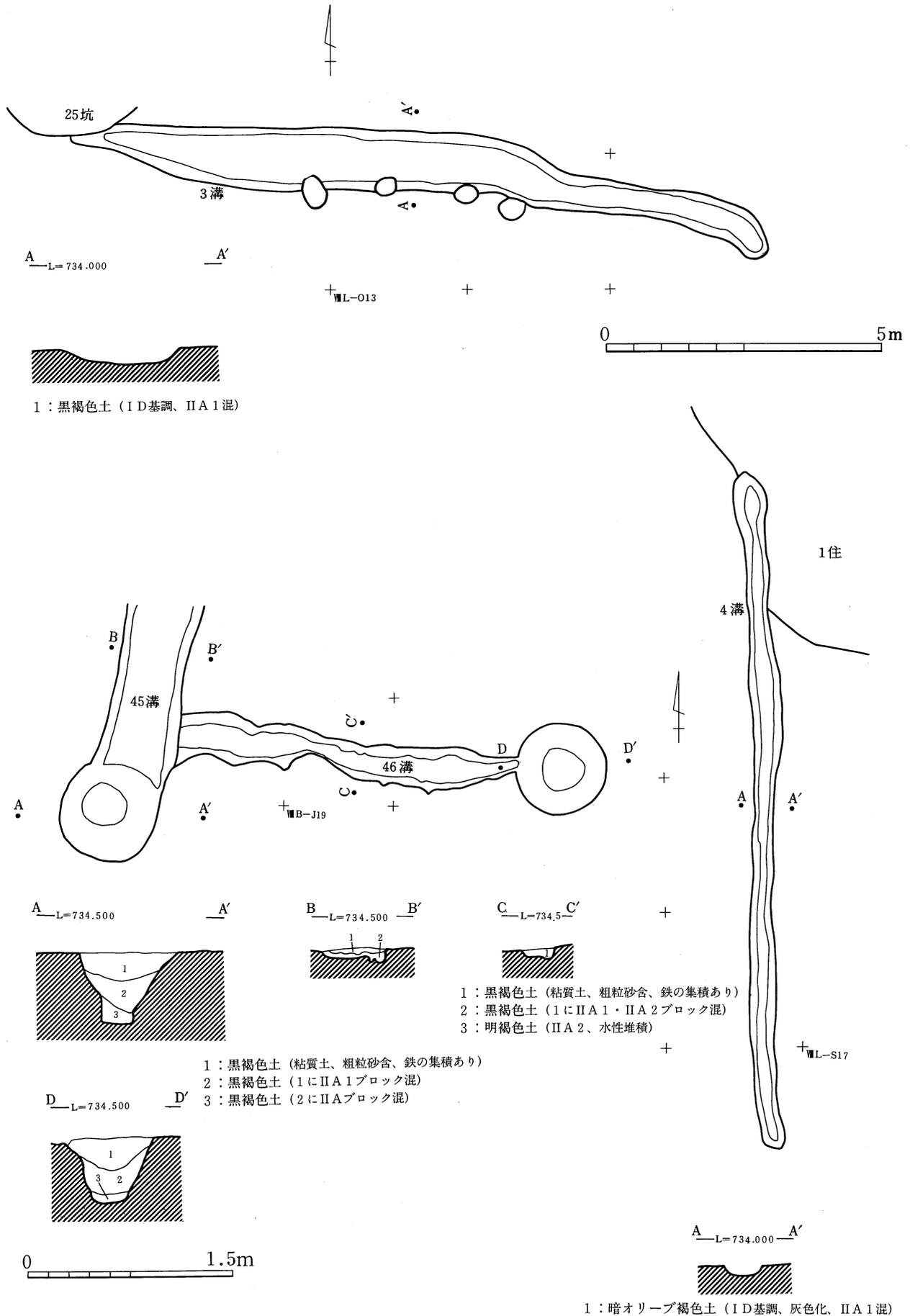


図221 溝址(2)

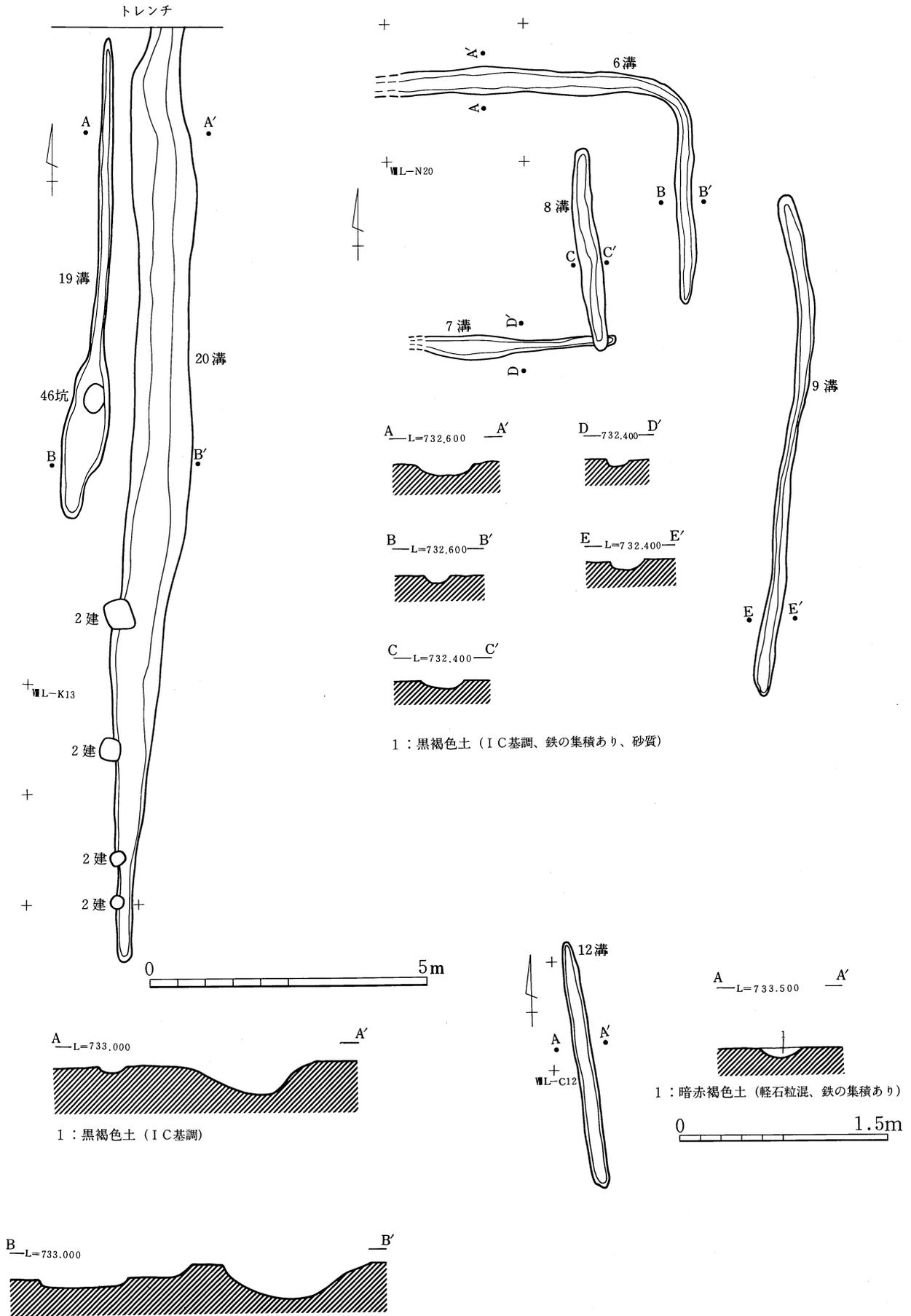


図222 溝址 (3)

12号溝址 (図222)

I D層で検出された。全長約4.5 m、幅約35 cm、深さ8 cm前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底の比高差はほとんどない。

14号溝址

II A 1層で検出された。全長約2.9 m、幅20 cm、深さ8 cm前後をはかり、北で分岐する。断面は播り鉢状を呈し、底の比高差30 cmをはかり南に傾斜する。

15号溝址

II A 1層上面で検出された。2号掘立柱建物址に切られる。全長約2 m、幅約16~24 cm前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底は平坦でない。比高差はほとんどない。

16号溝址 (図223)

I E下層上面で検出された。全長約24 m、幅約60 cm、深さ70 cm前後をはかる。壁は垂直に立ち上がり、底は平坦で、南北差70 cmをはかり、南に傾斜をみせる。

19号溝址 (図222)

I D層で検出され、46号土坑に切られる。全長約8.6 m、幅約16~80 m、深さ8 cm前後をはかる。断面播り鉢状を呈し、底は平坦でなく、比高差18 cmをはかり東に傾斜する。

20号溝址 (図222)

I D層で検出された。全長約20 m、幅約50 cm、深さ25 cm前後をはかる。南で10 cmほど下がる。

24号溝址 (図223、PL193)

II A 1層上面で検出された。全長約16 m、幅約80 cm、深さ15 cm前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底の比高差23 cmをはかり東に傾斜する。

31号溝址 (図224)

II A 1層上面で検出された。全長約22 m、幅約60 cm、深さ50 cmをはかる。南側で50 cmほど下がる。

32号溝址 (PL193)

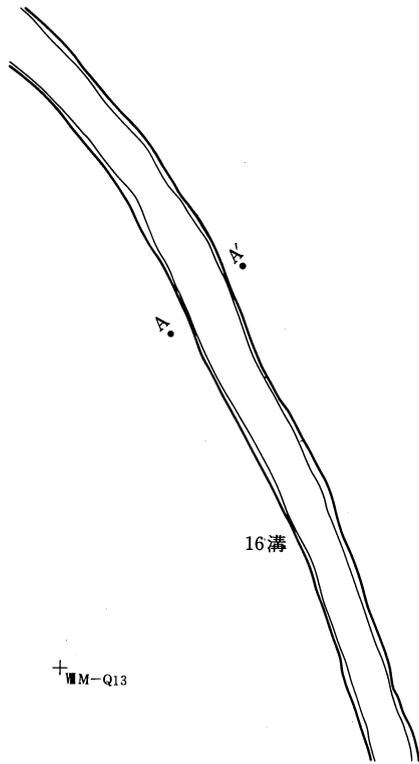
II A 1層で検出された。全長約66.5 m、幅約0.6~2.2 m、深さ60~70 cmをはかる。断面は播り鉢状を呈し、底は平坦でない。比高差はほとんどない。

33号溝址 (PL194)

II A 1層上面で検出された。全長約45 m、幅約1 m前後、深さ14 cm前後をはかる。断面はU字状を呈し、底は東に6 cm傾斜をみせる。

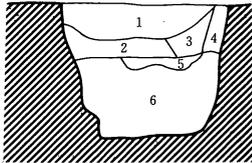
34号溝址 (図224、PL194)

II A 1層上面で検出された。全長約38 m、幅約0.5~1 m、深さ30 cm前後をはかる。断面播り鉢状を呈

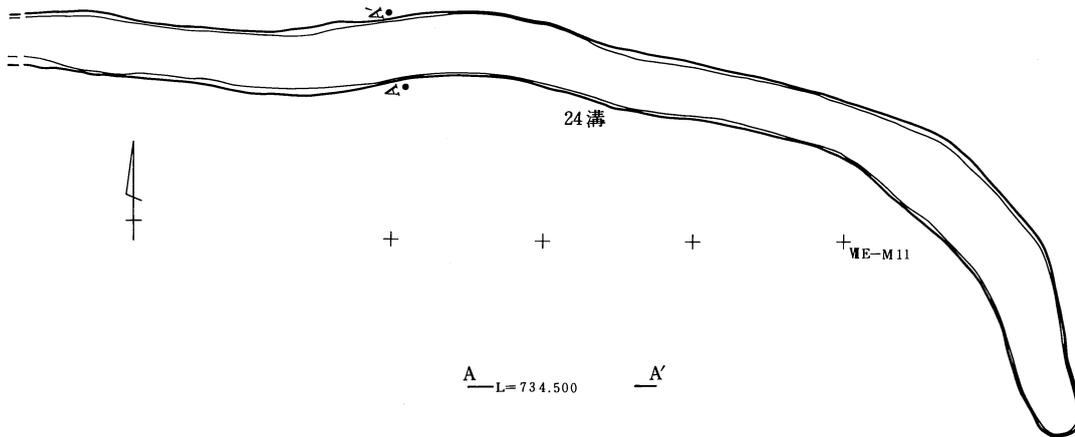


+ M-Q13

A-L=733.900 A''



- 1: 黒褐色土
- 2: 暗赤褐色土 (IIA 1ブロック混)
- 3: 暗赤褐色土
- 4: 黒褐色土
- 5: 黒褐色土 (IIA 2ブロック混)
- 6: 黒色土 (暗オリーブ褐色土縞状に混、軽石粒多混)



A-L=734.500 A''

- 1: 黒褐色土 (粗粒砂含、IIA 1ブロック混)



0 1.5m

0 5m

図223 溝址 (4)

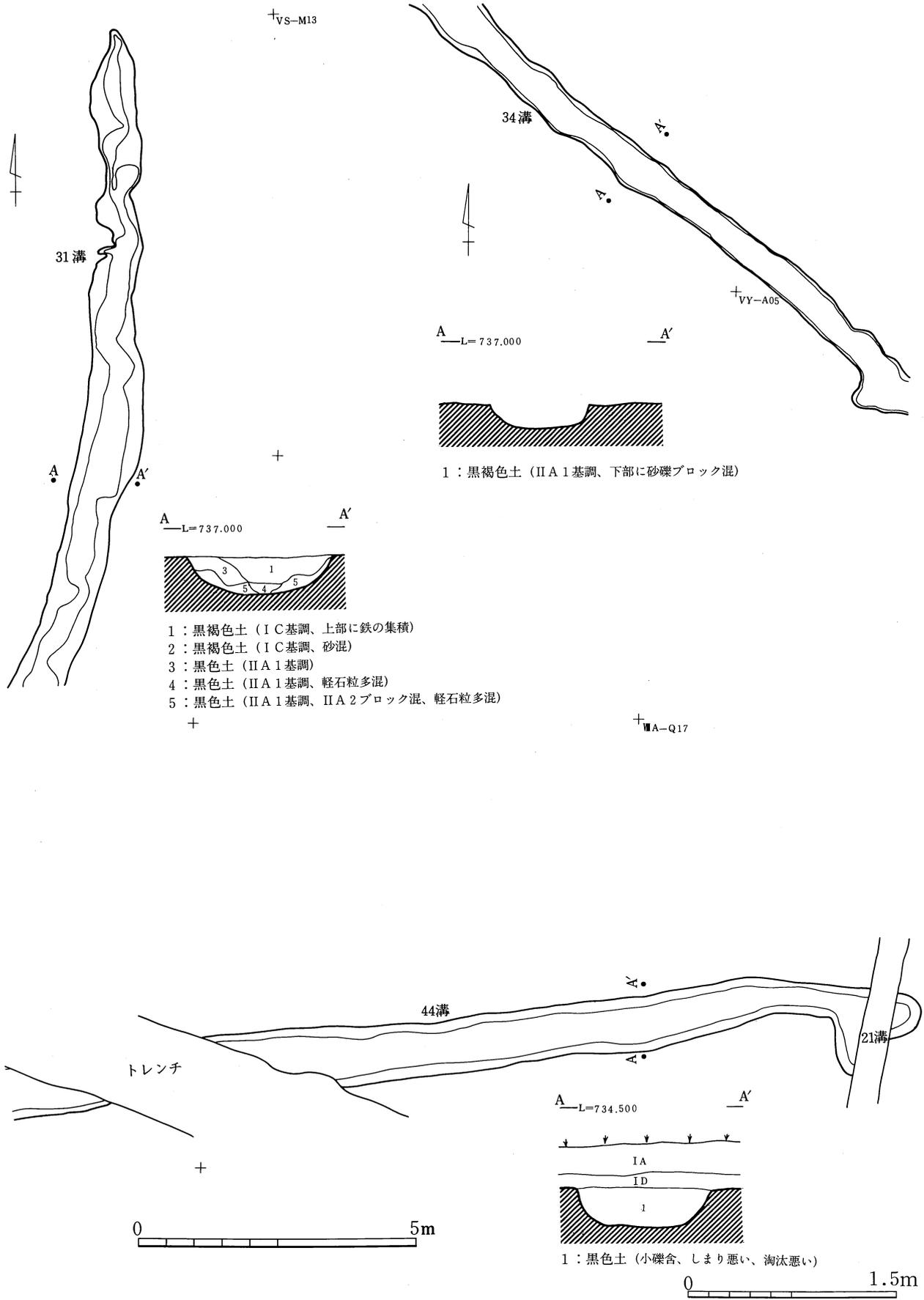


図224 溝址(5)

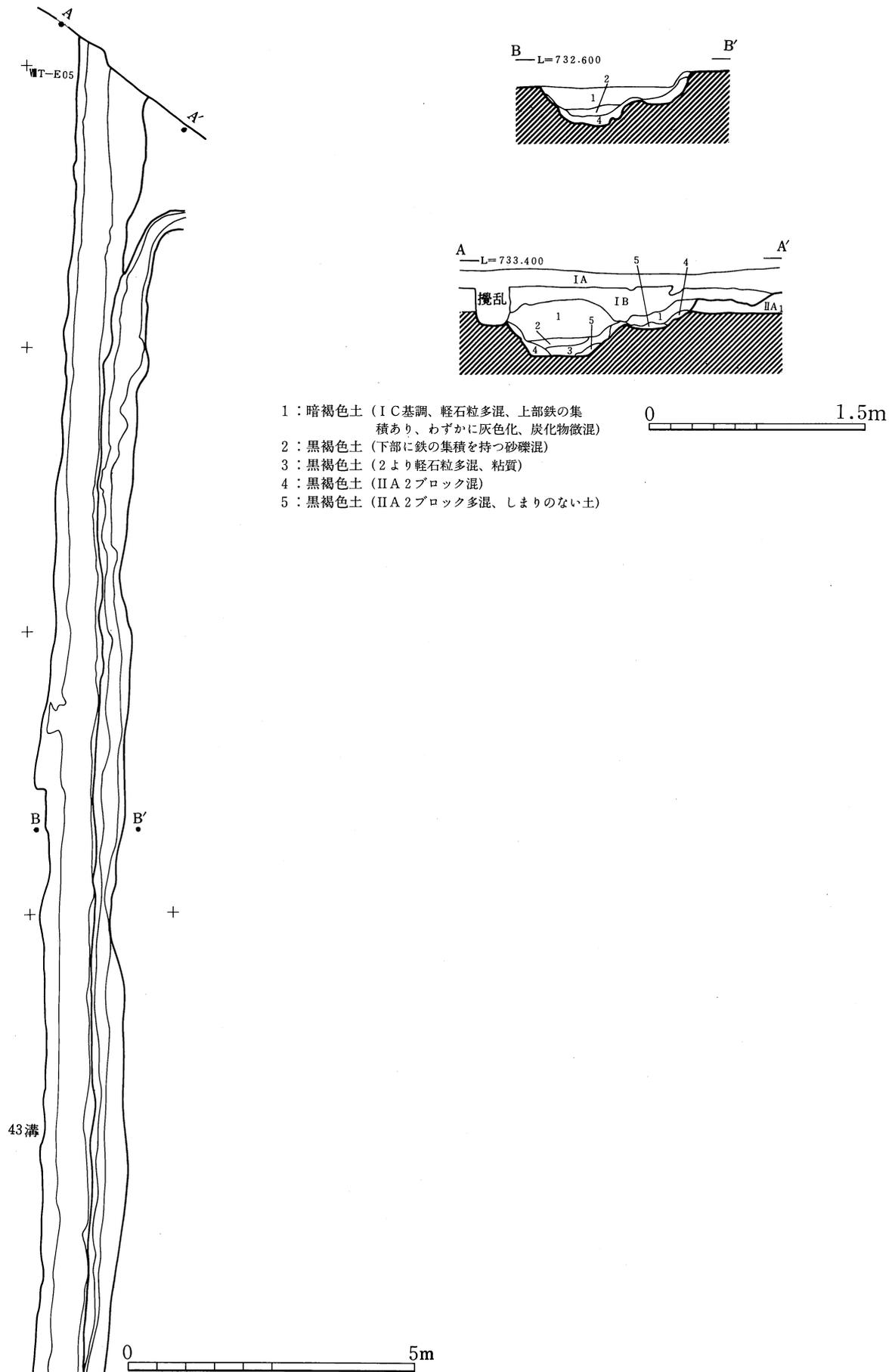


図225 溝址 (6)

し、底は平坦でなく、1.4 m 南に傾斜する。

41号溝址

II A 1層上面で検出された。全長約4 m、幅約35 cm、深さ30 cm 前後をはかる。

42号溝址 (PL194)

II A 1層上面で検出された。全長約41 m、幅約40 cm、深さ10 cm 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底の比高差はほとんどない。

43号溝址 (図225、PL194)

II A 1層上面で検出された。全長約66 m、幅約1 m、深さ1 m 前後をはかり、断面は播り鉢状を呈し、底の比高差30 cm をはかり南に傾斜する。1群の建物址群付近からは、鉄滓・羽口片が多量に出土した。

44号溝址 (図224、PL195)

II A 2層上面で検出された。全長約36 m、幅約1 m 前後、深さ20~25 cm 前後をはかる。断面は鍋底状を呈し、底の比高差は西で低く20~25 cm をはかる。

45号溝址 (図221、PL195)

II A 2層上面で検出され、溝部と穴部からなる。全長約16 m、幅約120 cm 前後、深さ20 cm 程さがる。

46号溝址 (図221、PL195)

II A 2層上面で検出された。45号溝址と同形態を呈し、同址によって切られる。全長約8 m、幅約30~80 cm、深さ14 cm 前後をはかる。断面はU字状を呈し、底は比高差15 cm をはかり、東に傾斜をみせる。

53号溝址

II A 2層上面で検出された。全長約4.6 m、幅約14 cm、深さ8 cm 前後をはかる。断面播り鉢状を呈し、底は平坦でなく、東に傾斜する。

61号溝址 (PL196)

II A 2層上面で検出された。全長約15 m、幅約1.4 m、深さ40 cm 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底は東に傾斜する。64または65号溝址の延長部分と思われる。

62号溝址 (図226、PL196)

II A 2層上面で検出された。全長約49 m、幅約2.5 m、深さ85 cm 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底の比高差1.4 m をはかり南に傾斜する。覆土は中粒砂土、粗粒砂土の互層状、5 mm 強の軽石を含む。

64号溝址 (図227、PL197)

II A 2層上面で検出された。全長約20 m、幅約2~2.4 m、深さ47 cm 前後をはかる。断面は鍋底状を呈し、底の比高差は東で1 m ほど低い。なお、65号溝址を切って構築されている。

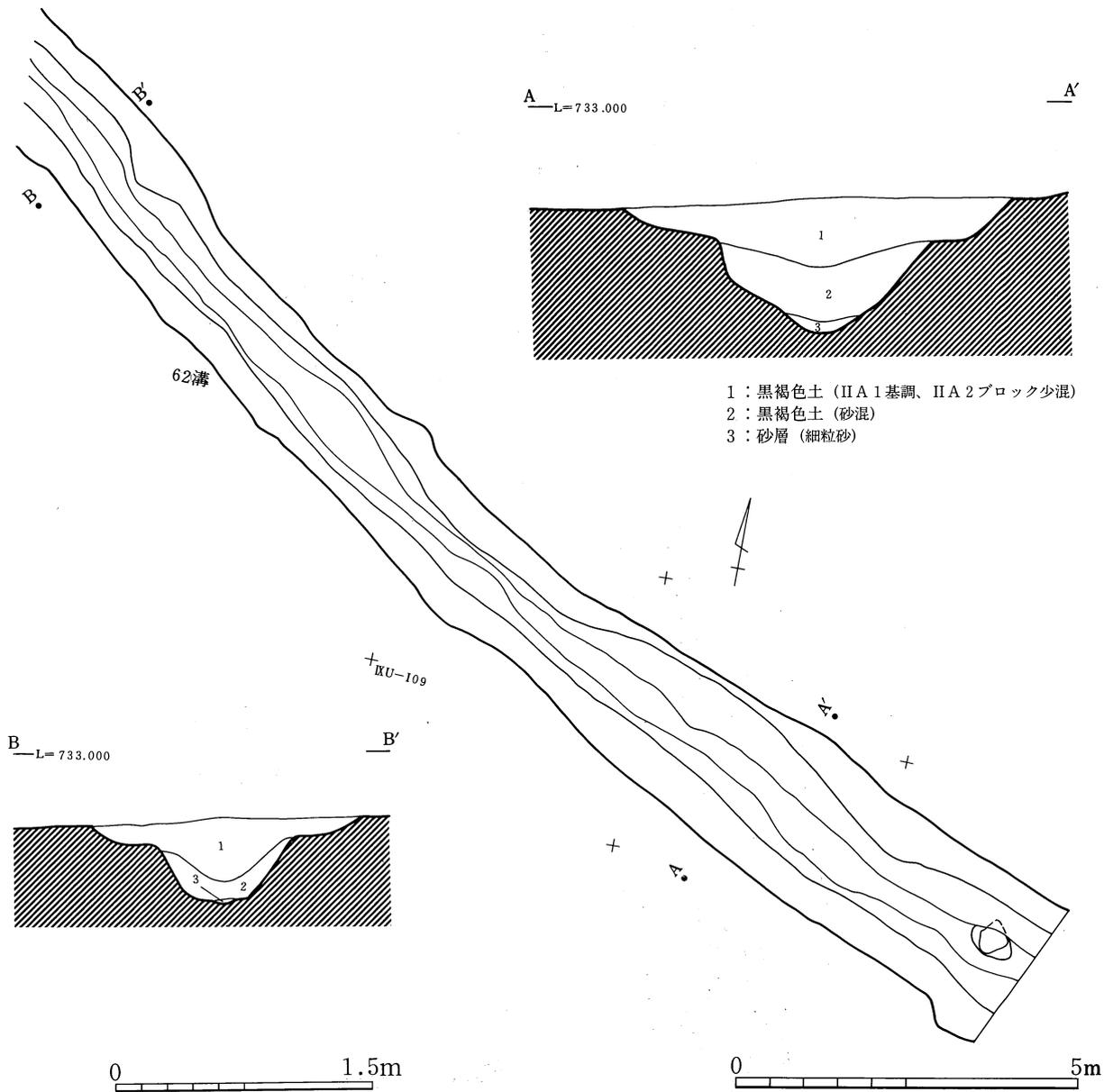


図226 溝址 (7)

65号溝址 (図227、PL197)

II A 2 層上面で検出された。43号溝址を切る。全長約53 m、幅約2~3.4 m、深さ1 m 前後をはかる。断面は播り鉢状を呈し、底は平坦でない。比高差はほとんどない。

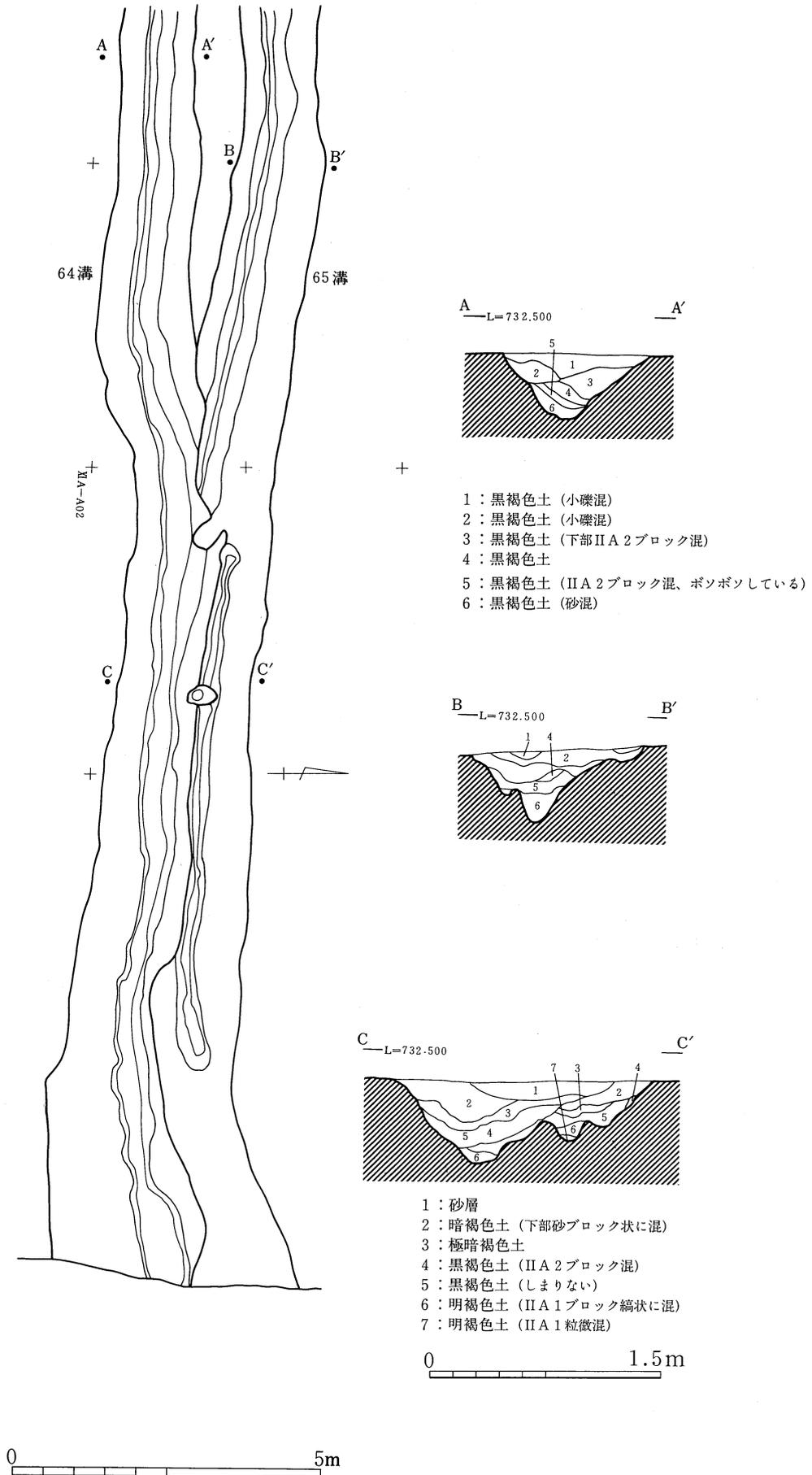


図227 溝址 (8)

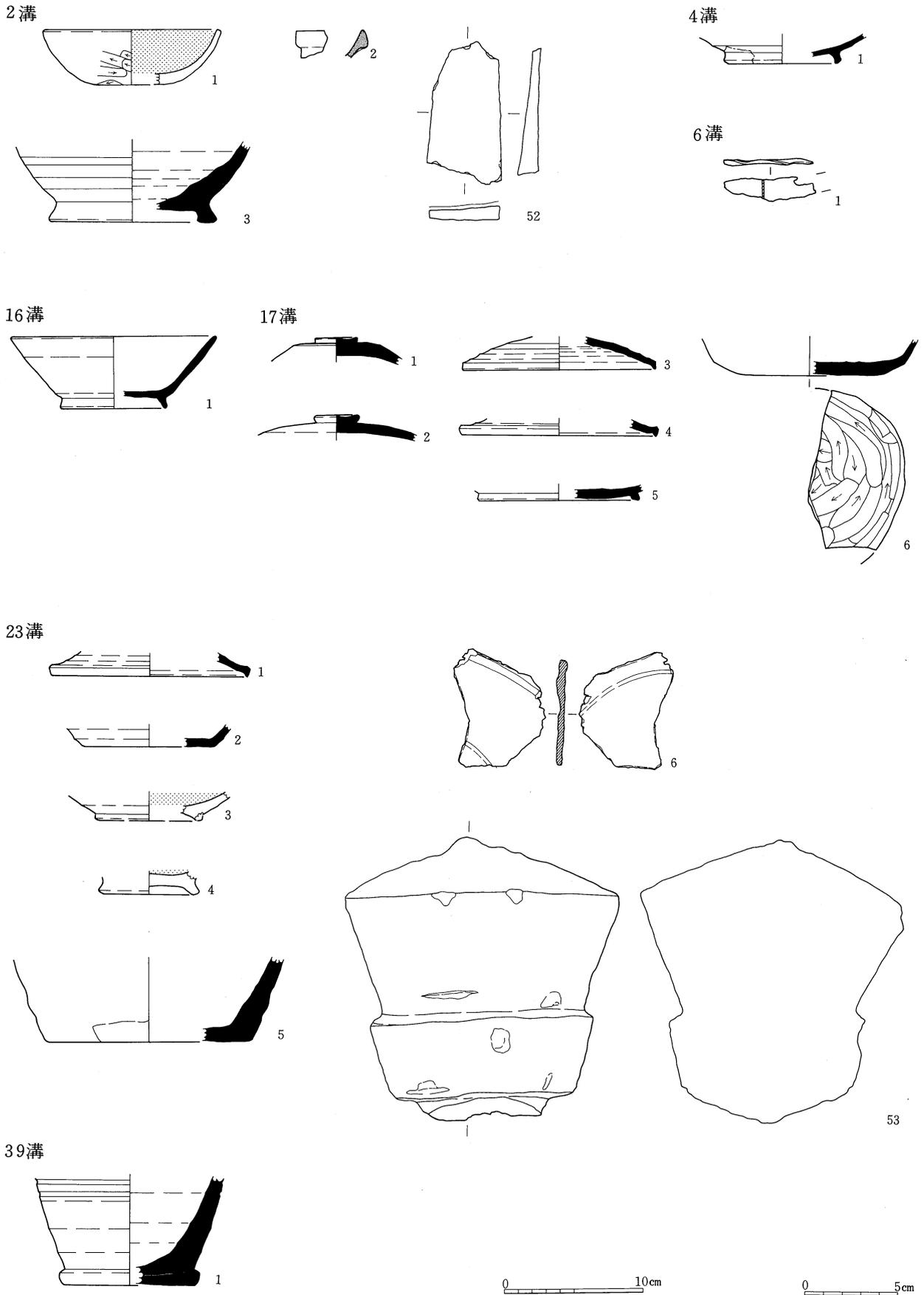
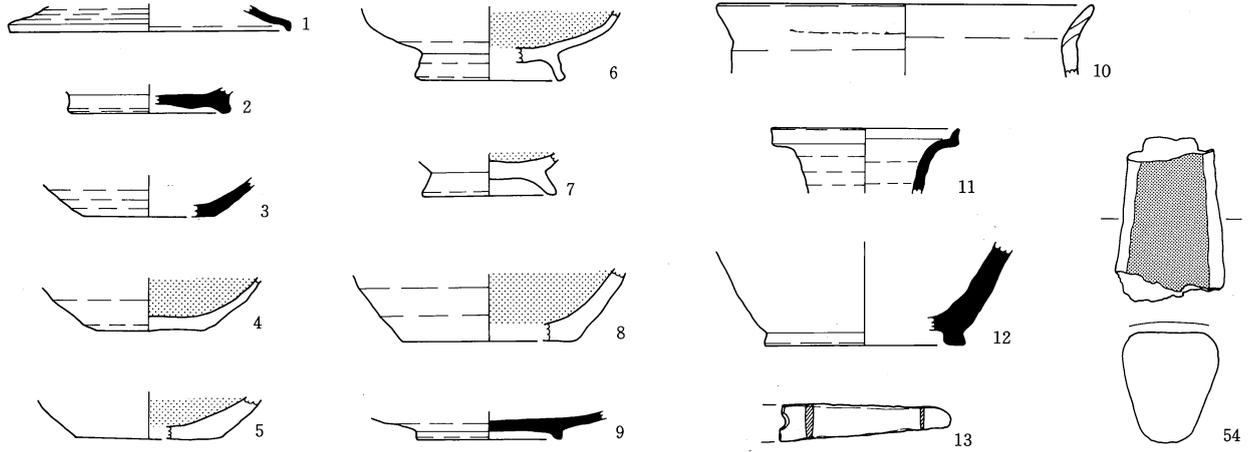
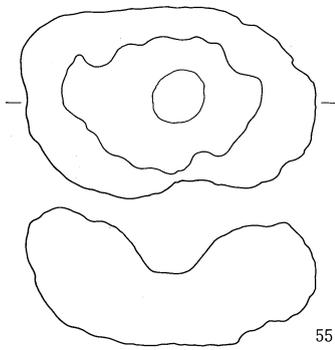


図228 溝址出土遺物(1)

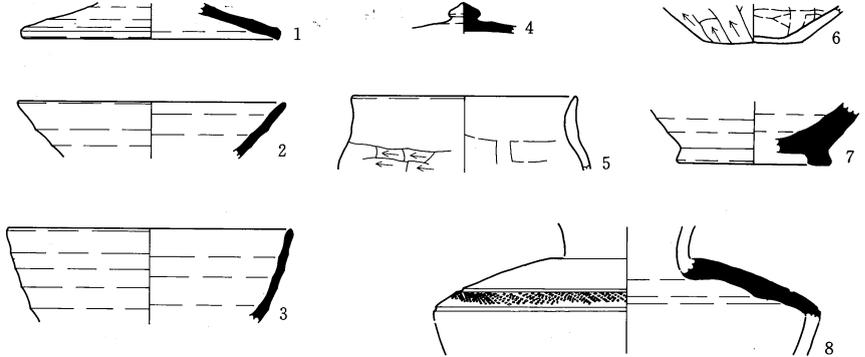
43溝



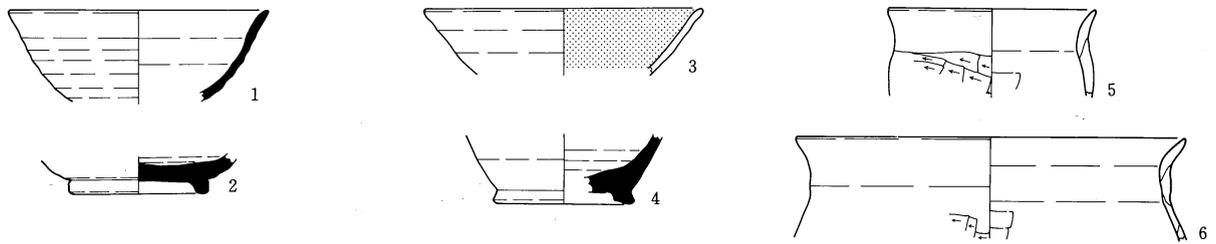
44溝



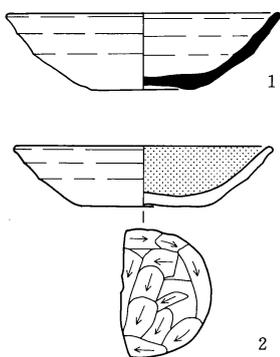
61溝



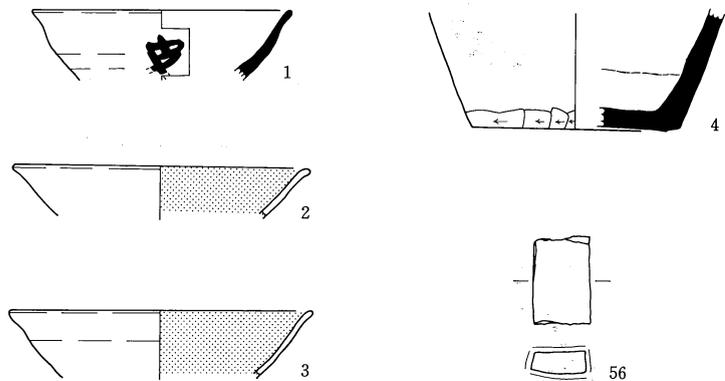
64溝



64・65溝



65溝



0 10cm

0 5cm

图229 溝址出土遺物(2)

エ 柵址

1号柵址 (図230、PL199)

18号住居址を切って位置する。II A 1層上面で検出された。ほぼ均一の円形を呈するピットが5基認められ柵址とした。ピット間は0.8~1.6mである。深さは東端でやや深いほかは同様である。

2~7号柵址 (図231)

3号土坑を囲むようにして位置する。いずれも2間を基本として、規模のほぼ揃ったピットで構成される。深さは一部浅いものも認められるが、ほぼ均一である。2列単位で並ぶため、立て替えの可能性はある。その配置から、3号土坑に伴った施設と捉えられる。

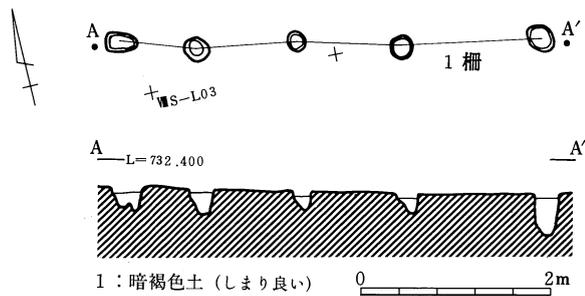
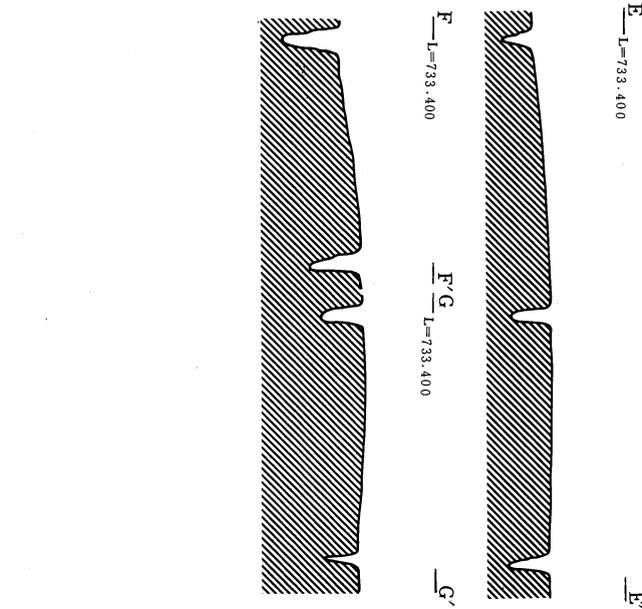
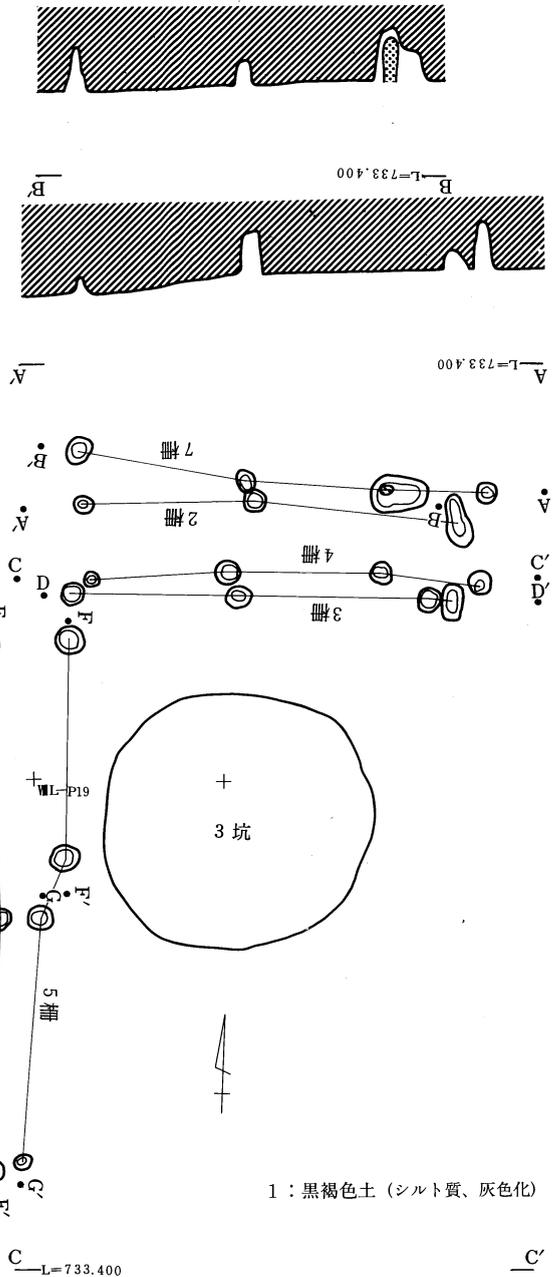


図230 1号柵址



1: 黒褐色土 (シルト質、灰色化)

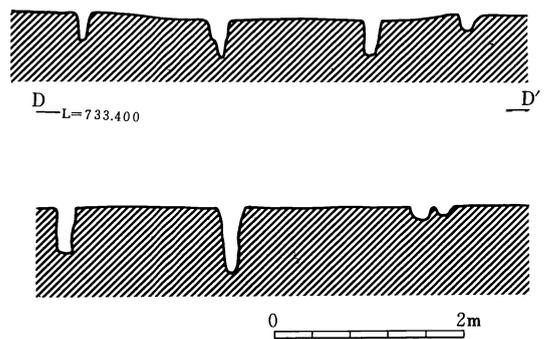


図231 2~7号柵址

オ 土坑 (図232~236)

検出面及び覆土から中世以降のものとして判断される84基の土坑をここで扱う。

古墳～平安時代の土坑の分類と同じものを図231に示した。全体にまばらで小ピット状のものが多い。その分布は、中世の遺構の密度が高い一帯に多く認められる。火葬墓など墓としての機能を持つものよりも、井戸状のものも多く認められる点が特徴的であろうか。以下、土坑のうち、規模・形状・出土遺物から特徴的なものを個別に記す。

554号土坑 (図233、PL190)

本址はIXU-06グリッドに位置する。当初、本址の存在に気がつかず120号住居址を掘り下げ中に覆土と異なる土が認められ、頭蓋骨部分が部分的に露出するということから本址を確認した次第である。ために北側部分を少なからず消失した。形状は358 cm×164 cmの楕円形を呈し、深さ54 cmをはかる。底部から伸展葬での形状を留めて人骨が出土したが、遺存状況は極めて不良であった。遺物は本址埋め戻しにともなって120号住居址内の遺物が数点混入していたほかとくになく、時期決定はできなかった。

これらの骨はウレタンで取り上げ、残りの良い部分について信州大学助手の西沢寿晃氏に鑑定を依頼した。その概要を記す。

埋葬状態：遺存の程度は頭骨の一部を除き、極めて不良である。発掘に際して全身各部の位置関係はほぼ推定できたが、各骨の多くは骨粉状に崩壊し、原形はほとんど確認できない。顔面は左向きで、下顎は連結している。体幹は上方を向き、両肩部も正常の位置で、全体として仰向きとなる。ただし、右腕は肘関節で屈曲する様子が、上腕・前腕の骨の残存状態からうかがえる（左腕は不明）。腰部は上向きで、両下肢は伸直に揃えられている。頭部を左に向けた伸展葬である。

骨の保存状態と形質：頭骨——各部位の骨が細骨化して残る。頭頂骨はやや大形片で、冠状縫合が離開している。上顎骨の右臼歯歯槽の一部と口蓋がわずかに残る。下顎骨は骨体左半がほぼ完存し、全歯が植立する。右半は遊離した全歯種が残存する。臼歯のエナメル質はほとんど面状に咬耗が進行し、象牙質が点状に露出する箇所も見られる。一部にわずかな腐食の跡がある。

(残存歯の歯列)	M3M2M1 P2 P1 I2	
	M3M2M1 P2 P1 C I2 I1	I1 I2 C P1 P2 M1M2M3

脊椎——軸椎の歯突起のほか、頸椎の椎弓などがわずかに形状を保つ。上腕骨・尺骨——右肘関節で連絡する状態がみられる程度である。寛骨——海綿質がブロック状に残存する。大腿骨・脛骨——骨体部分が円柱状であるが、骨表は一様に崩壊が進み、形態を残さない。

概要：中軸はほぼ北を向く伸葬である。顔面のみ左を向き、右上肢を肘から折り曲げている。下顎骨の形態は比較的頑丈で男性的である。縫合や歯の咬む摩耗の程度から壮年期の年齢が推定される。

24号土坑 (図234、PL188)

本址はVIII L-08グリッドに位置する。I D層で検出された。277 cm×75 cmの方形を呈し、深さ34 cmをはかる。覆土はパミス、II A 2粒子を少量含む黒褐色土である。北壁中央寄りに礫、鉄器が出土している。

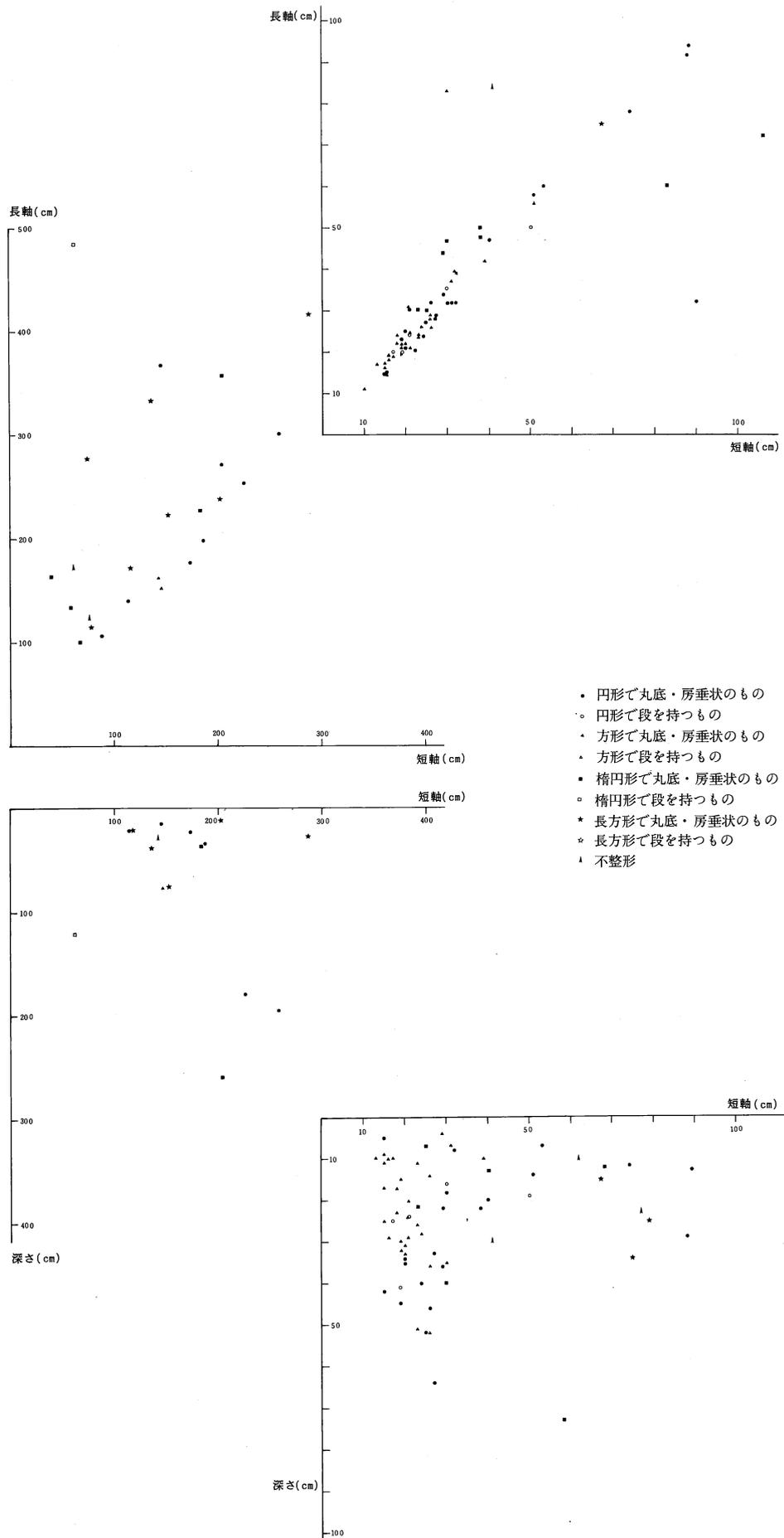


図232 土坑の長短軸深さの相関

247号土坑 (図234、PL190)

本址はVIII T-07グリッドに位置する。172 cm×62 cmの不整形を呈し、深さ15 cmをはかる。43号溝址検出中に炭化物の分布が認められ、別遺構と認定した。焼土は認められず、被熱した礫が検出されている。

83号土坑 (図234、PL189)

本址はV S-06グリッドに位置する。II A2層で検出された。333 cm×135 cmの楕円形を呈し、深さ39 cmをはかる。覆土は砂礫の混入が著しく、底部に炭化材が検出された。覆土中に焼土は認められない。

273号土坑 (図234)

本址はVIII S-04グリッドに位置する。II A2層上面で検出された。径1.7 mのほぼ円形を呈し、深さ22 cmをはかる。覆土は灰褐色の粘質土であることから新しいものと判断した。

23号土坑 (図234)

本址はVIII L-23グリッドに位置する。I D層で検出された。42 cm×39 cmの方形を呈し、深さ10 cmをはかる。底から鎌が出土した。

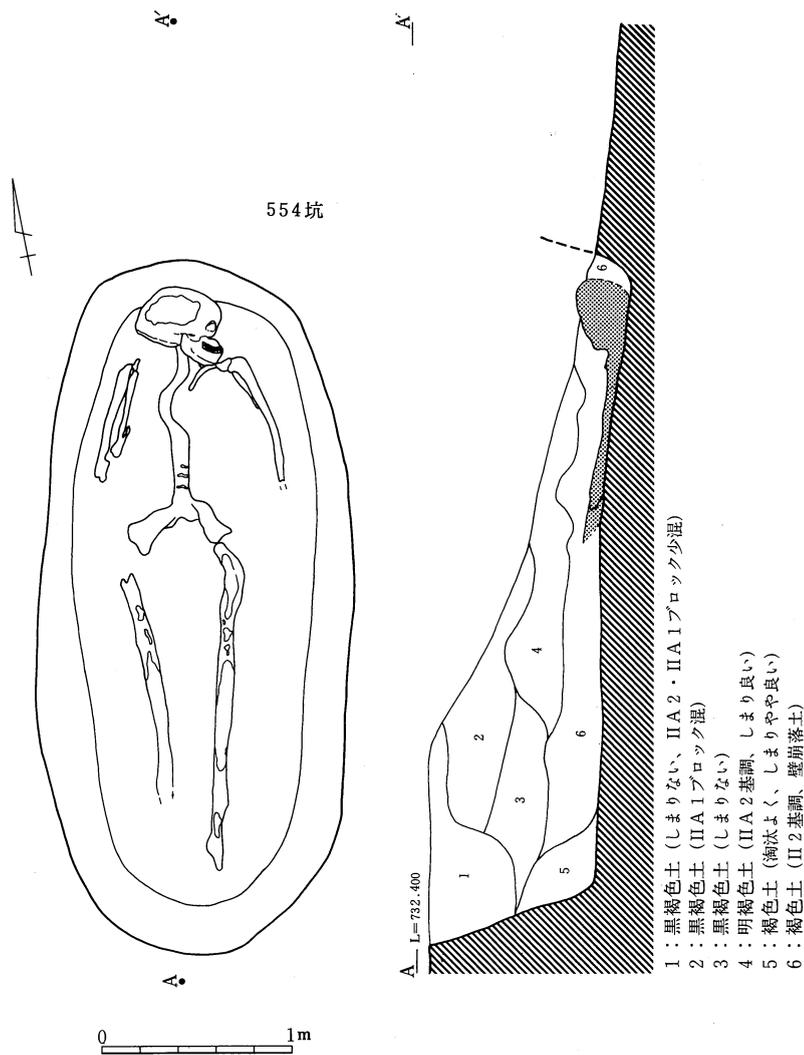


図233 土坑 (1)

226・227号土坑 (図234)

本址はVIII S-04グリッドに位置する。226号は、30 cm×23 cmの楕円形を呈し、深さ22 cmをはかる。227号は、47 cm×30 cmの円形を呈し、深さ40 cmをはかる。両者とも本遺跡で散見される小ピットである。

1号土坑 (図235、PL188)

本址はVIII B-06グリッドに位置する。II A 1層上面で検出された。径80 cm・深さ121 cmの土坑と長さ160 cmの溝が合体した形態を呈する。規模は異なるが45・46号溝址に形態が類似する。

3号土坑 (図235)

本址はVIII L-25グリッドに位置する。I D層で検出された。270×290 cmの円形を呈し、深さ200 cmをはかり、底部は円形を呈す。底部には腐食層と思われる黒色土(8層)が堆積し、除去後湧水が認められた。北・西側に柵列(2~7号柵址)がめぐり、

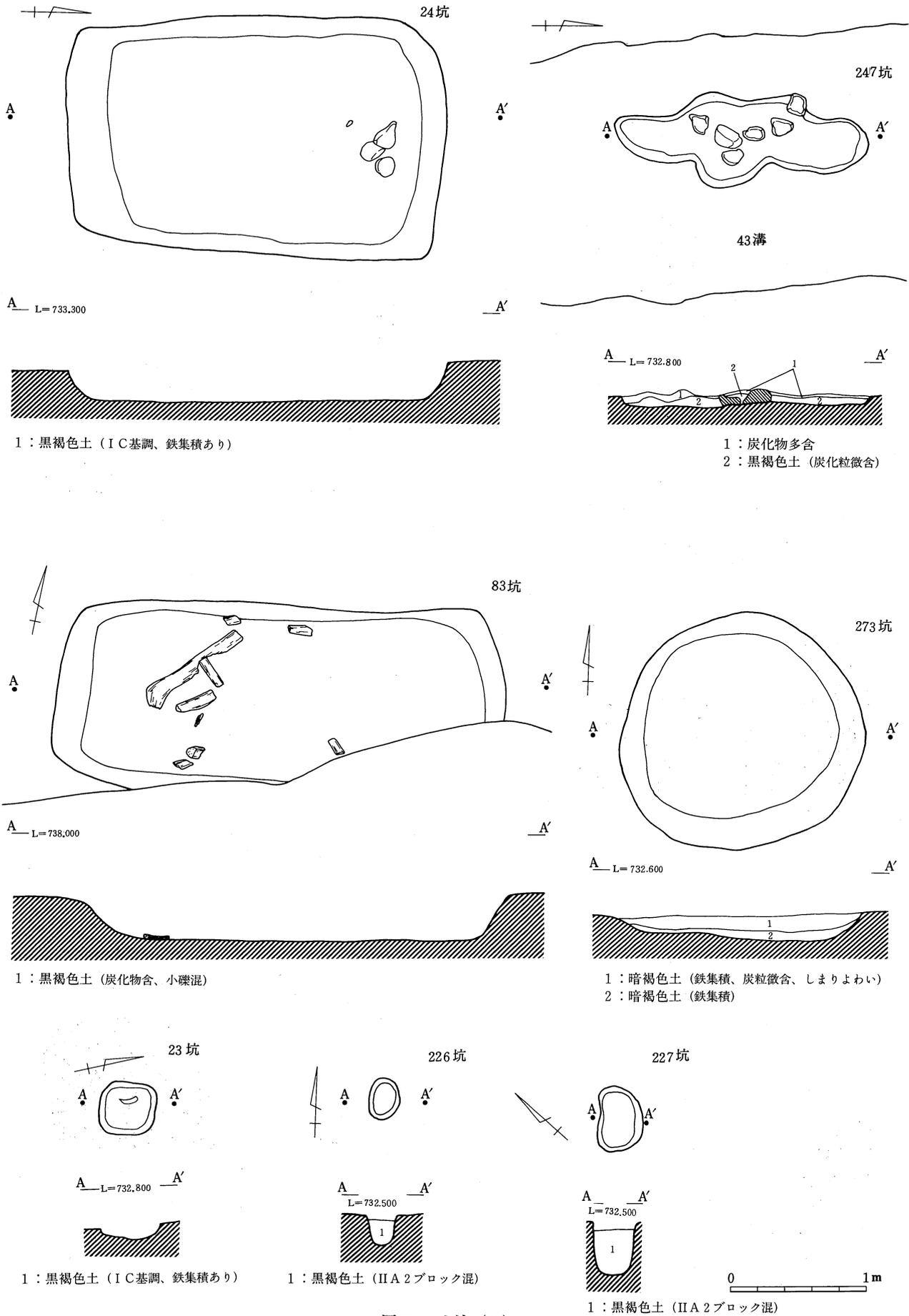


図234 土坑 (2)

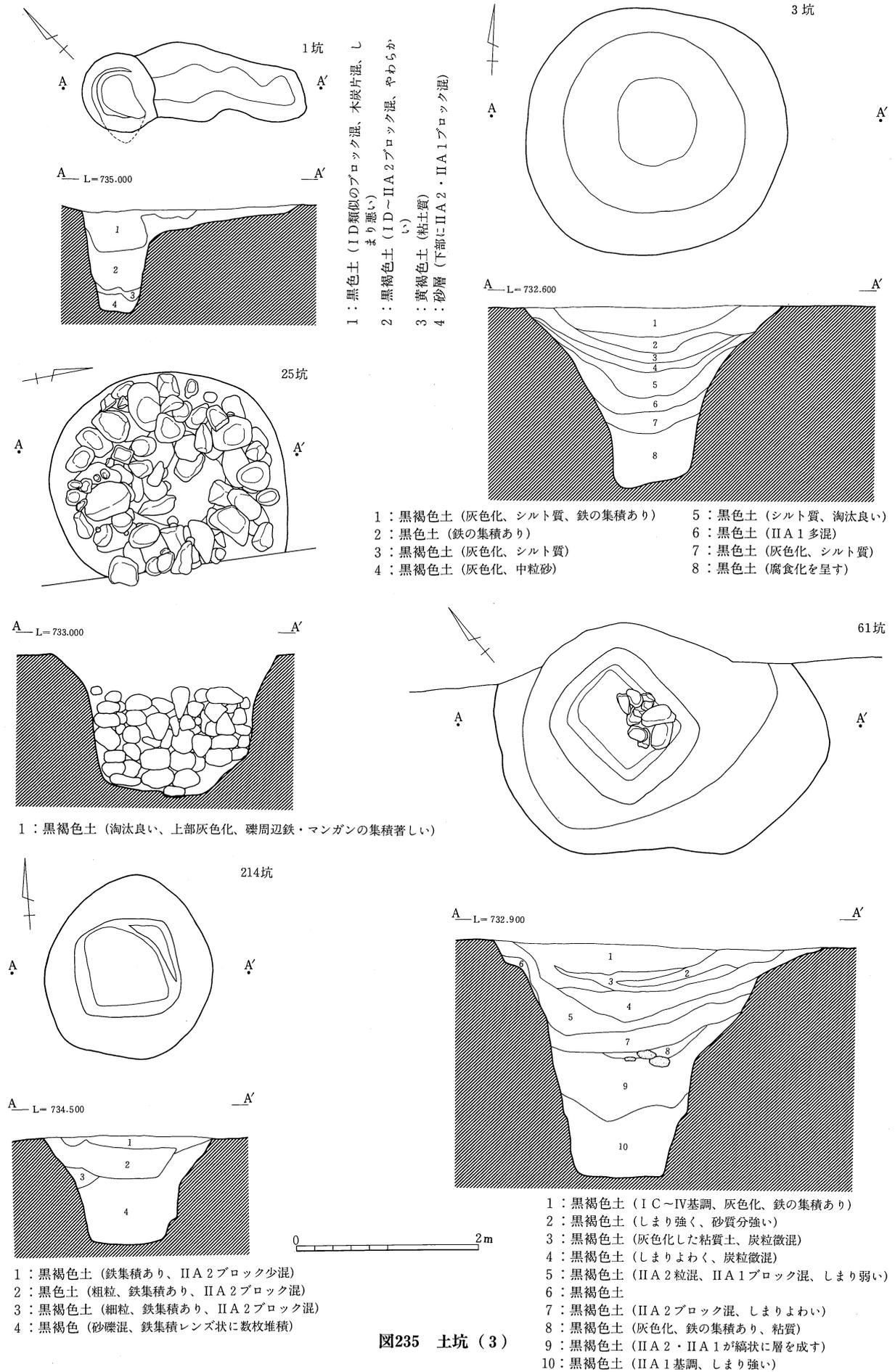


図235 土坑 (3)

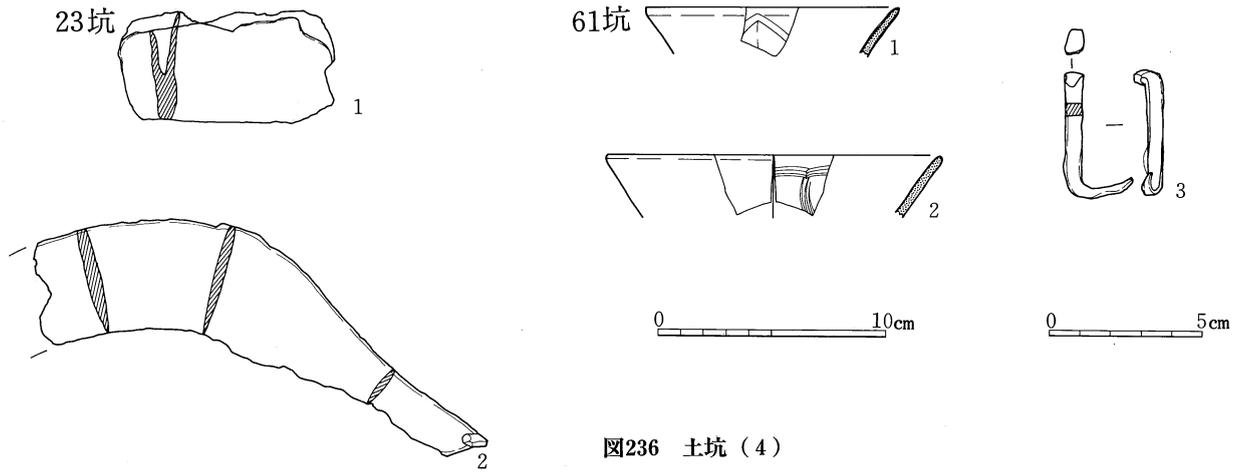


図236 土坑（4）

本址に伴う施設であった可能性がある。形態としては井戸状を想起させる。

25号土坑 (図235、PL188)

本址はⅧL-13グリッドに位置する。I D層で検出された。254 cm×225 cm の円形を呈し、深さ180 cmをはかる。覆土は上部で若干グライ化状であった。礫が内側に積み上げられ、礫の底部には鉄分の集積が著しい。水利施設と判断され、井戸であった可能性が高い。馬骨片・粉が覆土中に認められている。

214号土坑 (図235、PL189)

本址はⅧA-09グリッドに位置する。II A2層上面で検出された。198 cm×186 cm の円形を、中断より下は方形を呈す。深さは34 cmをはかる。井戸状を呈すが浅い掘り方である。

61号土坑 (図235・236、PL188)

本址はⅧN-23グリッドに位置する。II A1層上面で検出された。357 cm×203 cm の円形を、中段より下部で方形を呈するようになる。深さは260 cmをはかる。覆土は9層上面で礫の集中が認められ、底部に砂層が認められた。形態から井戸と判断したい。龍泉窯系の蓮弁文碗・蓮弁文碗(画花文)、鉄釘が出土。

カ 遺構外出土遺物 (中世、図237)

出土遺物は志野焼1 (1)、龍泉窯系の青磁で画花文折縁鉢2 (2)、同系の青磁で蓮弁文碗1、雷文碗1、龍泉窯系の口はげ白磁皿1 (4)、産地、器種不明の青磁1 (3) が出土している。鉄製品はキセル1 (5)、寛永通宝銭4枚、鉄滓206 g が出土している。2は13~14世紀前半に比定される。

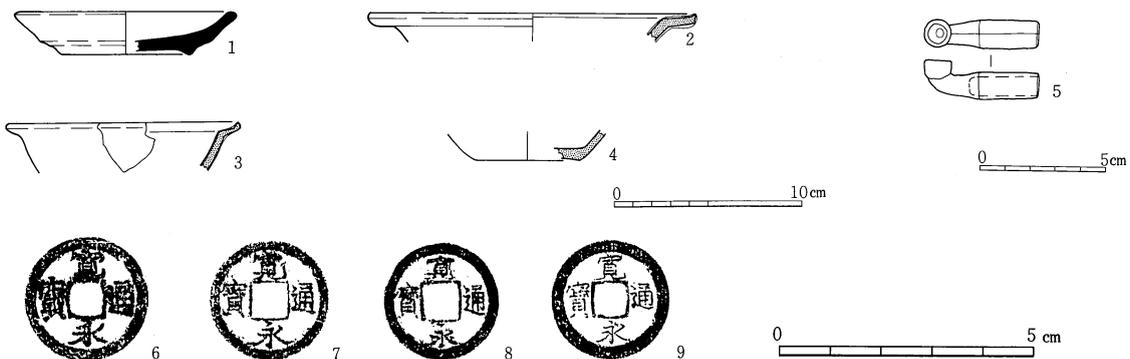


図237 遺構外出土遺物

iii C地区

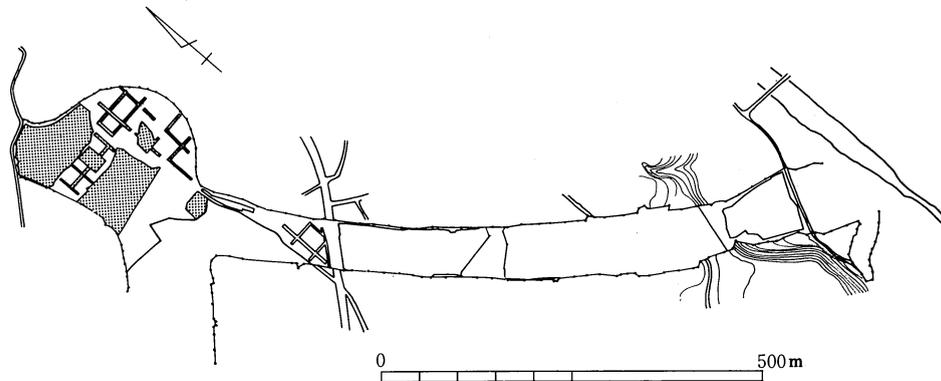


図1 C地区の位置・調査範囲

(1) 概観

C地区は、浅間軽石流(火砕流)を基盤とした台地上、佐久インターチェンジ部分にあたる。標高は740 m前後でB地区よりも若干高い。調査対象面積の約半分が埋没した田切り地形内であることが確かめられ、田切り地形に浸食されなかった調査区西半分でおもに平安期の遺構を確認した。しかし、遺構が検出されたこの地域も東西に走る2本の田切り地形に浸食され、とくに北側で田切り地形に破壊された住居址が数多く認められている。さらに西赤座遺跡に接する付近ではごく部分的に住居址と判断される遺構が残存しているに過ぎないといった状況であった。

検出された遺構は以下のとおりである。

住居址	……………40軒
掘立柱建物址	……………54棟
溝址	……………41本 (暗渠30含)
柵列	……………1列
土坑	……………294基

ほとんどの住居址・掘立柱建物址は、9世紀代の所産であると判断している。溝は、39号溝址を除いて新しい時期のもので、該期の集落にともなうものではないと考えたい。

遺構配置は東西を走る田切り地形の北と南であり方が異なっていた。北側の掘立柱建物址は東西に直線状に並び、南側に住居址が並ぶ。対して南側では住居址が集中する傾向が認められ、さらに両者の主軸方向が明らかにズレていることが一見されよう。また、掘立柱建物址はその多くが棟方向を東西に向けていて、全体としてB地区とは違った様相を呈していた。

なお、17号住居址は居住空間と考え難いが、本地区ではあえて特殊遺構としなかった。

住居址・掘立柱建物址の一覧を本節巻末に付した。

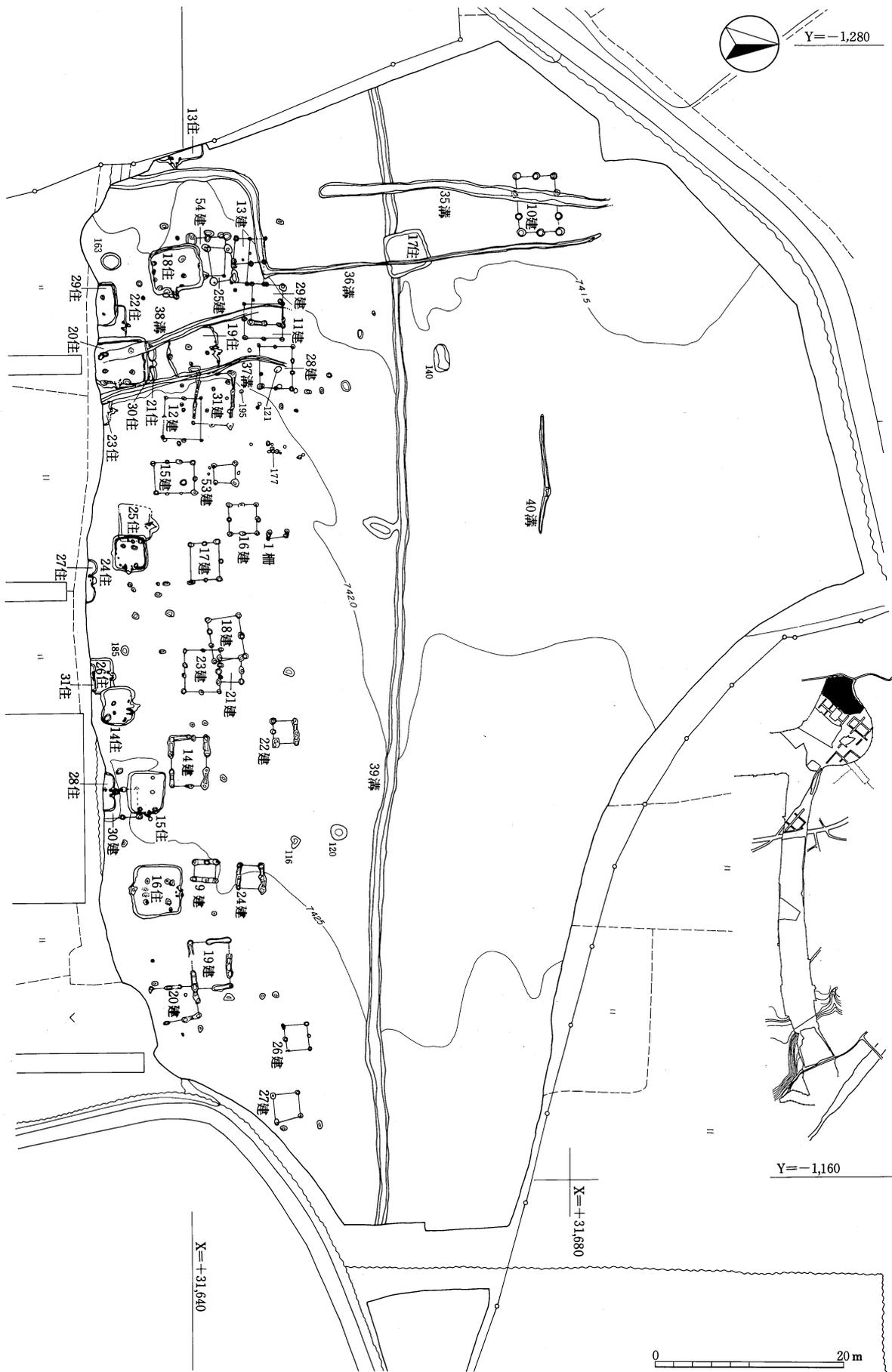


图2 遺構配置(1)



图3 遺構配置(2)

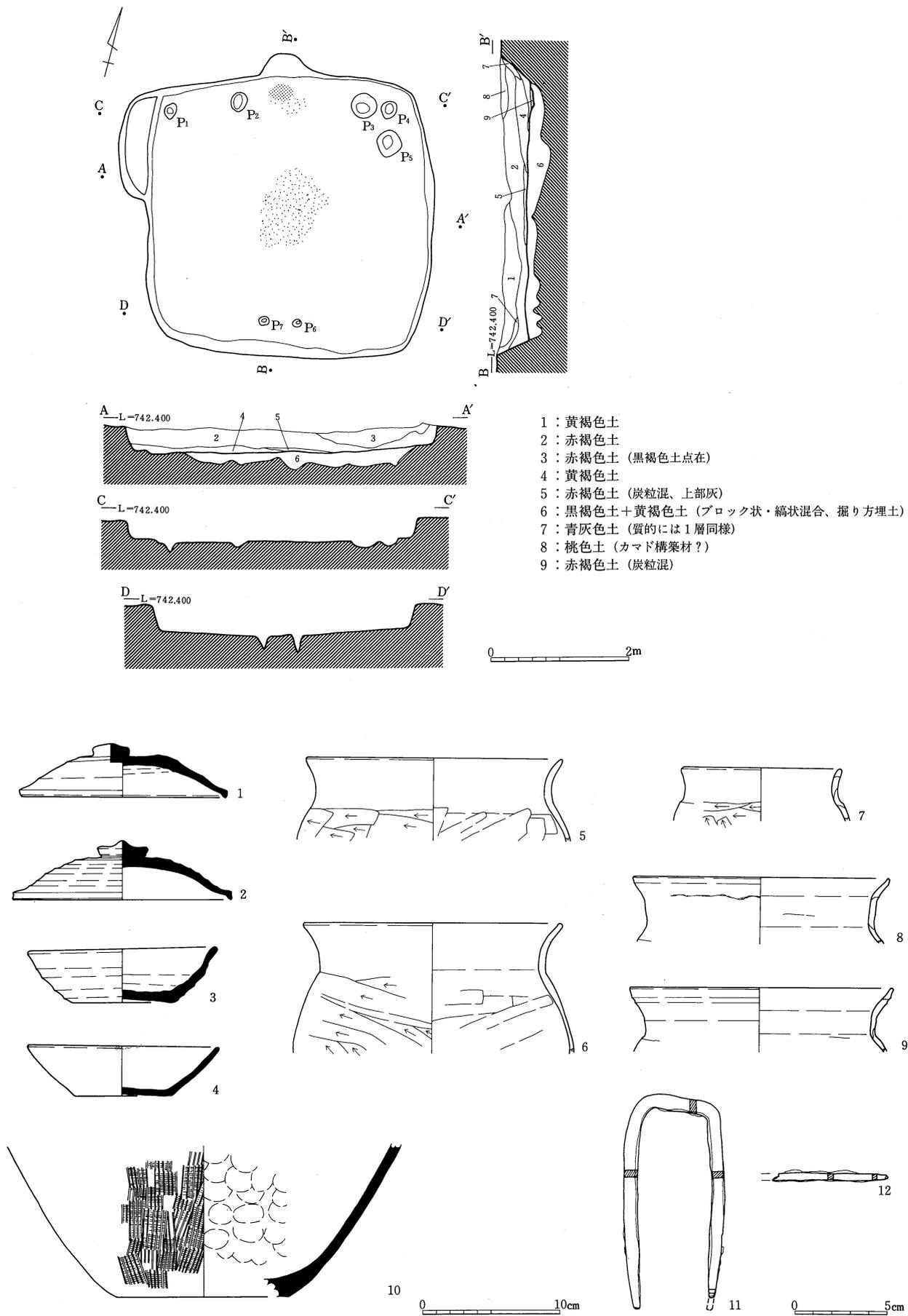


図4 1号住居址

(2) 遺構と遺物

ア 住居址

1号住居址 (図4、PL228・245・253)

II A 2層上面で検出された。覆土は赤褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックを混入する黒褐色土が埋め戻され、上面がたたきしめられ床面を形成する。全体に堅緻で平坦であった。西壁に床面より若干高いテラス状の張り出しが認められた。ピットは7基確認され、P6・7は出入り口施設にかかわるものと推察される。カマドは床面レベルで火床のみが検出された。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏12(3・4)・蓋3(1・2)・四耳壺1(10)、土師器甕6(5・6・8・9)・小形甕(台付き甕を含む)2(7)・内面黒色坏小片2・碗小片1個体分が出土している。金属器は鋸状の鉄器(11)・紡錘車軸と思われる棒状の鉄製品(12)・鉄滓は29gとわずかに出土した。1・4・6・11は床面近くから出土している。

時期 土師器甕の口頸部・須恵器坏の形態から4・5段階頃の所産と考えられる。

2号住居址 (図5)

II A 2層で検出された。周囲は、用水路、「田切り地形」による浸食を受け、北西隅部のみ残存した。カマドは確認されず、P2に土器片の集中が認められた。貯蔵穴に類した施設と考えられる。確認された範囲内では床面は平坦で堅緻であった。床面からは炭化したワラが若干検出された。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。須恵器坏6(1~4)、土師器甕1(6)・小形甕1(5)個体分が出土した。石器は擦石(1)・鉄滓18gとわずかに出土している。

時期 土師器甕の口頸部の形態から6~7段階頃と思われる。

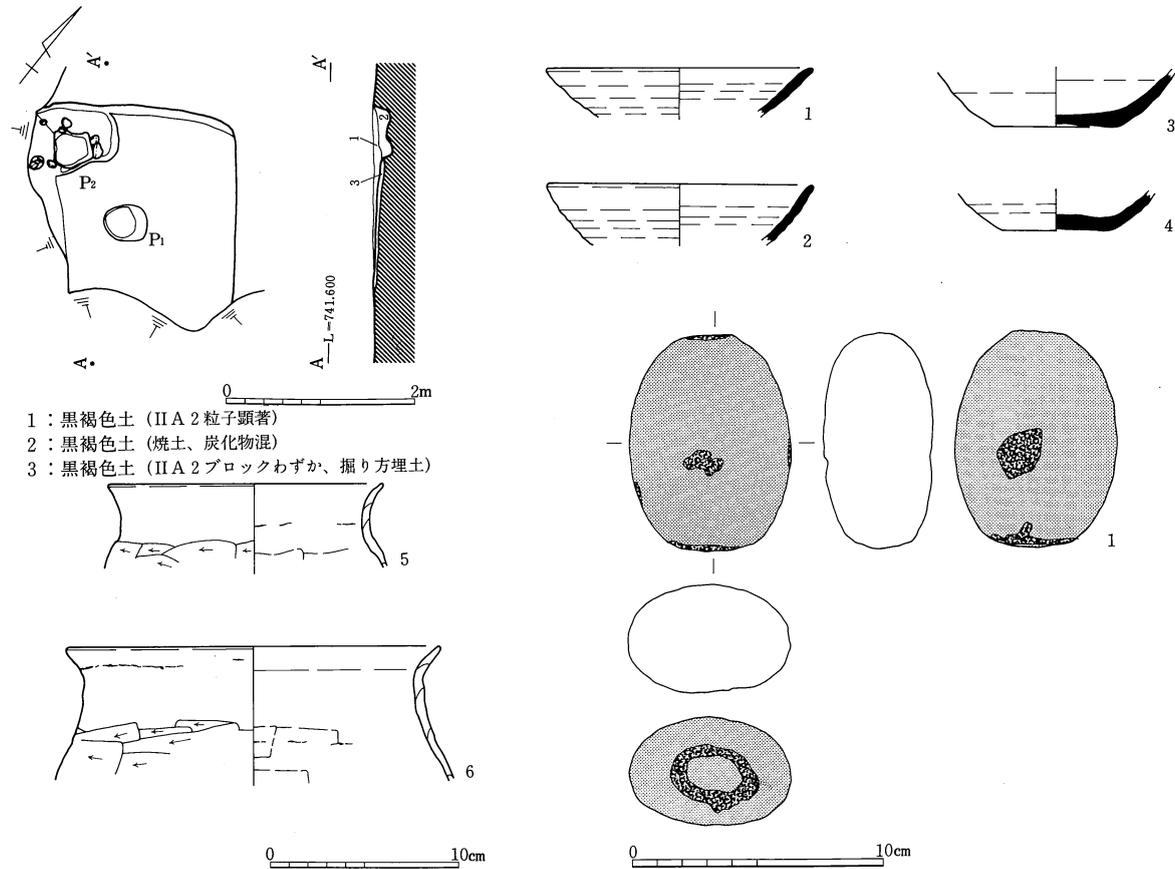


図5 2号住居址

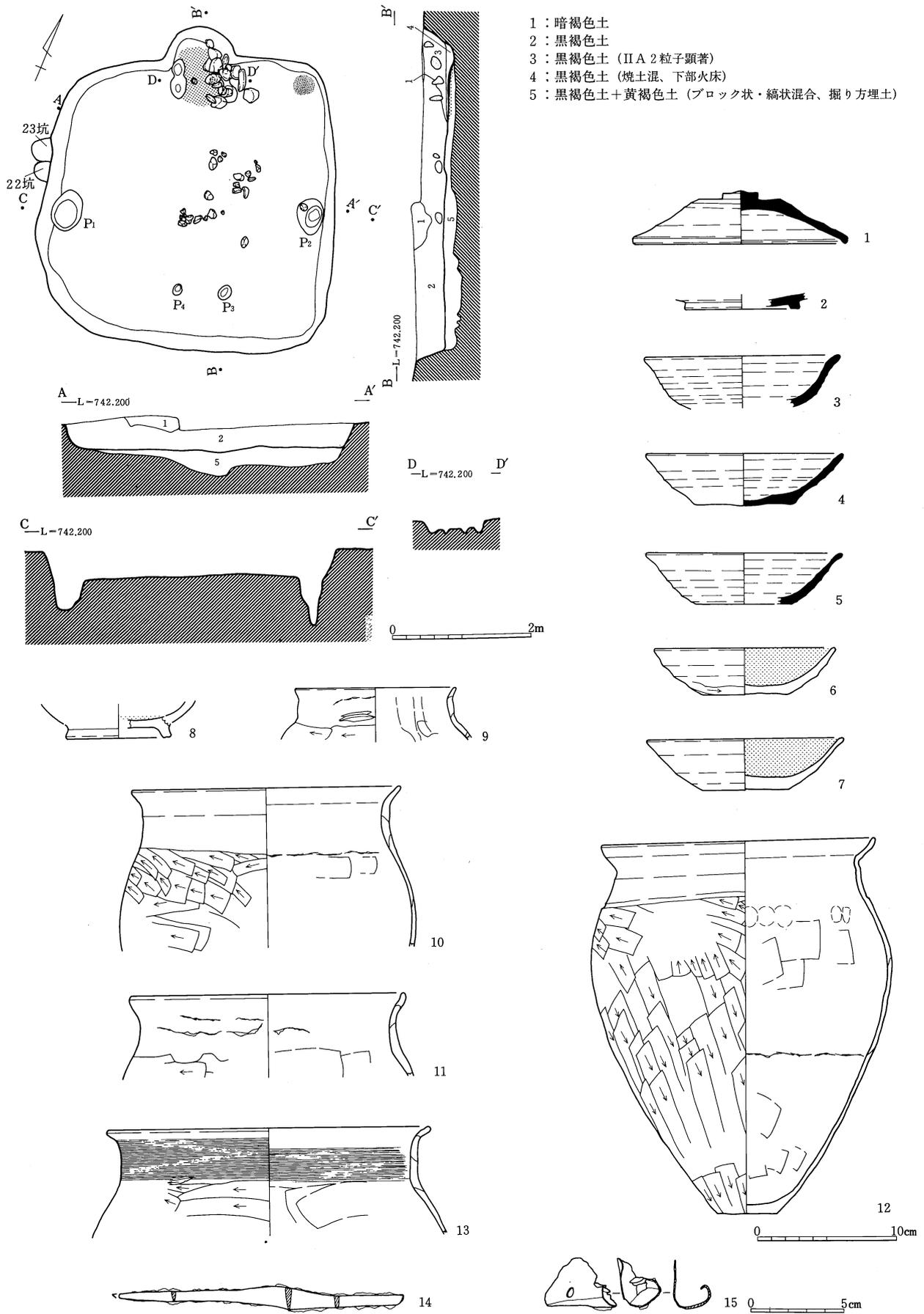


図6 3号住居址

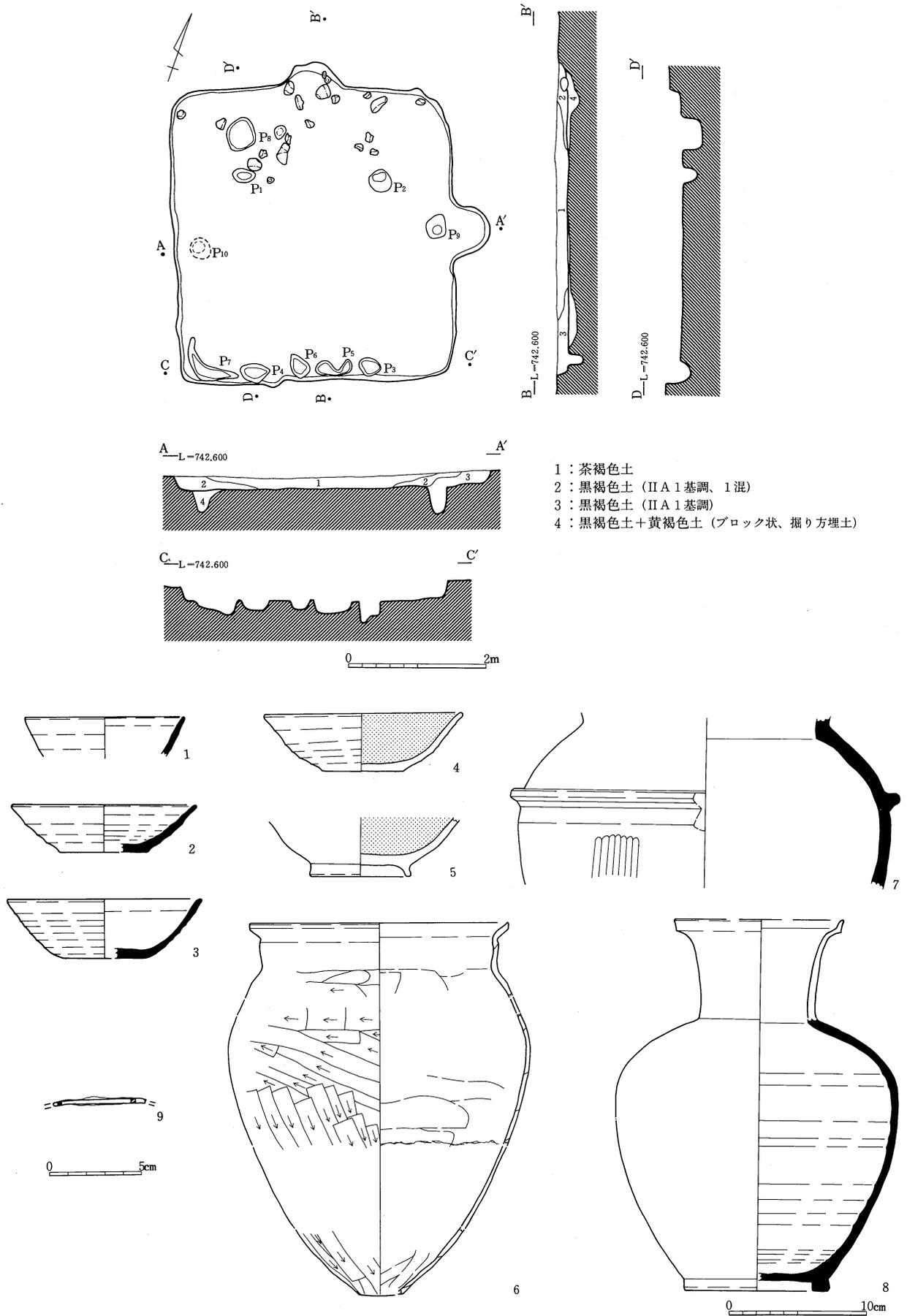


图7 4号住居址

3号住居址 (図6、PL228・245)

II A 2層で検出された。11号土坑を切り、8・22・23号土坑に切られる。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの黒褐色土が埋め戻され、その上面が床面となる。全体にたたきしめられ、凹凸が認められた。ピットは4基確認され、P1・P2が柱穴と判断され、P3・P4は出入り口施設にかかわるものと思われる。カマドは破壊を受け、カマドに使用されたとと思われる礫が多数認められた。また両袖部には袖石の抜き取り痕が、燃焼部中央には袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが2穴検出された。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2(2)・坏11以上(3~5)・蓋1(1)・甕1・長頸瓶1・ミニチュア壺類1、土師器甕4(10~13)・小形甕1(9)・小形ロクロ甕1・内面黒色坏5(6・7)・碗2(8)個体分出土している。金属器は刀子(14)・不明鉄製品(15)が出土している。総体的に床面直上およびその付近から出土したものが多くカマド右袖からは1・12・14が出土した。

時期 甕・坏の形態から6・7段階頃と考えられる。

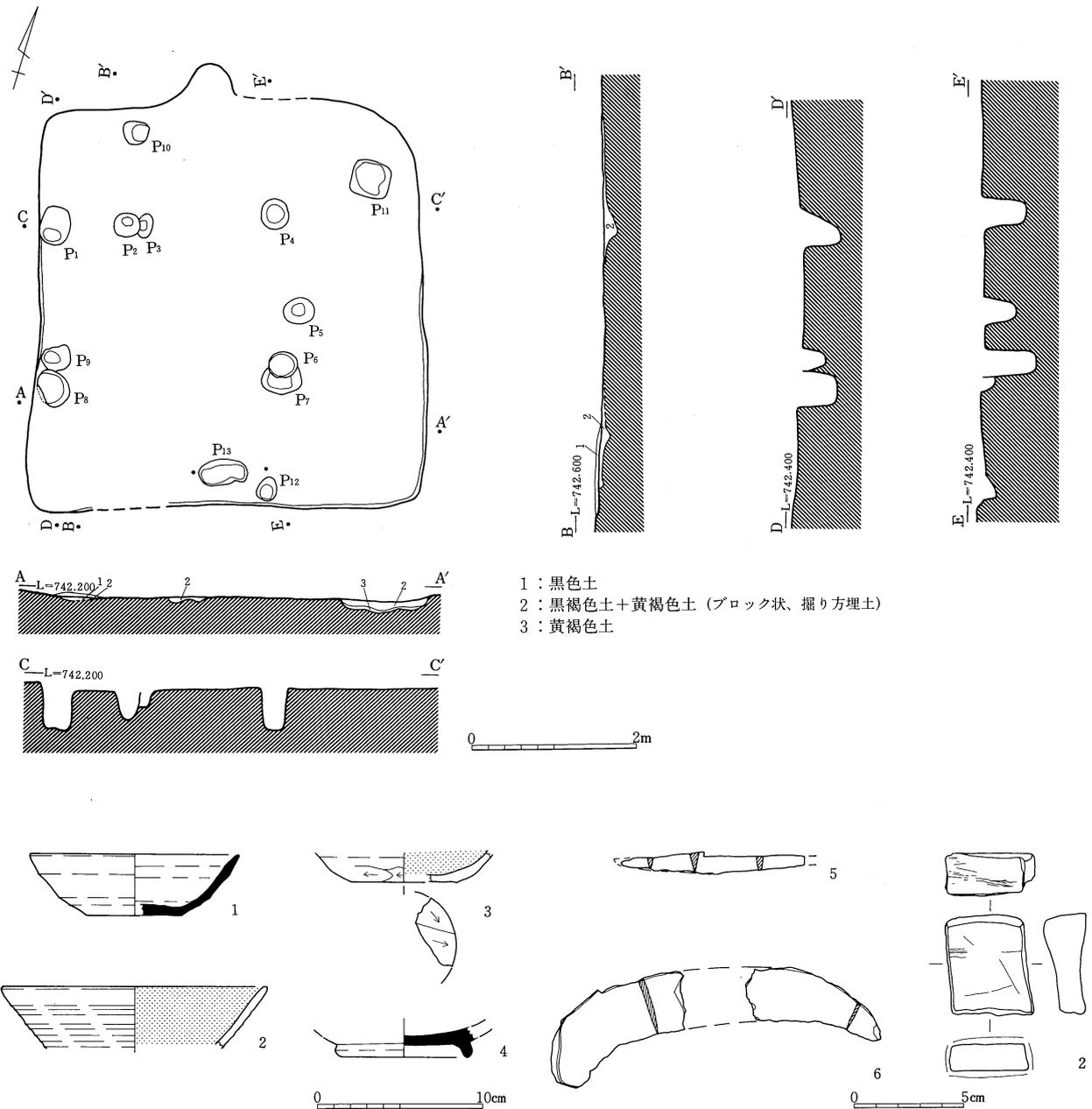


図8 5号住居址

4号住居址 (図7、PL228・245)

II A 2層上面で検出された。覆土は茶褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、四隅を除いて地山面を利用したものである。四隅はII A 2ブロック混じりの黒褐色土が埋め戻されていた。ピットは9基確認され、P1~4が柱穴と判断される。P9は壁の張り出し部に呼応するような位置に検出され、掘り方もしっかりしている。張り出し部に、やや土器が集中して認められた。P5・6は出入口施設にかかわるものと推察される。カマドは焼土・火床は検出されず、炭化粒の分布が認められたにすぎず、袖石

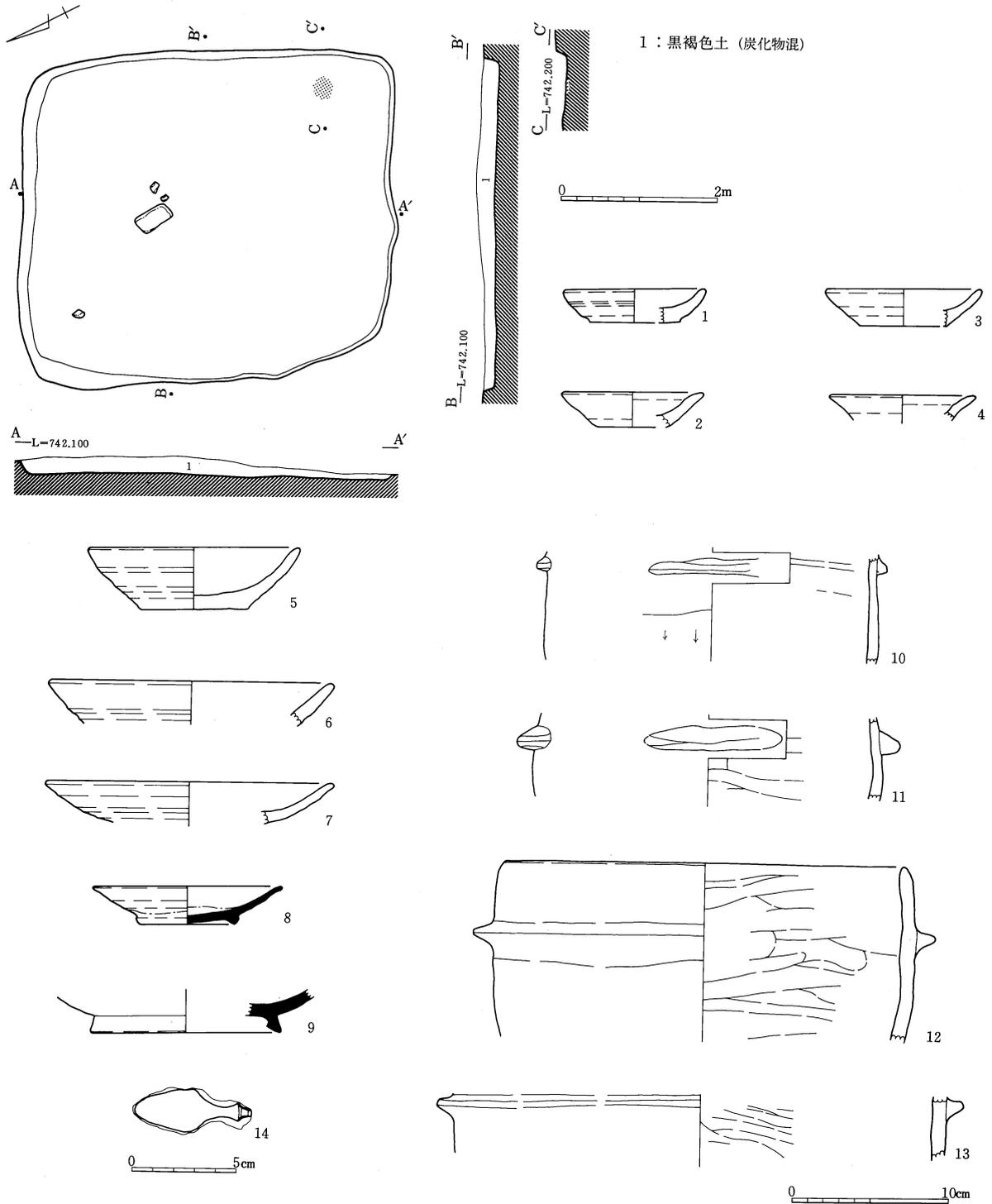


図9 6号住居址

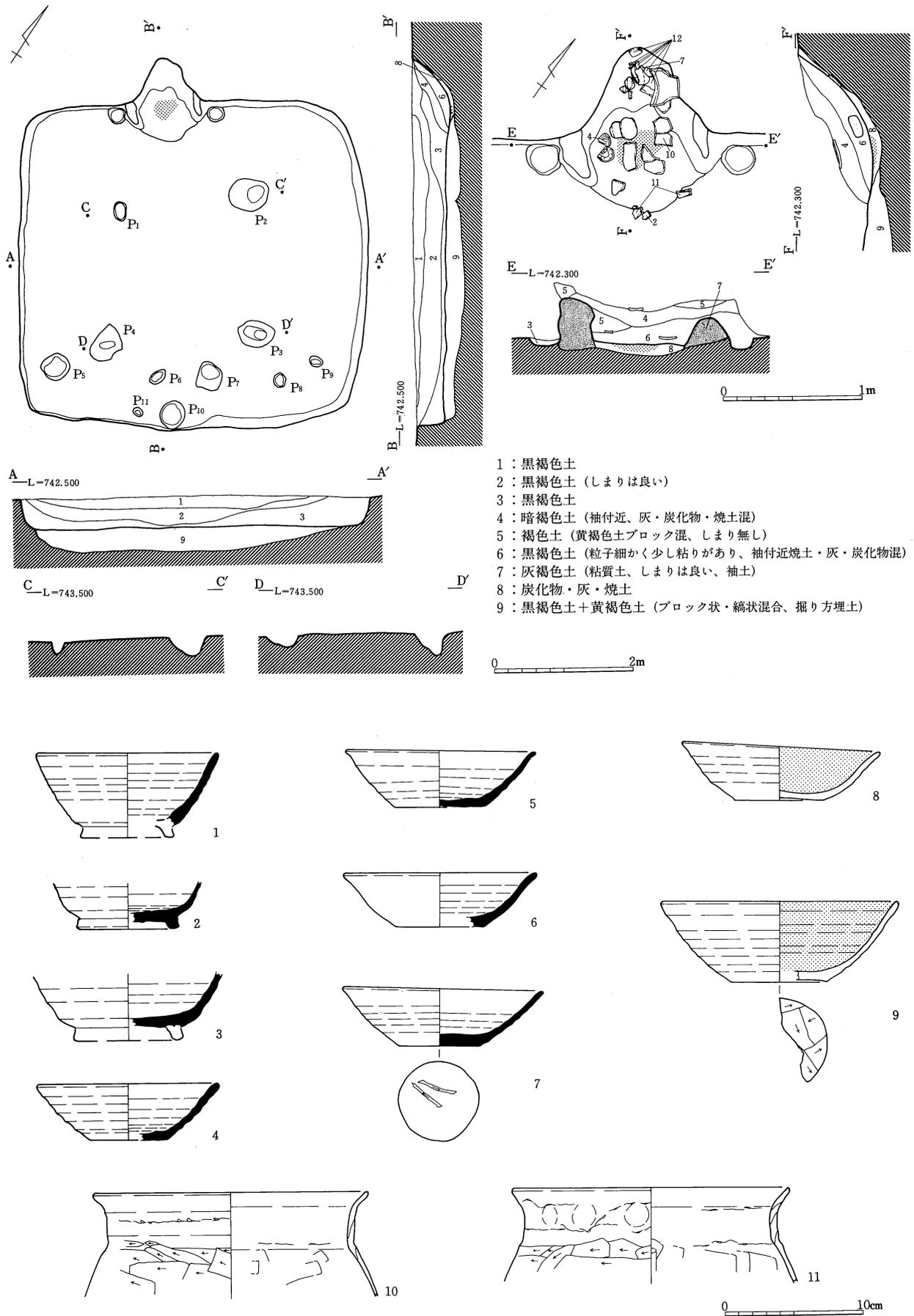


図10 7号住居址 (1)

が2点原位置を留めていた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏14(1~3)・甕1・四耳壺1(7)・広口甕1・長頸瓶1(8)、土師器甕4(6)・小形甕1・内面黒色坏5(4)・碗3(5)・皿2・内面黒色広口甕1個体分が出土している。金属器は紡錘車の軸と思われる棒状の鉄製品(9)が出土している。覆土中から出土した遺物が多かったが、3・6・8は床面直上から出土した。

時期 甕・坏の形態から8段階の所産と考えられる。

5号住居址 (図8、PL228・253)

II A 2層上面で検出された。若干の壁と全体のプランが確認されたに留まった。覆土はほとんど残っていない。床は部分的に掘り方が認められるが、全体に地山面を堅緻にたたいた床面であった。ピットは13基確認され、P1・4・6・8がその位置から支柱穴と判断される。P7・9などは柱の立て替えの可能性が考えられる。

遺物 住居址の残存状態が悪く遺物の出土量はあまり多くない。須恵器坏1(1)・広口甕1・長頸瓶1、土師器甕3・内面黒色坏4(2・3)・皿1、灰釉陶器碗1(4)個体分が出土している。金属器は刀子1(5)・鎌1(6)、石器は砥石1(2)が出土している。4はP1内から出土した。5は刃区^{はまち}が認められない。

時期 坏の形態から8段階頃の所産と考えられる。

6号住居址 (図9、PL228・245・253)

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面を利用したもので、あまり堅緻ではなかった。カマドは床面と同レベルの火床が検出されたにすぎなかった。

遺物 遺物の出土量は、土師器小形甕1・内面黒色坏小片2・羽口1、土師質土器小皿3(1~3)・小形碗1(4)・坏3(5)・皿2(6・7)・大形羽釜3以上(12・13)・小形羽釜3以上(10・11)・灰釉陶器皿1(8)・短頸壺1(9)個体分が出土している。金属器は鉄鍬(14)・鉄滓299gが出土している。8は東濃産で丸石2号窯式に比定される。10・11は鏝が4か所に付く羽釜である。C地区の住居址の中で唯一平安時代後期に属し単独で所在することから覆土中の遺物は本址のものと思われる。

時期 本址は15段階に属する。

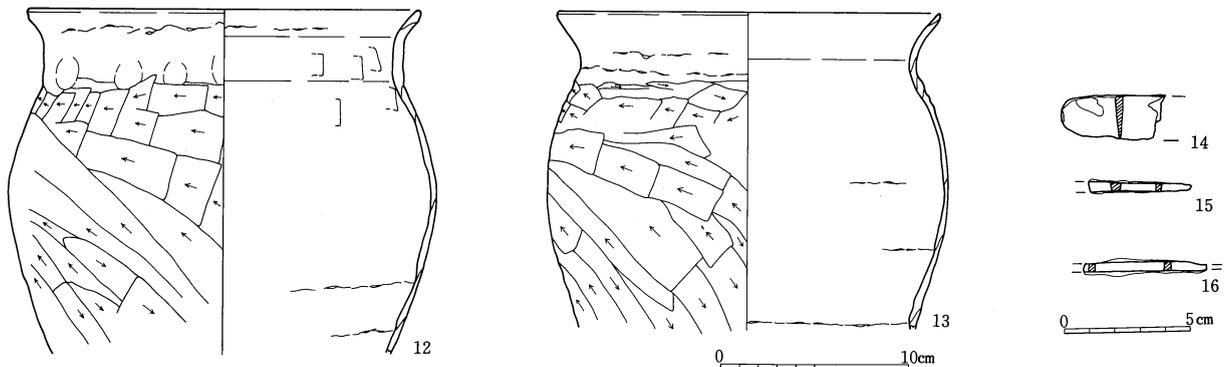


図11 7号住居址(2)

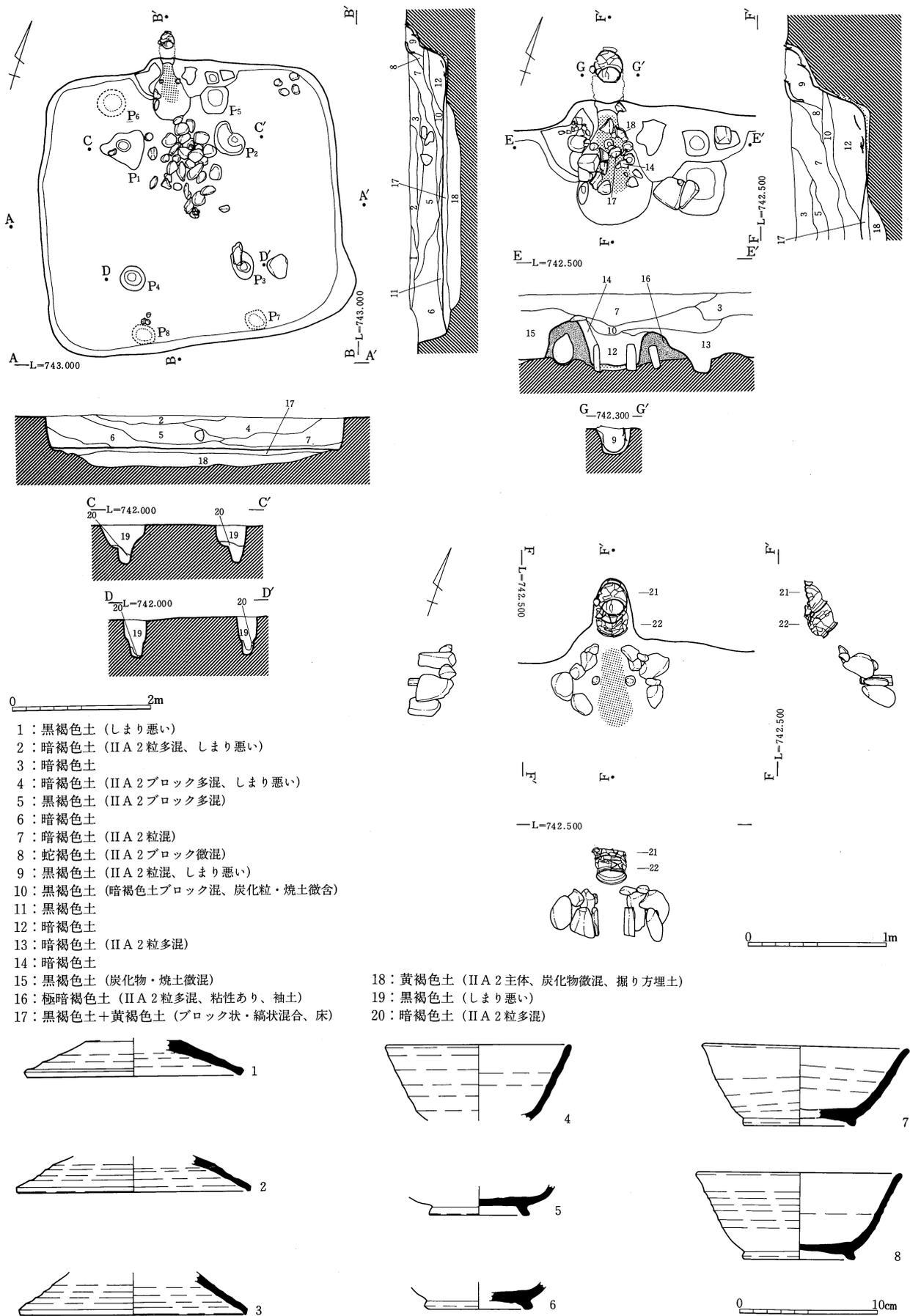


図13 9号住居址(1)

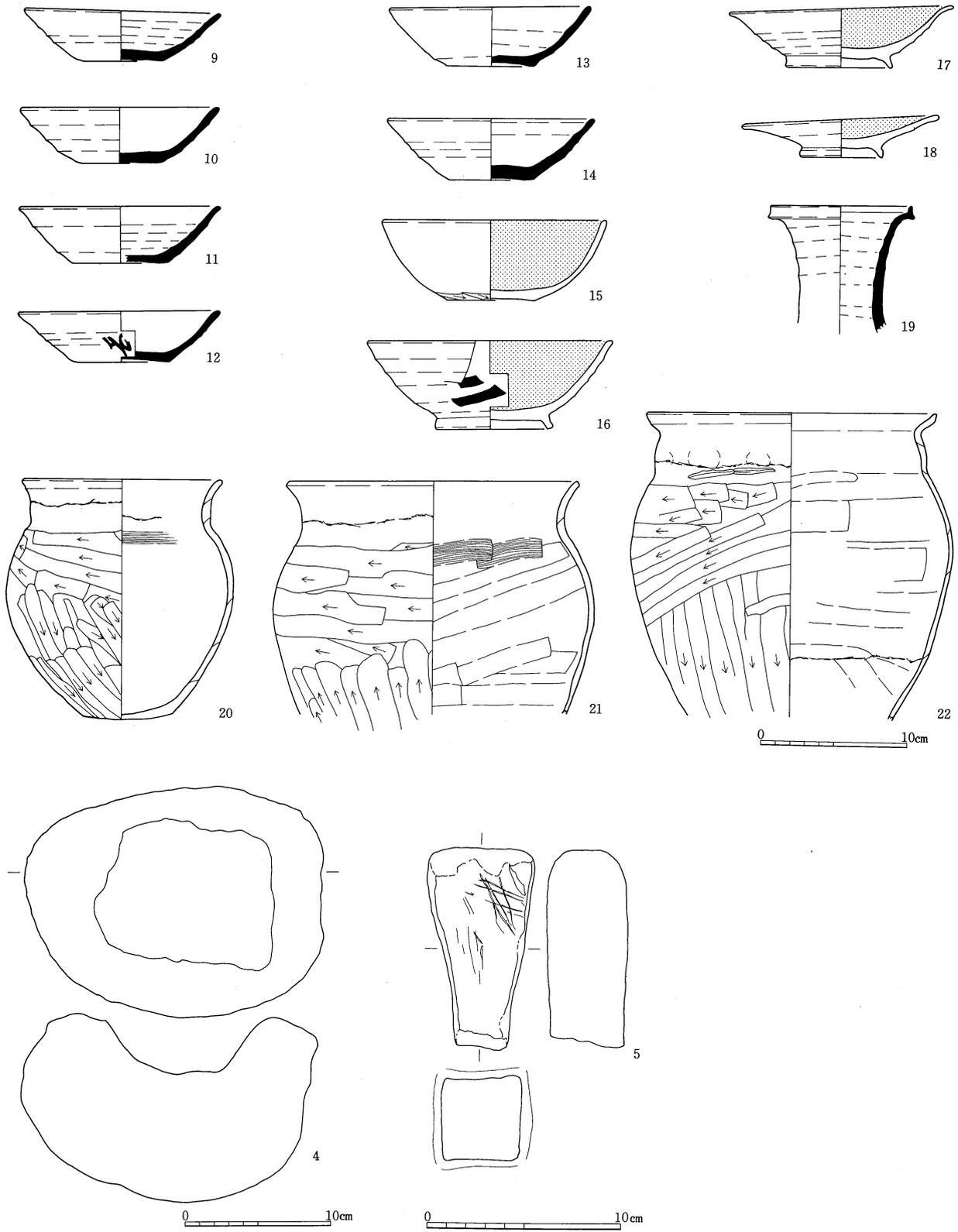


图14 9号住居址(2)

8号住居址 (図12、PL229・246)

II A 2層上面で検出された。9号住居址、91・92号土坑に切られる。覆土はII A 2ブロック混じりの暗褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックを混入する暗褐色土が埋め戻され、その上面が床面となる。周溝は東壁、西壁に幅約10 cm、深さ9 cm前後で検出された。ピットは床面で4基確認され、柱穴と判断される。また床下より5基のピットが検出され、このうちP5～8が柱穴と判断されることから、柱の建て替えがあったと推察される。カマドは張り出し、内壁ラインより外に火床がある。袖部に両袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが4基確認されている。張り出しの両壁は段を持って立ち上がり、テラス状で、テラス面は堅緻であった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2 (2)・坏7 (3～5)・蓋2 (1)・甕2、土師器甕3 (7)・碗1・坏碗不明3 (6) 個体分が出土している。石器は紡錘車(3)が出土している。以上のように量はわずかでそのほとんどは床面近くの覆土中から出土している。5は前述のような状況で検出され9号住居址の2層出土の破片と接合している。須恵器甕は7・9号住居址と接合している。

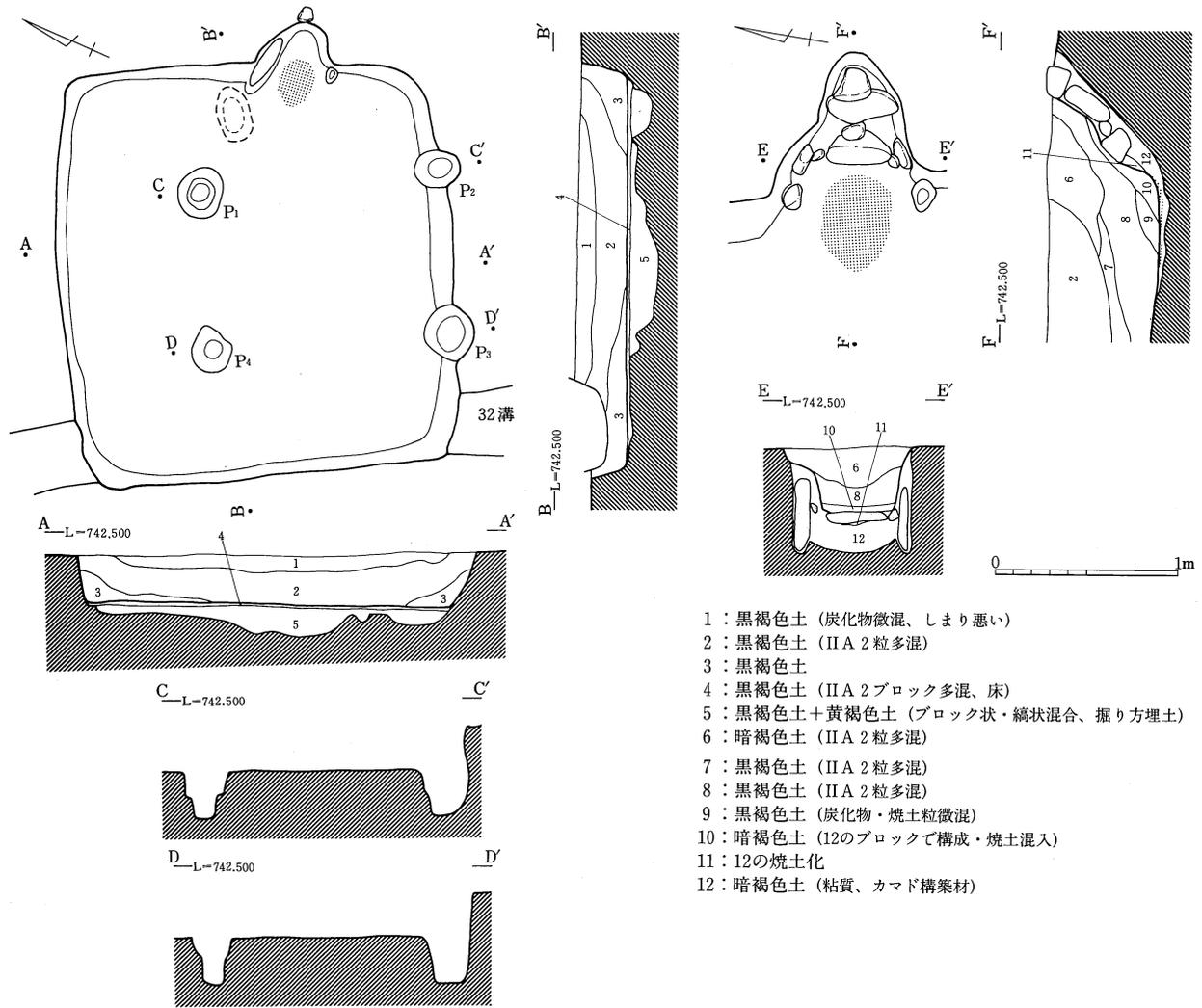
時期 住居址に帰属する遺物はほとんどないため、9号住居址との切り合いからその時期以前である。

9号住居址 (図13・14、PL229・246)

II A 2層上面で検出された。8号住居址、93号土坑を切る。覆土は暗褐色土主体の自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混入の黒褐色土を埋め戻し、その上面を床面としてたたきしめ平坦にしていた。ピットは6基確認され、P1～4は柱穴と判断される。また床下から3基のピットが確認され、P5～6は掘り方もしっかりしており、柱の立て替えによるものと推察される。カマドは遺存状況が良好であった。煙道部には3個体の甕が逆位で配され、極暗褐色土の構築材によって石組を覆って整形していることが観察される。支脚石は2本検出され、その間に細長い焼土範囲を持つ火床が認められた。

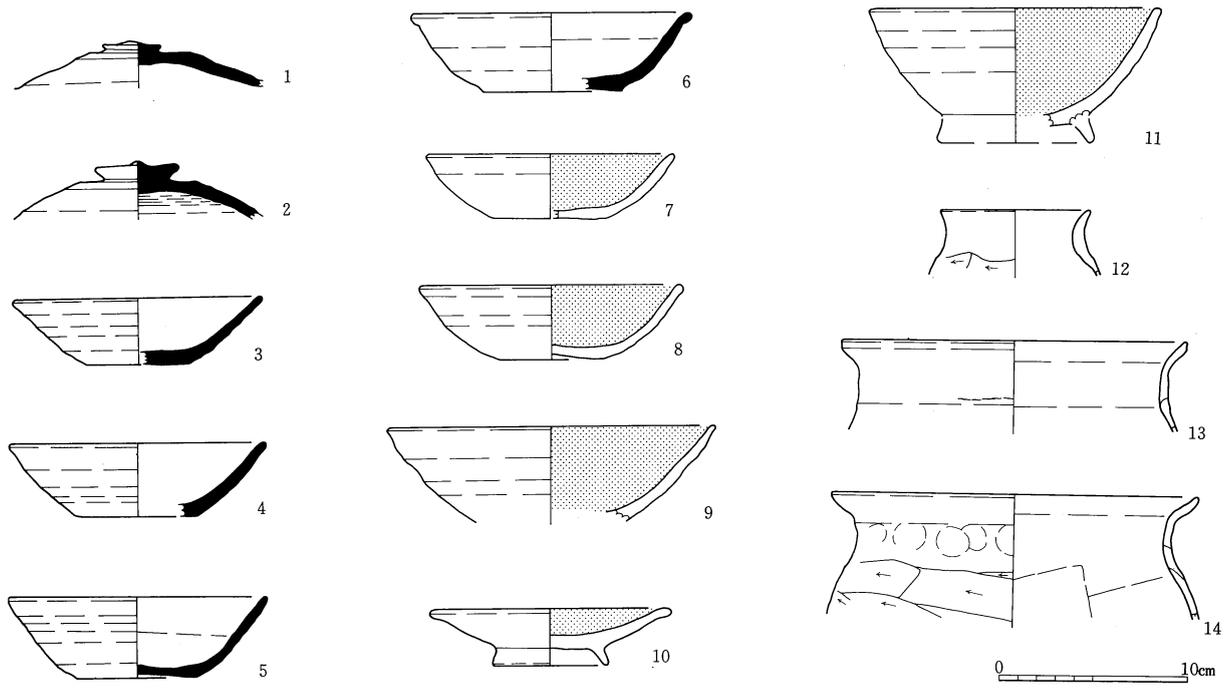
遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏6 (4～8)・坏14以上 (9～14)・蓋3以上 (1～3)・皿1・甕1・中形甕1・長頸瓶2 (19)、土師器甕6 (21・22)・小形甕2 (20)・小形ロクロ甕1・内面黒色坏9以上 (15)・碗2 (16・17)・皿1 (18)、灰釉陶器器種不明1片、個体分が出土している。石製品は石臼(4)・砥石(5)が出土している。21・22はカマド煙道(煙突)に使用されていた。14・17・18はカマド内から、7・11・12・16・20は床面直上から出土した。12・16には墨書が書かれ、12は「名」・16は「二」である。

時期 甕口縁の形態から6段階頃の所産と思われる。



- 1: 黒褐色土 (炭化物微混、しまり悪い)
- 2: 黒褐色土 (IIA 2粒多混)
- 3: 黒褐色土
- 4: 黒褐色土 (IIA 2ブロック多混、床)
- 5: 黒褐色土+黄褐色土 (ブロック状・縞状混合、掘り方埋土)
- 6: 暗褐色土 (IIA 2粒多混)
- 7: 黒褐色土 (IIA 2粒多混)
- 8: 黒褐色土 (IIA 2粒多混)
- 9: 黒褐色土 (炭化物・焼土粒微混)
- 10: 暗褐色土 (12のブロックで構成・焼土混入)
- 11: 12の焼土化
- 12: 暗褐色土 (粘質、カマド構築材)

0 2m



0 10cm

図15 10号住居址

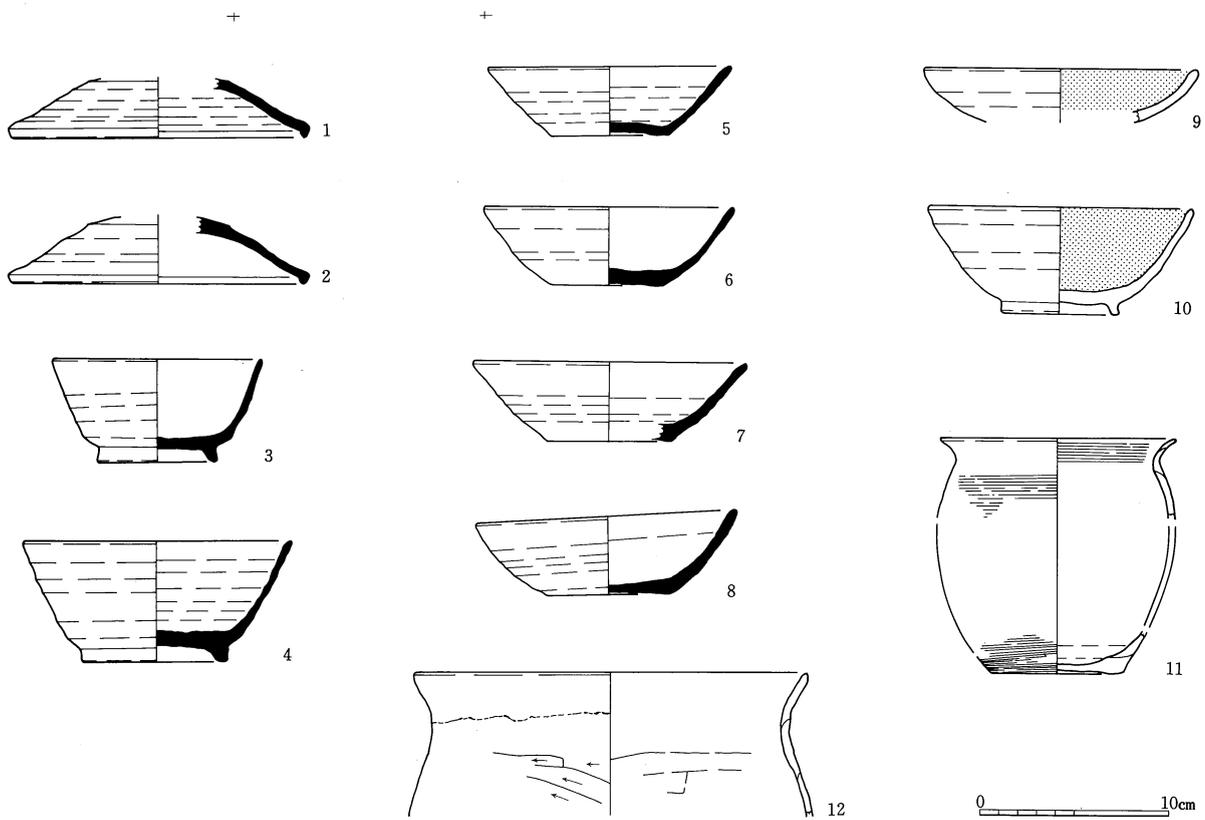
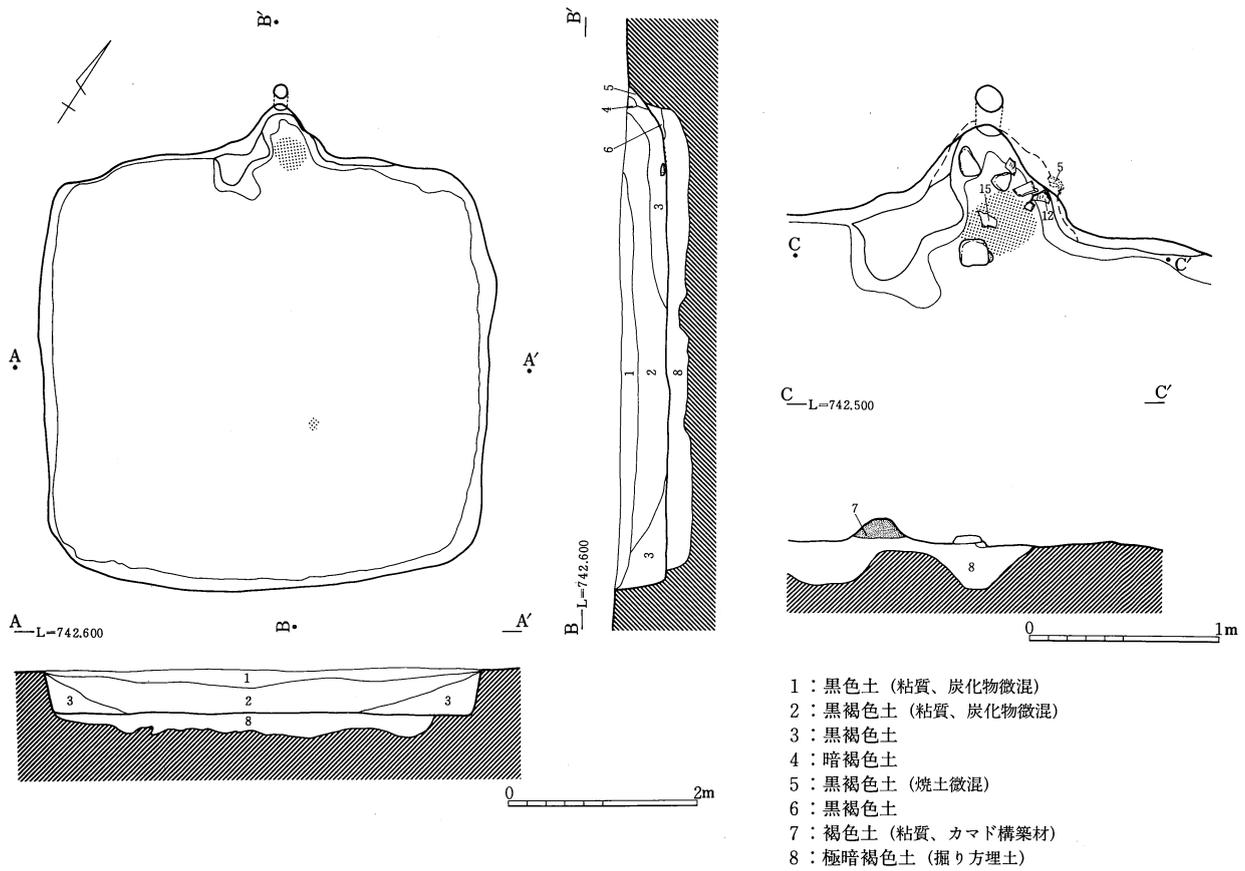


图16 11号住居址 (1)

10号住居址 (図15、PL229)

II A 2層上面で検出された。40号掘立柱建物址を切り、32号溝址に切られる。覆土はII A 2ブロック混じりの黒褐色土を主体とすることから、人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロック混じりの暗褐色土を埋め戻し、その上面をたたきしめた床面を形成する。全体に堅緻で平坦であった。ピットは4基確認され柱穴と判断されるが、P2・3は南壁を穿ち壁より張り出す形となるのが特徴的である。P5は床面では確認できず、床下で検出された。カマドは床面構築後に掘り込まれていた。面取り軽石礫を芯材として袖・奥壁部に配置し、暗褐色の粘質土で全体を整形していた。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏14以上 (3~6)・蓋3 (1・2)・四耳壺1・広口甕1・壺瓶類1、土師器甕6以上 (13・14)・小形甕1 (12)・内面黒色坏7 (7・8)・碗4以上 (11)・坏碗不明 (9)・皿3 (10)、灰釉陶器器種不明1片、以上の個体分が出土している。土器は破片が大半で覆土中出土遺物が多い。6・7・13は床下から出土した。1はかえり部分すべてが人為的に打ちかけられているが特別な使用痕は認められない。2はほぼ床直から出土したが9号住居址床下から出土した破片と接合した。

時期 甕の口縁から7から8段階頃と推測される。

11号住居址 (図16・17、PL229・247・261)

II A 2層上面で検出された。覆土はII A 2ブロックの混じる黒褐色土主体であることから、人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混入する黒褐色土を埋め戻し、堅緻な床面を形成し、全体に平坦であった。カマドは褐色土の構築材によって整形された左袖と、火床が検出された。また煙道部先端に径25cmのトンネル状の煙り出しが確認された。煙り出しの上部は暗褐色土を被せた状況が観察された。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2 (3・4)・坏11以上 (5~8)・蓋2 (1・2)・四耳壺2 (15・16)・長頸瓶1 (14)・ミニチュア長頸瓶1 (13)、土師器甕3 (12)・台付小形甕1・小形ロクロ甕1 (11)・内面黒色坏1・碗2 (10)・皿1 (9) 個体分が出土した。石製品は砥石 (6) が出土した。出土状況は埋土中のものが多い。

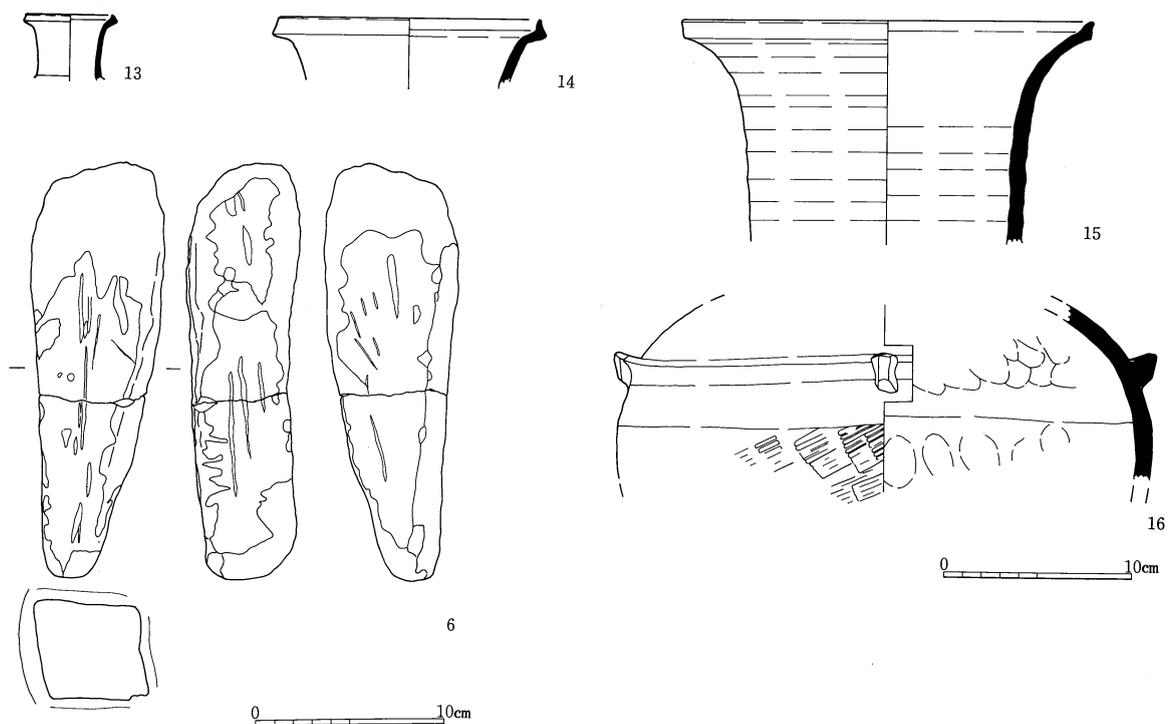


図17 11号住居址 (2)

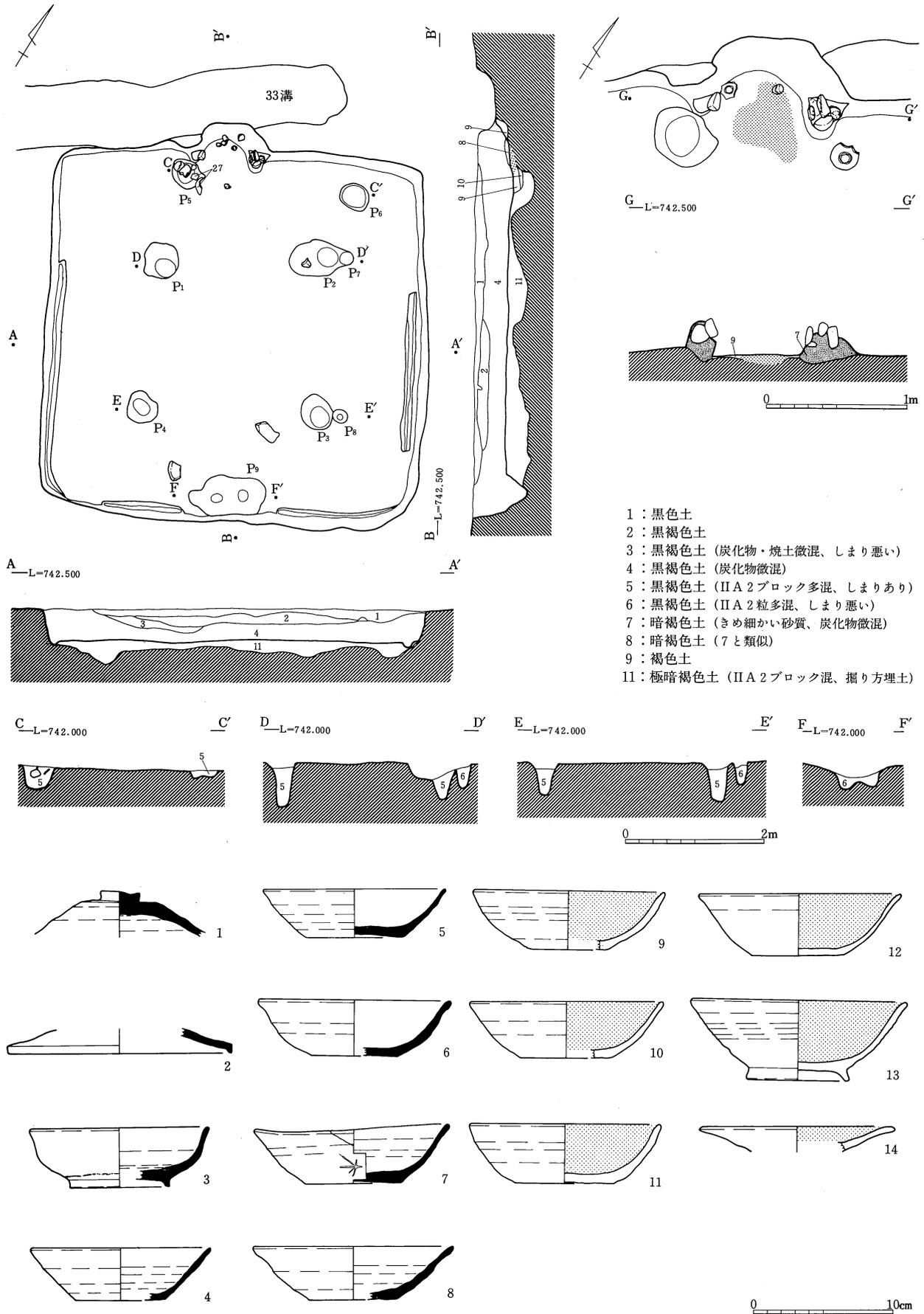


図18 12号住居址(1)

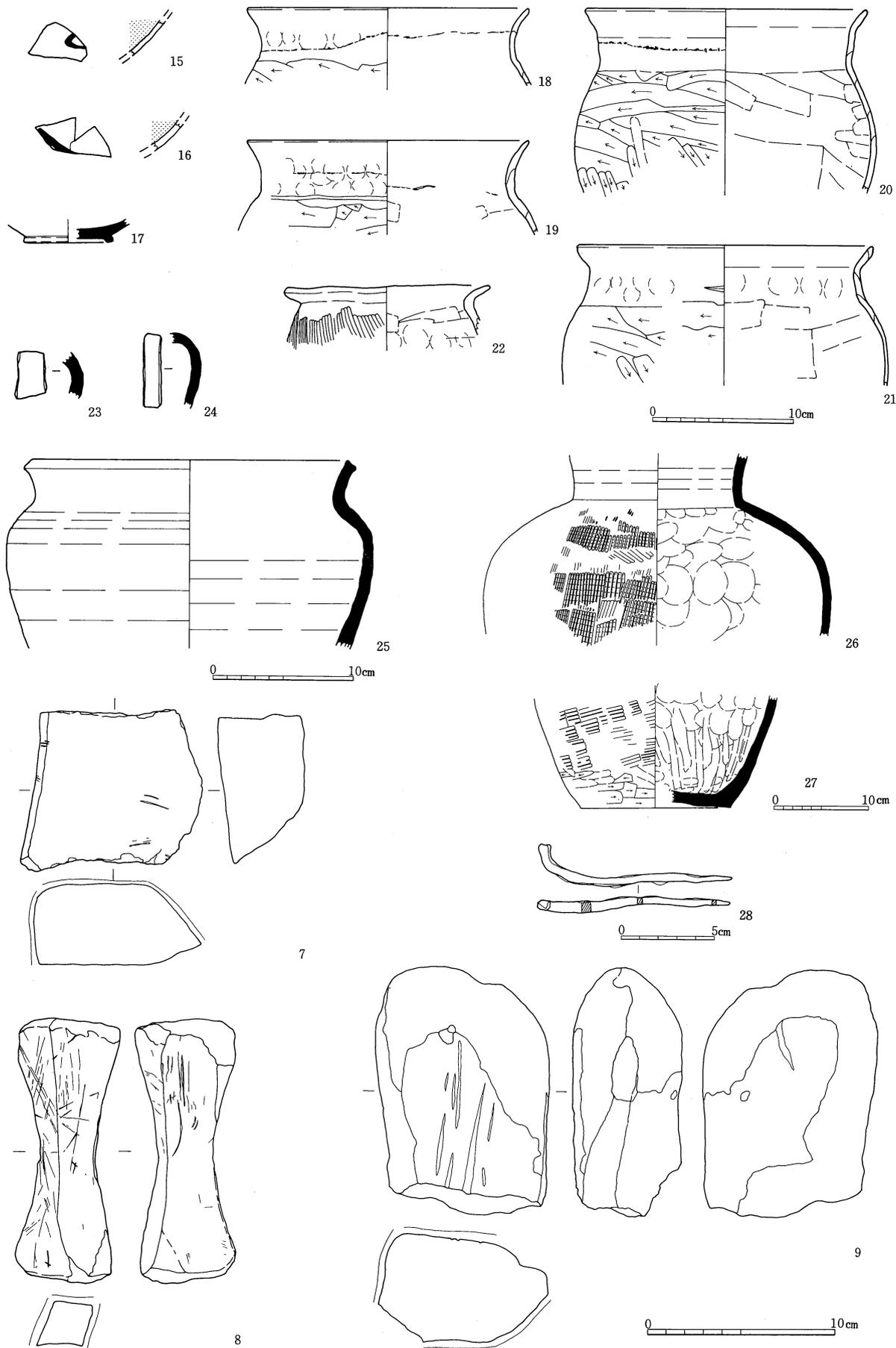


图19 12号住居址 (2)

3・5～7・12は床面およびカマドから出土している。15・16は同一個体と思われる。

時期 本址は7段階頃の所産と思われる。

12号住居址 (図18・19、PL229・247・261)

II A 2層上面で検出された。33号溝址に切られる。覆土はII A 2ブロックの混入する黒褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床面は荒ぼり後、II A 2ブロックを混じえた極暗褐色土を埋め戻し、上面をたたきしめ平坦にして床面を形成する。周溝は北壁を除いて部分的に幅約20 cm、深さ15 cm 前後で検出された。ピットは9基確認された。P1～4は柱穴と判断され、P5・7は支柱穴と推測される。P9は出入り口施設にかかわるものと推察される。カマドは黄褐色粘質土の構築材による袖が残存し、右袖には芯材と考えられる拳大の礫が集中して検出された。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器高台杯1 (3)・杯16以上 (4～8)・蓋5 (1・2)・甕1 (26・27)・広口鉢1 (25)・長頸瓶2、土師器甕10以上 (18～21)・小形甕2 (22)・台付小形甕1・小形ロクロ甕1・内面黒色杯13以上 (9～12)・碗3 (13)・坏碗不明5 (15・16)・皿1 (14)、灰釉陶器碗皿不明1 (17)・把手付瓶の把手2 (23)。

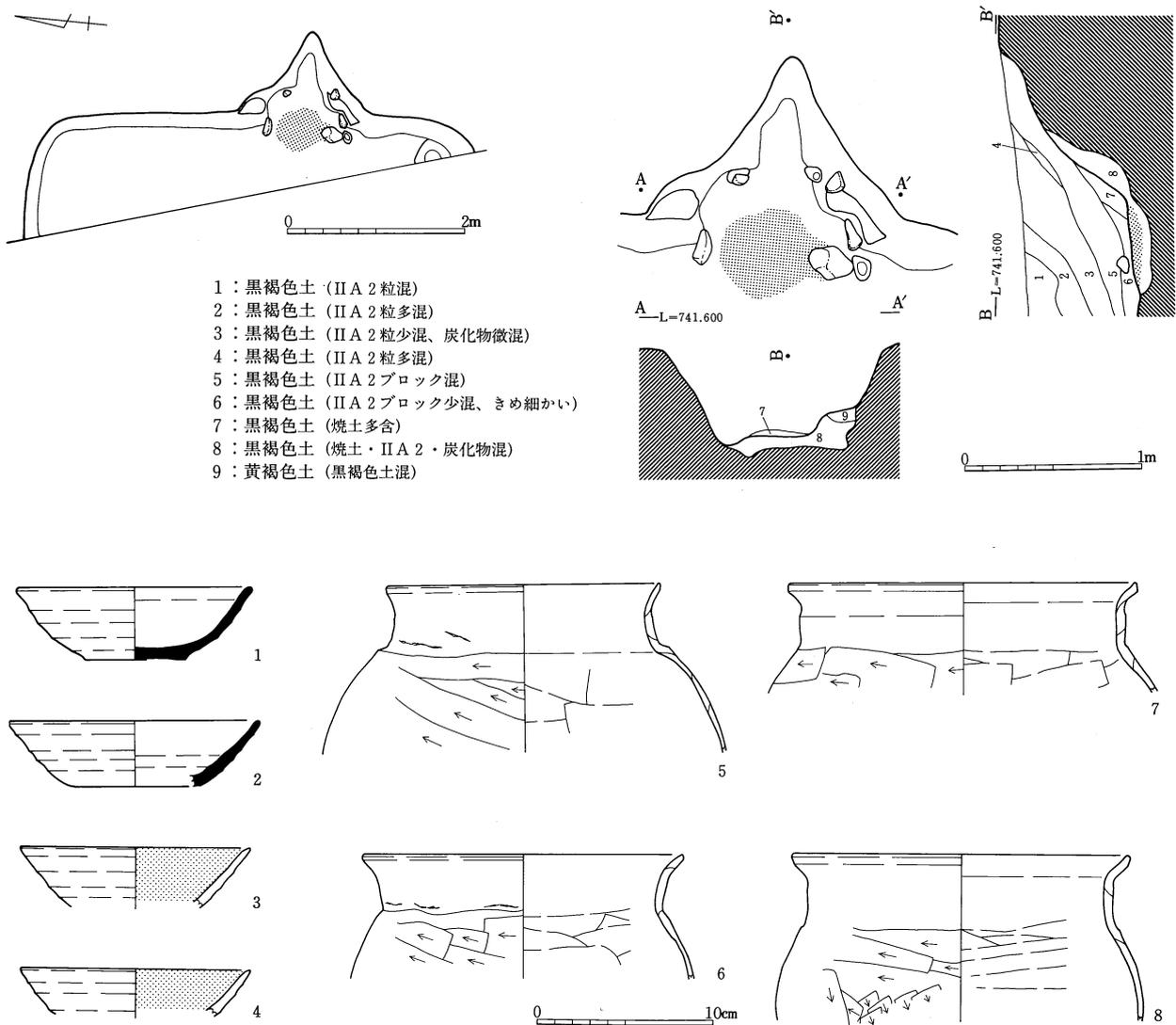


図20 13号住居址

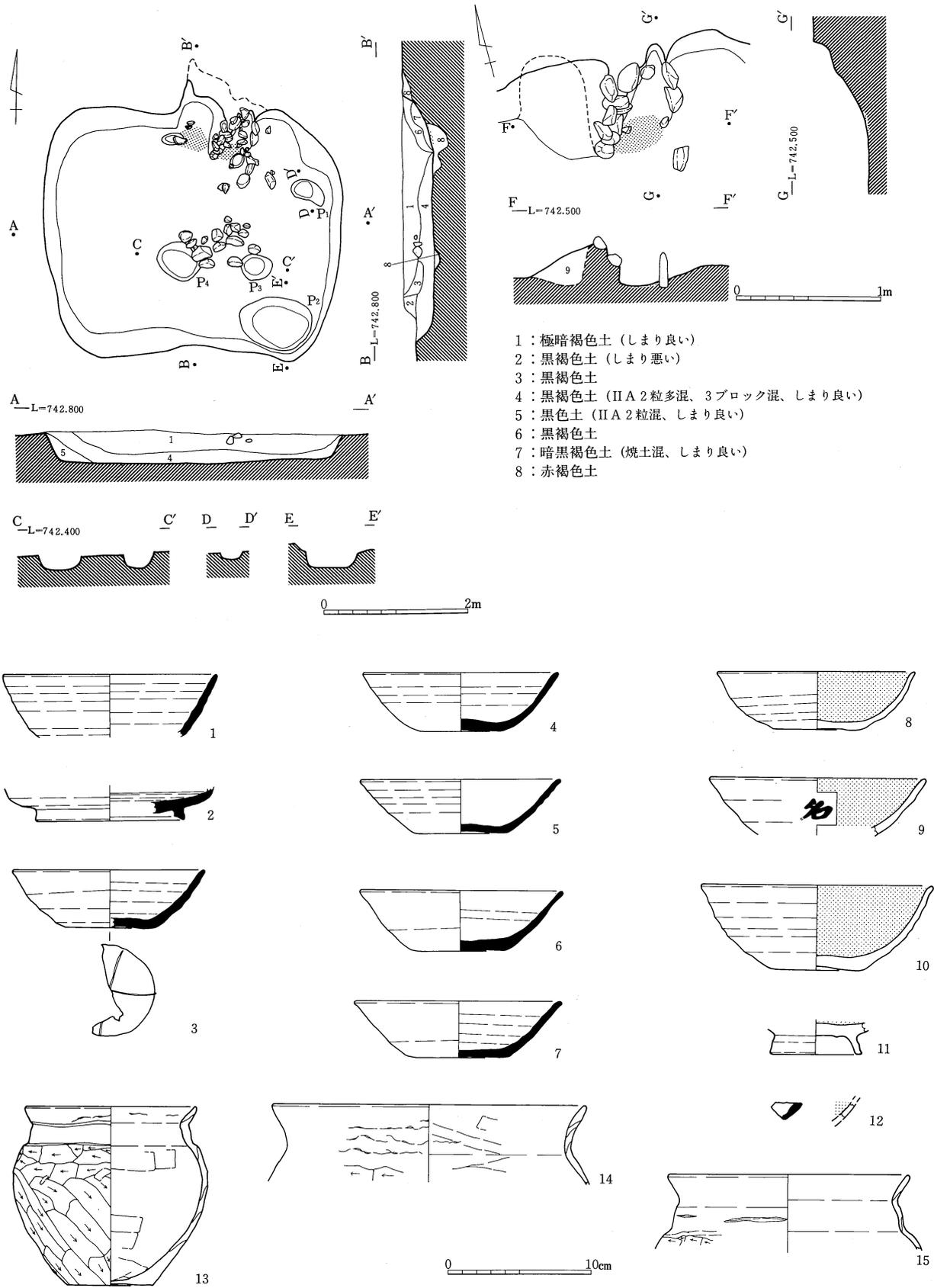


図21 14号住居址

24) 個体分が出土している。金属器は紡錘車軸と思われる棒状鉄製品1(28)、石製品は砥石3(7~9)・叩き石1が出土している。

床直遺物は少ないものの人為的に埋められる際に廃棄された土器がカマド内などから多く出土している。7には「木」の字が刻書され、15・16は文字不明で判読できない。17は黒笹14号窯式に比定される。22はハケ目の施された小形甕は白色胎土で、東海系の搬入土器である。須恵器長頸瓶2片は35号住居址と接合する。

時期 本址は6段階頃の廃棄と推測される。

13号住居址 (図20、PL229)

II A 2層上面で検出された。本址の大半は調査区外にかかっていた。現状からみて覆土は、II A 2ブロックの混入が顕著な黒褐色土を主体としたものであるところから、人為埋没と思われる。床面は掘り下げた地山面をそのまま利用したもので、余り堅緻ではなかった。ピットは南東部隅に深さ20 cmのものが1基確認された。カマドは袖石が6点検出されたが、いずれも拳大の礫で、袖芯材と考えられる。構築材は認められなかった。

遺物 遺物の出土量はごくわずかでそのほとんどは覆土内から出土している。須恵器環10(1・2)・甕1・壺瓶類2、土師器甕6以上(5~8)・小形ロクロ甕2・内面黒色環10以上(3・4)・皿2個体分が出土している。

時期 本址の所産時期は不明瞭であるが、本遺跡の遺構配置および住居址形態から8~9段階頃ではないかと思われる。

14号住居址 (図21、PL229・230・247)

II A 2層上面で検出された。26号住居址を切る。覆土は1層と4層の境に礫の投げ込みが認められたが、基本的には暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り下げた地山面をそのまま利用したもので全体に平坦で軟弱であった。ピットは4基確認された。カマドは二つあり、作り替えられたと判断した。旧カマドの右袖を新カマドの左袖として作り替え、旧カマドの左袖は新カマド構築にともない破壊し、燃焼部を埋め戻したことが観察される。新カマドは拳大の軽石礫を配していた。面取りされた軽石礫が2つ検出され、支脚石と思われる。

遺物 土器の出土量は、須恵器高台環2(1・2)・環10以上(3~7)・蓋1・甕1、土師器甕2以上(14・15)・小形甕1(13)・内面黒色環9(8・10)・環碗不明(9・12)・皿2(11)個体分が出土した。3は外底部に「十」の刻書が書かれ、9には「名」が墨書される。12は判読できない。覆土中の遺物が多く、床面付近の遺物は3・4・5・7・9・13である。

時期 甕・環の形態から6~7段階頃の所産と思われる。

15号住居址 (図22・23、PL230・248・253)

II A 2層上面で検出された。30号掘立柱建物址を切る。175・193号土坑に切られる。検出時にカマド天井石が露出していた。床は一部に掘り方が認められるが、全体を掘り下げた地山面をたたきしめ利用している。床面は平坦で、全体に堅緻であった。周溝は北壁際で部分的に幅約20 cm、深さ5 cm前後で検出された。ピットはカマド両側に2基確認され、P2からは土師器甕がつぶれた状態で検出されていることから、貯蔵穴に類する施設と推察される。カマドは遺存状況が良好で天井石を含めた石組が検出された。石組の補強には極暗褐色土が用いられている。

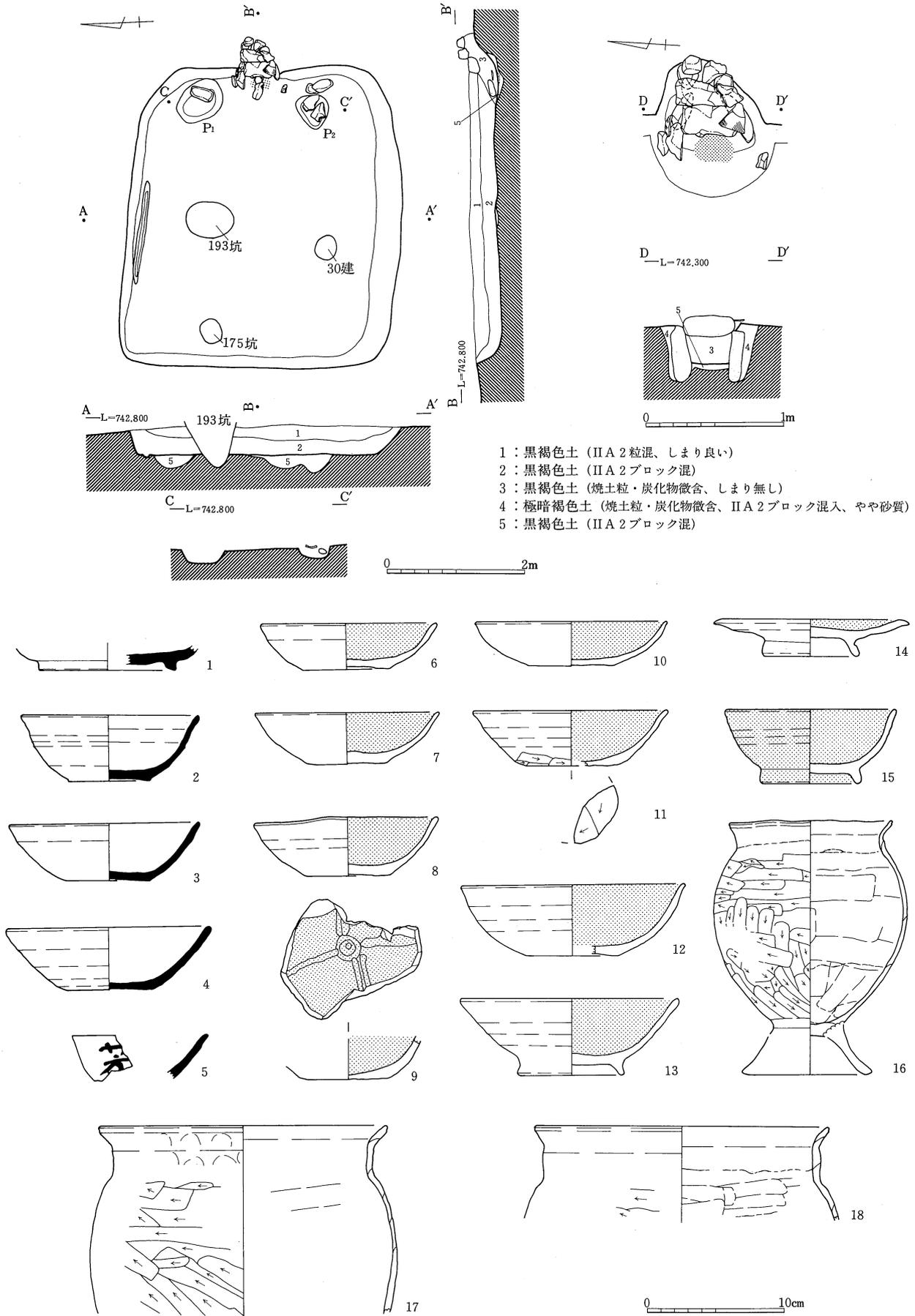


図22 15号住居址 (1)

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏2（1）・坏12以上（2～5）・蓋2・甕2・長頸瓶2（21）、土師器甕3（17～19）・台坏小形甕1（16）・ロクロ甕1（20）・中形ロクロ甕1・内面黒色坏14以上（6～12）・碗6以上（13）・皿1（14）・両面黒色碗1（15）個体分が出土した。

金属器は青銅製の巡方1（22）・刀子3（23～25）・紡錘車（26）・紡錘車軸（27）・棒状鉄製品（28～30）が出土した。石器は擦石（10）・砥石（11）が出土している。出土状況は小片以外はP1・P2付近から集中して出土している。須恵器は低温還元のためすべて生焼けに近い。5には「芳」の字が墨書されている。22の砥石は覆土中から出土している。

時期 甕・坏の形態から8段階頃の所産と思われる。

16号住居址（図24、PL230・248）

II A 2層上面で検出された。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は地山のうえにII A 2ブロックと黒色土を交互に5 cmほど貼って、構築している。掘り方はカマドと西壁を除く壁際に限定して認められる。ピットは7基確認された。P1～4は柱穴と判断され、P2・3の覆土中から礫が出土し、柱の補強材として用いられた可能性が高い。このほか床下から2基のピットが確認された。南壁中央部の張

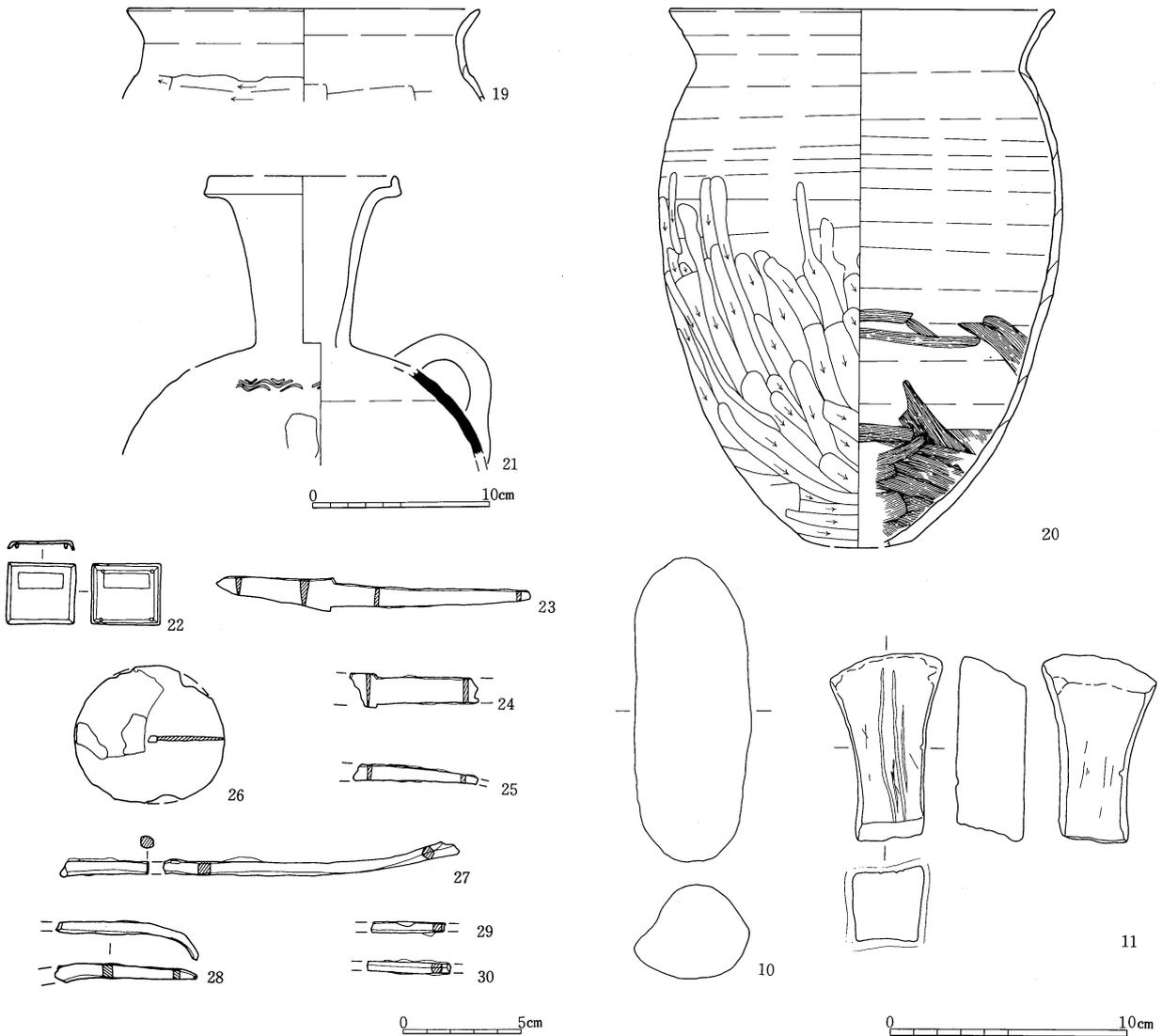


図23 15号住居址（2）

り出し部分には浅い窪みが認められ、出入り口施設にかかわるものと推察される。カマドは火床と袖石・支脚石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出されたほか、袖構築の基礎となる地山の突出が左袖部に認められた。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器高台坏1(3)・坏13(4~6)・盖3(1・2)・土師器甕5(7・8)内面黒色坏2個体分が出土した。以上遺物はごくわずかでカマド火床面から7が、4は床下から出土した。

時期 本址は5~6段階頃の所産と思われる。

17号住居址 (図25, PL230・261)

II A 1層中で検出された。39号溝址を切り、36号溝址に切られる。規模形状は4.5×4.2mの垂方形を呈す。覆土はII A 2主体の層と黒褐色土主体の層の互相状態であるところから、人為埋没と思われる。明瞭

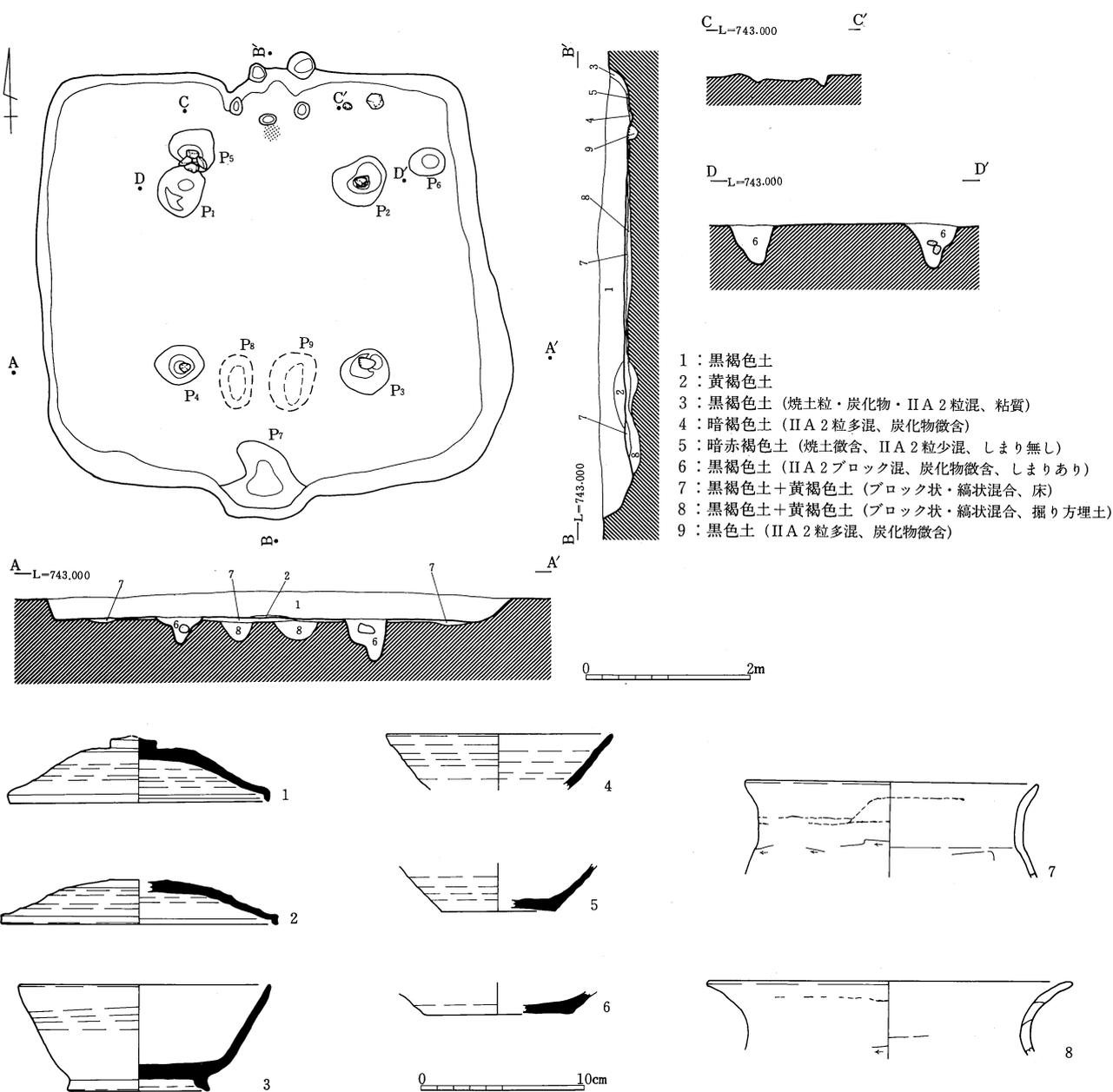


図24 16号住居址

な床面はなく掘り下げた地山面が底となる。諸施設もなく、居住空間を考え難い。

遺物 遺物の出土量はわずかである。土師器甕小片1・坏1（1）、石製品は石臼（12）が出土した。1は胴部から底部にかけて手持ちヘラ削りがされる。在地産ではなく群馬県側からの搬入品である。

時期 1段階の所産と思われる。

18号住居址 (図26・27・28、PL230・248・249)

II A 2層上面で検出された。153・161・164号土坑を切る。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックと黒褐色土を相互に埋め戻し、その上面をたたき、床面を形成する。全体に床面は平坦で堅緻であった。P1～4の間に限った狭い範囲で掘り方埋土中に堅緻面が存在したが、床の再構築と考えるよりも現床面構築にかかわる営為(例えば床面の補強)によるものと判断したい。周溝は部分的に幅30 cm、深さ10 cm 前後で検出された。ピットは7基確認され、P1～4は柱穴と判断される。P6では石臼（13）・内黒坏などのほか、炭化種子（オニグルミ）の出土が見られたことから、貯蔵穴に類した施設と判断される。カマドはカマド袖石と思われる礫が燃焼部内はかなり散在し、地山の掘り残しによる両袖に礫を配し、構築材として黒褐色土を礫の隙間に充填している。

遺物 出土遺物の大半は破壊されたカマド内およびその周辺と P6から出土している。須恵器高台坏 2

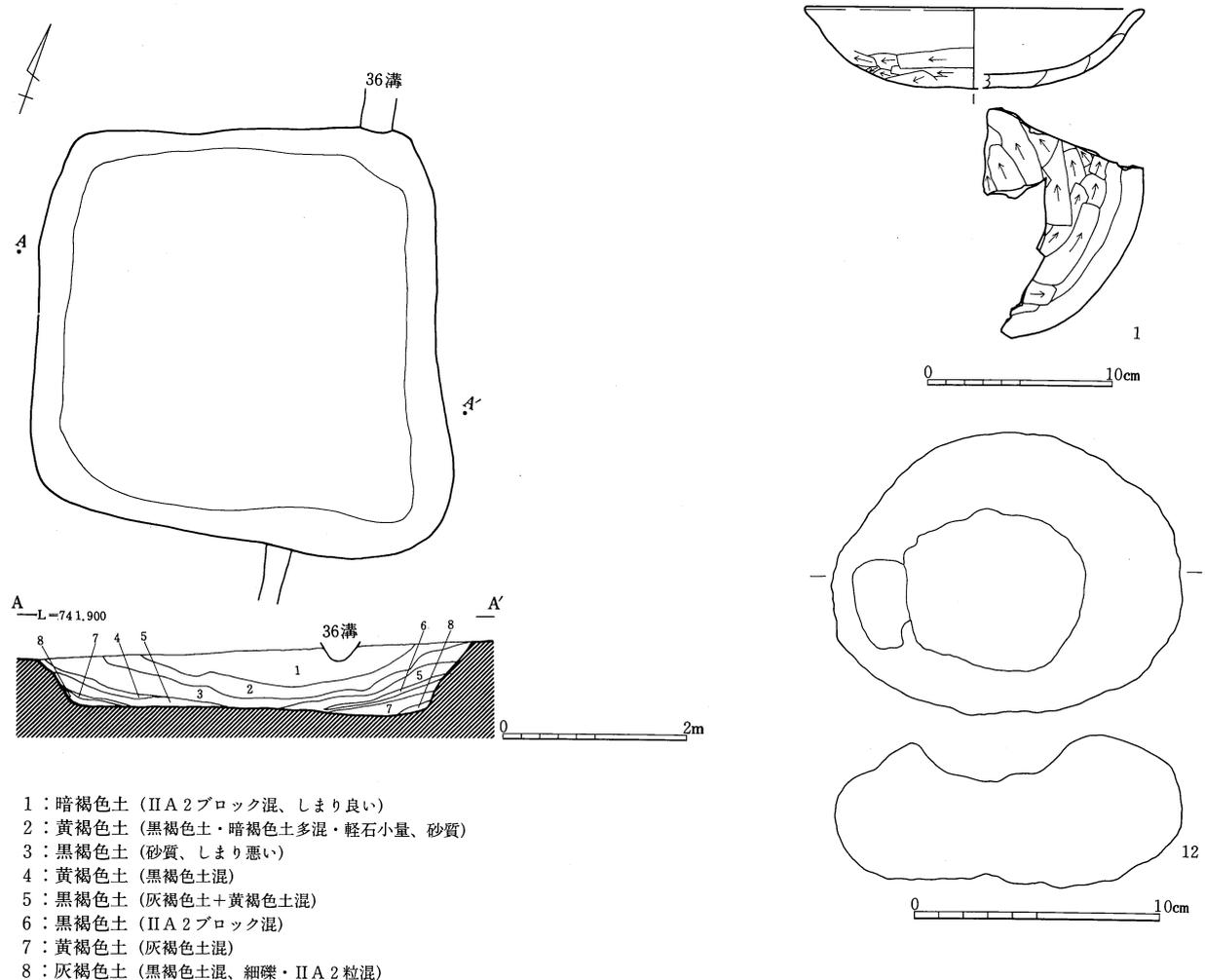


図25 17号住居址

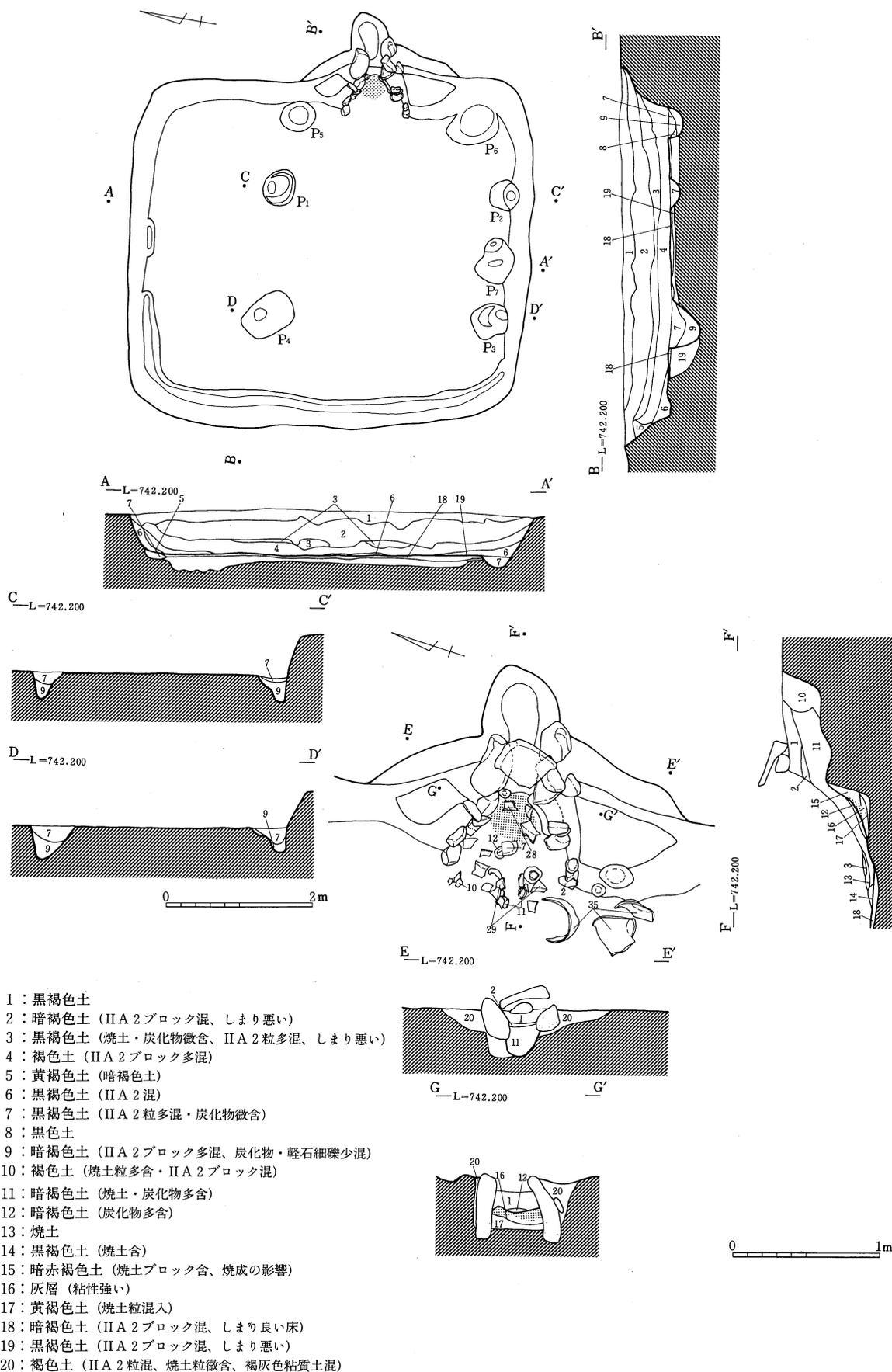


図26 18号住居址 (1)

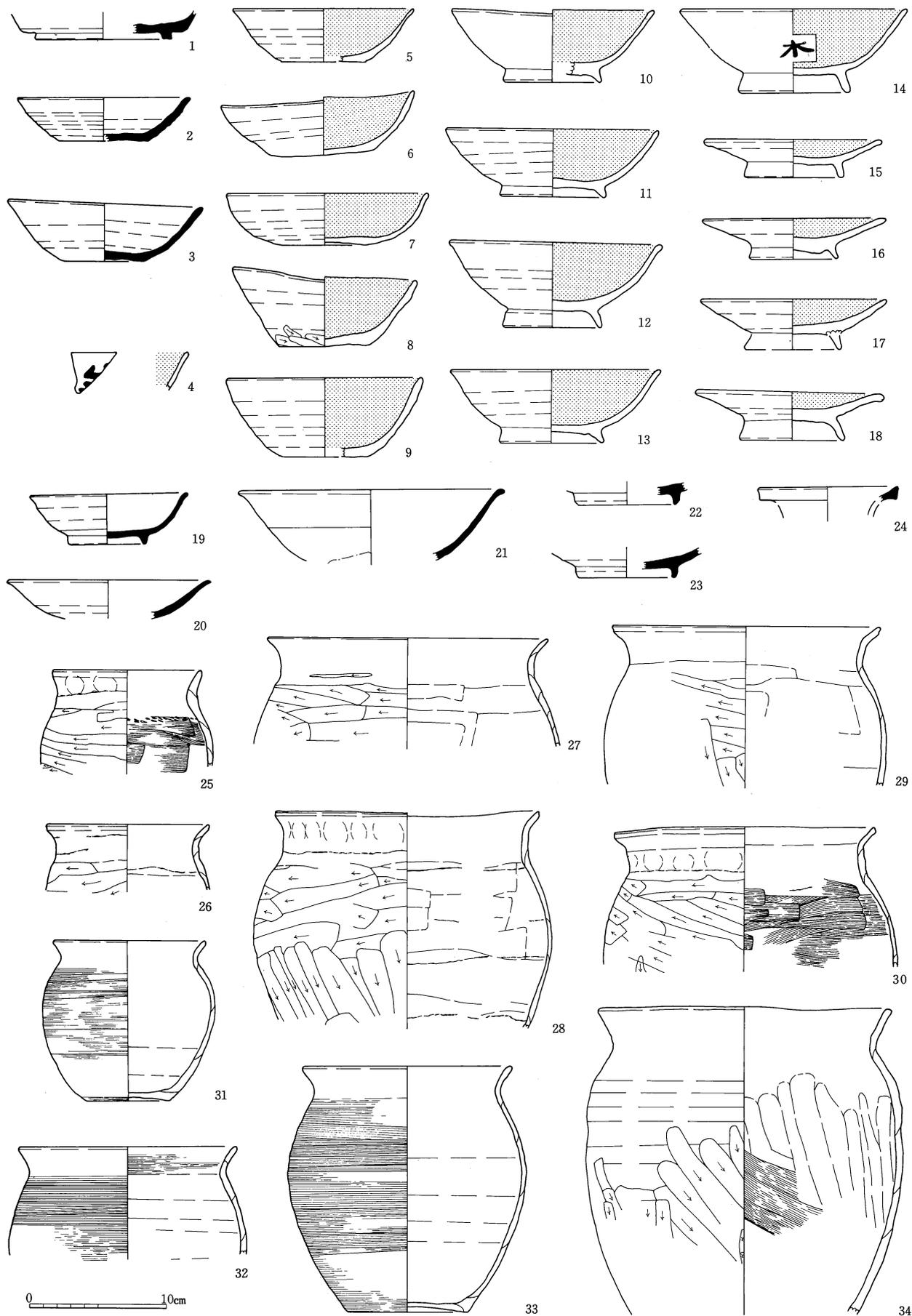


图27 18号住居址(2)

(1)・坏11 (2・3)・甕 2 (35)・広口甕 1・壺瓶類 2、土師器甕 5 (27~30)・小形甕 4 (25・26)・ロクロ甕 1 (34)・中形ロクロ甕 4 (32・33)・小形ロクロ甕 1 (31)・内面黒色坏20以上 (5~9)・碗12以上 (10~14)・坏碗不明 5 (4)・皿 5 (15~18)・鉢 1・両面黒色碗 1、灰釉陶器碗 2 (20・21)・小形碗 1 (19)・碗皿不明 2 (22・23)・長頸瓶 1 (24) 個体分が出土した。

金属器は棒状鉄製品 (36)、石製品では石臼 (13) が出土している。

14には「木」の字が墨書されている。19の小形の灰釉陶器碗は朱の転用硯で内底部が摩滅し、朱がわずかに残る。灰釉陶器は黒笹90号様式(光ヶ丘1)に比定される。35は上半部が破損していたが、割れ口が摩耗していたことから破損したまま使用されていたものと思われる。

時期 本址の廃棄は8段階と思われる。

19号住居址 (図29、PL230・249・250・256)

II A 2層上面で検出された。37・38号溝址に切られ、31号掘立柱建物址を切る。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は掘り込んだ地山面をたたきしめて床面を形成する。全体に平坦であった。ピットは8基確認され、P1・2は規模も小さく、P3・4と組んで、柱穴になると判断される。P6は炭化物が覆土中に多く認められたことから、カマド燃焼部内の残滓の掻き出しにかかわるピットと推察される。P8は壁面が張り出すこととあいまって、出入り口施設に伴うピットの可能性が推察される。カマドは破壊され、火床と明褐色土を構築材とした袖が検出されたに留まった。

遺物 土器の全体量は、須恵器高台坏 2 (1)、坏 6 以上 (2~4)・甕 1・中形甕 1 (21)・長頸瓶 1 (20)・壺類 1、土師器甕 3・ロクロ甕 1 (19)・ロクロ小形甕 2 (18)・丸底の小形甕 1 (17)・内面黒色坏12以上 (5~8)・碗 8 (9)・皿 3 (10~12)・両面黒色皿 1 (13)・碗皿不明 1・内面黒色鉢 1 (16)、灰釉陶器碗 8 (14・15) 個体分が出土している。13には刻書がされているが判読できない。灰釉陶器14・15の釉薬はハケ塗りされる。

時期 本址は9段階頃の所産と推測される。

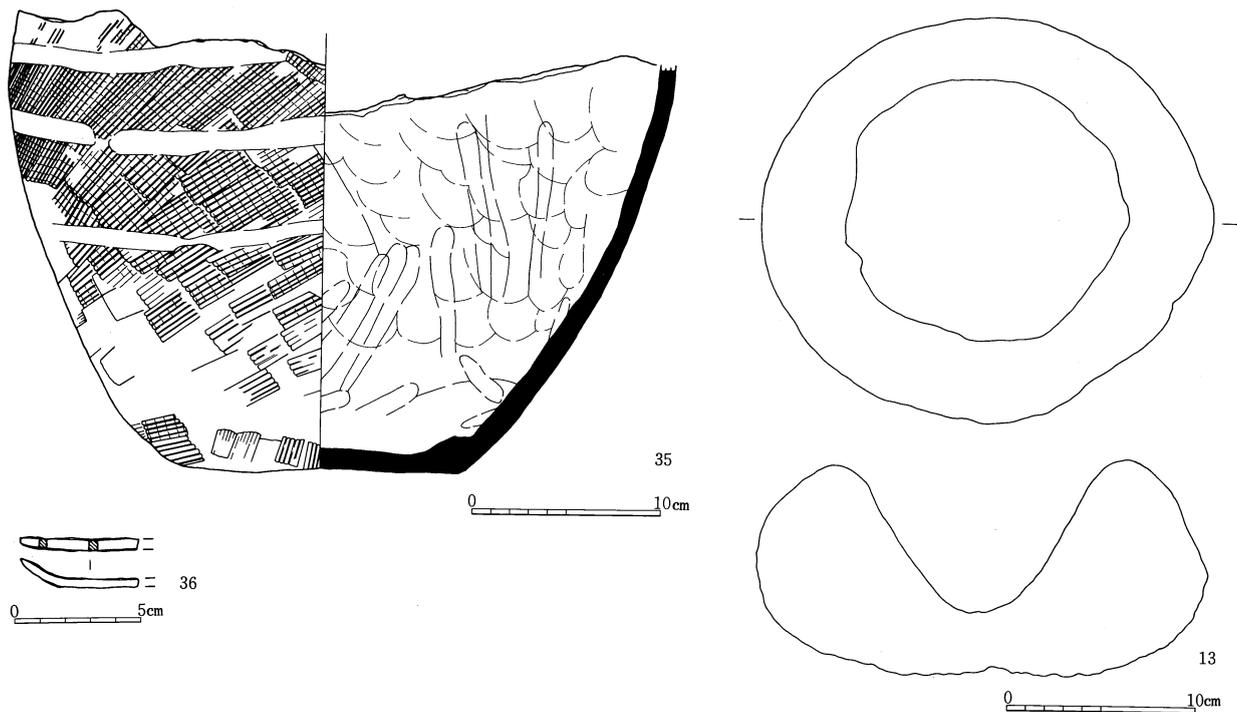


図28 18号住居址 (3)

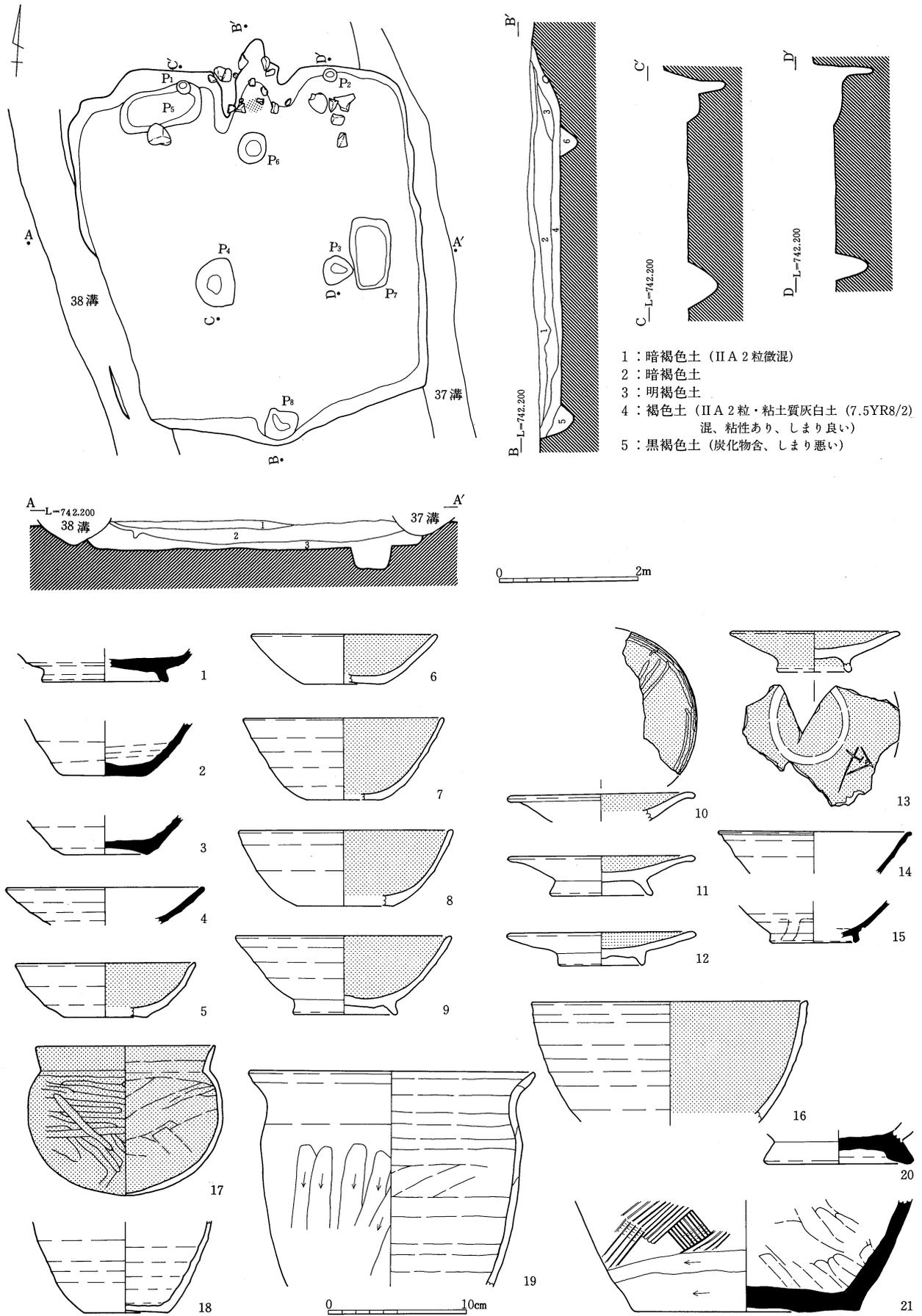


图29 19号住居址

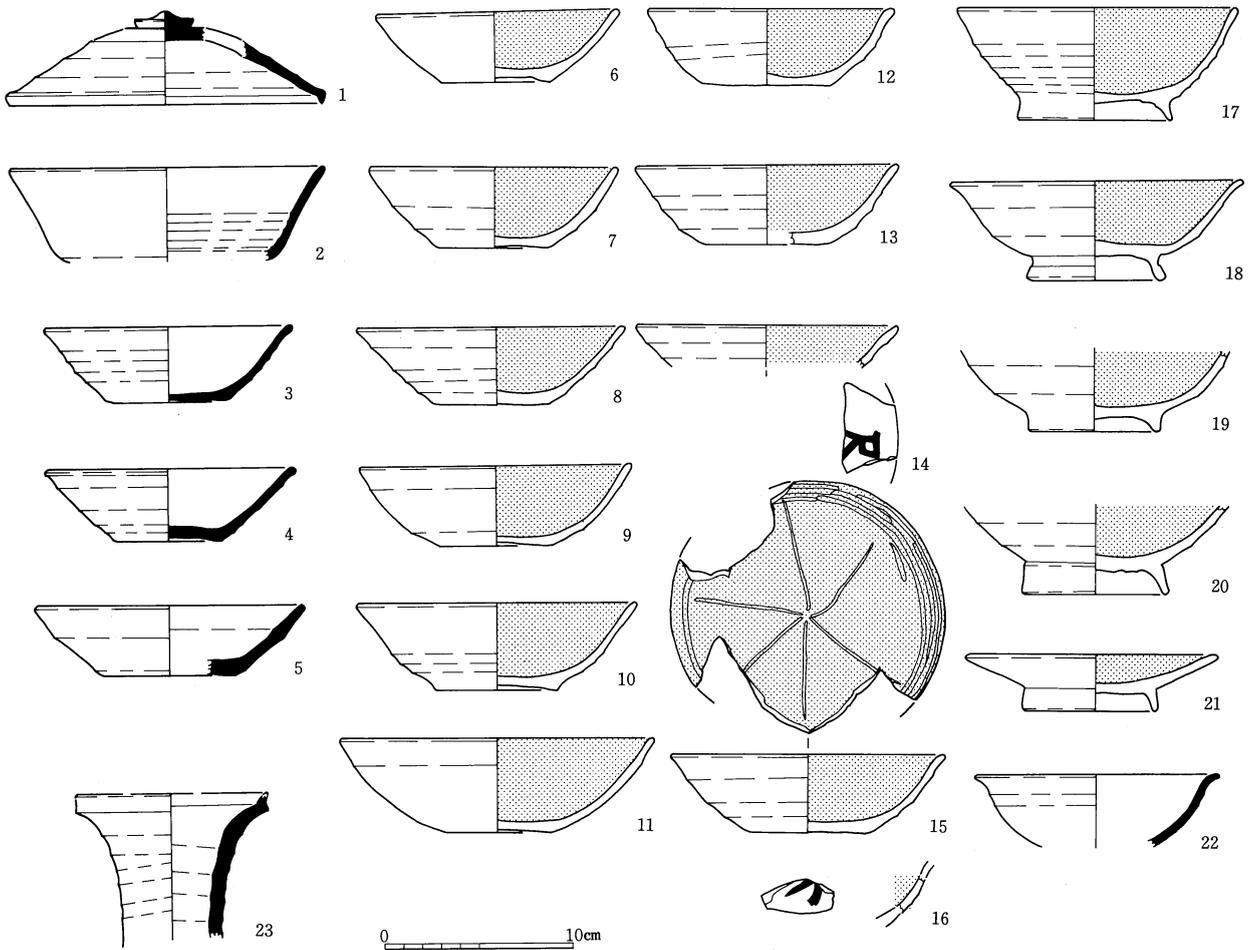
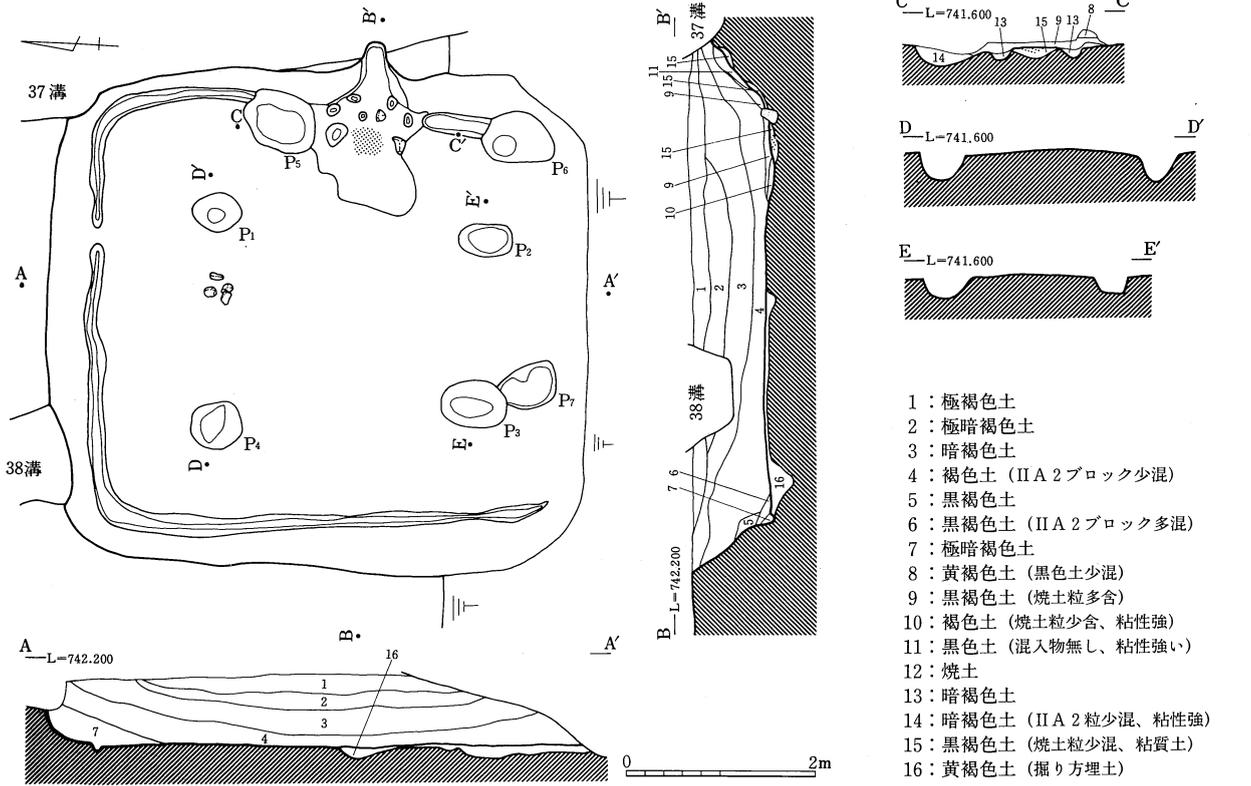


図30 20号住居址 (1)

20号住居址 (図30・31、PL231・250)

II A 2層上面で検出された。南側を「田切り地形」に破壊されている。37・38号溝址に切られ、21・22・30号住居址を切る。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は浅い掘り方をもち、II A 2ブロックを混入する褐色土上面と掘り下げた地山面を利用している。全体に平坦でたたいたという感じではなかった。周溝は幅約20 cm、深さ7 cm 前後で、破壊された南壁とカマド部を除いて検出された。ピットは7基確認され、P1~4が柱穴と判断されるが、掘り方は浅い。カマドは床面よりやや低いレベルで検出され、周囲に袖石・支脚石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出されたにすぎなかった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器高台坏1 (2)・坏24以上 (3~5)・蓋4 (1)・甕14 (32)・四耳壺1 (33)・長頸瓶4 (23)、土師器甕20以上 (27~31)・小形甕1 (24)・台付小形甕3 (25)・中形ロクロ甕1 (26)・小形ロクロ甕1・内面黒色坏19以上 (6~15)・碗9 (17~20)・皿2 (21)・坏碗不明 (16)・灰釉陶器碗1 (22)・長頸瓶1・把手付き瓶の把手1個体分が出土し、金属器は刀子 (34) が出土している。床面およびカマドから出土したものは6・9・11・21・25・29・30・33である。14・16は墨書が書されるが文字は判読できない。31はハケ目甕で胎土から在地産ではなく、中信地方からの移入品と思われる。

時期 本址は8段階の所産と思われる。

21号住居址 (図32、PL231・250)

II A 2層上面で検出された。20・30号住居址に切られる。本址は当初、20号住居址の一部として掘り下げに入ったところ、20号住居址より約40 cm 上にやや堅緻な一定の面を確認した。これを20号住居址として調査を進めたところ、北壁中央を切る落ち込みを確認し、この落ち込みが20号住居址に切られたカマドで

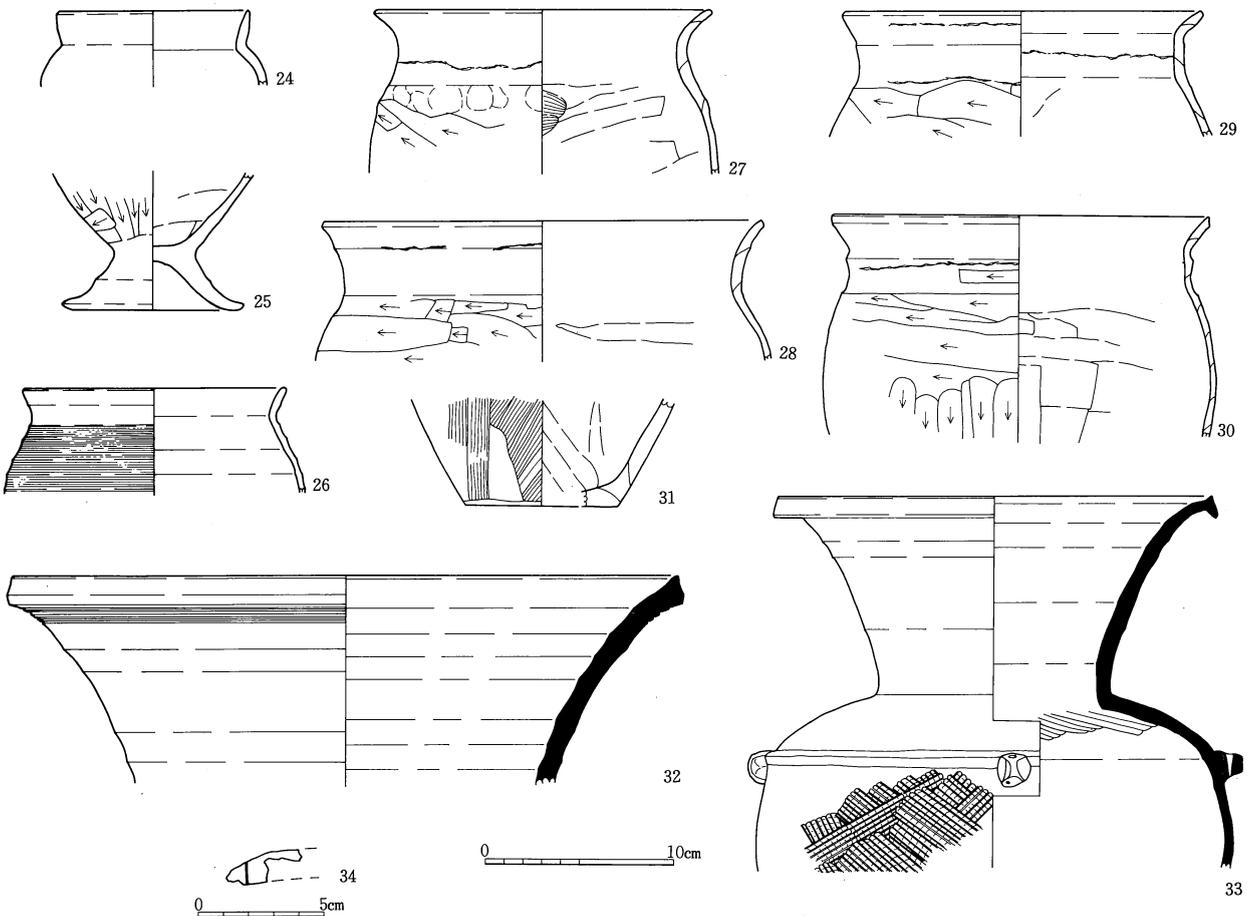


図31 20号住居址 (2)

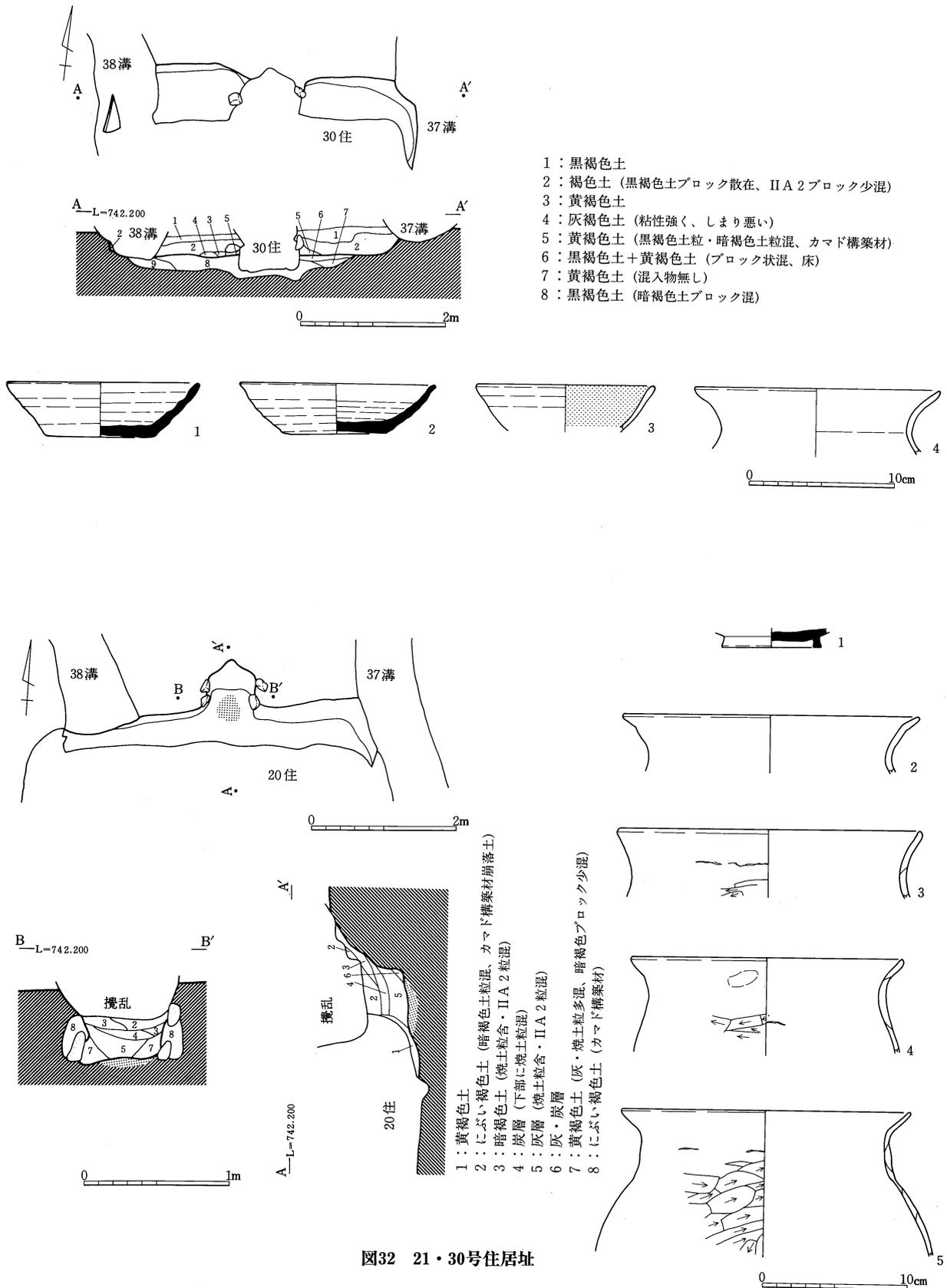


図32 21・30号住居址

あることが判明したためこれを30号住居址とした。結果、21→30→20号住居址という切り合いの前後関係が確認されることとなった。覆土は1層が自然堆積、2層が黒褐色土の混じる褐色土を主体とする人為埋没と思われる。30号住居址構築に際し、埋め戻されたものと判断したい。床は荒ぼり後、II A 2 ブロックと暗褐色土の混成土でその上面が床面となっていた。全体に平坦で堅緻であった。カマドは30号住居址のカ

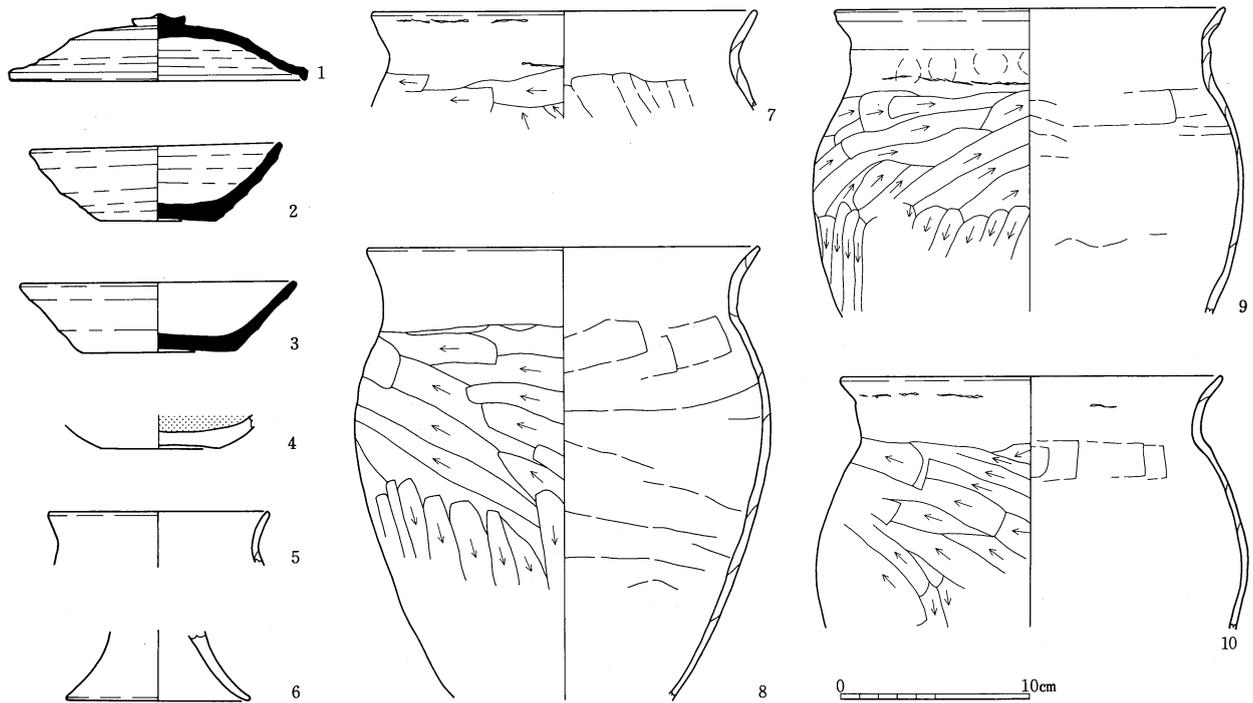
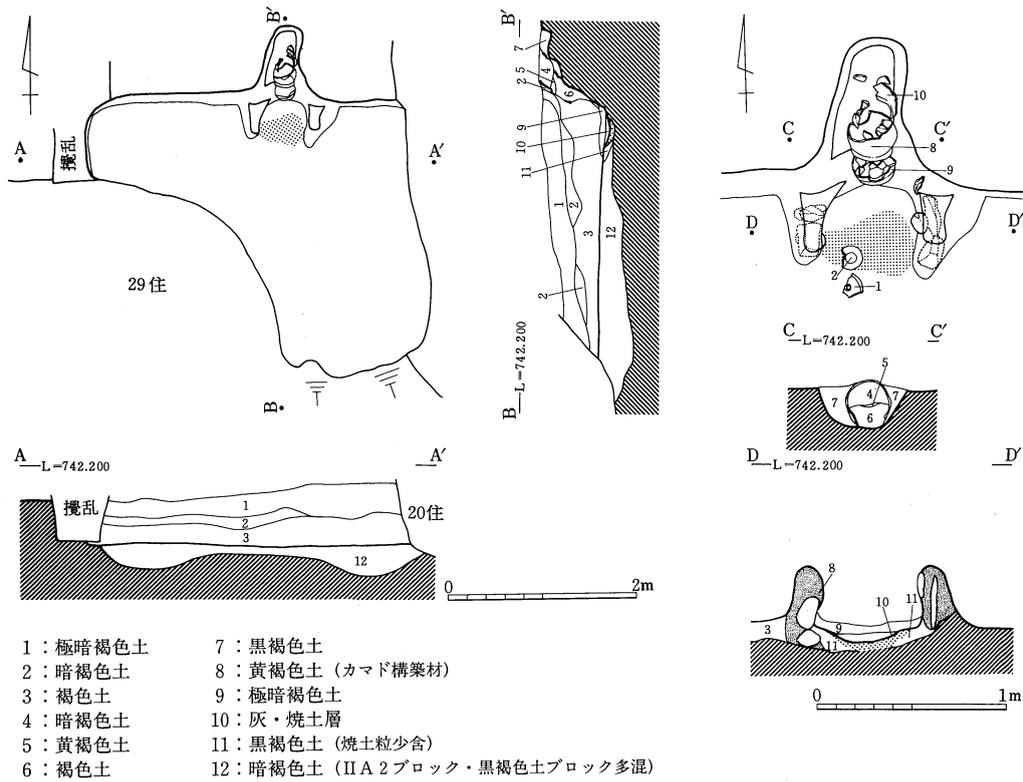


図33 22号住居址

マド掘り方の左右に袖石と思われる礫と構築材と推測される灰黒褐色土の分布が観察されたことから、30号住居址に破壊されたと判断される。

遺物 遺物の出土量は、あまり多くなく、須恵器坏3以上(1・2)・土師器甕1(4)・内面黒色坏・碗不明(3)個体分出土している。1・2・3はカマド脇床面から出土している。

時期 5段階頃の所産と思われる。

30号住居址 (図32、PL232)

II A 2層上面で検出された。21号住居址で述べたように本址は21号住居址調査中に発見された。20号住居址に、大半が破壊されている。覆土は残存部分が少なく埋没状況を判断することができなかった。20号住居址壁面と接する1層は20号住居址構築の際の埋め戻し(壁の補強)との推測も可能であろう。カマドは箱形に壁外に張り出し、両側に数個の礫を配置していた。

遺物 遺物の出土量は少ない。須恵器高台坏1(1)・坏2・土師器甕4(2~5)・内面黒色坏1個体分が出土している。その状況はほとんどがカマド付近の覆土中から出土している。

時期 本址に帰属する遺物がないためその所産期は不明である。覆土内出土土器からは6~7段階ごろと思われる。

22号住居址 (図33、PL231・250)

II A 2層上面で検出された。南側3分の1が「田切り地形」によって浸食されていた。20・29号住居址に切られる。検出時にカマド煙道部に使用された土師器甕が露出していた。覆土は1層が淘汰もよいことから自然堆積と、2・3層はII A 2ブロックが混じることから人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックを混入した黒褐色土が埋め戻され、その上面が床面を構成する。床面は平坦であるが、たたきしめられた感じはない。カマドは安山岩礫を芯材として、黄褐色土の構築材を貼り付け、袖を整形している。煙道部には底を抜いた土師器甕を逆位で3個体連結させ壁に埋め込み、上面に構築材を貼り付けて補強していたことが観察された。

遺物 遺物の出土量はあまり多くなく破片が多い。須恵器坏15以上(2・3)・蓋2(1)・甕1・中形甕2・

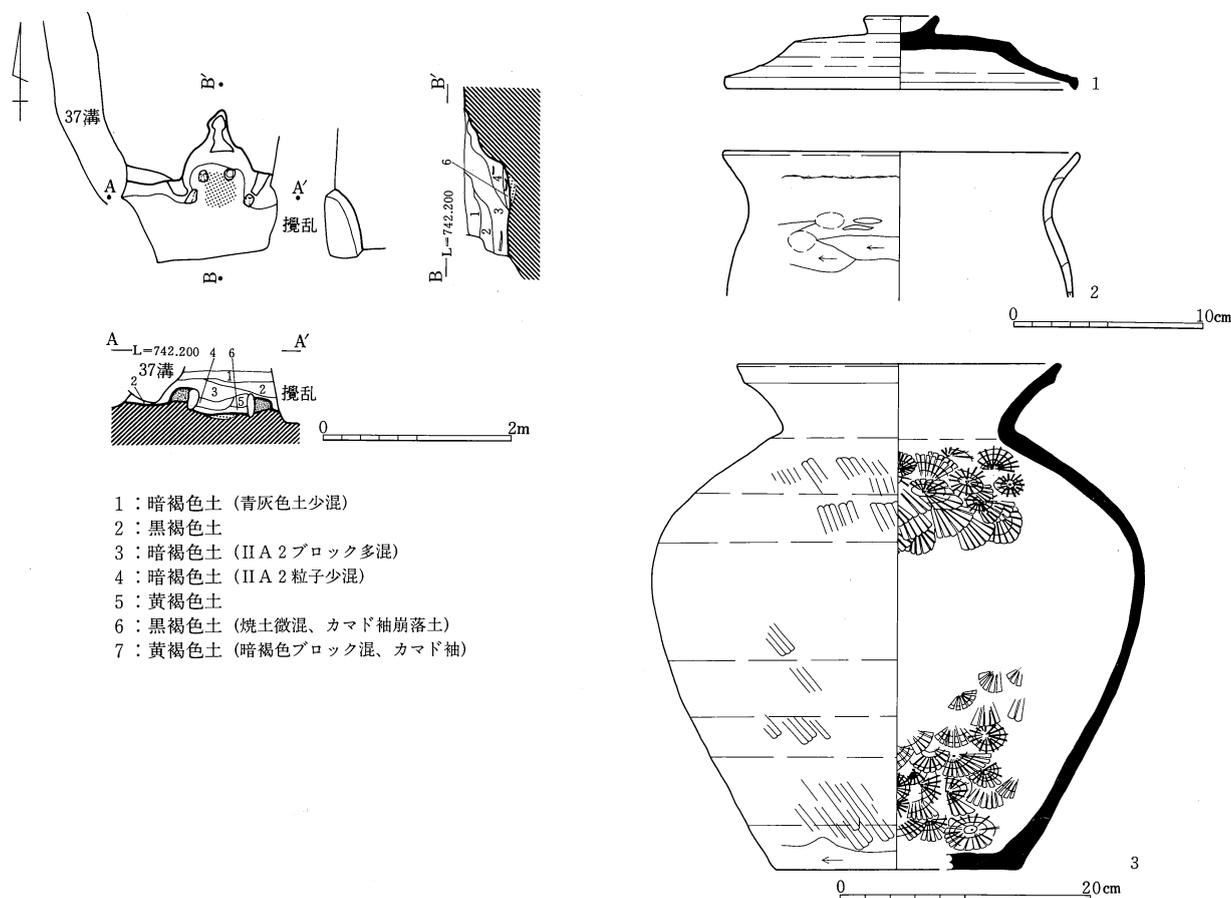


図34 23号住居址

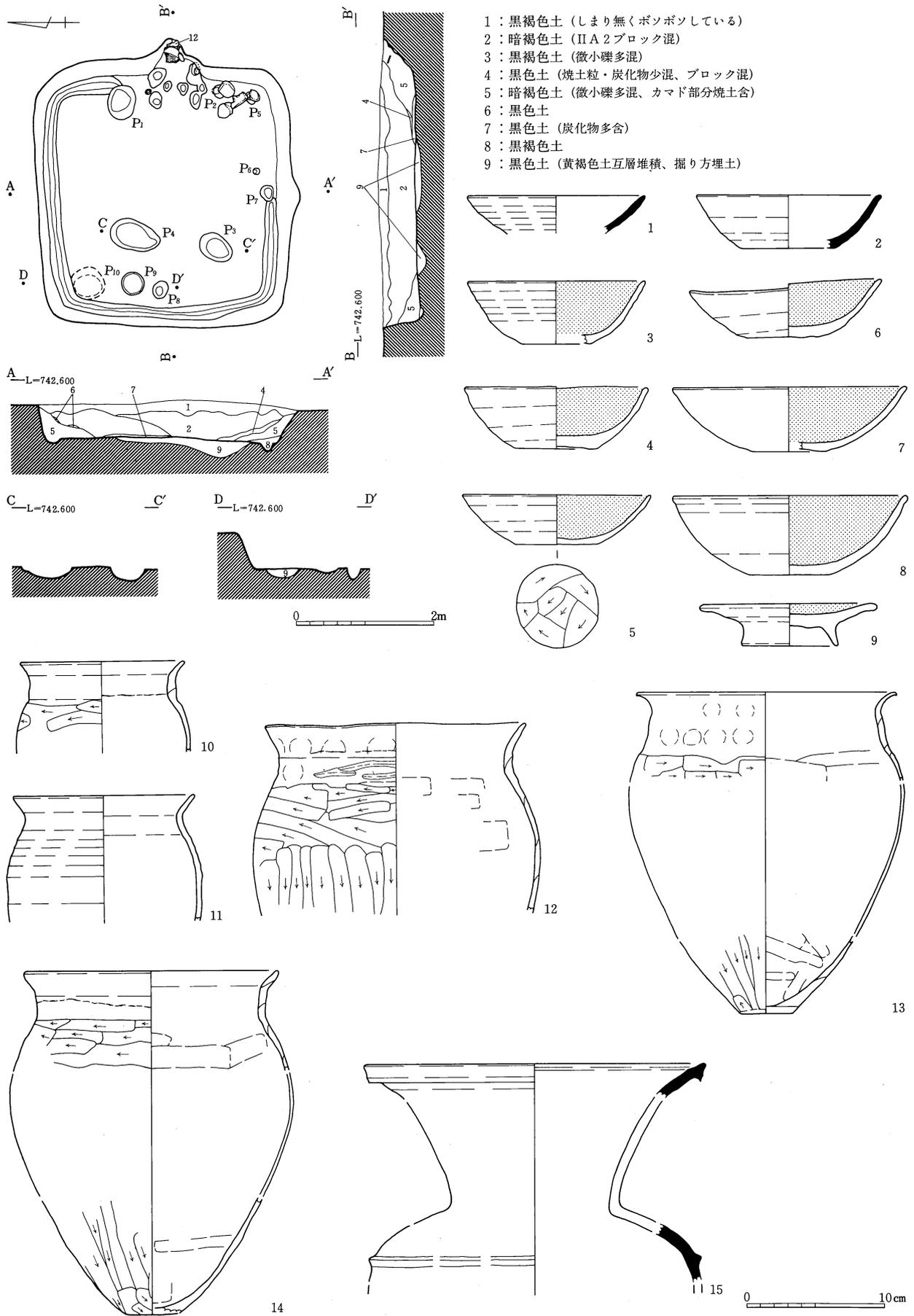


図35 24号住居址

長頸瓶2、土師器甕8以上(7~10)・小形甕1(5)・台付小形甕1(6)・内面黒色坏4以上(4)個体分が出土した。1・2はカマド火床面から出土し、10はカマド煙道部(煙突)に使用した甕である。

時期 甕の形態から6号段階の所産と思われる。

23号住居址(図34、PL231・251)

II A 2層上面で検出された。本址の大半は「田切り地形」により浸食され、北壁カマド部のみが検出された。37号溝址に切られる。カマドは安山岩礫を芯にしてII A 2ブロックと暗褐色土の構築材を貼り付けた袖を持ち、火床北端に支脚石が1本とその抜き取り痕と思われる小ピットが検出された。使用時には2本の支脚石が立っていたと推測される。

遺物 遺物の出土量は少ない。須恵器坏2片・蓋1(1)・中形甕1(3)、土師器甕1(2)・内面黒色坏1・碗1個体分が出土した。1~3はカマド火床から少し浮いて出土した。3は胎土が緻密で東海からの搬入品と思われる。1は25号住居址出土の破片と接合した。

時期 4段階頃の所産と思われる。

24号住居址(図35、PL231・251)

II A 2層上面で検出された。25号住居址を切る。覆土はII A 2ブロックの混入する暗褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックと黒色土を交互に埋め戻し、その上面を床面として平坦に構築する。カマド前から南西隅にかけて堅緻であった。周溝はカマドと南東隅を除いて幅15~20cm、深さ1~6cmで検出された。ピットは床下のもの(P10)を含め10基確認された。このうちP1~4が柱穴と判断される。いずれも浅く、P2は小規模であるが配置的に容認されよう。P8は焼土の堆積が認められ、骨片が出土している。カマドは火床が認められず、袖石の抜き取り痕と思われる小ピットが検出され、その間に支脚石の抜き取り痕と思われる小ピット2基が確認されている。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏6片(1・2)・大形甕1・四耳壺1(15)・短頸壺1・壺瓶類1、土師器甕7(12~14)・小形甕1(10)・小形ロクロ甕1(11)・台付小形甕3・内面黒色坏10(3~8)・皿1(9)・鉢1個体分が出土した。銭は覆土1層から皇朝十二文銭の隆平永宝(796年)が出土しているが、腐食が激しい。4・6・7・9・10はカマド内および破壊したカマド石(カマド右側)とともに出土した。12はカマド煙道(煙突)に使用されていた甕である。

時期 本址は9号段階に相当すると思われる。

25号住居址(図36、PL231・251・253・255)

II A 2層上面で検出された。24号住居址に切れ、東壁部を暗渠配水により攪乱される。覆土はII A 2ブロックを混入する暗褐色土を主体とした人為埋没と思われる。床は掘り下げた地山面に若干II A 2ブロックを埋め平坦にしたもので、部分的に堅緻であった。カマドは遺存状況が悪く、火床も認められなかった。袖石と思われる礫が2つ認められたほか、床面に礫が多く検出されたが袖石としてこれらが利用されたという確証は得られていない。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏6以上(1・2)・蓋1・甕1、土師器甕2(6)・小形甕1(5)・内面黒色坏4以上(3)・碗1、灰釉陶器碗1(4)個体分が出土した。金属器は紡錘車軸(7)・不明棒状鉄製品2(8・9)が出土した。出土状況は破壊されたカマド石とほぼ同付近から出土した。3には「金」が墨書され、外底部はヘラ削りされている。4は施釉が内面全面にハケ塗りされる。

時期 本址は7段階の相当するものと思われる。

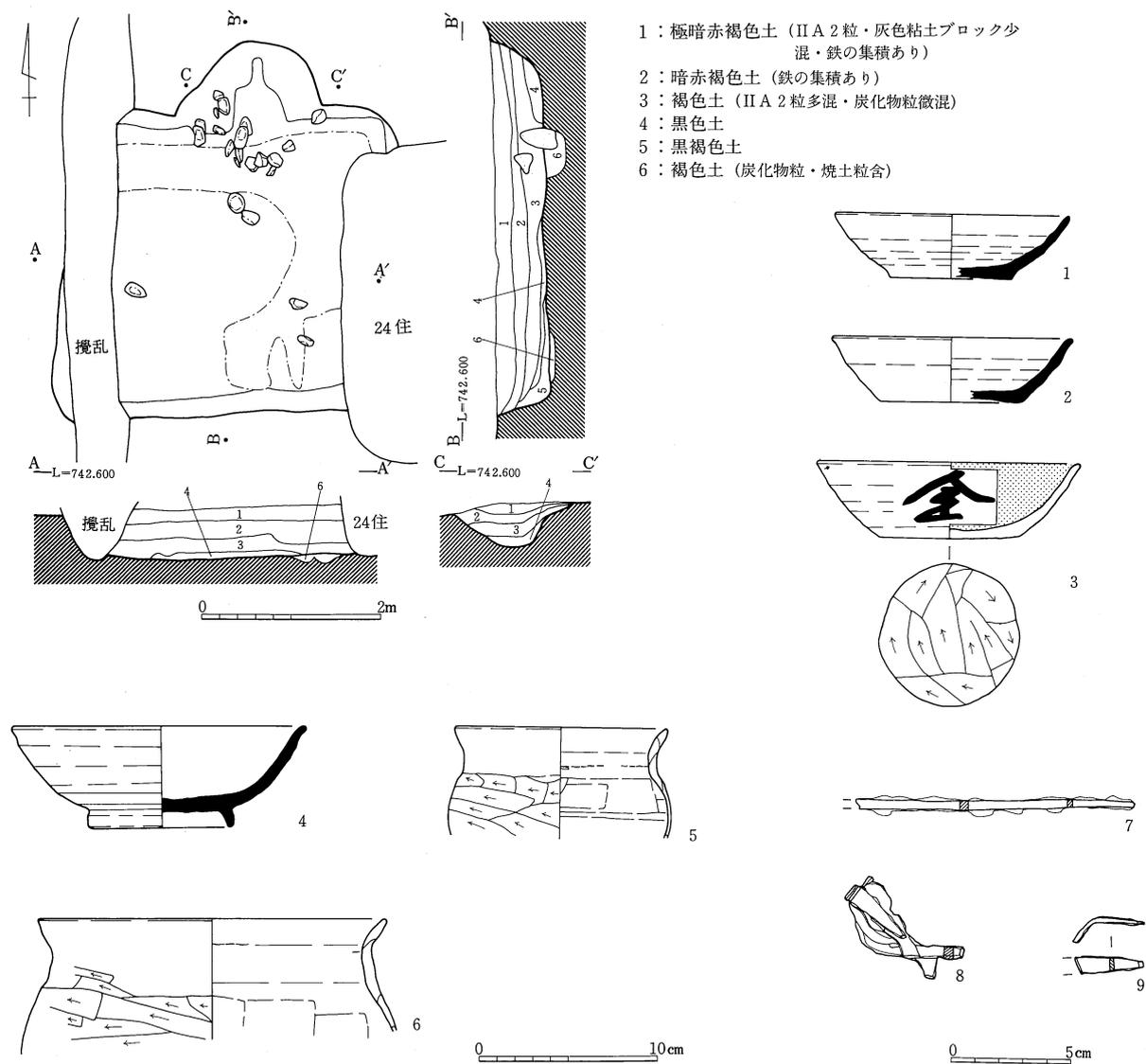


図36 25号住居址

26号住居址 (図37、PL231)

II A 2 層上面で検出された。14・31号住居址に切られ、南側で「田切り地形」に浸食されていた。覆土は黒褐色土主体の自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2 ブロックを混入する黒褐色土を埋め戻し、床面をたたきしめ、平坦に構築している。カマドは軽石を芯材として、明褐色土の構築材を貼り袖を整形していたことが観察される。カマド前、床より浮いた状態で軽石が多数検出されたが、カマド構築にかかわるものかあるいは本址廃絶後の廃棄によるものかは判断し難かった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏6 (1~3)・中形甕小片1・長頸瓶1、土師器甕5 (5~9)・小形甕1 (4) 個体分が出土した。石器は叩き石 (14) が出土した。全体に少ない。1・2・4はカマドから出土し、5・6・8はカマド前の軽石群とともに出土した。3は低温還元焼成のため生焼けにちかい。

時期 6~7段階頃の所産と思われる。

27号住居址 (図38・39、PL232・251・253)

II A 2 層上面で検出された。本址の大半は南側で「田切り地形」によって浸食されていた。覆土はカマド部を含め、細分できず埋没状況は明らかでないが、ブロックの混入もないところから自然堆積と思われる。

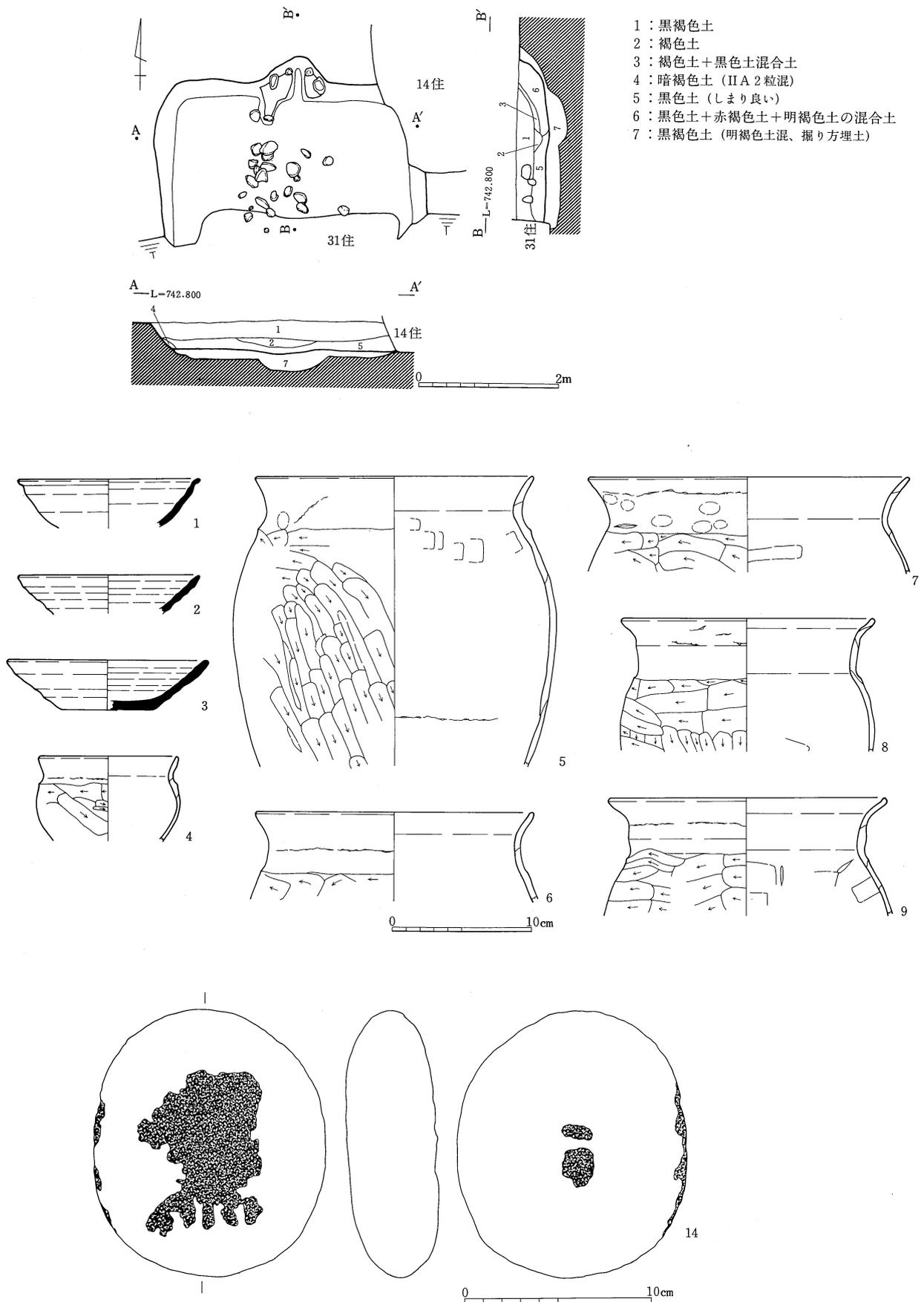


図37 26号住居址

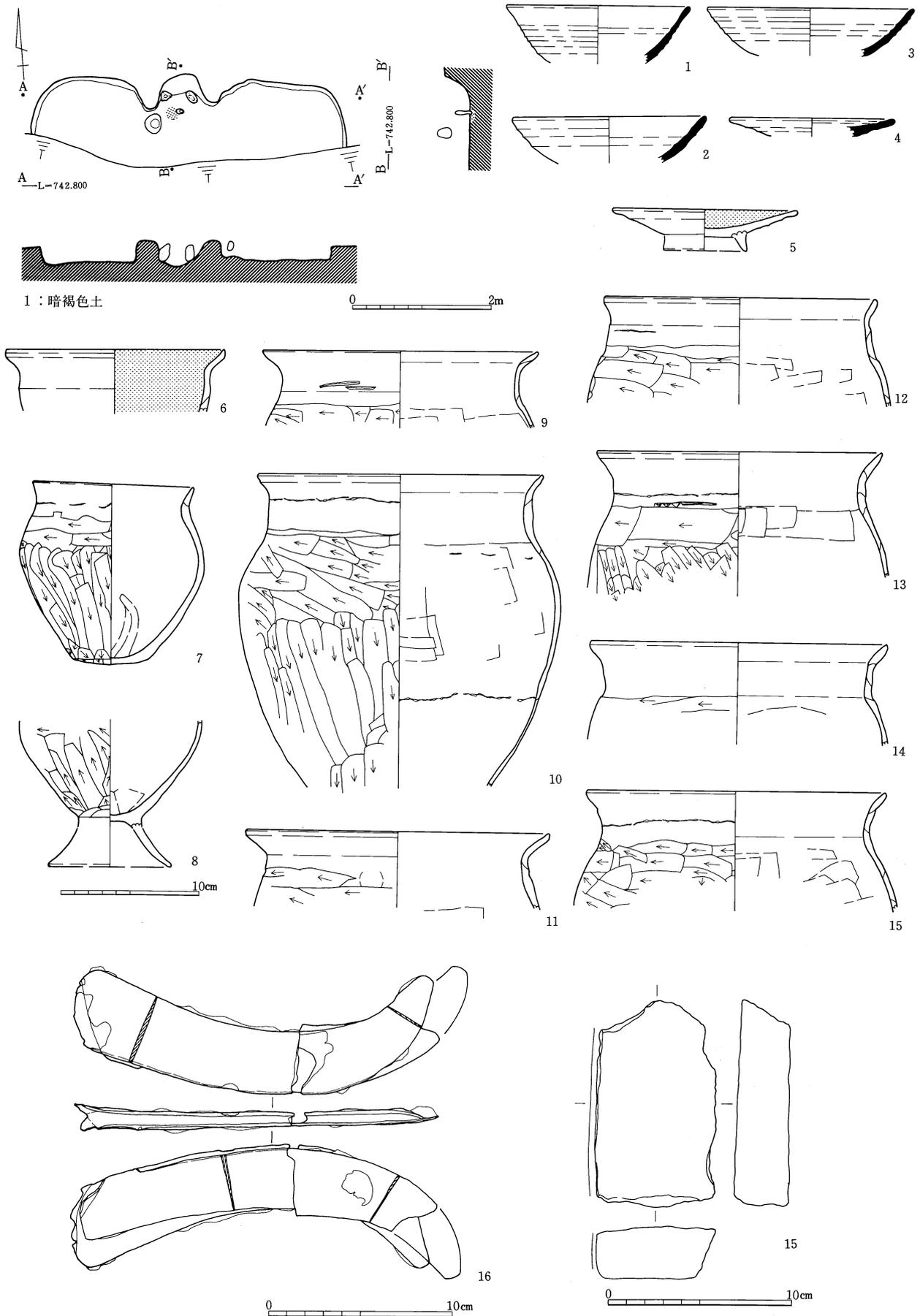


图38 27号住居址(1)

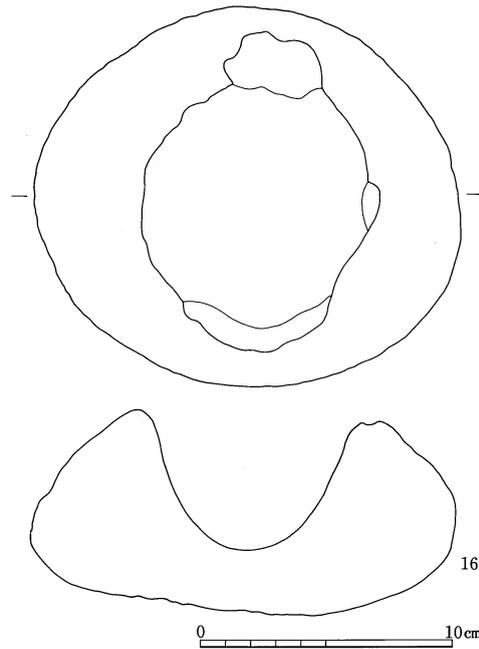


図39 27号住居址(2)

る。床は掘り下げた地山面を利用したもので軟弱であった。カマドはわずかな火床と、支脚石、燃烧部壁面に礫が埋められた状態で検出された。両袖は地山の掘り残しによるものであった。

遺物 遺物の出土量は、須恵器坏5(1~3)・甕1・皿1(4)、土師器甕7以上(9~15)・小形甕1(7)・小形台付甕1(8)・内面黒色坏1・碗1・皿1(5)・内面黒色小形鉢1(6) 個体分が出土した。鉄製品は鎌2(16)、石製品は砥石(15)・石臼(16)が出土した。14・16は破壊されたカマドを中心に出土している。3はやや生焼けである。16の鉄鎌は2本重なって出土した。

時期 本址は7段階頃の廃棄と思われる。

28号住居址(図40、PL232)

IIA 2層上面で検出された。30号掘立柱建物址を切る。本址の南側大半が「田切り地形」により浸食されていた。覆土は残存部分で判断するかぎり黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、IIA 2ブロックが混入した黒褐色土を埋め戻し、その上面を床として堅緻にたたきしめたもので全体に平坦であった。カマドは煙道部に土師器甕を逆位に2個体連結させ、その口縁部に残存していた赤黒褐色土によって固定されたと推察される。袖は面取り加工により一定の厚みを持たせた軽石礫を直立させ、黄褐色土を貼り付けて補強してあった。火床は残存する袖先にあり、使用時には袖が屋内に伸びていた可能性がある。

遺物 遺物の出土量はあまり多くない。須恵器坏5・甕1・長頸瓶4、土師器甕3以上(1~3)・内面黒色坏1 個体分が出土した。金属器は棒状鉄製品(4)・鉄滓30g、石製品は砥石(17)が出土した。本址に帰属する遺物は1~3のカマド煙道(煙突)に使用された甕のみで、他の土器・鉄器・砥石は覆土中から出土した。

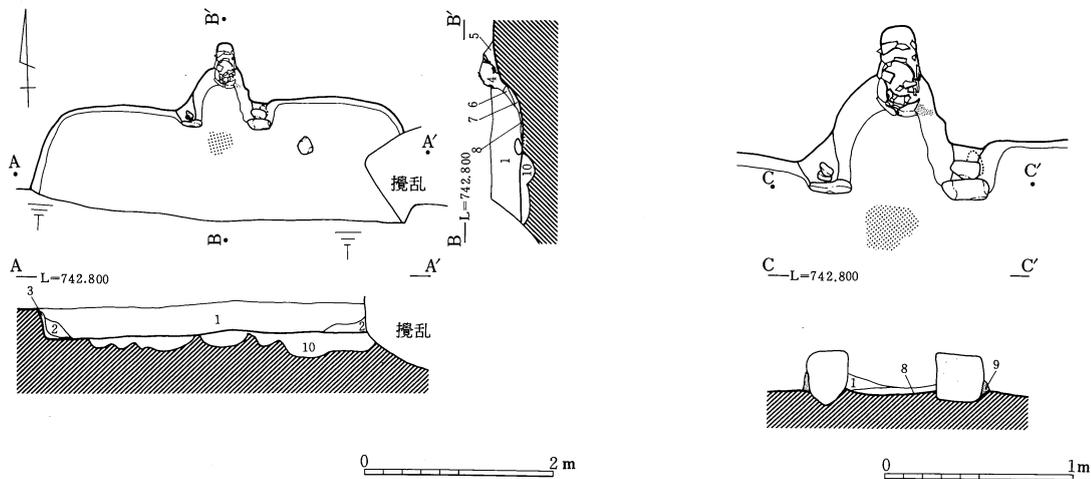
時期 7段階頃の所産と思われる。

29号住居址 (図41、PL232)

II A 2層上面で検出された。22号住居址を切り、暗渠配水による攪乱を受ける。本址の大半は「田切り地形」による浸食を受けていた。覆土は暗褐色土の単層で、土塊の混入も見られないことから、自然堆積と思われる。床は掘り込んだ地山面と22号住居址掘り方埋土をそのまま床面として利用していた。全体に平坦でやや堅緻であった。周溝は北壁から東壁にかけて幅約20 cm、深さ5 cm 前後で検出された。ピットは2基確認され、その位置から柱穴と判断される。カマドは検出されなかったが、周辺の遺構のあり方から考えて、東カマドであったと推察される。

遺物 出土土器の全体量はわずかで、須恵器坏6 (3)・蓋4 (1・2) 甕4・長頸瓶4、土師器甕6 (6・7) 内面黒色坏5 (4・5) 個体分が出土した。そのほとんどは覆土中からの出土であった。

時期 本址に帰属する遺物がないためその所産期は不明である。覆土内出土土器からは7段階ごろと思われるが、カマドが北に設置されていないことから8段階以降であろうと思われる。



- 1 : 黒褐色土
- 2 : 黒色土 (黒褐色土ブロック混)
- 3 : 暗褐色土 (II A 2ブロック多混)
- 4 : 暗褐色土 (II A 2粒・焼土粒微含、II A 2ブロック混入)
- 5 : 黒褐色土 (II A 2粒混、粘質)
- 6 : 黒褐色土 (炭化物含、II A 2粒混入、粘質土)
- 7 : 暗褐色土 (焼土粒含)
- 8 : 黒褐色土 (炭化物含)
- 9 : 黄褐色土 (暗褐色土混)
- 10 : 黒褐色土 (II A 2粒多混掘り方埋土)

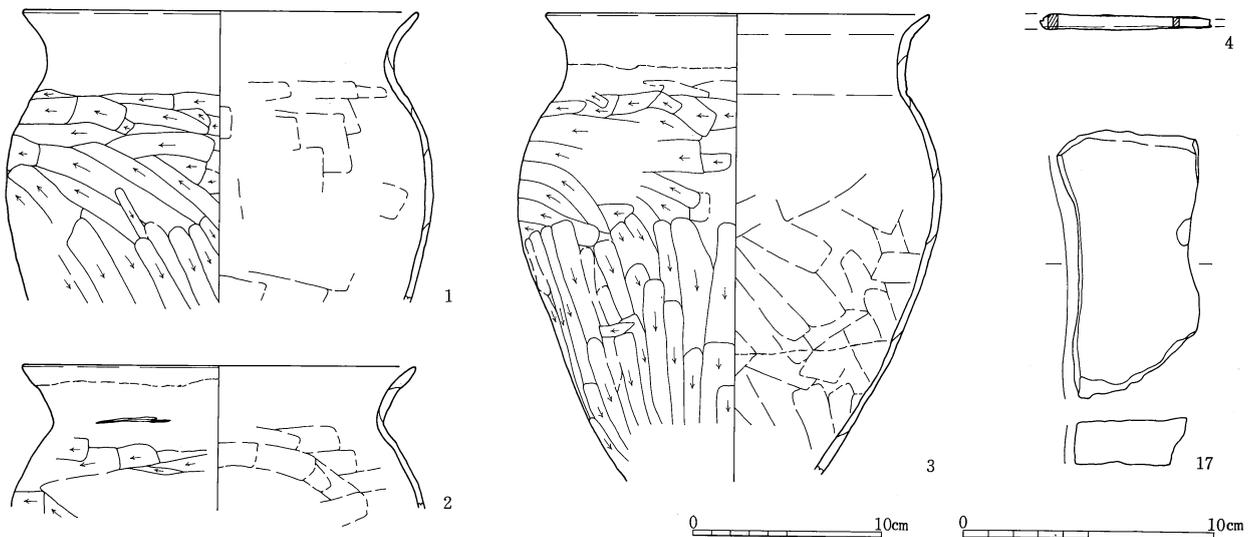


図40 28号住居址

30号住居址 21号住居址に後述

31号住居址 (図42、PL232)

II A 2層上面で検出された。南側は「田切り地形」に浸食され、北壁部のみ確認された。26号住居址を切る。覆土は浅く埋没状況を把握できなかった。床は掘り下げた地山面を利用したたきしめてある。やや凹凸があるものの、堅緻であった。北壁中央西寄りに深さ4~10cmの小ピットが4基認められたが、その性格は不明である。

遺物 出土土器はわずかでカマド付近の覆土中から土師器甕1(1)個体のみである。

時期 26号住居址以降である。

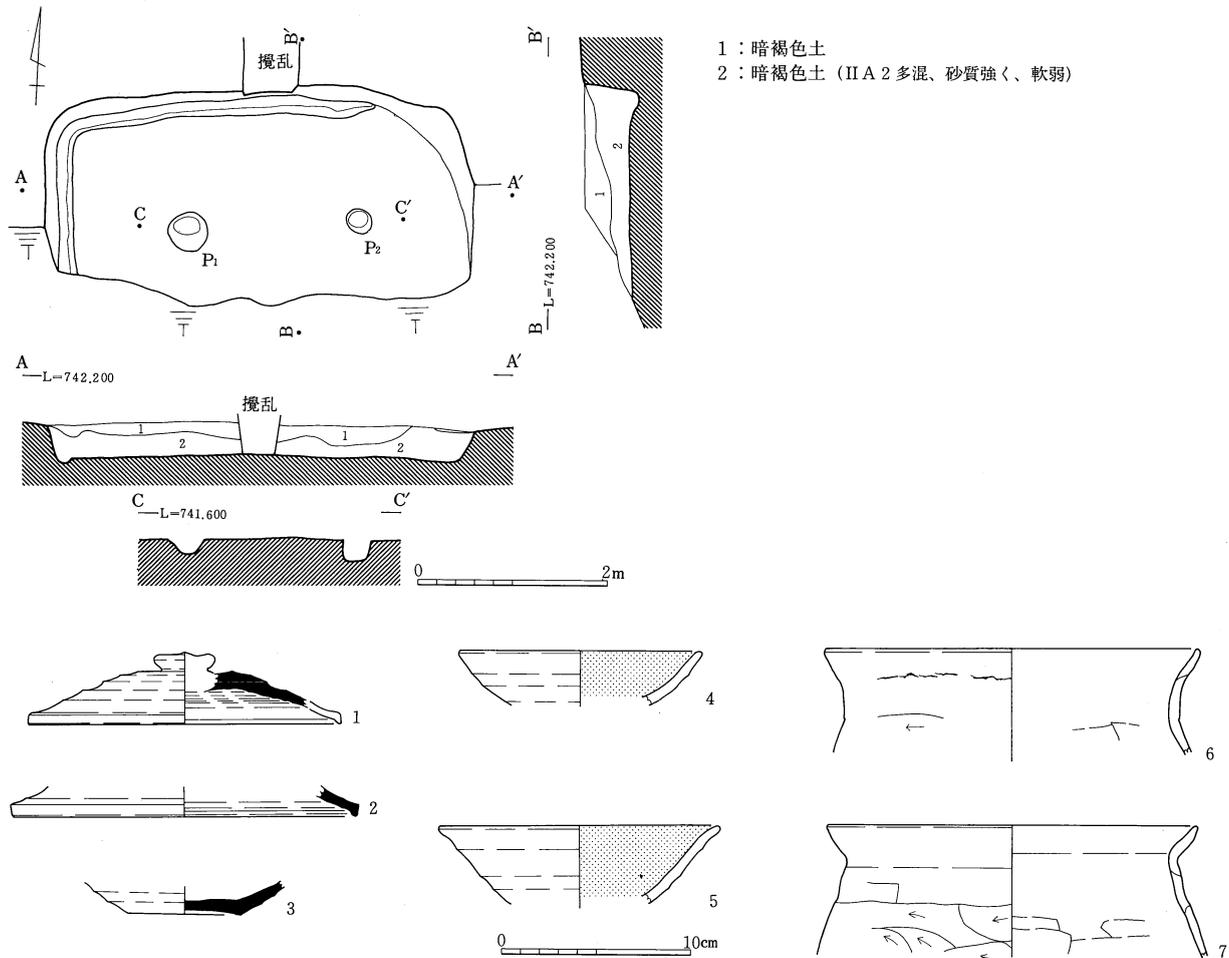


図41 29号住居址

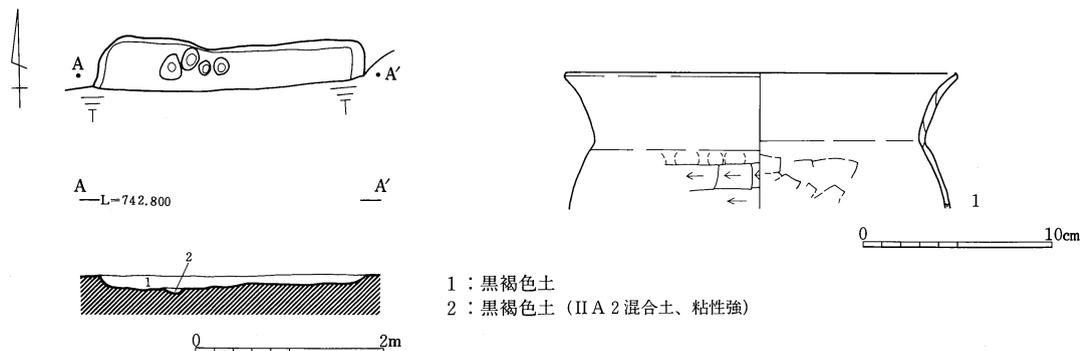


図42 31号住居址

32号住居址 (図43、PL232)

II A 2層上面で検出された。553号土坑に切られ、排水溝に攪乱される。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積と思われる。床は荒ぼり後、II A 2ブロックの混じる黒褐色土を埋め戻しその上面を床面としていた。全体に平坦で堅緻であった。カマドは排水溝によりその半分が消失した。箱形に張り出すカマドと推測され、残存した礫のあり方から、両側に礫を配していたと思われる。火床は認められなかった。

遺物 出土遺物の全体量は、須恵器高台坏1 (2)・坏13 (3~6)・蓋 (1)・中形甕1 (11)・長頸瓶2 (9・

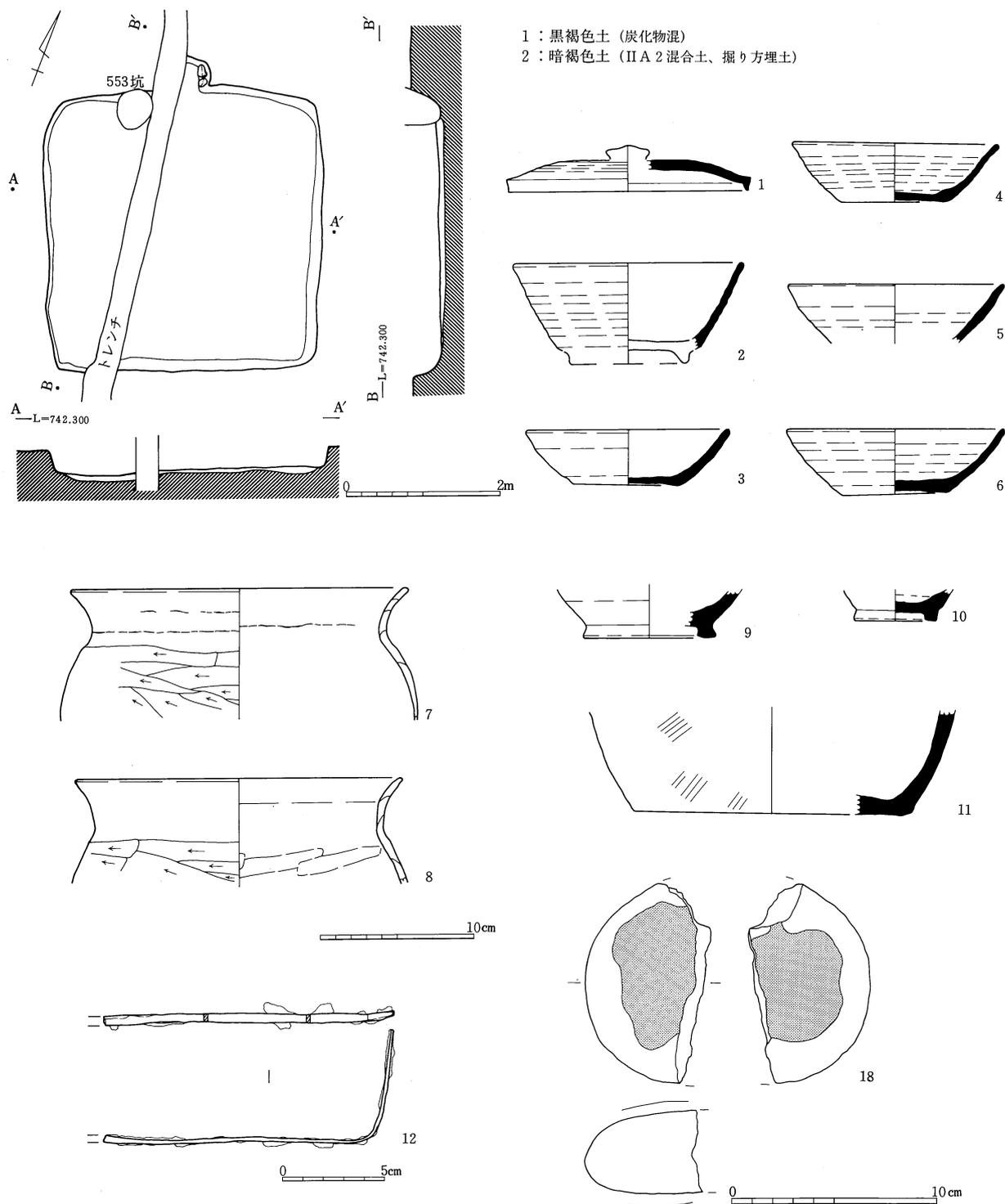


図43 32号住居址